
侍戦隊シンケンジャーStrikerS

ドウコク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍戦隊シンケンジャー Strikers

【Nコード】

N8535Q

【作者名】

ドウコク

【あらすじ】

外道衆との戦いを終えたシンケンジャー。しかし、どういふわけか外道衆は『ミッドチルダ』に現れてミッドチルダ中に恐怖を与え、シンケンジャーは世界を超え、外道衆を倒すため機動六課と協力する。そしていま、外道衆との戦いの幕が上げられた。

第零幕 はじまり（前書き）

作「初投稿作品です。完成度に関してはあまり期待しないでください。シンケンジャーの世界のほうではシンケンジャーの最終回の1週間後です。あと仮面ライダーディケイドの一部の設定も使ってますのでよろしくお願いします」

第零幕 はじまり

何百年の昔から、隙間を通ってやってきては、この世を恐怖に陥れる化け物“外道衆”。奴らを退治し、この世を守っていたのは5人の侍達。彼らの力は親から子へ、子からまた子へ受け継がれ、人知れず戦い続けた。

月日は流れ、志葉家 第十九代目当主「志葉文瑠」は4人の侍の家臣と新たな仲間となった寿司屋とともに御大将「血祭ドウコク」を力づくで撃破に成功した。かくして世界は平和になったと思いきや、とある世界ではある異変が起きていた・・・

『ミッドチルダ 首都クラガナンから遠く離れた街 19：31』

ここは首都クラガナンから遠く離れた街の繁華街。家へと帰宅する者もいれば家族で外食に出かける者と様々な者たちが賑わっている。しかしその賑わいがこの世界に“本来ならば存在しない者達に”瞬く間に悲鳴と叫びに街中に響かせることになるとは、この時だれもが気が付かなかった。

「キヤアアアアアアアア！！！」

突如に悲鳴を上げた女性。その眼には彼氏と思われる男性が背中から何かに斬られたところから血を流して倒れていた。女性には男性の返り血を少しならずついていた。そして男性の後ろに化け物と思わせる異形の身体、鉈と思わせるような剣、大きく開けた口の中から鋭い牙が奥まで生えている顔。その化け物の名前は“ナナシ連中” 外道衆の戦闘員であり、空を飛ぶナナシもいれば巨大なナナシ“大ナナシ連中”もいる。そのナナシ連中は今街中で男性を殺した張本人であり、一体だけではなく何十体もいる。突然目の前で男性が殺され、街中にいた人たちはパニックに陥った。

「人が殺されたぞー！」

「に、逃げろー！」

「いやー！ー！ー！ー！！！」

街中は逃げ惑う人たちに溢れかえっていた。ナナシ連中はそれを見逃すはずはなく、逃げ惑う人たちを殺すため襲いかかってきた。逃げ惑う人に後ろから斬りかかるナナシもいれば捕まえて斬るナナシもいる。そうした中この騒ぎを聞きつけた管理局員が現場に到着する。

「貴様ら！我らは時空管理局の者だ！貴様らはすでに包囲されている！貴様らは無差別殺人犯で逮捕する！おとなしく投降すれば弁護の余地が・・・！」

名もない管理局員は魔導師が使う杖「デバイス」を構えてナナシに投降を呼びかける。しかしナナシ連中はそれを聞くはずもなく、ナナシ連中は管理局員に襲いかかる。しかし管理局員は空を飛ぶ者もいる。ナナシ連中は空を飛ぶ管理局員には弓矢で撃ち落とすことにしたのか、どこからか弓矢を取り出せばすぐさま管理局員に矢を放つ。そして地上にいる者は数で襲いかかってきた。

「グアッ！」

「く・・・っ！こうなったら実力行使だ！」

何人かはナナシによって殺される者もいる。しかし管理局員は黙っていない。管理局員はナナシの攻撃と矢の雨から避けながら魔力弾を発射する。しかし非殺傷にしていたためか、当たっても動きが鈍るものの、すぐに立ち上がるとすぐさま反撃に向かう。

「なんだこいつらは！しかたがない・・・！殺傷設定の切り替えて鎮圧しろ！」

隊長らしき管理局員が周りにいる管理局員に言い伝える。殺傷設定となった魔力弾によりナナシ連中は倒されては消えていき、鎮圧はできたときには殺傷設定に切り替えてから15分たった時点で、民間人34人、管理局員12人の被害者が出たというさんざんな結果となった。この事件にマスコミやテレビ局関係者などにこのことが報道され、ミッドチルダ中に知れ渡っていった。

場所を変えて志葉丈瑠と4人の侍の家臣と侍の寿司屋がいる『シンケンジャーの世界』。かつてこの世界には一度“世界を旅する青年達”^{ダイ}が訪れたことがある。その者達が現れたことにより一時は世界の崩壊に危機に迫ったことがあるが、青年達と協力してこの世界に現れた化け物^{かめんライダー}を倒して世界の崩壊の危機を救ったことがある。

この『シンケンジャーの世界』は血祭ドウコクを撃破したことによりナナシ連中は見なくなり、平和の日々を過ごしていた。

「いつ見ても平和なものだな・・・ジイ」

「そうでございますな、殿」

赤いジャンパーを着て、殿と呼ばれた青年は志葉家十九代目当主、志葉丈瑠。そしてジイと呼ばれたのは老人は日下部彦馬。彦馬は丈瑠の後見人であり、家臣でもある。そしてこの場には黒子（志葉家では家臣である一団で使用人的な立ち位置）もいる。黒子は志葉家の掃除、料理、買い物でさらにシンケンジャーの名乗りのサポートもする一団。彼らには「モチカラ」は持つてないが守りたい気持ちはシンケンジャー達と同じく守りたい気持ちがあり、戦闘では支援したり人の避難経路を確保したりと大忙しだ。

ちなみに「モチカラ」というのは専用ツールで漢字を書くことにより不思議なことが起きる力のこと。たとえば「風」と書けば風が吹き、「水」と書けば水が現れるといった感じだ。モチカラにはそれぞれの属性を持っており、丈瑠は「火」の属性のモチカラを持っている。丈瑠がもつモチカラは「火」なので、火に関するものに対して効果が強くなる傾向がある。モチカラは持つていれば使えるが、文字を書く時に書き順間違ったり文字が下手だったり、軽い気持ちは発動しない。

「しかし、もうあいつらと別れてもう一週間がたつのか・・・早い

ものだ」

「そうですね。流ノ介殿の歌舞伎公演はまだ一か月もありますし、茉莉殿はハワイで両親と暮らしているでしょう。千明殿は大学受験に取り組んでおりますし、ことは殿は実家の京都へ帰郷してますし、源太殿はフランスへ旅立っているでしょう。家臣達はそれぞれの道を歩み始めておりますな」

ジイの言葉から出てきた流ノ介、茉莉、千明、ことはは志葉家の家臣であり、シンケンジャーの一員《4にんのさむらい》でもある。それぞれの本名は池波 流ノ介、白石 茉莉、谷 千明、花織こと は である。それぞれに「水」「天」「木」「土」のモチカラを受け継いでいる侍であり丈瑠の大事な仲間でもある。そして源太というのは新たに仲間になった侍^{すしや}。本名は梅盛源太で彼は家臣ではない。彼は丈瑠の幼馴染みである。彼は小さいころ幼馴染の丈瑠から烏賊折神を折りたたみ収納した秘伝ディスクを貰い、長く研究をした末「電子モチカラ」を編み出し、「光」のモチカラを操る侍になって新たなシンケンジャーのメンバーになった寿司屋である。

ちなみに秘伝ディスクというのは種類があり、折神が折りたたみ収納した秘伝ディスクもあれば、技ディスク（シンケンジャーが使うディスクで使うことにより技を出せるようになるディスクのこと）等がある。折神が収納されたディスクは技ディスクの数倍のモチカラが必要になる。

「（なぜだ・・・？また外道衆の気配がする。しかしこれは周りからではない。なんだこの気配は？）」

丈瑠は彦馬と歩きながら外道衆の気配を感じていた。しかし気配は周りからでもなく「スキマ」からでもない。丈瑠は違和感を感じながら歩いていると、丈瑠の後ろから謎のオーロラが現れ、オーロラは丈瑠と彦馬を包み込む。オーロラが晴れると彦馬の姿があるが丈瑠の姿は見当たらなかった。

「と……殿が……殿がいなくなつた！」

突然消えた丈瑠に驚きを隠せない彦馬は殿がいたはずの場所を見ながら叫んでいた。そして丈瑠は本来来ることができない世界、『ミッドチルダ』に謎のオーロラによって旅立つていった。丈瑠は再び外道衆の戦いがあるとは、まだ知る由もなかった……

第零幕 はじまり（後書き）

作「ここでは今回現れたアヤカシやシンケンジャーのなどを紹介するのに使おうと思います今回はナナシ連中です」

ナナシ連中

戦隊シリーズでいう外道衆の戦闘員。一体だけならばどうにかなるものの毎回数多く攻め込んでくる。戦闘能力は魔術師ランクでいえばFかEあたり。使用する武器は刀のほか弓矢、槍、鉄砲、拳銃の果てには大筒も使う。そして空を飛ぶ大空ナナシ、シンケンジャーが使う「シンケンオー」とほぼ同じ大きさの大ナナシもいる。最初に現れた際、ミッドチルダ中に脅威を見せつけたがこれ以降の活躍はせいぜいやられ役になることが多いと思われる―（作者談）

第一幕 異世界（前書き）

作「今日放送開始のゴーカイジャー見ましたけどゴセイジャーよりも期待できそう。しかもシンケンジャーが出ただけでテンション高くなった（笑）」

さて、この話で丈瑠はなのは達と会います」

第一幕 異世界

『ミッドチルダ 中央区画湾岸地区 12:28』

ここは機動六課の本部隊舎がある湾岸地区。その人気のない裏路地に謎のオーロラが突然現れ、オーロラから文瑠の姿が現れるとオーロラは消えていった。

「ここは・・・さっきまでジイと庭で話していたはずだが・・・。それになんださっきのオーロラは・・・。」

文瑠は謎のオーロラによって突然自分たちの世界からミッドチルダに移動したことに気づいていない。さっきまで志葉家にいたはずなのに突然オーロラに包まれて路地裏に出たことに驚きを隠せなかった。

「とりあえず、ここは路地裏のようだが・・・。電波は届くみたいだな。」

文瑠はモチカラを使う際に使う「シャドウフォン」を取り出し、電波は届くとわかるとすぐにジイに電話で連絡しようとしたが結局反応はなく、家臣たちにも連絡したがこれもだめだった。

「予想はしてたがやっぱり駄目か……。街に出てここはどこなのか確かめないと……。ん？」

文瑠はため息を吐いて言う。街に出ようとする。文瑠は後ろになにか気配を感じ、後ろを向く。するとそこにはカプセルの形をしたガジェットドローンが4体いた。

「なんだこのカプセルは……？」

文瑠は突然現れたガジェットドローンに警戒する。するとガジェ

ットドローンの黄色いセンサー状のパーツらしきところから丈瑠に目掛けて熱線を放つ。熱線は丈瑠の足元の地面にあたるがあたった地面は黒くなっている。

「どつやら敵と認識されてるようだな……。」

丈瑠はシャドウフォンを縦に折り曲げる。するとシャドウフォンの先端かた習字でよく使う筆が現れる。丈瑠は物陰に隠れるとガジエットドローンはすかさず丈瑠の後を追う。

「一筆奏上！」

丈瑠は何もないところでシャドウフォンを振る。すると丈瑠のモチカラで宙に文字が現れ、丈瑠はそのまま書いていくと「火」という漢字になる。

「はっ！」

文瑠はシャドウフォンについているスイッチを押す。すると笛の音が鳴り、掛け声とともにシャドウフォンを振ると宙に書かれたモチカラが反転し、モチカラは文瑠を包み込むすると文瑠の姿が変わり、文瑠は下半身は黒、上半身は赤の着物と思わせるスーツを身に着ける。そして文瑠の顔に大きく「火」と書かれたマスクを身に着けるを腰にシンケンジャーの武器「シンケンマル」が現れる。文瑠はシンケンマルを持つとガジェットドローンの前が出る。

「シンケンレッド。志葉、文瑠・・・参る！」

シンケンレッドとなった志葉文瑠がガジェットドローンと戦い始めたとき、湖から女性二人の姿がある。先ほどガジェットドローンの反応と未確認の反応があり、二人はガジェットの破壊と未確認反応の調査のため空を飛んで向かっていた。

「ガジェットの反応はこっちからだよね？」

白い服を着て髪型を栗色のツインテールの女性がもう一人の女性に話しかけた。

「うん。でもガジェットの反応がどんどん消えている……。」

黒い服に白いマントを羽織った金髪の女性が消えていくガジェット
トの反応を確認しながら反応があった場所に飛んでいく。

「それに未確認反応と生命反応もある。もしかしたら誰かが戦っているかも……。」

「でもとりあえず行ってみないとわからないよね……。」

二人の女性は消えていくガジェットの反応を気にしながらも反応があつた場所に飛んでいった。

「これで最後だな・・・はっ！」

そのこと丈瑠はちょうど最後の一体のガジェットを破壊を完了していた。丈瑠の周りにはガジェットの残骸が残っていた。しかしこの世界がわからない上、ガジェットを破壊するたびに爆発をしていたため誰かが来ることを焦っていた。

「誰かが来る前にここを立ち去るか・・・ん？」

しかし時はすでに遅し、丈瑠の前には先ほどの女性二人が宙を浮かんでいた。その二人の女性の手にはそれぞれ形が違う杖を持っていた。

「宙を浮かんでいる・・・?」

丈瑠は初めて宙を浮かぶ女性を見て警戒したのが、シンケンマルを女性達に向けて刃先を向けて構える。

「待つてください。私達は時空管理局の者です。その「デバイス」を降ろしてください。」

「デバイス?これのことか?」

丈瑠は金髪の女性に「デバイス」と言ったシンケンマルを構えを解いてシンケンマルを腰に戻す。しかしまだ警戒しているのか、丈瑠は変身を解かない。

「すみません、ここにいたガジェットなんですけど・・・。もしかしてあなたが全部倒したんですか?」

「ああ、あの機械のことか？いきなり襲ってきたんだ。お前たちのものだったら破壊してすまなかった。」

「いえ、私達のものじゃありません。ただあなたから未確認の反応が出てるんです。すみませんが事情聴取のため同行を願うことができますか？」

女性達は地面に降りて事情を説明する。丈瑠は自分を襲ってきたガジェットと呼ばれる機械の持ち主でないかとわかるとほっとしたが、自分から未確認の反応があると聞くと丈瑠は「（もしかしたらモチカラのことか？）」と思いながら考え始めた。自分にとってこの機械や女性達が宙に浮かんでいたこともあり、この世界は自分がいた世界じゃないと判断した。この女性達について行くかどうか悩んだが、丈瑠はまだこの世界のことをよくわからないし、下手に同行を拒否したら捕まってしまうんじゃないかと考え、丈瑠は本意だがこの世界のことを知るためだと思い、女性達についていくことにした。

「・・・わかった。ついていこう。」

「ありがとうございます。あと、あなたが来ているスーツはなんですか・・・？」

「ああ、これについては後から教える。」

丈瑠はそういうと変身を解いて姿がシンケンレッドから志葉丈瑠と変わる。もちろん姿が変わったことに女性達は驚く。

「「っ！」」

「驚かせてすまない。すまないが同行させてくれ」

丈瑠は驚かせてしまった二人に軽く謝り、女性達に同行させてもらうことにした。

第一幕 異世界（後書き）

作「とりあえず自己紹介は次回ってことになります。すみません」（汗）今回の説明はシンケンレッドです」

シンケンレッド（志葉 丈瑠）

シンケンジャーのリーダーで「火」のモチカラで変身するシンケンジャー。シンケンジャーの中で長く外道衆と戦っていたためか、剣技は大胆かつ流麗。彼の持つ技ディスクは獅子折神の火のモチカラが封じ込められた獅子ディスク。一（折神に関しては次回あたり本文で説明しようかと思っています。）

専用武器は烈火大斬刀。獅子ディスクを使うことにより技「百火繚乱」が使用できる。また、折神が収納されたディスクを使うことにより「大筒モード」になり、技ディスクを使用することにより「〇〇・五輪弾」を撃ち出すことができる。（〇〇は折神の名前が入り、烏賊のみ六輪弾となる）

自分がこうシンケンジャーの説明をしている理由はもしもシンケンジャーが知らない人がいるかもしれないのでやっているだけです。

第二幕 機動六課（前書き）

作「バイトの関係で更新速度が下がりそう……。でも失踪はしません。あと文章もう少し長く書こうかな……」

今回は文瑠が機動六課に行きます」

第二幕 機動六課

『ミッドチルダ 機動六課 通路 12:55』

丈瑠は先ほど出会った二人の女性と通路を歩いている。歩いているといつても丈瑠の前には栗色のサイドテールをした女性、後ろには金髪の女性が丈瑠を挟むようになって歩いていた。二人の女性は先ほどと違い、機動六課の制服を着ている。先ほど二人が来ていた服は『バリアジャケット』という魔法で作られる防護服で、機動六課に行く際街中を歩くため丈瑠の前で防護服を解除して今に至る。（もちろん丈瑠も驚いており、このことに関しては軽く説明されている）二人は通路を歩きながら念話を使って話をしていた。

「『フェイトちゃん、この人のことなんだけど・・・どう考えてもこのミッドチルダの住民じゃないよね。』」

フェイトと呼ばれた金髪の女性は栗色の女性に念話で返答する。

「『うん。あのスーツもバリアジャケットじゃないし、騎士甲冑とも考えられない。なのは、やっぱりこの人“次元漂流者”じゃないかな?』」

「『だけど、とりあえず話聞かないと何もわからないよね……。』」

なのはと言われた栗色の女性はフェイトと話しながらも一室の扉の前に立つとなのははドアにノックし、「どうぞ」と声が来るとなのは達は丈瑠とともに部屋に入っていた。その部屋にはのとはと同じ栗色のショートカットの髪に髪留めをしている女性が椅子に座って机の上でなにか作業をしていた。

「失礼します。高町なのはは一等空尉、任務の報告に参りました。」

「とりあえずご苦労さん。で、そこにいる人がフェイトちゃんが言っていた人なん?」

「(この二人の上司か?それにしても若いな……。)」

丈瑠は目の前にいる女性を見ながら思っていた。丈瑠が見ている女性はどう見ても10代後半にしか見えなかったからだ。そしてなのは用事があるのか、部屋から出て行き、机の上で作業していた女性は作業を終わらしたのか、丈瑠のほうを向いて視線を合わせてきた。

「初めまして、私の名前は八神はやて。ここの部隊長をしております。」

「・・・志葉、丈瑠だ。」

「じゃあ早速悪いんやけど、貴方があそこで何してたか教えてくれませんか。」

軽く自己紹介が済むとはやてと名乗った女性は真剣な顔になり事情を聴き始めた。丈瑠は自分がどうしてここにいたか、そこで何していたか思ったことを言った。

「ジイと話を^{ガジェット}していて、気が付いたらいつの間にか路地裏にいてあの機械が襲いかかってきたんだ。俺はそれを抵抗したまでだ。」

「なるほどなあ……。文瑠さんは私達が使う魔力と違う反応があるんやけど……。それはなんや？」

文瑠は「（やはり来たか……。）」と言わんばかりに肩の力を抜くようにため息を吐く。そして文瑠は言わなければやっこしくなると感じたのか自分の持つモチカラとそれらに関係することを話した。

「……。すると、“モチカラ”は簡単に言えば私達にとってみれば魔力みたいなものなんですか？」

「ま、そう思ってくればいい。お前達が使う“魔法”とは使い方は違うけどな。」

「で、その“モチカラ”を使うにはこの“シヨドウフォン”が必要なん？」

「ああ。使い方は違うが、お前達が使う「デバイス」やらと似たようなものだ。」

はやては文瑠の“シヨドウフォン”をじろじろと見ながら文瑠と

フェイトと話をしていた。丈瑠はフェイトとはやてでこの世界について自分のことを話をしながら説明を受けいていた。丈瑠がこういうことを話しているのもそのためである。フェイトは丈瑠が今どういう状況か説明するためゆっくりと口を開いた。

「・・・丈瑠さん。丈瑠さんの話を聞いていて思うんですが、貴方は“次元漂流者”かもしれません。」

「次元漂流者？」

「はい。何らかの方法で自分の世界からほかの世界へと移動してしまっているんです。たぶん、丈瑠さんもその中に入るんじゃないかと思っています。」

「世界から世界か・・・。」

丈瑠は世界と聞くと前に自分達の世界、“シンケンジャーの世界”に突然現れた“世界の破壊者”^{ディケイド}のことを思い出した。そしてその存在を消し去ろうとする男のことも・・・。男は世界の破壊者^{ディケイド}が自分達の世界にいる限り世界が崩壊すると警告してきた。そして“仮面ライダー”の浸食も起こったが。この世界に生まれた“仮面ライダー”は彼とともに“破壊”している。それに彼は世界から世界へと渡り歩く能力がある。丈瑠は「（もしかしたら俺はあいつの力でこの世界に来たのかもしれない）」と想っていた。そこにフェイト

が心配したのか、話しかけてきた。

「あの・・・どうかしましたか？」

「っ！・・・いや、なんでもない。それで俺はこれからどうなるんだ？」

丈瑠はフェイトに「心配しなくてもいい」と言わんばかりに首を横に振り、これから自分はどうなるかはやてに聞くことにした。

「本来なら丈瑠さんは私達に保護されるんですが・・・、丈瑠さんの“モチカラ”は私達にとっても珍しいんです。このまま保護を受けずに街を歩いていたらほかの管理局の人に捕まる可能性があります。」

「そうか、ならどうすればいい？」

はやての言う通り、丈瑠の持つ“モチカラ”彼にとってみれば“

シンケンジャー”としては普通だが、彼女達“魔導師”にとつてみれば珍しい能力だ。その力を欲する者が現れないとは言いい切れないし、逆にこの力を危険視して排除しようと考える者もいるはずだ。は yet はそのことを思いながら申し訳なさそうに口を開いた。

「・・・実は、この機動六課は人手不足なんや、丈瑠さんには悪いんやけど、協力してくれませんか？」

「協力だと？」

「はい。幸い、丈瑠さんの使う武器や能力はその“モチカラ”を使つて真価を発揮するんですよ？それなら丈瑠さんは魔力を持ってないけど、“モチカラ”を“レアスキル”扱いにして、丈瑠さんが使う武器を“デバイス”として登録すればどうにかなると思います。」

「そうか・・・。質問してもいいか？」

「ええ、どうぞ。」

「“レアスキル”とはなんだ？」

丈瑠は初めて聞く“レアスキル”についてどんなものなのか気になったのが、フェイトに質問した。

「稀少技能^{レアスキル}は普通の人には持っていないスキルのことです。丈瑠さんの場合“モチカラ”を持っていてそれを操る能力があります。」

「つまり、俺の“モチカラ”はこの世界ではそう呼ばれるんだな。」

「はい、そう思ってくれば結構です。」

「ならば、これはどうなるんだ？」

丈瑠はそう言いながらズボンのポケット将棋の駒の形をした五角形の物を机に置いた。

「これ・・・なんですか？」

「これは俺が使う“折神”だ。」

丈瑠がそう言うと同時にさっき置いた“折神”は突然動物のよう

に形を変えた。置物かと思えばいきなり動物の形になって動いたためか、はやて達は驚きを隠せなかった。

「なっ！か、変わった！」

「これは俺の家系が代々受け継がれてきた最新式の“式神”だ。普段は“エンブレムモード”と言ってさっきのような姿になっているが、今のような“アニマルモード”になって動くこともできる。」

「き・・・機械みたいな姿なのに意思を持つとるのか・・・。」

はやてとフェイトはアニマルモードとなった“折神”を興味深く見ていた。折神は興味深く見られて恥ずかしいのか、もしくは怖くなったのかエンブレムモードに戻った。

「その折神は“獅子折神”と言って、俺の家系で受け継がれたものだ。ほかにも種類がある。」

「ほー・・・。でこの“折神” ちゅうのも“モチカラ”を使うんか？」

「ああ。まあそんなとこだ。」

「ならその“折神”は文瑠さんの召喚術とかにすればなんとかならんんじゃないかな？」

「そうなのか？」

「ええ、私の部隊に同じようなスキルを持つ魔導師がいるの。」

文瑠はエンブレムモードの獅子折神をズボンのポケットに戻してフェイトが言う“召喚術”を耳にすると「（そんな解釈でどうにかなるのか・・・？）」と不安になりつつも視線をはやてに移す。

「はやて。ここまでしてくれるのはありがたい。だがこれ以上迷惑かけるには・・・。」

「迷惑じゃあらへん。それにこのまま文瑠さんをほおっておくにはあかんからな。住むとこないんやろ？なら文瑠さんの世界が見つかるまでここに居座っててもええよ。」

文瑠は自分のことをここまで心配してくれるとは思ってなかった

らしく、内心では「ありがとう」という気持ちが生えていたが、そのことを感情に出さずいつものように振る舞った。

「・・・そうか。感謝する。だが居座るのはしゃくに合わない。俺も自分の世界が見つかるまでこの“機動六課”に協力する。」

「ありがとう。丈瑠さん。では改めて、機動六課の部隊長、八神はやて二等陸佐です。」

「俺は志葉 丈瑠だ。よろしく、はやて二等陸佐。」

「呼び捨てで構えへんよ。それに無理して階級まで言わなくてもええで。」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウン執務管です。私も普通に呼んでも構いません。」

「じゃあ早速丈瑠さんの民間協力者のID作りたいんやけど・・・」

「何か問題でもあるのか？」

丈瑠は自己紹介を済まし、はやてが自分のIDを作るの躊躇うと「（やはり“モチカラ”に問題でもあるのか？）」と思っていたが、はやての口からは予想もしてなかったことを言い始めた。

「テストをしてもらいたいんや。」

「テスト？」

「はい。テストを受けて合格したら民間協力者として迎えいらすが、もし不合格したら保護する形になります」

はやては丈瑠の“モチカラ”はどのような力なのか興味を持っていた。しかしそのとは丈瑠には見透かされており、丈瑠は「やれやれ」と言わんばかりにため息を吐き、このテストを受けることにした。

「わかった。このテストを受ける。」

「なら、早速訓練施設に行こか。」

「待って。その前に丈瑠さんの世界はどんなのが教えてくれる？」

はやては文瑠を連れて訓練施設の方に行こうとするのをフェイトが止めるとフェイトは文瑠の世界がどのようなものか質問してきた。文瑠は自分の世界をなんていつていたかそのまま口にした。

「・・・“地球”だ。」

「“地球”！うちの故郷の世界と同じやな・・・。」

「待て。俺は自分の世界を“地球”と呼んでいただけだ。はやての故郷の“地球”とは違つかもしれんぞ。」

はやてが地球と聞くと自分達と同じ世界と思ったが、文瑠は自分達の暮らしていた世界とは違つかもしれないと思い、はやてが思っていたことを否定した。

「そ、そうか・・・すまへんな、早とちりして・・・。」

「なに、構わん。とりあえずはやての故郷の“地球”で“志葉家”という建物を探してくれないか？」

「わかりました。早速調査してみます。では私はこれで失礼します。」

フェイトは文瑠が言った調査対象の建物を言つとフェイトはそれを聞くと調査のため部屋を後にした。

「ほな、行こうか。訓練施設に案内するぞ。」

文瑠ははやてとともに部屋を後にすると、はやての案内で訓練施設に向かうことにした。

第二幕 機動六課（後書き）

作「今回説明するものは『折神』です」

折神

折神はシンケンジャーが代々受け継がれてきた最新型の式神で、それぞれが最初から持つ折神「獅子」「龍」「亀」「熊」「猿」の折神を持っている。その折神はエンブレムモードになっており、それぞれさつき書いた順に「五角形」「六角形」「丸形」「四角形」「三角形」になっている。もちろんこの五体はアニマルモードにより動物のような姿になれる。折神には秘伝ディスクにより折りたためられてるものもあり、秘伝ディスクの場合はエンブレムモードになることが出来ず、それに召喚してもすでにデカイ状態になっている。だがその代り強いモチカラを秘めてるがシンケンジャー結集当時の丈瑠でさえも扱いきれなかったほどであり、使いこなすには他のディスクの数倍のモチカラが必要だった。しかし烏賊折神のようにディスクに収納されず小さい姿のままいる折神もあり、モチカラを研究した源太が丈瑠達の協力で完成した折神も存在する。そして強力な牛折神もあるが、これは力が強いせいか志葉家初代が生まれる前に誕生したせいか、収納されている状態では確認されていない。（シンケンレッドが牛折神を使うときにディスクがあるがあれは牛折神を制御するためのもの）

第三幕 侍対騎士（前書き）

作「うあああああああああ！！！！間違って前のページに戻
ってやり直したあああああああああ！！！！！！！！！！

でもちゃんと書き直しましたよ・・・

とまあそんなことがあったけど今回は文瑠がテストを受けます」

第三幕 侍対騎士

『ミッドチルダ 訓練施設 14:57』

丈瑠ははやての案内で訓練施設に入っていた。途中、丈瑠からして“人形”のラインフォース・？《ツヴァイ》と出会い、ラインフォースから「ユニゾンデバイスです！」と注意されながらも挨拶を交わし、訓練施設に入っていた。丈瑠の目に入ったのは廃墟となった街で。その奥から爆発に似た音や桜色の光が見える。

「ここが訓練施設なのか？どう見ても廃墟じゃないか？」

「丈瑠さん。ホログラム知ってます？この訓練施設はその技術を応用して作られた施設なんです。」

「何？本当か？」

丈瑠ははやての言葉に耳を疑うと近くにあった小さな瓦礫を手にとるとそれを触り始めた。触った感覚は瓦礫そのもので、丈瑠はその瓦礫を興味深く見回す。

「技術も発達したものだな……。」

丈瑠は思ったことを言うと瓦礫を軽く投げる。そして訓練していた人がはやて達に気づいたのか、訓練をやめてはやて達の方に集まってきた。

「はやてちゃん。どうしたの？」

「なのはちゃん、訓練中にすまへんな、実はこの人のテストをしたいんけど少し貸してくれへんか？」

「あ、さっきの人だね……。」

なのはは丈瑠を見るなり声を漏らす。丈瑠にも聞こえていたが丈瑠はそのことを無視していた。そしてなのはは自己紹介を始めた。

「改めて初めまして。高町なのはは一等空尉です。普通に呼び捨てで

も構いませんよ。」

「俺は志葉 文瑠だ。敬語を使わなくてもいいぞ。」

文瑠はそうなのはに返すとなのはの後ろにいた二人の少女と二人の子供も自己紹介をしてきた。

「スバル・ナカジマです！よろしくお願いします！」

「ティアナ・ランスターです。今後もよろしくお願いします。」

「エリオ・モンディアルです！よろしくお願いします！」

「キャロ・ル・ルシエです。この子はフリードリヒです。」

「キュクルー。」

「な・・・なんだこの生き物は・・・！」

「この子は竜で、私が育ててきたんです。」

文瑠は“折神ではない竜”を初めて見たからか驚きを少なからず見せていた。文瑠はフリードを気にしながらも「(なんでここに子供がいるんだ・・・?)」と思いながらエリオとキヤロを見ていた。すると後ろから凜とした女性の声がしてきた。

「主はやて、ここにいましたか。」

「(主?)」

文瑠ははやてを見た。「(俺のように主従関係があるのか?)」
と思いながらはやてから声がした方へ顔を向ける。そこには紫色のポニーテールの女性と赤毛の子供がいた。

「ああ、シグナム。どうしたん?」

「はやてが部隊長室にいねーから探してたんだよ。で?隣にいる男はなんだ?」

赤毛の子供は丈瑠をじつと睨みつけた。丈瑠に睨みつけたことをはやてが気づくとはやてはその子供に叱りつける。

「こら、ヴィータ。勝手に人睨んだらあかんて。この人はいまから民間協力者になるためにテストを受けるんよ」

「ふーん。そうなんだ。」

「おい、はやて。こいつらは何なんだ？」

赤毛の子供は興味なさげで言う。丈瑠はこの二人は一体何なのか気になり、はやてに質問する。

「この人達はシグナムとヴィータと言って、うちの家族なんや。」

はやてはシグナムとヴィータに手を向けて丈瑠に言う。そしてはやては丈瑠に「ヴィータは体のこと気にしててからあまり言わんとしてや」とヴィータに聞こえないように丈瑠に耳打ちした。ヴィ

「タはムツとした顔つきになるが、丈瑠はシグナムと目が合うとシグナムと丈瑠、この二人は同時にこう感じた。

「（この女）（男）・・・出来る！」

丈瑠はシグナムと目を合わせ続けるが、途中ではやてに話しかけられてそれをやめた。そしてはやて達は丈瑠を廃墟に残すとはやて達は廃墟から離れていく。

はやて side

はやて達は丈瑠を廃墟に残して遠くからモニター越しで丈瑠の能力を見ようとするため移動をしていた。そんななかなのははやてにどうして丈瑠がテストを受けるか質問してきた。

「そついえばはやてちゃん。どうして丈瑠さんがテストを受けるの？」

「ああ、それは丈瑠さんが保護されるのは合わないから手伝わせてほしいと頼んできたからや。だから今から民間協力者になるためのテストを受けるんよ。」

「保護つて……まさか丈瑠さん次元漂流者なんですか!」

「そうなんやけど、丈瑠さんは私達には持ってない“レアスキル”を持つとるんや。」

「レアスキル?」

スバルは丈瑠が次元漂流者と気づくなり驚くが、はやては丈瑠に自分達にはない“レアスキル”を持っているとなのは達に話した。おそらく、“レアスキル”は丈瑠が持つ“モチカラ”のことだろう。はやて達は目的の場所につくとモニターを起動させる。モニターには丈瑠の姿が映し出される。

「ほな、丈瑠さん。準備出来たんでセットアップお願いします。」

「ああ。わかった。」

文瑠ははやてからそう聞くとシヨドウフォンを持つとそれを縦に折ると筆が現れる。

「これ・・・文瑠さんのデバイス？なんか毛先のようなものが出ただけど・・・」

ティアナはシヨドウフォンを興味深く見ると文瑠はシヨドウフォンを構える。

「一筆奏上！」

『っ！』

文瑠は掛け声とともに宙に筆を振るうすると宙に文字が浮かび上がり、その文字は「火」と言う漢字になる。文瑠はシヨドウフォン

のスイッチを押すと笛の音が鳴り、文瑠はその文字を反転させる。すると文字は文瑠の身体を包み込み、文瑠の身体は光に包まれる。光がなくなると文瑠の姿はシンケンレッドの姿になっていた。その変身仕方と姿の変化にはやて達は驚きを隠せなかった。そして文瑠はベルトから黒いディスクを取り出すとそれをシンケンマルの鎧あたりに装着する。

ちなみに黒いディスクはシンケンジャーの共通ディスクで、これをシンケンマルに装着するとシンケンマルはシンケンジャーの専用武器に変化させることができる。

「これ・・・バリアジャケットなのかな・・・？」

「でもどうみてもスーツにマスクですよ・・・。」

「それに今持つてるデバイスって刀みたいだね・・・。」

「・・・これは面白くなりそうだな。」

スバル、エリオ、なのは、シグナムがそれぞれの思っていることを口に漏らす。モニター越しから文瑠が「テストはまだか？」と聞いてきたためはやてはすぐに我を戻して文瑠に返答した。

「すまへん。テストなんやけど・・・ターゲットを全部破壊すれば
終わりです。」

はやてがそういうと丈瑠の目の前に8体のカプセル型のガジエツ
トドローンが現れる。丈瑠は「（これはおれがこの世界にきて初め
て戦ったやつと同じだな・・・）」と思いながらターゲットを見る。
そしてブザーが訓練施設に鳴り響く。訓練の開始の合図だ。

丈瑠は熱線で襲ってくるターゲットの攻撃を避けながらターゲット
トに近づいていく。はやて達はモニター越しから丈瑠の戦いを見て
いた。

「無駄のない動きだね・・・。」

「この軽やかな動きは今後の訓練に参考出来るんじゃないかな？」

はやて達は声がした方を見るとそこには資料が入ったファイルを持
ったフェイトの姿があった。持っているファイルはおそらく丈瑠
が頼んだ資料と思われる。

「フェイトちゃん。仕事の方は大丈夫？」

「大丈夫よ。でも、丈瑠さん凄いな……。」

フェイトがモニターを見て言うと全員モニターの方を見る。丈瑠は敵の攻撃を最低限の動きで避けながら隙を見てターゲットを破壊していく。そして丈瑠がディスクを回転させるとシンケンマルが烈火大斬刀へと変わる。そして丈瑠は自分の技ディスクの赤いディスク“獅子ディスク”を烈火大斬刀に装着すると烈火大斬刀は炎を纏う。そしてそのままターゲットに振るうと1,000の熱でオーバーヒートしたのか、ターゲットは次々と倒れていく。

「デバイスが変わった……！それに炎を纏っている……。」

「おそらくあのディスクのようなものに秘密があるのだろうか。」

シグナムは烈火大斬刀の炎の元を思い込みで解釈した。そしてシグナムは丈瑠の戦いを見て、心の中で興味が沸いてきた。そしてシグナムははやてに今思っていることを話した。

「主はやて、少し我が儘いってもよろしいでしょうか？」

「ん、なんや？言うてみ？」

文瑠 side

文瑠は烈火大斬刀を振り終わると周りにはオーバーヒートしたターゲットが転がっていた。そしてターゲットは破壊されたと認識されたのが消えていく。自分の周りにはターゲットはいない。

「これで終わりか・・・？」

「いや、まだだ。」

文瑠は声かした方を見る。そこには騎士甲冑を身にまとったシグ

ナムにその手にはシグナムのデバイス“レヴァンティン”が握られていた。

「お前は確かシグナムと言ったな……。」

「ああ。そして次のテストの課題は私を倒すことだ。」

シグナムはそういうとレヴァンティンを構える。丈瑠もシンケンマルを中段に構える。

「言っておくが、俺の武器には非殺傷設定とかいう“優しい”設定はないぞ?」

「忠告感謝する。だがそれを知ったところで引き下がるほど臆病ではない。」

「要らないことを言ったな……。」

文瑠が言い終わるとシグナムに向かって走り、斬りかかる。シグナムはそれを避けるとすかさず文瑠に攻撃を仕掛ける。文瑠はその攻撃を受け流すもすぐにまたシグナムの攻撃が飛んでくる。文瑠はシグナムの攻撃を受け流したり避けたりしていき、いったん後ろに下がった。

「どうした？お前の力はその程度か？」

「（実力は相当高いようだな……。そろそろ本気を出すか。）」

文瑠は構えを解くとシンケンマルを肩に担ぐように独自の構えを取る。

「（構えを変えてきたか……。しかし隙があるようで見えない。本気を出してきたか。）」

二人は少しの間睨み合うと今度はシグナムが先手を取ってきた。しかし文瑠はシグナムの攻撃を受け流したり避けたりしながら反撃

していく。シグナムも負けてられまいとレヴァンティンを振るう。シンケンマルとレヴァンティンがぶつかり合うたびに火花が飛び散る中、シグナムは丈瑠の攻撃に少しづつだが押されていた。シンケンマルはレヴァンティンと比べてリーチの差と威力は負けているが、その分小回りが利いて手数が多く取れる。一方レヴァンティンはリーチと威力はシンケンマルに勝っていてバランスは取れているが、手数のほうはシンケンマルに劣る。丈瑠は手数で攻め、隙を見せたところを狙って一撃を入れる作戦へ出たのだ。シグナムはこのままでは決着がなかなかつかねえと感じたのか後ろに下がって空中を浮遊するが、少しシンケンマルの刃が彼女の騎士甲冑をかする。

「なかなかやるようだな。だが、この一撃はどうだ！」

シグナムは空中に浮遊したままレヴァンティンをどこからか出した鞘を手に取るとレヴァンティンを鞘に差し込むするとレヴァンティンの一部が動き葉が飛ぶ。そしてシグナムはレヴァンティンを抜くとレヴァンティンは連結刃状態になっていた。しかしその連結刃は魔力を帯びていた。その連結刃をシグナムは丈瑠に向けて振るう。

「飛竜……一閃！」

シグナムの連結刃から衝撃波が現れ、衝撃波は丈瑠の方へ吸い込まれるように向かっていく。

「くっ……間に合え！百火繚乱！」
ひゃっかしょうらん

丈瑠はシンケンマルを烈火大斬刀にするとすぐに獅子ディスクを烈火大斬刀に装着する。そして炎を纏った大剣は衝撃波とぶつかる
と爆発する。シグナムは空中に浮遊しながら丈瑠の様子を窺った。
煙が晴れると丈瑠が立っていた。しかし百火繚乱でシグナムの飛竜
一閃を相殺したが丈瑠は無傷では済まされなかったのか、肩で息を
していた。

「今のは重い一撃だったな……。」

「飛竜一閃を初めて見てそれを相殺したとは……ますます気に入った。だが無傷では済まされなかったようだな。そろそろこの戦いに決着をつける。」

「そうか・・・ならばそれに答えるまでだ。」

シグナムはレヴァンティンの一部が動くとき再び薬莢が飛ぶ。するとレヴァンティンは炎に包まれる。丈瑠もシンケンマルに戻すと共通ディスクを獅子ディスクに変えて丈瑠はそれを回転させる。するとシンケンマルも炎に包まれ、シグナムと丈瑠は同時に駆け出し、自分達の獲物を思いつきり振るう。

「火炎の舞い！」

「紫電・・・一閃！」

炎を纏ったシンケンマルとレヴァンティンがぶつかり合うと周りは激しい炎に包まれる。

「」「」「」
「おおおおおおおおおおおおお！……！！……！！」

お互い一步も引かずに獲物を鏝ぜり合う。すると二人を中心に激しい爆発が起きる。

はやて s i d e

二人の中心で起こった爆発ははやて達の方へと爆風が飛んでいた。みんなそれに飛ばされないよう踏ん張る。(ちなみにこのときフリードは耐えられず飛ばされていた。)

「ど……どうなったん！」

爆風が収まるとはやては声をあげてモニターを見る。次第に煙が晴れると変身が解けてシンケンレッドから志葉 丈瑠に戻って倒れている丈瑠と騎士甲冑がボロボロになって倒れているシグナムが映し出された。

「あー……こりゃ引き分けやな。」

「ひ……引き分け……！あのシグナム副隊長と引き分けですか！」

ティアナは驚いた様子ではやてが出した結果に驚く。確かに二人とも倒れているが、一向に起き上がる気配はない。

「文瑠さんに資料渡すのは起きてからの方がいいわね。」

「そうするしかないね。とりあえず文瑠さんとシグナムさんを医務室につれていこ」

フェイトは苦笑をしながら資料を見ていい、なのは達は気を失った文瑠とシグナムのもとに行くため歩きだした。

第三幕 侍対騎士（後書き）

作「今回教えるものはまだ参戦してないけどシンケンブルーこと池波流ノ介についてです」

シンケンブルー 池波流ノ介

シンケンジャーの一人で水のモチカラを受け継いだ侍で家臣でありながらもシンケンジャーのサブリーダー的存在。剣技の腕は「稽古」では丈瑠と互角以上だが状況が変わる「実戦」では一歩劣る。しかし4人の家臣の中で際も武士道、忠誠心を備わった侍（菜子曰く「侍の純正培養」）性格は生まじめで使命感が強いが、一方で落ち込みやすかったりハイテンションになりやすかったりと良くも悪くも感情変化が多い。

作「多分彼はこの小説だとネタ要因になる可能性が高いかも・・・

（汗）

あと前書きに書いたようなミスはもう二度と絶対にやらないぞ・・・

」・

丈「かといってそうやってしまっフラグが立っているぞ」

第四幕 行方（前書き）

作「前回の話は無理やり感が目立っている・・・気をつけよ・・・

今回はよつやくシンケンジャーのメンバーが少ないですが出ます。」

第四幕 行方

『ミッドチルダ 機動六課 医務室 16:41』

「……ん……、ここは……?」

「あ、目覚めましたか?」

丈瑠は意識を取り戻し、最初に目にしたのは天井。丈瑠は先ほど訓練施設にいたためここがどこなのかわからなかった。そして丈瑠はベッドのようなものに寝かされていることに気づくと身体を起すと横から女性の声がして、動こうとする丈瑠を止めようとする。

「あまり無理しないでください。貴方は先ほどのテストで倒れて気を失ってたんですよ。」

「テスト……? ああ言えばそうだな……。勝負の結果はどうなんだ?」

「引き分け……と聞きました。」

丈瑠はテストのことを思い出す。最初はターゲットを破壊するだけだったが、最後にシグナムが勝負を仕掛けてきて、戦いの最後火炎の舞いと紫電一閃がぶつかり合い、そこから記憶がない。その医者らしい女性からだとは自分は気を失っていたと聞く。しかし丈瑠はあの勝負が引き分けと聞くとシグナムも気を失っていたのだろうと思った。そして丈瑠はさっきの戦いのせいで重くなった体を動かしてベッドから降りて立ち上がる。

「あの・・・まだ身体は回復してませんか？」

「いや、もう大丈夫だ。気遣い感謝する。」

「そうですか・・・でもあまり無理しないでください。そういえば、はやてちゃんからこれを渡してほしいって言ってました。」

女性はポケットからカードみたいなものを取り出す。そのカードには丈瑠の名前と「民間協力者」と書かれていた。

「テストには合格したみたいだな。」

「そうみたいです。これからよろしくお願いします、文瑠さん。私の名前はシャマルです。ここの医者をしています。」

「ああ、よろしく。」

「そういえば、フェイトさんが後でロビーに来てほしいって言っていましたよ。」

シャマルと名乗った女性と自己紹介を交わす。そしてシャマルからロビーの場所を聞くと文瑠は医務室を後にしてロビーに向かって歩き出した。

『ミッドチルダ 機動六課 モニタールーム 16:52』

場所を変えてここは機動六課のモニタールーム。この部屋にははやての姿と眼鏡のかけた女性がモニターを見ている。モニターに映し出されているのはシンケンレッドとなった文瑠の姿だ。はやては文瑠の力がきになったのか、この女性に文瑠の力の測定を頼んでいたのだ。

「シャリー、丈瑠さんの力どう思う？」

「はい、はやくて部隊長。この人から魔力反応がないんですけど、
“レアスキル”からなんとか測定できそうです。」

シャリーと呼ばれた女性はシャリオ・フィニーノ。彼女はロン
グアーチの通信主任であり、デバイスの調整等デバイス関係のメカ
ニックを担当している。彼女ははやくてから言われた“レアスキル”
から丈瑠の力を測定をしていた。

「まず、あの大剣（烈火大斬刀のこと）が炎を纏った威力なんです
けど・・・魔力ランクで言うと威力はAA相当で、そしてあの剣（
シンケンマルのこと）が炎を纏った時の威力はA相当の威力が測定
されています。そして丈瑠さんの戦闘能力は総合評価で言うと・・・
AAA並相当です！」

「嘘オ！初めてでAAAなん！こりゃ本局に知られたら丈瑠さんを見
過ごす訳にはならへんで・・・」

「多分、自分の世界で長く戦っていたならばこの結果が出てもおか
しくありませんね・・・」

はやてとシャリオは丈瑠の戦闘力の結果に驚き、シャリオは丈瑠の能力の結果の理由を自分なりに口を漏らした。シャリオは心配した顔になり、今後彼はどうなるかはやてに聞いてきた。

「はやて部隊長。丈瑠さんはこれからどうなりますか？」

「とりあえずこれは何らかの理由を作って丈瑠さんを守らなあかんかもな・・・」

丈瑠の能力は結果的にはA A Aランク相当。しかもレアスキル“モチカラ”が使えるため本局に知られたら丈瑠は何されるかはやて自身もわからない。最悪の場合、元の世界に帰れずずっと管理局で働かされる可能性もあるためはやては丈瑠を守るため何らかの理由を作ることにした。

はやてとシャリオは文瑠のことを話しているちょうどその頃、文瑠はロビーでフェイトに頼んでおいた「志葉」というキーワードで建物の検索結果を見ていた。文瑠は検索結果を真剣な顔つきで見えていたが、すべて自分が住んでいた「志葉家」はなかった。

「・・・やっぱり俺の知ってる志葉家はなかったか。」

「あの・・・気を落とさないください。必ず文瑠さんの世界を見つけますので・・・。」

「いや、予想はしていたことだ。気にするな。」

文瑠は資料を見終わりに、ため息を漏らして言い、フェイトが心配すると文瑠はもうわかったいたかのように振る舞う。文瑠は見終わった資料を眺めながら自分の世界に残した家臣たちとジイのことを思い出す。

「（あいつら・・・俺が急にいなくなったことを心配しているだろうな・・・。それにあの時外道衆の気配がしたんだが、あれはなん

だっ たんだ？」

丈瑠は今のなおこの世界に来る直前に感じた気配を気にしていた。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

ここはこの世とあの世の狭間にある三途の川。ここは“アヤカシ”という化け物が住む世界でそしてシンケンジャーが長年戦っていた“外道衆”の拠点でもある“六門船”が浮かぶ川でもある。六門船は御大将血祭ドウコクが倒されたときに骨のシタリとともに沈んでいたが、その六門船が再び三途の川から浮上したのだ。しかし、船の中には骨のシタリ、一体しかいなかった。

「なんだい・・・もう目覚めの時かい。目覚めてもドウコクもないし、アヤカシも大半失ったし、わたしにゃあ“2の目”もない。シンケンジャーと戦っても返り討ちにあうだけじゃろうな・・・。」

アヤカシには全員“1の目”と“2の目”という魂がある。普段は人間と同じぐらいの大きさで活動する“1の目”、そして骨のシタリが言う“2の目”というのは1の目が何らかの原因で消滅すると強制的に“2の目”が発動して巨大化する。これが骨のシタリが言う“2の目”。しかしそれはシンケンジャーを倒すため別のアヤカシに捧げてその上の“3の目”を発動させたがそれもシンケンジャーによって倒され、彼には今1の目しか残っていなかった。それに彼には多くのアヤカシに繋がりを持つが、そのアヤカシもシンケンジャーに数多くやられている。今の状態でシンケンジャーに挑んでも返り討ちに合うのはわかりきっている。

“外道衆”の目的は人間たちを苦しませ不幸にさせることにより三途の川の水かさが増える。その水を人間界に溢れさせて大暴れするのが目的だ。アヤカシは“スキマ”から人間界に移動できて活動できるが、彼らには“水切れ”というものがあり、人間界にいる時にそれが起きると干上がってします。そのため永遠的に大暴れするため水かさを上げるのだが、今外道衆が主に人間界で暴れているのはナナシ連中のみで、水かさを増やすには時間がかかる。しかしアヤカシもドウコクもない以上ナナシを使うしかないのだ。骨のシタリはため息を漏らしながら“スキマ”から人間界の様子を見た。すると彼の目に映ったのは紫色の髪を生やした科学者の後ろ姿に、そして彼の見える方にはデカイ試験管のようなものがある。その中には試験管一つに人間が一人入っていた。

「ありや！なんてえげつないことをする人間もいるもんだねえ・・・」

！・・・待てよ？あの科学者の技術を利用すればもしかしたら・・・」

骨のシタリは何か思いつくと早速交渉するため“スキマ”から紫色の髪を生やした科学者の元に向かっていった。

『シンケンジャーの世界 志葉家 21：39』

場所を変えてここは丈瑠の世界、“シンケンジャーの世界”。丈瑠は謎のオーロラによって行方が分からなくなった志葉家は大騒然を起こしていた。そして志葉家では家臣ともう一人の侍が集合していた。紺色の服を着た池波流ノ介、ピンクを中心とした服を着た菜子、緑色のジャンパーを着た千明、黄色い服を着たことは、そしてもう一人の侍、金色の装飾がついた寿司屋の服を着た源太だ。ちなみに夜になっているのはハワイに行ってる菜子、フランスに行っていた源太が志葉家に到着したからである。

「源太！遅いぞ！」

「うるせえなア！俺だって急いでたんぞ！」

「そうでい！親分とオイラはこれでも全力で志葉家に向かってたんでい！」

源太の後ろから宙を浮かぶ提灯が現れる。この提灯の名前は“ダイゴヨウ”という名前で、源太に作られた提灯型サポートメカ。岡っ引きを思われるしゃべり方が特徴で、源太とたまに喧嘩するが源太の良き相棒でもあり、シンケンジャーのメンバーでもある。

「ごめんね流ノ介。源太も私もこれでも急いできたんだから。」

「それよりじいさん、また集結させたには何か理由があるんだろうな？」

千明は焦りを顔に出していた彦馬に言う「全員は彦馬に視線を向ける。そして彦馬は真剣な顔をして口を開く。」

「お前達を呼び出したのは他でもない。実は・・・殿が突然お消えになられたのだ。」

「「「え？」「」」

「「「はあ？」「」」

彦馬の言葉にだれもが全員耳を疑った。そして千明が先に口を開く。

「じいさん、とうとうボケたのか？」

「ボケてなどおらん！確かに殿は消えたのだ！突然・・・オーロラのようなものによって・・・。」

「オーロラア？こんな季節にオーロラなんて出る訳ないだろ！」

「確かに見たのだ！黒子達も何人が目撃している！」

千明と源太は彦馬の言葉を否定したが、千明達は後ろを向くと才一ロウによって殿が消えたことを目撃した黒子の姿があった。黒子は彦馬の言葉が本当であるように頷いている。

「まさか・・・本当に起こったの？」

「ああ・・・。今、志葉家総出で殿の行方を追っている。お前達を呼んだのは、殿の捜索に協力してほしいからだ。お前達はそれぞれ忙しいのを承知している。手伝ってくれるか？」

彦馬は流ノ介達に頭を下げてお願いする。すると全員真剣な顔つきになり、彦馬に自分達の思いを言う。

「もちろん協力するに決まっている！」

「そんなことなら早く言うてくれればいいのに。」

「水臭えこというなよじいさん。」

「丈ちゃんが消えたのなら俺はどこまでも探してやるぜ！」

「でも、うち達を呼んだのは他にも理由があるんですか？」

みんなが意気込みを言う中こととはは自分達を呼んだのにまだ何か理由があるのではないかと思い、彦馬に質問する。

「ああ。この件はもしかしたら外道衆が噛んでる可能性もある。だからお前達に再びディスクとインロウマルを渡す。」

彦馬そういつと黒子が秘伝ディスクとインロウマルが置かれた置物を持ってきて、それを彦馬の前に置く。

「流ノ介は、舵木ディスクとインロウマル、そしてスーパーディスクを渡す。インロウマルは、もし殿に出会ったら渡してほしい。」

「はっ！お任せください！」

スーパーディスクというのはインロウマルと同時に使うことによりシンケンジャーをさらにパワーアップさせる“スーパーシンケンジャー”になるために必要なディスクのことだ。

「千明は兜ディスクを渡す。」

「サンキユ。」

「茉子は虎ディスクを。殿に出会ったら渡してほしい。」

「わかったわ。」

「恐竜ディスクと残りのディスクはダイゴヨウ。頼めるか？」

「おう！任せられよ！」

ダイゴヨウは体の中に秘伝ディスクを収納できるようになっていく。彦馬はよっぽどのがない限り壊れないし源太から離れないことから残りのディスクをダイゴヨウに任せることにした。そしてディスクとインロウマルはそれぞれに託すと彦馬は流ノ介達を見る。

「今日はもう遅い。すまないが、搜索は明日から始めてください。」

彦馬は流ノ介達に頭を下げて言う。しかし流ノ介達は丈瑠が謎のオーロラによって異世界“ミッドチルダ”に飛ばされていたことをこの時はまだ知らなかった。

『ミッドチルダ 機動六課 休憩室 18:01』

丈瑠がミッドチルダに来てから数日が立ったある日、丈瑠は今まで機動六課の人と自己紹介をしたり中を案内したりと忙しかった。しかしそれは大体二日で済み、余った時間シグナムと竹刀で“稽古”をしたりモチカラの鍛錬をして時間を潰していた。そして丈瑠は休憩室にある雑誌を見ていた。ミッドチルダ語はもちろん読めないが写真で何か情報が掴めるかもしれないと思ったため読んでいたのだ。雑誌は主にファッションや店の宣伝などで埋まっていたが、丈瑠はあるページを開くとその写真に目が行く。その写真は慌てて撮ったためかピントが合っていないが、丈瑠にはそれがなんなのか特定するには十分だった。

「これは・・・ナナシ連中！なぜこの異世界に・・・」

丈瑠は雑誌を持った手を震わせながら雑誌に掲載されている写真を見ていた。ちなみにそのページにはミッドチルダ語で『またもや現れる謎の集団！管理局はすでに手が負えない状況？』と書かれているその写真に写っているのは外道衆の戦闘員“ナナシ連中”の姿写し出されていた。丈瑠はこの異世界ミッドチルダに外道衆がいたことが信じられないでいた。

第四幕 行方（後書き）

作「今回はシンケンピンクこと白石茉莉子についてなんです但其の前
に前回でシンケンブルーの説明がまだ書いてないことがあったので
最初にそのことについて説明します」

前回の続き

シンケンブルーの専用武器は「ウォーターアロー」。弓の形をして
おり、モチカラで形成された水の矢を発射することができ、技ディ
スク「龍ディスク」を装着することにより50mのコンクリート壁
を粉碎するほどの威力がある矢を連射する「明鏡止水」が使用でき
る。（威力に関しては公式サイトより）

シンケンピンク 白石茉莉子

シンケンジャーの一人で「天」のモチカラを受け継いだ女性の侍。
冷静で鋭い観察力を持ち、面倒見がいい性格。侍として親から離れ
祖母から育てられたためか、「普通のお嫁さん」に憧れている。剣
技の腕もよく、シンケンメンバーの中で一番達筆なためモチカラを
操る能力が高い。（実際にモチカラで敵の攻撃を防ぐこともしてい
るほど）

そして姉御肌で千明、ことは、ダイゴヨウから「姐さん」「茉莉
ちゃん」と慕われている。

しかし料理の腕は壊滅的で、「シンケンマルを包丁のかわりに使
う」「食材を下処理せよ鍋に放り込む」などと“自己流”の料
理をシンケンメンバーの男性陣に振る舞い、丈瑠を腹痛で一晩寝こ
ませたことから黒子達と男性陣を怖がらせてしまうほど。しかしそ
のことに關しては自覚しており、料理本を参考にして料理をし始め

第五幕 貨物列車の戦い（前書き）

作「そういえばアバレンジャーの話でアニメの釣りバカ日誌とクロスオーバーした話が合ったんだけどその話はアバレンジャーの中で一番頭の中にこびりついている。

今更ですが丈瑠達がシンケンジャーに変身するときには「丈瑠 シンケンレッド」のように書きます。ちなみに本編で書いている時間はぶっちゃけ作者の大体そんな感じかな程度です。

今回はリニアレールです」

第五幕 貨物列車の戦い

『ミッドチルダ ヘリ 13:31』

丈瑠はこの異世界ミッドチルダに外道衆がいるとわかってその翌日、丈瑠はフォワード4人とリインとともにヘリの中にいる。理由としては機動六課の初任務で、リニアレールの中にある赤い宝石のようなロストロギア“レリック”の回収とリニアレールを占拠しているガジエツトを逃がさず全て破壊するのが目的だと聞いている。なのははすでに出撃していてフォワード達と丈瑠が降下地点まで行けるように上空を飛ぶガジエツトを破壊していて、フェイトも出張でいなかったが今こちらに向かっていると聞いている。リインが今回の任務の説明しているなか、丈瑠は一人考え事をしていた。雑誌の写真に写っていた“ナナシ連中”についてだ。

ちなみに丈瑠は毎日同じ服を着ていたらだめだと言われたため機動六課に支給された制服を着ている。

「（この異世界ミッドチルダになぜ外道衆が現れる？外道衆は俺達がドウコクを倒したことでいなくなっただけだ。だが、写真を見る限りまだナナシ連中しか見られない。だがいずれアヤカシが出てもおかしくない。もしアヤカシが現れたら仲間達もインロウマルもない今、例え倒したとしても2の目が発動すれば俺一人では対処しきれるかどうかわ

からないぞ……。」

丈瑠は俯きながら外道衆について考えていた。アヤカシはナナシ連中よりはるかに強い。今まで丈瑠はシンケンジャーが結集した時でも一人でアヤカシと戦っていた時があった。しかし、戦いが続くごとにだんだんアヤカシも強くなっていき、仲間達と協力して倒すことが多かった。しかし今は彼は異世界、ミッドチルダにいて仲間がここに来るかどうかわからない。しかしもし現れたら世話になった機動六課の人達を外道衆の戦いに巻き込むわけにはいかない。そのため近々機動六課を去って一人で外道衆と戦おうとも考えていた。そんな考えを丈瑠はしていたが、急にリインが割り込んできた。

「丈瑠さん！聞いていますか！」

「！ああ……すまん。確か任務についてだったか？」

「よく聞いてなかったんですか！今回の任務はレリックの回収とガジェットの破壊です！丈瑠さんはガジェットの破壊に集中してください！わかりましたですね？」

「ああ、わかった。」

ラインに怒られながらも丈瑠は謝り、説明を聞く。説明を聞いているなか丈瑠はフォワードのスバル、ティアナ、エリオ、キャラを見た。初めての任務でみんな緊張しているが、キャラは不安の顔をしている。そんなキャラをエリオが励ましている。丈瑠はフォワード達を見ながらこう思った。

「（外道衆が現れたとしても、この子達だけは巻き込ませたくはない。）」

そして降下地点につくとリニアレールの中の突破口を開くため先に出撃することになった。そして丈瑠は降下体制に入ったときにはすでにシンケンレッドに変身していた。

「シンケンレッド。志葉、丈瑠・・・参る！」

シンケンレッドはヘリから飛び降りてリニアレールの屋根に着地する。そして共通ディスクをシンケンマルに装着してリニアレール

の中に入るとガジェットがすでに中をうようよと徘徊していた。そしてシンケンレッドに気づいたガジェットはシンケンレッドに向けて熱線を一齐に放つ。シンケンレッドはその熱線を避けながらガジェットに近づいてはシンケンマルで斬って破壊していく。シンケンレッドはこの両のガジェットを半分くらい破壊すると屋根の上から着地する音がした。どうやらフォワード達が着地してきたようだ。しかしシンケンレッドは戦いながらも外道衆について考えごとをしていた。しかしシンケンレッドはそのことを今は忘れようと頭を横に振る。

「（外道衆も気になるが・・・今はガジェットの破壊に専念するまでだ。）」

シンケンレッドはこのまだ出てくるガジェットを一掃しようと思いい、雷の絵柄が付いたディスク“雷撃ディスク”を共通ディスクと入れ替えるとそれを回転させる。するとシンケンマルの刃は雷のように激しい電気を纏い始める。

「シンケンマル、雷電の舞い！」

シンケンレッドは雷を纏ったシンケンマルを振りかざすとシンケンマルから雷が放たれ、雷がガジェットの群れに当たるとガジェットは次々とシヨートを起こして床に落ちていく。シンケンレッドはこの両のガジェットを全滅させたと判断すると次の両に向けて走っていく。

丈瑠は4両目でガジェットと戦っているとへりに乗る前に受け取った通信機から通信が入る。通信はスバルからだ。

『こちらスターズ03！スバル・ナカジマ、レリックを回収しました！』

『了解！スターズ03とスターズ04は丈瑠さんと合流して残りのガジェットの殲滅に当たって！』

「ああ。わかった。」

シンケンレッドは通信を切るとスバル達が来るまでこの両のガジェットの破壊に専念した。そして4両目のガジェットを全て破壊し終わり、シンケンレッドは外から音がすると窓から外の様子を見る。シンケンレッドの目にはリアレーンから落ちるエリオとキヤロの姿が映る。

「エリオ！キャロ！」

シンケンレッドは落ちるエリオとキャロに対して声をつい上げてしまう。シンケンレッドはこのままエリオとキャロが地面にぶつかって死んでしまうと思った。しかしそうはいかなかった。エリオとキャロは光に包まれ、光が消えるとエリオとキャロは突然現れた竜に乗っていた。啞然としてみるシンケンレッドの横からモニターが出てくる。モニターにはフェイトが映っている。

『驚いた？あれはキャロの“レアスキル”なの。』

「“レアスキル”？確か召喚だと聞いていたな。」

『うん。エリオとキャロが乗っているのはフリードなの。フリードはキャロの魔法を受けて初めてあの姿になれるの。心配しなくても大丈夫よ、丈瑠さん。』

「わかった。」

モニターが消えるとシンケンレッドはエリオとキャロが落ちたのにもかかわらず落ち着いてああ言うのだから、それほどフェイトはエリオとキャロのことを信用してるんだなと感じた。そして少しすればスバルとティアナとリインと合流し、シンケンレッドはスバル達とともにガジエットの破壊のため次の両に行くことにした。

次の両に行つて今いる両のガジエットを殲滅しているとリニアルがゆっくりと停車する。そしてエリオから通信が入る。

『こちらライトニング03、エリオ・モンディアル！リニアルの中央管制室を占領していたガジエットを破壊しました！』

「お疲れ様です。まだ残っているガジエットの破壊をお願いします。」

『わかりました！リイン曹長！』

エリオは通信を切り、そのままガジエットの破壊に移る。そしてシンケンレッドがガジエットを破壊するとシャリオから通信が入る。

『今の文瑠さんが破壊したガジェットでリニアールにいるガジェットを全て破壊しました。引き続きまだガジェットは隠れていないか確かめてください。』

通信が切れるとシンケンレッドとスバル達は今いる両から離れようとする。スバルが残骸となったガジェットの横を通りすぎるとガジェットの“スキマ”が赤く光っている。スバル達はそれに気づいてなく、赤く光る“スキマ”からナナシ連中が奇声を上げて現れる。

「えっ？な・・・何これ！」

「どこから現れたの！」

「キヤアアア！！怖いですー！！！」

「何！外道衆だと！」

『リニアール内に未確認生命体の反応が多数！そして上空からはガジェットの増援です！』

ナナシ連中が現れるとシンケンレッドはすかさずナナシ連中と戦

始める。

「お前達は下がっている！」

「えっ！この数で一人で立ち向かうのは無茶です！」

「いいから下がってる！俺に任せておけ！」

20体は超えるナナシ連中に対して一人で立ち向かうシンケンレッド。しかしここで烈火大斬刀を使うわけにはいかない。使ったとしても戦っている最中にスバル達が襲われる可能性もある。だからと言って百花繚乱ひゃっかろうらんを使うわけにはいかない。1000もある炎はシンケンレッドが耐えれたとしてもスバル達が耐えられず絶命してしまう危険もある。そしてナナシ連中が現れたのはシンケンレッドがいる場所だけではない。エリオとキャラロがいる両にも表れている。数は10体とシンケンレッドがいる両と比べると少ないが、エリオとキャラロを殺すには十分足りる数だ。エリオとキャラロはナナシ連中から逃げていた。ガジェットとの戦いで魔力が消費しており、初めて見るナナシ連中に恐怖心を抱き逃げていた。エリオとキャラロはリアレールの屋根に上るがそれが仇となり、ナナシ連中に囲まれてしまう。

そのころロングアーチでは突然現れたナナシ連中はシンケンレッドがいる両が多いことにシャリオ達は気づく。

「この未確認生命体―（ナナシ連中のこと）ってまさかレリックが目的じゃ……。」

「あかん……。なのはちゃんかフェイトちゃん！どっちかエリオくん達を助けに行つて上げてえな！」

はやては焦っていた。この未確認生命体は管理局本局から危険視されており、このことは当然機動六課にも伝えられている。しかし、現れる方法も未だに管理局は判明しておらず、任務においても気を付けるようにと厳重注意がされていた。しかしまさかこのリニアールにいきなり現れるとは思わなかった。そんな時にロングアーチからは新たな反応をキャッチする。

「リニアールから未確認反応を二つ発見しました！今別々に行動してリイン曹長達の方とエリオ三等陸士の方に向かっています！」

「何やて！」

ロングアーチが新たな反応をキャッチしていたその頃シンケンレッドの方はスバル達を守りながらナナシ連中と戦っていた。しかし守りながらでは思うように戦えず、少しづつ押されていた。

「（くそ・・・！このままではこの子達を守りきれない！だからと言って烈火大斬刀は思うように使えないし、ディスクを交換してる内に突破される・・・！）」

シンケンレッドはナナシ連中と戦いながら思っていた。するとシンケンレッドの耳から聞き覚えの音がする。

「おりゃ！でやあっ！」

ナナシ連中の背後から着物を思わせるスーツを着て、「木」と大きく書かれたようなマスクをした戦士がシンケンレッドを持つシンケンマルと同じ武器を振り回してナナシ連中を倒していく。その戦士の姿はシンケンレッドと比べると色が緑でマスクが「木」と書か

れているのを除けば同じである。シンケンレッドはその戦士が誰だかわかっていた。

「千明！」

「丈瑠！お前今までどこ行ってたんだよ！探したんだぞ！」

「話は後だ！まずはこいつらを片付けるぞ！」

「ああ！わかったぜ！」

千明ことシンケングリーンはシンケンレッドとともにナナシ連中と戦い始める。さつきまでとは違い逆にナナシ連中を押し始める。シンケングリーンは持つてるシンケンマルに装着したディスクを回転させる。するとシンケンマルは形を変えて長槍へと変化する。この武器はシンケングリーンが使う武器“ウツドスピア”であり、シンケングリーン専用武器だ。シンケングリーンはウツドスピアを自分の技ディスクの緑色のディスク、“熊ディスク”をウツドスピアに装着すると先端から刃が現れる。そしてシンケングリーンはウツドスピアを振り回して周りにいるナナシ連中を薙ぎ払う。

「ウツドスピア！大木晩成！」
たいきはんせい

ウツドスピアから放たれる2・5tの圧力がナナシ連中に襲い掛かり、ナナシ連中は耐えきれず爆発して消えてなくなってしまう。気づけばナナシ連中はいなくなっていた。

「い……一体どうなってるの……？」

ティアナは突然現れたナナシ連中といきなり現れて助けてくれたシンケングリーンが存在に状況がまとめきれずにいた。

シンケングリーンがちょうどシンケンレッドの前に現れた時、エリオとキャロの前にはシンケンレッドと同じ着物と思わせるスーツに「天」と大きく書かれたようなマスクをしたピンクの女性の戦士が立っていた。

「少ししゃがんで、今すぐ助けてあげるから。」

このピンクの女性の戦士シンケンピンク。シンケンピンクはシンケンマルを構えていて、襲い掛かってくるナナシ連中を倒していく、そしてシンケンピンクはシンケンマルに装着された共通ディスクを回転させるとシンケンマルは扇のような形に変わる。この扇はシンケンピンクの専用武器“ヘブンファン”。シンケンピンクはヘブンファンに技ディスクのピンク色のディスク、“亀ディスク”を装着させるとヘブンファンをナナシ連中に向けて振るう。

「ヘブンファン！はくりよくまんでん迫力満点！」

ヘブンファンから放たれる刃となった風はナナシ連中を吹き飛ばし、風の刃で切り刻む。そしてナナシ連中はシンケンピンクから放たれた風によってリニアレールから落ちて消えていく。ナナシが全滅するとシンケンピンクはエリオ達の方を向く。

「もう大丈夫よ、安心して。」

「は……はい……。」

「ありがとうございます……」

「あれって……文瑠さんが来ているスーツと似ている……」

上空からエリオ達を助けるため向かっていたフェイトはエリオ達を助けてくれたシンケンピンクの強さを啞然として見ていた。フェイトはあのスーツが文瑠がシンケンレッドになった時と色とマスク以外は同じだと思っていた。

『研究所　　????　　?????』

ここはある研究所。ここのある部屋からシンケンレッドがガジェットと戦う姿をモニターから見ている。紫色の髪を生やした科学者であり次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの姿がいた。その彼をモニター越しから彼の秘書であり、ナンバーズのno.1、ウーノが写っていた。

「ウーノ、見たまえ。この男は突然この世界に現れた戦士だ。彼は我々にはない力を持っている。しかもまた突然現れた緑色の戦士とピンク色の戦士も我々の持っていない同様の力を持っている。」

スカリエッティはモニターを切り替えるとシンケングリーンとシンケンピンクが映し出される。しかし、ウーノはシンケングリーンとシンケンピンクよりも気になっていたものがあつた。

「しかしドクター。それはわかっておりますが……。ドクターはなぜ、“骨のシタリ”と名乗る化け物に協力するんですか？」

ウーノが気になっていたのは“外道衆”のこと。数日前、突然スカリエッティの前に現れた“外道衆”の骨のシタリの存在がどうも気になっていたのだ。

「ああ。骨のシタリか。確かに化け物の姿をしているが、我々にはない力と命を二つ持っている。それに知性も思考も人間と変わらない。それに、技術を提供する代わりに私は奴らの“アヤカシ”とナシ連中を自由に使わすという条件で協定を結んでいる。今回ナシを送ったのはナナシの力はどの程度か試しかめるためだ。」

「はあ……。しかしナナシ連中はあの“シンケンレッド”とかいう

戦士と似た格好の緑色とピンク色の戦士にあっさり負けてますが？」

「確かに。だが数で攻めれば一時は“シンケンレッド”を押ししていた。それにまだ“アヤカシ”の戦闘能力は見えていない。彼がまだ“製作中”と言っていたからまだ時間がかかるだろう。早く“アヤカシ”をシンケンレッドとかいう戦士に戦わせて見てみたいものだ・・・」

スカリエッティはアヤカシとシンケンジャーの戦いを楽しみにしているかのようにシンケンレッド、シンケングリーン、シンケンピンクが映し出されたモニターを眺める。

第五幕 貨物列車の戦い（後書き）

作「今回はこの話に登場したシンケングリーンこと谷 千明について説明します。」

シンケングリーン 谷 千明

シンケンジャーの1人で志葉家の家臣の侍。高校生で卒業を控えていたがその前に呼び出されたため卒業式に出られなかった。親からは侍としての心得を最低限しか教えてもらえなかったため「殿と家臣」という主従関係に受け入れることができず、よく稽古をさばっていたりしていた。しかし話が進むにつれて殿である丈瑠を「いつか超えてみせる」という目標を立てたり、1人で特訓したり彦馬のアドバイスで自分らしい戦い方に目覚めたりと、シンケンジャーの中で一番成長が見られる。シンケンメンバーの中で一番の現代っ子気質でモチカラ500枚書き取りに対して「五百枚」と書いて提出したり、敵の能力を逆手に取ったりもよくも悪くも柔軟性が高い。戦い方は専用武器が槍なためかシンケンマルを持つとき端を持ちシンケンマルのリーチを最大限まで引き延ばして敵を切り払うという特徴な戦い方をする。専用武器は「ウツドスピア」で必殺技はウツドスピアを振り回して2.5tの圧力で敵を薙ぎ払う「大木晩成」を使うことができる。

作「今回の話は出来にかなり不安が残っている……。それに書いてて丈瑠の「人見知り」がなかなか出てない気がする……。」

でもとりあえず先に茉莉と千明を参戦させます。流ノ介とことは、

あと彦馬と黒子達ものちニッドチルダに行かせますのでよろしくお
願いします」

第六幕 再会（前書き）

作「今回のゴークイジャーでまさか主人公達以外にも戦隊になれるとは……。ゴークイジャーの変身アイテムとレンジャーキーがあればモチカラ無くてもシンケンジャーになれるのか！

今回は千明と茉莉がミッドチルダに来たことについてです。前回に
触れなくてすみません。」

第六幕 再会

『ミッドチルダ 機動六課 部隊長室 17:01』

丈瑠はリニアレールの任務中に千明と再会し、そのあとライトニング隊のエリオとキャロと合流した際茉子と再会した。丈瑠と千明と茉子は今任務を終え、機動六課に戻るとはやてに呼ばれたので丈瑠達は今部隊長室にいる。今、部隊長室には丈瑠と千明と茉子、そして丈瑠達の前にははやてとラインとシグナムの姿がある。はやては千明と茉子に先ほどの任務でどうしてリニアレールにいたか聞いていた。

「えっと・・・谷 千明さんに白石 茉子さんですね。先ほどの任務でフォワード達を救ってくれてありがとうございます。でも、どうしてリニアレールの中にいたか・・・教えてくれませんか？」

「俺は丈瑠を探して道を走っていたら、いつの間にかあの列車の中にいたんだから、そんなこと聞かれてもわからねえよ。しかもなんか丈瑠達がナナ・・・いや、変な奴らと戦っていたから変身して戦ったまだけだよ。」

「私も、丈瑠を探していたらいつの間にかあの中において、子供達（エリオとキャロのこと）が襲われてたから変身して、助けたまだけよ。」

千明と茉莉は二人とも文瑠を探しているうちに謎のオーロラによってミッドチルダに飛ばされていた。もちろん二人はそのことについて気づいていない。千明と茉莉はフォワード達を襲った“ナナシ連中”について知っていたが、文瑠にそのことを出来る限り内緒にしると釘を刺されていた。はやては千明と茉莉に理由を聞くと念話でリインとシグナムに話しかける。

「『千明さんと茉莉さんも文瑠さんと同じ理由やな……。千秋さんと茉莉さんも文瑠さんと同じ“次元漂流者”やな。』」

「『主はやて、この者達をどうなされますか？』」

「『この二人も文瑠さんと同じ“モチカラ《レアスキル》”の持ち主やし、このままほつとくのもあかんから機動六課で保護になるか、民間協力者になるかもしれへんな……。』」

「『千明さんと茉莉さんのバリアジャケットー（シンケンジャーになった姿のこと）ってなんか……。文瑠さんとおなじですね。もしかしたら戦隊かなんかと思うです！』」

「『リイン……。そんなことは多分ないと思うで。』」

リンは内心でドキドキしながら言っていたが、はやては苦笑しながらも念話を切り、丈瑠達の方へ顔を向ける。

「千明さんと茉莉さん。よく聞いてください。この世界はミッドチルダと言って、丈瑠さん達にとってはミッドチルダは異世界です。」

「異世界！・・・まあ普通、人が飛べるわけもねえし変なコスプレ（なのは達のバリアジャケットのこと）して戦ってるからな・・・」

「こ・・・コスプレですか・・・。」

千明と茉莉はここが異世界ミッドチルダとわかっていてもあまり驚いた様子ではなかった。理由として、世界を渡り歩く力を持つ青年に出会ったり“ゴーオンジャー”と名乗る別世界の戦隊達とめぐり会っているからだ。はやてはバリアジャケットのことをコスプレと言う千明に苦笑いしながらも話を続けた。

「千明さんと茉莉さん。貴方達の世界は丈瑠さんと同じですね？」

「ああ。確かにそうだぜ？」

「そうなんやけど……。丈瑠さん達の世界はまだ見つかってなくて、今搜索中なんや。悪いんやけど……。見つかるまで機動六課こくろくに協力してくれへんか？」

「協力……。？」

「はい。実はこの機動六課は人手不足なんです。千明さんと茉莉さんの力をぜひ借りたいんやけど……。いいですか？」

「俺は別に構わねえけど……。」

「あの……。ちょっと質問してもいいですか？」

「ええよ。なんや？」

千明は協力に関しては不満な様子はないものの、茉莉には何やら気がかりなことがあった。茉莉はそのことを言うため口を開く。

「あの子供達（エリオとキャロ）はどうして……。機動六課こくろくにいるんですか？それに、はやてさんが今着ている制服と同じのを着ているんですけど……。」

「・・・それについては言う機会がなかったが、俺も今まで気になつていた。なぜ子供が“戦場”に立っている？」

「・・・」

丈瑠が言う“戦場”と言うのは今回の任務でガジェットとナナシ連中と戦つたりニアレールのことを言っている。丈瑠は今までエリオとキャラロが機動六課にいたことを気にしつつあったが、今回の任務でその思いが急に加速し、ガジェットとの戦いを見てエリオとキャラロがいることについての疑問が一気に膨らんだ。

はやてはこのことについて少し黙っていたが、静かに口を開いた。

「・・・エリオとキャラロは、二人ともフェイトちゃんに保護されて、フェイトちゃんの力になりたいと志願して今ここにおるんよ。」

「だからと言って、あの子達は他にも道があつただろ。それに、お前達がやっている任務っていうのは今回のように危険な目に合うこともある。お前達はそのことをわかっているのか！」

「わかってます！せやけどこれはエリオとキャラロの判断でもあるよ。力になりたいって言ったのは自ら志願したんや・・・。」

「だけど・・・どんな気持ちがあったとしても私はやめさせるべきだ・・・」

「茉莉。もういい。これは俺達が言うべきことではない。」

「でも・・・。」

「別にいいじゃねえか？あいつらが決めたことなんだし。それに、俺達も覚悟を決めて戦ってるんだからよ。」

千明はシンケンジャー結集される前は千明の代で外道衆は復活しないと判断して、父親によって自由に育てられていた。しかし、外道衆は千明の代で復活してしまい戦うことになってしまった。最初、千明は丈瑠に対して反発していた。しかし千明は長く戦いを通していくことにより丈瑠に対して侍としての自覚を持ち、外道衆と戦うことに覚悟を決めた。千明は、エリオとキャラは覚悟を決めてフェイトの力になりたいと千明は解釈した。茉莉はエリオとキャラのことを心配しながらも了承した。

「うん・・・わかった。」

「質問は・・・もうないですか？」

「・・・ないようだな。」

「じゃあ私から質問してもいいですか？今回の任務でいきなり現れた“未確認生命体”について何か知っておりますか？」

はやてが言う“未確認生命体”と言うのはナナシ連中のことを刺している。はやてはもしかしたら未確認生命体について知ってるんじゃないかと思っただけで、文瑠達に聞いてきた。文瑠は少し黙るとゆっくりと口を開く。

「・・・俺達の世界で戦ってた奴らだが、俺達にもどういいうものかよくわからない。」

「そうですか・・・。」

文瑠はナナシ連中は外道衆の戦闘員と知っている。しかし、もし本当のことを言ったらはやて達は必ず協力すると言ってくるかと判断した文瑠はあえて嘘を言った。

「・・・質問はこれだけか？」

「はい。以上です。ご協力感謝します。千明さんと茉莉さんの部屋は案内してもらいます。シグナム、ええか？」

「わかりました。主はやて。」

「・・・主？」

千明はシグナムがはやてに対して言った「主」という言葉に疑問を持ったが、千明と茉莉と文瑠はシグナムの案内で隊員用の寮に案内してもらったことになった。

『シンケンジャーの世界 志葉家 18:00』

場所を変えて文瑠達の世界、シンケンジャーの世界では取り残された流ノ介達が集まっていた。当然千明と茉莉の姿はない。

「まさか・・・殿だけではなく、茉莉と千明もいなくなるとは・・・」

「黒子達の情報によりますと、二人ともオーロラみたいなカーテンに包まれて気が付いたら消えていたと話している。このような事態でもし外道衆が現れたら太刀打ち出来るかどうか・・・」

「でも、外道衆はドウコク倒しているから復活はまだないと思うんや。だけど殿様も茉子ちゃんも千明もいなくなるなんておかしいし・・・。」

「とにかく、外道衆の仕業の可能性もある。十分気を付けてくだされ・・・。」

彦馬は殿である丈瑠と家臣の茉子、千明の安否がわからず、行方不明になった原因もわからずじまいであったため、流ノ介達にはそう言うしかなかった。

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮 18:06』

また場所を変えてミッドチルダ。千明と茉子はシグナムに部屋を教えてもらい、千明は丈瑠と同じ部屋、茉子はキャロと同じ部屋で暮らすことになった。そして今丈瑠と千明の部屋に丈瑠、千明、茉子が集まっていた。

「文瑠。どうしてあいつら（はやて達）にナナシ連中のこと言わなかったんだ？」

「千明、それはお前でもわかるだろ。この世界にナナシ連中がいるってことは外道衆がいるってことだ。もし“アヤカシ”が現れたとしても、彼女達だけでは太刀打ちできないし、巻き込みたくはない。」

「でも、もし本当にアヤカシが出たら私達のことを隠し通すことは出来ないよ。そうならどうする？」

「・・・その時はその時だ。」

「なるようになるしかねえか・・・。仕方ねえことか・・・。」

「出来ればアヤカシが出てこなければいいけどね・・・。」

文瑠達は本格的に外道衆が活動しないことを祈るしかなかった。しかし、その祈りは無駄になることを文瑠達はまだこの時には気づいていなかった。

ここは外道衆が拠点とする三途の川。そしてそこに浮かぶ船、六門船には骨のシタリの姿があった。シタリは“スキマ”からスカリエッティと話していた。

「スカリエッティ。あんさんのおかげでなんとかアヤカシを復活させることに成功したよ。」

『そうか！だが・・・そのアヤカシはまだ地上には出さなくてくれ。そのアヤカシにはシンケンジャーと戦ってもらいたい。』

「ほう・・・？なんでそんなことを言うのかね？アヤカシを使えば“レリック”とか言う宝石も楽に手に入るんじゃないのかね？」

『その通りかもしれないが、まだアヤカシの戦闘能力はわからないし、何より向こうの力もわからない。それに、お前達を完全に信用したわけではない。一度こちらからの指示に従ってもらいたいんだが・・・いいかね？』

「ああ。構わんよ。私もちゃんと成功しているか確かめたいからねえ。」

『交渉成立というところかな？ではその時まで待っていてくれ。』

スカリエッティが言い終わるとシタリはスカリエッティと話すの

をやめ、復活させたアヤカシに顔を向ける。

「と言っわけだから、もう少し待っててくれんか？ “オオツムジ”。

「ああ。聞いてたぜ。その指示が出るまで暴れるのはお預けか・・・

「すまんねえ・・・だけど地上に出れたら精一杯暴れてきなさい。」

「おう。そつとさせてもらっぜ。」

つむじ風のような、たくさんの鎌をぶら下げたようなアヤカシ、
“オオツムジ”と言われたアヤカシは三途の川に入っていく。

「見たのところ・・・まだシンケンジャーは集まってないようだねえ・・・。集まる前に潰しとくのもいいのに何考えているんだ・・・？ スカリエツティの奴は・・・。」

シタリはスカリエッティの行動に不審を抱きながらも新たなアヤカシの復活に乗り出した。

第六幕 再会（後書き）

作「今回はシンケンイエローこと花織ことについて紹介です。」

シンケンイエロー 花織 ことは

「土」のモチカラを受け継いだ侍。姉がいて、本来姉がシンケンジャーになるはずだったが姉は体が弱かったため妹のことはがシンケンジャーになることになった。京都弁を話し、実家で竹細工の作りをしており、シンケンジャー集結するまで全く田舎から出なかった。性格は純粹で優しい性格だが、度を超えた天然ボケで良くも悪くも空気が読めないところがあり、同様の気質を持つ流ノ介とは馬が合う。姉から教わった笛と剣技が得意。剣技の腕は結集当時千明を圧倒し、太刀筋を彦馬から絶賛されるほどだったがそれ以外のことは極めて不器用。しかし幼少時代に受けたいじめの経験と姉を思う気持ちが忍耐力に繋がっている。茱子に憧れているが、彼女の料理の下手さに気づいてない。ことはは料理の腕は味ではなく感情で認識しているためか、茱子の料理を「茱子ちゃんが作ってくれたからおいしに決まっている」と認識しているところがある。

専用武器は「ランドスライサー」と言う大型手裏剣。技ディスクである黄色いディスク「猿ディスク」を装着することにより土煙を帯びたスライサーを投げつけて敵を吹き飛ばす「奮闘土力（ふんとうどりよく）」が使用できる。

そして今回の最後らへんに登場したアヤカシ“オオツムジ”はシンケンジャーでは第二幕で登場したアヤカシで、初めてシンケンオー

にやられた記念すべき一（？）アヤカシです。能力としては、刃と
なつたつむじ風を操って人々を切り刻んで苦しめることが好きな性
格で、使用する武器もいくつもの刃が付いています。

作「ことはの京都弁がわからないので関西弁になることが多いかも
しれません……。それと各キャラをどう描くかが難しい……。
でも出来る限り努力するのでよろしく願います。」

第七幕 アグスタの悲劇（前書き）

作「今更なんですが・・・文瑠達がモチカラを発動する際文字を反転させる前にスイッチを押すんじゃなく反転させてからスイッチ押すんでした・・・。今後とも気を付けようと思います。

それとシンケンジャーのメンバーが集まるとギャグや笑い系が入ってしまうかもしれません。そうなって萎えてしまったら本当にごめん下さい。

今回はホテル・アグスタ編です。」

第七幕 アグスタの悲劇

『ミッドチルダ 機動六課 ヘリポート 11:01』

千明と茉莉がミッドチルダに来て数日後、今日は機動六課総出での出撃らしい。任務の内容はオークションの護衛とオークションに出品されるロストログアに反応して出てくるかもしれないガジェットをアグスタに侵入させないようにさせるのが任務らしい。丈瑠と茉莉と千明はアグスタに向かうべくヘリポートに着くとすぐにヘリに向かう。ちなみに、三人とも機動六課に支給された制服を着ており、違いと言えば丈瑠は赤いネクタイ、茉莉はピンクのリボン、千明は緑色のネクタイをしているが着崩している。ヘリに向かう途中茉莉が何か思い出したかのような顔をして声を出す。

「あ。」

「どうした、茉莉？」

「そういえば……これ渡すの忘れてたね。」

そう言いながら茉莉がポケットから秘伝ディスクを取り出す。そのディスクは虎の咆哮をイメージした絵柄のついた白いディスク“虎ディスク”だ。

「はい。アヤカシが出ない限り使わないと思うけど……一応ね。」

「……そんな日が来ないことを祈るしかないな。」

虎ディスクは折神“虎折神”が折りたたまれたディスクで、これをシンケンマルに装着して回転させることにより虎折神を本来の姿にさせることができる。しかし、本来の姿にさせるのはほとんどが巨大化したアヤカシとナナシ連中を倒すために使用することが多い。丈瑠は虎ディスクを受け取るなりディスクをしまう。丈瑠達はヘリに乗るとすでにフォワード達となのは、フェイト、はやて、シャマルが乗っていた。

「すまん。遅くなった。」

「いいよ別に、まだ時間はあるから。」

「せやけど千明さん、服着崩したらあかんて。」

「うるせえなあ。こつこついう服俺苦手なんだよなあ……。なんか首あたりが息苦しいし。」

「ち……千明さん！いくら年齢が近いからと言って部隊長にそんな口を言うのは……。」

「別にええよ。気にしてへんし。ほなヴァイスさん。へり出してなあ。」

「了解。安全運転でいきますよ。」

ヴァイスと言われたへりのパイロットは丈瑠達が座るとへりを動かしかしアグスタの方に向かっていく。アグスタに向かう途中、スバルはシャマルの足元にあった箱に気づく。

「あれ？シャマル先生、なんですかその箱？」

「そっぴや俺も気になってた。なんだその箱？」

「ああ、これは隊長達と丈瑠さんの仕事服なの。」

「……なんで俺の分まである？」

「あら？聞いてなかったんですか？」

「……ああ。」

丈瑠は今回の任務は内容しか聞いておらず、「自分の分がなんであるんだ？」と聞いたが結局答えてくれず、そのままアグスタに向かう形になってしまった。

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ ホテル内 12:21』

丈瑠達はアグスタに着くと全員がすぐに持ち場に着く。フォワード達と茉莉と千明はアグスタの外での警備に着き、丈瑠、なのは、フェイト、はやては中の警備に入るように聞かされたのだが、丈瑠は何か納得出来ない顔つきになっていた。

「・・・おい、はやて。なんで俺はタキシードを着ている？」

「えっ？丈瑠さん、今日アグスタでオークションの護衛と聞いておるんでしょ？今日、偉い人が来るから制服だと不安がられるから、ドレスやタキシード等を着て警備する方がええねん。」

「だからと言って、なぜ俺までここにいる……?」

今、文瑠はタキシードを着て中をはやてとともに警備をしている。なのはとフェイトとはやてもドレスを着ていて、今はなのはとフェイトのペア、文瑠とはやてとペアになっている。ちなみに文瑠がタキシードを着ている理由はシャマルに無理やり着せられたためである。

「じつじつことなら早めに言ってくれ……。」

「でも言ったら断るんでしょ?」

「……否定はしない。」

「せやからアグスタに到着するまで言わんかったんや。それに文瑠さんに聞きたいことがあるしな。」

「聞きたいこと?」

文瑠ははやてが自分に何を聞きたいんだと言つと耳を傾ける。

「あの・・・文瑠さんは茉莉さんと千明さんとは打ち解けておるのに、どうしてほかのみんなと打ち解けんの？」

「・・・・・・・・。」

文瑠ははやてにそう聞かれると黙ってしまった。文瑠は今まで茉莉と千明が来るまで誰とも話そうとはしなかった。そして茉莉と千明が来て文瑠はその二人とよく話をしているところをはやてが見て今まで疑問に思っていた。文瑠が打ち解けようとしなかった理由は、文瑠の“人見知り”もあるが、もし打ち解けて外道衆と戦う際に彼女達が駆けつけて文瑠とともに外道衆と倒そうとして、逆に彼女達が返り討ちにされて殺されてしまうと恐れていたからだ。そのため文瑠は同じシンケンジャーであり家臣でもある茉莉と千明以外は打ち解けようとはしなかった。当然その理由は口に出せないため、文瑠は黙るしかなかった。

場所を変えてアグスタの外。フォワード達と茉子と千明は警備をしている中、ティアナは内心で焦っていた。

「（この部隊は無敵を通り越して異常よ！部隊長と隊長達はSランクオーバー、副隊長でもニアSランク、そしてスバルは訓練校では首席で卒業しているし、エリオはあの年齢でBランク、キャロはレアスキル持ち……。そして次元漂流者の丈瑠さんと茉子さんと千明さん。同じレアスキルの持ち主でしかも魔力はないのに戦闘能力は丈瑠さんはシグナム副隊長と互角に渡り合うし、茉子さんと千明さんは苦戦はするもののヴィータ副隊長とシグナム副隊長との2対2の模擬戦では時間切れになるまで戦い合うなんておかしすぎる！）

茉子と千明が機動六課に来て二人とも民間協力者になるためのテストを受けていて、そしてその模擬戦の結果はヴィータ、シグナム側の勝利を目前に時間切れとなって引き分けという形になった。フォワード達はその模擬戦を見ていたため当然結果は知っていた。ティアナはクロスミラージュを握りしめる。

「（・・・今は深く考えない。今は兄が役立たずでないことを証明することだけに集中しないと・・・）」

そのあと約30分後、シャマルがガジェットの反応をキャッチし、ガジェットとの戦いが始まった。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

また場所を変えて三途の川。シタリによって復活したアヤカシ、
“オオツムジ”は人間界で暴れないせいかストレスが溜まっているためか、六門船の中で暴れていた。

「ああああ！くそ！シタリ！まだ人間界に行ってはだめなのか！」
「オオツムジ、気持ちはわかるが待ちんしゃい！まだスカリエッテ
イの許可が下りないんだよ。もうしばらくの辛抱だから我慢してく
れんか？」

「その言葉は何度も聞いた！俺は今すぐスカリエッティんところに行
行って今すぐ暴られるように交渉してくる！」

オオツムジは復活されてから数日が立ち、今すぐ暴れたい気持ちでいっぱいだった。しかしスカリエッティがそのことをなかなか許可を下さず、オオツムジはそのことで大きく苛立っていた。しかし今の状態のオオツムジの言う“交渉”はスカリエッティに対して“脅迫”しに行くようなものだ。そんなことをしたらもちろんスカリエッティに信用を無くすのは免れないし、それにアヤカシを復活できたのは技術を提供してくれたスカリエッティのおかげでもある。骨のシタリはそんなことはさせないようにオオツムジを意地でも止める。

「オオツムジ！あんたを復活させたのはスカリエッティのおかげでもあるんだよ！その恩を忘れたのか！」

「うるさい！復活できたのに、その理由が人間のおかげじゃあ俺は納得出来ねえんだよ！だから俺は大暴れできるように話をしに行くんだよ！」

「だから落ち着きんしゃい！その気持ちは本当にわかるんじゃないがこれが最後！辛抱するのはこれに最後にしてくれんか！」

「・・・ちっ！もしこれが嘘だったら俺は勝手に暴れさせてもらっからな！」

骨のシタリはなんとかオツムジを落ち着かせることに成功したが、シタリは落ち着かせるため辛抱するのはこれが最後と言ってしまったことに焦りを見せる。

「(やれやれ・・・復活させる時期を遅らせた方がよかつたかね・・・これじゃあ気軽にアヤカシを復活させることができやせんよ・・・)」

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 14:10』

丈瑠はガジェットとの戦いが始まったと聞くと自分も駆けつけようとしたがはやてに「数は今のところ少ないし、それに茉莉さんと千明さんがいるから大丈夫やろ。」と言われたため今はやてとともにホテル内を警備し続けている。今ヴェロツサ・アーコスと名乗る査察官と話している中シヤマルから通信が入る。

「『みなさん、聞こえますか？』」

「ん、なんだ、シヤマル？」

「『地下駐車場から未確認生命体の反応が少しだけ出ているの。誰か地下駐車場に行つて調べてきてくれないかしら？』」

シヤマルが言う未確認生命体はおそらく“ナナシ連中”のことだろう。文瑠はそのことを感じると自分が行くと志願する。

「俺が行こう。地下駐車場の場所は見取り図を貰っているからわかるし、それに場所も俺達がいるところの方が近い。」

「『お願いします。だけど、十分に気を付けてくださいね。』」

「というわけだ。はやて、行ってくる。」

「あ、うん。気を付けるんよ。」

文瑠は通信を切るとすぐに地下駐車場に向かうため走り出す。ヴ

エロツサははやての呆気ない反応に少し驚いた表情になる。

「未確認生物って確か今世間で騒いでいる“未確認^や生命体”のことだよな？確か丈瑠は民間協力者なんだよね？行かせてもいいのかい？」

「大丈夫よロツサ。丈瑠さんはああ見えて強いんよ。そやけどロツサ、丈瑠に用があるって言っとたけどなんや？」

「ああ。義姉さんが丈瑠の“レアスキル”について調べてきてくれと言ってきて、それを調べに来たんだ？」

「カリムが・・・？なんでや？」

「さあ？魔力を持ってないのにレアスキルを持っているから興味湧いたんだろっね。」

ヴェロツサが言うレアスキルは“モチカラ”のことを刺している。ヴェロツサはそのあと軽くはやてと話すとヴェロツサははやてと別れ、はやての姿が見えなくなるとヴェロツサは丈瑠について通信でカリムに報告する。

「義姉さん、彼は確かに魔力は持ってないけど“レアスキル”は確かに持っているよ。」

「『そう……。ありがとう。で、彼はどんな感じかしら？』」

「うーん……。なんというか無愛想だね。でもはやてからは信用されているよ。」

「『わかったわ。ヴェロツサ、その情報は今すぐに消してね。』」

「えっ？この情報は管理局本部に提出するんだと思っていたんだけど……。違うのかい？」

「『違うわ。この調査をお願いしたのは彼がはやて達に任せられるかどうか確かめたかったの。それにこの情報は本局に出さないでほしいってはやてに言われてるの。』」

「ふうん……。わかったよ。ちゃんと消しとくよ。」

ヴェロツサは通信を切るとカリムに言われた通りに文瑠の情報を消した。

「確かここだったよな・・・」

丈瑠はシャマルがキャッチした未確認生命体の情報を頼りに地下駐車場に到着し、シンケンレッドになって駐車場内を探索していた。そして少し奥に進むと彼の目にはトラックがある。しかしそのトラックは荷台が荒らされており、警備員が数名腹から血を流して倒れていた。そしてその周りにはナナシ連中の姿。そして人間サイズの虫の姿をした化け物がいた。その化け物にはケースを持っていた。

「貴様・・・“アヤカシ”か！」

シンケンレッドはその虫の化け物をアヤカシだと思い、シンケンマルを構える。しかしその化け物は戦う気配はなく、そのケースを持って素早い動きで駐車場の奥へと消えて行ってしまふ。

「あ・・・！待て！」

シンケンレッドは追おうとするが道をナナシ連中に阻まれる。ナナシ連中は通さないと言わんばかりに襲い掛かってくる。

「いつらをほおっておくわけにはいかないか・・・！」

シンケンレッドはナナシ連中をほおっておくとホテル内に侵入すると考えれば、ナナシ連中と戦い始める。

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 森 14:20』

シンケンレッドがナナシ連中と戦い始めたちょうどその時、フードをかぶった紫色の髪を生やした少女と同じようにフードをかぶった大男がいた。そして少女の目の前にケースを持っていた化け物が出て、そのケースを少女に渡す。

「ありがとう・・・ガリユール」。ゆっくり休んでね。」

少女は“ガリユール”と呼んだ化け物の下から魔法陣を出し、化け物は消えていく。ガリユールは消えると少女の目の前にモニターが現れる。モニターにはスカリエッツィの姿があった。

「『お疲れ様、“ルーテシア”ちゃん。目的のものは確保してくれ
たかい？』」

“ルーテシア”と言われた少女は頷き、持っているケースをスカリエッツィに見せると大男に渡す。スカリエッツィはケースを見ると笑みを顔に出す。

「『よくやってくれた。今すぐそこから離れてくれないか？君達がいるところの近くで“アヤカシ”の能力を見るための“テスト”を

したいからね。危ないから離れてほしいんだ。』

「いいけど……ドクターの“おもちゃ”が壊されているけどいいの？」

ルーテシアが言う“おもちゃ”はガジェットのことを刺しているだろう。スカリエッティはそのことを聞くなり首を縦に振る。

「ああ、いいとも。目的のものは確保できたし、管理局の人達にはテストの“試験管”をやらせてもらいたいんだ。だから早く離れてくれないか？」

「うん……。わかった……。」

ルーテシアは通信を切ると大男とともに転移魔法を使い、今いる場所から離れていく。

ちょうどその頃、機動六課の人達とシンケンピンクとシンケング

リーンはガジェットの破壊を完了していた。

「あー……。もうこれで全部か？」

「みたいだな……。」

千明はシンケンマルをガジェットから引き抜くとシンケンマルを肩に置く、ヴィータが上空からあたりを見回しているとシャマルから通信が入ってくる。

「『こんどはヴィータちゃんがいるところの逆方からガジェット反応！今ザフィーラとシグナムが向かっているけど、みんなもすぐに向かって！』」

「ああ、わかった！おいみんな！行くぞ！」

通信を切るとヴィータはフォワード達とシンケンピンクとシンケングリーンに向けて言うとすぐにガジェットの方に向かう。だが彼

女達の後ろから破壊されたガジェットの“スキマ”からナナシ連中が現れてくる。

『っ！！』

「ここは私と千明に任せてみんなはガジェットのところに向かって
」！

「ああ、すまねえ！」

ナナシ連中が現れるとシンケンピンクとシンケングリーンがナナシ連中を引き止め、ヴィータとフォワード達はガジェットのもとに向かう。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

また場所を変えて三途の川。シタリは六門船の上でスカリエツイと“スキマ”越しから話している。その様子を後ろからオオツムジが見ている。

「『骨のシタリ。そろそろ頃合いだ。そろそろアヤカシを出してくれないか？』」

「ようやくかい……。じゃ適当な場所に送り込んでよ。」

シタリはスカリエッティと話が終わればオオツムジの方に顔を向ける。

「オオツムジ。出番だよ。思う存分暴れてきなさい。」

「ああ！今までの鬱憤を晴らしに行ってくるぜ！」

オオツムジは意気込むと六門船から飛び降りて三途の川に入っていく。

「シンケンジャーの奴らとうまく引き離れたようだねえ……。ど

んな結果になるのか楽しみだよ。」

シタリはオオツムジがどのように暴れるか見るため“スキマ”からアグスタを見る。

ちょうどアグスタではヴィータ、フワード達がアグスタに到着する。ガジェットに向かうためこちらの方が近いからだ。ヴィータはさすがに上空を飛ぶとオークション参加者に不安がられると思ったからか、低空飛行でガジェットに向かっていた。その時、彼女達の前に車の“スキマ”からナナシ連中が現れる。

「なっ！なんでこいつらがこんなところに！」

「ヴィ・・・ヴィータ副隊長！囲まれました！」

ヴィータは突然現れたナナシ連中に驚きを隠せなかった。しかし、彼女達はナナシ連中が“スキマ”から現れたことには気づいてもない。そしていつの間にかスバル達は囲まれていた。ナナシ連中の数は20体ぐらいはいる。

「くそ……。待つてる！今すぐ助けてやる！」

ヴィータはスバル達を助けるためスバル達の方へ飛んでいく。

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 地下駐車場 14:51』

駐車場でナナシ連中と戦っていたシンケンレッドは、ようやくナナシ連中の全滅を果たしていた。シンケンレッドはシンケンマルを肩に担ぐとシャマルから通信が入る。

「『丈瑠さん！今アグスタの外でスバルちゃん達が未確認生命体に襲われている！ヴィータちゃんが今助けに行ってるけど今すぐ助けに行つて！あと近くに新しい反応……。早くして！』」

「何！わかった！今すぐ向かう！くそ……。はめられたか！」

シンケンジャーがさっきまで戦っていたナナシ連中は囷で、フォード達とシンケンジャーを離れさせられたことに気づくとシンケンレッドは通信を切り、すぐにスバル達のもとに向かおうとすると彼の目の前に謎のオーロラが現れる。

「くそ……！こんな時に……！」

シンケンレッドは謎のオーロラに警戒をし、シンケンマルを構える。しかし、そのオーロラからはシンケンレッドがよく知る黒ずくめの人達と初老の老人、そして紺色の服を着た青年が現れた。オーロラから現れた。青年達はシンケンレッドに気づくと全員驚いた様子を見せる。

「と……殿オ！」

「と……殿オオオオオ！！！！会いたかったですううう
う！！！！」

オーロラから現れたのはシンケンレッドこと志葉 丈瑠がよく知る人達だ。初老の老人は丈瑠を長く育ててくれた日下部彦馬、そして志葉家を支えてくれる黒子達、そしてシンケンブルーこと池波流ノ介だ。流ノ介はシンケンレッドに気づくと盛大に喜びながらシンケンレッドに抱きついてくる。シンケンレッドはそんな流ノ介を避けることが出来ず抱きつかれてしまう。

「お・・・落ち着け流ノ介！外道衆が現れたぞ！」

「外道衆！殿をさらった原因の！」

「それは俺にもわからん！とにかく行くぞ！」

流ノ介はシンケンレッドに突然丈瑠がいなくなった理由を外道衆だと思って言ったが、シンケンレッドはすぐにわからないと言い、駐車場から出ようとするとシヨドウフォンから電話が入る。シンケンレッドは電話に出ると電話の相手はシンケングリーンこと千明からだ。

「『丈瑠！さっき変なカーテンみたいなもんからことが出てきたぞ！』」

「本当か千明！俺の方は流ノ介達が出てきたぞ！」

「『ホントかよ！』」

流ノ介達が現れた後、シンケングリーン達のところにも謎のオーロラが現れ、そのオーロラからことはが現れたのだ。千明ことシンケングリーンはそのことに関して報告していた。

「とにかく、今は外道衆が現れた！今すぐ合流するぞ！」

「『おう！わかったぜ！』」

「ああ！殿、これを！」

シンケンレッドは電話を切りショドウフォンをしまつと流ノ介の方を向く。流ノ介の手にはシンケンジャーのパワーアップアイテム“インロウマル”があった。

「インロウマルか……。これは本当に必要になったら使うとするか。行くぞ！お前達！」

シンケンレッドが叫ぶと走りだし、流ノ介達はシンケンレッドについていくように地下駐車場を後にする。

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 外 15:05』

シンケンレッドが流ノ介達と合流したその頃、ヴィータとスバル達はナナシ連中と戦っていた。ヴィータはグラーファイゼンをナナシ連中に的確にぶつけて戦っていて、スバルは格闘技“シューティングアーツ”を駆使して戦っている。エリオはキャロを守りながらナナシ連中の攻撃に耐えている。そんな中ティアナはクロスミラージユを構えていた。

「（こんな奴らを一気に片付けるためにこれしかない……！）」

ティアナはカートリッジを次々とロードをし、彼女の周りに無数の魔力で作られたオレンジ色の球が浮かんでいる。通信でシャリオが危険と警告してくるが彼女の耳にその言葉が入ってこない。

「（証明してみせる・・・！ランスターの弾丸はどんなものも貫けて見せることを！）」

「クロスファイアー・・・シュート！うおおおおおおおおお！！！！！！」

ティアナは魔力で作られた球をナナシ連中に向けて次々と発射する。それにあたったナナシ連中は次々と倒れていき数は減っていくが、その中の一つがウイングロードを走るスバルの方へ飛んでいく。

「っ！スバル避けて！」

「えっ？」

スバルはティアナの方を見る。彼女の目にはティアナが作った魔力の球が自分の方に飛んでいくことに気づく。ティアナはナナシ連中を倒す際殺傷設定が許可されているのを知っているが、殺傷設定にするのに抵抗があったためティアナは非殺傷にして撃っている。魔力球がスバルに直撃すれば運良ければ怪我はなくダメージだけで済むが、当たり所が悪ければ重傷では済まなくなってしまう可能性もある。スバルは身構えるが、ヴィータが助けに入り、ティアナが撃った魔力球はヴィータのグラーファイゼンではじき飛ばされ、その魔力球はエリオを襲っていたナナシに直撃し、当たり所が良かったのか、ナナシは倒れる気を失う。しかし、ティアナは自分がスバルに向けて撃ってしまった事実を受け入れられなかったのか、震えていた。

「ティアナ！お前何やってるんだ！」

「す……すみません……！」

「ヴィ、ヴィータ副隊長！今のは作戦の一つで……」

「バーカ！今のは直撃コースだ！」

ティアナのミスに叱るヴィータにスバルはティアナをかばおうとするがすぐにヴィータに言い返される。そしてティアナの後ろから聞きなれない声がする。

「ほう……仲間割れか？」

「え……誰……！」

ティアナが後ろを振り向くとそこにはアヤカシ“オオツムジ”の姿があった。そしてオオツムジの後ろには200体はいるナナシ連中の姿があった。ナナシ連中は奇声をあげてスバル達に近づいてくる。

「お前……何者だ……！」

「ふん。今から殺す奴に名乗る必要はない。」

「な……なんだと！」

ヴィータはオオツムジに何者だと聞くが、名乗らないどころか自分達を殺そうとするオオツムジの態度に驚きを隠せなかった。ヴィ

「イタはスバル達を守るように一緒に下がるが、ティアナだけは動いていなかった。」

「おいティアナ！早くこっちに来い！」

ティアナはヴィータの声が聞こえていないのか、それでも動かない。それは、ティアナは初めて見るアヤカシに恐怖心を抱き、怯えていて、足が動かないでいた。理由として、先ほどのティアナが撃った魔力球がスバルを危うく当たりそうになったこととアヤカシを初めて見た時に生まれた恐怖心が重なってしまったのか、そこから動けないでいた。そんなティアナを見過ごす訳はなく、オオツムジはティアナにゆっくりと近づき持つてる無数の鎌の刃がついたような剣を上げる。

「まずはお前からだ！」

「あ……ああ……！」

「ティアナ！」

「ティアッ！」

「「ティアナさん！」」

ティアナは恐怖心で心がいつぱいになってしまったのか、ただ呆然と立ち尽くしていた。スバル達とヴィータは叫び、ヴィータはティアナを助けようとオオツムジの方へ飛ぶがそれよりも早くオオツムジの剣がティアナに振り降ろされる。ヴィータは「（くそ・・・。また守りきれねえのかよ！）」と思いながらも必至にティアナのもとへ飛んでいく、ティアナは必死に身構え、剣の刃がティアナに当たりそうになったとき聞きなれない音がする。

ドオン！

「あん？」

「・・・え？」

外道衆とスバル達は聞きなれない音、太鼓の音が鳴る方を見る。するとそこには軍旗を持った黒子の姿と太鼓を鳴らした黒子の姿、そして幕も持つ黒子の姿があつた。黒子が持っている軍旗には志葉家の家紋がプリントされている。その間、ティアナはヴィータに

引つ張られるように動きを止めたオオツムジから逃げさせられていく。そしてスバル達はガジェット達を全滅させたのか、シグナム達と合流し、さらにアグスタにいた。客の避難を完了させたなのは達と合流し、黒子達を見た。

「な・・・なんですかあれ？」

「さあ・・・それにあの人達の格好・・・どこかで見たことあるような・・・。」

ドオン・・・ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン・・・

なのはは黒子の姿を見るなりあれは何なのか思い出そうとする。しかしその間にも太鼓の音がだんだんと早くなっていく。そして黒子が幕を撤去していくとそこからは志葉家の家紋がプリントされた陣幕が現れ、その前にはさっきまでシンケンジャーに変身していた丈瑠と茉莉と千明、そして流ノ介とことのはの姿があった。シンケンジャーになってた三人は変身を解いており、陣幕の前に立つ5人は全員袴を着ている。茉莉とことのはは黄色の袴をはいていて、丈瑠と千明と流ノ介は紺色の袴をはいている。立っている順番はなのは達から見て右から茉莉、千明、丈瑠、流ノ介、ことのはの順になっている。丈瑠は腕を組んでいてなのは達ではなく外道衆を見ていた。そして、丈瑠の口が開く。

「そこまでだ、外道衆！」

第七幕 アグスタの悲劇（後書き）

作「今回はシンケンゴールドこと梅盛源太について紹介です」

シンケンゴールド 梅盛源太

シンケンジャーで途中参戦した「光」の電子モチカラを操る侍。本業は「ゴールド寿司」という屋台をしている寿司職人だが、寿司の腕はよくも悪くも普通だが、カレーの腕はなぜか抜群に美味しく、テレビ番組に取り上げられるほどでしかも専門店の話を持ちかけられるほど。もともとは志葉家の近くで営む寿司屋の息子で丈瑠とは幼馴染み。小さいころ丈瑠と別れる際に丈瑠が源太に秘伝ディスク「烏賊ディスク」を貰ったディスクから「モチカラ」を独自で研究、解析し、電子メールを利用した「電子モチカラ」を生み出し、シンケンゴールドに変身するためのアイテム「スチエンジャー」をはじめとする武装を独自で開発した天才。折神を「モチカラのプログラム」と解釈して活躍するなど、モチカラでは他の侍とは別の方向で活躍を見せ、シンケンジャーのパワーアップアイテム「インロウマル」の完成に貢献するなど活躍している。彦馬曰く「彼のようにモチカラを特殊な方向で扱う侍もいた」とのこと。性格はかなりのお調子者で目立ちたがり屋で流ノ介とともにシンケンジャーの良きムードメーカー。しかし時に勘違いを起こしたりする。

剣技は他の侍とは違い、逆手による居合切りという独自で修業した我流で戦い、武器も「サカナマル」と言った秋刀魚の形に似た小刀を使用して戦い、ダイゴヨウが登場するとダイゴヨウを積極的に使用して戦っている。（ちなみにサカナマルには鞘があり、その鞘は防御にも使え、武器にもなる。）

本家が侍ではないため、家臣とは違い別行動を取ることが多い。（そのせいかシンケンジャーの中でよく最初に外道衆に出会うこと

が多い。しかし、自分が侍ではないことに後悔したこともあるが流ノ介に「源太のように人情溢れる侍も必要だ」と励まされた。

シンケンゴールドになっていなくても、「おてもと」割りばしとそれに入っている袋」の形をした手裏剣を使うなど個人の能力も高い。しかし、調子に乗りやすいため返り討ちに合うこともしばしばある。

作「今回の話はキャラ的にも自信がない……。あと源太もちゃんとミッドチルダに行かせますが合流するのは後になります。

それと週刊アクセス数が203 から2303と十倍になっていた……。一気にプレッシャーがかかってきた……。」

第八幕 侍戦隊（前書き）

作「前は頑張りすぎたかな……。長すぎた気がする……。

それとなのは×戦隊シリーズが増えることを望みます。（多重じゃなく普通になのは×戦隊シリーズの）

今回はようやくシンケンジャー集結！ゴールドはいませんが……。

┌

第八幕 侍戦隊

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 外 15:14』

「そこまでだ。外道衆！」

ここはミッドチルダのホテル・アグスタ。ここには200体ほどのナナシ連中をそれを束ねるアヤカシ、“オオツムジ”の外道衆。そして八神はやてを部隊長とする時空管理局の古代遺物管理部“機動六課”の“高町なのは”を代表する主力メンバー。そして、そんな彼女達の視線の先には志葉 文瑠、池波 流ノ介、白石 茉莉、谷 千明、花織 ことはの5人と後ろの陣幕を張る黒子達。数多い外道衆の前に彼らは袴姿で立っていた。

「文瑠さんに茉莉さんに千明さんに・・・あと・・・誰？」

なのはは陣幕の前に立つ文瑠達を見て呟く。なのは達は初めて見る流ノ介とことはを見て誰なのかと想像していたが、文瑠と並んで立っていたため、文瑠の仲間なんだろうとみんなは認識していた。長い沈黙の中、アヤカシ“オオツムジ”が陣幕にプリントされた家紋

に気づき、驚きを隠せずにいた。

「その家紋……！貴様ら……なぜこの“世界”に！」

「それはこっちのセリフだ。行くぞ。」

丈瑠はオオツムジに“携帯モード”のシヨドウフォンを見せつけて返し、シヨドウフォンを縦に折り“筆モード”にして構える。

「シヨドウフォン！」

丈瑠が叫ぶと同時に流ノ介達は丈瑠と同じシヨドウフォンを取り出し、“筆モード”にして丈瑠と同じように構える。

「「「「筆奏上！はっ！」」」」

丈瑠達が叫ぶと全員宙に文字を書き始める。丈瑠は赤い「火」を、流ノ介は青い「水」を、茉莉はピンク色の「天」、千明は緑色の「木」、ことは黄色の「土」をそれぞれ書き終える。そしてそれぞれ宙に書いた文字を叫ぶとともに反転させ、シヨドウフォンのスイツチを押す。するとそれぞれが出した文字は丈瑠達を包み込む。丈瑠は赤い着物と思わせるスーツ、赤いスーツに白い手袋が装着され、そして「火」と大きく書かれたようなマスクが装着され、ベルトに秘伝ディスクが装着されていないシンケンマルが現れ、丈瑠はシンケンジャーのシンケンレッドへと変わる。

流ノ介、茉莉、千明、ことは同じようにスーツとブーツ、手袋が装着され、流ノ介は「水」、茉莉は「天」、千明は「木」、ことは「土」と書かれたようなマスクが装着され、それぞれのベルトにシンケンマルが現れて4人はシンケンジャーへと変わる。この4人の違いと言えば流ノ介は「青」、茉莉は「ピンク」、千明は「緑」、ことは「黄色」のスーツとブーツがそれぞれ装着されている。ちなみに4人とも白い手袋は変わらない。

「嘘……全員ほとんど同じバリアジャケット……。っていうよりこれってまるで……。」

シンケンジャーに姿に変えた丈瑠達になのは達は驚きを隠せないでいた。なのは何か言いかける前にシンケンレッドはベルトから共通ディスクを取り出すとそれをシンケンマルに装着し、シンケンマルを外道衆に両手で突きつけるように抜刀する。

「シンケンレッド！志葉・・・丈瑠！」

シンケンレッドは自分を名乗りながらシンケンマルを下ろし、シンケンマルを肩に担ぐ。次にシンケンブルーが共通ディスクをシンケンマルに装着し、横に抜刀する。

「同じくブルー！池波 流ノ介！」

シンケンブルーは名乗りながらシンケンマルを縦に斬るように振り、シンケンマルを右手で持ち左手を使い歌舞伎のようにポーズを取る。そして次にシンケンピンクが共通ディスクをシンケンマルに装着して斜め上に抜刀する。

「同じくピンク！白石 茉莉！」

シンケンピンクは名乗りながらシンケンマルを下に下ろし、そして半月を描くように持ち上げるとシンケンマルを扇を構えるように持つ。さらにシンケングリーンが共通ディスクをシンケンマルに装着し、抜刀するなり振り回しながら後ろに回す。

「同じくグリーン！谷 千明！」

シンケングリーンは名乗りながらシンケンマルを前に戻すとシンケンマルの刃を峰側から、根本から先端まで撫でる。最後にシンケナイエローが共通ディスクをシンケンマルに装着し、片手でシンケンマルを持ち敵に突きつけるように抜刀する。

「同じくイエロー！花織 ことは！」

シンケンイエローは名乗りながらシンケンマルを両手に持って下に構え、そしてシンケンマルを横笛のように構える。そしてシンケンレッドがシンケンマルを横に持つと他のシンケンジャーはシンケンマルを左手に持ち後ろに回すと一斉にしゃがむ。

「天下御免の侍戦隊・・・！」

シンケンレッドはシンケンマルの峰を撫でながら言い、言い終わるとしゃがんでたシンケンジャーは両手でシンケンマルを持つと上に構え、シンケンレッドも同じように構える。そしてシンケンマルを一斉に振り落す。

「「「シンケンジャー！参る！」「「「

シンケンジャーはシンケンマルを振り落としながら叫び、全員顔を上げてそれぞれがポーズを取り最後の言葉を言う。その様子を見ていたなのは達は全員哑然としていた。それもそのはず、今なのは達がいるのは“ホテル・アグスタ”という名の“戦場”。なのに彼らは敵の前で変身してしかも名乗りながらポーズを取っていたからだ。そんな中最初に口を開いたのはなのはだ。

「侍……戦隊……。」

「シン……ケンジャー……?」

「リ……リインが思っていたことは……本当だったです……。」

なのは、はやて、リインの順番で言う。ちなみにミッドチルダには特撮というものが全くと言ってもいいほどない。しかし、地球生まれのなのは、はやてと地球で何年か育ったフェイトとヴェルケンリッター達は戦隊物は少なからず知っていたが、その知識は「戦隊シリーズ」という名前と少し内容は知っている程度」しかなかった。そしてシンケンブルーは前に出て手をシンケンレッドに刺しながら叫び出す。

「外道衆共ツ！こちらにいる方は、三百年もの昔より、貴様ら外道衆を葬ってきた侍の末裔、志葉家十九代目当主である、シンケンレッド、志葉 丈瑠様にあらせられるぞ！さあ、おとなしく我らの刀の錆に」

「流ノ介。」

「はっ！」

「長い。それにそれはやめろ。かえって怒らせるぞ。」

シンケンブルーがシンケンレッドについて教えていた最中にシンケンレッドはそれを止めさせる。シンケンレッドの言つとおり、ナシ連中は起こっているかのように声を上げている。

「おい流ノ介！何怒らせてんだよ！この馬鹿！」

「あ……いや……効くかと思ってやったんだが……。」

「少しは学習しなさいよ……。前にもやったけど意味なかったじゃん。」

「(前にもやったことあるんだ……。)」

シンケンジャーの会話にさりげなく心の中でツッコミを入れるのは。なのはが思っていることは全員同じように思っていた。しかし、アヤカシ“オオツムジ”は彼女達を無視してシンケンジャー達に持つてる剣を突きつける。

「まあいい……。 “世界”が変わろうともシンケンジャーに倒された屈辱、今晴らしてやる！復活した俺を前と同じように行くと思うな！」

オオツムジは剣を突きつけながらシンケンジャー達に強く叫ぶ。
だが……。

「まあいいけど、誰だっけお前？」

「なっ……何イ！」

「確か・・・おお・・・おお・・・。」

「オオウナジ！」

「いや、確かオオツナジだったような・・・。」

「“オオツムジ”だ！貴様ら・・・！舐めやがってー！！！」

「まあそんなことは“どうでも”いい。俺達は外道衆を倒すだけだ。行くぞ。」

「貴様ら・・・！俺をコケにしたことを後悔させてやる！かかれええええええええええええ！！！！！！」

怒らせてしまったオオツムジは200体はいるナナシ連中にシンケンジャー達に突撃を仕掛けるように叫ぶ。するとナナシ連中は一斉になのは達を無視してシンケンジャー達に向けて走り出す。シンケンジャーもそれに応えるかのようにナナシ連中に向けて走り出す。その様子は彼女達から見れば無謀とも思える行動だった。

「ちょっと！あんな多い未確認生命体に対して無謀だよ！」

「仕方ない、私達も志葉に加勢するぞ！主はやては下がってきてください！」

「お前らは危ないからどこかに隠れてろ！」

ヴィータはフォワード達に対して言えばなのは達はシンケンジャ
ー達の方へ行くがそこへ黒子達が両手を広げてなのは達をここから
通さないと言ってるように道を遮る。

「あの、どいてください!」

「邪魔するな!どけ!」

なのは達は黒子達に退くように要求するが、黒子達は首を横に大
きく振る。まるで「ここから先は危険だから行っては駄目だ。」と
言ってるようだった。

「もしかして・・・私達を気遣っているの?」

「その気遣いは感謝するが・・・。志葉達をほおっておくわけには
いかない。行かせてくれ。」

「デイバイン・・・バスターー!!」

なのはのデバイス“レイジングハート・エクセリオン”から放たれる桜色の砲撃魔法が矢を放っていたナナシ連中を一掃する。デイバインバスターを落ち終えたなのははシンケンレッドの元に行き、フェイト、シグナム、ヴィータ、そしてシンケンジャー達もシンケンレッドの元に行く。ナナシ連中の数は減ったものの、数はまだ150体ほどいた。

「誰かさんのせいでナナシの奴ら、張り切ってたなあ。」

「は・・・反省はしている・・・。」

「でもこれじゃあキリがないね・・・。」

「文瑠さん。なんだかよくわからないけど、私達も加勢し」

「お前達は下がっている。」

「へっ?」

なのははシンケンレッドに自分達も加勢すると言い切るまえにシンケンレッドに止められる。シンケンレッドはナナシ連中を見回す。

「一気に片付ける！烈火大斬刀！」

シンケンレッドはシンケンマルに装着された共通ディスクを回転させ、シンケンマルを烈火大斬刀へと変える。そしてシンケンレッドはベルトから獅子ディスクを取り出すとそれを烈火大斬刀に装着させる。シンケンレッドは烈火大斬刀を肩に担ぐように持つとそのままナナシ連中の方へ向かっていく。

「え、ちょっと！」

なのははナナシ連中へと走っていくシンケンレッドを止めようとするがシンケンレッドはそれを無視し、ナナシ連中の群れに入っ

いく。

シンケンレッドはナナシ連中の群れに入れば烈火大斬刀を巧みに振り回し、ナナシ連中を吹き飛ばして倒していく。無謀とも思える動きだが、シンケンレッドはナナシ連中の攻撃は受けずに次々と倒していく。そんなシンケンレッドの戦い方を見ていたなのは達は呆然としており、シグナムが先に口を開く。

「つ……強い……。」

「あの未確認生命体の大勢にもろともせず戦う姿勢……。私達も負けてはならんな。」

「私達も殿に続くぞ！」

「おうっ！」

「はいっ！」

「うんっ！」

ナナシ連中に果敢に戦うシンケンレッドを見て、シンケンジャー達も立ち上がってシンケンレッドと同じようにナナシ連中に向けて走り出す。シンケンブルーはナナシ連中と戦いながら隙を見つけ

ばシンケンマルに装着した共通ディスクを回転させる。

「ウォーターアロー！はあああああつー！！」

シンケンブルーはシンケンマルに装着された共通ディスク回転させると中央に「水」の形をした弓に変えるとそれに青い技ディスク“龍ディスク”を装着すればウォーターアローの弦を引く。するとウォーターアローの中心に青い光が集まり、シンケンブルーが弦を話すとウォーターアローからモチカラで形成された無数の矢が放たれ、その矢がナナシ連中の群れに当たると爆発してナナシ連中を一掃する。

「へブンファン！」

シンケンピンクもシンケンブルーと同じようにディスクを回転させると扇の持ち手の部分に大きく「天」と書かれた扇へと変える。そしてそれに龍ディスクを装着させるとそれを周りにいるナナシ連中に振るうするとピンク色の風が現れ、その風が刃となりナナシ連

中に当たると火花を散らし、ナナシ連中はゴナゴナになって消えていく。

「ランドスライサー！」

シンケンイエローも同じように共通ディスクを回転させ、中心に「土」と書かれたような円を中心とした大型手裏剣に変え、ナナシ連中の攻撃を防ぎながらランドスライサーをナナシ連中に向けて投げつける。するとランドスライサーは土煙を纏い、土煙を纏ったランドスライサーに直撃したナナシ連中は爆発して一掃する。ランドスライサーはブーメランのようにシンケンイエローに戻ってくるとそれをキャッチする。

「へへっ、俺も負けてられねえぜ！！ウツドスピア！」

シンケングリーンも同じように共通ディスクを回転させ、先端に「木」という形の長槍へと変える。そして熊ディスクを装着すると槍の先端から刃が現れる。シンケングリーンはその槍を豪快に振り

回してナナシ連中を一掃させる。

「デイバイン・・・バスター！」

「プラズマスマツシャー！」

なのはとフェイトが放つ桜色と金色の魔力の砲撃が放たれ、砲撃の射線にいたナナシ連中は爆発を起こし、吹き飛ばされたが、消えず意識を失い、転がっていく。

168

【シユランゲフォーム】

「はああああっ！」

連結刃にしたレヴァンティンをシグナムは巧みに扱い、ナナシ連中の群れを大きく薙ぎ払っていく。薙ぎ払われたナナシ連中は大きく吹き飛び、地面へと無造作に落ちていく。

【ギガントフォーム】

「轟天爆碎！！ギガント！シュラアーク！！」

ヴィータは空へと浮かび、ヴィータのグラーファイゼンの一部が動き薬莢が二つ出るとハンマー部分が巨大な角柱状になり、ギガントフォームへと変える。ヴィータはそれをさらに数十倍に大きくさせる。と掛け声とともにナナシ連中の群れへと叩きつける。ナナシ連中はヴィータのハンマーを受けた者はそのまま消えてなくなり、ハンマーの着弾部分は大きくひび割れ、衝撃を受けたナナシ連中は吹き飛ばすように無造作に転がっていく。

「はあっ！」

「ぬっ！」

シンケンレッドはナナシ連中を一掃するとオオツムジに向けて烈火大斬刀を振るう。オオツムジはそれを剣で受け止める。しかし、

シンケンレッドは受け止められるとすぐにオオツムジに蹴りを入れて離れさす。

「ぬおっ！」

蹴られたオオツムジは大きくよろけ、シンケンレッドから離れていく。そしてシンケンレッドにシンケンジャー達が集まる。

「一気に決めるぞ。」

「はっ！」

「うん！」

「おっ！」

「はい！」

シンケンジャー達はそれぞれの武器をシンケンマルに戻し、シンケンマルにそれぞれ技ディスクを装着し、回転させる。するとシンケンレッドのシンケンマルは炎を纏い、シンケンブルーのは水流を纏い、シンケンピンクはピンク色の風を纏い、シンケングリーンのは木の葉を纏い、シンケンイエローのは土煙を纏わせる。

「シンケンマル！螺旋の太刀！」

シンケンジャー達が一齐にオオツムジに向けてレッド、ブルー、ピンク、グリーン、イエローの順にシンケンマルを振るう。シンケンレッドが斬れば火炎はオオツムジを包ませ、シンケンブルーが斬れば水流を包まされる。シンケンピンクが斬ればピンクの光が現れ、シンケングリーンが斬れば木の葉が斬られたところから舞い散り、イエローが斬れば土が砕ける演出が現れる。

「く……くそがああああああああ……」
5人の必殺剣を受けたオオツムジは耐えきれずは出来ず、そのまま爆発してしまった。シンケンジャー達は爆発を背景にして一齐にシンケンマルを振る。

やられたオオツムジは“1の目”がなくなり、強制的に発動して巨大化になる“2の目”を使い復活をしまったのだ。

第八幕 侍戦隊（後書き）

作「今回はダイゴヨウについての説明です」

ダイゴヨウ

シンケンジャー本編で第二十七幕の一件により寿司恐怖症になってしまった梅盛源太が自分の代わりに戦うことを目的として源太の屋台「ゴールド寿司」の提灯に「侍」の電子モチカラを込めて作り上げた提灯型サポートメカであり、侍巨人（折神と同じ扱い）でもある。提灯と十手と「岡っ引き」をイメージにして作られ、変身機能はないが分割機能を持ち武器として使うことが出来る。烏賊折神の発展版だからか、飛行能力も持つ。さらに中に秘伝ディスクを入られるようになっていた。もともと多くの言葉をしゃべるようにプログラミングされてるため、折神と違いよくしゃべる。「大」とモチカラを込めれば巨大化し、その時十手とともに合体して侍巨人へとなる。動きはシンケンジャーの巨大ロボ「シンケンオー」よりも軽やかな動きを見せ、提灯のことを生かして蛇腹部分をへこませて攻撃を避けることも可能。必殺技は秘伝ディスクを乱射する「秘伝ディスク乱れ撃ち」また龍、亀、熊、猿の折神と合体することが出来、「シンケンダイゴヨウ」になることもできる。（その場合獅子折神は余ってしまうが。）その時の必殺技は十手を投げつける「十手一直線」。

サポートメカなのだが、源太を「親分」と呼び、源太の寿司を馬鹿にされると怒り出す。丈瑠をことはと同じように「殿様」と呼び、さらに名乗りにも参加して命を丈瑠に預ける傾斜もあるためシンケンジャーの一員と見られるところもある。

作「今回はようやくシンケンオー戦！ディスクに収納させた兜、舵木、虎折神を出来るだけ参戦出来るように努力・・・できたらいいな・・・。」

話の構成が難しい・・・また更新速度下がるかもしれません・・・」

第九幕 侍巨人（前書き）

作「前回の話はシンケンジャー本編第一幕とデイケイドのシンケンジャーの世界のあれを再現しようとしたけど結果があれだよ！更新スピード上げようとしたらなぜこうしたんだよ俺・・・。前回の話と今回の話の文溜の感じが変わってるかもしれないのでお願いします。これからは自分のペースで書くので更新が不定期になるかもしれないのでよろしくお願いします。

今回はようやくシンケンオー登場！」

追記：3/5に第八幕を修正したので前書きと前話の関係が違ってしまうが、小説のことで反省していることに関しては同じです。

第九幕 侍巨人

『ミッドチルダ ホテル・アグスタ 外 15:42』

今、なのは達とシンケンジャー達の目の前に巨大化したアヤカシ“オオツムジ”が立っていた。オオツムジは先ほどのシンケンジャーの“シンケンマル 螺旋の太刀”で倒したはず。しかし、倒したのはアヤカシが持つ“1の目”だけで、巨大化する“2の目”はまだ倒されていなかったため、オオツムジは“2の目”を発動し、50mもある巨人に変身を成し遂げてしまったのだ。

「で・・・デカイ・・・！」

「あの生命体（オオツムジ）に、あのような力があるとは・・・。」

「でも・・・やってみるしかない！」

なのははレイジングハートを巨大化したオオツムジに向けるように構え、なのはを中心に桜色の魔法陣が発生し、レイジングハートの一部が動き、葉莢が2つ飛ぶ。

「ディバインバスター・エクステンション！」

なのはは高度に圧縮した魔力をオオツムジに向けて砲撃する。威力は衰えることなくオオツムジに直撃する。直撃すると爆発が起き、オオツムジは少しよろけるが当たったところが少し焦げる程度でまだ生きていた。

「嘘……！」

「いい攻撃だな……！だが、その程度で倒せると思うなあ！」

オオツムジはなのはの攻撃に耐え、オオツムジはなのは達がいるところを足で踏みだす。なのは達はぎりぎり回避しながらも逃げられなかった。

「キヤアッ！」

「どうすんだよ！あいつを倒すには救援が必要だぞ！」

「うちのリミッター解除しても倒せるかどうかわからんよ・・・」

隊長陣には総合ランクSオーバーを持っている。機動六課に配属するため彼女達はランクを抑えるリミッターをしている。リミッターを外せば実力を発揮できるが、外したとしても“2の目”を発動したオオツムジに勝てるかどうかわからないのも事実。しかし、シンケンジャー達は落ち着いた様子でオオツムジを見ていた。

「予想通り“2の目”を使ってきたか。」

「“2の目”？なんだそれは？」

「そのことは後で話す。それに、巨大化した奴の対処方法もちゃんとある。」

シンケンレッドはエンブレムモードになっている自分の持っている折神“獅子折神”を取り出すとシンケンジャー達は全員レッドと

同じような折神を取り出す。シンケンブルーは六角形の形をして青で「水」と書かれたようなエンブレム、シンケンピンクは円型のピンクで「天」と書かれたようなエンブレム、シンケングリーンは四角形の緑で「木」と書かれたようなエンブレム、シンケンイエローは三角形の黄色で「土」と書かれたようなエンブレムを取り出す。

「確か・・・それ文瑠さんの折神・・・？」

「これを大きくして巨大化した奴と戦う。」

「「「ええっ！」「」」

それを聞くとなのは達は驚く。シンケンジャー達が持っている折神のサイズは手のひらサイズ。それを巨大化させて戦うとなれば、巨大化した時のサイズはフリードの真の姿が10mということにしてそれを参考にして、巨大化したサイズは大体2mぐらいだと全員は予想した。

「無茶だよ！巨大化した生命体に折神達だけで戦うのは！」

「心配するな。見ていればわかる。行くぞ、お前達。」

「はっ！」

「うん！」

「おう！」

「はい！」

シンケンジャー達はエンブレムとなっている折神と筆モードになったシヨドウフォンを取り出すとそれぞれ構える。

「獅子折神！」

「龍折神！」

「亀折神！」

「熊折神！」

「猿折神！」

「~~~~~折神大変化！」~~~~~

シンケンジャー達は一齐にエンブレムを置き、エンブレムとなった折神にそれぞれが「大」とシヨドウフォンで宙に書き、「大」のモチカラを折神に込める。すると折神は見る見ると巨大化し、シンケンジャー達は折神の中に入り、折神達はそれぞれ“獅子”“龍”“亀”“熊”“猿”とアニマルモードになる。シンケンジャー達はそれぞれ折神の中に入るとシンケンマルに折神を操るために使うデバイス“シールドディスク”を装着し、置かれた台座に差し込み、折神達を操り出す。巨大化した折神の大きさはそれぞれ大きさは違うが、高さは15mを超えており、なのは達を驚愕させた。

「か・・・可愛い折神さん達がおつきなくなつたです！」

「あれが・・・丈瑠さんの召喚魔法・・・。」

なのは達が驚いている中、折神達はまずはなのは達がいるホテル・アグスタからオオツムジを遠ざけようと奮闘する。なんとかオオツムジをアグスタから離れさせたものの、オオツムジの抵抗も激しく、折神達はうまく近づけない。

「どうする文瑠？時間かけりゃあ倒せるけどこのままじゃあいつら
一（なのは達）を巻き込みかけねえぞ！」

「殿！やはり“あれ”で行きましょう！」

「あれか。皆、行くぞ！侍合体！」

シンケンレッドはシヨドウフォンに宙に「合」のモチカラを書い
て反転させる。すると折神達の姿が変わっていき、獅子折神は胴体
と頭、龍折神は左足となり、変形するさいにヘルメットのようなも
のが排出される。亀折神は右腕となり、熊折神は右足に、猿折神は
左腕に変形する。そして折神は獅子折神を中心として、合体してい
く。合体した折神は先ほど排出させたヘルメットを頭にかぶるとク
ワガタ型の立物（日本の鎧兜の角のようなもの）が現れ、腰に侍巨
人になった折神の日本刀を模様した武器「ダイシンケン」が現れる。
最後に背中側に特殊合金製の円盾「秘伝シールド」が装着される。

「……侍シンケンオー！天下統一！」「……」

折神達は合体し、シンケンジャーが扱う侍巨人「シンケンオー」

へとなった。折神達が合体してオオツムジと同じぐらいの大きさになったシンケンオーの姿は、見る者すべてを驚かせていた。

「合体……しただと……！」

「すげえ……。まさかあの折神つてのがロボみたいになるとはな……。。」

「対抗する手段つてこのことかいな……。。」

シンケンオーは日本刀を模様した武器“ダイシンケン”を抜刀するとそれをオオツムジに向ける。

「なんかこの手順で合体したのって久しぶりだな。」

「そうね。この手順で合体するのも悪くないね。」

「話は後だ。来るぞ！」

会話を始めるシンケンジャー達にシンケンレッドは止めさせ、シンケンオーに向かつてくるオオツムジを見る。オオツムジは持っている剣を大きく振るうがシンケンオーはそれを受け流し、逆に反撃する。反撃を受けたオオツムジは大きく吹き飛ぶも堪え、シンケンオーに自然と距離を置いた。

「くそっ！こいつらを使うしかないか！こい！ナナシ連中！」

オオツムジはこっちが不利と確信すればホテル・アグスタの“スキマ”からシンケンオーと同じサイズのナナシ連中“大ナナシ連中”が何体が現れ、シンケンオーを取り囲む。

「やっぱり大ナナシ連中もいたんや！」

「殿！ここは舵木折神を使いますか？」

「いや、このままで行くぞ。」

舵木折神というのはシンケンブルーが所有する秘伝ディスクに折りたたまれた折神。このディスクをシンケンマルに装着して回転させれば舵木折神を召喚できるがシンケンレッドはこのままで行くと判断した。

シンケンオーを取り囲んだ大ナナシ連中は4体は鎖鎌を取り出し、シンケンオーを鎖で縛りつける。縛り付けられたシンケンオーは身動きが取れなくなり、槍を持った大ナナシ連中に攻撃を受ける。シンケンオーは受けた場所に火花が飛び散り、シンケンオーの中は大きく揺れる。

「うわっ！」

「ぎゃっ！」

「うおー！」

「うっ！」

「ぐ……。だが……、同じ手は食わない！」

シンケンジャー達は体勢を整え、再びシンケンオーを操る。シンケンオーは腕に巻きつかれた鎖鎌を力づくで引っ張る。すると鎖鎌

を持つてた大ナナシ連中4体は引つ張られて宙を飛び、大ナナシ連中達同士ぶつかり合い、倒れて動けなくなり消えていく。鎖鎌から解かれたシンケンオーはダイシンケンを再び構えるとさっきまで攻撃してた大ナナシ連中達を50mの巨人とは思えないほどの軽やかな動きで薙ぎ払うように斬っていく。そして大ナナシ連中は全部やられるとシンケンオーは再びオオツムジに向ける。しかしオオツムジはまだシンケンオーを倒そうとしているのか、自分の身体に巻きつかれた鞭「真空ツムジ鞭」を身体を動かして振るい出す。

「喰らえ！真空ツムジ鞭イ！」

勢いのついた鞭はシンケンオーに上から強く飛んでいく。しかし、シンケンオーは見透かしていたのか、ダイシンケンでオオツムジの真空ツムジ鞭を薙ぎ払う。薙ぎ払われたオオツムジは大きく吹き飛んでしまう。

「ぐおっ！」

「そろそろとどめをさすぞ！」

シンケンジャー達はシンケンレッドの合図で一斉に台座からシンケンマルを抜き、一斉にシンケンマルに装着したシールドディスクを回転させる。するとシールドディスクを回転させることによりダイシンケンには「斬」のモチカラが注ぎ込まれていき、ダイシンケンにモチカラを注ぎ込むことが終わるとシンケンジャーは一斉にシンケンマルを上段に構える。そしてシンケンジャーの前に「斬」のモチカラが浮かび上がる。

「……………ダイシンケン！侍斬り！」……………」

シンケンオーはダイシンケンを円を描くように振り、上に構えるシンケンジャーが一斉にシンケンマルを振りかざすと「斬」のモチカラが斬れ、シンケンオーもオオツムジに向けてダイシンケンの一撃を入れる。

「せつかく復活できたのに……………！ぐあああああああ……………
……………」

ダイシンケンの強烈な一撃を受けたオオツムジは耐えきれずもなく、無造作に倒れると大爆発を起こし消えてなくなる。シンケンオーはそれを背景にしてダイシンケンをお肩に担いで歌舞伎のようにポーズを取る。そして、シンケンレッドはシンケンマルをお肩に担ぐ。

「これにて、一件落着！」

『ミッドチルダ 16:21』

シンケンジャー達はオオツムジとの戦いが終わるとシンケンオーから降り、シンケンオーも合体を解除して折神に戻り手のひらサイズに戻っている。そしてシンケンジャー達は変身を解いている。丈瑠達は彦馬と黒子達と再会した。ちなみに一人だけ脇腹を支えている黒子がいる。

「殿。よくご無事で。」

「ジイ。そのことは後だ。まずお前達に言わなければならないこと

がある。」

「殿。それは・・・？」

文瑠は彦馬達を前にして口をゆっくりと開く。

「信じられないと思うが、ここは俺達が住む地球じゃない。差し詰め“異世界”ってところだ。」

「異世界！うち、ここ外国かと思ってた・・・。」

「ことは、普通人が派手なもんー（魔法のこと）撃ってるどころ見ておかしいと思わねえのか・・・？」

「あ・・・なんというか・・・技術も発達したんだなあって思ってた。」

「実は・・・私もそうだと思ってました・・・。」

流ノ介とことはこのこの異世界ミッドチルダの反応に、文瑠達は呆れたのかため息を吐く。するとことは文瑠と茉莉と千明の格好が違ふことに気づ

く。今丈瑠と茉莉と千明が着ている服は機動六課に支給された制服を着ている。

「ああ。これか。これについては“彼女達”の元に行って説明する。

「
丈瑠は顔を向けると全員そっちの方に向ける。顔の先にはバリアジャケットと騎士甲冑を身に着けたなのは達の姿があった。なのは達は全員、丈瑠達の方に真剣な顔つきで見ている。」

「俺達のことと外道衆のことを言わなければならないな。」

「丈瑠……。」

「シンケンオーまで見せてしまったんだ。言わない方が逆に怪しまれる。行くぞ。」

丈瑠の合図でシンケンジャーメンバー達はなのは達がいる方に――

斉に歩いて行った。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

場所を変えて三途の川。今シタリがスキマ越しにスカリエッティと会話をしていた。

「スカリエッティ。アヤカシの感想は？」

「『素晴らしい！あっさりやられたと思えば巨大化したことに一番驚いたよ！それにシタリが言う“シンケンジャー”の巨大ロボもだ！あれが彼らの“レアスキル”で動いているとは信じられんほどだ！』」

スキマ越しで会話しているスカリエッティは今アヤカシとシンケンジャーの力に興奮気味になっている。そんなスカリエッティを見てシタリは少し引き気味で会話を続ける。

「まあ落ち着きんしゃい、スカリエツティ。あのアヤカシの“2の目”は復活させるのにすごく難しいんだよ。今回はたまたまうまくいっただけなんだよ。」

「『そうなのかい？何だったら魔力を使って“2の目”を作ればいいのか？』」

「無理いいなさんな。三途の川に魔力なんて持ってこれるわけないだろ。それに持ってこれたとしても、まだあたしゃあ魔力をまだ完全に把握したわけじゃないんだよ。そうあせんなさいな。」

「『そうか……。しかし、君達アヤカシの“水切れ”にはとても残念だよ。それを解消すればもつと活動出来ると思うんだが……？』」

「それもあたしは研究してるよ。だがね、“2の目”が復活できなくても“1の目”はなんとか出来るからどうにかアヤカシは復活できるよ。」

「『そうか。もしよかったら一つアヤカシを復活したら一体譲ってくれないかね？いろいろと調べたいことがあるんだ。』」

「おまいさん。解剖して調べるんかい？まあ考え解くよ。」

シタリは会話が終わるとスキマ越しから話していたところから離れる。

「2の目”がないとすれば、これからの戦いはつらくなるねえ・
・。そうだ！その代りに何か能力を加えられたらシンケンジャーを
圧倒出来るかもしれないねえ！すぐにやってみるとするかねえ・
・！それにシンケンジャーが魔導師と手を組めば厄介になるのは避け
られないね。早く手を打たないと・・・。」

シタリは今後のことも考えながら、次のアヤカシの復活の作業に
移しだした。

第九幕 侍巨人（後書き）

作「今回はシンケンオーについての説明です。」

シンケンオー

シンケンジャーの獅子、龍、亀、熊、猿折神の五体が合体した最初の侍巨人。ちなみにロボットではなくこれでも人工生命体である。武器は日本刀を模様した「ダイシンケン」で胴体の獅子折神の「火炎哮」、龍折神を利用してジャンプする「龍、昇り脚」等技の数は多い。必殺技はダイシンケンに「斬」のモチカラを込めて斬りつける「ダイシンケン 侍斬り」。また、合体の際に「合」のモチカラを使わなくてはならないが、「侍合体ディスク」を使うことにより「折神大変化」の手順からやらなくても合体可能。ちなみにガオレンジャー以来の戦隊シリーズは最初に出た合体ロボはやられていたがこのシンケンオーのみ、やられていない。（しかし血祭ドウコク戦でドウコク共々爆発しているが）

ちなみに熊、龍、亀、猿の順でエンブレムモードで縦に合体する「シンケンオー・おでん合体」もあり、獅子折神は余ってしまい、その際シンケンレッドの「俺、余ってるだろ！」というセリフはシンケンジャーの中では有名で、この合体はシンケンジャー本編第二幕で流ノ介が勘違いでやらかしてしまい、ピンチに陥ったことがある。（しかしすぐにシンケンオーに合体して形成逆転したが）

作「今回の話は第二幕の一部を再現しようとして努力しましたが結局駄文・・・（泣）

ちなみに、これ以降アヤカシに2の目の代わりに何か特殊能力を付

けるためシンケンオーの出番は限りなく少なくなります。

理由は

- ・リリカルなのはの登場人物達が戦闘中では空気みたいになってしまつから。
- ・戦闘模写がシンケンジャーより難しいという作者の勝手な理由によるもの。
- ・というかなのは達が巨大化したアヤカシに対抗できず活躍が出来なくなるため。

大きくこの三つになります。戦隊特有の巨人戦がなくなるのは痛いですが、なのは達を活躍させたいという理由もあるので巨大戦はしばらくお預けとなります。期待していた方は本当にごめんなさい。

また、今まで更新速度を下げまいと頑張っていました。結果的に前回があんな駄文になってしまったため、今回からはじっくり考えたあとから書きたいと思うので、更新速度は下がります。本当に申し訳ありませんでした。」

第十幕 対話（前書き）

作「前回と前々回の話は本当に駄文で申し訳ありませんでした・・・。正直小説を舐めていました・・・。しかし、お気に入り登録してくださる方、見てくださる方、感想を書いてくださった方のためこれからも一生懸命頑張っていこうと思います。」

今回は文瑠達が自分達についてなのは達に教えます。しかしなんでこういうのは早めに書かなかったんだ俺・・・・・・・・。」

第十幕 対話

『ミッドチルダ 機動六課 会議室 18:31』

ホテル・アグスタで外道衆の戦いが終わり、丈瑠達はなのは達に自分達のことと外道衆のことを話すため会議室にいる。ちなみに本来は部隊長室でもよかったのだが、会議室にいる理由は黒子達の数が多いため、外で待ってもらうのも駄目という理由で会議室を使っている。

会議室の中に機動六課側ははやてが椅子に座っていて、その隣にユニゾンデバイスのラインが飛んでいる。そしてなのは、フェイト、ヴィータ、シグナムと隊長陣が集まっている。それを向かい合うようにシンケンジャー側は丈瑠と彦馬が椅子に座っていて流ノ介、茉莉、千明、ことは、彦馬、そして黒子達がずらりと立っている。はやては丈瑠と話している中、念話ではやはなのは達とこんな会話をしていた。

「『あかん・・・黒子さんが多くて話に集中出来へん・・・』」

「『はやてちゃん・・・。それ、私達も同じ気持ちだよ・・・。』」

「『せやけどなんか視線がどうも気になるんや・・・。』」

「『主はやて。敵意は向いてないようですが、もしも彼らがどんなことをしてもいいよう私が見張っておきます。ですから主は話に集

中を。』」

「『ありがとな・・・シグナム。せやけど数が・・・。』」

シグナムは数が多く、しかも全身黒い服に顔を隠している黒子達を警戒していて、はやて達は黒子のせいではなかなかに話に集中出来ない様子だった。本来黒子は、影で志葉家の世話をしている。その黒子の数は大体20人ぐらいで、その数が一斉にミッドチルダに転移して今機動六課の会議室にいるため、その存在感は半端ない物になっている。そして丈瑠の話が終わったらしく、はやては丈瑠に話しかけると我を戻し、話に出来る限り集中することにした。

「はやて、話は聞いているのか？」

「あ、うん！・・・なんの話やったっけ？」

「・・・もう一度言いますぞ。」

丈瑠ははやての反応にため息を漏らし、彦馬がそのように言っていると再び外道衆と自分達のことを話し始めた。

「外道衆”は300年前、隙間を通って我々の世界にやってきては人々を苦しめてきた集団です。私達志葉家とその家臣達は代々外道衆を退治し、我々の世界を守ってきました。外道衆と戦うため、我々は文字を操る能力、“モチカラ”を使って今まで戦ってきました。そして外道衆の長、“血祭ドウコク”は300年前、初代によって封印されました。しかし、我々の世代で封印が解けてしまい、本格的に外道衆は動き出してしまいました。殿は今までシンケンレツドとして一人で外道衆と戦っていましたが、殿だけでは限界が近いと判断し、私は再び離れていた家臣達を集合させ、“シンケンジャー”を再び結集し、外道衆と戦いました。そして家臣ではないが新しく侍となつた者協力もあり、私達はとうとう外道衆の長、“血祭ドウコク”を封印ではなく倒し、外道衆を倒すことに成功しました。」

「せやけど、この世界にその外道衆が現れたんやけど、それに関して何かわかりますか？」

「それについてはいきなりこの世界に飛ばされた俺達にもわからん。だが、外道衆がいる限り俺達は戦うまでだ。」

「そうですか……。せやけど、丈瑠さん。なんでそのことを言わなかつたんですか……？」

はやては口を開くと、その口からは怒りを込めたように言ってい

ていた。

「なんでその“外道衆”が“スキマ”から出てくることを言わなかったんや！もし言うてくれたら対策はとれてたで！」

「・・・話したところで何も変わらない。奴らはあるとあらゆる“スキマ”から出てくる。例え対策を取ったとしてもいきなりスキマから現れてしまえば何も変わらない。」

「でも・・・！」

「それに、外道衆と何もかわりもないお前達を、戦いに巻き込ませたくなかったからだ。」

丈瑠ははやて達に“外道衆”のことをあまり言わなかった理由、それは外道衆はこの世の必ずどこにもある“スキマ”を通して人々を苦痛や不幸を与える存在。例え知っていたとしても、外道衆がスキマを通ってきたことを知らせる“スキマセンサー”もない。もし作れたとしても、途中でミッドチルダに来た千明と茉莉と協力してもミッドチルダ中にスキマセンサーを設置するのはあまりにも途方が暮れる話だ。機動六課の人達と協力しても逆に迷惑になるかもしれないと感じていたため丈瑠は言わなかったのだ。そして、何よりも世話になつた機動六課の人達を“外道衆”との戦いを巻き込ませたくなかったからだ。

そしてはやては少し沈黙した後ゆっくりと口を開く。

「丈瑠さん。貴方の気持ちはよくわかりました。せやけど、うちらもその“外道衆”に出会った以上、関係はないとは言いい切れません。」

「・・・何が言いたいんだ？」

「うちらも外道衆の戦いに協力します。」

「駄目だ。」

丈瑠ははやてが協力すると聞くとすぐに丈瑠は協力を否定する。なのははすぐに丈瑠に反論する。

「なんで！みんなと協力すれば外道衆の戦いも楽に」

「外道衆の戦いはお前達が戦っているガジェットとはわけが違う。思考も持っているし、それにアヤカシの能力も見ただろう。もしアヤカシが巨大化すればお前達はとう立ち向かう？」

「・・・！」

はやて達は丈瑠の言葉を聞くと黙ってしまふ。はやて達が戦っていたガジェットは高性能AIを持っていてある程度学習能力はあるが、機械とは変わりはない。しかし、外道衆となれば話は違ふ。思考は持っているし“スキマ”から現れて奇襲をしかけてくることもある。もしなのは達がアヤカシを倒したとしても“2の目”が発動して巨大化すればなのは達是对抗手段が限りなく少なくなってしまう。しかし、そんな中ははやてはまだ丈瑠は自分達にはガジェット相手しか戦ってないと気づくと少し笑みを浮かべ、口を開く。

「丈瑠さん。確か前に管理局は警察と裁判所が一緒になったようなものと言ったのを覚えてますか？」

「ああ。覚えている。」

「うちらはガジェット相手やなく、時空犯罪者と言って犯罪者を捕まえるため命がけて戦ってます。ガジェットと戦うのも、犯罪者と戦うのも命がけです。丈瑠さんも外道衆と戦うときは命がけなん？」

「・・・ああ。そうだ。」

「うちらも犯罪者とガジェット相手に死ぬ覚悟を決めて戦ってるん

や。命がけで戦うことでは一緒です。せやから外道衆の戦いにうち
らも協力したいんや。」

「はやて。それに関しては」

「わかつております。確かに外道衆は魔導師にしても機械にしても
わけが違います。丈瑠さんが言う“アヤカシ”のこともうちはよ
くわからへん。せやけど“仲間”をほおっておくのは嫌なんや。」

「仲間・・・？」

「そや。丈瑠さん達は出会ってまだ日も浅いですが、うちらにして
みれば大切な仲間と変わりない。うちらを心配してくれる丈瑠さん
の気持ちはわかります。せやけど丈瑠さん達が丈瑠さん達だけで外
道衆と戦うのを指をくわえて待つてゐることは嫌なんや・・・。お願
いします。協力させてくれへんか・・・？」

はやては立ち上がり、丈瑠達を前にして頭を下げる。丈瑠は今ま
で彼女達とかわるうとしなかったが、それでも自分達をこんな
も心配してくれることは気づいていなかった。丈瑠ははやての気
持ちに驚きを隠せられず、そして彼女達と協力するかどうか決断に
悩むとき、丈瑠に彦馬が小声で丈瑠に話しかけてきた。

「（殿。彼女達の気持ちは本物ですぞ・・・。）」

「（わかつている。だが彼女達に）」

「（殿の言いたいことはわかります。しかし、ここまで言われた以上引き下がるとは考えられません。殿の気持ちも私にはわかつております。しかし、彼女達の思いを不意にするのもどうかと・・・。）

」

文瑠は彦馬と少し話、文瑠は気持ちを整えるため深呼吸を一回すると真剣な顔つきになり、はやて達の方を向く。

「外道衆と戦うことに当たって言うておくことがある。外道衆の戦いの先にあるのは外道衆と戦って勝つか、負けて死ぬかどっちか二つだ。そして、外道衆と戦う時は“命令”ではなく“覚悟”で決める。その覚悟が出来ていなければおとなしく下がってもらおう。戦いの邪魔になるだけだ。」

文瑠の言葉は、外道衆の戦いは勝って生きるか、負けて死ぬか、戦いにおいてはこの二つが必ずあることだ。しかしこれは犯罪者やガジェット相手との戦いと同じこと。しかし、最後の方は違う。外道衆の戦いは犯罪者とガジェット相手以上に生易しいものではない。

アヤカシのそれぞれの能力を持っていて、毎度同じアヤカシが出る訳ではない。それにナナシ連中も数が多く、外道衆は“スキマ”から現れて奇襲を仕掛けてくるのも考えられる。そのため丈瑠ははやて達にその覚悟はあるかどうか聞きだした。しかしはやてはすぐに口を開いた。

「覚悟は出来ております。」

「お前達はどんなんだ？」

はやての言葉を聞くと丈瑠はすぐになのは達を見る。なのは達は真剣な顔つきで一斉に頷く。言葉はないが、覚悟を決めている証拠としては十分だった。

「・・・わかった。お前達と外道衆と戦うことを認める。だが、一つだけ約束してくれ。」

「はい。」

「フォワード達には外道衆と出来る限り戦わせないようにしてくれ。あの子達はまだ戦いにおいて日が浅い。それにまだ未来がある。そ

れを失わせないようにしてほしい。」

「・・・わかりました。」

外道衆の戦いは例えフォワード達に戦うなと言ってもどうしても避けられない。そのため丈瑠は“戦わせるな”ではなく“出来る限り戦わせるな”とあえて口にした。フォワードのスバルとティアナは大丈夫だとしても、エリオとキャロはまだ10歳ぐらいとまだ子供だ。しかし、どうあがいても外道衆の戦いに巻き込まれてしまう。丈瑠が言った言葉は、丈瑠にとってもきつい決断でもあった。

丈瑠が出した約束をはやてが承認すると、なのはがゆっくりと口を開く。

「あのー丈瑠さん。お話の途中悪いんですが……。」

「なんだ？」

「外道衆っていうのは“スキマ”から現れるんですよね？」

「ああ。確かにそうだが。」

「あーそれうちも気になってたで。もしかして・・・会議室の“スキマ”と、こちらが持つデバイスの“スキマ”からもその外道衆が

現れる可能性も・・・？」

「・・・ないとは言い切れないな。」

なのは外道衆の“スキマを通る能力”を再認識すると、少し焦りを見せる。それにつられてはやても同じように焦りを見せ始める。

「あかん・・・早く手を打たないと襲われてしまう・・・！どうにかして機動六課の“スキマ”を全部塞ぐんや！」

「落ち着け！“スキマ”はどうやっても出来てしまうものだ。外道衆は知性を持っていて、よっぽどのがない限り敵陣には襲われないだろう。それに、それに対しては対策はちゃんとしてある。」

「対策！それ早く言ってほしいねん！」

はやては丈瑠の「対策」のことを耳にすると餌を求める魚のごとく食いつくようにように丈瑠を見る。

「だから落ち着け！すでに俺のモチカラで結界を張っている。外道衆はここに入ってこれないし、襲ってこないだろう。だが機動六課は俺の予想以上に広い。さすがに俺でも限界がある。後で俺達総出で結界を張り替える。だから心配するな。」

「は……はい。わかりました……。」

はやては丈瑠に結界のことを聞くと今まで焦っていた自分が恥ずかしいと思いながら一息を付き、話を続ける。

「丈瑠さん。言わなかった理由はわかりましたが、さすがにある程度のことと言った方がよかったですと思います。そのため、早めに来た丈瑠さんと茉莉さんと千明さんには、罰を与えたいと思います。」

「えっ?」

「罰?」

罰を与えると聞くと茉莉と千明はなんでもいきなりというような感じではやての方を見る。

「その罰は……。機動六課中のトイレ掃除を一週間してもらおうで。」

「トイレ掃除だと！殿にそんな汚らしいことをさせてたまるか！殿が罰を受けるなら、この家臣である私に」

「流ノ介、よせ。これは俺と茉莉と千明の罰だ。罰はしっかりと受ける。」

「と……。殿オ……。」

トイレ掃除と聞けば流ノ介はすぐに大声で反論する。しかし丈瑠は冷静に流ノ介を止め、罰はしっかりと受けるといった。流ノ介は今にも泣きそうな顔をして丈瑠を見ていた。はやてはそんな中話を続ける。

「……話はこれで終わりやけど、なんか質問あるか？」

「あの……質問してもええですか？」

「ええで、言ってみ？」

「なんで・・・ここに“子供”がおるん？」

ことはヴィータを見ながらはやくに質問する。ことはの視線が自分に向いてるとわかるとヴィータはすぐにことはを睨みつける。

「おい。それはアタシに対して言ってるのか？」

「そういえば私も気になっていたんだ。なぜこのような場所に“子供”がいるんだ？」

「あーそのことなんやけど・・・。ヴィータは見た目はあれやけどちゃんとした大人やで。」

はやてはヴィータについて簡単に言うが、流ノ介とことははなかなか信用とはしない様子でいた。

「ああ……。後で必ず言い聞かせておく。」

「ああ。言い忘れておりましたが黒子達は居座るわけにはいかないから黒子達も出来る限りのことを協力したいと言っております。どうか、よろしくお願いします。」

「わかりました。そのことにつきましては後でちょっと話したいことがあるので後で部隊長室に来てもらえますか？」

「はい。わかりました。」

怒りで暴れているヴィータをシグナムが会議室から外へと連れ出していく様子を横目で見ながら彦馬とはやては黒子についてを話、話が終われば解散となった。丈瑠達はすぐに結界の張り替え作業へ移すことにした。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 19:51』

ここは機動六課の裏庭。ここに千明がモチカラで「守」と宙に書いて結界を張っている。あの話の後、丈瑠と流ノ介と茉莉は機動六課、ことは訓練所、彦馬は隊員寮、そして千明は裏庭をやることになった。千明はめんどくさそうにしながらモチカラで結界を張っていた。

「これで終了つと。さてと、早く飯食って寝るとすっかな。だけど明日からめんどくせえことばっかなんだよな……。」

千明は結界を張り終えると明日からのトイレ掃除の罰のことや明日からスキマセンサーの製作のことを思うと大きくため息を吐く。千明が裏庭を立ち去ろうという時に少女の声が千明の耳に入る。千明はその声がどこから来るか気になると千明はそっちの方へ行く。千明が声をする方に行くところにはティアナの姿があった。ティアナは一人で自主練をしているようだった。千明はティアナの自主練をこっそりと遠くから見つて、ティアナに気づかれないように小声で口を漏らす。

「こんな時間で何してんだあいつ……？」

千明はそのあとティアナの自主練を少し見た後、千明は裏庭からティアナに気づかれないように離れて立ち去っていった。

第十幕 対話（後書き）

作「今回は日下部彦馬について説明します。」

日下部彦馬

志葉 丈瑠の家臣でもあり、後見人で家老的な立場で、シンケンジャーの司令官的存在。大勢の黒子達とともに丈瑠を親代わりで17年間育ててきて、殿として、侍として厳しく指導してきたため唯一丈瑠が弱い面を見せられる存在でもある。性格は生まじめで何事も熱心であるためやや口うるさいところがある。丈瑠には当主の心得を口頃から言い聞かせながらも、自らの立場を理解し成長する若殿に仕えられることを誇りに思っていて、丈瑠と「殿」と呼んで忠誠を誓っている。若き家臣達にも様々な面で忠誠を尽くすように言っているがなかなかまとまらないことに頭を悩ませたり、時には大らかな気持ちで受け流している。また、稽古でついた怪我かそうでないかを見破るほど観察力が高い。スキマセンサーでシンケンジャーに外道衆が出現したこと報告する、シンケンジャーが戦ったアヤカシの能力を書いたりする役割もあり、また、黒子達の役割分担や食糧調達や献立を考えたりなど後方支援の役割も持っている。彼がモチカラがあるかどうか不明だが、シヨドウフォン持っているところからモチカラを持っていると考えられる。（しかしシンケンジャーになれるかどうか不明）だが、武将としては相当な実力を持っている、素手でナナシ連中と戦ったり、本編最終幕では槍をもって立ち向かったほど。

腰痛持ちで「馬は腰にくる」という理由で大型バイクに乗る様子もある。また外道衆と戦うため家族と孫と離れて暮らしているが、自分の母の命日だけだ家族達と会っている。外道衆との戦いが終わっても「孫にはいつでも会えますから」との理由で志葉家に残り、

丈瑠に成長を促すためいろいろな講座を学ばせようとして、自分の趣味のエレキギターも進めていた。（実際に本編エンディングでエレキギターをかき鳴らす姿を丈瑠達に驚かせていた。）

作「話の構成がなかなか難しい……。でも屈折せずに頑張りたいと思います……。」

第十一幕 熊心（前書き）

作「シンケンジャー」のwikiで見たけどシンケンジャーの世界観の基礎は“真面目に馬鹿なことをしようとする”・・・真面目？

今回は千明が主流だと思います。」

第十一幕 熊心

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮 20:11』

シンケンジャー達は機動六課中に結界を張ったあと、シンケンジャーのみんなは丈瑠の部屋に集まっていた。

「なんだ・・・これは？」

丈瑠の目の前にあったのは、部屋の窓側に木でできた箱にシートが敷いてあり、そこに座布団が置いてあった。そしてその台の前に座布団が4つ置かれている。まるで志葉家の丈瑠達がよく集まっていた部屋のようになっていた。そこに丈瑠のもとに黒子がやってきて、封筒を丈瑠に渡してきた。丈瑠はその封筒を開けてその中身を見て、中に手紙が入っており、その手紙を読み始めた。

<殿。たとえ世界が変わったとしても殿としての自覚を忘れてはなりません。そこで、私は黒子に頼んで少し殿の部屋に少し付け足しときました。迷惑かもしれませんが、お許しください。彦馬より>

「まったく、余計なことを・・・。」

丈瑠は呆れながら手紙を折りたたみ、黒子に渡す。それを見ていた茉莉、千明、ことは苦笑いして、流ノ介だけはなぜか真面目な顔をしていた。

「殿、彦馬さんの言うとおりです。たとえ世界が変わったとしても殿は殿です。自覚を忘れてはなりません。」

「流ノ介。今の俺は殿様ではなく、ただの民間協力者だ。こんな余計なことはしなくてもいい。」

「しかし！たとえ世界が変わったとしても殿は殿です！自覚は忘れてはなりません！」

「しつこいぞ！」

急に丈瑠と流ノ介が口論し始めた時、そんな中千明は座布団に座っていてティアナが自主訓練していたところを思い出していた。

「（あいつ……。なんであんなところで必死に一人で訓練してたんだ……？）」

千明はティアナが裏庭で訓練していたことを思い出していた。普通に自主訓練していたならまだよかった。しかし、ティアナの様子はまるで必死になって訓練をしていた。機動六課で行われている訓練じゃなく、焦っているようだったからだ。千明はどうしてティアナが必死に自主訓練していた理由を考えていた。そんな時にことが千明に横から話しかけてきた。

「千明、どうしたん？」

「あ、いや。なんでもねえよ。」

ことはに話しかけられた千明は考えるのを止め、心配かけないように言う。丈瑠と流ノ介がまだ口論している時、茉莉が今まで気がかりになっていたことを口にした。

「……そういえば、どうして外道衆はこの世界に来たのかしら？」

「何度言ったら……それは俺も気になっていた。」

流ノ介と口論していた丈瑠は茉莉の言葉を聞くとすぐに口論を止め、話を変える。流ノ介も丈瑠と同じように口論を止め、どうして外道衆がここに来たのか考え始める。

「もしかして、俺達が怖くなってこの世界に逃げ込んだとか？」

「もしそうだとしたら、もうとっくにこの世界に逃げ込んでいるはずよ。」

「あ……そっか……。」

千明が考えた答えはすぐに茉莉に否定される。みんなが考えている中、ことはが思いついたことを口にした。

「……この世界に外道衆が現れて、この世界がうちに助けを求めたんやと思う。」

「おいおい……、そんなわけないだろ。」

「いや、案外そうかもな。」

ことはの考えた答えに千明は否定するが、それと逆に丈瑠はことばが考えた答えを受け入れてた。丈瑠の反応を見た流ノ介達は丈瑠を見て驚いた。

「丈瑠……本気で言ってるの？」

「もし違ったとしても、今の状況ではことはの言つとおりなのかもしれない。とにかく今は情報が少ない。焦って考えても仕方がない。」

「ま……そうだな。」

この後就寝時間となつてしまい、結局今日は解散となり、流ノ介は丈瑠と千明の部屋で寝ることになり、ことはは茉莉とキャロの部屋で寝ることになった。ちなみに流ノ介は丈瑠と同じ部屋で寝ることをきつかけに騒いだのはまた別の話。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 07:29』

翌日、シンケンジャー達はフード達と一緒に朝の訓練をし、終わった後シャワーを浴びて食堂に集まっていた。

「スバルちゃん……。そんなにスパゲティ食べれるん……。？」

「うん。私が全部食べるわけじゃないけどね。」

ことははスバルが持っているスパゲティの量に驚いていた。スバルが持っているスパゲティの量はまるで漫画に出るような大きな器にスパゲティを山盛りで持っていたからだ。千明もエリオが持っているサラダの量にも驚いていた。エリオも大きな器に山盛りでサラダが入っていたからだ。

「お前ら……さすがに盛りすぎだろ……。」

「結構お腹すいちゃったんで……。」

「いつも見てるけど……さすがに量多すぎない？見てるだけでお腹いっぱいになっちゃうんだけど……。」

「これでも少ない方だと思うんだけど……。」

「大半食べるのはスバルとエリオなんだけだね。」

スパゲティとサラダの量の多さに驚きを隠せなかったシンケンジャー達にティアナがこの量を大半がスバルとエリオが食べると言う
とまたシンケンジャー達は驚いた。

「おい……冗談だろ？」

「早くご飯食べよ。時間なくなっちゃうから。」

フォワード達は驚きを隠せないシンケンジャー達を無視して席に座る。シンケンジャー達もすぐに席に座り食事を始める。スバルはスパゲティを自分の皿に盛りつけて一口食べると動きが止まってしまう。

「ん？どうしたのスバル？」

「このスパゲティ……。いつもより美味しい……。」

「えっ？あ……。ほんとだ……。」

スバルがスパゲティの味が昨日より美味しいことに気づくとエリオも確かめるように一口食べる。そしてエリオもスパゲティが昨日より美味しいことに気づくとティアナとキヤロも同じように食べる。そして二人もスバルとエリオが言ったことが本当なことに気づく。フォワード達は急に昨日より味が上がったことに驚きを隠せなかった。そんな時に丈瑠が厨房を見ながら口を開く。

「もしかしたら、あいつらのおかげかもな。」

「「「「？」」」」」

フォワード達は文瑠が見ている方向に振り向く。その方向には黒子が料理を作っている姿が写っていた。黒子の動きはまるでプロのような、そして楽しそうに作っているような動きで料理を着々と作っていき、次々と皿に盛りつける。盛りつけ終わればまた新しい料理に入る。フォワード達は黒子を見て、ホテル・アグスタでシンケンジャー達が名乗りを上げていた時にいた黒子だと思い出した。しかし、名乗りの時と料理をしている時の黒子の様子が違っていたので啞然としていた。

「あれは黒子と言って、志葉家の使用人みたいなものだな。」

「本来黒子の役割は違うがな。」

「え？あの人役割ってあれじゃないの？」

スバルは流ノ介が言った言葉に反応する。スバルは黒子を見て、料理をして名乗りの手伝いと思っていたらしい。流ノ介はスバルに返答するように口を開く。

「黒子はもともと歌舞伎の公開中に、舞台の手助けをしたりする役割だ。あの衣装は「私は存在してません」という意味を持っていて、時折舞台に出ては背景を変えたりして手助けをしている。ちなみに歌舞伎というのは」

「つまり、黒子は影で支えてくれる存在ってやつだ。」

「そ……そうなんですか……。」

流ノ介がさらに歌舞伎について説明しようとした時、話が長くなりそうなので文瑠がすぐに入って黒子について簡単に説明する。スバルは苦笑いしながら頷く。

食事が終わった後文瑠は部屋に戻ろうとするときにはやてに呼び止められる。

「文瑠さん。急に悪いんやけど付き合ってくれへん？」

「何だ急に？」

文瑠は立ち止まり、はやてを見る。シンケンジャー達もつられてはやての方を見る。

「実は・・・文瑠さん達のこと本局から呼び出しが来たんや。文瑠さんはシンケンジャーの代表として来てほしいんや。」

「別にいいが、急だな。」

「仕方ないねん。私も今日呼び出されたんやから。」

「・・・わかった。いつからその本局に行けばいいんだ？」

文瑠は急な呼び出しに不信に思いながらはやてに何時に行くか聞く。

「9時までに行けばええよ。まだ少し時間があるから準備しとき。あ、トイレ掃除は文瑠さんが戻ってきてからな。」

「・・・了解。」

「それにしても、なんで急になんや？」

はやての言葉に千明が残念そうにがっかりとする。そんな千明を無視してことは急に呼び出されたことに疑問に思っていた。だが、文瑠はその答えがわかっていたようだった。

「おそらく、俺達のことだろうな。」

「シンケンオーも見られちゃったしね……。呼び出されないほうがおかしいね。」

呼び出された理由は自分達、シンケンジャーのことだろうと文瑠は思っていた。茉莉が言った言葉にシンケンジャー達は納得する。はやてが立ち去ろうとするとき彦馬が呼び止める。

「ああ、はやて殿。もし今日使わないのであれば、会議室を貸してくれませぬか？」

「?別にええけど。」

「ありがとうございます。ではお前達。会議室に行くぞ。」

彦馬は会議室が使えると聞くと丈瑠を除くシンケンジャー達を会議室に向けて歩き出させる。はやては急に会議室を貸してくれと聞かされたのでその理由を丈瑠に聞く。

「丈瑠さん。なんで急に会議室使うん？」

「おそらく、“スキマセンサー”を作るためだろうな。」

「“スキマセンサー”？」

「それについては本局にいきながら説明する。」

そういつと丈瑠は準備をするため自分の部屋に向かった。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

場所を変えて三途の川の六門船。その中でちょうどシタリがアヤカシの復活作業をしていた。

「これをこづしてつと・・・よし！起きんしゃい、”ヒトミダマ”」

「うあああああ・・・！俺様を起こしてくれたのはあんたかシタリ。」

シタリによって復活させられたアヤカシは“ヒトミダマ”。ヒトミダマは顔から出る紫色の光の球をぶつけるとぶつけられた者はヒトミダマの操り人形となってしまう。操りの力は強く、アヤカシが三途の川に戻っても操られた状態のままになっているほどだ。

「そつだよ。復活させる際あんにちよつといじくつたんだよ。」

「俺様の身体にか？」

シタリに言われるとヒトミダマは自分の身体を触り始める。外見にはなんにも変ってないため、どこが変わったのがわからんでいた。そんなヒトミダマにシタリが耳打ちで説明を始める。

「そうじゃ。お前さんの身体にな……。」

「そいつあいい能力じゃねえか！2の目がないのは残念だがありがとよシタリ！」

「だけど、お前さんの力は少なくなつとるから気を付けるんだよ。」

「おう！感謝するぜ！ハーハツハツハツハツ！」

ヒトミダマは自分の新たな能力に感激し、高笑いを始める。その高笑いは三途の川を微力だが響かせた。

『ミッドチルダ 機動六課 会議室 11:50』

場所を戻して機動六課。その会議室の中でシンケンジャー達と黒子と彦馬がスキマセンサーを作ってきた。そんな中本局から戻ってきた丈瑠とはやてが入ってきた。それに気づいた流ノ介が一時作業を止めて丈瑠を見る。

「殿、お戻りになりましたか。」

「流ノ介、そのことはいいから作業を続ける。」

「これが“スキマセンサー”か？なんか板に鈴がついて紐がついてるだけやん。」

流ノ介はそう言われるとまた作業を続ける。はやては“スキマセンサー”を一つ持ってそれを見る。よく見ると板に「謀」と書かれていた。

「それにモチカラを込めて、ほかのものに“受”というモチカラを込めれば初めて“スキマセンサー”が完成する。」

「でもその“受”ちゅうモチカラどこにするん？」

「ああ、それに関してはシャリオ殿に任せております。」

「シャリーに？」

「ええ。先ほどの機動六課にアンテナを一つ増やしてほしいを願
いまして、アンテナを増やすのにどうしてもはやて殿の許可が必要
だと聞きましたので、お願いできますか？」

彦馬はそういいながら頭を下げる。彦馬の考えは、もし機動六課
のアンテナに「受」のモチカラを込めればガジェットと同じように
ロングアーチに外道衆が“スキマ”から出てきたことに反応するで
はないかと思っただからだ。はやては笑みを浮かべながら口を開く。

「そんなことなら別にええよ。あと彦馬さん、別に敬語使わなくて
もええで。」

「そうですね、わかりました。」

「千明、菜子。昼食が済んだらすぐにトイレ掃除を始めろぞ。」

「あーそれなんだけど・・・。」

丈瑠は千明と菜子に今後の予定を言うが、千明が何か言いにくそ
うに口を動かしていた。

「実は……トイレ掃除……。黒子ちゃんがやっちゃったんだ。」

「……何だと？」

丈瑠はその真相を確かめるためすぐに近くにあったトイレに駆けつける。トイレは眩しいとは言えないが、きれいに掃除されていた跡があった。ちなみに、トイレの中を見る丈瑠に対して怒られるんじゃないかと思っている掃除した黒子が震えながら見ている。女子トイレの中を確認してきたはやてが、トイレの中から出ると丈瑠に何か言ってくる。

「残念やけど、また明日に引き伸ばしやね。」

「……そうだな。」

丈瑠は諦めたように言うと、それを見た黒子達はすぐにどこか行ってしまった。そのあと丈瑠は食事をとった後スキマセンサーの製作に移ることになった。

時間が立ち、時計の針が夜10時にさしかかろうとした時間に千明は再び裏庭に現れた。スキマセンサーは丈瑠の参戦によりなんと一日中にミッドチルダ内に仕掛ける分のスキマセンサーが完成し、明日からミッドチルダ中にそれを仕掛けに行くことになった。

千明が裏庭に来た理由は、ティアナの様子を見に来たからだ。千明がここに来る前に、なのは達からティアナが強さを求める理由について教えてもらった。ティアナ執務管になりそうだった兄が違法魔導師に殺された挙句、上司から「役立たず」と兄を侮辱され、ティアナは兄が役立たずじゃないことを証明するため頑張っていることを知った千明は、夜遅くまで自主練するティアナを心配して裏庭に来たのだ。千明がティアナを見つけた時にはティアナは息を荒く乱しながら膝をついていた。そんなティアナを見て千明はここに来る前に買ってきたジュースを持ちながらティアナに話しかける。

「おい、ティアナ。差し入れだぜ。」

「!・・・千明さん・・・、ありがとうございます・・・。」

千明はティアナにジュースを渡し、近くにあったベンチに座って自分もジュースを飲み始める。ティアナもベンチに座るがジュースを持ったまま飲もうとしない。千明はティアナを見て口を開く。

「遠慮なんかすんなよ。」

「あ、すみません……。」

ティアナは千明に言われるとジュースを開けて飲み始める。二人は少しジュースを飲んだ後、先に千明が話しかける。

「……お前、昨日から自主練してんだな。」

「えっ……!どうしてそれを……。」

「昨日ここに来たとき偶然見ちまったんだよ。それにお前少し無茶しすぎじゃね?」

ティアナは千明の言葉を聞くと黙ってしまふ。千明が言ってることは正しく、否定はできなかった。しかし、ティアナは自分を心配してくれる千明に対して気遣いがいやだったからか、口を開いて言う。

「“強い”千明さんにはわかりませんよ……。 “弱い”私のことなんか……。」

「……俺も前は“弱かった”ぜ。お前と同じように……。」

「そんなの……いくらでも言えます。」

ティアナは千明が自分が弱いと言ってることを否定する。ティアナ達は外道衆についてははやてから昼の緊急集会の時に教えてもらっている。実際にティアナはホテル・アグスタの任務の時に外道衆を見ており、ナナシ連中の姿も見ている。ナナシ連中の数の多さを知っていて、それに臆せず戦うシンケンジャーの戦いも見ている。そしてシンケンジャーの1人でもある千明が弱いというのを信じられなかった。ティアナには下手に自分に同情して嘘を言ってるようにしか思えなかった。

「おい、俺は嘘なんかついてねえぞ。それにいくら今焦っても結果は駄目な方向ばかり行っちゃまう。お前が焦る気持ちはわかるけど、じっくり強くなれば」

「・・・いい加減にしてください。それでも、今強くならなくちゃならないんです。」

千明は自分は嘘は言っていないと言うが、そのことはすぐにティアナに嘘と否定される。千明は自分のことを嘘と決めつけてるティアナに苛立ちを見せ始める。

「・・・おい、人の話をちゃんと聞けよ。」

「千明さんこそ、私の気持ちを知らずに、下手に同情しないでください！」

「ティアナ。俺は下手に同情なんか」

「どうしても強くならなくちゃいけない理由があるんです・・・！そのため私は無茶してまでも強くならなくちゃいけないんです！」

「おい！お前いい加減人の話を聞けよ！無茶するとホントに口クでないことばかり起こるぞ！」

「私のことはほっといってください！」

千明は本気でティアナのことを心配していたのだが、ティアナにとってみれば千明は下手に自分に同情していると感じ取っていた。ティアナは声を張り上げてそのまま千明に言う。

「私のことは千明さんには関係ありません！もう私に関わらないでください！」

「ああわかったよ！もうお前には関わらねえよ！」

ティアナの言葉に切れてしまった千明は空になったジュースの缶を握り潰し、怒りを露わしながら裏庭から離れて行ってしまふ。一人残されたティアナはジュースの空き缶を放り投げてクロスミラージュを握りしめる。

「千明さんに私の気持ちなんかわかるはずない……。私は私のや

り方で強くなって見せる・・・！」

ティアナは再び自主練を開始しようとした時、ティアナの後ろから誰かが近づいてくる気配に気づく。ティアナはその方向に振り向くと、そこにはアヤカシ“ヒトミダマ”の姿があった。

第十一幕 熊心（後書き）

作「今回はこの話に登場したアヤカシ“ヒトミダマ”について説明します。」

ヒトミダマ

牡蠣と無表情の能面のようなアヤカシ。顔面から紫の光を放ち、それを浴びた者を自分の意に操る、自慢の術を持っている。目立ちたがり屋の派手好きな性格で、大げさな口上を述べながら、術で操った者を味方と同士討ちさせて楽しむらしい。武器は盾と鞭で、盾から放たれる光の攻撃と固い防御を兼ねた“大貝形手盾”おおかいのなりてたてを持ち、自身は絶対に安全な状態で、その様子を茶化しながら見物するといふ。

シンケンジャー本編では第九幕に登場し、立ち尽くす千明をかばった流ノ介が操られてしまいシンケンレッドと戦ってしまう。しかし、シンケンレッドがシンケンブルーに「反」のモヂカラを打ち込めたことにより操りから解放され、レッドを除くシンケンジャーの総攻撃に倒される。2の目ではこの話に初登場した虎折神と合体した「トラシンケンオー」の攻撃により撃破されている。

作「ヒトミダマに着けられた新たな能力については、次回書きます。

自分的には千明とティアナは周りの強さに焦りを見せたり、ミスをしたことは共通点があるんじゃないかと思っています。今回の話はなんか急展開な気がします……。

それと感想に関してはユーザじゃなくても感想が書けるようにしておきます。」

第十二幕 アヤカシの新たな力（前書き）

作「格ゲーの「仮面ライダークライマックスヒーローズ」のように
戦隊シリーズの格ゲー出ないかな・・・。スーパー戦隊シリーズの
レッドが集まって戦えるとか。隠しキャラは追加戦士とか、そっ
うの出してほしいな・・・。

今回はヒトミダマの力の公開です。」

第十二幕 アヤカシの新たな力

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮 07:03』

ここは機動六課の隊員寮前。そこには朝の訓練を終わらしたフォワード達は隊員寮に歩いて戻っている。ちなみにシンケンジャー達は昨日完成したスキマセンサーをミッドチルダ中の街に設置するためその準備で今日の朝の訓練に参加していない。

「はぁー……疲れたー……。」

「……そうですね……。」

「うん……。」

「……そうね。」

朝の訓練だとしても訓練内容はフォワード達にとって厳しい。その朝の訓練が済んだフォワード達は、この後シャワーを浴びて食事に済ませて仕事をしなければならなかったため休んでられず、訓練で疲れた体を動かし隊員寮に向かいながら話していた。その中で汗だくになって疲れているスバル、エリオ、キャロだがティアナだけは違った。ティアナはスバル達と同じように汗だくになっていたが、

疲れた様子は見せずに普通に歩いていた。そのティアナの様子を見てフォワード達は驚かないはずはない。

「ティアナさん……。いつの間に体力つけたんだろ……。」

「そうだね……。」

「ティア……。大丈夫？」

「何いきなりそんなこと聞くのよ。私は大丈夫に決まってるでしょ？ほら、さっさと行くわよスバル。」

「あ……。う、うん。」

ティアナはスバルの心配に対して大丈夫かのように言い、隊員寮に入っていく。スバル達も中に入るが、スバルはティアナの様子が変だと感じていた。スバルはティアナの外見にもなんかおかしいと思っていた。

「（ティアナの目……。確か紫色だったかな……。？）」

スバルはティアナの目の色の変化に気づいていた。ティアナの目は部分的に少し水色に近い色がある。しかし、その水色の部分が紫色に変わっていたことにスバルは薄々だが気づいていた。しかし、ティアナの変化には理由があった。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 22:16』

時間を戻して昨日の裏庭。先ほど千明とティアナが喧嘩してしまい千明がティアナから離れていき、ティアナは再び自主練しようとした時、後ろに気配を感じて振り向くとアヤカシ「ヒトミダマ」の姿があった。ヒトミダマはティアナをにやにやとした顔で言うように口を開く。

「おやおや、この時間まで練習中か？関心だなあ。」

「うそ・・・、なんで外道衆が・・・。」

ティアナはヒトミダマを見るのは初めてだが、ヒトミダマの異形

の姿からして外道衆だと認識した。そしてナナシ連中とは全然姿が違うためアヤカシだと悟った。アヤカシの力は強く、アグスタに現れたアヤカシの“オオツムジ”の戦闘能力はシャーリーの計測ではランクで言うとAAAに匹敵するほどの力で、巨大化した“2の目”の力は計測不可能だとも聞いている。そのアヤカシと同類だと思われるヒトミダマがティアナの目の前に立っていることは理解している。今裏庭にしているのはティアナとアヤカシのヒトミダマ。先ほどいた千明が来る可能性は千明を怒らせてしまいしかも「構わないで」と言ってしまったためゼロに近い。そしてアヤカシがここにいるのもおかしい。それは機動六課中に外道衆が入ってこれないようにモチカラで結界が張っていると聞いており、裏庭にも張ってあると聞いている。しかし今のティアナにはアヤカシが急に現れたせいか慌てており、そんなことが冷静に考えられずにいた。クロスミラージュから【マスター、逃げてください。】と聞こえ、ティアナの本能も「逃げる！」とティアナの頭の中で響いているが、ティアナは逃げずに足を振るわせながらも“ワンハンドモード”になっているクロスミラージュを構える。

「お？俺様と戦うのか？足が震えているぞ？」

「う……うるさい！」

「（何よ……。1の目だけでもアヤカシの一体や二体ぐらい、仕留めてみせる！）」

ティアナは自分が弱いという焦りからか逃げずに戦う決心をした。しかしティアナの足はアヤカシの恐怖心で震えていてそのことをヒトミダマに言われるが、ティアナはそのことを否定するように言い、クロスミラージユから魔力弾を発射しようとトリガーを引く。

しかし、クロスミラージユから魔力弾が発砲されない。

「おや？弾切れか？」

「うつさい！こ……こんな時に……！」

ティアナが持つクロスミラージユのカートリッジが弾切れだったのか、過度な訓練のせいで魔力弾がでなかったのか定かではないが、ティアナはすぐにクロスミラージユのカートリッジを変えようとする。しかし、ヒトミダマはこの隙は逃さない。ヒトミダマの顔から紫色の光が集まってくる。そして紫色の光が集まればそれを球形にしてティアナに向けて発射する。

「喰らえ！」

「っ！ぐっう！」

ヒトミダマから放たれた紫色の光の球はティアナに直撃し、紫色の光はティアナを包み込み、ティアナの体の中に入っていく。ティアナは目を塞ぎ体の中に入っていく紫色の光を取り払おうと体を動かしていたが、動きが止まりその場で立ち尽くし、そして塞いでた目をゆつくりと開くとティアナの目は水色の部分が紫色に変化していた。それを見たヒトミダマは喜んでいる様子で口を開く。

「これで貴様は俺の操り人形だ！しかし周りにだれもいないのが残念だな……。」

ヒトミダマの能力は紫色の光を当てることにより、当てた者はヒトミダマの操り人形と化してしまう。先ほどの紫色の光はヒトミダマの術。たとえバリジャケットを身に着けても光なので防げないし、防御魔法を使っても防げるかどうかはわからない。

ヒトミダマは周りに人がいないとわかれば残念そうに言う。ヒトミダマは操った人を使って人を襲わせ、味方の同士討ちをちゃかして見て楽しむ性格を持っていたのだが、周りに人がいなければ意味がない。ヒトミダマは何か思いつけばティアナの方を向いて口を開

く。

「小娘！俺様の指示が出るまで今まで通りに過ごせ！いいな！」

「はい。わかりました。」

ヒトミダマは操ったティアナに指示を出し、木の“スキマ”の中に入っていく。ティアナはクロスミラージユを待機モードにして裏庭から離れていく。

『ミッドチルダ 機動六課 通路 08:01』

「すみません、文瑠さんのシヨドウフォンと折神、そしてシンケンマルとディスクを貸してくれませんか？」

時間を戻して現在。ティアナが操られていることに気づいていない文瑠は清掃員の作業着を着用して清掃道具を持って罰のトイレ掃除に向かっている途中、シャリーに呼び止められる。そしてシ

ヤーリーは丈瑠のシヨドウフォンとシンケンマルとディスクと折神を貸してほしいと言い出したので丈瑠はなぜだ？とした顔でいう。

「その前になんでそのことを言う・・・？」

「すみません。丈瑠さんのシヨドウフォン等の“デバイス”等をスキャンして内部を見たいんですけど貸してくれませんか？すぐに返すので・・・。」

「断る。」

シャーリーは申し訳なさそうに言うが丈瑠はすぐに拒否する。シャーリーが言う“デバイス”というのはシヨドウフォンとシンケンマルのことだ。丈瑠はこの世界で活動するため仕方なくデバイスとして登録している。ちなみに折神は召喚獣扱いとなっている。

丈瑠が拒否した理由は二つ。一つ目は自分達が持つ力が悪用されないかどうか不安なためだ。シヨドウフォンはモチカラで作られないが、折神、ディスク、シンケンマルは少なくともモチカラで作られている。ディスクは秘伝の技が込められて作られており、シンケンマルは「刀」と召喚の意味で出せるが今は出す理由がない。そして折神は機械生命体で源太曰く「モチカラのプログラム」が集まって出来ている。

二つ目はまだ管理局を完全に信用してはいないためだ。“一応”機動六課の人達を信用しているが、それはまだ機動六課だけで、管理局全体は完全に信用していない。管理局本部に行って自分達のことと外道衆のことを話した際、自分達シンケンジャーは今のところ機動六課に住まわせてもらっているが、いつ機動六課から離れて他のところに回されるかわからず、他の管理局の人に自分達の力を利用してしまつかどうかはわかったものじゃない。スキマセンサーの受信先を機動六課にしたのは機動六課からなるべく離れないという理由もあるが、そうすればもちろん機動六課を外道衆の戦いに巻き込んでしまつとわかつているが、管理局にたらいまわしにされるより、“一応”信用できる機動六課にいた方がまだ安心できると思つたからだ。

「（こういふ話は源太がいれば楽なんだが・・・）」

丈瑠はシャーリーから逃げるように清掃道具を持ってトイレに向かい、シャーリーから呼び止めるような声が聞こえるが無視してその場から離れていく。

丈瑠は清掃場所トイレに近づくと人がいることに気づく。その人というのはトイレの入り口を塞ぐように立つ千明と、その千明に何か言っている流ノ介だ。しかし、千明は清掃作業員の作業服を着ているが流ノ介はどこから調達したのかわからないが、なぜか千明と同じ作業服を着ている。

「だーかーら！お前は手伝わなくていいって言ってるだろ！」

「いーいーや！千明、お前はそこを退けと何度言ったらわかる！殿にこのような汚らしいことをさせる訳にはいかない、私が殿に代わって罰を受ける！」

「お前がそうすればまた罰が先延ばしにされるんだよ！文瑠に迷惑かかるんだぞ！」

「じゃあなぜことはが茉莉と一緒にトイレ掃除をしている！ことはが手伝っているならば私だって手伝ってもいいはずだあ！」

「ことはの場合は姐さんだけじゃきついからって特別に許可されたって聞いただろ！」

「知るかそんなこと！」

文瑠はその様子を見てため息を吐き、指を鳴らすと文瑠の後ろから黒子が現れ、黒子は流ノ介を二人がかりで取り押さえて流ノ介を引きずって無理やり離れさせていく。

「いらあ！離せ！」

「流ノ介。お前はスキマセンサーの設置をやっててくれ。」

「と……殿オオオオオオオオオオオオ……」

流ノ介は引きずられながらも文瑠に未練がましい表情で見て叫び、通路の奥へと消えていく。文瑠は頭を抱えながらトイレに入っている、清掃を始めるのだった。

『三途の川 六門船 ???…??』

そのころ三途の川の六門船の中ではシタリが何やら研究をしている最中にヒトミダマが入ってくる。それに気づくシタリは研究をしながら作業を続ける。

「ヒトミダマか、おかえりんしゃい。」

「シタリか！お前がつけてくれた力は最高だなあ！まさかシンケンジャーが作り出した結界にはいれるとはな！」

ヒトミダマは喜びを声で表しながら「ドカツ！」と船の床に座る。シタリはそんなヒトミダマを横目で見ながら作業を続ける。

「おまえさんのつけた力はセンサー、レーダーとかいうやつに反応しない“すてるす”とかいう能力とシンケンジャーの結界に入れる能力だよ。でも力が強いすぎるから油断禁物だよ。」

ヒトミダマにつけた能力はセンサー、レーダーに反応しないステルス。そしてシンケンジャーの結界に入れるようになる能力だ。これらの能力はヒトミダマの身体の中に取りつけられているが、その二つの力が強すぎるためヒトミダマの力は弱まってしまっているが、人間を1人操るだけなら新たな能力がつけられてないことと比べても差はない。しかし、ヒトミダマはそのことに関して不満だった。

「しかし、結界に入れると聞いたのはうれしいが、俺様の力が弱くなるのはいただけないな。」

「おまいさんに着けた能力は強すぎたんだよ。2の目の代わりでも

代わりに抱えきれないからしかたないもんだよ。」

2の目を犠牲にしてヒトミダマに取り付けられた新たな力はシンケンジャーが作り出した結界に入れる力とステルス能力。シンケンジャーが作り出した結界はモチカラだが、ヒトミダマにつけられた能力は“シンケンジャーが作り出した結界に入れるだけ”で、モチカラを無効化するわけではない。それにシンケンジャーの結界は強いため、その結界に入れるほどの力が必要。それに加えてステルス能力を持つため2の目だけでは無理が生じたため1の目も少し犠牲にしなければならなかった。どうしてこの二つの能力を付けた理由は、結界に入ったただけならばすぐにシンケンジャーに見つけられてしまい返り討ちに合う可能性もある。ステルスだけならば暴れられるがそれだと人々を不幸にさせるには時間がかかるため、二つの能力を合わせたのだ。ちなみにシタリが“ステルス”という言葉を知ってるのはスカリエツティから教わったからだ。

「おまいさんはこれからどうすんだい。」

「それは俺の勝手だろうが？」

「（やっぱり思った通りじゃな……。やっぱりドウコクの“縛る力”がないと復活させたアヤカシが勝手に動くから困ったもんだよ。）

」

シタリが言う“縛る”能力は御大将血祭ドウコクが持つ能力で、アヤカシを自分の指示が出るまで勝手に活動させないこともできる。しかし、シタリにはその能力はなく、アヤカシが勝手に動くことに關して頭を痛めていた。オオツムジの場合はどうにかなったもの、すべてがオオツムジのように行くはずがないため、シタリは勝手に動くアヤカシに何か対策しないかどうか考えていた。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 12:19』

場所をミッドチルダに戻し、機動六課の食堂。丈瑠達はトイレ掃除が終わり、シャワーを浴びて食堂に来ていた。流ノ介は丈瑠の代わりにトイレ掃除が出来なかったせい、落ち込んだ様子で食事を黙々と食べていた。シンケンジャー達が食事をしている最中に、テレビがあることの話になると手を止めてテレビを見る。テレビにはアグスタに突然現れた未確認生命体（外道衆のこと）とシンケンジャーが映し出されていた。

『ホテル・アグスタに突如現れた未確認生命体とそれに立ち向かう5人の戦士。それに加えて巨大化した敵に立ち向かう巨大ロボ！専門家はこの巨大ロボは質量兵器ではないかと疑っており、私達は管理局の秘密兵器と予測しインタビューをしたところ、管理局はそれ

を否定。しかし私達は未確認生命体を倒すために現れた戦士と・・・

」
「早速話題になってるわね・・・。」

「そうだな・・・。」

テレビに映し出された自分達の姿を見て丈瑠の顔はため息を吐いた後のような顔になる。アグスタの一件で突然現れた謎の戦士、そしてシンケンオーまで出して戦ったためテレビ局が黙ってるはずはないと考えていた。運が良かったからか、名乗りのシーンはとられてなかったが、もし映っていたら外でうまく活動できなくなってしまうんじゃないかと思った。

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮 19:11』

スキマセンサーを設置するとき、まず首都の方が先だということなのでミッドチルダの首都クラナガンに行き設置することになった。設置するときは黒子達とシンケンジャー達がスキマセンサーを各場所に設置した。設置をする際怪しまれないように特別に結界を張る許可をもらい、結界魔導師に結界を張ってもらうことになったのだ。ちなみに魔導師は他のところの部隊から訳を話して結界を張ってもらっているが、めんどくさそうにしていた。

それを終わらしたシンケンジャー達と黒子達は機動六課に戻り、食事を済ませて各部屋に戻っていた。今通路には千明が歩いていて、両手にそれぞれ缶ジュースが握っていた。部屋にあるコーヒーだけじゃ物足りないため、飲み物を買ってきたのだ。千明はまだ大量にあるスキマセンサーの設置にめんどくさいと思いつながら部屋に戻る途中ティアナを見つけると顔をそらす。昨日ティアナを心配して話しかけたところ、ティアナを怒らせてしまいさらに口喧嘩もしてしまったため顔を合わすのが気まずい。そのため顔をそらして歩いていた。それを見たティアナは自分も顔をそらすのではないかと予測していたが、千明の予測は間違っていた。

「こんばんは。」

「ん？ああ、こんばん・・・はっ？」

千明は声をかけられたので振り向いて言おうとしたが、思わず口が止まってしまふ。それもそのはず。声が出た方からはティアナしかいない。千明がティアナが自分に声をかけたのがおかしくて仕方なかった。

理由として考えられることは昨日のこと。昨日千明はティアナと口喧嘩をしまい、何日かは口を利かないことにしていた。しかし、ティアナは昨日のことがあったのに関わらず普通に挨拶をしてきたからだ。ティアナはただ普通に挨拶をしただけらしく、歩いて

行って自分の部屋に入っていく。

「どづしたんだ・・・あいつ?」

千明はティアナが入っていた部屋をずっと見るように立ち尽くしていた。その後千明は首をかしげながら自分の部屋に戻ることにした。

第十二幕 アヤカシの新たな力（後書き）

作「今回は獅子折神についての説明です。」

獅子折神／火のエンブレム

- ・全長：26.5 m
- ・全幅：20.1 m
- ・全高：19.3 m
- ・重量：800 t
- ・最高速度：50？
- ・出力：600万馬力（データはすべて大変化のアニマルモードより）

レッドが所有する獅子型の折神。エンブレムの形状は将棋の駒に近い五角形。猛スピードと口から吐く炎で戦う。必殺技は炎を纏って突撃する「五角大火炎」。シンケンオーの頭と体になる。

作「今回も無理やり感がぬけだせない……。次回あたりからアヤカシ戦になると思います。うまくかけるかな……。」

第十三幕 ティアナの異変

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 12:23』

千明がティアナがおかしいと疑った日の翌日の昼、機動六課の食堂。この時間帯は昼休みでそれぞれ食事をしたり、休憩したりして時間を過ごしている。千明は昨日のティアナの様子が気になっていたのか、ティアナが席を外してどこかに行くと千明はすぐに立ち上がりスバル達が座って食事をしているテーブルに向かった。エリオは千明がこっちに向かってくると気づくと手を止めて、スバルとキヤロも手を止めて千明の方を向く。

「あ、千明さん、どうしたんですか？」

「あー・・・ティアナのことなんだけどさ・・・。」

「ティアがどうしたの？」

千明は手で後頭部を掻きながら言うとスバルはティアナのことだと思つと千明に聞く。千明は言いづらいのか、顔を俯きながら口を開く。

「実はさ、一昨日ティアナのやつと喧嘩しちゃってな……。それなのにティアナが普通に挨拶してきたから気になってな……。」

「そうなんですか……。」

「……。千明さん。あたしもティアナがおかしいって思ってたんだ。」

千明がそう言うとスバル、エリオ、キャロが心配した顔で千明を見る。千明は喧嘩した内容は言わなかったが、千明とティアナの喧嘩は強く言い争った程度なのだが、それでも何日かは口を聞かないと思っていたがティアナは普通に挨拶してきたため千明はティアナについて聞いたのだ。

そしてスバルが言うと千明、エリオ、キャロがスバルの方を向く。

「スバルもか？」

「うん。だって……。 “胸” 揉んでも怒らないもん。」

「ぶっ！」

「ええっ！」

「っ！」

スバルが言った言葉に千明とエリオとキヤロは顔を真っ赤にし、キヤロを無意識に胸を隠す。スバルが言った言葉は青年の千明はともかく、まだ子供のエリオとキヤロには刺激が強い。千明は腕で顔を隠すようにして少し下がり、エリオは頭を必死に抱えながら俯き、キヤロは胸を隠しながらなにかぶつぶつ言っている。その様子を見たスバルはきよとした顔で千明達を見ていた。

「ねえ……どうしたのみんな？」

「お……お前さっき何言ったかわかってんのかよ！」

「何って……“胸”を」

「それだよ！お前それをさらっと口に出すんじゃないやねえよ！」

「？」

「何騒いでるんだ……？」

スバルが言った言葉で騒ぎ始めた千明に対して丈瑠は千明を不思議そうに見る。ちなみに丈瑠達が座っているテーブルはスバル達から遠いせいか聞こえてない。そしてスバル達がいるテーブルの近くにいる管理局員は顔を真っ赤にしていた。ティアナが戻ってきて、スバル達に戻ってくるとようやく騒ぎが静まった。

「何騒いでんのよあんた達？」

「あ！な、なんでもないです！」

「う・・・うん！」

「？」

「あ・・・そ、そっぴやお前らが持つてる“武器”になんか込められたとこみたんだけどさ、あれって何だ？」

ティアナが戻ってくると千明達は我を戻し、先ほどどんな会話をしていたかわからないティアナを無視して千明はすぐに話題を変えようとす。それに応じるかのようにエリオとキャロも口を開く。

「えっと・・・千明さんが言ってるのは僕達を使う“デバイス”の
“カートリッジシステム”のことですね？」

「かーとりっじしすてむ？」

「はい。僕達を使うデバイスに“カートリッジシステム”は使うこ
とで一時的に魔力を上げて威力を上げることが出来るんです。それ
とこれがそれに使うカートリッジです。」

エリオは話すうちに落ち着きが戻ってきて、千明にカートリッジシ
ステムについて軽く説明し、自分が使うカートリッジを見せ、千明
に渡す。千明は渡されたカートリッジを不思議そうに手に取って眺
める。

「・・・どうみても弾丸だよな。」

「それに魔力を込めないと使えないんですよ。」

「ふーん・・・。」

「そういえば千明さんが使ってるシンケンマルはディスクデバイスみたいなもの使ってますね。」

「ああ、これのことか？」

千明はエリオに言われると自分が使う緑色のディスク“熊ディスク”とオレンジ色の“兜ディスク”を取り出してテーブルに置く。そのディスクをスバルは熊ディスク、エリオは兜ディスクを手に取ると見回すように見る。

「スバルが持つてるディスクは俺が持つてる熊ディスクの力が折りこまれてな、エリオが持つてる兜ディスクは“兜折神”が折りたたんでるぜ。」

「えっ？折神って千明さんが持つてるエンブレムみたいなものじゃないんですか？」

エリオ達は千明がそう言う顔と顔を全員千明に向ける。エリオ達が知っている折神はエンブレムモードになっている獅子、龍、亀、熊、猿折神しか知らない。その折神がディスクに折りたたまれることとは思いつかなかった。

「まあ折神にもいろいろあるんだよ。エリオが持つてるディスクに“兜折神”が折りたたんでな、熊ディスクと同じように使えるんだけどこれ使いこなすのモチカラ結構使うんだよな……。」

「それって……どれくらい使うんですか？」

「うーん……お前らが使うカートリッジに例えれば、スバルが持つてる“熊ディスク”を一発と例えるんならエリオが持つてる兜ディスクは二、三発ぐらいじゃねえか？」

「さ……三発もですか！」

千明がそう言うつとスバル達は一斉に驚く。千明はカートリッジシステムについてよく知らない。千明はカートリッジの扱いは熊ディスクと同じようだと思いきや、スバル達の反応を見て“あれ？”とした顔で見えていた。そしてエリオは兜ディスクをゆっくりとテーブルに下ろしながら千明に顔を向けて口を開く。

「兜ディスクって……そんなに強力なんですか？」

「まあ・・・そうだな。」

兜ディスクはモチカラも戦闘能力が高いシンケンレッドでさえも最初は扱えなかったほどの力を持っていて、扱うにはシンケンレッドで言うと少なくとも獅子ディスクの2倍のモチカラが必要であつて、扱いよつては使用する自分が傷ついてしまうほどだつた。戦いが進む中シンケンジャー達も強くなつていったが、それでも千明は最初に兜ディスクを使用した時には発動せずアヤカシを逃がしてしまつたことがあつたが、いろいろあつて兜ディスクを使いこなせるようになつて現在千明が所持している。

千明達がそんな会話をしている時、千明の後ろから丈瑠が話しかけてくる。

「千明、そろそろ行くぞ。」

「あ、わりい。そろそろ行くから返してくれ。」

「あ、はい。」

千明は兜ディスクと熊ディスクを返してもらつとすぐにしまい、

文瑠とともに食堂に立ち去って行った。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 20:04』

千明がスバル達と別れて時間が立ち、街頭の明かりで少し明るいがあたりは暗い。そして裏庭にはティアナとティアナを操っているアヤカシ“ヒトミダマ”がいる。ティアナはヒトミダマに今日のことを報告しているようだった。ちなみに裏庭には外道衆が入ってこないようにモチカラで結界が張ってあるがヒトミダマは新たな能力で結界に入れるようになっている。

「小娘。報告を頼むぞ。」

「はい。かしこまりました。」

ティアナはヒトミダマに今日の出来事を報告する。そして、ヒトミダマは熊ディスクと聞くと顔に怒りを露わし、ティアナを思いつきり殴りかかる。殴られたティアナは吹き飛んで倒れる。その時ティアナのデバイス“クロスミラージユ”もティアナから離れてティアナの横に落ちる。

「貴様ア！なぜ秘伝ディスクを持ってこなかった！シンケンジャーは秘伝ディスクがなければただの“侍”しかならぬのに！」

「申し訳……ありません。」

ヒトミダマがティアナを殴った理由はティアナが秘伝ディスクを持ってこなかっただけだからだ。秘伝ディスクは技ディスク、折神が折りたたまれたディスクなどと数が多い。そのうち一つでもディスクがなくなれば少なくともシンケンジャーの弱体化は可能だ。そのためヒトミダマは秘伝ディスクを持ってこれるチャンスがあったティアナが持ってこなかったため、ティアナを殴ったのだ。

ティアナは落ちたクロスミラージュを持ち、殴られた頬を手で押さえながらゆっくりと立ち上がるとヒトミダマはティアナに今後の予定を聞く。

「小娘。今後は何がある？」

「はい……。五日後の午後に模擬戦の予定があります。」

「模擬戦か……。」

ヒトミダマは模擬戦と聞くと顔に笑みを浮かべ、木の方に行く。
そしてティアナの方を向かずに口を開く。

「よし、小娘。また明日ここに来るぞ。それと小娘の“武器”。一
応言っとくが、何かしたら小娘の命はない！わかったか！」

ヒトミダマはティアナと初めて出会った時、クロスミラージユが
ティアナに警告していたことに気づいていた。そのせいかヒトミダ
マはクロスミラージユに警告し、木の“スキマ”へと消えていく。
ティアナはヒトミダマがいなくなると裏庭から出て隊員寮へ戻って
いった。

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設 11:32』

ティアナがヒトミダマに報告してから数日後、そろそろ昼の訓練
が終わる時間帯に訓練所では千明の姿があった。千明は時間を見つ
ければ訓練所に足を運び、ティアナの様子を見に行ってたのだ。千

明は廃墟が写し出されている訓練所を遠くから見ている時、丈瑠が千明に近づいてくる。

「千明、またここにいたのか。」

「丈瑠……。またって知ってたのかよ……。。」

「お前の行動ぐらいはな。」

丈瑠は千明の隣に行くと同じようにフォワードの訓練の様子を見る。訓練の様子を見ながら丈瑠は口を開く。

「千明。何か気になることでもあるのか？」

「……。なんでもねえよ。」

「……。そうか。」

千明は丈瑠に気を使わせたくないのか、そう言う。丈瑠は千明が何か隠していることを悟っていたが、あえてそのことは聞かず、そのまま去っていった。そのあと、千明は少し見た後丈瑠と同じように去っていった。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 13:08』

そしてまた数日後。今日は模擬戦の日。今日は裏庭でシンケンジャー達はシグナムとともに“稽古”することになった。スキマセンサーはまだ余っているものの、数が少なくなってきたので彦馬が「久しぶりに稽古をなされてはいかがでしょうか？」と言われ、残りのスキマセンサーを黒子と彦馬に任せてシンケンジャー達は稽古することになったのだが、千明の姿がない。千明の姿がないことにはシンケンジャー達もシグナムもすぐに気づいていた。

「谷の姿が見当たらないな……。」

「おそらく、抜け出したのだな。」

「何……?」

千明が稽古を抜け出したと聞くとシグナムの眉をピクリと動かす。そして茉莉が続けるかのように口を開く。

「千明、たまに稽古を抜け出すことあるんだよね……。」

「ま、大体が黒子に見つかって捕らえられるのがオチだな。」

「そうか。わかった。」

シグナムは茉莉と流ノ介に聞くと木刀を怒りを表すかのようにギョツと握る。それを見たことは少し怯える。

その頃千明は訓練施設に来ていた。千明は今日が模擬戦だと聞き、気になったので稽古を抜け出して模擬戦の様子を見ていた。千明が来たところにはすでにヴィータとフェイト、そしてエリオとキヤロがいた。

「あ、千明さん。稽古抜け出してきたの？」

「ああ。ちょっと模擬戦を見たくてな。」

「覚悟した方がいいぜ？シグナムの奴怒るとこえーからな。」

フェイト達は今日シンケンジャー達とシグナムが稽古をすると言っている。シンケンジャーの千明がここに来るといえることは稽古を抜け出したと考えるのが正しい。ヴィータは千明に茶化すように言う。千明の身体は少し強張る。千明はそれを堪えて模擬戦を見ている。今スバルとティアナが隊長なのはを相手に模擬戦をしている最中だった。

そしてフェイトとヴィータ達はスバルとティアナの動きに異変を感じ、雲行きがおかしくなっていることに気づく。そして、センチガードのティアナがなのはに対して接近攻撃を仕掛けてくることに千明が気づくと千明はそれを止めようと走り出す。千明の行動にフェイトは気づくがすでにフェイトの前を走っていたので止めようと声をかける。

「千明さん！戻って！」

千明はそれを聞かず、そのままティアナのもとに走っていく。

そのころなのははレイジングハートを待機モードにし、ティアナ

のクロスミラージユから出した刃とスバルの手を素手で止めていた。

「おかしいな……。二人とも、頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ?」

「な……。なのは……。さん。」

「なのにこんな危険な作戦して……。訓練の時は聞いてるふりして模擬戦で違う動きじゃ訓練の意味、ないよね?私の教導、間違ってる?」

なのはは無表情のままティアナを見ながら言う。スバルはなのはを見て怯えているが、ティアナは違った。ティアナはこんな状況下なのに無表情だ。そして、ティアナは刃を消すと大きく下がりウイングロードに立つ。スバルとなのはは今のティアナの様子がおかしいとすぐに気づく。

「……。ティア、どうしたの?」

「……………」

スバルは震えた声のままティアナに問うが、何も返事をしない。それなのにティアナはなのはにクロスミラージユを構えると自分の前にレーザーサイトを出す。なのは何か魔法を撃とうと気づき、脅しのつもりですぐに手をティアナに向けて魔力弾を形成する。なのはティアナを止めさせようと警告する。

「ティアナ……やめなさい……。」

「……ファントム・ブレ」

「……クロスファイアー、ショート」

「止める……！！！」

なのはがクロスファイアーを撃とうとするとき千明がこっちに走ってきて止めようとする。だがなのはは構わず遠距離狙撃砲、“ファントムブレイザー”を撃とうとするティアナをなのははクロスファイアーを撃ち、ティアナに直撃する。直撃した時煙が発生し、今どうなってるかわからない。そんな時に千明が宙にいるなのはにティアナを撃つたことについて声を上げてきた。

「なのは！お前なんでティアナを撃った！今の撃つ必要ないだろ！」

「千明さん……、今訓練中だよ？下がっててくれる？」

「何だと！」

千明はなのはにそう聞くと耳を疑うように声を上げる。そして煙が晴れるにつれてそこにはいるもしないはずのシルエットが見えてくる。

「おいおい……、せつかくの“イベント”のメインに傷つかれちゃあ困るんだよオ！」

「だ……誰！」

千明達は煙から聞きなれない声があると、なのはは先ほどの様子とは違い、声ができる方へ警戒する。そして、煙が晴ればそこにはアヤカシ“ヒトミダマ”がティアナを守るかのように盾を構えて立っていた。ヒトミダマが持つ盾には少し焦げ目があり、そこから煙

が少したっていた。

第十三幕 ティアナの異変（後書き）

作「今回は地震が起きてたため今回の紹介はなしです！そして駄文でごめんなさい！でもこのあとは出来ているので近いうちに書きます！」

作「時間が立つて安心できそうなんで追記しました。あと紹介もします。今回は龍折神です。」

龍折神

- ・全長：52.3 m
- ・全幅：8.5 m
- ・全高：19.3 m
- ・重量：420 t
- ・最高速度：600 km

出力：300万馬力（データは全て大変化後のアニマルモード）
ブルーが所有する龍型の折神。エンブレム状態の形状は正六角形。空を飛び水のように自由自在に長さを変える。口から水流を吐く「龍瀑布りゅうたふぐ」という技を使用できる。シンケンオーの兜「シンケンオーメット」もここに収容されている。シンケンオーの左足になる。

作「前回のあとがきでアヤカシ戦と書きちゃったけどそれは後になりそうです……。ちなみにこの後のことは出来てゐることは本当なんで近いうちに書きます。地震の恐ろしさでまさかの駄文……。本当にごめんなさい……。」「

第十四幕 スバル対ティアナ（前書き）

作「地震怖いな・・・」

今回はタイトル通りです。」

第十四幕 スバル対ティアナ

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設 13:22』

ここは機動六課の訓練施設。先ほどここでスバル&ティアナ対なのは模擬戦が行われていた。しかし雲行きが怪しくなり、そしてとうとうティアナは教導を無視した危険な行動を起こし、なのはに“撃墜”されたかに見えた。しかし、ティアナは撃墜されず、変わりにアヤカシ“ヒトミダマ”がティアナをかばったことにより状況は変わった。

今訓練施設にいるのは、ウィングロードに立っているスバル、ティアナ、なのは。地上にいてスバル達の近くにいるのはシンケンジャーの千明。そして少し離れたところにヴィータ、フェイト、エリオ、キャロとフリード。そして、ティアナの前に立っているのはアヤカシ、ヒトミダマだ。

ヒトミダマが現れたことにより生まれた硬直が訓練施設の中を漂っていて、最初に口を開いたのは千明だ。

「テメエは外道衆！なんでお前がここに居んだよ！」

訓練施設には今ことはのモチカラで作られた結界で外道衆が入れ

ないようになっていいる。しかし、外道衆のアヤカシであるヒトミダマがここにいることは普通では考えられなかった。ヒトミダマは得意気にしゃべり始める。

「久しぶりだなアシンケンジャー！今回は一人かア？」

「うるせエ！お前ティアナから離れる！」

千明はヒトミダマにそう叫んで言うが、千明が言い終わると同時にティアナが千明に向けて魔力弾を撃ってくる。魔力弾は千明の足もとに当たるが千明がいきなりのもので驚きながらもなんとか避ける。

「うわっ！」

「ティアナ！なんで撃つたの！千明さんは関係ないよ！」

なのははティアナを千明を撃つたことが信じられず、ティアナに

向けて声を張り上げて言う。しかし、ティアナはいまだに無表情。そして目が異常に紫色に染まっている。そして再びヒトミダマがしゃべり出す。

「無駄だア！今のこのティアナ小娘は俺の操り人形同然！お前らがなんと言おうとも俺の操りからは逃れられない！」

「そ……そんな……。」

ヒトミダマの言葉にショックを受けるスバル。ティアナはヒトミダマに恐れるどころかヒトミダマの横に立ち、クロスミラーシユを構えている。本来ならばティアナはヒトミダマから離れていてもおかしくない状況だが、この様子を見ればティアナはヒトミダマに操られているということが考えられる。

そして、千明がヒトミダマを睨みつけながら声を上げる。

「外道衆！なんでティアナを操った！」

「理由？そんなものはどうでもいい。小娘！奴らを始末しろ！」

「・・・かしこまりました。」

「！ティ・・・ティアツ！」

スバルはティアナを止めようと声を上げるが、声はティアナの耳には届かず、ヒトミダマはティアナに指示を送るとティアナは魔力弾を撃ち始める。魔力弾は誘導性があり、魔力弾は千明、スバル、なのはにカーブを描くように飛んでいく。スバルとなのはは防御魔法で防ぐが千明はなんとか避けるものの誘導性があるため千明のもとに戻って飛んでくる。

「ちっ！」

「小娘！あの青い小娘に集中攻撃だ！」

千明は舌打ちをしながらをシヨドウフォンを筆モードにして、宙に「刀」を書いてそれを反転し、シンケンマルを出せばぎりぎりのところで魔力弾を切り払う。千明はシンケンマルを片手で持ちヒトミダマを睨む。ティアナはヒトミダマに指示された通りにスバルを集中攻撃を仕掛ける。スバルはウィングロードを走って必死に避けている。ティアナは操られているせいか、ためらいもなくスバルに

魔力弾を撃ち続けている。スバルは操られているとわかっていてもティアナを止めさせようと声をかけ続ける。

「ティアア！止めて！目を覚ましてよ！」

「……………」

スバルの声はティアアナには届いてないのか、それでも魔力弾を撃ち続ける。そんな中なのはレイジングハートを起動させて元凶であるヒトミダマに矛先を向ける。しかしヒトミダマはレイジングハートを突きつけられているにもかかわらずにやにやと笑みを浮かべている。そしてヒトミダマが口を開く。

「おや、俺に攻撃しても構わないが小娘がどうなってもいいのか？」

「えっ……………」

ヒトミダマの言葉を聞くとなのはすぐにティアナを見る。なの

はの目に映ったものはティアナが自分の首にクロスミラージユの銃先を突きつけていた。なのははそれを見て、もしヒトミダマを攻撃すればティアナは自ら命を絶つとすぐに脳裏を横切った。

「そこにいると邪魔だ！おとなしく下がってろ！」

「ッ！」

ヒトミダマはなのはに自分の持つ盾から放たれる光の球を撃つ。なのはは防衛魔法“プロテクション”でなんとか防ぎながら後退し、地面へと着地する。なのはがヒトミダマから離れるとティアナはクロスミラージユを首からスバルに向けて標準を変える。それを見たヒトミダマはスバルに対して口を開く。

「その青い小娘！今からこいつー（ティアナのことを指す）と“本気”で戦え！手を抜いたりしたらすぐにこいつを自殺させる！」

「！そ……そんなの……無理だよ……。」

ヒトミダマが出した提案を受け入れられないスバル。ティアナとは掛け替えのないパートナーだ。そのティアナとは本気では戦えるはずもない。しかし、無理と言った瞬間千明からの声が聞こえる。

「スバル！今は奴の言うとおりにしろ！でないといつ本気でティアナを自殺させるぞ！」

「ええっ！そんな・・・！」

千明の言葉を聞き、すぐにティアナの方を向く。すると千明が言った通りにティアナは自分の首にクロスミラージュを突きつけている。そしてティアナの人差し指にはクロスミラージュの引き金に移動していることとスバルはすぐにわかった。スバルは慌てた様子で口を開く。

「わかった！わかったからティアナを殺さないで！」

「クッククク・・・、最初からそうしておけばよかったもの・・・。」

ヒトミダマは不気味に笑い、ティアナはクロスミラージユを下す。スバルはほっとするが、ティアナははすぐにスバルに向けて魔力弾を撃つ。

「くっ……！はあぁっ！」

スバルはリボルバーナックルを装備している右手でティアナに殴りかかる。ティアナはリボルバーナックルをぎりぎりで避け、ティアナはクロスミラージユの銃先から刃を出してスバルに斬りかかる。スバルはそれを避けながら蹴りを出す。蹴りはティアナに当たらないがティアナは下がり距離が開いてしまい、ティアナは刃を無くせば再び魔力弾を撃つ。

スバルとティアナが今やっていることは模擬戦ではなく組手でもない。アヤカシ“ヒトミダマ”に強制的に戦わされている。幸いヒトミダマは彼女達が持っているデバイスが今“非殺傷設定”にしてあることとは気づいてないが、それがいつ気づかれるかわからない。そしてスバル達は今ティアナがクロスミラージユを“殺傷”にしてるか“非殺傷”にしているかそれわからない。ティアナを操っているヒトミダマを倒せば、ティアナは操りから解放できると思えるが、当然そんなことしようとするとティアナは自殺をしようとす

だからと言ってティアナを拘束させて倒すって言う手もあるが、アヤカシの力がまだよくわからないのは達には手が出せずにいた。ちなみにヒトミダマは廃墟のビルの屋上で戦いを楽しそうに見物している。

千明の所になのは達が来て、ヴィータは何度も外道衆と戦ってきた千明に何か策はないかと聞き始める。

「千明！お前あいつと戦ったことあんだろ！何かいいアイデアとかないのか！」

「確かに戦ったことあんだけどよ、今じゃあヒトミダマあいつに手出せねえし、ティアナを操りから解放すんのもモチカラを打ち込むしかねえんだけど……。」

千明は頭を抱えて悩み始める。ヒトミダマとは以前戦ったことあったが、その時はシンケンブルーの流ノ介が操られてしまい、シンケンレッドの文瑠が強制的に戦う形になってしまった。しかし、その時の戦いはシンケンレッドが事前に何もモチカラが込められてないディスク「白ディスク」に「反」というモチカラを込め、それをシンケンマルに装着してシンケンブルーと戦い、一瞬の間をついてシンケンマルを通してモチカラを打ち込み、シンケンブルーをヒトミダマの操りから解放出来た。しかし、今は操られたティアナと戦っているのはスバルであり、シンケンジャーではない。例えシンケ

ンジャーである千明が戦ったとしても「反」のモチカラを込めた白ディスクは持つてないし、あつたとしてもティアナにうまく打ち込めるかわからない。千明は頭を抱えながら考えるが、なかなかいい案が浮かんでこない。千明が下を向くと、自分の足もとにはリボルバータイプの拳銃の弾倉のようなものがあつた。千明はそれを手に取ると何なのかなのは達に聞く。

「おい、これなんだ？」

「おい！こんな時に」

「こんな時でもいいから教える！」

今スバルとティアナが無理やり“戦わされている中、千明が言っていることは今は非常識のようなもの。しかし、千明はこれがなんなのか知りたがってたらしく、なのはが千明が持つてるものの説明を始める。

「それ、スバルが使うデバイスのカートリッジだね？」

「カートリッジ？・・・！」

千明はカートリッジと聞くとこの間スバル達とカートリッジについて思い出し、この言葉が横切る。

『それに魔力を込めないと使えないですよ。』

「もしかしたら……。おい！これまだ使えるか！」

千明はカートリッジについて思い出すとなのはに拾ったカートリッジが使えるかどうか聞き始める。急に聞かれたのはは少し慌てるも落ち着いて口を開く。

「お……落ち着いて！スバルのカートリッジは壊れてなければ何度でも使えるけど……。」

「そうか！なら……！」

「お、おい……。何する気だ！」

ヴィータは千明が何をするか聞こうとしたが、千明は無視してシヨドウフォンを筆モードにして宙に「反」と書いて、捨ったスバルのカートリッジにモチカラを込める。するとモチカラはカートリッジに吸い込まれるように入っていく、少し「反」と薄く浮き上がる。千明は再びカートリッジに「反」とモチカラを打ち込み、カートリッジに「反」という字が濃くなるまで込め続ける。

千明がカートリッジにモチカラを打ち込んでいる中、スバルとティアナはウィングロードの上での“殺し合い”はそろそろ決着がつきそうになっていた。スバルはティアナのクロスミラージユから出る刃から受けた傷がついて息を整えているが、ティアナはちよつと傷がついた程度だが同じように息を乱している。スバルはさっきまでティアナを傷つけない思いがあり、攻撃する際ぎりぎりティアナに当たるように攻撃してきた。しかし、ティアナは操られているせいか本気でかかってきているためダメージの方はスバルの方が強い。スバルは体力、魔力とも優れているがティアナの攻撃を避けたりぎりぎり当たるように攻撃してきたため疲れが出ている。スバルはティアナと戦う際カートリッジを使っない。それはティアナを出来るだけ傷つけないため、あえて使わず戦ってきた。だが、そろそろ限界が見え始めた時、地上にいる千明から声が聞こえてくる。

「スバル！これを使えー！ー！！」

「千明さん！っ！」

千明はスバルに対して何か投げつけてきた。スバルは受け止めるとそれは布で包まれたものだった。スバルは布を取ると中身はスバルのカートリッジだった。しかし、そのカートリッジはいつもと違い、「反」という字が濃く書かれている。ちなみにこれが何て読むか当然スバルにはわからない。

「千明さん！これって……！」

「これをティアナに打ち込め！」

「！青い小娘！貴様、本気で戦ってなかったのか！」

「！あ……あの……その……。」

ヒトミダマは千明がスバルに渡されたものの存在に気づくとスバルが本気で戦ってないと思ひ込み、スバルに対して声を上げる。スバルは本気で戦ってないとバレたかと思ひ、慌てるが千明はヒトミダマに対して聞こえるように大声で言う。

「俺はただ“弾切れ”を起こしていたスバルにただ弾薬を上げただけだぜ！」

「ふん、そうか。ならば早くそう言え！」

もちろんこれは千明の嘘だが、ヒトミダマはデバイスのことはよく知らないため、弾切れだと思い込んでしまいそのまま見物に戻る。スバルは何が何だかわからないまま、千明から渡されたカートリッジをリボルバーナックルに今装填されてたカートリッジと交換する。

「スバル！それを何としてもティアナに打ち込め！いいな！」

「は・・・はい！」

「千明さん！どうする気なの！」

千明はスバルに何としてもティアナに打ち込むように釘付け、ス

バルは頷き、カートリッジをロードする。するとスバルのリボルバーナツクルはオレンジ色のエネルギー状に包まれ、スバルは構え、そしてティアナに対して殴りかかる。

「（何がなんだかよくわからないけど……。今は千明さんを信じるしかない！）」

「うおおおおおお！！」

スバルは頭の中では混乱していたが、今は千明を信じることにし、オレンジ色のエネルギー状に包まれたリボルバーナツクルでティアナに殴りかかる。ティアナもクロスミラージュの銃先から出る刃で対抗するが、スバルに懐に入られてしまいスバルのリボルバーナツクルはティアナの腹に直撃し、オレンジ色のエネルギー状はティアナの中に入り、ティアナはくの字に曲がる。

スバルがティアナを殴った瞬間ヒトミダマは「おっ！」と喜んでいるように声を出し、なのは達は顔を青ざめる。しかし、千明は何かを願っているかのような顔をしてスバル達を見ていた。そして、スバルがティアナから離れた時、ティアナは殴られた腹を押さえて苦しみだす。

「ぐ……ああ……!」

「テイ……ティアツ!」

「ぐうう……アアアアアアアアアアアアアア!……!……!」

「ティア!」

スバルは苦しみだしたティアナを心配して近寄る。するとティアナの前から「反」という字が浮かび上がり、字はティアナの殴られたところから吸い込まれるように入っていく。するとティアナは悲鳴とともに全身から紫色の光が現れ、それが上に集まり球状になるとティアナから離れていき、紫色の光の球ははじけるように消えてなくなる。光がなくなるとティアナは崩れるようにスバルに寄りかかり、目が開くもののすぐに目を閉じ、疲れがたまっていたからか気を失ってしまう。

その様子を見ていた千明は「よっしゃあ!」と叫びながらガッツポーズを取り、なのは達は何が起こったのかわからないでいて、ヒトミダマは驚いた様子でいた。ヒトミダマは千明に対して何をしたか問い始める。

「貴様!何をした!」

「何をしたって・・・、モチカラを打ち込んだに決まってるんだろ！」

「何イ！」

「千明さん！どういふことなの！」

千明の言葉を聞くとヒトミダマだけではなくのは達も食いつくように千明に問う。千明は笑みを浮かべながら口を開く。

「外道衆。お前の“術”はモチカラで打ち消すことが出来るっです
でにわかってたんだよ。だけどティアナをお前の“術”から解放さ
せるにはモチカラを打ち込むしかない。あんときはディスクを使っ
て打ち込んだんだけど、スバルの武器デバイスからモチカラを打ち込め
るかどうか、“賭け”に等しかつたけどな。」

「な・・・何だとオ！」

「ええっ！千明さん！それ早く言ってよ！」

「そうだっ！なんで言わなかったんだテメエ！」

「さっきは急いでたから仕方がなかったんだ！怒るなって！」

千明は説明した後、なのは達は千明が自分達に事前に言わなかったことに対して問い詰めようとして千明が収まらせようとした時、スバルが装備しているリボルバーナックルが突然軽い爆発を起こして隙間から煙を起こし、動かなくなってしまった。突然のことに驚くスバルだが、それよりも千明から声がかかる。

「あ……あれ！あたしのリボルバーナックルが……！」

「スバル！お前はティアナを連れて逃げる！」

「そうはさせるかッ！」

千明の声を聞いたスバルはリボルバーナックルを解除してティアナを背負い、今いる場から離れようとするが、逃がすかと言ってるように叫びながらヒトミダマは顔に紫色の光を集める。しかし、その紫色の光が放たれる前に突然訓練施設が廃墟からコンクリート一面に代わり、ビルに建っていたヒトミダマは真下に落ちてしまう。

「うッ！うああああー！！」

「えっ！景色が変わった！」

『みなさん！驚かせてすみません！さっき訓練施設を廃墟からコンクリートに変えただけです！』

「シャーリー！」

突然廃墟からコンクリート一面が変わったことで驚くのは達に事情を説明するようになるのは達の前からモニターが現れて、モニター越しからシャーリーが説明する。そして後ろから丈瑠、流ノ介、茉莉、ことはの残りのシンケンジャー達とシグナムが走ってきてなのは達のもとに来る。ちなみにさっきまで“稽古”してたからか、丈瑠達とシグナムは機動六課で支給された体操着を着用している。

ヒトミダマは地面に落下した時のダメージがまだ残っており、よろけながらゆっくり立ち上がるとシンケンジャーがそろったことに驚きを隠せないでいた。

「シンケンジャー！なぜここに・・・！」

「それはこいつが教えてくれたからだ。」

文瑠はそう言うと千明の手に何かが乗っかる。その正体は千明が所有する折神でアニマルモードになっている“熊折神”だ。

「この熊折神が来て、ついていくと思えばアヤカシがいたとはな。」

「それに気づいてシャーリーさんにちょっとお願いしたんだよね。訓練施設の設定を変えるように。」

「でも……アヤカシがいるってことはうちの結界の張り方、甘かったのかな……?」

文瑠と茉莉は落ち着いた様子で言い、熊折神はエンブレムモードになんて千明はそれをしまう。ことはここに外道衆がいることに對して自分の結界の張り方が甘かったと思いしょんぼりするが、文瑠は口を開く。

「そのことは後だ！まずは外道衆を倒すぞ！行くぞ、千明にお前達！」

「おっ！」

丈瑠はシヨドウフォンを取り出すと他のシンケンジャー達も取り出し、筆モードにすると一斉に構える。そして、同時に叫ぶ。

「筆奏上！」

第十四幕 スバル対ティアナ（後書き）

作「今回は亀折神について紹介です。」

かめ
おりがみ
亀折神 / 天のエンブレム

- ・全長：14.6 m
 - ・全幅：17.2 m
 - ・全高：7 m
 - ・重量：130 t
 - ・最高速度：200 km
 - ・出力：100万馬力（データは大変化後のアニマルモード）
- ピンクが所有する亀（海亀）型の折神。エンブレム状態の形状は円形。カッターのようなひれで攻撃。高速回転することにより台風や竜巻も発生させる。シンケンオーの右腕になる。

作「なのはの魔王化フラグなんですが、最初は千明がティアナと会話させて魔王化フラグを消そうと思ってましたが、結果的にこんな風になんてしまいました。」

そしてスバルのリボルバーナックルなんですが、モチカラを発動させたのはいいものの、モチカラの力に耐えきれず故障を起こしてしまっただつということになってます。

今回も無理やり感がある……。しかもここまで長引くとは思わなかった……。今回はようやくアヤカシ戦です。ここまで長引いてしまっただつごめんなさい。」

第十五幕 アヤカシの謎（前書き）

作「今までアヤカシに2の目を排除して新たな能力を付けるっていう方針だったんですが、最近ホントにこれでいいのか悩みはじめ、なかなか決められないのでアンケートを取りたいと思います。

アンケート内容は、「1、戦隊シリーズのようにアヤカシに2の目（巨大化）させてシンケンオー（侍巨人）で戦わせるか。

2、今のままアヤカシに1の目（人間サイズ）だけで、2の目の代わりに新たな能力を付けたままにさせるか。」

この二つのどれかがいいか教えてください。期限は短いですが、3/19（土）までです。アンケートの回答はメッセージと感想にお願いします。ちなみに侍巨人戦の場合、なのは達は実況？みたいな感じになります。

今回はアヤカシ戦です。」

第十五幕 アヤカシの謎

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設 13:49』

千明の発想により、スバルのリボルバーナックルの故障を引き換えにテイアナを操りから解放出来たなのは達。そしてスキマに逃げ込もうとするがその前に施設を“廃墟”から“コンクリート”に変えられてスキマがなくなり逃げる事が失敗に終わってしまったアヤカシ、“ヒトミダマ”。そしてアヤカシの前に集まったシンケンジャー達。丈瑠の掛け声とともに彼らはシヨドウフォンを“筆モード”にして構える。

「「「「「一筆奏上！はっ！」「」「」「」

掛け声とともにシンケンジャー達は赤色の“火”、青色の“水”、ピンク色の“天”、緑色の“木”、黄色の“土”を書き、声とともに反転させ、シヨドウフォンのスイッチを押す。スイッチを押すと笛の音が鳴り、笛の音とともに彼らはシンケンジャーの姿へとなっていく。

シンケンレッドとなった丈瑠はベルトから共通ディスクを取り出し、シンケンマルに装着すると抜刀し、両手でシンケンマルを突き出すように構える。

「シンケンレッド！志葉・・・文瑠！」

シンケンレッドは名乗ると同時にシンケンマルを降ろし、担ぐようにシンケンマルを肩に担ぐようにゆっくりと乗せる。次にシンケンブルーとなった流ノ介はベルトから共通ディスクを取り出し、シンケンマルに装着すると横に抜刀する。

「同じくブルー！池波 流ノ介！」

シンケンブルーは名乗りながらシンケンマルを縦に斬るように振り、そして歌舞伎のようにポーズを取る。そして次にシンケンピンクとなった茉莉はベルトから共通ディスクを取り出し、シンケンマルに装着すると斜め上に抜刀する。

「同じくピンク！白石 茉莉！」

シンケンピンクはシンケンマルを降ろし、シンケンマルを半月を描くように片手で持ち上げるとシンケンマルを扇のように構える。そしてまた次にシンケングリーンとなった千明はベルトから共通デイスクを取り出し、シンケンマルに装着して抜刀しそれを振り回しながら背中に回す。

「同じくグリーン！谷 千明！」

シンケングリーンは名乗りながらシンケンマルを前に戻し、シンケンマルの峰を刃先から出るまで撫でて構える。最後にシンケンイエローとなったことは片手でシンケンマルを突きつけるように抜刀する。

「同じくイエロー！花織 こととは！」

シンケンイエローは名乗りながらシンケンマルを両手で降ろし、シンケンマルを横笛を吹くように構える。そしてシンケンレッドはシンケンマルを片手で持ち、もう片方の手を峰に持つと他のシンケンジャーは一斉にシンケンマルを後ろに回しながらしゃがむ。

「天下御免の侍戦隊……！」

シンケンレッドは峰を撫でながら言い、言い終わるとしゃがんだシンケンジャーは一斉に立ち上がりシンケンマルを上段に構え、シンケンレッドもシンケンマルを上段に構える。

「「「シンケンジャー！参る！」「「「」

シンケンジャーは一斉にシンケンマルを降ろすように斬り、そしてそれぞれのポーズを取りながら叫ぶ。

シンケンジャーが名乗り終わると、シンケンジャー達に対して先に声を上げたのはアヤカシの方ではなく、いつの間にか騎士甲冑を身に着けたヴィータだった。ちなみにフェイトはバリアジャケットを身に着け、エリオとキャラコを安全な場所まで避難させている。

「おめーら！ふざけてる暇あつたらさっさと戦え！」

「うっせーな！別にいいだろ！」

「話は後だ。行くぞ！」

戦隊ヒーローでは欠かせない名乗りは、彼女にとって見ればふざけてるようにしか見えないせいかなシンケンジャー達に声を上げる。シンケングリーンはすぐに反論するが、シンケンレッドはそのことを後にし、言い終わると同時にシンケンジャー達はシンケンマルを構え、ヒトミダマ向けて走り出す。

「くそっ！はっ！」

「はっ！」

ヒトミダマは周りにスキマがないと判断すればすぐに顔に紫色に光を集め、紫色の光を数発シンケンジャー達に放つ。しかし、シンケンレッドは走りながら宙に「反」を書き反転させて光を消す。そしてシ紫色の光を消したシンケンジャー達は一斉にヒトミダマに斬りかかる。

「はっ！」

「ふっ！」

「おりゃあっ！」

「ぐああー！」

シンケンジャー達の攻撃はヒトミダマの盾により防いでいく。しかし、長いこと外道衆と戦ってきたシンケンジャー達のチームワークは凄く、ヒトミダマは盾での防戦一方になっていき、とうとう防ぎきれずシンケングリーンのシンケンマルの一撃を受けてしまい、よるけてシンケンジャーから離れていく。

「くそオ・・・よってたかつて俺様を・・・！」

「アクセルシューター！」

よろけながらシンケンジャーを睨むヒトミダマに対し、なのはは魔力弾を4発ヒトミダマにお見舞いする。ヒトミダマはさっきまでシンケンジャー達にしか目が行ってなくてなのは達のことを忘れており、なのはの魔法はヒトミダマに直撃し、さらによろける。

「！ぐふっ！」

「我々もいることを忘れてもらっては困る。はあぁッ！」

ヒトミダマがよろけている隙にシグナムがレヴァンティンで斬りかかるも、ヒトミダマはすぐに盾でレヴァンティンを防ぐ。盾とレヴァンティンがぶつかり合うと鈍い金属音となり、シグナムはヒトミダマが攻撃を仕掛けてくる前にすぐに後ろに下がる。

「まずはあの盾をどうにかしなければな……。」

「だったらアタシに任せな！」

シグナムはヒトミダマの盾の強度を考えながら口に漏らす。するとそこへヴィータが現れ、彼女のデバイス“グラーファイゼン”の一部がスライドするとカートリッジが一つ飛ぶ。するとグラーファイゼンは形を変え、“ラケーテンフォルム”に姿を変える。

【ラケーテンフォルム】

「うおおおおおおお！！ラケーテン！ハンマアアアア！！！」

ヴィータはラケーテンフォルムとなったグラーファイゼンをロケット噴射を利用して回転し、勢いがついたところで回転しながらヒトミダマに勢いよく飛んでいく。ヒトミダマは盾で防ぐも、ハンマ―が盾にぶつかったところから激しく火花が立ち、衝撃がヒトミダマに襲い掛かる。

衝撃がまだ残る体を動かしながら立ち上がろうとする。それを見たシンケングリーンはシンケンレッドにオレンジ色のディスク“兜ディスク”を取り出してシンケンレッドに見せる。するとシンケンレッドは何がしたいのかが分かり、シンケンレッドはシンケンマルに装着した共通ディスクを回転させ、烈火大斬刀に変える。そしてシンケングリーンが兜ディスクを烈火大斬刀に装着し、シンケンレッドとシンケングリーンは烈火大斬刀を構え、二人で烈火大斬刀を振り回す。

「烈火大斬刀！大筒モード！」

シンケンレッドとシンケングリーンが同時に叫ぶと烈火大斬刀は姿を変え大剣からバズーカのように炎に包まれながら“大筒モード”へと変わっていく。

「た、丈瑠さんの^{デバイス}烈火大斬刀が変形した・・・！」

シンケンレッドの烈火大斬刀が大筒モードに変わったことをモニ

ター越しで見ていたシャーリーが驚く。シンケンジャー達は自分の技ディスクを獅子ディスク、龍ディスク、亀ディスク、熊ディスク、猿ディスク、の順番でセットしていく。そしてほかのシンケンジャーはしゃがみ、シンケンレッドは“大筒モード”となった烈火大斬刀をシンケングリーンに渡すように差し出す。

「千明、一緒に行くぞ。」

「おうっ！」

シンケングリーンはシンケンレッドから烈火大斬刀“大筒モード”を受け取り、烈火大斬刀を構えて標準をヒトミダマに向ける。レッドは烈火大斬刀を構え、グリーンはそれを支え、ヒトミダマはよろけながら立ち上がる。そしてヒトミダマは“大筒モード”となった烈火大斬刀を構えるシンケンレッドとグリーンを見て盾で防ごうにも先ほどヴィータに破壊されたためない。ヒトミダマは逃げようとするが、シンケンジャー達はそれを見逃すほど甘くない。

「ぐ……！」

「兜・五輪弾！」

「成敗ッ！」

シンケンレッドとグリーンは叫ぶと同時にレッドは烈火大斬刀の持ち手を前に押し、引き金を引くとセツトされた五つのディスクは高速回転し、モチカラによって作られ、エネルギー弾となった兜折神がセツトされた五つのディスクを包みながらヒトミダマに向けて撃ち出される。

「この俺様が・・・俺様がああああああああああ・・・
・・・・・・・・つ！！！！！！！！！！」

“兜・五輪弾”を受けたヒトミダマはその威力に耐えきれず、叫びながら倒れると同時に爆発を起こす。シンケンレッドは烈火大斬刀をシンケンマルに戻し、シンケンジャー達はすぐにエンブレムモードとなった折神とシヨドウフォンを取り出すが、爆発で起きた炎がなくなっても“2の目”が発動しなかった。シンケンジャー達はいつまでたっても“2の目”が発動しないため折神とシヨドウフォンを戻し、ヒトミダマがいた場所に集まっていく。

「妙だな……。2の目が起きない……。？」

「いつもなら起きていいのに……。なんでだろ？」

「ま、とりあえず“これにて一件落着”でいいんじゃない？」

「……。ああ。そうだな。」

“2の目”が発動しなかったヒトミダマを怪しむシンケンジャー達だったが、シンケングリーンはこれ以上何も起きないと思っただから、そう言うのとシンケンレッドは頷き、ヒトミダマを気にしつつも離れることにした。

『ミッドチルダ 機動六課 デバイスルーム 14：30』

今日に行われた訓練は、外道衆の“ヒトミダマ”が現れたことにより午後の訓練は中止となり、待機となった。そして変身を解除した千明はすぐにデバイスルームに入っていた。千明はティアナを助けるためスバルのカートリッジに「反」のモチカラを込め、それをスバルに渡してモチカラをティアナに打ち込みティアナをヒトミダマの“術”から解放させたのはいいものの結果的にスバルのリポバーナツクルを故障させた結果になり、そのことを責任に感じて

いてスバルに謝るため、スバルがデバイスルームにいると聞くとすぐに向かい、入っていった。

「スバル、いるか？」

「あ、千明さん。大丈夫でしたか？」

「それよりもさ、あん時の模擬戦のことなんだけどさ・・・」

「そのことなら気にしないでください。軽い故障起こしただけなのでちょっと時間かければ直るってシャーリーさん言っていましたし。それにティアナを助けてくれたのは千明さんのおかげなので・・・あの、ありがとうございます！」

「れ、礼なんていいぜ！別に！」

千明はスバルのリボルバーナックルが思ってたより壊れてないこととで少し安心し、それでも謝ろうと思っていたが逆にスバルから感謝されたため照れたのか少し顔を赤くして口に出す。そこにシャーリーがスバルの待機モードになっているデバイスを持ってスバル達の所に歩いてくる。

「あら、邪魔だったかしら？」

「いや、邪魔じゃねえよ。」

「そう？あ、スバルさん。デバイス直ったんで持ってきました。」

「あ、ありがとうございます、シャーリーさん。」

スバルはシャーリーから待機モードのデバイスを受け取り、それを首にかける。スバルはかけた後千明の方を向いて話しかける。

「千明さんはこれからどうするんですか？」

「んー……、ティアナの見舞いに行った後……部隊長室だな。」

「そうなんですか、わかりました。あたしも見舞いに行くんで一緒に行きませんか？」

「別にいいぜ。」

スバルは千明からそう聞くと自分も言っていないか聞き、了承を得ると頷く。このあとシャーリーは千明からシヨドウフォン等貸して欲しいと言ったが、千明は「丈瑠が“渡すな”って言ってたから無理と」と言い、デバイスルームから出て行きスバルの案内で医務室で眠るティアナの見舞いに向かった。

『ミッドチルダ 機動六課 部隊長室 14：52』

千明がスバルとともにティアナの見舞いに行っている時、部隊長室ではシンケンジャー達と彦馬、そしてなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータが集まっていた。彼らが集まった理由は訓練施設に現れたヒトミダマのことについて話し合っていた。そしてさっきまで話し合ってた内容をまとめた彦馬が口を開く。

「今までの話をまとめますと、“ヒトミダマ”というアヤカシは、自らの顔に紫色の光を集め、その光を当てた者を操る術を使いこなすアヤカシです。おそらく、ティアナはおそらく、その術を受けて今まで操られていたことになるでしょう。」

「せやけど、いつティアナが操られておったか問題やな……。」

「おそらく、自主訓練の時だな。それ以外、考えられにくい。」

彦馬の話にはやては思ってたことを口にするが、そこに文瑠は静かに口に出す。文瑠の言葉にだれもが頷くと彦馬がまとめたことを続ける。

「ヒトミダマはアヤカシでありながらも結界が張られていたのにもかかわらず、結界内で行動できましたな。」

「うち、最初結界の張り方がゆるいと思った。」

「でもさっき調べて結界はちゃんと張ってあったと確認されてるよ、ことは。」

「まさか、“ヒトミダマ”は結界に入れる力を持っていたことなるの?」

「でも、普通外道衆は結界内には入れないはずだ。」

彦馬がヒトミダマが結界に入れたことを口にするとは弱気になりながら口に出すが、茉莉は慰めるように否定する。フェイトはヒトミダマに結界が入れる力があると予想したが流ノ介に否定される。

「でもどうして入れたんだろう・・・？」

「2の目が発動しなかったことも気になるが・・・。そこが謎だな。」

「もしかしたら、“復活”したのではなく、“作られた”からでしょうっか？」

なのはは普通は結界内に入れないヒトミダマのことを謎に思うが、話し合っている時に千明とシャーリーが入ってくる。シャーリーはこのアヤカシについて話し合いに参加する予定もあって、見舞いが終わった千明とともに部隊長室に歩いて向かっている時にさっきまで話し合っていたことが聞いてたためか、そう口に出しながら入ってきた。

「シャーリー、仕事中にすまへん。」

「いえ、大丈夫です。アヤカシについてなんですけど、私はそう考えなくてもいいんじゃないかなって・・・。」

「確かに、その可能性もあるな。」

文瑠はシャーリーが考えた仮説に頷く文瑠。そしてシャーリーはヒトミダマについてデータを計測した結果を口に出す。

「先ほど現れたヒトミダマなんですが……。総合能力はAAなんです。アグスタに現れたオオツムジ（総合能力はAAA）と結果が来ました。」

「計測だけじゃ弱くなったのかわからねえな……。」

「でも、今も搜索してるんですが、倒したヒトミダマの場所からはまだ何も反応はありません。」

アグスタでオオツムジを倒した時、ロングアーチであ反応がなくなったオオツムジの場所から“2の目”と新たな反応がすぐに確認できたのだが、今になっても“2の目”と思われる反応がない。それにアヤカシについて少し彦馬から聞いたため、シャーリーは作られたと思った。

結局、そのいろいろと仮説は出たものの、シャーリーが考えた仮説がアヤカシ“ヒトミダマ”に対して有力と認識された。

第十五幕 アヤカシの謎（後書き）

作「今回は熊折神について紹介です」

くま
おりがみ
熊折神 / 木のエンブレム

- ・全長：52.3 m
 - ・全幅：8.5 m
 - ・全高：19.3 m
 - ・重量：420 t
 - ・最高速度：600 km
 - ・出力：300万馬力（データは全て大変化後のアニマルモード）
- グリーンが所有する熊型の折神。エンブレム状態の形状は正方形。大木のような頑丈さで打たれ強い。突進攻撃が得意。シンケンオーの右足になる。

作「アヤカシ戦は結界内で戦ったためナナシは現れず、数が数なため結果的にふるぼっこ？にされてしまった形になりました。」

今回はこの話の終わり方で大丈夫だったかな……。」

第十六幕 モチカラと魔力（前書き）

作「いつになつたら地震が収まるんだろうな・・・。

アンケートなんですけど、まだ時間はあるんですがほぼ確実に1番のシンケンオー戦ありになりましたね。侍武装一（シンケンオーに新たな武器を付けるもの）がどこまで出せるか不安ですが頑張ります。

┌

第十六幕 モチカラと魔力

『ミッドチルダ 機動六課 医務室 20:55』

「ん……ここは……？」

「あ、ティアナ起きたの？」

ここは機動六課の医務室。アヤカシ“ヒトミダマ”に操られていたティアナはゆっくりと目を覚まし、最初に目に映ったのは天井だ。そして声がある方に顔を動かせばシャルルがいた。ティアナは体を起こしてシャルルにここはどこなのか話しかける。

「シャルル先生。ここは……医務室なんですか？」

「ええ、そうよ。貴方は……今まで外道衆に操られていて、さっきまで眠っていたの。」

「そうなんで……ええっ！私が今まで……！」

ティアナはシャマルから自分がアヤカシに操られていたことに驚く。ティアナは今までアヤカシ“ヒトミダマ”に操られていたことは覚えてなかった。ティアナはアヤカシに操られていた時の記憶はなく、裏庭で外道衆に出会ったことまでは覚えていた。裏庭にいたのに急に場所が医務室にいたということに疑問を抱いていたが、シャマルにアヤカシに操られていたことを聞かされると自分がアヤカシに操られている間に周りに迷惑かけてしまったと思ひ込み、強くショックを受け、落ち込むように下を顔に向けると自分がズボンを履いてないことに気づき、思わず顔を赤くする。それを見たシャマルはティアナに話しかける。

「でも大丈夫よ。もう外道衆に操られてないし、みんなに迷惑なんてかけてないわ。はい、これ。」

「あ、ありがとうございます……。あの……。今何日なんですか？」

ティアナはズボンを受け取りそれを履き、シャマルに今何日か話しかける。ティアナはシャマルから何日か聞く。

「もうそんなに立ってたんだ……。」「

ティアナは裏庭でヒトミダマに出会った日を思い出して考えて今一週間ぐらい立っていたことに気づく。次に辺りを見回す。外は真つ暗で、時間が夜九時過ぎに回ったことに気づく。ティアナは今までアヤカシに操られていたことがショックで顔を俯かせる。ティアナは顔を俯かせたままシャマルに話しかける。

「シャマルさん……。今まで何があつたか教えてくれませんか？」

「ええ……。今日模擬戦があつただけど、外道衆が現れて中止。ティアナとスバルが無理やり戦わせられたただけど、千明さんのおかげでティアナは操りから解放されたの。」

「そう……。なんですか。」

「それと、ティアナが眠っている間スバルと千明さんが見舞いに来てくれたのよ。」

「え……。私にですか？」

「ええ。心配していたみたいよ、ティアナのこと。」

「スバルと千明さんが……。私のことを……。」

ティアナはシャマルから今日起こった模擬戦について知ると迷惑かけてしまった思い込むが、見舞いにスバルと千明が来たことを知ると顔を上げる。スバルが見舞いに来るのはともかく、千明は裏庭で千明を追い払うような態度になってしまい千明と喧嘩したのに、見舞いに来るとは思ってたからだ。その後、ティアナはシャマルに今まで起こったことを聞き続けた。

「ミッドチルダ 機動六課 デバイスルーム 20:58」

ティアナが目覚めてシャマルと話している頃、デバイスルームでシャーリーが一人でスバルのカートリッジを調べていた。調べているカートリッジはいつもと違い、「反」と書かれたカートリッジだ。そのカートリッジはスバルが千明から渡され、カートリッジを使ってティアナをヒトミダマの操りから解放させたもので、スバルからデバイス“リボルバーナックル”を受け取り修理する際にこっそり抜き取りカートリッジに残されたモチカラを調べていた。その時、デバイスルームから誰かが入ってくる。シャーリーは手を止めて顔を向けるとそこにははやての姿があった。

「あ、八神部隊長。どうしてここへ？」

「シャーリーこそ何しとるんか？」

「さっきまでスバルちゃんのカートリッジに残されたモチカラついて調べてたんです。」

「へえ、うちも興味ある。今わかってること教えてくれへん？」

「いいですよ。」

はやてはシャーリーからモチカラを調べていると聞くとシャーリーのもとに行き、シャーリーの前に映っているモニターの方を見る。

「モチカラ”は丈瑠さん達のレアスキルです。」

「それはわかつとるで。」

「はい。“モチカラ”は丈瑠さん達にしか使えませんが、私達が使った場合は見ての通り、カートリッジにモチカラを込めて、そのカートリッジをロードして初めて“モチカラ”が発動できます。」

「ふんふん。それで？」

「発動するとき、デバイスの場合は魔力が“モチカラ”を後押しする感じでモチカラが発動するんですが、スバルちゃんのデバイスの

ようにモチカラの力に耐えきれず故障を引き起こしてしちゃうんです。」

は yet はシャーリーからモチカラについて聞きながらうんうんと頷き、シャーリーは話を続ける。

「そして外部の場合。これはあたしの推測なんです、モチカラと魔力がぶつかり合うとそれぞれの効果が増幅する傾向があると思います。」

「ん？なんでや？」

「前に丈瑠さんとシグナムさんの模擬戦ありましたよね？その時シグナムさんの魔法と丈瑠さんの技がぶつかり合った時に二人が出した炎が強く燃え上がったこと覚えてますか？」

「ああ、確かあったな。」

「その時はあまりにも増幅しすぎて逆に爆発を引き起こしたんだと思ってます。ほら、油だつてちよつとなら普通に燃えるけど、量が多いと燃え上がって爆発を引き起こすんじゃないですか。」

はやては丈瑠とシグナムが模擬戦で戦ったことを覚えていて、その時の様子を覚えている。はやてはシャーリーからたとえ話を聞き、考えて少しすると口を開く。

「とうとうと・・・うまく量を調整すれば威力を上げてぶつけることが出来るっちゆうことなん？」

「逆に量が多すぎて爆発起こしてしまうこともありえますね。今回はたまたまうまくいっただけで、次はうまく発動できるかわかりませんね・・・。」

「扱いが難しいんやな・・・。」

シャーリーははやてからそう聞くと苦笑して返答する。デバイスは“モチカラ”に耐えられるように作られているわけではない。スバルが「反」のモチカラを発動できたのはたまたまうまくいっただけで、次は発動できるかわからない。

シャーリーははやてと話しながら“モチカラ”について思っていることを心の中で呟いた。

「（“モチカラ”についてもっと知れば耐えられるようにデバイス
を調整出来るかも……。）」

『ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋 21:16』

場所を変えて丈瑠の部屋。今この部屋では丈瑠、流ノ介、千明が
テーブルの上で何かを書いていた。

「おい、丈瑠……。なんで俺達こんなことしてんだ？」

千明は手を止めて丈瑠の方を向いて聞く。今シンケンジャー達が
書いているものは“猿でもわかるミッドチルダ語（入門編）”と
いう本に載っているミッドチルダ語を書き写しているノートだ。シ
ンケンジャー達はそれをシヨドウフォンでミッドチルダ語を書いて
いる。

「ああ。この世界にいる間、この世界の言葉がわからないと不便だ

「からな。」

「殿の言うとおりだ。千明。黙って書き続けるんだ。」

「はいはい、わかったよ。」

どうしてミッドチルダ語の勉強をしている理由は、彦馬の提案。そしてシンケンジャー達が使っている本のはミッドチルダ語をいつの間にか覚えた黒子からもらったものだ。ちなみにシヨドウフォンを使っている理由は「シヨドウフォンで書けばモチカラの特訓にもなるし、ミッドチルダ語の勉強も出来るから一石二鳥だ！」と流ノ介が言いだしてやっている。

場所を変えてキャラコの部屋。キャラコの部屋にはキャラコ、茉子、ことはがいてキャラコが茉子とことにはミッドチルダ語を教えている。ちなみに茉子とことにはキャラコと同じ部屋を使わせてもらっている。

「あ、ことはさん。書き方間違ってますよ。」

「あ、ほんまや。すまへんな、キャラコちゃん。」

「キャラコ。これでいいかな？」

「うん。その調子です。」

キャラは茉莉とこととはのミッドチルダ語の書き方について教えている。キャラの教え方は何かとわかりやすく、少なくとも丈瑠達よりは進んでいた。最初、キャラはシヨドウフォンでミッドチルダ語を書くことに違和感を感じていたが、もう慣れてしまったのか普通に教えていた。

一方丈瑠達の部屋ではエリオが先ほど来て、丈瑠達にミッドチルダ語を教えてもらっていた。ちなみにそれぞれ書いたミッドチルダ語の一部が間違ってたことにより書き直しを喰らってさらに時間がかかったのはまた別の話。

ミッドチルダ語を書いている時、機動六課中に第一級警戒警報となる。警報がなるとシンケンジャー達は手を止める。

「っ!」

「警戒警報!」

「行くぞ!お前達!」

「はいっ!」

「はっ!」

「おじー！」

シンケンジャー達とエリオとキャロは部屋から飛び出るように出ていき、ヘリポートに向かっていた。

『ミッドチルダ 機動六課 ヘリポート 21:31』

シンケンジャー達とエリオとキャロがヘリポートに着くとちょうど隊長陣とスバルとティアナと合流した。ガジェットがこちらに迫ってきているとの情報の報告と出撃メンバーの選択はヘリポートで行われた。

「今回は空中戦だから、私とフェイト隊長とヴィータ副隊長になるからね。ほかのメンバーは出撃待機することにするね。」

「ああ。俺達は空中戦が出来ないからな。」

「そうだね。それにいつ外道衆が現れるかわからないからね。そのことも兼ねてってことね。」

なのは達から状況の説明を受けているなか、フォワードのティアナが元気そうにない。まだヒトミダマに操られていたことのショックが抜けてないからだ。

なのははティアナの前に歩いて来る。

「ティアナは出撃待機から外れとこうか？」

「!!!」

「そうだな。その方がいい。」

なのはの指摘にヴィータは賛成するが、ティアナは声を震わせながら声を出す。

「外道衆に操られて、迷惑をかけた私は使えないんですか……！」

「！おいティアナ！おめーも命令される立場ならわかってるだろ？お前が言ってることはただの我が儘なんだぞ。」

ティアナが突然口にしたことに驚くのは達。命令されるなら軍人ならば当然だが、ティアナは言い続ける。

「私の気持ちなんか、わかるはずありませんよ……！今まで外道衆の思うように操られてきた、私の気持ちなんか……！」

「おい、いい加減にしろよ……。」

ティアナの肩を掴み、言いだしてきたのは千明だ。千明はティアナの肩を掴みながら口を開く。

「テメエ、あんま調子に乗ってんじゃねえぞ。テメエのことを思っ
て言われたんだって気づかねえのかよ？」

「ち……千明さん……?」

千明の口から出た言葉にこの場にいるなのは達が驚いていて、シンケンジャー達は心配している様子でいた。なのは達は千明が怒っていることに気づいていて、初めてみる千明の様子を見て動揺を隠せなかった。スバルはつい千明の名前を呼んでしまうが、千明はそれを聞こえなかったのかそのまま言い続ける。

「それに、テメエは外道衆に操られて、まだ疲れてんだろ。無茶してるとぜってえぶっ倒れるぞ。」

「私の体のことは私が一番よくわかってるわよ!」

「ッ!この……馬鹿野郎!」

千明はティアナの反論されるとついに我慢の限界になったのか、千明は手を握りティアナに殴りかかる。

ティアナは千明の手が自分の目の前に映ると目を反射的に瞑り、言葉を失ってしまう。しかし、手はティアナの顔に当たる寸前に止

まる。千明の腕は何者かに掴まれて止められていて、千明は自分の腕を掴んでいる手の行方を見ていくと千明の手を止めたのは丈瑠だと気づく。

「丈瑠……。」

「千明、よせ。殴っても何も変わらない。」

「千明さん……。」

千明は丈瑠に言われると無言のまま手を降ろしティアナの肩を掴んでた手を離し、丈瑠とともにティアナからゆっくりと離れる。フエイトは千明の様子から見て、どうしてさっきのようなことをしたのかわからないでいた。しかし、ガジェットが迫っているため考える暇もなく、フエイトはなのはに念話で話しかける。

「『なのは。そろそろ……』」

「『そうだね、フエイトちゃん。シグナムさん。後のことは頼んでもいいですか?』」

「『わかった。』」

なのはとフェイトとヴィータはへりに乗り込み、なのは達を乗せたへりは任務に向かって飛んで行った。残されたフォワード達とシグナム、そしてシンケンジャー達は少しの沈黙の後、シグナムはテイアナに向けて口を開く。

「さあ、いつまでだだをこねてないで自分のことをもう少しわきまえるんだ。」

「・・・」

「あ、あの！シグナム副隊長！」

「なんだ？」

スバルはシグナムに向かって言うが、シグナムの姿勢にいったん引いてしまいが、それでも言い続ける。

「た、確かにティアの言ったことは許されません！でも、ティアはティアなりに強くなるうと思つ気持ちは悪いことなんでしょうか！それに、ティアは外道衆に操られたけど、ティアは迷惑かけてなんかありません！」

「自主練習はいいことだし、強くなりたい気持ちはいいことだよ。それに外道衆は私が発見できなかったせいでもあるから。」

スバルがシグナムに涙目で訴えているとき、シャーリーがヘリポートに来て、そう言う。シグナムはシャーリーに顔を向けて話しかける。

「シャーリー。持ち場はどうした？」

「メインオペレーターはライン曹長がやってくれます。なんかみんな不器用で……。みんなついてきて、なのはさんが伝えたかった教導の意味を教えてあげる……。よかったら、文瑠さん達も聞きますか？」

「……そうさせてもらつ。」

丈瑠が言うと他のシンケンジャーも自分も聞くと言ってるように
頷き、フォワード達とシグナム、そしてシンケンジャー達はシャ
リーについていった。

第十六幕 モチカラと魔力（後書き）

作「今日は猿折神についてです。」

猿折神さるおりがみ / 土のエンブレム

- ・全長：12.5 m
 - ・全幅：18 m
 - ・全高：15.7 m
 - ・重量：130 t
 - ・最高速度：300 km
 - ・出力：100万馬力（データは全て大変化後のアニマルモード）
- イエローが所有する猿型の折神。エンブレム状態の形状は正三角形。重力を無視した身軽さとパンチ攻撃が得意。シンケンオーの左腕になる。ちなみに獅子折神、龍折神、亀折神、熊折神、猿折神は主軸折神で、襲名とともに所持した折神。

作「アンケートの回答ありがとうございました。これからはアヤカシを普通に戻して2の目を発動させて、侍巨人で戦わせる方針とさせていただけようと思います。ありがとうございます。」

今回の千明なんかちょっと短気だったかな・・・。」

第十七幕 教導の意味（前書き）

作「今回のゴーカイジャー面白かったなー……。特にデカレンジ
ヤーの曲流れた時は。」

そして前書きの眩きのネタがなくなってきた。」

第十七幕 教導の意味

『ミッドチルダ 機動六課 ロビー 21:44』

ヘリポートにいたフォワード達とシグナム、そしてシンケンジャー達はシャーリーから教導の意味を聞くためロビーに集まっていた。その中にシャマルもいて、シャーリーはモニターを出すと口を開く。

「昔ね、一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の子で、魔法なんて知りもしなかったり、戦いなんてするような子じゃなかったの。」

シャーリーはモニターを操作すると大きなモニターから小さいころのなのが映し出された。シャーリーは大きなモニターを見ながら言い続ける。

「友達と一緒に学校に行つて、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずだったんだけど、事故が起きたの。魔法学校に通っていたわけでもないし、特別なスキルがあつたわけでもない。」

偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかっただけの、9歳の子が、魔法と出会ってからわずか数か月で命がけの実戦を繰り返してきたの。」

シャーリーは言い終わるとモニターを操作し、大きなモニターから小さいころのなのはとフェイトが戦っているシーンが映し出される。丈瑠、流ノ介、千明はそれを見ると顔が険しくなり、茉莉とことはどこか、悲しそうな顔になる。

「これって……。」

「フェイトさんよ。」

「テストロッサは当時、家庭環境が複雑でな、あるロストロギアを巡って敵同士だったそうだ。この事件はテストロッサの母、プレシア・テストロッサの名を取って“PT事件”または“ジュエルシード事件”と呼ばれるようになった。」

シグナムが言い終わるとシャーリーがモニターを操作し、大きなモニターからなのはがものすごい収束砲を撃つ姿が映し出された。

「収束砲！こんなに大きな！」

「9歳の・・・女の子が！」

「只でさえ、大威力魔法は負担がかかるのに！」

「その後も、戦いは続いた。」

シャーリーが再びモニターを操作すると、今度はなのはとヴィータが戦っているシーンが映し出された。

「私達が深く関わった、闇の書事件。」

「襲撃戦での撃墜未満。そして、敗北・・・。それに打ち勝つために選んだのは、当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステムの使用。体への負担を無視して自身の力を引き出すフルドライブ、エクセリオンモード。誰かを救うため、自分の思いを通すための無茶を高町はしてきた。だが、そんなことを繰り返して身体に負担が生じないはずがない。」

「事故が起きたのは、入局して2年目の冬。任務の帰り、ヴィータ

ちゃんや部隊の人達と出かけた場所、不意に現れた未確認体の襲撃。いつものなのはちゃんなら何の問題もなく、味方を守って落とせる相手だったはずんだけど、溜まっていた疲労と続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんのちよつと鈍らせちゃったの……。」

大きなモニターから積もった雪が赤く染まっていて、血だらけなのはと、そのなのはを呼びかけるヴィータが映しだされた。それを見た文瑠、流ノ介、茉莉、千明は険しそうな顔になり、ことは悲しそうな顔つきになる。

「その結果が、これ……。」

シャーリーが言い終わると大きなモニターから痛々しいほど包帯が巻かれたなのはが映し出された。それを見たシンケンジャー達はさらに顔つきが険しくなる。

「なのはちゃん。「無茶して迷惑かけてごめんなさい」って私達の前では笑ってたけど、もう飛べなくなるかもしれない、とか立って

歩けなくなるかもしれないって聞かされて、どんな思いだったのか・
・。。。」

「無茶をしても、命を懸けて勝たねばならぬ闘いの場は確かにある。だが、お前がミスショットしたあの場面は、仲間の安全や、命を懸けてもどうしても撃たねばならない状況だったか?・・・訓練中のあの技は、一体誰のための、何のための技だったか?」

ティアナはそれを聞くとはっとして顔を俯く。シャーリーはモニターからフォワード達に視線を映して口を開く。

「なのはさんさ、皆に自分と同じ思いをさせたくないんだよ。だから、絶対無茶なんかしないように、皆が絶対無茶なんかしないようにって。。。。。」

それを聞いたフォワード達は涙目になる。

「本当に丁寧に、一生懸命考えて教えてくれてるんだよ。」

シャーリーが言っている中、シンケンジャー達は必死にリハビリをしているのはをじっと見ていた。

「ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋 21:58」

シャーリーからなのは過去の聞き終えたシンケンジャー達は、丈瑠の部屋に集まっていた。集まった理由は、管理局についてだ。シンケンジャー達の顔つきは険しく、ことはは悲しそうな顔になっている。ことはは顔を俯きながら口を開く。

「なんで管理局は、なのはさんをひどい怪我を負わせてまで……任務にいかせたんやろ……。」

「ええ。どんな理由があったとしても、守るべき子供を戦場に出すのは……ね。」

ことはと茉莉がそういうと、全員が暗い気持ちになる。自分達も

外道衆から人々を守るため命を懸けて戦っていて、時に無茶をして傷を負い、それでも戦ったことはあった。だが、なのはの場合は違う。当時11歳のなのはは今までの無茶が生じてあのまま命が絶えてしまってもおかしくないほどの重傷を負っている。そのことを知ったシンケンジャー達は、時空管理局を不信に強く思っている。

「どんなに力があつたとしてもよ、子供を戦場に出すなんておかしいぜ……。」

「殿……。私はこのまま、（時空管理局を）信用してもよろしいのでしょうか……。」

流ノ介は震わせた声で文瑠に聞く。シンケンジャー達はこの世界で暮らし、外道衆を倒すため時空管理局“機動六課”に住まわしてもらっている。しかし、なのはの過去を知った後今自分がここにいるのも本当に大丈夫なのか、本当に管理局を信用していいのか不安になってしまった。

文瑠は、顔を俯かせたまま口を開く。

「……少なくとも、今は機動六課彼女達を信用しても大丈夫だろう……」

」。

「……わかりました。」

丈瑠がそう言うと流ノ介は小さく頷く。例え管理局が信用できなくとも、今のところ機動六課の人達だけはまだ信用できると判断している。だが、丈瑠はもし機動六課も信用できなくなったら機動六課から離れると決めている。しかし、そうなると他の管理局員から寄ってくるかもしれないし、最悪の場合敵対となってしまうことも考えられるが、その覚悟は全員出来ている。

流ノ介が言い終わると同時にインターホンが鳴る。

「ん……誰だ？」

インターホンに気づき、一番ドアに近い千明がドアを開けると、そこにはティアナの姿があった。ティアナを見ると千明は少し驚いたように口を開く。

「ティアナか……。どうしたんだ？こんな時間に。」

「千明さん……。えと……。裏庭の件とヘリポートの件、すみませんでした！」

「えっ！あ……。ああ。」

ティアナが言い終わると同時に頭を下げると千明はいきなりのとど驚く。ティアナは頭を口を開く。

「……。私が外道衆に操られていて千明さんのおかげで助かったのに、あんなこと言っ……。」

「……。別に、気にしなくてもいいぜ。お前を見ている時さ、なんか……。時々前の俺に似てたからさ、なんかほっとけなくてな……。」

「えっ……。？そんなんですか？」

ティアナが千明からそう聞くと驚いたような顔をして千明を見る。

千明は言いにくそうに顔をそらして口を開く。

「前・・・俺もお前みたいに無茶をして、皆に迷惑かけたことあんだよな。その罰として、シンケンジャーやめろとか言われたり、シヨドウフォン預けられたりしたんだよな・・・。俺、シンケンジャーの中で一番弱くてさ・・・モチカラも、剣技もな。周りが強くて劣等感を感じていた時もあった。俺が必至に頑張っても周りに追いつけない気持ちを何度も受けてきた。」

「・・・・・・・・・・。」

千明が言っている中、ティアナは顔を俯き、それを聞き続けて言葉を失っていた。ティアナは千明の過去を聞いていて、自分とあてはまるところもあったし、似ているところもあった。エリート揃いの機動六課。Sランクオーバーの隊長陣。そして10歳でBランクのエリオ、レアスキル所持のキャロ、そして優しい家族のバックアップのあるスバルで自分だけがこれといっていい特徴がない自分、ティアナは凡人と思い込み、無茶な行動を起こしている。ティアナはシンケンジャー達が持っている力、“モチカラ”を操り外道衆に臆することなく戦う姿を見て、今まで強いと意識していたが、その中で千明が一番弱く、それに自分と同じように無茶な行動を起こしていたとは思ってもなかった。

「俺が強くなって文瑠達に追いつけなくても、強くなればなるほど自分の周りは強い者が多いと気づき始めたんだ。ことはがいて、姐さんがいて、流ノ介がいて、そして文瑠がいる。俺はいくら時間をかけてもいい。少しづつだけ強くなって、俺はいつか文瑠を越えたと決めて戦っている。ティアナ、お前も兄が無能じゃねえと証明してため頑張ってたんだろ？それは間違ってるねえ。だけど、お前は焦りすぎたんだ。今すぐにでもなくても、少しづつ強くなって、いつか証明出来ればいいだろ？」

「・・・はい。私・・・焦ってたと思います。唯一の家族で、好きだった兄が死んで、兄の上司からひどく言われて、私は兄が無能じゃないって証明したいためにムキになってたんだと思います。」

ティアナは聞き続け、千明にそう聞かれるとゆっくりと頷いて言う。千明は視線をティアナに戻して言い続ける。

「ああ。その気持ち、よくわかるぜ。俺の場合は自分自身だけ・・・
。。お互いこれからも頑張っていこうぜ。」

「・・・はい！」

「・・・あのさ、割り込んで悪いんだけど。」

ティアナは顔を上げて言う。ティアナの顔は少し明るくなつていて、元気を取り戻した感じだった。千明はそれを見るとほっとするが、そこに茉子が申し訳なさそうに入る。

「その話・・・、ここでしない方がよかつたんじゃないかな？」

「・・・あつ。」

茉子の言葉に千明とティアナが同時に言い、周りを見ると数は少ないがハンカチを持って涙を拭いている管理局員と黒子が居て、それに気づく千明とティアナは一気に恥ずかしさが沸き上がり顔を真っ赤にする。そして鳴き声が部屋からすればそっちを見ると号泣している流ノ介が立つてこっちに向かつて歩いてくる。それに危機感を感じたのか、千明は少しづつ流ノ介から離れていく。

「お・・・おい、流ノ介？」

「千明イ……。お前は、そんなことを……。思ってたのか……。私はお前をこれから応援するぞおおおおお!!」

「うわっ！抱きつくんじゃねえ！気持ちわりい！」

流ノ介は号泣しながら千明に抱きつき、千明は流ノ介を振り回して離させれば走って逃げていき、流ノ介は逃げる千明を涙を流しながら追っていく。

「千明イイイイイイイイイイイ!!!!!!」

「近寄るんじゃねえぞ！この馬鹿やるおおおおおおおおお。。。。。。」

逃げる千明を追う流ノ介を見て丈瑠は「やれやれ」と思いながら笑みを見せ、ティアナは自然と笑う。その後、隊員舎では流ノ介と千明の叫び声が10分も続いたという。

翌日、丈瑠は早朝訓練に参加するため裏庭に向かって歩いていった。他のシンケンジャー達はもうすでに裏庭に向かっついていて、自分だけ誰かを探すかのように歩いていた。歩いていくと丈瑠はなのはを見つけるとなのはの元に向かう。

「あ、丈瑠さん。おはよう。」

「なのは。少し時間いいか？」

「えっ？いいけど……。」

なのはは自分に何か用があるとわかると突然のことではなんだろう
と思い、了承すると丈瑠は口を開く。

「昨日、お前の過去をシャーリーから聞いた。」

「そうなんですか……。」

「ああ。お前はそのまま続けてもよかったのか？まだ子供だった時

に深い重傷を負っても、戦場に立つのか？」

「戦場だなんて・・・私は、私が出ることがやりたいから、今まで続けてこれました。」

「それが・・・教導か？」

「はい。あの子達に私と同じ思いをさせたくないから、無茶をさせたくないから・・・。私のように大怪我を負わせたくないから・・・。」

文瑠はなのはから教導のことを聞くと少し黙り、そしてゆっくりと言葉を言う。

「確かにその気持ちはわかる。だが、多少の無茶は大目に見た方がいいんじゃないか？」

「えっ？」

「戦場では、どうしても無茶しなくてはならない状況がある。俺達に出来ることは、その状況下でどんな判断をするか、どうすればうまく出来るかだ。」

「・・・。」

「例え、過去に何かあるうとも“過去”は“過去”だ。問題はその経験をどう生かすかは、お前次第だ。」

「そうですね。いつまでも逃げてちゃダメですね……。文瑠さん。ありがとうございます。」

なのはは文瑠に言うと早朝訓練のため裏庭に向かい、文瑠も裏庭に向かつていった。

そのころ裏庭には、すでに二人の人物がいた。その人物はシグナムと千明。しかし、二人とも支給された体操服ではなく、シグナムは騎士甲冑、千明はシンケングリーンになっていた。しかし、シグナムはいつもと様子が違う。まるで獲物を狙う獣の気迫を身にまとっていた。

「あ……。あの……。シグナムさん？なんでこんなことになってんのかな？」

「ああ……。ティアナの件は感謝する。だが、どう理由があるうとも“稽古”を抜け出すという貴様の神経を疑う。そしてこれは、私が貴様を一から叩き直すための“稽古”だ！」

シグナムが言い終わるとレヴァンティンを構える。シンケングリーンはシグナムの構えた姿を見て思わず震えてしまう。まるで、火竜が餌となる小熊を睨みつけているかのようだ。シンケングリーンは声を震わせながら一歩づつ下がっていく。

「まままま待て！いや待ってくださいシグナムさん！確かに俺は稽古抜け出したけどなんでこんな仕打ち受けなきゃなんないの！」

「ほう？構えないとは対した余裕だな……。そつちが来ないならこちらから行くぞ！」

「人の話を聞けよ！ってうぎゃあああああああああああああああああああああああ
あああああああ.....」

「さつき……千明の声が聞けなかった？」

「えっ？気のせいじゃないかな？」

ティアナは千明の悲鳴をかすかに聞こえ、スバルに確認取るが気

第十七幕 教導の意味（後書き）

作「今回は途中参戦折神についてです。」

途中参戦折神

普段は秘伝ディスクに格納されている。獅子折神、龍折神、亀折神、熊折神、猿折神のようなエンブレム変形機能はなく、小型化もしない。共通して巨大な歯車を中心にボディが構成されたような外見をしており、その歯車に連動して様々なギミックが稼動する。

作「途中参戦折神の種類については次回のあとがきに紹介します。」

SSって難しい……。」

第十八幕 黒子の力（前書き）

作「アヤカシとなのは達のパワーバランス難しい・・・。

今回はオリジナルストーリーに入ります。うまく書けるかな・・・。

┌

第十八幕 黒子の力

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 6：55』

先ほど機動六課の裏庭で早朝訓練をしていたのは達とシンケンジャー達。しかし、その中になぜかシャマルの姿があった。

「シグナム……叩き直すのはわかるんだけど……さすがにやりすぎじゃない？」

「すまない。それでも手加減したつもりだ。」

シャマルは呆れたように言うと視線を別の方向に行く。シャマルの視線には、シグナムの炎でこんがりきつね色になったシンケングリーン、千明が黒子が用意してくれた担架に乗せられていた。これは先ほどのシグナムと千明の“稽古”によるもので、千明はシグナムの炎を多く受けてしまい、このような結果になってしまったのだ。

「これが手加減に見える？朝から怪我人出さないでほしいんですけどっ。」

「あーもう！やってやるぜ！」

「ようやく戦う気になったか！行くぞ！」

シンケングリーンはシンケンマルに装着した熊ディスクを回転させ、シグナムはレヴァンティンの一部をスライドさせてカートリッジをロードする。するとシンケンマルはモチカラで作られた木枯らしを纏い、レヴァンティンは炎に包まれる。

「シンケンマル！木枯らしの舞い！」

「紫電、一閃！」

木枯らしを纏ったシンケンマルと炎を纏ったレヴァンティンがぶつかり合うと火花を放ち、つば競り合いをするかと思いきや、木枯らしを纏ったシンケンマルは、どういうわけかレヴァンティンから放たれる炎に燃え移ってしまい、シンケングリーンが持つシンケンマルは派手に燃え上がってしまう。

「嘘だろ！……つてぎゃあああああ！！！」

シンケングリーンはあまりの出来事に驚くが、シンケンマルに燃え移ってしまった炎とレヴァンティンから放たれる炎が合わさってしまい、威力が増した紫電一閃を受けたシンケングリーンは勢いよく吹き飛んで行ってしまふ。シグナムはシンケングリーンが吹き飛んだ場所に追いかけるように飛んでいく。

このシグナムと千明の“稽古”を遠くからモニター越しで見ている人がいた。

「あれ？あたしの理論間違ってたのかな……。もう一度モチカラが込められたカートリッジ調べないとダメかな……。」

モニター越しで見ているのはシャーリー。シャーリーはシグナムと千明が稽古するところか聞いたので朝早く来てシグナムと千明の“稽古”を気づかれないようにモニターで見ているのだ。シャーリーは千明の“木枯らしの舞い”とシグナムの“紫電一閃”がぶつかり合った様子をモニターを見ていて、千明の木枯らしがシグナムの炎によって燃えてしまったので自分が思っていた「魔力とモチカラ

を組み合わせると効果が増幅する」という理論は崩れてしまい、首をかしげていた。

「シャマル先生呼んだ方がいいのかな……。」

シャーリーはシグナムに追い詰められているシンケングリーンを見て呟いた。結局、シャーリーはシャマルを呼んで今のようなことになっている。

『回想終了』

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 7:24』

早朝訓練をすませ、シャワーを浴び終えたフォワード達とシンケンジャー達は食堂に行つて食事を取っていた。しかし、シンケンジャーの中に千明の姿が見当たらなかった。

「あれ？千明さんは？」

「千明か。あいつは今医務室にいる。」

「えっ、何ですか？」

「なんでも、訓練中に怪我したらしい。」

スバルの質問に文瑠が答え、シンケンジャー達はテーブルに座り食事を取り始める。厨房では相変わらず黒子達がせっせと次々に食事を作っている。

「そういえば、最近和食食べてないわね。」

「世界が変われば需要が変わる。おそらく、この世界では米の需要が全くないかもな。」

「そうね……。」

シンケンジャー達は軽い会話を交わしながら食事をすませていった。ちなみにシンケンジャー達が食べているのは黒子達が作った“和風パスタ”と野菜サラダである。

食事を済ませたフォワード達は書類の整理などの仕事があり、今その仕事に打ち込んでいる。その一部の場所でスバルとティアナがモニターを操作していた。

「うーん……。こういうの苦手なあ……。。」

「無駄口叩いてないで仕事に集中しなさいよ、スバル。」

スバルは書類関係の仕事は苦手であり、いつも誰よりも遅れてしまふ。こういった仕事は何度もあったがなかなか上達の様子が見られない。スバルとティアナが仕事している時、二人の横から黒子が通りすぎる。スバルは黒子に気づくと手を止めて黒子の方に顔を向ける。

「あれ？黒子さんだ……。何しに来たんだろ？」

「掃除しに来たんじゃない？」

スバルは横を通り過ぎた黒子が気になったが、ティアナは気にしなくてもそのまま仕事を続ける。

「もう私は終わったから行くね。言っとくけど手伝わないから。」

「ええ〜・・・そんなあ。」

時間が進み、仕事を早く済ましたティアナは書類を持って泣きそうな声を出すスバルを置いて同じ仕事場にいるなのは元に行く。しかし、ティアナは一角に人が集まっているのに気づく。オフィスルームはよつぽどのがない限り人は集まらない。ティアナは気になり、人が集まっている元に行く。そこになのはもいたことに気づいたティアナはなのはに何があったか聞くことにした。

「あの・・・なのは隊長、どうしたんですか？」

「あ、ティアナ。えつと・・・見ればわかるんじゃないかな・・・」

「えつ?・・・ツ!」

なのはにそう言われたティアナは人の隙間から中の様子を見ると、そこには黒子の姿があった。黒子は掃除ではなく、先ほどティアナとスバルがやってのように書類関係の仕事をしていた。この黒子はミッドチルダ語を覚えた黒子であり、みんなの役に立ちたいと思い自ら進んでこの仕事をやっている。黒子はまだ慣れてない操作に戸惑いながらも着々と仕事をすませていく。ティアナは呆然としながら黒子が仕事している様子を見ていて、少しすると仕事を終わらした黒子が立ち上がり、なのはの元に行き完成した書類を渡す。

「あ・・・お疲れ様・・・」

なのはは書類を受け取り、黒子は頭を下げるとオフィスルームから立ち去って行った。ティアナもなのはに書類を渡し、オフィスルームから離れる時スバルの元に行った。

「あ、ティア。どうしたの？」

「・・・あなた、素人に負けてどうするの・・・。」

「・・・へ？」

ちょうど同じころ、場所を変えて機動六課の部隊長室。ここにははやてとラインが仕事をしているが、そこに黒子が入ってきて二人の邪魔にならないように掃除をし始める。そして他の黒子が入ってきてはやて達にコーヒーを差し出す。

「あ、いつもすまへんな。」

「ありがとうございます。」

はやては差し出されたコーヒーを一口飲み、仕事を続ける。

機動六課では、仕事時間中はいつも黒子が邪魔にならないように

掃除をしたり、飲み物を差し入れしたり、仕事の手伝いをしているのだ。そして機動六課の人達は黒子達に対して、最初は戸惑ったが自然と親しみやすくなり、みんなから存在が意識されている。さらに今黒子達は機動六課の人達にとってみれば欠かせない存在になっていた。

そんな黒子達だが、彼らには恐ろしい存在がある。それは茉子である。詳しく言えば料理をする姿の茉子だ。今その茉子は厨房を借りて料理を作っている。どうやら医務室にいる千明の差し入れのため作っているらしい。

「差し入れ必要ないと言ってたけど、栄養取らないとだめだよね。」

茉子はそう言いながら鼻歌を歌い料理に打ち込む。しかしその料理の仕方がいろいろとおかしい。茉子は今シンケンマルで野菜を切っている。切り方は普通に細かく切っているのだが、シンケンマルの切れ味はよく、まな板ごと切っている。茉子は切った野菜をフライパンに乗せて炒め始める。炒めた野菜は焼き時間が多かったからか焦げ目が多い。しかし茉子はそれを気にせず野菜を皿に移し、次はフライパンに溶いた卵を入れる。そして少し経つと卵に先ほど炒めた野菜を入れ、卵を丸めようとする。茉子はどうやらオムレツを作っているようだが、完成したオムレツは黒焦げになっていた。しかしそれでも彼女は弁当箱に入れて次の料理に行く。

ちなみに菜子が料理をしている姿を黒子二人が抱き合っ
て震えながら見ていた。

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

あの世とこの世の狭間にある三途の川。そして外道衆が拠点とす
る三途の川に浮かぶ六門船。そこに骨のシタリは三途の川の深さを
測っていた。

「深さはまだ少ないが、ちゃんと増えてるようだねえ。」

シタリは深さを測り終わると六門船の中に入る。六門船にはシタ
リは復活させたと思われるアヤカシが眠っている。

「そろそろ目覚めの時だねえ……。」

シタリが眩くと、アヤカシは目覚めたのか、アヤカシは身体を動かしてゆっくりと起き上がる。

「ふ……あああああ……。ここは……。六門船？」

「起きたかね、“マリゴモリ”。久しぶりだねえ。」

「ん……。？あ、シタリだ。僕は確か倒されたはずなんだけど……？」

マリゴモリと呼ばれたアヤカシは自分の身体を触り始める。

「ま、確かにそつだがいろいろとあるんだよ。教えてあげるからちよいとこつちに来なさい。」

「えっ、なんで？」

「いいからこつちに来るんだよ。」

シタリはマリゴモリに手を招くと奥に行く。マリゴモリもそれについていくように歩く。シタリは奥に行きながら心の中でこう呟く。

「（アヤカシに新しい能力つけるっていう考えが甘かったのかね。
“ヒトミダマ”のおかげでわかったよ。これからは普通に復活させ
たほうが良いかもしれないねえ……。）」

『ミッドチルダ 機動六課 通路 11:30』

機動六課の通路では仕事を一早く終わらしたスバルとティアナが歩いていた。二人はこれから千明の見舞いに行くため飲み物を持って医務室に向かっていた。スバルとティアナが歩いていると弁当箱を持った菜子と出会う。

「あ、スバルにティアナ。どうしたの、今仕事じゃないんじゃないんじや……？」

「仕事なら早めに終わりました。今から千明さんの見舞いに。」

「そうなんだ。あ、なら悪いんだけどこれ、千明に渡してくれる？」

「はい、構いませんよ。」

茉莉はティアナに弁当箱を渡すとその場から立ち去っていく。

「スバル。弁当箱は開けないわよ。」

「えっ！私、開けてほしいと言ってないよ！」

スバルは確かに言っていないが、目は開けてほしいと無意識に訴えていた。ティアナは茉莉から受け取った弁当箱を持ちながらスバルとともに医務室に入ると、ちょうど千明が“猿でもわかるミッドチルダ語”応用編”をベッドに寝ながら読んでいて、ティアナ達が入ってきたとわかると千明は読んだものを置いてティアナ達の方に顔を向ける。ちなみにシャマルは別の用事があるためか医務室にいない。

「よう、ティアにスバル。仕事はいいのか？」

「仕事は大丈夫。ほら、差し入れよ。」

「お、サンキュー！」

千明はティアナから飲み物と弁当箱を受け取ると弁当箱を見る。

「弁当付か。誰が作ったんだ？」

「あ、弁当は茉莉さんからの差し入れです。」

千明はそのことを聞いた瞬間、体が硬直して弁当箱を落とす。幸い、弁当箱はふたが閉まってたため中身が飛び散ることはなかったのだが、千明の顔は青ざめていた。

「ど……どうしたんですか？千明さん……。」

「そついやまだ言っつてねえけど・・・、姐さんの料理やばいんだよな・・・。」

「えっ？どうしてですか？」

「中身見りゃわかる・・・。」

スバルは千明に言われた通りに弁当箱のふたを開ける。すると開けた瞬間弁当箱から焦げた匂いがスバルの鼻を刺激する。スバルは弁当箱を無意識に遠ざける。そして匂いが薄くなるとスバルとテイアナは恐る恐る中身を見る。

弁当箱の中身は黒焦げになったオムレツ（らしきもの）。無造作に斬られた野菜。そして黒焦げの焼肉（らしきもの）。そして皮が残っていて八つに切ったリンゴが入っていた。

これを見た食欲旺盛なスバルでも食べる気がせず、固まって見ていた。食べたらどうなるか想像がつかない。そして今治療中の千明に食べさせていいのかどうか正直不安だった。

「リ、リンゴだけなら食べれますよ。きっと。」

「そ、そうだよな。いくら姐さんでもリンゴだけなら大丈夫だろ・・・。」

千明は弁当箱にしていたフォークを持つと弁当箱に入っていたリンゴを一つ刺し、恐る恐る口の中に入れて口を動かし、リンゴを噛んでいく。その様子をスバルとティアナは冷や汗をたらしながら見ていた。

「……くえ d r f g t y ふじこ ipp・@!!!!!!!!」

「ッ！千明さん！」

「千明ッ！」

千明は言葉にならないほどの叫びをあげながら思いっきりリンゴを吐き、フォークと弁当箱を床に落としてベッドに倒れてしまい腹を必死に抑える。弁当箱は落としたせいで中身が飛び出て床が汚れるがスバルとティアナはそのことを気にせず千明の元に行く。

「スバルッ！早くシャマル先生呼んできて！」

「う、うん！わかった！」

スバルはティアナに言われると通信機を使ってシャマルを呼び始める。ティアナは苦しそうに腹を抑える千明を必死に呼びかけていた。シャマルが戻ってくるまでティアナとスバルは千明の痛みを和らげようと必死になっていたらしい。

第十八幕 黒子の力（後書き）

作「今回は途中参戦折神の一つ、兜折神と今回の話に登場したアヤカシについて紹介です。」

かぶと おりがみ
兜折神

- ・全長：44.3m
- ・全幅：27.9m
- ・全高：16.1m
- ・重量：900t
- ・最高速度：600km
- ・出力：700万馬力

カブトムシ（ヘラクレスオオカブト）型の折神。メインカラーは橙色（オレンジ色）。主要折神以外では唯一志葉家に残されていた。角のある頭部を回転させながら突進して攻撃することや、角の間の砲門からビームを発射することができる。

シンケンオーの武器にもなり、“侍武装”を行うと足は両肩に装着し、本体はシンケンオーのヘルメットのようにかぶると“カブトシンケンオー”になる。

この兜折神が折りたたまれている兜ディスクは最初は丈瑠が所有し、のち茉莉が一時所有するがモチカラをパワーアップさせた千明が所有することになった。

アヤカシ：マリゴモリ

丸い巻貝のような、アルマジロのようなアヤカシ。背中に丸い貝のような固い甲羅を持ち、その甲羅に全身しまつことが出来る。こうなれば隙もなくなりあらゆる攻撃を弾き返す玉となって、ごろごろと転がって周囲を破壊する。性格も内にこもっているようで、甲

羅の中で常に周りを羨み、みんな不幸になればいいと思っている。その上いざとなると怒り出して大暴れする迷惑なアヤカシでもある。

作「今回のオリジナルストーリーは黒子が中心ですね。シンケンジャー達から見れば必要不可欠な仲間であるに対して、なのは達はあくまで一般市民という考えがあるのではないかと私は思っています。

ちなみに茉子の料理は信じられない人もいるかと思う人もいますが、これは“公式”です。サントラCD?では寿司を握っただけで源太を倒すほどの破壊力を持っています。」

第十九幕 黒子の力 式（前書き）

作「シンケンジャー」のDVDを見て、マリゴモリの口調が大きく間違っていたので書き直しました。活動報告にも書きましたが、これからは間違っていたら出来る限り書き直します。」

第十九幕 黒子の力 弐

『ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋 11:50』

「殿！一大事ですぞ！」

「どうした、ジイ？」

千明が茱子特製弁当に苦しんでいる頃、丈瑠達が部屋でミッドチルダ語を勉強中にドアを開けて中に入ればすぐに声を上げる。声を上げたのは彦馬であり、丈瑠は彦馬に気づくと筆モードのシヨドウフォンを持つ手を止める。彦馬は丈瑠の元に行くと丈瑠の横に行き、聞こえないように小声で丈瑠の耳に囁く。彦馬から聞いた丈瑠は顔を青ざめ、持ってたシヨドウフォンを、ミッドチルダ語を書いたノートに落としてしまう。

「茱子が……。」

「もはや手遅れです。先ほど茱子が、千明のために作った弁当を完成させ、千明に食べさせたと報告がありました。」

「ち、千明が、茱子の……料理の……。」

話を聞いた流ノ介は声を震わせながらシヨドウフオンを置き、怯えたような顔をして頭を抱える。

茉莉の手料理は言うまでもなく壊滅的。茉莉が料理を作ったと聞かされただけでこのありさまだ。シンケンジャー達と黒子達にとつて見れば茉莉の料理は恐怖の対象で、たとえリングを剥いただけでも壊滅的な料理に変化してしまうのだ。茉莉の料理を食べてしまえば一日中腹痛に悩まされることになってしまう。

「もしこの状態で外道衆が現れ、“2の目”を使われてしまったら……。」

「酷かもしれないが、千明には無茶をしてもらうしかないな。」

丈瑠はため息を漏らしながら言う。アヤカシを倒すのにシンケンジャーは一人欠けても倒せる。だが巨大化してしまう“2の目”を使われてしまえばそうは言ってられない。2の目に対抗するためシンケンオーが必要になるが、シンケンオーは一人欠けたらシンケンオーは出せない。理由は折神にある。シンケンジャーは各自それぞれに折神を所持している。そして各自、折神を巨大化して待合体を行い始めてシンケンオーとなるが、一人でも欠けてしまえばシンケン

ンオーにはなれず、折神だけで戦わなければならないのだ。

しかし、“侍合体ディスク”という秘伝ディスクさえあれば例え一人欠けたとしてもシンケンオーに合体して乗ることが出来るが、そのディスクはここにはない。

「流ノ介！早く厨房に行くぞ！」

「はっ！」

丈瑠達は立ち上がると言いながら部屋から出ると、これ以上茉莉の料理の犠牲者を出さないため厨房に走って行った。丈瑠達が通路を走っていると、機動六課中に警報が鳴り響く。しかしこの警報の音はいつもと違う。そしてさらに放送が入る。

『スキマセンサーに反応あり！シンケンジャーの方は出撃のため至急、ヘリポートに集結してください！繰り返します！スキマセンサーに……』

「く……。外道衆か！流ノ介、厨房行くのは後だ！」

これは機動六課に設置されたスキマセンサー用のアンテナ（“受”と書かれたアンテナ）が外道衆が“スキマ”を通ったことをキヤッチした時の警報だ。さらに区別化するため警報の音を変えている。

丈瑠は放送を聞くなり流ノ介とともにヘリポートに向かった。

『ミッドチルダ 機動六課 ヘリポート 11:58』

丈瑠と流ノ介はヘリポートに行く途中菜子とことはと合流し、ヘリポートに着くとそこにはすでになのは達がいた。

「あれ、千明は？」

「千明さんなら医務室で治療中です。」

「仕方ない。2の目を使われたら連れ出すしかないな。行くぞ！」

「フォワード達は待機ね。」

「「「「はい！」「」「」」

へりにシンケンジャー達となのは達が乗り込むとへりは空を飛び外道衆が現れた場所に行く。残されたフォワード達は待機ロビーに向かう。ロビーに入るとエリオは何かに気づき、窓から外を見ると何かを持った黒子が走っていることに気づく。

「あれって・・・黒子さん・・・？」

「どうしたの、エリオ君？」

「あ、何でもないよ。」

エリオは黒子を気にしつつもソファアに座り指令が出るまで待つことにした。

『ミッドチルダ 街 12:13』

「うわあああああああ！...！」

「きゃあああああああああ！！！！」

ここは首都クラナガンから少し離れた街。そこにはアヤカシ“マリゴモリ”が玉状になって人達が逃げる後を追う。転がるスピードは人達が逃げる足の速さに追いつくか追いつかないかの速さで、マリゴモリは逃げる人達を笑いながら転がっていた。

「皆僕以外不幸になっちゃえー！！ゴロゴロゴロゴロゴロ……」

「そこまでだ！外道衆！」

「ん？なんだよお……」

マリゴモリは声が聞こえたと動きを止め、玉の状態を止めると声がかかる方に顔を向ける。そこにはシンケンジャー達（千明はいない）とバリアジャケットと騎士甲冑を身に着けたなのは達（いた）がいた。

「あれが・・・外道衆？」

「ああ。間違いない。」

「貝みてーなお化けだな・・・。」

「なんだよ、初対面なのにその言い方？・・・いや、どこかで見覚えがあるな・・・。」

マリゴモリはシンケンジャー達となのは達の反応が気に食わなかったが、シンケンジャー達をじろじろと見る。その時、太鼓の音が鳴り響く。

「えっ！何!!」

「ッ！あれは！」

いきなりの太鼓の音でなのは達は驚く。シンケンジャー達の後ろが志葉家の家紋が入った陣幕が張られ、志葉家の家紋が入った旗も掲げられる。この陣幕と旗を掲げている張本人は黒子だ。

「なんでここに黒子さん達がいるの!」

「話は後だ。シヨドウフォン!」

なのは達は外道衆がいるのにも関わらず、黒子達がいることに驚くが、文瑠はそのことを後にしろといいながらシンケンジャー達はシヨドウフォンを筆モードにすると構える。

「『筆奏上!はっ!』」

文瑠は赤い“火”、流ノ介は青い“水”、茉莉はピンク色の“天”
”ことはは黄色い“土”を宙に書き、反転させてスイッチを押す。
すると文瑠達は文字に包まれ、シンケンジャーに変身を遂げた。

「ああ！お前達はシンケンジャー！前みたいにやられたくないから・・・じゃあね！」

「逃がすか！」

マリゴモリはシンケンジャーを見ると、前に倒されたことを思い出し、すぐに走って逃げようとする。しかし、逃がさないと言わんばかりにシンケンジャー達となのは達は走ったり飛んだりして追いかける。

「行くよ！ダイバインバスター・エクステンション！」

なのはは止まり、カートリッジを1発ロードするとマリゴモリに向けて砲撃魔法を放つ。マリゴモリの甲羅に砲撃魔法が当たると爆発を起こす。それによりなのは達とシンケンジャー達は立ち止まる。煙が払うとなのは達には思ってもなかったことが起きた。

「えっ・・・そんな！」

「何それ、見かけ倒し？」

なのはの砲撃魔法を直撃したのにもかかわらずマリゴモリは平然としていた。それもそのはず。マリゴモリの甲羅の強度は固く、その固さは御大将である血祭ドウコクでも砕けられるかどうかかわからないほどだ。そのマリゴモリの強度を知らないなのは達が驚いても仕方ないことだ。

マリゴモリはなのはを挑発しているかのようになのは達を見て指を振る。

「ならば次は私だ！」

「何もやっても効かないよ。」

シグナムは前に出るとレヴァンティンを構える。マリゴモリは丸くなると玉状になり、シグナムはマリゴモリに向けて走り出し、カートリッジをロードするレヴァンティンは炎に包まれる。

「紫電、一閃！」

「効かない効かない。」

シグナムは丸くなったマリゴモリに向けて紫電一閃を放つ。しかし、丸くなったマリゴモリには効いておらず、逆に弾かれてしまった。

「何ッ！」

「よせ！あいつに何をやっても無駄だぞ！それに対策はちゃんとしてある！」

「そつなのっ！早く言ってよ！」

「うるさいなあ・・・静かにしろよっ！」

シグナムはマリゴモリから離れる。シンケンレッドから対策あると聞いたなのは達は食いつくが、うるさく感じたマリゴモリは怒っ

たよつな声を出すと転がってこちらに向かってくる。

「落ち着け！まずはあいつの動きを止めるぞ！」

「う……うん！」

「ッ！おい！あれ……！」

落ち着いてマリゴモリを見るシンケンジャー達に対し、ヴィータが見つけたのは逃げ遅れたと思われる人達と、黒子達の姿を見つける。黒子達は逃げ遅れた人達の救助をやっているが、なのは達からすれば黒子達も守るべき一般市民でしかない。なのは達は黒子達をこの場から遠ざけようと思ったのか、黒子達の方に行ってしまう。

「おい！何をしている！救助は黒子達に任せて戦いに集中しろ！」

「ちょっと！こんな時に何考えてるの！」

「でも、黒子さん達が危ないから……！」

「黒子さんなら大丈夫や！こちらは戦いに」

「不幸になっちゃえー！ー！！」

シンケンジャー達となのは達が話している間にもマリゴモリはシンケンジャー達に接近を許してしまい、マリゴモリは玉状の自分を飛び跳ねてシンケンジャー達にぶつける。

「ぐあぁっ！」

「うぐっ！」

「ぐぐっ！」

「あぁっ！」

「ッ！止めるッ！」

シンケンジャー達はマリゴモリの攻撃を受けている中ヴィータは叫びながらマリゴモリの元に向かって飛んでいく。そしてヴィータはデバイスのカートリッジをロードするとヴィータのデバイス、“グラーファイゼン”はギガントフォルムへと変わる。

【ギガントフォルム】

「ギガント！ハンマアアアアアアアアアア！！！！」

ヴィータはギガントフォルムとなったグラーフアイゼンで玉状になったマリゴモリを弾き飛ばそうと大きく振るう。マリゴモリはグラーフアイゼンにぶつけられると大きく吹き飛ばす。

「うはあああああああ！！！！」

「ぐうっ……！！！」

ヴィータはなんとかマリゴモリをシンケンジャーから離させることに成功したのだが、あまりの固さに腕が痺れたのか、グラーフアイゼンを落としてしまう。

「ヴィータちゃん！大丈夫！」

「ああ。でもすっげえかてーぞあいつ……。」

ヴィータはなのはに心配されながらもマリゴモリを睨む。吹き飛ばされたマリゴモリは壁にぶつかりと止まるが、玉状を止めて元の姿に戻ったが、グラーファイゼンのギガントフォームに叩かれたのにも関わらず平然としていた。

「マ、マジかよあいつ……平然としてやがる……！」

「うーん……もう僕に構わないでよね！」

マリゴモリはそういうとスキマの中に入ってしまい、シンケンジヤー達となのは達はマリゴモリを逃がしてしまった。

外道衆を逃がしてしまったシンケンジャー達となのは達は機動六課に戻り、食事を取った後部隊長室に集まっていた。集まった理由は黒子についてだ。

「丈瑠さん。少し聞いてもええですか？」

「・・・なんだ？」

「どうして黒子さん達を戦いに“巻き込んだ”んか？」

はやくは丈瑠をじっと見ながら聞く。丈瑠は小さくため息を吐く。

「“巻き込んだ”覚えはないな。」

「じゃあなんで黒子さん達はあんなことしてんの！危険やないか！」

「・・・確かに危険だ。」

「ならばなぜ彼らは戦場にいる、志葉？」

「それは、私から説明しましょう。」

はやてはロングアーチから外道衆の戦いを見ていた。その時戦闘中に黒子達が逃げ遅れた人達の救助をしているのにも気づいている。しかし、はやてからすれば黒子達を戦いに巻き込んだとは思えなかった。彦馬は丈瑠の前に出ると咳払いをしてから口を開く。

「黒子達はあなた達と同じように、外道衆からこの世を守るため戦いたい。しかし、黒子達はそれが出来ないのはなぜですか？」

「そ、それは・・・魔力を持たないから？」

「その通り。黒子達は殿のようにモチカラもなければ、あなた達のように魔力もない。彼らは戦いたいのに力がないからです。」

彦馬の質問になのはが答え、彦馬は言い続ける。

「黒子達は戦えない代わりに、精一杯殿達のサポートをしております。黒子達は雑用、掃除、食事の手入れをしておりますが、戦いでは殿達が戦っている間は逃げ遅れた人達の救助、誘導等を行い、殿達が戦いやすいようにしてやるのも彼らの使命です。」

「だけど、黒子さん達は魔力もモチカラもないし、危険すぎるよ！」

「力があればいいという問題ではありませんぞ！確かに、黒子達にはモチカラも魔力も持ちません。しかし、私達と同じように“人々を守りたい”という思いは同じです。しかし、彼らは力が無くて戦えない。そのため、殿達が戦いやすいように逃げ遅れた人達の救助をし、サポートするのが彼らの役割です。シンケンジャーは、黒子達のおかげで安心して心置きなく戦えます。戦いというものは、強ければよいだけではありません。強い意志も大事です。」

『・・・・・・・・』

彦馬の言葉になのは達はつい黙ってしまふ。彦馬が言ったことは正しい。黒子達はモチカラもなく、魔力もない。戦う力を持たない黒子達も戦いたいが、どうしても叶わない。そんな彼らが出来ることが戦いやすいように救助活動やサポートしかできない。しかし、そのおかげでシンケンジャーは安心して戦えるのだ。彼らのサポートがなければきっと戦いは難しかったと思える。

しかし、それでもなのは達にとってみれば力のない民間人しかない。危険なことはどうしても避けさせたい気持ちがある。

「でも、やっぱり危険なことはさせたくないよ……。」

「……そうか。」

なのはの言葉を聞いた文瑠は彦馬の前に出る。

「ならば一度、“黒子の戦い”を見ると言い。」

「えっ？それってどういう意味……。」

「お前達はまだ黒子達についてまだよくわかってない。“黒子達の戦い”を見た方がいいだろう。」

そういうと文瑠は彦馬達を連れて部屋から出て行ってしまふ。出るときにことはが申し訳なさそうに頭を下げて文瑠の元に行く。

「黒子達の戦い」って……どういう意味だろ……。」

部屋に残ったなのは、小さくつぶやく。これは同じく残ったはやて達も同じように思っていた。自分達が外道衆と戦ってる中、力のない黒子がどうやって戦ってたのか、今まで考えもしなかった。

第十九幕 黒子の力 式（後書き）

作「今回は舵木折神について紹介します。」

かじき
おりがみ
舵木折神

- ・全長：47.8 m
- ・全幅：22 m
- ・全高：24.4 m
- ・重量：900 t
- ・航行速度：120ノット
- ・出力：700万馬力

カジキ型の折神。メインカラーは水色。先代たちの戦いで行方不明になっていたが、海をさまざつているところを発見され、流ノ介により捕獲された。直剣状の吻くちばしを使い体当たり攻撃をすることや、頬から「舵木魚雷」という弾丸を打ち出すことができる。空中でも飛ぶことが出き、さらにシンケンオーと侍武装することで“カジキシケンケンオー”となる。

作「この書き方だとどうしても話数が長くなってしまふ……。書き方変えようかな……。」

第二十幕 黒子の力 参(前書き)

作「最近この小説書いているとなんかアンチ管理局っぽくなって
るのは気のせいだろうか・・・？」

第二十幕 黒子の力参

『三途の川 六門船 ???：???』

ここはこの世とあの世の狭間にある世界、三途の川。そしてその三途の川に浮かぶ和船、“六門船”は外道衆が拠点としている。三途の川では先ほどシンケンジャー達となのは達が戦ったアヤカシ“マリゴモリ”が玉状態になって川の上を飛び跳ねている。飛び跳ねている理由は“三途の川の水の補給”だ。

これはアヤカシにある共通点の一つで、三途の川から離れているとどうしても体が干上がってしまい水切れを起こす。そのため長時間地上で活動することが出来ないのです、アヤカシは戻ってくると必ず三途の川の水を補給しなければならないのだ。

水の補給をしているマリゴモリの様子を船の中で骨のシタリが見ていた。

「ふふふ……。三途の川の量が増えているようだねえ。」

骨のシタリは三途の川を見ながら呟く。シタリはマリゴモリを見るのを止め、船の中を歩き始める。

「どうやらシンケンジャーはあの魔導師達一（なのは達のこと）と息が合わないようだね。マリゴモリの固さがあればなんとかかなりそうなんだけど、一度倒されてるからねえ……。」

シタリはため息交じりの声で呟く。それもそのはず、シンケンジャーのチームワークの良さは外道衆の手を焼いている。分断させる作戦も考えているのだが、マリゴモリではどうも難しい。アヤカシを復活するにしても時間がかかるため今はマリゴモリでどうにかするしかない。シタリがそう考えているとマリゴモリが水の補給が済んだのか、船の中に入ってくる。

「水の補給が済んだので、また行ってくるね。」

「おおマリゴモリ！待ちなさい。行くならナナシも連れて行きなさい。あいつらは暴れたいと訴えてるからね。」

「ええ……。やだよ。僕一人の方が気が楽だし……。」

「何言つとるんだい、また倒されてもいいのかい？」

「それは嫌だけど、僕なれ合っの苦手なんだよ……。」

「なら自由に暴れさせたらどうなんだい？それならお前さんも大丈夫じゃろっし。」

「うーん・・・わかったよ・・・。」

マリゴモリは嫌々としながら了承し、三途の川に入っていった。

『ミッドチルダ 機動六課 医務室 17:21』

地上ではそろそろ日が沈みそうになる時間。しかし、機動六課では警報が鳴り響く。外道衆が“スキマ”を通ってミッドチルダに現れたと知らせる警報だ。その警報は当然医務室にも聞こえる。

『スキマセンサーに反応あり！シンケンジャーの方は出撃のため至急、ヘリポートに集結してください！繰り返します！スキマセンサーに・・・』

その警報を聞いた千明はベッドから起き上がりベッドに降りようとす。しかしそれをシャマルに止められる。

「駄目ですよ、千明さん！行きたいのはわかるけど、安静してくださいー。」

「……………」

シャマルに止められた千明は悔しそうにしながらもベッドに横になる。しかし、シャマルは千明の反応がいつもより素直だと思った。

「（あれ？前に警報なった時は無理にでも行こうとしたのに、どうしてなのかしら？）」

最初に外道衆が隙間を通って現れたことを知らせる警報を鳴った時、菜子の料理の性でベッドに横になってた千明が無理に体を起こして出撃しようとしたことがある。その時は数人の黒子とシャマルが必至に出撃させないようにと体を押さえていたが、今はこのよう

に素直に聞いている。

「（諦めたのかしら？それとも体調が悪くなったのかしら？）」

シャマルは可能性がありそうなことを思いながら椅子に座る。警報が鳴り響く中、誰かが医務室に入ってくる。シャマルは扉の方に顔を向けるとそこにはシグナムの姿があった。

「あらシグナム、出撃しないの？」

「いや、志葉に言われて待機だ。そのため、少し谷の様子を見に来た。」

「へえっ、そうなの。」

シグナムはシャマルと少し会話すると千明の方に行く。千明はシグナムが来ても無反応で、ぼうつとしているように見える。しかし、シグナムには千明の様子がおかしいと気づく。

「・・・貴様、谷ではないな。」

「えっ？シグナム・・・？」

シヤマルはシグナムの言った言葉に反応してシグナムの方を振り向く。するとシグナムはいつの間にかレヴァンティンを起動させていた。

「し・・・シグナム！何する気なの！」

「はあっ！」

シグナムはシヤマルに言われても尚レヴァンティンを千明に向けて振るう。しかし千明は避けようとせず、レヴァンティンに斬られたしまう。すると斬られた千明は苦しむはずが、“影”という漢字が宙に浮かび上がると同時に消えてしまう。

「え、ええっ！」

「偽物か！本物の谷はどこに・・・まさか！」

シグナムは千明が偽物とわかると本物の千明はどこにいるか考え始める。そして最初に浮かび上がったのはヘリポート。シグナムはヘリポートに本物の千明がいると考えるとすぐに通信でヘリの操縦士、ヴァイスに通信する。

「ヴァイス！そこに谷はいるか！」

『姐さん、谷って千明のことか？千明ならいねえぜ。』

「む・・・そうか。」

『っていうかシンケンジャーの奴らもいねえぜ。』

「何ッ！」

シグナムはヘリポートにシンケンジャーが誰もいないとわかると飛び出るように医務室から出る。後ろからシャマルが何か叫んでいたが、それを気にせず走り続ける。シグナムが向かった場所は外。シグナムが外に出るとシグナムの瞳に黒子の姿が映る。黒子はすでに遠くまで走っていて、そして何人かは駕籠を担いでいた。シグナムはうつすらだが、駕籠には丈瑠の姿を確認することが出来た。そしてシグナムは気づく。出し抜かれたと。

「くっ、早く追わねば・・・！」

『ちよい待ち、シグナム。』

シグナムは駕籠で移動する丈瑠達と止めさせようと思いついて追いかけてようとするが、はやてから通信が入り止められる。

「あ、主！しかしあそこには負傷した谷が」

『シグナム、丈瑠さんが言ったこと覚えておるか？今はこちらは見とるしかないんだよ。』

「ッ……かしこまりました……。」

丈瑠が言ったこと、それは“黒子達の戦い”を見ることだ。シグナムはその言葉を思い出し、機動六課の中に戻り、“黒子達の戦い”を見るためロングアーチに向かった。

『ミッドチルダ 機動六課 ロングアーチ 17:47』

シグナムがロングアーチに入るとそこにはすでになのは達とフォワード達が集まっていた。シグナムはロングアーチのモニターを見るとそこには外道衆が暴れている様子が映し出されている。その様子はナナシ連中が主に暴れているが、アヤカシのマリゴモリだけはぼうつと立っていた。

「あれが……アヤカシなんですか？」

「なんかおどおどしとるように見えるで……。」

アヤカシの様子にはやてとシャーリーが苦笑交じりで話している
とモニター越しから太鼓の音が鳴り響く。シャーリーは太鼓の音が
鳴ると同時に仕事に映り、太鼓の音の方に向けるとそこには
陣幕を張る黒子達と旗を上げる黒子、そして太鼓を鳴らしている黒
子の姿があつた。

陣幕の中ではシンケンジャー達がすでに並んでいて、黒子達がシ
ンケンジャー達に袴を着させる。シンケンジャー達もスムーズにい
くように手を出してやったり足を出したりし、着替えは約十秒で済
んだ。そして幕がなくなるとそこには袴姿のシンケンジャー達がい
た。

『うちらは黒子さんがいるおかげで戦える。』

『ああ。だから俺達は安心して戦える。』

『そして私達は黒子と一緒に戦っている。』

『私達と黒子は、世界が変わったとしても覚悟は同じだ！』

『そして俺達は、たとえ世界が違っててもやるべきことは同じだ！シ
ヨドウフォン！』

モニター越しで文瑠がシヨドウフォンを筆モードにして構えると、

流ノ介達も同じようにシヨドウフォンを構える。

『『『『『一筆奏上！はっ！』』』』』』

モニター越しで丈瑠は赤い“火”、流ノ介は青い“水”、茉莉はピンク色の“天”、千明は緑色の“木”、ことはは黄色い“土”を宙に書き、丈瑠達は書き終わるとそれを反転させてシヨドウフォンにあるスイッチを押す。すると丈瑠達は宙に書いた文字に包まれ、丈瑠達はシンケンジャーへと姿を変える。

シンケンジャーになった丈瑠、シンケンレッドはベルトのバックルから共通ディスクを取り出してシンケンマルに装着するとシンケンマルを両手で構えて突きつけるように抜刀する。

『シンケンレッド！志葉・・・丈瑠！』

シンケンレッドは構えと解き、シンケンマルを肩に担ぎながら各乗る。次にシンケンジャーとなった流ノ介、シンケンブルーは共通

ディスクを取り出しシンケンマルに装着すると横に広げるように抜刀する。

『同じくブルー！池波 流ノ介！』

シンケンブルーは縦にシンケンマルを斬るように振るうと歌舞伎のようにポーズを取りながら名乗る。次にシンケンジャーとなった茉子、シンケンピンクは共通ディスクを取り出しシンケンマルに装着すると斜め上に抜刀する。

『同じくピンク！白石 茉子！』

シンケンピンクは一度シンケンマルを降ろし、半月を描くように上げると扇のようにシンケンマルを構えながら名乗る。次にシンケンジャーとなった千明、シンケングリーンは共通ディスクを取り出しシンケンマルに装着すると抜刀するなり後ろに回す。

『同じくグリーン！谷 千明！』

シンケングリーンはシンケンマルを前に戻すと、シンケンマルの根本から峰を持ち、刃先から出るまで撫でながら名乗る。最後にシンケンジャーとなったことは、シンケンイエローはシンケンマルを抜刀すると片手で突きつけるように構える。

『同じくイエロー！花織 ことは！』

シンケンイエローはシンケンマルを両手で持ち、一度降ろすと上にあげて横笛を吹くように構えながら名乗る。全員名乗りが終わるとシンケンレッドはシンケンマルの峰を持ち、ほかのシンケンジャーは忠誠を誓うようにしゃがむ。

『天下御免の侍戦隊！』

シンケンレッドが言い終わるとしゃがんでたシンケンジャーは一斉に立ち上がりシンケンマルを上へ構え、シンケンレッドも上へ構える。

『『『『『シンケンジャー！参る！』』』』』

シンケンジャー達は一斉にシンケンマルを降ろしながら言い、最後に顔を一斉に上げてそれぞれポーズを取る。

「相変わらずやってて恥ずかしくねえのか？あいつら・・・。」

シンケンジャー達の名乗りをモニター越しから見ていたヴィータは呆れながらも言う。そしてシンケンジャー達はナナシ連中に向けて走り出し、外道衆と戦い始める。

「始まったね……。」

「戦いも見たいけど、今は黒子さんが先や。シャーリー。」

「はい。」

シンケンジャー達がどうナナシ連中と戦うかは気になるが、それよりも気になるのは黒子達の動きだ。はやてはシャーリーにモニターの操作を任せ、黒子の動きを見る。

モニターには黒子達が逃げ遅れた人達の誘導、負傷した人の人民救助をしている。黒子達はシンケンジャーと外道衆の動きをよく見ながら行動していて、戦っているシンケンジャーの邪魔にならないようにしていた。

「あれが……“戦い”か？」

「逃げ遅れた人の誘導と人民救助しているだけだな……。」

モニター越しで見る黒子達の動きはなのは達からしてみれば戦ってはならず、ただ避難誘導や人民救助をしているように見えている。しかし、そう思わない人がいた。

「いえ、彼らはすでに“戦って”おる。」

「えっ?」

なのは達は声がる方向に向くとそこには、彦馬がいた。さっき声を出したのは彦馬だとわかるとなのは達はすぐに彦馬に聞く。

「戦っているって・・・?」

「黒子達はシンケンジャー達と違って、避難誘導と人民救助しかしておりません。しかし、彼らに取ってみれば明らかに戦いだ。」

「でも、あいつらがやってることってあたし達も出来るじゃん。」

「確かにそうですが、黒子達はそれしかできない。」

彦馬はなのは達に顔を向けず、モニターを見ながら言い続ける。

「黒子達は、殿達と同じように戦いたいが参加することが出来ません。理由は、あなたたちのような魔力もなければ、モチカラもありません。だからと言って外道衆に苦しむ人達を放っておけない。だからこそ、黒子達はシンケンジャーのサポートに専念することしかできないのだ。」

「サポートって・・・それでも現場に行くのは」

「危ない」となのはが言い終わる前に彦馬に遮られ、彦馬は喋り続ける。

「志葉家には、ロングアーチこくのような立派な設備がなければ、装備もありません。外道衆と戦えるのは、シンケンジャーだけです。しかし、装備がないとしても“人々を守りたい”という願いは同じ。だからこそ少しでもシンケンジャーの負担を減らすため、黒子達はサポートに集中しております。」

彦馬の言葉に、誰しもが黙ってしまふ。

「それはあなた達にも言える事、誰が現場まで連れて行くのか、誰が現場でサポートしているのか、全てはこの場にいる方達ですぞ！」

『…ッ！』

彦馬の言葉を聞いた瞬間なのは達は無意識にロングアーチの中を見回す。思い出してみれば、彼らは魔力を持たない人達で構成されている。中には魔力を持った人もいるが、ほとんどは魔力を持たない人達が占めている。よくよく考えてみれば過去に起きた事件でも誰かがサポートしてくれなければ解決できなかった事件が多かった。しかし管理局に入ってからそんなことを考えてもなかった。モニターを見れば黒子達が避難誘導や人民救助に専念して、シンケンジャーは戦いに専念している。一度彼らと戦場に立ったが、一度もそんなことは頭に入ってなかった。しかし、第三者目線で見ると彼らの役割がはっきりとしていた。

モニターを見てみるとすでにナナシ連中は全滅しており、避難誘導も人民救助も終わらしている。そして外道衆に残されたのはアヤ

カシ“マリゴモリ”しかなかった。

『もう僕だけなの……！また倒されるのは嫌だ………っ
わあっ！』

マリゴモリはシンケンジャー達に背中を向けて逃げようとするが突然マリゴモリの足もとから強烈な破裂音がする。マリゴモリはその音を聞くと思わず足がすくんでしまう。マリゴモリはどこから音がしたか周りを見ると、目に映ったのは遠くから癩癩玉を投げている黒子達だ。黒子は避難誘導のほかに、シンケンジャーの援助を止めるため遠くから投げることもある。黒子達はマリゴモリの動きを止めたとわかるとシンケンジャー達に頭を下げてどこかに行ってしまう。

『人間のくせに、僕の邪魔をしやがって……！』

マリゴモリは黒子の行動が許せなかったのか、怒りがこもったような声を出して呟いた。しかし、今マリゴモリは先ほどの強烈な音

の性ですぐには立てない状態。その様子をシンケンジャーは見逃さない。

『今だ！作戦開始だ！』

シンケンレッドがそう叫ぶとシンケンブルー、グリーン、イエローはシヨドウフォンを持ち、シンケンレッドはシンケンマルに獅子ディスクを装着し、シンケンピンクは自分専用の武器“ヘブンファン”を構えていた。

『まずは千明とこととはのモチカラでアヤカシの動きを止める！』

『俺は“枝”で！』

『うちは“岩”や！』

シンケングリーンは宙に“枝”と書き、シンケナイエローは宙に“岩”と書くとそれぞれ反転させるとモチカラが発動し、枝と砕け

た岩がマリゴモリの元に行き、ちょうど立ち上がる頃としていたマリゴモリの足に枝と岩が絡まる。

『う・・・動けない・・・!』

『次はあたしの風で!』

『俺の炎を倍にしてあいつの甲羅を叩き斬る!』

シンケンピンクはヘブンファンで風を舞い上がらせ、シンケンレッドはシンケンマルに装着した獅子ディスクを回転させ、炎に包まれたシンケンマルでマリゴモリを斬る。マリゴモリにダメージはないが、シンケンピンクの風によりシンケンレッドの炎はより強くなっている。そのおかげでマリゴモリの甲羅は極限にまで温度が高くなった。

『これってまさか・・・!』

『そして最後に私の、最大のモチカラで一気に冷やす!はあああああ
っ!...!』

シンケンブルーが前に出ると大きく“波”と書き、反転させると文字から巨大な波が現れ、波がマリゴモリの身体を飲み込む。波が消えるとマリゴモリの姿があつたが、マリゴモリの甲羅は大きくひび割れていた。

大きくひび割れていた理由はシンケンジャー達の行動にあつた。まずシンケングリーンとシンケンイエローのモチカラを使って動きを止め、シンケンピンクの風で強くなったシンケンレッドの炎でマリゴモリの甲羅を極限にまで熱し、最後にシンケンブルーのモチカラで急激に冷やしたことによる結果だ。いくら強度が高い甲羅でも、こうなってしまうは当然もろくなる。

『や・・・やっぱり』

「あ、あたしが砕けなかつたあいつの甲羅を簡単にひび割らせやがった・・・!」

ヴィータは自分がグラーフアイゼンのギガントフォームで叩いても平然としていたマリゴモリの甲羅をシンケンジャーの作戦でひび割ることに成功していたところを見ていて驚いていた。マリゴモリはこれからどうなるかすでにわかっているからか、怯えるように震

えていて、シンケンレッドはシンケンマルに共通ディスクを装着して回転させると烈火大斬刀に変えさせ、さらに白いディスク“虎ディスク”を取りだすとそれを烈火大斬刀に装着して振り回す。

『烈火大斬刀！大筒モード！』

「丈瑠さんの烈火大斬刀デバイスが変わった！」

シンケンレッドの武器、烈火大斬刀の変化に驚くはやてだが、モニターではシンケンジャー達がそれぞれの技ディスクを烈火大斬刀にセットが終了していて、シンケンレッド以外のシンケンジャー達は忠誠を誓うように座っていた。

『虎・五輪弾！成敗ッ！』

シンケンレッドは大筒モードとなった烈火大斬刀の持ち手を前に押し、烈火大斬刀にある引き金を引くとセットしたディスクが高速回転し、発射される。すると発射されたディスクは虎のような生き

物、“虎折神”の姿を身に纏いながらマリゴモリに向けて飛んでいき、マリゴモリに命中する。

『嫌だあああああああああ………!!!!』

虎・五輪弾を受けたマリゴモリは悲痛な叫びをあげながら倒れると爆発を起こす。

『よっしや！1の目撃破！』

シンケングリーンが立ち上がれば喜びを見せるかのようにはしやぎながら言う。なのは達はモニターを黒子達に移すと黒子達も同じように喜んでいて手をシンケンジャーに向けて振っている。しかし黒子の動きは手を振る行動から指を指す仕草に変わる。指が指された方を見るとそこには爆発した炎が一つに集まり、さらに倒したマリゴモリの姿が現れさらに巨大化していく。マリゴモリの“2の目”が発動したからだ。マリゴモリは巨大化しながら叫んでいた。

『よくも僕を不幸にしてくれたなああああああ！！！！！』

第二十幕 黒子の力 参（後書き）

作「今回は虎折神についてです」

とら
おりがみ
虎折神

- ・全長：50.8 m
- ・全幅：25.6 m
- ・全高：24.3 m
- ・重量：1100 t
- ・最高速度：650 km
- ・出力：850万馬力

虎（白虎）型の折神。メインカラーは白色。先代たちがドウコクを封印した際、隙間の地割れに挟まれ動けなくなったところをヒトミダマの術に取り込まれ傀儡となっていたが、丈瑠により「反」のモチカラで解放された。四肢がドリルになっており、腹部のディスク型車輪で走行する。ドリルによる地中移動や突進攻撃の他、高速走行により地割れを起こすこともできる。

シンケンオーと侍武装をすると「トラシンケンオー」になる。

虎ディスクの所持者は志葉 丈瑠。

前回書かれてなかったけど舵木ディスクの所持者は池波 流ノ介。

作「今回も無理やり感がある……。そして今回は“黒子達の戦い”を見るっていうことでモニター越してっていう形になりました。」

第二十一幕 黒子の力 四（前書き）

作「今思つけど長くなりすぎたと思つ……。ちよつと後悔してま
す。」

第二十一幕 黒子の力 四

『ミッドチルダ 街 18:12』

ここはミッドチルダの街中。空の色はすでに暗く、街の街灯や建物の光で街中を照らしているが、先ほどシンケンジャー達が倒したアヤカシ“マリゴモリ”は2の目を発動させて巨大化し、今にも暴れようとしていた。

「今度はまともなアヤカシのようだな。」

2の目を発動させたマリゴモリを見てシンケンレッドが呟く。この前に結界を張っているのにもかかわらず、機動六課の訓練施設に外道衆が一度現れたことがあるからだ。

シンケンジャー達は一齐にエンブレムモードになっている折神を取り出す。シンケングリーンだけ少し余計に疲れている様子だ。

「千明、大丈夫なん？」

「ああ……。この程度ならまだ大丈夫だぜ。」

シンケングリーンこと千明は昼、茱子の料理を食べたせいで体調が悪い。しかも、外道衆を倒すためモチカラで偽物を作ってまで戦いに来ているため、無茶をしている。今のシンケングリーンはマリゴモリを倒せるまで動けるかどうかかわからないはず。しかしそれでもこの世を守るため戦わなければならない。

「…………折神大変化！」

シンケンジャーは一斉にエンブレムモードの折神を置き、折神に“大”と宙に書くと書いた文字は折神の中に入っていき、大きくなっていく。巨大化が済むとシンケンジャーは折神の中に入っていき、シンケンジャーがそれぞれシンケンマルにシールドディスクを装着して台座にセットすると、折神達はそれぞれアニマルモードになる。アニマルモードになった獅子、龍、亀、熊、猿折神はマリゴモリの方に向かっていく。

「侍合体！」

シンケンレッドが獅子折神の中に入ったまま宙に“合”を書いて反転させると獅子折神は胴体と頭になり、亀は右腕、猿は左腕となり、龍は左足、熊は右足になると折神達は獅子折神を中心に集まり、合体していく。龍折神から飛び出たシンケンオーメットをかぶり、腰にシンケンオーの武器、“ダイシンケン”が現れて背中側にシンケンオーを操作するために使うシールドディスクと同じ形のシールド“秘伝シールド”が現れる。そして合体が終わり、シンケンジャ一の侍巨人“シンケンオー”が現れる。

「……侍シンケンオー！天下統一！」「……」

「前のようにはいかないよ！大ナナシ連中！」

マリゴモリはシンケンオーを目にすると指を横に振りながら言い、大ナナシ連中を呼ぶと街のビルの“スキマ”から大ナナシ連中が現れ、マリゴモリを守るかのように立ち上がる。

「大ナナシ連中まで使ってくるのね……。」

「だが奴の倒し方はすでにわかっている。大ナナシ連中を蹴散らしながら確実に奴を攻撃するぞ！」

「よし！じゃあまず俺からだな！」

シンケンレッドの言葉を聞けばシンケングリーンが台座からシンケンマルを抜き、シンケンマルからシールドディスクを外してシンケンオーから出て、シンケングリーンはシンケンオーの右肩に乗る。

「あれって……千明さん？何するんやろか？」

「あれ？あのオレンジ色のディスクって確か……。」

場所を変えてロングアーチ。ロングアーチからシンケンオーを見ているのはやてはシンケングリーンをじっと見た。シンケングリーンの持つ兜ディスクに気づいたスバルは何かを思い出そうとする前に、シンケングリーンはシンケンマルに兜ディスクを装着すると回転させる。するとシンケンマルはオレンジ色のエネルギー状に包まれ、

シンケンマルに装着されたディスクからヘラクレスオオカブトと似た折神、兜折神が現れる。

『ッ!』

「あつ!千明さんは確か、折神はディスクにも折りたたまれているって聞いたけど……。」

「ここまでデカいなんて……。」

モニターからシンケングリーンが出した兜折神の大きさになのは達は驚いていた。フォワード達（ティアナはその時操られてたため除く）は千明から折神にはディスクに折りたたまれているのもあると聞いたが、15m以上の折神が折りたたまれていたとは思ってもなかった。

場所を変えて街中。シンケングリーンはシンケンオーから飛び降りて兜折神の上に立つと中に入っていく、兜ディスクが装着されたままシンケンマルを台座にセットして、操縦する。

「喰らえ!兜砲!」

シンケングリーンは兜ディスクを動かし、角の間にある砲門からモヂカラの込められたレーザーを発射する。レーザーを喰らった大ナナシは大きく転倒して消えていく。そして兜折神はシンケンオーの元に行く。

「行くぞ！侍武装！」

シンケンレッドがそう叫ぶと兜折神の両足が外れそれぞれがシンケンオーの肩に装着され、本体は浮上してシンケンオーの上に加わる。シンケンオーはかぶっていたシンケンオーメットを外すと代わりに折神本体がシンケンオーの頭に装着される。すると兜折神の下の角が展開されるとシンケンオーの顔が現れ、カブトシンケンオーとなつて武装が完了する。武装が完了すると兜折神に乗っていたシンケングリーンはシンケンオーの操縦席に戻り、台座にシンケンマールをセットする。

「カブトシンケンオー！天下無双！」

「が、合体しおった！」

ロングアーチで見ていたはやて達は兜折神がシンケンオーと合体したことに驚きを隠せないでいた。

カブトシンケンオーはダイシンケンを腰に戻すと姿勢を前かがみにする。それを見たマリゴモリはすぐに丸くなる。

「黙ってやられるような僕じゃないぞ！」

マリゴモリは玉状になるとそのままカブトシンケンオーに飛んでいく。カブトシンケンオーは合体した兜折神から炎を出して攻撃する。炎はマリゴモリを包み込んだがマリゴモリと止められることは出来ず、マリゴモリはカブトシンケンオーにぶつかるとぶつかってカブトシンケンオーは姿勢を崩し後ろに下がってしまう。

「うわあっ…！」

「くっ、だが奴の身体を熱することは出来た！流ノ介！」

「はっ！次は私の番ですね！舵木折神！」

シンケンブルーは台座からシンケンマルを抜くとシールドディスクを抜き、シンケンマルに水色のディスク“舵木ディスク”を装着すると回転させる。するとシンケンマルは水色のエネルギー状に包まれ、舵木ディスクからカジキマグロと似た折神、舵木折神がカブトシンケンオーから現れる。舵木折神に乗り込んだシンケンブルーはシンケンマルを台座にセットするして操縦する。

「舵木魚雷！」

シンケンブルーは舵木折神を操縦し、舵木折神の頬からモチカラが込められた弾丸を発射し、大ナナシ連中を一通り一掃する。そして舵木折神はカブトシンケンオーの元に飛んでいく。カブトシンケンオーは兜折神と武装を解除すると舵木折神は二つに分離し、頭はシンケンオーの頭に装着され、残りは背中に装着されるとカジキシンケンオーとなり、侍武装は完了する。シンケンブルーはシンケンオーの操縦席に戻り、台座にシンケンマルにセットする。

「「「侍武装！カジキシケンオー！天下無双！」」」

「大ナナシ連中！僕を守って！」

マリゴモリはカジキシケンオーを見るとすぐに慌て出し、マリゴモリの指示で大ナナシ連中はマリゴモリの前に立ち守るようになり、立ちはだかる。

「これじゃあアヤカシに水かけれへん！」

「ダイシンケンでナギナタモードにして突破するぞ！」

シンケンレッドがそう言うとカジキシケンオーが持つダイシンケンでナギナタモード（反対側にも刀身があるS字型の形状）に変化させるとカジキシケンオーは大ナナシ連中の元に向かっていく。待ち構えていた大ナナシ連中はカジキシケンオーに斬りかかるもナギナタモードのダイシンケンで防がれ、逆にカジキシケンオー

に斬られていく。斬られた大ナナシは倒れて消えていき、カジキシケンオーはマリゴモリの前に出ることが出来た。

「舵木の水で急激に冷やす！」

「し、しまった！」

カジキシケンオーは合体した舵木折神からモチカラで作られた水を滝のように出し、マリゴモリの身体にかける。するとさっきまで熱せられたマリゴモリの甲羅は急激に冷やされたせいか、甲羅はひび割れを起こした。

「最後は俺だ！虎折神！」

シンケンレッドが台座からシンケンマルを抜くとシールドディスクを外し、白いディスク“虎ディスク”を取り出すとシンケンマルに装着して回転させるとシンケンマルは白いエネルギー状に包まれ、白いディスクから虎に似た折神、“虎折神”が現れる。カジキシ

ケンオーは舵木折神と武装を解除し、虎折神は頭が本体から外れ、尻尾は頭と合わさり一つの兜になり、本体は足であるドリルが4つにまとまり背中に装着され、シンケンオーの頭に虎折神の頭を装着すると“トラシンケンオー”と侍武装が完了する。

「「「侍武装！トラシンケンオー！天下無双！」」」

トラシンケンオーはマリゴモリの前に立ちはだかるが、残った大ナナシ連中は最後の抵抗なのか、マリゴモリの前に立ち一斉に槍を構える。

「お前達！一気に決めるぞ！」

トラシンケンオーは姿勢を低くし、背中に背負った虎ドリルを外道衆に向ける。それを見たマリゴモリは震え始め、大ナナシ連中は槍を構えて突撃する。トラシンケンオーに搭乗しているシンケンジャー達は台座からシンケンマルを抜き、シンケンマルを構える。

「トラスンケンオー！虎ドリル突撃！」

シンケンジャー達が一斉にシンケンマルを前に突き出すとトラスンケンオーの背中に背負われたドリルが一斉に回転し出し、マリゴモリに向けて突撃をし出す。槍を構えていた大ナナシ連中は虎ドリルに耐えきれず爆発を起こして消えていき、大ナナシ連中を突破したトラスンケンオーはそのままマリゴモリに突撃する。

「今度こそ幸せを掴めると思ったのに……」

マリゴモリは避けきれず、トラスンケンオーのドリルの直撃を受けてしまい、マリゴモリの身体は耐えきれず爆発して消えてしまう。マリゴモリを撃破するとトラスンケンオーは合体を解除し虎折神に戻り、シンケンオーの前にシンケンオーと侍武装した兜、舵木、虎折神が集まる。シンケンジャーはシンケンオーの中で外道衆を倒して喜びを見せるが、すぐにシンケングリーンが倒れてしまう。

「ッ！千明！」

「千明！どうしたんだ！しっかりしろ！」

「くそ……、今頃になって痛みが……！」

シンケングリーンが倒れた理由は、茱子の料理の性で起こした腹痛をさつきまでシャマルからもらった薬で弱めていたのだが、その薬の効き目が切れてしまい、腹痛が振り返ってしまった。そのためシンケングリーンは耐えきれず倒れてしまった。

「あかん！早く戻らなっ！」

「千明イ！死ぬな！耐えるんだ！」

「うるせえぞ流ノ介……。っっていうか腹痛程度で死なねえから……」

シンケンジャー達と黒子達の戦いをモニターから見ていたなのは達。なのは達は折神の凄さに呆気を取られていた時、彦馬が喋り出す。

「んっ、少し時間をよいでしょうか？」

「あ、はい。いいですよ。」

「先ほど、ある黒子があなた方と話したいことがあると言っておりました。」

「えっ？黒子さんが？」

「ええ。入って参れ。」

彦馬が扉に向けていうと扉から一人の黒子が入ってくる。薄暗いロングアーチだと黒子がどこにいるか分かりづらいが、黒子はなのは達の元に行くとしゃがむ。

「顔を出してよいぞ。」

彦馬がそういつと黒子は顔を隠していた布をめくると顔をさらけ出す。顔は中年の男性で、その黒子はなのは達をまっすぐ見る。

「あなたは・・・？」

「お初にお目かかります。黒子の代表でございます。」

この黒子の名前は“小松 朔太郎”。彼はかつては家臣だったが、志葉家17代目当主が死による空虚感から志葉家を離れていたが、シンケンブルー1こと流ノ介と出会ったことにより侍達の戦いを支えることの意義を取り戻し、再び黒子として復帰していて、今では黒子の中心的存在になっている。

朔太郎黒子はなのは達をまっすぐ見ながら口を開く。

「まずあなた方は私達黒子が、戦場に立つのは危ないと思っておりますね？」

「う、うん……。」

「傍から見れば危険だと思われるのは仕方がないこと。しかし、私達はシンケンジャーを信頼しているからこそ私達も戦場に立つことが出来る。知つての通り、私達にはモチカラも魔力もないため戦いに参加することは出来ませんが、“人々を守りたい気持ち”と“覚悟”は彼らシンケンジャーと同じ。」

「覚悟？」

「ええ。シンケンジャーと私達、黒子は“骨を拾い合う”覚悟で戦ってます。でなければ戦いもできません。」

『……………』

朔太郎の言葉を聞いたなのは達は丈瑠のある言葉を思い出していた。

『“命令”ではなく“覚悟”で決める。』

この言葉を思い出して改めて考えてみると、シンケンジャーと黒子達はどんなに厳しい戦いをしてきたのか、どれだけ修羅場を潜ってきたか想像がつかなかった。しかし、朔太郎を見ていると、黒子はただの部下ではなく、一人の戦士だと言つことがわかる。黒子達

は力がなくとも、シンケンジャーと並ぶ戦士だと。

「……私達はまだ、あなた方管理局をまだ信用したまでではありません。しかし、一つ言わせてもらいます。」

「……………」

「外道衆と戦う辺り、死ぬ覚悟と命を奪う覚悟をしておいてください。そうしなければ、外道衆とは戦えません。」

朔太郎の言葉になのは達は一斉に固まった。なのは達は今まで非殺傷で戦ってきたが、外道衆となれば殺傷で戦わなければならない。相手は化け物の姿をしているがよくよく考えてみれば生命体である。出来れば非殺傷で戦いたいが非殺傷では効果が薄いとすでに実証済みで本局から『もし出くわしたら殺傷設定で戦え。』と言われているが、抵抗を感じている。しかしシンケンジャーはそれに屈することなく戦ってきている。外道衆と戦う以上。避けられない道だ。

朔太郎はもう言うことがないのか、顔を再び布で隠すと立ち上がり立ち去ろうとする。

「あ、あなたの名前……」

はやてが名前を聞こうと声をかけたが朔太郎はそのまま立ち去ってしまい、どこかに行ってしまう。

「……どうなされますか？」

彦馬は朔太郎がいなくなるとはやてに顔を向けずはやてに聞く。

「……黒子さん達が戦場に立つことを、許可します。」

はやては黒子達の覚悟を彦馬や朔太郎から聞き、思いを改めて黒子達が戦場に立つことを許可した。

『ミッドチルダ 機動六課 医務室 19:40』

戦いが済んだシンケンジャー達は変身を解除してすぐさま千明を医務室に運んでベッドに寝かせていた。今医務室にいるのはベッドの上で食事をしている千明と、シャマルとフォワード達。文瑠達は食堂で食事をしている。

「もう、無茶すぎですよ、千明さん。」

「……ごめんなさい。」

モチカラで偽物まで作ってまで外道衆との戦いに出たため、御立腹のシャマルにこっぴどく叱られてしまい、逆らえず謝る千明だった。

「あの、千明さん。外道衆と戦う時、どんな気持ちですか？」

エリオは食事中の千明に恐る恐る聞く。フォワード達も彦馬と朔太郎の言葉を聞いていて、自分達も外道衆と戦うかもしれないと思ったので戦闘経験豊富でシンケンジャーの中では一番親密な千明に聞くことにした。

「ん？ああ、……そりゃあ怖かったな。今も怖いと感じるけど、それでも俺達しか外道衆と戦えねえし、人々を守りたいから戦っている。うかうかしてるとこっちがやられちまうし、だからと言って戦わないと被害が出ちまうし、それに、人々が悲しむ姿を見たくねえからな……。」

「……そうなんですか。」

フォワード達は千明から聞くと気が重くなる。自分達も千明と何度が話しているが、自分達が想像をつかないほどの修羅場の経験を積んでいることが先ほどのことで良くわかった。そしてフォワード達はいずれ死ぬ覚悟、命を奪う覚悟を決めて外道衆と戦う覚悟を決めなければならぬ時が来るんじゃないかと不安になった。

「……そう不安になるんじゃないよ。いざっという時には俺がつ

いてやるし、それに、覚悟を決めると言われてもすぐには出来な
いだろ？何度か戦って、決めればいいだろ？」

「・・・そうね。ありがとう、千明。」

「礼は別に要らねえよ。お互い、頑張ろうぜ。」

『???? ???? ??:???'』

ここは真つ暗な空間で三つのモニターが中心を見るように集まっ
ていて、その中心に管理局地上本部のレジアス・ゲイス中將がいた。
この三つのモニターは最高評議会の中心人物が通信で会話をするた
め設置されている。この最高評議会が集まり、会議をする理由は先
ほどの戦いについてだ。

「また外道衆というのが暴れたらしいな・・・。」

「で、その外道衆を排除したというのはシンケンジャーと名乗る集
団か。」

「奴らめ、自分達でないと外道衆と戦えないとほざいでいた。次元
漂流者のくせに生意気なことを・・・。」

「しかし現に二体の“アヤカシ”というものを倒している。あの“

巨大兵器”を使ってまでもな……。」

彼らが言っている“巨大兵器”はシンケンジャーの侍巨人“シンケンオー”のことを指している。

「加えて、彼ら自体の戦闘能力も伊達じゃない。レアスキル（モチカラのこと）も厄介なもの、今は手に出さない方が良いでしょう。」

「彼らを我らの管理下に置きたいのだが、難しい話でもあるな。せめて巨大兵器だけでも量産できればいい。」

「ならばまずは情報を集めよう。情報が手に入り次第“あの男”に作らせればいい。」

「そうだな。その巨大兵器の情報採取を任せたぞ、レジアス中将。」

「……はっ。かしこまりました。」

レジアスは最高評議会から指令を受けると一礼し、その場を去っていく。それから数分後、地上本部の帰路に向かっている時に心の中で囁いていた。

「（最高評議会め、何をたくらんでいる。最初は危険視してたのに今度は情報採取か。）」

最高評議会の指令に対し、内心毒ついていたレジアス。当初管理局本部で丈瑠から自分達と外道衆のことを聞いた時、レジアスは丈瑠に対して機動六課じゃなく地上本部に来ないかと勧誘した。しかし、丈瑠はそれを拒否している。

「（しかし・・・シンケンジャーとかいう奴ら、一体何者だ？見た目はただの青年だが彼の目からは並の者ではないはず・・・。）」

当初、勧誘を拒否された時は生意気な小僧としか感じていなかったが、丈瑠の目からは姿から想像できないほどの力があつた。それは揺るぎない物であり、踏み込んではいけないと本能的に感じてしまつほどだった。

「今は彼らを信じてもいいのだろうか・・・？」

レジアスは複雑な感情を抱きながら地上本部に戻った。

第二十一幕 黒子の力 四（後書き）

作「今回は小松 朔太郎について紹介します。」

小松こまつ 朔太郎さくたろう

第七幕で登場した、かつての志葉家の家臣。先代シンケンレッドの死による空虚感から志葉家を出奔したが、流ノ介との出会い（その際は自らの正体は明かしていない）と彼とともに舵木折神を釣り上げたことから侍たちの戦いを支えることに意義を取り戻し、黒子として復帰した。

第四十七幕にて再登場した時には黒子たちの中心的存在となっており、侍としての忠義と丈瑠との絆との間で思い悩む流ノ介の前に再び顔を見せて「侍として悔いのなきように」と告げ、絆を取り戻させた（この時まで流ノ介は朔太郎の素性を知らなかった）。薫には対丹波用のハリセンを手渡すなど洒落の利いた行動もみせる。

作「朔太郎は出番は少ないものの、シンケンジャーにとって重要なキャラクターです。しかし、今後も出せるかどうかわかりません。敬語だったというのは、相手は管理局に所属しており、こちらは一般市民。位から見て自然とそうになりました。」

第二十二幕 戦う覚悟（前書き）

作「リリカルなのはを見ていると百合路線が強いのかなぜだろうと毎回思う・・・。

今回もオリジナルです。」

第二十二幕 戦う覚悟

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設 14:21』

黒子の件から二日。今の時間帯は午後の訓練の時間で、なのは達と丈瑠達が訓練施設で集まっていた。訓練施設はクラナガンの街中に設定しており、その中に丈瑠達がシンケンジャーに変身して待機している。シンケンジャーの前にモニターが現れる。モニターに映しだされたのはなのはだ。

『準備はいいですか？』

「ああ。早く始めてくれ。」

シンケンレッドが言うともモニターは消え、少しするといきなり地面からナナシ連中が現れる。このナナシ連中はこの訓練施設で作られたホログラム。今までミッドチルダに現れた外道衆のデータを元に再現されている。そして再現されたナナシ連中の数は最大で50体が限度。シンケンジャーの前に出されたナナシ連中は最大の50体だ。

と言っても完全に再現できたわけではない。ナナシ連中は化け物だが意思を持っている。そのためナナシ連中のデータが不十分なた

めガジェットをナナシ連中の姿に変えたただけだ。しかし攻撃方法は本物のナナシ連中と同じように設定されている。ちなみにこのホログラムを使ったのは初めてだ。どんな結果が出るのはまだわからない。隊長陣は外道衆と戦うため、フォワード達は任務中に外道衆に出会っても生き残れるためこの訓練が実施された。

そしてまずナナシ連中とどう戦うのか、手本という形で最初にシンケンジャーである丈瑠達が戦うことになった。

『では、開始します。』

訓練施設が開始のブザーが鳴り響くと同時にホログラムで作られたナナシ連中が一齐に構え、シンケンジャーの元に向かっていく。それに応えるかのようにシンケンジャー達も構え、ナナシ連中の元に行く。シンケンジャー達がナナシ連中の群れに入るとすぐに別れてナナシ連中の一掃に始める。

シンケンレッドはナナシ連中の斬撃をシンケンマルで受け流してカウンターを決める。シンケンブルーはシンケンレッドと同じように受け流しながらもナナシ連中を倒していく。シンケンピンクとシンケナイエローはナナシ連中の斬撃を受けとめては流して攻撃を加える。シンケンジャーの中でも一番異様なのはシンケングリーンだ。シンケンジャーの基本的な剣技は両手で持って戦っているが、シンケングリーンは常にシンケンマルを片手で持って戦っている。シン

ケングリーンの場合、専用武器が槍なためかシンケンマルの最大リーチを活かしている。当然そうなると思えば隙は大きいのだが、シンケングリーンはナナシ連中の攻撃をたまに防いでいるところもあるが、基本は避けている。

シンケンジャー達の戦いをなのは達はモニター越しで見ている。

「丈瑠さん達、戦い慣れてるね。」

「一番驚いたのはことはさんだね。おとなしそうに見えるけど、戦いになると結構強いね。」

「千明の戦い方はちょっとちげーな。」

「最大限のリーチを活かしての戦いだな。だが、そろそろ終わる。」

気が付けば、ホログラムで再現したナナシ連中はすでに全滅していた。全滅すればそれを知らせるかのようにブザーが鳴る。

「はあ……。なんかしっくりこねえな。」

シンケングリーンは肩にシンケンマルを担ぐように置きながら地面に座る。

「ええ。再現されてるとは言え、動きが単調すぎるね。」

「せやけど、データも少ないって言ってたから仕方ないと思う……。」

「ないよりまし、と言うところだな。」

「俺達の“稽古”は済んだ。さっさと戻るぞ。」

ホログラムで再現された外道衆は、シンケンジャーからすれば機械と戦ってたような感覚だ。データが少ないとは言え、長いこと外道衆と戦ってたシンケンジャーには外道衆と戦っている気がしなかった。しかし、贅沢は言えない。なのは達も外道衆と戦うため今はこれが限度かもしれないかった。

一方なのは達はシンケンジャーが再現したナナシ連中を全滅した時間を見ていた。

「時間、わずか一分半！難易度は最大にしたのに速いよ……！」

「さすが戦い慣れていることはある。我々も負けてられないな。」

シンケンジャーが再現した外道衆を全滅させた時間に驚くのは達の元にシンケンジャー達が戻ってきた。

「次はお前達の番だ。」

「あ、はい。どうでしたか？」

「情報が少ないとはいえ、ここまで再現したのは驚いている。」

「その割にはあまり驚いてない気がしますけど……。」

「戦場でいちいち驚いてたら戦いにはならない。お前達の戦いを拝見させてもらおう。」

「ああ！ナナシなんかすぐに片付けてやるぜ！」

「油断はするな、ヴィータ。」

「わかってるって！」

隊長陣はホログラムで再現したクラナガンの街中に入っていく中、シンケンジャー達は変身を解いてモニターを見る。モニターにはなのは達が指定されて場所まで歩いている姿があった。

「丈瑠。ホントにこれでよかったの？」

「……出来れば巻き込ませたくない。だが、彼女達の任務中に外道衆が現れてもおかしくない。少しでも生き残る確率が高くなればそれでいい。」

機動六課はシンケンジャーに外道衆の戦いを協力しているが、シンケンジャーにとってみれば外道衆の戦いは機動六課は部外者。出来れば巻き込ませたくないが、外道衆はそれを許してくれないはず。そのため訓練という形で生き残れる方法を教えるしかなかった。

丈瑠達が、モニターを見ていると後ろからシャーリーが歩いてきた。

「シャーリー。何しに来た？」

「ちょっと訓練のデータを取りに来ました。」

シャーリーが来た理由は、訓練で出たデータの採取だ。ちなみに彼女はまた丈瑠達のモチカラについてはまだ諦めてない。

「丈瑠さん。あの」

「俺達の装備と折神は預けないぞ。」

「ですよ……。」

シャーリーは丈瑠の反応に苦笑いして答える。そうしているとなのは達は指定された場所まで到着したようだ。ちなみになのは達はすでにバリアジャケットと騎士甲冑を身に着けている。

『配置に着いたよ。誰か操作してくれない?』

「あ、あたしに任せてください。難易度はどうします?」

『レベル3でお願いします。』

「わかりました。」

シャーリーは訓練の設定を操作し、レベルを合わせると訓練施設にナナシ連中を出す。数は30体とシンケンジャーより少ないが、まだ戦い慣れてないなのは達にとってみれば十分だ。この訓練では外道衆の戦いに難易度が5段階に設定されている。当初文瑠は反対したのだが、なのは達は難易度で敵の数が変わるといった条件付きで了承した。

「じゃ、始めますよー。」

シャーリーが言うと同時に操作すると開始を教えるかのようにブザーが鳴る。ブザーが鳴るとナナシ連中は構え、なのは達の元に向

かっっていく。なのは達は空を飛んで分散する。するとナナシ連中はすぐに弓矢を持ち、なのは達に向けて矢を放つ。なのはは防御魔法で防ぎながらも、隙あらば魔力弾を撃つてナナシ連中に対抗する。フェイトは持ち前の機動力を活かして矢を潜り抜けてフェイトのデバイス“バルディッシュ”をハーケンモードにしてナナシ連中に一撃を入れる。ヴィータはナナシ連中の懐に入ってグラーファイゼンでナナシ連中を吹き飛ばす。シグナムは地上に降りてシンケンジャーと同じように戦っている。

なのは達が戦っている様子を文瑠達が見ていた。

「チームワークは悪くないな。」

「でもなのはさん達の場合は殺傷設定じゃないと倒せないんじゃない？」

「再現したナナシ連中は非殺傷でも倒せるように設定してます。殺傷設定にするの許可が必要なので訓練のために許可取るのは難しいんですよ。」

文瑠達は訓練前になのは達から外道衆と戦うことを話していた。その時文瑠は魔導師の場合は非殺傷だと効果が薄いと聞いていた。そのせいか、文瑠達は非殺傷では倒せないと知っていた。

「この訓練が済んだら、非殺傷で逃げ切る方法だな・・・。」

丈瑠はなのは達が戦っている様子を見ながら呟いた。外道衆と戦うとなれば彼女達は殺傷設定で戦わねばならない。そしてフオワード達は、外道衆と戦わせず任務中に外道衆と出くわしてもいいように非殺傷で逃げ切れる訓練に付き合おうと考えていた。

ちなみに隊長陣がレベル3のナナシ連中を全滅させた時間は二分。

『三途の川 六門船 ？？：？？』

場所を変えて三途の川。外道衆が拠点とする六門船の奥で骨のシタリが“ある物”を見ていた。

「さあ、そろそろ目覚めの時だね。」

シタリがある物を見ながら呟いた。シタリが見ているある物とは、人間一人が入れるサイズの試験管とそれに繋いである機械だ。これらの機械はスカリエツティが手を組む証として一つ譲ってもらったもの。シタリはスカリエツティから使い方を教えてもらっている。アヤカシを復活させるには魂が必要なのだが、ここはあの世とこの世の狭間の三途の川。シタリはこの川に沈んでいるアヤカシの魂を拾い上げて復活させている。

だが、普通に復活させると身体はすでにボロボロの状態が多く、復活させたとしても力は弱い状態になってしまう。そのためシタリは拾い上げた魂と、三途の川の水を試験管の中に入れて、シンケンジャーに倒される前の姿に復活させることに成功した。当初は2の目の復活は難しかったものの、何度かアヤカシを復活させていけば自然とコツを掴める。そして試験管の中に入っているアヤカシは“ハチヨウチン”。このアヤカシは炎の攻撃が得意アヤカシだが性格に難がある。

シタリはそのハチヨウチンの復活作業が済んだのか、試験管に入っていた三途の川を抜き取り試験管を開くとハチヨウチンがゆっくりと目覚める。

「お目覚めかね、ハチヨウチン。」

「ああん・・・シタリか？なんか無性にむしゃくしゃしてきたぜ・・・」

ハチヨウチンはシタリに言われると雄叫びを上げながら三途の川に飛び込んでいった。

「復活したアヤカシ間違えたのかねえ……。今度は融通が利く奴にした方がいいかもしれないねえ……。」

シタリはハチヨウチンが飛び込んでいった三途の川を見ながらため息をついた。

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設 15:32』

訓練施設でフォワード達が非殺傷で外道衆から逃げ切れる訓練をしていた時、スキマセンサーに反応した時の警報が機動六課中を鳴り響かせる。

『スキマセンサーに反応あり！さらに各地に火災発生！シンケンジャーとスターズ分隊とライトニング分隊は、直ちにヘリポートに集合してください！繰り返しします！』

「外道衆か！お前達、行くぞ！」

「訓練は一旦中止！みんな、行くよ！」

「「「「はいつ！」「」「」

文瑠達となのは達は警報が鳴るなり、ヘリポートに向かった。

『ミッドチルダ 街 15:42』

ここはミッドチルダの街で、ビルが多く立ち並ぶ。しかし、一部のビルは火災を発生させていた。火災を発生させた犯人は紛れもなく外道衆のハチヨウチンだ。

「ひゃーはっはっは！大口叩いてその程度かよ！むしゃくしゃするほど弱いなあ？」

ハチヨウチンが大声上げながら言っていた相手は先に到着していた地上部隊の魔導師だ。先ほどハチヨウチンがビルに火を吐いて火災を起こした時、地上部隊の魔導師が到着してハチヨウチンと戦ったが、逆に返り討ちに合ってしまった、大半の魔導師がやられてしまった。もちろん殺傷設定で戦ったのだが、ハチヨウチンの炎に勝てなかった。まだ立てれる魔導師はいるものの、ほとんどが動けない状態になっていた。

「くそ……！俺達では敵わないのか……！」

「せめて、救援が出るまで持たせるぞ！」

「まだ威勢のある奴がいるのか！ハチヨウチン様に刃向ったことを反省しやがれ！」

「うわあああッ！」

ハチヨウチンはまだ立ち上がる魔導師を見てイラついたのか、炎を吐いて残った魔導師に向けて炎を吐く。魔導師たちは防御魔法を発動して耐えようとする。しかし、ハチヨウチンが出しているのは本物の炎。もし魔力だったら防げたのかもしれないが、ハチヨウチンが出すのは大火力の炎なため、耐えきれなかった魔導師が多い。大半倒れている魔導師はそのせいで倒れている。

チンはシンケンジャーを見るなり怒り出し、シンケンジャーに向けて炎を吐くが、一斉に別れて炎を避ける。なのは達も到着してフォード達は救助に向かっている。隊長陣は外道衆の退治をするためハチヨウチンの元にいる。

「どうしてこんなことをしたの！」

「ああん？俺様はむしろしゃくしゃする気持ちを発散するためにやっただけだ！もちろん！反省してない！」

「そ、それだけの理由で・・・！」

なのはに聞かされたハチヨウチンはまるで自分が正しいかのよう
に胸を張りながら言うとなのは達はそんな簡単な理由で火災を起こ
したというのが信じられなかった。

「お前達！無駄口を叩いてる暇はない！さっさと倒すぞ！」

「で、でも！」

「しゅちゅしゅちゅつるせえ！俺様に口答えしたことを反省させてやる

「！」

『ッ！！』

ハチヨウチンは自分に口答えしたことが気に食わなかったのか、
なのは達に向けて炎を吐く。なのは達はいち早く反応し、炎をそれ
ぞれ分散して避ける。

「アクセルシューター！」

「プラズマランサー！」

なのはとフェイトは空を飛びながらハチヨウチンに向けてそれぞれ
の魔力弾を発射する。魔力弾が着弾すると爆発が起きる。煙が晴
れると、なぜか無傷のハチヨウチンがいた。

「えっ！」

ら守り出した。ハチヨウチンが炎を吐き終わると腹の当たりから干からび始める。

「こんな時に水切れかよ！貴様ら！二度と俺様と関わるなよ！むしやくしやるからな！」

「あ！逃げんな！」

スキマから逃げようとするハチヨウチンに対してヴィータは追いかけるが、捕まる前にハチヨウチンはスキマの中に入って逃げてしまった。呆然と空を飛ぶのはとフェイトにシンケンレッドが近くまで来る。

「丈瑠さん……。」

「なぜ、殺傷設定で戦わなかった？」

「そ、それは……。」

【私が勝手に非殺傷にただけです。マスターには責任がありません。】

【その通りです。】

シンケンレッドの問いにレイジングハートとバルディッシュが答える。外道衆相手に殺傷設定は無許可で使用できる。今回の戦いも例外ではない。しかし、レイジングハートとバルディッシュはマスターであるのはとフェイトが殺傷設定で戦うことを抵抗を感じていたことを思っけて勝手にやったことだ。しかしデバイスの声はシンケンレッドには聞こえず、尚且つそれが理由になるわけではない。

「つ、次は殺傷設定で戦うから」

「もういい。」

次で弁解しようとするのはだが、文瑠は声を上げ。

「なのは、フェイト。お前達は、もう戦わなくていい。」

と、冷たく言い放った。

第二十二幕 戦う覚悟（後書き）

作「今回はカプトシンケンオーとカジキシケンオーと今回登場したアヤカシについて紹介です。」

カプトシンケンオー

- ・全高：57.2 m
- ・全幅：51.4 m
- ・重量：2800 t
- ・最高速度：600 km
- ・出力：2100万馬力

シンケンオーが兜折神を侍武装した侍巨人。武装は角の間と兜折神の角を吹返しとして展開した部分の砲門とダイシンケンで、砲門からビームを連射する「兜砲」という技を使用できる。必殺技は、頭部の角を閉じて回転させ、そこから集約させたエネルギー弾を打ち出す「兜大回転砲」。

カジキシケンオー

- ・全高：63.12 m（通常時）、90 m（ダイシンケン頭部装備時）
- ・全幅：36 m
- ・重量：2800 t
- ・最高速度：120ノット
- ・出力：2100万馬力

シンケンオーが舵木折神を侍武装した侍巨人。武装はナギナタモードに変化させたダイシンケン（反対側にも刀身があるS字型の形状）と舵木魚雷。必殺技は、頭部に合体させたダイシンケンに「斬」のモチカラを込め、体ごと振り下ろして斬りつける「舵木一刀両断」。

八チヨウチン

虚無僧のような、燃えさかる提灯のような、アヤカシである。

長く伸びた口からあつちこつちに炎を吐いて、周囲を燃やして暴れるらしい。八チヨウチンを火や風で攻撃しても、火を吸収したり風に煽られたりして、かえって強くなってしまふので、有効なのはやはり水で攻撃する事だろう。常にむしゃくしゃしており、とにかく八つ当たりしながら炎をまき散らし、一切反省しない。

作「前書きであんなこと書いたけど、リリカルなのは好きです。」

第二十三幕 戦う覚悟 弐(前書き)

作「サブタイトルが簡単になってきた気がする……。」

17:15頃、一部書き直しました。

第二十三幕 戦う覚悟 弐

『ミッドチルダ 街 15:54』

「なのは、フェイト。お前達は、もう戦わなくていい。」

シンケンレッドがなのはとフェイトに冷たく言う。その言葉でなのは達がいる場所に沈黙が生まれ、火災を消火する魔法の音や、人々の声などがより大きく響いた気がした。

「……えっ？」

「今……なんて……。」

「何度も言わせるな。お前達はもう戦わなくていい。」

なのはとフェイトは、シンケンレッドが言った言葉を信じられなかったからか、再度確認したが、返ってくる答えは同じだった。

「で、でもよ。外道衆相手に非殺傷で戦ったの、まだすくねえだけじゃん。今回は、大目に見てやれよ。」

「覚悟の決められない奴は、戦う必要はない。逆に、迷惑だ。」

「それは、そうだけど……。」

「……話はそれだけか……？俺は先に戻らせてもらっぞ。」

ヴィータはなのはとフェイトをフォローするつもりで言ったが、シンケンレッドはバツサリと切り捨てる。そしてシンケンレッドはそのまま立ち去っていき、ほかのシンケンジャーも追いかけるように立ち去って行ってしまった。

「あいつ……。ひでーこと言いやがって……!」

「ヴィータちゃん。もういいよ。私が、悪いんだし……。」

「で、でもよ……。」

「今は逃げ遅れた人の救助をしないとね……。行こうか。」

なのはとフェイトは怒るヴィータを抑え、救助のため火災現場に行ったが、二人の姿はどこか、落ち込んでるようで、その表情は暗かった。

『ミッドチルダ ヘリ 17:20』

火災現場での救助活動が終わり、なのは達はヘリに乗り込み機動六課に向かっていた。シンケンジャー達がヘリにいないのは、黒子達とともに徒歩で帰っているからだ。

「あの、なのはさん。どうか・・・したんですか？」

「ううん。なんでもないよ。」

なのはとフェイトの出撃前とは違う雰囲気気づいたフォワード達は、なのはとフェイトに話しかけるが、首を横に振って気にかけない素振りをした。

「お前達。今はそつとしておけ。話を聞くのは後でもいいだろ。」

「えっ？あ、はい、わかりました……。」

ヴィータは念話でフォワード達に今はそつとしておくことを言い、フォワード達はヴィータに従った。

「シグナム。ちよつといいか？」

「なんだ、ヴィータ。」

「文瑠の奴が言ったことなんだけど、さすがに言い過ぎだと思わねえか？」

「私はそうは思えない。」

「んっ、どうしてだ？」

「戦いにおいて少しでも迷いがあるのは危険。志葉はそれに気づいて言ったのだろう。それに、高町達は我々とは違い、殺傷設定で

戦うのはまったくと言ってない。今は使う覚悟をするかどうか、決めなければ邪魔になる。』」

「『確かにそうだけどさあ、ほかにも言い方ってのがあるだろ。おかげでなのは奴、すっげえ落ち込んでるぞ……。』」

「『そうでもしないと、今後の戦いでは厳しくなる。酷かもしれないが、高町達には早く覚悟を決めてもらえなければならぬ。』」

「『だよなあ……。』」

ヴィータとシグナムが念話で話していると、ヘリは機動六課に到着した。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 19:32』

なのは達が機動六課に戻って時間が経ち、食堂では相変わらず黒子達がせっせと食事を作っている。そして食堂のテーブルでは珍しくフォワード達となのはとフェイトと一緒に食事をしている。

「あの、気になってたんですけど……。」

「んっどうしたの?」

「なのはさんとフェイト隊長、合流した時からその、落ち込んでたみたいなんですけど……。」

「別に、落ち込んでないよ。」

「でも、もし何かあれば相談に乗って上げます。」

「ありがとう、みんな。」

なのはとフェイトは微笑んでフォワード達に言う。なのはとフェイトはそれぞれの隊長を務めているからか、弱みを見せる訳にはいかない。それに外道衆の戦いに外されたと話したら余計に心配かけると思い、黙ることにした。

文瑠達はなのは達と少し離れた場所で集まって食事をしていた。

「……俺は先に戻る。」

「殿、私が食器を片付けます。」

「いい。食器ぐらい、俺が片付ける。」

丈瑠は自分の食器を片づけると食堂から出る。丈瑠は部屋に戻らず、湖の先にある街並みを眺めていた。

「どうしたの、部屋に戻らないで？」

「茉莉か……。何しに来た？」

「……なのはさん達のこと、考えてたでしょ？」

「……………」

丈瑠の元に茉莉が来て、丈瑠は茉莉を離れさせようとしたが、今思っていたことを見抜かれて黙ってしまふ。

「当たり前……かな？」

「…………お前には関係ない。」

「どうかな？丈瑠、本当は外道衆の戦いに協力してくれること、うれしいんでしょ？」

「だが、彼女達は外道衆の戦いでは部外者だ。本来ならば関わってはいけない。」

「そういうことなら私達も部外者じゃない？私達、一応なのはさん達のところで生活してるけど、ここ、管理局の一つでしょ？本来ならば私達は管理局で保護してもらおう立場だし。今こうしてられるのも、なのはさん達のおかげでしょ？」

「それは、そうだが……。」

今丈瑠達がここで生活できるのも、機動六課の人達が協力してくれるからだ。本来ならば、外道衆の戦いは自分達でやることだし。しかし、彼女達は丈瑠達だけで外道衆と戦ってる姿を見ていられないらしく、彼女達も協力する形になっている。

「今回の戦いの最後、なのはさんとフェイトさんにあんなこと言っただけど、今後彼女達が外道衆の戦いに巻き込まれないためにわざと厳しく言っただんでしょ？」

「それだったらもつと厳しく言っている。」

「えっ？」

「どうせあいつらは何を言っても聞かないだろう。なら今の内に覚悟を決めさせなければならぬ。中途半端な覚悟では戦いでは邪魔になる。それに、いつ死んでもおかしくない戦いだからな。」

「それも、そうね……。」

『三途の川 六門船 ？？：？？？』

ここはあの世とこの世の狭間、三途の川。そしてその川に浮かぶ船は外道衆の拠点、六門船。この中で八チヨウチンが肘をついていびきを掻いて眠っている。三途の川に居るのは化け物だが、彼らは人間と同じようにちゃんと眠る事もある。シタリは八チヨウチンを起こさないように六門船の奥にいた。

「八チヨウチンのおかげでちゃんとした深さが増してねえ、融通は利かない奴だが、結果は上々、結構なことさね。」

シタリはニヤニヤと笑みを浮かばせながら八チヨウチンがいる方

を向いた。三途の川は、人々が苦しみや不幸を受けることにより三途の川の水が増幅する。しかし、逆に人々が喜んだり幸せを受けるのと三途の川が減ってしまう。そのため外道衆は増幅を測るため地上に出ては人々を苦しみや不幸を与えなければならぬ。

「ハチヨウチンの戦いを見たけど、まだ仲が良くなってないけど早く手を打たんとこつちが不利になるねえ……。」

シタリはいつか、シンケンジャーとなのは達の仲が良くなる事が危険と感じ、今後の作戦について三途の川を見て考えることにした。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭 6:50』

「じゃあ、これで朝の訓練終わりね。みんな休んで午前の仕事に向かってね。」

「……はいつ……」

翌日、なのは達はいつも通りに朝の訓練を終わらした。しかし、なのはとフェイトは文瑠に言われたことを気にしていたのか、どこか暗かった。フォワード達が去っていき、なのはとフェイトも戻ろうとした時、茉莉が後ろから話しかけてくる。

「あ、なのはさんにフェイトさん。ちょっと時間いいかな？」

「あ、茉莉さん……。時間は大丈夫ですけど……。」

「うん。何かな……？」

「歩きながらでいいかな？」

なのはとフェイトは茉莉に言われた通りにゆっくり歩きながら話し始める。

「昨日のことなんだけどさ……。やっぱり気にしている？」

「……うん。」

「長い間、非殺傷で戦ってたから……。ね。」

歩きつつ茉莉に言われたことはなのはとフエイトの思っていたことが当たってたのか、自然と口を開く。

「笑っちゃうよね、隊長なのに、使ったこともない殺傷設定で戦えて言われても戦えないでいるなんて……。」

なのはは、自傷しつつも話し続ける。

「私、ずっと管理局で働いてて、ずっと現場で戦ってて、いつしか管理局のエースって言われるようになったの、本当はそんな気は全然なかった。でもエースオブエースって二つ名を貰った時は嬉しかった……自分は強い、一人前だって……。教導隊に入っても、ずっと思ってた。けど外道衆が現れて、いつも使ってた非殺傷が効かなくて……殺傷設定で戦う必要性が出た時、初めて気づいたの、自分は有頂天になってただけだって……。」

「……。」

「外道衆に対しては非殺傷設定の魔法は効かない、殺傷設定で戦って命令された時は抵抗があつたけど受け入れることが出来た。だけど外道衆と戦って・・・文瑠さん達と一緒に戦っていく内に・・・気づいたの」

「気づいた・・・？」

「殺傷設定・・・いつも撃っていた魔力弾が質量兵器と変わらない危険性の高い物にする設定、最初の時も・・・受け入れたはずなのに、外道衆相手に撃つことは出来なかつた、それでもナナシとか、ガジェットのようなアヤカシを倒すことが出来たけどアヤカシがでると全く効かない、殺傷設定に変えようとしても体が言うこと聞かなくて・・・その時、気づいたの、殺傷設定で戦うのが怖いって。」

そうなのはが言うと、なのはは自分の足を止め、自分を守るかのように腕を抱き寄せる。

「ミスショットで仲間が傷ついたりするのもそうだけど・・・一番怖いのは、相手を殺す感覚に囚われることかな・・・いや、どこかで殺したくないって思ってるかもしれない。現場では何十人、何百人っていう人が死んでいるのに、私は・・・。」

「・・・なのは。」

話していくうちに声のトーンを落とし、顔を俯せていくのはにフェイトは声をかける、内心フェイトも同じ気持ちだった。殺傷設定で戦うということは相手を“殺す”事と同じである。例えばそれが外道衆であっても、殺す感覚は同じである。それに加えフェイトはP・T事件で母である『プレシア・テストロツサ』を亡くしている。そのため、相手を殺すことでそのことを思い出しそうだなおさら使うに使えなかった。それがなのは達の甘さであっても、長年非殺傷で戦ってきた彼女達に殺傷設定で戦うというのは酷なことかも知れなかった。

「……ねえ、無理してその殺傷設定で戦わなくてもいいと私は思うな。」

「……えっ?」

茉莉の言葉になのはは顔を上げ、視線を茉莉に向ける。

「正直に言つと、私はなのはさんが羨ましい・・・かな、小さいころから外道衆と戦うことを教えられた私とは違って、なのはさん達は普通に生まれて、普通に育つて、普通に働いているからこそ、そういう感情があるんだと思う、私はなのはさんの考えを否定するつもりはない、むしろ当たり前だと思う。」

「茉莉・・・さん」

「それに、現場での戦いつて他にもあるんだと思う、黒子さんのようにサポートに徹したり、ヴァイスさんのように現場までへりに送つたり・・・そういう戦いもあるはず。だからこそ、私達は戦えるの。」

茉莉の言葉になのはとフェイトは言葉もでなかった。それもそのはず、彼女達の戦いというのは常に相手と対峙して戦う、一般論であり、サポートのような直接戦闘に係わらない戦いなんて思いもしなかった。

そして茉莉はなのはとフェイトの前に出る。

「適材適所、大事なのは相手と戦うんじゃないなくて、自分に何が出来るかっていうこと、私は外道衆と戦うことしかできないけど、なのはさんとフェイトさんは他のことが出来るはず。それがわからないんじゃない、覚悟とか言つてられないでしょ？」

「私達に・・・出来ること。」

「そ、例えば魔法で私達をサポートしたり、黒子さんと一緒に人を助けたり・・・相手と戦うことが、“戦い”じゃないだと私は思う、それこそ適材適所だと思う。私達は外道衆と戦うことしかできないけど、黒子さんはそのサポートが出来る、だから私達シンケンジャーは、黒子がいるからこそ戦えるの。」

適材適所。それは前の“黒子の戦い”にもあてはまる事、シンケンジャー達は外道衆と戦うことが出来るが、戦闘中一般市民を巻き込むわけにもいかず、気になって戦闘にならないかもしれない。しかし黒子ならばその問題を解決することが出来る。黒子は戦闘に参加できないが、シンケンジャーのサポートが出来る。それこそが黒子達の戦いでもあった。そのことになのはとフェイトは、言われてやっと気づいた。

そして、突然警報が機動六課中を鳴り響かせる。外道衆が“スキマ”を通ってきたことを知らせる警報だ。

「外道衆・・・なのはさん、フェイトさん!」

「・・・私達も、行きます。」

「私にしかできないこと・・・まだわからないけど、戦う覚悟なら、

茉莉さんのおかげで付きました！」

なのはとフェイトは茉莉にそういうと、顔を上げる。その顔はさつきまでの表情が嘘のように晴れていた。そして茉莉となのはとフェイトはヘリポートに向かった。

『ミッドチルダ 機動六課 ヘリポート 7:19』

茉莉達がヘリポートに着くと丈瑠達とヴィータ達がすでに集まっていた。隊長陣と丈瑠はヘリの前で待機しており、フォワード陣と他のシンケンジャー達はすでにヘリの中にいた。

「おせーぞお前ら。」

「しめんね、ヴィータちゃん・・・あの、丈瑠さん。」

「・・・なんだ？」

へりに乗ろうとした文瑠はなのはに止められ、なのは達の方を向く。

「甘いと思うけど・・・私、殺傷では戦えない。だけど、非殺傷で出来ることをする。何が出来るかわからないけど・・・フォワード達と一緒に、救助をしたり、戦いのサポートをしたり、戦い以外にも出来ることがあります。だから、一緒に行かせてください！」

「私も、なのはと同じです・・・！お願いします。」

なのはとフェイトが言い終わると少しの間、沈黙が走る。そして沈黙を破るかのように文瑠が口を開く。

「それが、お前達の“覚悟”か？」

「・・・はい！」

文瑠はなのはとフェイトの言葉を聞き考え始める。時間が少し経

つと丈瑠は口を開く。

「よし、行くぞ！」

「……えっ？」

丈瑠の答えに予想だにできなかったなのはとフェイト。二人は「ふざけるな」と思っていたが、そうじゃなかった。

「お前達が覚悟を決めたのならば、俺はとやかく言う必要はない。それに、戦場で少しの悩みがあるなら、危険が伴う。だからどう戦うか覚悟を決めたのならば、それでいい。」

「……あ。」

なのはとフェイトはようやく気づく。丈瑠が前に言った『お前達は、もう戦わなくていい。』という意味、これはおそらく“殺傷で戦えないなら無理せず戦わなくていい。”という意味ではないだろ

うか？と思い始めた。もし戦場で戦うなと言うならばもつと厳しい言葉が出るはず。後々考えてくると、機動六課に戻ってくると丈瑠は何も言わなかった。それどころか機動六課の人達はそのことを話題にするどころか平然としてなのは達に接していた。

「どうした？早く行くぞ。」

「は、はい！」

「リインも行くです！リインもサポートします！」

丈瑠達となのは達は、へりに乗り込むと外道衆の元に向かった。

第二十三幕 戦う覚悟 弐（後書き）

作「今回はトラシンケンオーについて紹介します。」

トラシンケンオー

- ・全高：67.3m
- ・全幅：43m
- ・重量：3000t
- ・最高速度：650km
- ・出力：2250万馬力

シンケンオーが虎折神を侍武装した侍巨人。合体時に尻尾のパーツが前立てになる。武装はダイシンケンと背中にある4本のドリル。必殺技は、突進して敵をドリルで破砕する「虎ドリル突撃」。

作「シタリの口調難しい・・・。」

第二十四幕 戦う覚悟 参(前書き)

作「今回の話は長くすればよかったと後悔しています・・・。やっぱり長すぎずに短く書こうと思っていたことが間違ってたのかも・・・」。

第二十四幕 戦う覚悟 参

『ミッドチルダ ヘリ 7:24』

丈瑠達となのは達はへりに乗り込み、外道衆が暴れている場所までへりの中で待機していた。その中、フォワード達は念話で話していた。

「『ねえティア。どうしていきなりなのはさんとフェイトさんはサポートする事になったんだろ?』」

「『私もよくわからないけど、私達の知らない間に何かあったんじゃないの?』」

「『でも、フェイトさんとなのはさんは戦わなくてもいいんじゃないか?』」

「『まさか、丈瑠さんに外道衆の戦いから、外されたんじゃないか?』」

「『うん……。わからないなあ……。』」

フォワード達は念話で話している時、端のところでリインと流ノ

介が何かこそと話しているところが見える。それに気づいた千明が流ノ介の元に向かう。

「おい流ノ介。何こそと話してんだよ？」

「ふふふ……。内緒だ。」

「あ、内緒ですよー。」

「……。？お前、また何か企んでるだろ？」

「それは、後からのお楽しみだ。」

「おーい。そろそろ現場に着くぞー。」

ヴァイスの一言に全員が話を止めて出撃待機に着く。

『ミッドチルダ 街 7:29』

ここはミッドチルダのビルが建ち並ぶ街。そこに外道衆のハチヨウチンが自ら火の玉となり、周りを火の海へと変えていた。人々は

火の海となった街から、悲鳴を上げながら逃げ惑うように走っていた。

「ヒャーハツハツハツ！！燃える！燃えるときは燃えてしまえ！！
！ひゃあああああああ！！！」

ハチヨウチンは雄叫びを上げながら火の玉となってビルにぶつかっていき、地面に着地する。

「ふう……。燃やせばスカツとするぜえ。次はあれだ……。あん？」

ハチヨウチンは“燃えてない”ビルを指さすとそのビルの方に行こうとするが、突然太鼓の音がする。ハチヨウチンはその音に気づくと振り向く。そこには黒子達が志葉家の陣幕と旗を掲げていて、袴姿の丈瑠達とバリアジャケットを身に着けてたなのは達がいた。フォワード達はすでにほかの黒子達と救助に行ったためいない。

「あ、いつもお疲れ様です……。」

「そこまでだ！外道衆」

「また貴様らか！俺様に関わるなど言っただはずだ！」

「そうはいかない。シヨドウフォン！」

フェイトは徒歩で文瑠達の方に向かう黒子達に対して言うと、一人の黒子が頭を下げる。そして文瑠達はシヨドウフォンを取り出すと筆モードにして構える。

「……………一筆！奏上！はッ！」「……………」

文瑠達はそれぞれ赤い“火”、青い“水”、ピンク色の“天”、緑色の“木”、黄色の“土”を宙に書き、書き終わると一斉に反転させてスイッチを押す。すると文瑠達は宙に書いた文字に包まれ、

シンケンジャーと変身を遂げた。

シンケンレッドはベルトのバックルから共通ディスクを取り出すとシンケンマルに装着し、両手で相手に突きつけるように抜刀する。

「シンケンレッド！志葉・・・文瑠！」

シンケンレッドはシンケンマルを一度降ろし、片手でシンケンマルを肩に担ぐように乗せながら名乗る。次にシンケンブルーは共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手で横に抜刀する。

517

「同じくブルー！池波 流ノ介！」

シンケンブルーはシンケンマルを縦に斬るように振り、歌舞伎のようにポーズを取りながら名乗る。次にシンケンピンクは共通ディスクをシンケンマルに装着すると斜め上に抜刀する。

「同じくピンク！白石 茉莉！」

シンケンピンクはシンケンマルを降ろすと片手でシンケンマルを半月を描くように上げると扇を構えるようにポーズを取りながら名乗る。次にシンケングリーンは共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手で抜刀して後ろに回す。

「同じくグリーン！谷 千明！」

シンケングリーンはシンケンマルを前に戻し、シンケンマルの峰を持つと刃先から出るまで撫でながら名乗る。最後にシンケンイエローは共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手でシンケンマルを相手に突きつけるように抜刀する。

「同じくイエロー！花織 ことは！」

シンケンイエローはシンケンマルを両手で降ろし、横笛を吹くようにシンケンマルを構える。

シンケンレッドがシンケンマルを横に構えると他のシンケンジャー達はシンケンマルを後ろに回して忠誠を誓うようにしゃがむ。

「天下御免の侍戦隊！」

シンケンレッドは峰を撫でながら言い、言い終わるとしゃがんだシンケンジャー達は一斉に立ち上がり、全員シンケンマルを上を構える。

「シンケンジャー！参る！」

シンケンジャーは一斉にシンケンマルを斬るように振り落とすと最

後に一斉に言いながらポーズを取る。その様子を呆れた様子でなのは達は見ていた。

「ねえ・・・それ、やる意味あるの・・・？」

「愚問だなフェイト殿。それにはちゃんと理由が」

「貴様らと構っているとむしゃくしゃする！ナナシ連中！」

フェイトはシンケンジャー達に恐る恐る聞くが、シンケンブルーが答える前にハチョウチンがナナシ連中を呼び出し、ナナシ連中はシンケンジャー達の方に走っていく。シンケンジャー達は一斉に構えるとブルーは出遅れ気味だがナナシ連中の方に向かう。シグナムとヴィータもシンケンジャーとともにナナシ連中の方に向かうと戦い始める。

「くっ、やっぱりシュミレーション通りにいかねーかっ！」

「無理はするなヴィータ。危険と感じたら下がれ！」

「何この程度・・・。まだ序の口だ！」

ヴィータはシンケンレッドに言われながらもグラーフアイゼンでナナシ連中を吹き飛ばす。シグナムはナナシ連中の攻撃をレヴァンティンで弾き返しながらも攻撃を加えて戦っている。他のシンケンジャー達も別れてナナシ連中と戦い数を減らしていく。

「今が好機・・・！燃えろおおおおお！！！」

しかし、八チヨウチンはナナシ連中と戦っているシンケンジャー達とシグナムとヴィータを見て好機だと感じたのか、八チヨウチンはナナシ連中がいるのにもかかわらず、激しい炎を口から出してシンケンジャーとシグナムとヴィータを炎に包ませる。

「くぐあああつ！！！！」

「ああああ！！！！」

「何ッ！ぐう・・・！！」

「うああッー!!」

炎に包まれたシンケンジャー達とシグナムとヴィータは炎に耐えきれず吹き飛んでしまい、壁に叩きつけられる。それを見たハチヨウチンは大いに喜びを見せている。

「どうだ！俺様の炎はア！ヒャーハハハハ！！！」

「く……。味方まで巻き込むとは…………!!」

「アイツ……。何考えてんだよ…………!!」

シンケンジャー達とシグナムとヴィータはハチヨウチンを睨みながらゆっくりと立ち上がる。

「まだ立ち上がるのか…………!!いい加減消し炭に」

【チエーンバインド】

ハチヨウチンは再び炎を出そうとするが、突然デバイスの音がすると突然ハチヨウチンは桜色の鎖に手足を縛られる。

「!?!?・・・な、なんだこれは！」

「これ以上、させない！」

桃色の鎖を出したのはなのはだ。なのはは魔法陣を出してハチヨウチンの動きを止めていたのだ。シンケンジャー達はデバイスの音が聞こえないため誰が出したのかわからなかったが、なのはが声を出したおかげで誰が出したか特定出来た。

「すっげえ・・・！魔法ってこんなこともできるのかよ！」

「あれは拘束魔法。見た通りに相手を拘束する魔法ね。」

「おいこら！離せ！離しやがれ！」

フェイトは驚くシンケングリーンに軽く説明する。ハチヨウチン
はなのはが出したチエーンバインドから抜け出そうと力を振り絞る。
するとなのはが出した桜色の鎖に亀裂が入る。

「おいおい、なんか外れそうだぞ！」

「ならば外れる前に攻撃するまでだ。シグナム。奴には炎は効か
ないぞ。」

「わかった。忠告感謝する。では、行くぞ！」

シグナムの掛け声とともにシグナムとシンケンジャー達とヴィー
タがハチヨウチンに向けて行く。ハチヨウチンは口から炎を出す前
にシグナムがハチヨウチンを斬り、次にシンケンレッド、シンケン
ピンク、シンケングリーン、シンケンイエローの順で攻撃を加えて
いく。最後のヴィータが、グラーファイゼンで一撃を加えるとハチ
ヨウチンは鎖が外れると同時に吹き飛んでいく。

「うぎゃあああああああ……!」

「最後は私です!リイン殿!」

「はい!行くです!」

「おいあいつ何する気だ?」

「つかリインはフォワードの奴らと一緒にいたはずだぞ……?」

リインはシンケンブルーの横に行くとシンケンブルーはシンケンマルに龍ディスクを装着する。そして、リインは魔法陣を展開させる。

「流ノ介さん!いつでも行けます!」

「よし!シンケンマル!」

そしてシンケンブルーは龍ディスクを回転させるとシンケンマルは水流を身に纏わせ、シンケンブルーはシンケンマルを構える。

「水流の舞い！」

「フリジットダガー！」

シンケンブルーはシンケンマルを斬り上げるように振るうと同時にリインは魔法を発動して水色の短剣を出して飛ばす。シンケンマルから青色の衝撃波を出し、リインが出した水色の短剣がぶつかる。と相殺はせず水色の衝撃波となり、ハチョウチンにぶつかる。するとハチョウチンは吹き飛ばさず、それどころか氷漬けになってしまう。

「があッ！う……動け……！」

「やったあああああ！……成功したあああああ！……！」

「やったです！うまくいったです！」

「おい流ノ介！なんだよあの技！」

「ふふふ……。それは私とリインが密かに考えていた技だ。名付けて“氷結の舞い”と言っておこうか！」

シンケンブルーはリインとの合体技がうまくいったからか、ハイテンションになって得意気に説明する。

この技のきっかけは、リインは偶然流ノ介が出した技に水が出たことを見たことで、リインが流ノ介と相談して考えた技だ。このことをみんなに教えようとリインは言ったが、このことは内緒だと流ノ介が言い、今まで内緒にしていたのだ。そのせいも、今まで知らなかったのは当然である。

シンケンレッドは烈火大斬刀を持つとシンケンブルーに近寄る。

「驚いている暇はない。流ノ介、“舵木・五輪弾”で行くぞ！」

「はっ！」

シンケンブルーは烈火大斬刀に水色のディスク“舵木ディスク”を装着すると烈火大斬刀は炎に包まれる。シンケンブルーはシンケンレッドとともに烈火大斬刀を持つと振り回す。

「烈火大斬刀！大筒モード！」

烈火大斬刀はシンケンレッドとシンケンブルーが持っている状態で姿が変わり、烈火大斬刀はセットしたディスクを発射する“大筒モード”と変わる。シンケンジャー達はそれぞれの技ディスクをセットすると他のシンケンジャーは忠誠を誓うようにしゃがみ、シンケンレッドとシンケンブルーは大筒モードとなった烈火大斬刀を構えて八チヨウチンに向ける。ちょうど八チヨウチンは氷漬けになった体を自身の炎で溶かしていたところだった。

528

「舵木・五輪弾！」

「成敗ッ！」

シンケンレッドは持ち手を前に押し、引き金を引くとセットしたディスクが回転し、モチカラで作られた舵木折神の姿を纏わせたエネルギー弾が発射され、まっすぐ八チヨウチンの方に飛んでいく。

第二十四幕 戦う覚悟 参(後書き)

作「今回はダイテックウと、この話に登場したオリジナル技について紹介します。」

ダイテックウ

- ・全長：73.5m
- ・全幅：77.7m
- ・全高：25m
- ・重量：2900t
- ・最高速度：800km
- ・出力：2250万馬力

兜折神、舵木折神、虎折神の3体が「合」のモチカラを受けて合体した鳥型の式神。武器は両翼の兜折神と舵木折神から放つビーム。空中戦だけでなく、地上支援攻撃もこなす戦闘攻撃機的存在。必殺技は、高速で体当たりする「ダイテックウ大激突」。このダイテックウを1つの巨大ロボとした場合、シリーズでも珍しい、「合体しても人型にならない」ロボである。シンケンオーの背中にドッキングする形式で、後述のテックウシンケンオーとなるが、シリーズ上類を見ない「敵怪人との合体」も可能。一度、流ノ介の機転(勘違い?)により、これを活用した作戦が勝機となったことがある。

氷結の舞い

使用者：シンケンブルー、リインフォース?

シンケンブルーの技“水流の舞い”がリインの魔法“フリジットダガー”が合わさったことよって出来た合体技。能力はリインの

“フリジットダガー”によって凍結効果が加わった水流の舞いを相手にぶつける技。この話では衝撃波でしか出してないが、水流を纏わせたシンケンマルにフリジットダガーで凍結効果を付属させて相手を斬る事も可能。

作「今回の流ノ介とリインの合体技は前から考えてたものです。技を出す前に傾斜を書けばよかったかなと反省しています……。それと戦闘は思ったより長引いたので二つに分けます（書き方の性でもありますが……）。名乗りがだんだん省略してきたな……。」

第二十五幕 戦う覚悟 四（前書き）

作「今回の話は前の話と繋げて書けばよかったかな・・・。」

「獅子折神！」

「龍折神！」

「亀折神！」

「熊折神！」

「猿折神！」

「折神大変化！」

シンケンジャー達は一斉に折神を置くと折神に“大”と書くと折神は巨大化し、シンケンジャー達はそれぞれの折神に吸い込まれるように入っていく。そして折神は“エンブレムモード”から“アニマルモード”となる。

「侍合体！」

シンケンレッドが“合”と宙に書いて反転させ、シンケンジャー

達が一斉に叫ぶと獅子折神は体と頭、龍は左足になってシンケンオーメットが飛び出し、亀は右腕、熊は右足、猿は左腕となり、獅子折神を中心に合体していく。そして最後にシンケンオーメットを頭に装着し、腰にダイシンケン。背中に秘伝シールドを装備すると侍巨人“シンケンオー”が現れる。

「……侍シンケンオー！天下統一！」「……」

「あつ！シンケンオーだ！」

「今度は何の折神で戦うんでしょうか？」

「相手は火みたいだし、お魚の折神（舵木折神のこと）で戦うのかな？」

「あんだ達！ぼさつと見てないで任務に集中しなさいっ！」

シンケンオーの登場により釘付けになったスバルとエリオとキヤロに、ティアナが注意する。注意した時、フォワード達と逃げ遅れた人の救助をしていた黒子達もゆっくりと頷く。なのは達は2の目を発動したアヤカシには抵抗できないため、見守るしかできないのでフォワード達と合流することにした。

シンケンオーはダイシンケンと秘伝シールドを装備し、ダイシンケン
を八チヨウチンに突きつけるように構える。八チヨウチンは火を吐くように構えると、ビルの“スキマ”から大ナナシ連中がいきなり現れて、その中に空を飛ぶ“大空ナナシ連中”も入っている。

「何なんだよあれっ！空飛ぶ奴なんて聞いてねーぞ！」

「空から奇襲する気か……。これでは志葉達が不利……。！」

大空ナナシ連中の登場によりなのは達は動揺を隠せなかった。

「ちっ、シタリのやろうか……。余計なことをしやがって！むしやくしゃあああああああ！！」

どうやら大ナナシ連中を呼び出したのは八チヨウチンではなく、シタリが送ったらしい。八チヨウチンはこのことが“余計なこと”
と思っでいて、炎を口から出して暴れ出した。シンケンオーは秘伝

シールドで八チヨウチンの炎を防いだが、空から大空ナナシ連中の奇襲により、ダメージを受けてしまい、八方塞がりになってしまった。

「ぐああっ!」

「どうする丈瑠!このままだとやられるぞ!」

「ダイテックウ」だ!ダイテックウで空を飛ぶナナシ連中を一掃するぞ!」

「はっ!」

「久々だなそれっ!」

シンケンジャーは台座からシンケンマルを抜き、シンケンマルにシンケンレッドは“虎ディスク”、シンケンブルーは“舵木ディスク”、シンケングリーンは“兜ディスク”を装着するとそれぞれディスクを回転させる。するとそれぞれのシンケンマルがモチカラで作られたエネルギーに包まれ、シンケンマルから虎折神、舵木折神、兜折神が現れ、シンケンオーから姿を出す。

「あれって、前に出た折神・・・？」

「対空ならば舵木折神だけでいいのに、どうするんだろっ？」

兜折神、舵木折神、虎折神を不思議そうに見るなのは達。そしてシンケンレッドは虎、ブルーは舵木、グリーンは兜折神に乗り込み、シンケンマルをそれぞれの台座に差し込む。

「侍合体！」

シンケンレッドは宙に“合”を書いて反転させると、虎折神が浮き上がり横になる。兜折神は右、舵木折神は左につくと兜折神の足のパーツが外れ、それぞれ兜、舵木の端に合体され、兜の角の一つが外れる。そして舵木は半分に分かれ、舵木の下半身は虎折神の後ろに合体し、鳥に尻尾のようになる。そして虎の頭が外れ、虎の尻尾は円のように形を変えて先ほど外れた兜の角に装着され、虎の前に合体すると鳥の頭になると、兜、舵木、虎折神が侍合体により誕生する鳥型の式神、“ダイテンクウ”が姿を現す。

「『ダイテックウ！天下統一！』」

「え．．．えーーーーー！！！」

「マジかよ．．．。鳥になりやがった．．．。」

「なるほど。あの三体の折神の合体すれば対空戦も可能ってことだな。」

「か．．．かつこいいです．．．。」

「り、ライン空曹長もですか！私もそう思いました！」

「すみません．．．。任務に集中してください．．．。」

なのは達にティアナが注意する。正直ティアナも驚いているが、初めて見る合体なら誰だって釘付けになってしまふのは仕方がない。ちなみに逃げ遅れた人の救助は済んでいる。

ダイテックウは飛び上がり、大空を飛ぶナナシ連中の撃退に向かった。シンケンオーはシンケンピンクとシンケンイエローが操縦し、地上にいる大ナナシ連中の撃退に入った。

「はあっ！」

「うりゃっ！」

シンケンブルーとシンケングリーンが操作すると、両翼となった兜、舵木折神からモチカラで作られたビームが放たれる。ビームの直撃を受けた大空ナナシは悲鳴を上げながら地上へと落下していき消えていく。残った大空ナナシ連中は、ダイテックウに勝てないと判断したのか、逃げるようにダイテックウから離れていく。しかし、ダイテックウは逃げる大空ナナシ連中を追うように飛んでいく。

「逃がすかよっ！」

「流ノ介！千明！一気に決めるぞ！」

「わかりましたっ！」

「おっっ！」

シンケンレッドが言うとシンケンレッド、ブルー、グリーンは――

齊にシンケンマルを台座から抜き、ディスクを回転させる。するとダイテックウの兜、舵木、虎折神のディスクが回転し、ダイテックウはモチカラの力で包まれる。そして大空ナナシ連中に向かうための道を作るかのように巨大な兜、舵木、虎ディスクが現れる。そして、シンケンレッド、ブルー、グリーンはシンケンマルを構える。

「『ダイテックウ！大激突！』」

シンケンレッド、ブルー、グリーンは一斉に叫びながらシンケンマルを前に突き出すとダイテックウは巨大なディスクの中に入っていく。ダイテックウはディスクに入っていけばいくほど速度を増していき、最後に虎ディスクを潜りぬけると、高速になっていき、大空ナナシ連中に激突する。ダイテックウは大空ナナシ連中に激突しても勢いは収まらず、残りの大空ナナシ連中をそのまま一掃する。

「すっげえ……。もう飛ぶ奴はいねーな。」

「残りはアヤカシのみだな。」

ダイテックウが大空ナナシ連中を全滅させた時にはすでにシンケンオーにより、大ナナシ連中は全滅していたが、八チヨウチンの炎で押されていた。シンケンオーは秘伝シールドで防いでいたが、八チヨウチンの炎の熱に耐えられないのか、シールドを構えながら下がっていたが、八チヨウチンは逃がさないと言わんばかりに近づいていく。

しかし、ダイテックウは空中からビームで八チヨウチンを攻撃し、シンケンオーから引き離される。

「ぐあああああつー!!」

「一気に決めるぞー!!」

八チヨウチンはダイテックウの攻撃により炎は口から消え、横転する。そしてダイテックウはシンケンオーの後ろに回る。

「おい、まさか・・・、そんなはずはねーよな・・・?」

「超!侍合体!!」

ダイテックウが後ろに回ったことにより、ヴィータはこれから起こることを予想する。そしてシンケンレッドが宙に“超”と書いて反転させるとダイテックウはシンケンオーに近づき、シンケンオーは頭に装着したシンケンオーメットを外す。そしてダイテックウの虎折神のドリルは二つ取れ、シンケンオーの胴体に装着する。そしてダイテックウはシンケンオーの後ろに合体し、最後に虎折神の頭と尻尾が合体、尻尾は兜の角のように分かれる。そして虎折神の頭を装着すると、超侍合体により姿を現す、“ テックウシンケンオー ” が降臨する。

「「「「 テックウシンケンオー！天下統一！」「」「」」」」

「やっぱりかよ……。おめーら、何でもありかよ！ふざけんなっ
「！」

「か、かっこいいー！」

「かっこいいですー！」

「そっだよね！私も一度乗ってみたいなー！」

「ホント、なんでもありね……。」「

テックウシンケンオーの降臨により、それぞれの反応を見せるのは達。そしてテックウシンケンオーは空を飛び、ハチョウチンを見下ろすかのように空に止まる。

「と、飛んだ！」

「空中戦も可能ということか……。」「

シグナムは冷静に解釈するが、今までシンケンジャーの行動を見てきて疲れてきたのか、元気がない。

「一気に終わらせるぞ！」

シンケンレッドの掛け声を合図に、シンケンジャー達はシンケンマルを台座から抜き取り、シンケンマルを構え、ディスクを回転さ

「これにて、一件落着！」

『ミッドチルダ ヘリ 8：10』

外道衆の戦いが終わり、なのは達はヘリの中に入る。シンケンジヤー達も折神を元に戻し、変身を解いてヘリに乗り込む。するとヘリは空を飛び、機動六課に戻っていく。ちなみに黒子は数がヘリに入りきらなかったため徒歩で帰っている。

なのは達は文瑠達がいるからか、念話で話していた。

「『あの、なのはさん。殺傷設定で戦わなくてもいいんですか？』」

「『あ、それなんだけどね。。。』」

「『外道衆と戦うのに殺傷設定でないと倒せないのに、いいんですか？』」

「『いいの。実は私、今まで殺傷設定なんて、使ったことないの。』」

「『そ、そんなんですか？』」

「『うん。外道衆が現れて・・・沢山の命が失われているのに、心のどこかで命を奪う魔法なんて使いたくないって思っていたのかもいけない、現に今まで非殺傷で戦っていて、昨日の戦闘でアヤカシを逃がしちゃった・・・。そんな時丈瑠さんに言われたの、「戦わなくていい」って。』」

なのはの告白にティアナとスバルは信じられなかった。少なくとものはは“エース・オブ・エース”と言われるほどの実力を持つ魔導師で、スバル自身も憧れている存在でもあるため、丈瑠から戦いに外されていた事は信じがたい物であった。

「『流石に私もショック受けちゃってね・・・今日の朝の訓練まで立ち直れなかった。色んな人に相談しようって思ったけど心配かけなくなかったからなかなか言えずにいたの、そんな時、茉莉さんが教えてくれたんだ。』」

「『教えてくれたって・・・何をですか？』」

「『無理して殺傷設定で戦わなくてもいい、戦いつていうのはただ相手と戦うだけじゃない。黒子さんのようにサポートをしたり、ヴァイスさんのように現場まで送るのも戦いだって、だからシンケンジャーの皆さんに限らず、色んな人が安心して戦えるって。だから

私は非殺傷で出来ることを、私なりの戦い方を探すことにした。』

「『なのはさんなりの・・・戦い方。』」

「『そ、魔法でサポートしたり、魔力弾で援護したり・・・自分にしかできないことをやっていくって決めた。もちろんいつかは殺傷設定で戦わなければいけない時が来るかもしれない、でも外道衆はそれを待ってくれない、だから今できることをすればいい、それがわからなければ覚悟なんかできない。茉莉さんに言われた事が今の私に繋がったの。』」

「『そう・・・なんですか。』」

「『ちよつと・・・失望させちゃったかな？一人前のつもりだったけど、シンケンジャーの皆さんが来てから自分が甘かったって気づいたし・・・。』」

「『・・・いえ、なのはさんらしくていいと思います。殺傷設定なんて怖くて使えませんし、どう戦えばいいのかわからなかったんです。けどなのはさんの話を聞いて、嬉しいんです。非殺傷設定で戦う方法があるって・・・。』」

「『スバル・・・。』」

「『だから自信を持っていいと思います！なのはさんはなのはさんなりの戦い方を・・・ってあっ!?!?』」

少し表情を曇らせたなのはを元気づけようと、なのはに自分の思っていることを伝えようとしたスバルだったが、相手が自分より上の人物と思い出したのか急に慌て始める。

「『すすすいません！私がなのはさんに口答えするなんて・・・』」

「『慌てなくていいよスバル。別に怒ってないし、おかげでこっちも元気になれたしね。』」

「『ほつ本当・・・ですか？』」

「『うん、だからそんなに慌てなくても大丈夫だから・・・ね？落ち着こう、スバル。』」

「『はっはい！』」

「『さてと、もうすぐ六課に着くから報告書を提出したら訓練を再開するよ！いいね？』」

「『『はいつ！』』」

スバルとティアナは念話で一齐に答える。フェイトとエリオとキヤロはなのは達と念話で同じような会話をしていた。そのおかげか、

フェイトの顔が少し明るくなっていた。

ちなみに、シンケンジャー達とリインとシグナムとヴィータは今後の合体技について話し合っていた。

『ミッドチルダ スカリエッツィのアジト ???：???』

場所を変えてスカリエッツィのアジト。アジトの中で、骨のシタリとスカリエッツィが通路を歩きながら話していた。

「シタリ、君からこっちに来るのは久しぶりだね、何のようかね？」

「前にお前さんがくれたカプセル（シタリがアヤカシの復活に使う物）をもう一つ分けてもらいたくてねえ。その頼みに来たんだよ。」

「・・・本当のことを話したまえ。その程度だったら紙に書いてナシにでも頼めば済む話だ。」

「おやおや、バレちゃったかい。実は、“あるもの”を貰いたくてねえ。」

それを聞いたスカリエッツィは立ち止まり、シタリも同じように立ち止まる。

「ほう……？それは私の“作品”かい？」

「あたしが欲しいのはカプセルもそうだけど、本当の目的は“作品”の“出来損ない”さ。」

「ほう……？その“出来損ない”で何する気だ？」

「ちいと面白い魂を拾ったんでねえ、作るのに材料が必要なんさ。」

「面白い魂か……。完成したら私にも見せてくれないか？」

「ああ、約束するよ。作成するのに時間はかかるがね。」

「それは楽しみだ。後でナナシにカプセルごと送らせよう。」

「ありがとね、スカリエッツィ。出来損ないの選別にはあたしにやらせてくれないか？あたしにも選ぶ権利ってのがあからねえ。」

「ああ。その時になったら呼ぶ。」

「じゃ、楽しみにしておくよ、スカリエッツィ。」

スカリエッツィはすたすたと奥に行く。スカリエッツィの姿がなくなるとシタリはスキマに入ろうとするが、シタリの足元にナイフが突き刺さる。シタリは動きを止め、ナイフが飛んできた方向を見るとそこには、彼の“作品”のNO.3のトーレとNO.5のチンクがいて、チンクはシタリに向けて投げたと同じナイフを構えている。

「お前が骨のシタリか。貴様に警告しに来た。」

トーレがそういうと、シタリを睨む。なぜ彼女達がこういった行動を取ったかというと、外道衆であるシタリを信用できないと判断したためでもある。現在スカリエッツィと外道衆は協定を組み、仲間同士ではあるが、人ならざる者であるシタリの口振りは何かを企んでいるような感じがしていた。しかも肝心のスカリエッツィでさえもアヤカシに興味を示し、危機感を覚えていた。その為、少しでも生みの親でもあるスカリエッツィを守りたい思いでシタリに攻撃することで警告する行動を取った。

「見張られてるとわかっていたが、まさかこんな“小娘”とはねえ。」

「

「無駄口を叩くな。お前が妙なことをすれば、私達が黙ってない。」

「・・・舐められたものだねえ、あたしら外道衆がまさか小娘如きに警告されるとはね。あたしゃお前さん達に構ってる暇はないんだよ、とつとと失せな。」

そうシタリがトーレとチンクに向かって言うと同時に、トーレがIS“ランドインパルス”を使って先行し、トーレはシタリに向けて腕についた羽のような刃のIS“インパルスブレード”で斬りかかる。しかし、シタリはその刃を自分の持つてる杖で簡単に受け止め、弾き返す。

「何ッ・・・!」

トーレはシタリから離れ、チンクはシタリに向けてナイフを投げ、シタリの足元に刺さるとチンクはIS“ランブルデトネイター”を発動させて爆発させる。トーレとチンクはまだシタリは生きていると思ひ、爆発した場所を警戒する。

「・・・やったか？」

攻撃を加えたチンクが呟く、シタリがいた場所は爆風によって遮られていたが、時間が経つに連れ、その爆風は晴れていき、シタリの姿が視認できるほどにまでになる。その瞬間、シタリの杖から鋭い雷が飛んでくる。

「「ッ!？」」

間一髪シタリの攻撃を回避したトーレとチンクはシタリを睨むが、その表情は驚愕のものに変わる、それもそのはず、チンクのISを喰らったはずのシタリが傷一つ、ついていなかったからだ。

「舐めんじゃないよ、お前さん達みたいな木偶人形の小娘如きが・・・あたしに敵うと本気で思ったのかい？相手は選んで脅迫おしよ、

あたしがその気になれば、お前さん達をこのアジトごと潰すことぐらい簡単なんだからねえ！！」

トーレとチンクは、シタリの覇気を感じ取ったのか、少し引き下がる。

「これ以上、邪魔するならあたしにも考えがあるよ。死にたくないなら二度と邪魔しないことだね。」

シタリはそう言うと、“スキマ”を通り三途の川に戻っていった。残されたトーレとチンクは、呆然と立ち尽くしていた。

第二十五幕 戦う覚悟 四（後書き）

作「今回はテックウシンケンオーと今更ですが骨のシタリについて
について紹介します。」

テックウシンケンオー

- ・全高：70・1m
- ・全幅：77・7m
- ・全厚：41・7m
- ・重量：4800t
- ・最高速度：850km
- ・出力：3650万馬力

流ノ介の発案（この完成により、流ノ介は“初めて”文瑠から見直された）によるぶつつけ本番で、シンケンオーとダイテックウが「超」のモチカラを受けて超待合体した侍巨人。シンケンオー単体ではできなかった飛行を可能にしている。武装はダイシンケンで、秘伝シールドは使用しない。左右の翼を敵にぶつけての攻撃もできる。必殺技は空高く飛翔し、ダイシンケンに「斬」のモチカラを込めて急降下しながら斬りつける「ダイシンケン・天空唐竹割り」。後述のようにチャンバラを意識した作品であるためか、強化合体しても剣術を必殺技とする珍しいケースとなっている。当初はゴールド以外の5人がいないと運用できなかったが、のちに、「超」と書かれたディスクをインロウマルにセットすることでも運用できるようになった。シリーズ初の8体合体ロボである。

骨のシタリ

ドウコクの知恵袋。異様に大きな頭部を持つ、比較的小柄な体格の外道衆。三途の川増水のための作戦を日々考えており、作戦に応じた外道衆を呼び寄せるなどの軍師的な役割を持つ。また、三途の川の深さを調べる役目もある。常に持っている錫杖は、隙間から人間界を覗き見たり、先端から電撃を飛ばして攻撃もできる。ゴズナグモなどはシタリのことを「御老体」と呼んでおり、劇中の描写から人間より遥かに長い寿命を持つことが見て取れる外道衆の中にあっても老人と言える程の歳を重ねている。

怠惰なように見えて物腰が軽く、飄々としていて全く捉えどころがないが、十臓の態度を訝しみ、志葉家にまつわる書物を探して彼がシンケンレッドにまつわる特有の力を伏せていたことを突き止めるなど、勘の鋭いところもある。また、多数のアヤカシと繋がりを持っていて、彼が連れてくるアヤカシも多い他、気性が荒く酒を飲んで暴れるドウコクや、他の外道衆と相性の悪い太夫の緩衝材的な面もある。戦闘力もシンケンゴールドを上回るほどに高い。

志葉家十八代目当主である薫の出現から、今までシンケンジャー側が攻め込んで来なかった理由と自身に命の危機が迫っていることに気づき、ドウコク復活のために自身の命を半分削ることでアヤカシ・オボロジメに三の目を与えた。終盤、六門船ごと地上に侵攻したが、ドウコクが敗北するや否や船ごと三途の川に押し戻され、崩落する船の中で「三途でも泥の中でも生きることがあたしの外道さね！」と言い放ちながら、六門船もろとも三途の川へと沈んでいった。

崩落する六門船の中で、ドウコクと太夫に対する謝罪の言葉を投げたおり、自分一人が生き残ることに負い目も感じていたようである。一度斬られてなおそれでもドウコクには忠誠を崩さず、その後にはドウコクが傷を負った際には復活を望むなど、ドウコクや太夫に対しては特別な感情を抱いていたようである。その他にも十臓が死んださいには寂しそうな声を漏らす、太夫の死後にも弔いの手段を探し求めるなど、外道衆の中でも特段人間臭さを放っている。

後に血祭のブレドランの力により三途の川より浮上したが、その血祭のブレドランが三途の川の水を護星界攻撃に使用しようとしたため、強化ナナシ連中らを率いて自ら阻止に動いたが、突如乱入した海賊戦隊ゴーカイジャーの総攻撃を受け遂に倒れた。

デザインのモチーフは福祿寿およびイカ。

『仮面ライダーディケイド』にも登場している。

作「今回の最後、トーレ&mp・チンク対骨のシタリを書きましたが、うまくかけたか正直不安です。そろそろなのはstSの話を進めようと思ってます。」

外伝幕 巻 菜子とシャマルの料理（前書き）

作「最近書いていてこの小説、シリアスな話が多かったので、たまにはこんな話を書いてみたいと思って書きました。今回はギャグ路線で行きたいと思います。この話を見て萎えた方は申し訳ありません。興味ない方は見なくても結構です。

ちなみに本編の次の話は製作中で、今のところ源太参戦は決まっています。そしてこの話は何気に本編と繋がっています。そしてこの話から時間を書くのを止めます。理由としては、時間を考えるだけでも時間がかかるからです。勝手な理由で申し訳ありませんでした。この話の時間軸としては、第二十五幕と次の話の間の話です。

書いた理由は、お気に入りが入りが100達した記念で、アクセス数は15万越え、PVは2万越えと大変驚いています。これからもこの小説をよろしく願います。」

外伝幕 壱 茉莉とシャマルの料理

『ミッドチルダ 機動六課 訓練施設』

外道衆“ハチヨウチン”を倒した翌日のこと。今の時間帯は夜で、ほとんどの人が仕事を終わらしていたが、丈瑠達となのは達、そしてフォワード達を訓練を夜まで引き伸ばし、食事を済ました後は連携技の訓練及び、それぞれの訓練に明け暮れていた。

「いくぞ！シグナム！」

「ああ！」

シンケンレッドとシグナムは訓練用ターゲットに向けて走り、シンケンレッドはシンケンマルに赤い技ディスク“獅子ディスク”を装着し、回転させてシンケンマルに炎を纏わせ、シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードして炎をレヴァンティンに纏わせる。

「火炎の舞い！」

「紫電、一閃！」

シンケンレッドとシグナムは同時に訓練用ターゲットをそれぞれの得物で斬る。するとターゲットは激しい炎を纏わせて爆発する。

「・・・わずかにずれたか。」

「だが、タイミングは合ってきた。もう一度行くぞ、シグナム！」

シンケンレッドとシグナムはさっきの連携技に納得いかなかったのか、もう一度合わせることにした。

場所を変えてシンケングリーンとシンケナイエローとヴィータ。彼女達も連携技の訓練をしていた。シンケナイエローはシヨドウォンを構えていて、ヴィータはグラーフアイゼンを“ギガントフォーム”にして構えていて、シンケングリーンは見ていた。

「やっぱギガントフォームじゃぶつ放すの無理だな。だからと言ってハンマーフォームじゃまっすぐ飛ばねえしな……。」

「だったらさ、ぶつ放すんじゃないくて、転がせばいいんじゃない？」

「それなら何とかなるんだけどな……。アタシが考えてるのは、相手に直接ぶつけることなんだよな……。」

「ふーん……。だったら岩をもっ少し小さくすりゃいいんじゃないかね？ そっすりゃ“ハンマーフォーム”つてのでも出来んじゃないかねえか？」

「あ、それいいかも！ ヴィータちゃん。早速やってみる？」

「ああ、試してみよーぜ！」

さらに場所を変えてシンケンブルーとリイン。彼らは前回見せた“氷結の舞い”をさらに使いこなせるようにと訓練をしていた。リインは魔法陣を出していて、シンケンブルーはシンケンマルに青い技ディスク“龍ディスク”を装着して構えていた。

「流ノ介さん！ いつでも行けます！」

「よし、シンケンマルー！」

シンケンブルーはシンケンマルに装着した“龍ディスク”を回転させるとシンケンマルを青色の水流を纏い、リインは水色の短剣を一本出すとシンケンマルに合わせると纏った水流は青色から水色に変化する。

「「氷結の舞い！」」

シンケンブルーは水色に変化した水流を纏わせたシンケンマルで訓練用ターゲットに斬る。すると斬られたターゲットは瞬く間に氷漬けとなった。

「やったです！またまた成功です！」

「これなら今度の戦いでも大いに活躍できるはずだ！リイン殿！もう一度だ！」

「はいです！」

シンケンブルーは配置に戻ると再び構え、リインは魔法陣を出した。

ちなみになのはとフェイトはフォワードの訓練に付き合っているのではない。

シンケンジャー達となのは達はそれぞれ訓練をしていたが、一人足りない。足りないのはシンケンピンクこと白石 茉莉だ。茉莉はシンケンレッド、シグナムと一緒に連携技の訓練をやるはずだったが、事前に遅れてくると聞いたので問題はない。一通り終わった後、シンケンジャー達となのは達が集まって簡単な打ち合わせをしている時に、彦馬が焦った様子で駆けつけてきた。

「殿——！一大事でございますぞ！」

「なんだジイ。要件なら後にしてくれ。今は」

「殿……。これは重大な問題です。少し耳を……。」

「……な、何ッ！」

彦馬は息を乱しながらもシンケンレッドに近づき、シンケンレッ

ドに耳打ちする。するとシンケンレッドは驚いた様子で彦馬の方を向き、あまりのことでシンケンマルを落としてしまう。

「どつした、志葉！日下部 一体どつした！」

「ま……茉莉が……。」

「茉莉さんがどつしたの！」

「……茉莉が……お菓子を作ってるだと……！」

『……………』

シンケンレッドから出た言葉により、長い沈黙が生まれた。しかし、それを聞いたシンケンブルーとシンケングリーンは同じようにシンケンマルを落とし、怯えた様子を見せた。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂 少し前』

ここは機動六課の食堂。ここにはシンケンピンクこと茉莉とシャマルが厨房を借りてお菓子を作ることになり、エプロンを身に着け

ていた。お菓子を作る理由は、夜も訓練するため、その差し入れを作るからだ。

「へえ、シャマルさんも料理作るんだ。」

「こつ見えても、料理は下手ですけど、内緒で練習してるんです。」

「ふーん。実は私もなんだ。」

茉莉は自分と同じように料理の練習をしたシャマルと意気があったのか、上機嫌になっており、シャマルは料理本“誰にでも出来るお菓子作り〜初級編〜”を取り出して茉莉に見せた。

「これ、なんですか？」

「ミッドチルダに販売している本です。私、この本見ながら頑張ってるんですけど、なかなかうまくいかなくて……。」

「だったら一緒に作りませんか？一緒ならうまくいくはずですよ！」

「いいですね！このページにあるクッキー作ってみませんか？ちや

んと材料も用意しましたし。」

「じゃ、お菓子を作ってみんなに食べさせてあげよっか。」

茉莉とシャマルは上機嫌にクッキーを作り始めた。ちなみに、このことを知った黒子はすぐさま彦馬に知らせ、ほかの黒子達にも知らせに行った。

『現在』

「姐さんが・・・料理・・・！」

「ま、茉莉が、とうとうお菓子にまで手を出したのか・・・。」

「ね、ねえ・・・。なんでそんなに怯えてるの？普通にお菓子作ってるだけじゃ・・・。」

「千明イ！足を持って！今の内にお腹を鍛えるんだ！」

「あ！ずりいぞ流ノ介！」

「だから落ち着いて！」

シンケンブルーとシンケングリーンは突然の行動により暴走（？）を始めたが、なのは達の手によってなんとか静まった。

「とりあえず話戻すけど、どうしておめーらはそんなに怯えんだ？」

「ああ……。お前達は知らなかったな。茉莉の料理は……。」

変身を解除した文瑠は恐る恐る口を開く。

「……ものすごくまずい。」

「……えっ？それだけ？」

「ああ。それだけだ。」

なのは達は文瑠の予想外な答えに呆気をとらえていた。そして少

しすると我を取り戻した。

「おいおい……。たかが料理がまずいだけで怯えんじゃねーぞ。みつともねーぞ。」

「甘いですぞヴィータ殿。前に殿が茉莉の手料理を食べて、一晩寝こんだほどだったですぞ。」

「そんなわけねーだろ？ただ腹が弱かっただけじゃ……。」「

ヴィータは彦馬が言った言葉を受け入れなかったが、丈瑠達の顔はこの世の終わりと思わせるような顔になっていたことに気づく。

「……。おい、まさか……。？」「

「……。残念ながら、本当のことです。」

「そういえば、千明の容体が悪化したことがあったけど、確か茉莉さんの」

「テイ、ティア！言うな、思い出させるなっ！」「

それを聞いたヴィータは青ざめた。そしてティアナはあの時のことを思い出し、言おうとしたが千明に必死に阻止され、ティアナは口を手で塞いで頭を下げた。

「日下部、確かシャマルも作ってるのだな？」

「ああ。黒子の情報では、シャマル殿も作っておられますな。」

「……そうか。」

シグナムは彦馬から聞くとため息を吐いた。

「シグナム。どうした？……まさかシャマルも！」

「いや、シャマルは騒ぐほど酷くはない。ただ、味付けが微妙なだけだ。」

「……それだけなら、茉莉よりずいぶんマシだ。」

「……お前、ひでー」とさらりと言っな。」

丈瑠達となのは達が話していると、そこにバスケットを持ったシヤマルと茉莉が駆けつけてきた。

「みんなごめんねー。ちょっと遅れちゃった。」

「き……来た……。」

茉莉が来たことにより、千明は少し距離を取る。シヤマルと茉莉はバスケットにかかってた布を取る。バスケットの中身は所々焦げたクッキーに普通のクッキー、そして茶色いクッキーが入っていた。

「焦げちゃったのは私が作ったの。これがシヤマルさんが作ったクッキー。そしてこのチョコレートクッキーが二人で一緒に作ったクッキーね。」

茉莉はバスケットに指を指して説明する。なのは達はバスケットの中身を見る。所々焦げた茉莉特製クッキー以外は普通に美味しそうだ、ことはを除く丈瑠達にとってみれば恐怖の対象にしか見えなかった。

「な、なんだ。怯えなくてもいいんじゃないかよ。」

「そうや。茉莉ちゃんとシャマルさんが作ったクッキー。美味しい。」

「ことはちゃん！ホント！」

「うん、ホント。美味しいです。」

「やったあ！ようやく私、美味しいって認められたわ！」

「何ッ！そんなはずはない！」

シャマルはことはの感想で大喜びを見せたが、シグナムは信じられない様子を見せ、シャマルが作ったクッキーを一つ手に取り、食

べる。

「・・・やはり、微妙な味付けだな。」

「まあ、ことはは特別だからな・・・。ま、食べないよりかマシか。」

「ああ。確かに。」

「ねえ、どういうこと・・・?」

シヤマルは丈瑠達の感想に涙目で睨む。茉莉はなのは達とフオワード達がクツキーに手を付けてないことに気づく。

「あ、食べないの?」

「あ、いえ・・・。食べます。」

なのは達はバスケットに手を出そうとするが、その前に後ろから千明が「シャマルが作ったクッキーだけ食べる。」とこっそり耳打ちし、なのは達は従い、シャマルのクッキーを手に取り食べる。

「ねえ、味はどうかしら？」

「あ、うん・・・美味しい・・・かな？」

「そ、そうだね。」

「は、はい・・・。美味しいです。」

「スバルと同じ感想です。」

「え、ええ。僕も同じです。」

「う、うん。美味しいです。」

シャマルが作ったクッキーは味が微妙なためか、正直感想に困ったが、シャマルを傷つけさせないため、なのは達とフォワード達は無理して感想を言った。しかし、茉莉は自分が作ったクッキーがことは以外食べないのが気に食わないのか、ムスツとしていた。

「ちょっとみんな、シヤマルさんだけじゃなくて、私のも食べてよね。」

「あ、ごめん。今食べるから……。」

なのはは茉莉が作ったクッキーを手に取ろうとすると、ほかの手が遮る。その手は流ノ介と千明のだ流ノ介と千明は茉莉が作ったクッキーを驚掴みにしてすべてのクッキーを取る。そして流ノ介と千明はお互いに顔を合わせ、頷くと一斉に食べる。

「ちょっと、そんなに美味しいからってがつつかなくてもいいじゃない!」

茉莉は自分が作ったクッキーを全部食べた流ノ介と千明に向けて注意するが、二人は口を動かして食べ続ける。そして、二人が一斉に飲み込むと、ゆっくりと倒れていった。

「……流ノ介さんに……千明さん？」

「お前達！今すぐ彼らを医務室に！」

「えっ！まさかのご詰まらせちゃったの！？急がないと窒息しちゃうわ！」

彦馬が雄叫びを上げるとどこからか担架を持った黒子達が現れ、流ノ介と千明をそれぞれに乗せて医務室に走って向かっていった。シャマルも流ノ介と千明を見るため黒子と一緒に医務室に向かつていった。

「そんなに美味しいからって、がっつかなくてもいいじゃない……」

「多分、違つと思うけど……。」

「あ、残り私とシャマルさん、二人で作ったクッキーだけだね。誰か食べる？」

茉莉に対して小声で誰かが呟いたが、茉莉は聞こえなかったか、無視して残りの二人で作ったチョコレートクッキーを見せつける。なのは達は流ノ介と千明の状態を見て、「食べたら同じようになる」と思い、誰も手を出さそうとしなかった。しかし、このまま手を出さなかったら申し訳ない。なのは達は覚悟を決めて手を出そうとした。

「茉莉。俺が食べる。」

「た、丈瑠さん！」

「多いけど・・・大丈夫？」

丈瑠の発言により、なのは達は驚く。丈瑠は、なのは達に茉莉の料理の被害者にさせないためか、自ら志願したのだ。おそらく、流ノ介と千明も同じ理由で一気に食べたんだと思われる。

「志葉。私ももらっぞ。」

「アタシもいいか？」

「いや、お前達はいい。」

「ねえ、ちょっとおおげさじゃない？クッキーはみんなで食べる物でしょ？」

「いや、それはそうだが……。」

シグナムとヴィータも覚悟を決めて文瑠に言ったが、文瑠は自分だけが犠牲になればいいと思っていて言うが、茉莉に怪しまれる。実際に茉莉の手料理を食べているのは文瑠達だ。そのため少しでも耐性があると思われる自分が食べれば被害が少なく済むと思ったが、そうはいかないようだ。

「だったら、一緒に食べない？それならいいでしょ？」

「茉莉……！」

「茉莉ちゃんの言う通りや！みんなで一緒に食べれば楽しいはず！」

「じ、ことはー！」

「志葉。諦める。こうなってしまった以上、全員で食べるしかない。」

「それに、お前おおげさなんだよ。お菓子で倒れるはずねーだろ？」

「・・・わかった。お前達、後は任せる。」

丈瑠はこれ以上言い逃れは出来ないと判断したのか、覚悟を決めて黒子に小さく言つと黒子はゆっくりと頷く。そして、なのは達と丈瑠達はチョコレートクッキーを手に取り、一斉に食べた。

『報告書』

・〇月〇〇日 場所 機動六課 訓練施設 夜8時ごろ

・訓練施設に突然食中毒者が多数発生。原因は不明であり、食堂の衛生管理が悪かったと疑ったが、食堂の衛生管理は問題ないことが判明。現在、調査中。

・被害者

高町 なのは 一等空尉

フェイト・T・ハラオウン 執務管

シグナム二等空尉

ヴィータ二等空尉

リインフォース？空曹長

スバル・ナカジマ二等陸士

ティアナ・ランスター二等陸士

エリオ・モンドリアル三等陸士

キャロ・ル・ルシエ三等陸士

志葉 丈瑠（民間協力者）

池波 流ノ介（民間協力者）

谷 千明（民間協力者）

・備考

シヤマル医務官の話では、全員が腹痛を訴えており、重傷だったのは池波 流ノ介と谷 千明の二名。二名以外は一晩で回復したが、二名は二日間治療が必要であったとされる。尚、今回の一件により、機動六課は一時停止の危機に陥った。

・報告責任者 八神はやて

外伝幕 巻 菜子とシャマルの料理（後書き）

作「今回も今更ですが、血祭ドウコクについて紹介します。」

血祭ドウコク

外道衆の長。長身瘦軀だが全身に鎧や棘のような意匠を身に付け、荒武者を彷彿とさせる。武器は龍の意匠の入った「昇竜抜山刀」しょうりゅうはくざんとう、「降竜蓋世刀」という大刀と小刀で、酒を飲んでいられる時以外は片時も手放さない。アヤカシたちからは「御大将」おんたいしょうと呼ばれる。短気な性格で、本気で怒ると手がつけられず、太夫と酒以外ではなだめられない。笑って済ませられる範囲でのアヤカシの悪ふざけや軽口・冗談などに対しては比較的寛容な態度を示す一方で、外道衆全体に対する反乱や明らかに自分に対する敵意を持った行為に対しては厳しい態度を取り、制裁を下すこともある。また、「敵意を持っている」「ゴズナグモを出入り禁止にするに留めてそれ以上の罰を与えていないことから、たとえ敵意を持っていても「内心に留まっている限り（反乱を起こすなど、実際の行動に移さない限り）」、特に処罰するようなことをしないことも分かる。

咆哮により強力な衝撃波を出す。また唯一所持するアヤカシたちを「縛る」力により、他のアヤカシを絶対的に支配している。しかしはぐれ外道の十臓には効果が不十分（それでもしばらくは動けなくなる）で完全に支配することができない。夏は三途の川の水とともに力が増幅する。

先代シンケンレッドを簡単に斬り伏せる程の実力を持つが、止めを刺さなかったために「封印の文字」を使われ、結果相討ちとなる。バラバラにされた身体を長い年月をかけて復活するが、封印の後遺症なのか人間界へ出るとすぐに水切れしてしまうため三途の川での滞留を余儀なくされているが、水切れを押しつけてもシンケンジ

ヤー6人とアクマ口を圧倒するほどである。相討ちで滅ぼしたと思つていた志葉家の末裔・シンケンジャーが生き残つていたと知つて激怒し、彼らを抹殺して人間界を三途の川に沈めようと企む。終盤、丈瑠以外の五人と戦闘した時もスーパーシンケンブルー、ハイパーシンケングリーンの二人の強化形態がいたにも関わらず余裕で圧倒している（源太に至ってはダイゴヨウの救助がなければ首を落とされていた）。

シタリ曰く、太夫が外道へ墮ちる前の薄雪の頃から、太夫の三味線の音色に執着している。第四十幕にて後遺症の限界まで人間界へ赴いたため三途の川の底に沈んでいたが、太夫の三味線に宿つていた嘆きの力が解放されて復活、再び人間界に現れた。その際に太夫の体を自らに取り込み、その効果によって封印の文字や水切れを無効化する。その後、地上に三途の川の水を溢れさせてシタリとともに六門船に乗って侵攻。シンケンジャーたちの文字どおりの真つ向勝負を迎え撃ち、互いの勝利を譲らないほどの執念で戦いを展開、最終的に二の目でシンケンオーに討ち取られて爆発した。

圧倒的なパワーとスピード、縛りの力が武器であり、それを叩き付けるように戦う。その一方で力に頼るゆえか剣の腕は然程ではなく、十臓と鏢迫り合った際は互角であり、丈瑠と相対したさいはあっさり剣を躲され急所を突かれている。

デザインのモチーフは毘沙門天および伊勢海老。

作「今回はこのような話は初めてなので、正直不安です。次回は本編なので頑張ります・・・」

それと、このようなオチで大丈夫だっただろうか・・・？」

第二十六幕 六課と侍の休日（前書き）

作「前回書いた外伝。書いた後に「なんでこんな書きちゃったんだ俺……。」と思いました……。本当にすみません。」

第二十六幕 六課と侍の休日

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮』

なのはとフェイトが非殺傷で戦う覚悟を決めて約十日、その間は八チヨウチン以降のアヤカシは現れず、日にちを開けてはナナシ連中が街を暴れていただけで、そのたびにシンケンジャー達となのは達は鎮圧していった。これまで外道衆は大きな動きを見せず、丈瑠達はこのことに疑問を感じ、警戒をしていた。

ある日の早朝。 丈瑠達の部屋では……。

「……朝か。」

「殿。おはようございます。」

丈瑠達の部屋に置いてある目覚まし時計のアラームが鳴り、丈瑠は目を覚まして身体を起こすと横にはすでに体育着に着替えた流ノ介が、忠誠を誓うようにしゃがんでいた。おそらく、丈瑠達より早く目覚め、ランニングしてきたのだろう。千明は言っと、朝が弱いのか、欠伸をしながら身体を起こした。

「ふああ……っ。もう起きんのかよ。」

「千明。早く着替えて訓練施設に行つて稽古をするぞ。」

「はいはいと……。」

文瑠はベッドから降りて、体育着が置いてある机の元に向かう。だが、文瑠は千明が所持している熊折神がないことに気づく。

「千明。お前の熊折神がないぞ。」

「ん？ああ……その……。」

「何か訳があるようだな……。」

「訳を話してもらつぞ、千明。」

「……わかったよ。言えばいいんだろ？」

そのころ、スバルとティアナの部屋では……。

「ティアア、朝だよー、起きてー!。」

スバルは自分のベッドに降りながらティアナに話しかける。しかし、ティアナは朝が弱いのか、まだ眠っている様子だ。

「ティアアー。早く起きないと訓練に遅れちゃうよー。」

スバルはティアナに何度も声をかけるが、なかなか起きない。スバルはティアナの体に乗っかり胸を掴もうとした時、何かスバルの額にぶつかつた。

「あだっ! 痛たたた……。何がぶつかつて……。あれ?」

スバルは額に何かがぶつかりとティアナのベッドから転げ落ちる。スバルは額を擦りながら顔を上げると、そこには熊折神の姿があった。しかし、熊折神はなぜか威嚇してた。

「グググ……。」

「なんでここに熊折神がいるの……？」

「それは私が千明に頼んで借りたから。」

「あつ、ティア……。」

ここに熊折神がいる理由は、油断しているとスバルがたびたびティアナにセクハラを仕掛けてくるので、ティアナが千明に頼んで夜寝る時と、朝起きるまでの間借りることにしたのだ。熊折神を借りたおかげでこのように、セクハラを防ぐことが出来た。

そしてティアナはスバルに対して怒りを顔に出して見ている。

「ティ、ティア……。おはよ……。」

「・・・チビ神、やっちゃんなさい。」

「ガーツ！」

「にゃあああああ！！！」

ティアナが言うと、熊折神はスバルの足に噛みついた。ちなみにどうして熊折神がティアナの命令を聴いているは、千明が事前に言い聞かせていたからだ。それとティアナが折神のことを“チビ神”と言った理由は「戦う時はデカくなるけど、いつもは手のひらサイズでちっちゃいから。」とのことである。

熊折神はスバルの足をガジガジと噛んでいる。手のひらサイズで小さいから力は弱いものの、結構痛い。そのためか、気が付けばスバルは涙目になっていた。

「痛い痛い痛いっ！痛いよーっ！」

「・・・熊チビ神。もういいわよ。離してあげなさい。」

熊折神はティアナに言われると噛むのをやめて、ティアナの方に

行き、肩に乗つかる。スバルは涙目で熊折神を見ていた。

「うづう．．．。痛いよ熊折神．．．。」

「自業自得でしょ。ほら、さっさと着替えていくわよ。」

熊折神はティアナから離れ、スバルとティアナは体育着に着替えて部屋から出た。熊折神はティアナの肩に乗っかり、スバルは熊折神に噛まれた後を擦りながら歩いていった。

スバルとティアナが外に出ると、外で待ってた千明とエリオとキヤロと合流した。そこでティアナは千明に熊折神を返し、早朝訓練するため裏庭に向かっていった。ちなみに千明は熊折神をティアナに貸していたことを話したら彦馬にもバレーしまい、丈瑠と彦馬に怒られたらしい。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭』

裏庭で丈瑠達はシグナムと稽古、フォワード達はなのは達の元で訓練を受けた。今回の訓練はフォワード達が次の段階の見極めテストも兼ねていたらしい。そしてそのテストも見事合格し、フォワー

ド達は丸一日休日を貰った。

「いいなー、あいつら。休みを貰っちゃってさ。」

「まあ、ここのところ、外道衆とかで忙しかったし、いいんじゃない？」

「でもよ、このミッドチルダ^{世界}に来てから俺達、休日なんてねえぞ……」

「贅沢は言つな干明。我々は外道衆からこの世を守るため戦っている。我々には、休んでいる暇のない。」

「確かにそやけど、たまには休みたいって思う時があるかな……？」

「そうだよな、そうだよなあ。ことはの言つ通りだよな。」

「……まあ、確かに休息は必要だな。」

丈瑠達は外道衆からこの世を守るため戦ってきたのだが、ずっと戦ってきているため休みと言える時間が少ない。それに早朝から体を動かしているため、疲れが一日でなくなるわけがない。

丈瑠達が話していると、彦馬がこっちに向かってきてることに丈瑠が気づいた。

「殿、そこに居りましたか。」

「ジイ。何の用だ。」

「先ほど、はやて殿と話をしてきて、街に出かける許可を貰っておきましたぞ。」

彦馬が来た理由は、丈瑠達が機動六課から街に出かけることを許可を貰ったことを知らせるためだ。別に丈瑠達は民間協力者は許可は必要ないと思われるが、何かの事件に関連するときは協力する時は命令を受けている。そのため彦馬は一応はやてに許可を貰いに行った。そして許可を貰ったため報告しに来たのだ。

「へー。……ってことは……?」

「殿達も、今日は休みってことになりますな。」

「よっしゃあ！俺達も休みだ！ジイさん、ありがとなっ!」

「あ、でもうちら、この世界のお金、あまり持ってへんよ……。」
「そのことならば、心配無用です。」

文瑠達はミッドチルダに来た時、所持していたお金をこの世界のお金に両替したのだが、持つてるお金は正直、残り少ない。すると彦馬はどこからか、封筒を五つ取り出した。

「ん？なんだ、この封筒は？」

「はやて殿が、今まで外道衆と戦ったり、いろいろ頑張っている感謝も込めての給付金と言っております。」

「へえ、そうなんだ！後でお礼言わないとなあ。」

「でも、受け取ってもいいのかな？お金を……。」

「まあ、彼女も何らかの形でお礼がしたかったであろう。ごく丁寧に手紙も、封筒に入っておりますな。」

「ふーん。まあ、受け取るうぜ。」

「俺はいらぬ。俺は別に、お金のために戦っているわけじゃない

からな。」

「でもよ、せつかくだし貰ったことござ。せつかくのご厚意を無駄にしないようにぞ。」

千明は丈瑠に言いながら封筒を受け取る。しかし顔はニヤニヤと笑ってため説得力は限りなく少なかったが。丈瑠はため息を漏らし、封筒を受け取ることにした。

『シンケンジャーの世界 志葉家 正門』

場所を変えてシンケンジャーの世界。ここは丈瑠達が外道衆と戦っている間、暮らしていた屋敷。しかし今は源太と黒子が暮らしている。厳密に言えば、黒子は志葉 丈瑠の義理の母、“志葉 薫”に仕えている黒子で、容姿はいつもの黒子とは違い、袴と袴を着用している。その黒子は、薫の命令で“いつでも丈瑠達が帰っても良ように”との命令で数名が屋敷の掃除等をしている。

源太は正門から出て、背伸びをするが元気はなかった。

「はああ……。丈ちゃんの次は千明と茉莉ちゃん、最後は俺を残

してみいんないなくなつちまつたよ……。」

「親分、そう落ち込まねえでくだせえよ……。親分には、オイラがついていやすから……。」

源太は正門から出るなり暗くなり、彼のサポートメカであるダイゴヨウが必死に励ましている。

実際に源太とダイゴヨウ以外の文瑠達は謎のオーロラによって、異世界ミッドチルダに移動していることは知らず、ただ“謎のオーロラによつていなくなつた”としか情報がない。黒子達も謎のオーロラを探しているが、それが見つかったことは未だにない。源太は今まで文瑠達を探していたのだが、結局何も掴めなかった。そのため、半分諦めかけていた。

ダイゴヨウは、源太を励まそうと声をかけようとした時、彼らの前に謎のオーロラが現れる。

「お、親分！あ、あれっ！」

「あれは……。丈ちゃん達を消した謎の……。！そうか……。お前が犯人なんだな……。」

話していた。食堂に置かれたテレビが、政治関連に変わり、ある男の力説になると文瑠達となのは達は手を止めて、テレビの方に顔を向ける。

「なんだ、この暑苦しいおっちゃん？」

「千明さん。そういつちゃだめだよ。この人はレジアス・ゲイズ中将。時空管理局地上本部の総司令なんだから。」

文瑠達はなのはにレジアスのことを簡単に聞くとテレビの方に集中する。レジアス中将は、どうやら質量兵器の運用について訴えるようだ。

「ふーん。じゃお前達の偉い奴か？」

「まあな。でもこのオッサンまだこんなこと言ってるよ。」

「レジアス中将は古くから武闘派だからな。」

シグナムが補足すると、茉莉はレジアスの隣にいる三人の老人に気づく。

「ねえ、隣にいる方は・・・？」

「右からミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役よ。“伝説の三提督”って言うって管理局の黎明期から今の形まで整えた偉大な方なんだよ。」

フェイトが三提督について、軽く説明する。しかし、千明はこの政治関連のニュースに飽きたのか、テレビのリモコンを取りに行く。

「なあ、番組変えていいか？」

「ん、別にええよ。」

「じゃ、遠慮なく。」

千明ははやてから許可を貰うとチャンネルを変える。ある番組に変えると千明の手が止まる。その番組はニュースだったが、政治関

連じゃなかった。

『次のニュースです。人々を襲う謎の集団に立ち向かう謎の戦士達。一部の未確認生命体が巨大化して暴れまわっているところ、またまた謎の戦士達が巨大兵器を使用して立ち向かい、我々から守ってくださり、市民の中では“ヒーロー”と言われておりますが、未だに時空管理局との関連性を否定しております。しかし、我々は今後も彼らの活躍に、期待しております。』

テレビには文瑠達、シンケンジャーについてのニュースが流れていた。ニュースの内容では、未だに時空管理局に関連性があるかどうか話題になっている。テレビには幸い変身前の姿が映し出されてないことが分かった。

「おいおい、これって俺達のことか？」

「みたい・・・だね。」

「勝手に期待されちゃ困るんだけどな・・・。」

「けどまだ私達がシンケンジャーってことがバレてないからいいん

じゃない？」

「けどよ、バレちまったらさ……もしかして俺ら、テレビに出れるんじゃないのー！」

「落ち着け。俺達はそんなつもりで戦ってるわけじゃないだろ？」

千明はテレビを見ながら思っていることを言っが、文瑠に注意される。

「それは、そうだけどさ……。」

「それに、俺達のことを知られたらより行動が出来なくなってしまう。いつものように戦えるとは言えないぞ。」

「まあ……。そうだよな。」

「願わくは、戦場では出くわしたくない。諦めてくれればいいんだけどな……。」

テレビは他のニュースに差し掛かったところで、文瑠は呟く。食

事を済ましたなのは達と丈瑠達は食堂を後にした。

『ミッドチルダ 機動六課 ロビー』

着替えを済ました流ノ介と茉莉と千明とことは。今彼らが着ているのはこのミッドチルダに初めて来た時の私服だ。しかし丈瑠だけ着替えてなく、六課で支給された制服を着ていた。

「丈瑠、ほんとは行かなくてもいいの？」

「ああ。お前達は街で楽しんで来い。」

「しかし、殿もお疲れでは・・・？」

「いや、俺のことは気にするな。万が一、外道衆が現れた時に誰か一人いれば報告できるからな。」

「うーん……。わかったよ。土産でも買って来るぜ。」

流ノ介達は丈瑠との会話を止めると外に向かう。流ノ介達は徒歩でクラナガンに行くことになり、途中までエリオとキャロと一緒に

行くことになった。勿論地図はちゃんともらっている。流ノ介達は外に出るとなのはとフェイト、そしてエリオとキャロがいた。

「エリオにキャロ。暗くなる前に帰ってきてね。夜の街は危ないから……。」

「大丈夫ですよ、フェイトさん。心配しなくても……あ、流ノ介さん！皆さんも！」

「わりい、エリオ。待ったか？」

「いえ、大丈夫です。では行きます？」

「うん。案内お願いするね。」

エリオとキャロは流ノ介達とともに六課から離れていったが、茉子だけは残っていて、フェイトに話しかけていた。

「フェイトさん。ちょっといいかな？」

「ん？何かな？」

「勝手な推測だけど……あの子達を管理局に入れなくなかったんじゃないかな？」

フェイトは茉莉にそう言われると、黙ってしまふ。

「正解……かな？」

「私、反対したんだけどね……。でもエリオ達が私の役に立ちた
いって強く願うから……。」

「……後悔はしてない？」

「……少し、してるかな？でもエリオ達の気持ちを不意にできないし、だからと言って危険な目にも合わしたくない、だから私が出ることは、いっぱい訓練して、鍛えてあげたり、あの子達の心の支えになることしかできない。それでも、母親として、立派に育てて、護っていききたい。」

「……そっか。それを聞いて安心した。」

茉莉とフェイトが話していると、千明から声がかかる。

「おーい！姐さん！早く行こーぜー！」

「あ、うん！今から行くから！じゃ、フェイトさん。また今度ね。」

「うん。エリオ達のこと、頼んでいい？」

「うん、いいよ。それじゃ。」

茉莉はフェイトと軽く話すと、走ってエリオ達の元に行った。

第二十六幕 六課と侍の休日（後書き）

作「今回は志葉 薫について紹介します。」

志葉 薫 / シンケンレッド

第四十四幕より登場した、真の志葉家十八代目当主にして志葉家最後の生き残りの女侍。丈瑠が操るものとは異なる“志葉家の「火」のモチカラ”を受け継いでいる。一人称は「私」。

先代シンケンジャー壊滅時にはまだ生まれておらず、現在の侍の中では最年少。元々は志葉家の血を絶やさず次の代を残すために人知れず暮らしていたが、父の遺志を継いでドウコクを倒そうとする使命感を幼い頃から強く持ち続けて「影武者の影に隠れて生きるのは侍として卑怯」と必死に修行をし、歴代の当主たちが会得できなかった「封印の文字」を完成させ、表に出てきた。丈瑠には「母上」、丹波らには「姫」、ドウコクには「志葉の小娘」と呼ばれている。

作中では終始袴姿の和服で、口調もやや時代がかつていて尊大ではあるが、これは丹波の教育の行きすぎによるもので「時代錯誤」との自覚はある。特殊な環境下で丹波らにある意味偏った育てられ方をされてきたにもかかわらず、物の見方は年齢の割には大人びていて周囲もよく見ており、会ったことのなかった丈瑠の心情にも思いやりを持ち、侍ではない源太からの協力も快く受け入れるなど優しい性格で決して我が侂ではない。実戦に出た回数こそ少なかったが、流ノ介たちがダイカイシンケンオーで手こずったヨモツガリを獅子折神一体だけで倒すなど、当主としてモチカラの実力はかなりのものであった。

丹波の行動が自分を思いすぎるゆえであることは十分理解しているが、自分以外の者に対する丹波の高圧的な態度を快く思っていない、度々彼を扇子などで叩くなどして咎めている。丹波とは違い、

丈瑠や家臣たちの心情を家臣たちの行動などから理解しており、自らの使命のみを重視して表に出た結果、丈瑠たちの絆を悪化させて辛い思いをさせてしまったことを後悔している。

第四十八幕で封印の文字を使うも、半分人間である薄皮太夫の体を取り込んだドウコクに効かず、逆に手傷を負わされてしまう。その後立ち直った丈瑠を呼び出して、ドウコクに対抗できる最後の手段として、2人だけの取り決めによって丈瑠を十九代目当主として養子に迎え、同時に自身は当主の座を退くという奇策を発案して実行するなど大胆で柔軟性のある一面を見せた。当初は丈瑠を「影」と呼んでいたが、彼が十九代目当主になるにあたって名前で呼ぶようになった。

外道衆との最終戦闘にあたっては、あらかじめ丈瑠に渡しておいたディスクの他に満身創痍を押しして志葉家のモチカラディスクをもう1枚こしらえ、丹波を介してシンケンジャーに託した。『V S GO セイジャー』においても丈瑠を救うため強力な炎のモチカラをゴセイカードに注入するなど、一線を退いてもなおその実力は強力である。

戦闘終了後、志葉邸を丈瑠と彦馬に託して自身は丹波とともに再び人里離れての生活に戻った。

後日談の『V S GO セイジャー』では当主の重責から解放された為か、口調や物腰がより女性らしくなっていた。

武器は丈瑠が変身したシンケンレッドと基本的に同じだが、小柄なため烈火大斬刀を使う際に足で蹴り上げて振り回すところが特徴。また、彼女が変身したシンケンレッドのスーツには他の女侍のスーツと同様にスカートがついている。

作「源太はあんな状態でしたが、謎のオーロラによって屋台とダイゴヨウとともにミッドチルダに移動したことになりますね。移動す

る方法はこれにするしか考えられなかった……。こんな作者で申し訳ありません……。」

第二十七幕 六課と侍の休日 弐（前書き）

作「……外伝幕消そうかな……と考え始めてきた。」

第二十七幕 六課と侍の休日 貳

『ミッドチルダ クラナガン 路地裏』

ここはミッドチルダの首都“クラナガン”の路地裏。そこに謎のオーロラが現れ、源太とダイゴヨウと、源太の“ゴールド寿司”の屋台がオーロラから現れ、オーロラは消えていく。

「あああああああああ．．．あっ？なんだ．．．ここは？」

「お、親分！」

「ダイゴヨウ！お前も．．．ってこたあ、また飛ばされたのかよ！
今度は何ワールドだよまったく！」

源太はダイゴヨウと屋台があると気づくと少しホツとするが、周りをみると明らかにさっきいた志葉家とは全然違うと気づく。そこで源太は違う“ワールド”に飛ばされたと思い込む。

「どつやらあ、そう見てえですね。今度は何ワールドでしょうか？」

「服も変わってねえし……。 “クリスマスワールド” じゃあなさそうだな。」

源太は自分の服を見ながら言う。源太とダイゴヨウのシンケンジャーは、他の戦士“炎神戦隊ゴーオンジャー”と共闘した時、ガイアークの“害統領バッチード”の手により一度、丈瑠を残してそれぞれのワールドに飛ばされたことがある。ダイゴヨウは“サムライワールド”、源太は“クリスマスワールド”に飛ばされ、一日を過ごす羽目になった。しかし、そのあとゴーオンジャーの炎神達によりどうにか自分達の世界に戻ることができ、その後バッチードを倒すことが出来た。

「親分……。これからどうしやすか？」

「ああ、ここでくよくよしてもしょうがねえ。周りを調べて、ここはどこか調べるぞ、ダイゴヨウ。」

「がってん！」

源太は屋台を引き、路地裏から出て周りを調べることにした。

『ミッドチルダ 機動六課 オフィスルーム』

場所を変えて機動六課。なのはとフェイトは今日は特にやることはなく、溜まっていた書類を片付けていた。ちなみにヴィータは陸士108部隊、シグナムは聖王教会に外回りのためいない。

「ん……。これで全部かな？」

「お疲れ様、フェイトちゃん。ちょっと気分転換に散歩しない？」

「うん。いいよ。」

片付けが済み、背伸びをしたフェイトになのはは散歩に誘い、外に出て機動六課の周りを歩くことにした。

なのはとフェイトは談笑しながら歩いていると、裏庭で体育着を着て竹刀を素振りする丈瑠の姿を見つけると、丈瑠に話しかけようと向かうが先に彦馬が丈瑠に話かけたため、反射的に隠れてしまった。

「なんだ、ジイ。」

「いや、殿も家臣達と街に出かけに向かればよかったのではないかと……。」

「なんだ、そのことか。俺は別に行かなくてもいい。その方があいつらも気が楽かもしれないしな。」

「ほほう？昔の殿では、私の目を盗んで遊びに行ったことも、しばしばあったこともありましたなあ。」

「……そうだったけ？」

なのはとフェイトはこのまま隠れてても盗む聞きするのもあれだし、出るのも恥ずかしいからか、そのまま気づかれないように離れようとしたが、丈瑠がいつもと違う様子を見せたのに少し驚く。二人はこの後のことが気になり、そのまま聞くことにした。

「そうですね、殿は昔、私の目を盗んでは、源太と一緒に遊んだり、迷子になったこともありましたなあ。」

「その話はもういいだろ。もう子供じゃないし、昔のことだ。」

「ま、そうですが、殿はこのミッドチルダ^{世界}に来てから少し固くなられたと思います。以前のように、会話もなされてはいかがでしょうか？」

「それもそうだが、まだ管理局を完全に信じたわけではない。例え、彼女達が何も知らないと言えども、俺達の力を狙おうとしている者もいるはずだ。」

「確かに、そうでございます。しかし、少なくとも、この機動六課の方々は信じてもらえるかと思えますが？」

「・・・そうだな。・・・で、誰だ？そこにいるのはわかってるぞ。」

なのはとフェイトは丈瑠の言葉にドキッと驚いてしまい、このまま隠れても仕方ないと思いを現すことにした。

「にははは・・・ごめんね、盗み聞きするつもりなかったんだけど・・・。」

「でも、丈瑠さんがあんな風に喋るなんて、今まで思わなかったな。」

「べ、別にいいだろ。ジイ、行くぞ。」

丈瑠はフェイトに言われたことが恥ずかしいからか、背中を向け、彦馬と共に裏庭から出ていく。なのはとフェイトは丈瑠の行動を見て少し笑った。

『ミッドチルダ クラナガン 服屋入口前』

ミッドチルダのクラナガンにある服専門店。流ノ介達は茉子の提案で服を買うことにした。理由としては、このミッドチルダ^{世界}に着てから、服は私服一つに、機動六課からの支給の制服のみで、いくらなんでも私服が種類しかないというのは少し辛いものがある。しかし男性陣はあまり気が乗らなかつたものの、必要最低限でもいいからと茉子とことには詰め寄られたため、流ノ介と千明は茉子とこととはの買い物に付き合っていた。

「ふう……。安かつたとは言え、ちょっと買いきちやっただかな？」

「『買いすぎちゃったかな？』じゃねえよ姐さん！いくらなんでも買い過ぎだろ！なんで俺と流ノ介が荷物運びしなきゃなんないんだよー！」

流ノ介と千明は服が入った箱を必死になって担いでいた。流ノ介と千明の買った服は、紙袋一つだけで済んだのだが、茱子とことは買った服の量は、それぞれ数倍近くあった。

「何言ってるの。荷物運びは男の子の役目でしょ？」

「流さん。少し持った方がええかな？」

「いや、大丈夫だ……。これは修業だ……。」

「お前、姐さんの口車に乗せられすぎだろ……。」

流ノ介と千明は茱子によって荷物運びをしており、あまりにも量が多いので、この荷物は黒子に任せようかと千明は考えていた。そんな時、流ノ介達に管理局員の男が近寄ってきて、話しかけてきた。

「あの、すみません。機動三課の者です。“シンケンジャー”の関係者ですか？」

場所を変えてスバルとティアナ。スバルとティアナは気が赴くままにクラナガンを歩いて休日を過ごしていた。そして二人は歩いていると他の管理局員の男と話している流ノ介達に気づく。二人は気になったのか、流ノ介達の元に行き事情を聞くことにした。

「すみません、機動六課の者です。どうかしましたか？」

「機動六課……！あ、いや……また今度……。」

管理局員の男はスバルとティアナが機動六課とわかると、男は遠慮がちに流ノ介達から離れていった。

「ティア！ありがとよ、助かったぜ！」

「千明、どうかしたの？何か悪さでもした？」

「するわけねえだろ。勧誘だよ、勧誘。」

「えっ？勧誘？」

「ああ、なんでも機動六課じゃ、設備も装備もままならないからこ
つちに来い・・・だと。」

スバルとティアナは、千明達に他の管理局の者から勧誘が来たと
わかるとかすかな怒りを覚えた。勧誘だけならまだしも、機動六課
の評価が悪かったからだ。

「そ、そんなことがあったんですか・・・。」

「おそらく、私達の力が目的なのではないかと・・・。」

「そうね、外道衆とまともに戦えるのは、私達ぐらいだけだしね・・・。」

「・・・でもま、気にすんなよ。別に勧誘を受ける気なんてねえし、
あんな奴のところになんか行きたくねえしな。」

流ノ介と茉莉が話している時、千明はスバルとティアナが怒り抑えていることに気づき、なだめるかのように言う。するとスバルとティアナは、気が少し緩んだ。

『ミッドチルダ クラナガン 街中』

流ノ介達がスバルとティアナと合流したころ、源太とダイゴヨウは屋台を引きながら街を歩いていた。

「なんだあ・・・、まるで近代未来みたいな世界だよなあ？」

「普通に人が空飛んでいやすし、ここはどこなんでい？」

源太とダイゴヨウは周りをきよろきよろと見回しながら屋台を引いていた。ちなみに、街にいる人達は源太の服装と屋台、そして喋る提灯が物珍しいのか、もしくは怪しいのか、行く先行く先で凝視してた。そして源太の服装は寿司屋の衣装である。

そして、源太どダイゴヨウを後ろから二人の管理局員から見ていた。

「おい、あれがそうか？」

「ああ。間違いない。あいつが引いている物からシンケンジャーに似た特殊な反応がある。おそらく、シンケンジャーの関係者に違いない。」

「よし、ならば勧誘してみるか。」

二人の管理局員は歩き出し、源太の進路をふさぐように前に出て立ち止まる。源太は二人の行動を怪しいと感じ、警戒する。

「・・・おい、誰だテメエら？」

「すみません。管理局の者です。“シンケンジャー”の関係者ですか？」

「シンケンジャー・・・！おい、まさかここにシンケンジャーいるのか！」

「ええ、いますよ。今、私の部隊に保護してるんです。今か貴方を保護したいんですかいですか？他のシンケンジャーもいますので。」

源太の様子を見た管理局員は、保護という形で捕獲しようと思いき、源太に言う。しかし、不信に思ったダイゴヨウは宙を飛び、源太の元に行き耳打ちをする。その際管理局員は自分で飛んだため驚いたが、彼らは無視した。

「親分。なんか話が上手すぎやしませんか？」

「ああ。なんでシンケンジャー知ってるかわからねえが、わかってることは、あいつらは俺を捕まえようとしている。逃げた方がいいな……。よしよしわかった、保護してもらおうじゃねえか！ただし、条件がある！」

「あ、ああ。なんだ、条件とは？」

二人の管理局員を不信に感じたダイゴヨウと源太は、管理局員の二人に振り向き、元気よく言う。管理局員はいきなり元気になった

ことに不信に思うが、とりあえず保護してもらえるならと思い、条件に乗ることにした。

「まあまあ、落ち着け。俺の寿司を食べてから保護してもらっぜ。」

「す……すし？」

「なんだ？食べたことねえのか？なら尚更食べてけよ。俺の寿司はとびつきりうめえからなあ。」

源太は屋台を置き、カウンター側に着くとすぐに寿司を握り始める。ネタはマグロだが、握る際にワサビを気づかれないように多く入れる。そして大量のワサビ入りのマグロの寿司が二つ完成する。

「さあさあ、遠慮なく食べよ。」

「あ、ああ……。」

管理局員は源太に言われるまま、寿司を持つと珍しそうに見て、二人同時に口に含み、口を動かす。

「……！~~~~ツ！！！」

「んんんんんん！！！！！」

寿司を食べた管理局員は鼻と目に来る激しい痛みを感じ、地面に転がり落ちる。

「へへへ、どうだ？俺特製、ワサビ寿司はっ！お代は要らないよ〜
~~~~！！！」

「ま……まふえ……！」

「は、はなが……！」

源太は転がって苦しむ管理局員にワサビを見せつけていい、最後

に屋台を引いてダイゴヨウと共に逃げていく。管理局員はワサビの激しい痛みに助けを呼ぶ余裕もなく、ただ辛さに耐えるしかなかった。

ちょうどその時、地下道路ではトラック横転の事故が発生していた。その現場に、一人の女性の管理局員が到着し、近くの局員に話しかけた。

「初めまして、陸士108部隊ギンガ・ナカジマです。現場検証のお手伝いに参りました。」

この女性の名前はギンガ・ナカジマ。スバルの姉で、またスバルのシューティングアーツの師匠でもある。ギンガは横転事故の報告を受け、現場検証に来ていた。

「ありがとうございます。」

「横転事故と聞きましたが？」

「ええ。ただ、事故の状況がどうも奇妙でして……。」



ギンガは奇妙と聞くと周りを確認する。周りにはトラックが運んでいたらしい荷物と、恐怖に怯える運転手らしき男がいた。男は「化け物が・・・、襲い掛かってきて・・・。」と怯えながらも呟いている。

「運んでいた荷物は缶詰や飲料ボトル・・・。爆発するような物じゃないですね。」

「それと、下の方に妙な遺留品がありまして・・・。」

ギンガは局員に案内され、遺留品を見るとギンガは目を細める。

「これは・・・、ガジェットの残骸に・・・刃物？・・・どこかで見たことあるような・・・っ!」

ギンガが見た物は、ガジェットの残骸と、剣らしき刃物が発見された。ギンガは刃物を見ると、以前渡された外道衆に関する書類を思い出す。この刃物はナナシ連中という外道衆の戦闘員が使用する蛮刀を思い出した。そしてギンガはさらにトラックの周りを調べる。ギンガはある物を見つける。

「これは・・・生体ポット！」

ギンガが見つけたある物とは、5、6歳の子供が入っていたと思われる壊れた生体ポットだった。

そして、地下水路では鎖をつけられたオッドアイの少女が必死に歩いていた。その鎖にはケースが二つついてあった。

「・・・ママ・・・。。。」

少女は呟きながらも、鎖を引きずりながら必死に歩いていた。途中、鎖に繋がれてたケースが引っかかり転んでしまい、その衝撃で

ケースが一つ水路に落ちてしまおうが、少女は気にせずマンホールの出口に向かった。

『ミッドチルダ クラナガン 街中2』

地下道路で事故が発生していたことに気づいてないエリオとキャロはシャーリーが作ってくれたプランを次々にこなしながら休日を過ごしていた。しかし、エリオとキャロの談笑はとある青年の声で止まってしまおう。

「退いた退いたー！退いてくれー！」

「……えっ？」

エリオとキャロは突然声がした方を見ると、そこには屋台を引いて走っている青年がいた。その青年は猛スピードで走っていて、エリオとキャロの横を通り過ぎて行った。その際、勢い余って二人はしりもちをついてしまい、少しすると顔を抑えながら走って追いかける管理局員の姿があった。

「な・・・何なんだろうね・・・。」

「とりあえず、追いかける・・・？」

突然のことで何が何だかわからないが、今わかったことは、あの青年は管理局員に絶対に何かしたんだと思い、追いかけることにした。

その青年は、梅盛源太。先ほど管理局員にワサビ寿司を食べさせて、管理局員がワサビに苦しんでいる間に逃走していた。

「ダイゴヨウ！まだ追ってくるか！」

「親分！まだ追いかけてきやすぜ！」

「んだよしつこいなあ！」

「親分！左だ！左に曲がってくれ！」

「おう！わかった！」

源太はダイゴヨウに言われるまま左に進路を変更し、道に入っていくが、そこは行き止まりの路地裏だった。

「おいダイゴヨウ！ 思いつき行き止まりじゃねえか！」

「あ、あれ？・・・あ、親分！ マンホール！ まだ下水道という手がありやすぜ！」

ダイゴヨウは自分が言った進路が行き止まりだったことに焦りを感じたが、マンホールを見つけるとすぐにマンホールの存在を知らせる。

「おお、そうか！ 屋台は置いてかなきゃならねえが、烏賊ちゃんとエビゾウは置いてけねえな・・・。」

「親分！ オイラが守りやすから、逃げてくだせえ！」

「ばつきやろっ！お前を置いて逃げれるか！」

「オイラ、親分が捕まっつてほしくねえんです！だから、早く！」

「ダイゴヨウ・・・お前つてやつは・・・。」

源太とダイゴヨウが必死になつて話している時、マンホールの蓋が突然開く。それに気づいた源太はダイゴヨウを持って構えるが、マンホールから現れたのはオッドアイの小さな女の子だった。

「・・・ッ！おい、大丈夫かよ！」

源太とダイゴヨウは下水道から女の子が出てくるとは思いもしなかったが、女の子は衰弱しているのに気づくと源太は女の子の元に駆け寄り、声をかけるが反応はしない。気絶しているかもしれないが、今の源太にはその言葉が横切つてこない。源太が女の子に声をかけている時に、後ろから子供の声がかかる。

「すみません！どうかしたんですか！」

「ッ！ああ、ちょうどいい！救急車が警察呼んでくれよ！この子が危ないんだ！」

「わかりました、僕達は時空管理局の機動六課の者です。今から救援呼ぶので安心を・・・！」

「じくつかんりきよく？ああ、もう管理局でもなんでもいいから早く呼んでくれ！」

「は、はい！わかりましたから落ち着いてください！」

源太は追報を出会った子供に任せ、小さな女の子を必死に呼びかけた。

## 第二十七幕 六課と侍の休日 式（後書き）

作「今回は薫の家老、丹波について紹介します。」

丹波 たんば  
歳二 としごう

第四十四幕より登場。薫に付き従う家老のような人物で、先代にも仕えており、丈瑠を影武者に仕立てる計画に関与していた。薫からは苗字で呼び捨てにされている。四角四面な性格で、薫と志葉家を想う気持ちは強いものかなり度がすぎている。そのため薫には非常に過保護で時代錯誤気味の態度で接しており、他の家臣に対しては高慢かつ高圧的で、周囲が嫌悪感を覚えるほど空気を読まない発言が非常に多く、特に正式な侍でない源太に対しては露骨に厭味な態度を表す。その態度を常に薫に窺められ、その都度色々制裁を加えられている。丈瑠が十九代目当主になったことにも猛然と反発したが、薫の鶴の一声には従わざるをえず、容認を余儀なくされる。薫が丈瑠に「時代錯誤になったのは丹波のせい」とこぼしていることから丹波の養育方針がうかがわれる。その言動から、彦馬よりも高い地位にいる人物であることがわかる。

最終幕において、仲間たちをかばって重傷を負った薫に「部下たちなど見捨ててさっさと逃げればよかったのに」と言ったことで「志葉家だけが残っても意味がない」と叱責され、考えを改める。その後は自ら丈瑠らの元に向かい、薫から言付かったディスクとともに自らの得意なモチカラ「双」を封じたディスクを渡して激励するなど温かく見守る好人物となっており、本質的には善良な人物であるといえる。また、当初は丈瑠のことを「影」と呼んでいたが、彼が十九代目当主になってからは「ご当主」と呼ぶようになった。

外道衆との戦いを終えた後も引き続き薫に付いて、志葉家を丈瑠と彦馬に託して後にした。



作「とりあえず、なんとかヴィヴィオを出せました。本格的な絡みは次になります。」

第二十八幕 六課と侍の休日 参(前書き)

作「次回のゴージャスはシンケンジャーツ！。姫が出るのはいいけど殿が出てほしかったな……。」

## 第二十八幕 六課と侍の休日 参

『ミッドチルダ 機動六課 ロビー』

源太がクラナガンの路地裏で少年達と出会っていた頃、丈瑠は私服に着替えてロビーでソファアに座って過ごしていた時、目の前にモニターが映し出される。キャロからの全体に通信らしい

『こちら、ライトニング4、緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベインF23の路地裏でレリックと思われるケースを発見、ケースを持っていたらしき女の子が一人、そして女の子を保護したかと思われる男性一人です。』

丈瑠はモニター越しから女の子に必死に声をかける青年の姿を見る。その青年を見ると丈瑠は、目を大きく開いて驚き、青年の名前を口に出してしまう。

「まさか・・・源太ッ！」

『おい！しっかり・・・あん？この声は・・・まさか丈ちゃん！丈

「ちゃん！どこだ！どこにいるんだー！」

「わっ！お、落ち着いてください！お、女の子は、意識不明です。」

「し、指示を・・・お願いします。」

丈瑠の声はどうやら源太に届いたらしく、源太は丈瑠の声を聞くと周りを確かめ始め、エリオは源太を落ち着かせようとしながらも少女の状態を報告し、丈瑠は立ち上がると走りだし、なのは達と合流した。

「スバルとティアナ、ごめん、お休みは一旦中断。」

「はい！」

「大丈夫です！」

「救急の手配はこっちです、二人はそのままその子とケースの保護、応急手当をしてあげて。」

「はい！」

「全員待機体勢。席を外している子達は配置に戻ってなあ、安全確実に保護するよ。レリックも女の子も、そしてその男性もや。」

エリオとキャロが返事をし、はやては立ち上がり指示を出す。機動六課は戦闘待機に入った。

『ミッドチルダ クラナガン 路地裏』

なのは達が路地裏に向かっている時、スバルとティアナ、そして流ノ介達はエリオ達と合流していた。

「あつ、源ちゃん！」

「この声は……千明イ！それに流ノ介に茉莉ちゃんにことはちゃん！お前ら……無事だったんだーっ！消えたと聞いて心ツ配したんだぞ！」

「ごめんなさい。急だったから……連絡出来なかったんや。」

「いやいや、ことはちゃんが謝る事じゃねえから、別に気にしなくてもいいぜ。こうしてまた出会えたからなっ！」

フワード達は流ノ介達と源太のやり取りを見て、知り合いか何かか?と思ったので千明にどんな関係か聞くことにした。

「あの、千明さん。この人は・・・?」

「ん?ああ、こいつは源太。俺達の仲間で、文瑠の」

「源太!」

千明が何か言おうとした時、誰かの声で遮られる。声がした方に顔を向けると、そこには文瑠となのは達がいた。どうやら到着したらしい。

「・・・文・・・ちゃん・・・?」

「源太・・・お前、なぜここに?」

「えっ?たけ・・・ちゃん?」

「た・・・たたたたた丈ちゃんああああああん！！！！！！！！  
心配したんだぞおおおお！！！！」

なのは源太が言った“丈ちゃん”の言葉は誰に対してか一瞬戸惑ったが、源太は丈瑠を見るなり大声を上げて丈瑠に抱きつこうとするが、丈瑠は避けて源太は盛大にずっこける。なのは源太の行動を見て、“丈ちゃん”は丈瑠のことだとすぐに理解した。

ティアナは盛大にずっこけた源太を見ながらも千明に何者が再び聞く。

「ねえ、千明。さっき千明の仲間で・・・何？」

「・・・丈瑠の幼馴染だ。」

「そ、そうなんだ・・・。」

ティアナは今までの源太の行動を見て、千明の言ったことを少し納得した。

源太はゆっくりと起き上がりながらも丈瑠に顔を向ける。

「つたくもお、つれねえなあ丈ちゃん……。」

「いきなり抱きつこうとするお前が悪い。」

「まあともかく、丈ちゃん、無事で良かったあ……。」

「源太……今からこの世界について、そして今までのことを話す。こっちに来てくれ。」

「あ、ああ……。」

源太は丈瑠に言われるなり首を傾げるが、丈瑠についていくことにし、丈瑠はなのは達から離れていく。その際、丈瑠は流ノ介達の方を振り向く。流ノ介は“後は任せたぞ”と言う意味だと認識し、こっちも小さく頷く。

丈瑠が源太を連れて離れていくと同時にシャマルがすでに意識不明の女の子を見ていた。

「バイタルは安定してるわね、危険な反応はないし、心配ないわ。」



「良かったー。」

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに……。」

「いえ。」

「平気です。」

フェイトが申し訳なさそうに言うと、エリオとキャロが返事をする。

「ケースと女の子、そして源太さんかな？このままへりに搬送するから、皆はこっちで現場検証ね。流ノ介さん達も、フォワード達の手伝い、お願いしてもいいかな？」

「はっ、わかりました。」

「「「はい！」「」「」」

流ノ介はなのはの指示に返事を返す。丈瑠達は民間協力者であり、

事件が起きた時には協力することがあるため、指示に従うことにした。

「あつ。ついでなんだけどさ・・・、あれもへりに乗せねえか？」

「えっ？」

千明がある方向に顔を向けながら言つたとその場にいる全員が顔を向ける。顔を向けた先には、千明が言うある物、源太の“ゴールド寿司”の屋台とダイゴヨウだ。ダイゴヨウは黙っているので、なのは達にはただの置物と認識している。

「へりに入りきるかしら・・・。」

「・・・どうだろうね・・・。」

シャマルが屋台を見て呟くと、なのはが苦笑いしながら返す。その後、丈瑠と源太を呼び、シャマルの転移魔法で屋台と丈瑠と源太、

そして女の子をへりの前に転送する。ちなみに茉莉達が買い物した物についてはへりの元に転送してもらった。

そしてなのは達はへりの方に行き、残されたフォワード陣と流ノ介達は作戦会議に出た。

「では、少女が落としたレリックを回収します。場所はキャロにお願ひするね。」

「はい！」

「さて、みんな！短い休みを堪能したわね！」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れていこうね！」

「はい！」

「まったく、俺はもう少し、休みを堪能したかったぜ。」

「千明、また休みを貰えばいいでしょ。その時、思いっきり堪能すればいいんじゃない？」

「千明、茉莉さん！準備いい？」

ティアナが言うと流ノ介達はシヨドウフォンを筆モードにして構え、ティアナ達は待機モードのデバイスを構える。

「……………筆奏上!」

「……………セットアップ!」

【スタンバイ・レディ!】

流ノ介達はそれぞれ青色の“水”、ピンク色の“天”、緑色の“木”、黄色の“土”を宙に書いて反転させ、スイッチを押すとそれぞれシンケンジャーとなる。そしてティアナ達はデバイスを起動させてそれぞれバリアジャケットを身に着ける。

そしてシンケンジャー達とフォワード達は地下水路に入り、レリックの搜索に乗り出した。

『ミッドチルダ クラナガン ヘリ』

ちょうどその頃、ヘリに乗り込んだ文瑠と源太。ヘリの中は文瑠と源太、そして座席に眠っている女の子をシャマルが見ている。す

るとハッチはしまり、へりは着陸していたへりポートから離れていた。なのはとフェイトは空にいるガジェットを破壊するため、へりに乗らなかつた。

「おい、あいつら乗らなくてもいいのかよ？」

「ああ、大丈夫だ。それより、さっきの話の続きだ。」

源太は窓からなのはとフェイトを見て言ったが、文瑠はへりに乗り込む前に話していた時の続きに乗り出した。

「おう、そうだったな。確か・・・この世界は魔法が主に使われてんだよなあ？そしてその魔法を使う“魔導師”っていうのが所属している・・・時空管理局だったっけな？」

「ああ。そして、お前が出会ったあの子達も魔導師で、管理局員だ。」

「へー。そうなんだ・・・っておい待て、管理局員って・・・あの小さな子供達もか？」

「・・・ああ。そうだ。」

丈瑠は顔を俯かせ、小さく静かに言った。それを聞いた源太は、だんだんと顔を怒りへと表していく。

「なんなんだよ・・・。魔法さえ使えば、なんだって使っつてい  
うのかよ・・・！」

「・・・そうらしいな。管理局は人手不足に困っているそうだ。力  
があれば、誰でも使っつらしい。」

「力があるだけでかよ・・・！人手不足だからって、子供まで使っ  
たなんて・・・管理局がやってることは、サイテーじゃねえかよお！」

源太は手を握りしめ、へりの内装に思いっきり叩きつける。源太  
の行動を見て、シャマルは顔を俯かせる。

「落ち着け、源太。俺達、部外者が何言っても無駄だ・・・。」

「なんだよ丈ちゃん！やってみなきゃわかんねえだろお！」

「よく聞け源太。管理局は俺達の世界で言っと、政府でもあり、警察のようなものでもある。俺達部外者が何を言っても変わらない・・・。」

「ぐぬぬぬぬ・・・。なんだよ・・・、俺達は黙って見てろってことかよ・・・！」

源太は手を強く握る。路地裏にいた時、丈瑠が源太を連れて遠くに行った理由は、なのは達から一時離させるためだ。もし源太がそのままなのは達の元にいたら、源太はフォワード達を地下水路に行かせない行動を取っただろう。もしそんなことしたら、下手すれば公務執行妨害となって捕まる可能性があったからだ。そのため、そうならないように一時離れさせていたのだ。

悔しがる源太を見て、丈瑠は口を開く。

「源太。俺達は今、民間協力者としてあの子達のところにいる。俺達はあの子達の元について、戦って守ることしか」

「それでいいのかよ丈ちゃん！ホントにそれで！こんなところで話している時だってあの子達は」

「源太！もういうな・・・！」

声を荒げる源太に、丈瑠は源太の肩を掴みそれを止める。源太は丈瑠の行動に戸惑うも、丈瑠が肩を揺らし、顔を俯かせて体を震わせていることに気づき、源太は黙った。

「・・・丈ちゃん、もしかして。」

「・・・俺だって、認めたくはない、子供が戦場で立つことも、それを平然とやってのける管理局も・・・。だけど、少なくともこの部隊の人は信用に足る者だと、俺は思っている。無理に信じろとはいわない、だから・・・。」

丈瑠自身も源太同様、管理局の体制を認めてはいなかった。しかし相手はこの世界を牛耳るほどの巨大な組織であり、いくら外道衆と戦えることが出来たとしても、管理局に意見できるほど甘くはなかった。それを知ったのは皮肉にも丈瑠自身がミッドチルダに来てから数週間立ってのことであり、民間協力者としてその管理局に手を貸してしまったのだ。それでも丈瑠は、自分を犠牲にしても外道衆から子供たちを、管理局の中で信用している機動六課の人達を



守りたい一心でここまで来れたのだ。例えそれが自身の“侍”としての心意気に反していたとしてもだ。

「……丈ちゃん、もういい。丈ちゃんの気持ちはよくわかった。」

「だけどよお、それとこれとは別だ、今まで丈ちゃんにどんな辛い事があつたか知らねえが、俺は管理局を認めねえ……。」

丈瑠の気持ちを知った源太は、丈瑠によって掴まれた手を引き離し、丈瑠から離れる。

「だがなあ、俺達はシンケンジャーだ、外道衆がいる限り、世界が変わろうがこの世を守るために戦うしかねえ、そのために管理局と協力しないとイケねえのなら、俺はそれに従う。」

「……源太、お前」

「ただし条件がある！一度丈ちゃん達が世話になっている部隊の隊

長さんに合わせてくれ。一つ、話してえ事がある……。」

そう言い放つ源太は、先ほど見せた困惑した物とは違い、真剣そのものだった。丈瑠もそれに気づき、口を開く。

「……ああ、約束する、シャマル、お願いできるか……。」

「えっええ、この任務が終わればすぐにでも会えると思うから……一応話を通してみるわ。」

「なら……決まりだな。」

女の子の治療をしていたシャマルに丈瑠は話かけ、シャマルの返答を聞くと丈瑠は源太の方を向くと、源太は頷いた。

『ミッドチルダ 地下水路』

その頃フォワード達とシンケンジャー達はレリックの搜索をして

いた。ティアナは走りながらもギンガと念話で連絡を取っていた。

「へえ、スバルに姉さんいたんだなあ。それにスバルと同じ、魔導師か？」

「はい！私のシューティングアーツの師匠で、歳も階級も二つ上なんですよ！」

「へえー。そりゃ一度、会ってみてえな。」

シンケングリーンとスバルが走りながらも軽く話していると、いきなり壁が大きな音を立てて壊れる。その音を聞いたシンケンジャ―達とフォワード達は構える。

「新たなガジェットか！」

「違います！この魔力の反応は・・・ギン姉！」

「はあっ！いくらなんでもそれは」

土煙が晴れると、そこには長髪の女性で、左手には白いリボルバーナックルに、足にはスバルのマツハキャリアバーによく似たローラーブーツを着用していた。

「久しぶりね、スバル！」

「うん！ギン姉！」

「・・・なんつー登場仕方だよ。」

「それより、壁壊してもいいの？」

ギンガが現れるとスバルはギンガに駆け寄る。ギンガはシンケンジャー達に気づくと驚いて凝視する。

「えっと、スバル。この方達って・・・。」

「はい、えっと・・・。」

「私はシンケンブルーの、池波 流ノ介。」

「私はシンケンピンクの白石 茉莉。よろしくね。」

「俺はシンケングリーンの谷 千明だ。」

「うちはシンケナイエローの花織 ことはです。よろしくお願ひします。」

「は、はい。私はギンガ・ナカジマです。よろしくお願ひします・・・」

ギンガはシンケンジャーを見て、“何か足りない”と感じながらも自己紹介する。しかし、突然キャロのデバイス“ケリュケイオン”が光り出す。

「来ます！小型ガジェット、6機！」

キャロの言葉にフォード達とシンケンジャー。そしてギンガが背中合わせになる。そしてガジェットが見えてくると同時に地下水

路の“スキマ”が赤く光出し、スキマからナナシ連中が10体ほど現れる。

「はあっ！なんでここに外道衆が現れんだよ！」

「千明！今は外道衆から彼女達を守るぞ！」

突然外道衆が現れ驚くが、シンケンジャー達はフォワード達とギンガを守るため、ナナシ連中とガジェットの撃破に移った。

『ミッドチルダ とあるビルの屋上』

場所を変えてとあるビルの屋上。そこには紫色の髪を生やした少女、ルーテシアが一人立っていた。ルーテシアの横にモニターが現れる。そのモニターに映っているのはナンバーズのNO・1ウーノだ。

『へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。ルー

「テシアお嬢様は地下に。」

「うん。」

『騎士ゼストとアギトは？』

ゼストとアギトというのは、常にとともに行動している者だ。

「別行動。」

『お一人ですか？』

「一人じゃない」

ルーテシアはそういうと自分の手にはめているグローブ型のデバイスを掲げると、黒い球体が現れる。

「私にはガリユールがいる。」

『失礼しました。協力が必要ならお申し付けください。最優勢で実行します。』

「……ねえ、“外道衆”もいるの?。」

ルーテシアはモニター越しからウーノを見て口に出す。ウーノは少し黙るが、返答するため口を開く。

「はい。すでに地下水路に向かっているという情報がありますが、安心してください。外道衆は我々に危害を加えることはありません。」

「……わかった。」

ルーテシアはウーノからそう聞くと返答する。

外道衆とスカリエツィの関係は、協定を結んでおり、スカリエツィ側は生体ポットを渡す代わりに、外道衆はアヤカシやナナシ



連中を自由に使ってもいいと言いつ渡されている。今ナナシ連中をス  
カリエツティ側が使っているためルーテシアに危害が及ぶ危険性は  
まずはないと思われる。

ルーテシアはモニターを切って通信を切り、地下水路に向かった。

## 第二十八幕 六課と侍の休日 参（後書き）

作「今回も今更ですが、シヨドウフォンについて紹介します。」

シヨドウフォン

シンケンジャーが持つ変身アイテム。通信などに使用する「携帯モード」と、文字を書くことでモチカラを発動させる「筆モード」の2形態に変形できる。「一筆奏上！」<sup>いっぴつそうじょう</sup>という掛け声とともに、「筆モード」で受け継いだモチカラを宙に書き、それを身に纏うことにより変身する。「携帯モード」では、一般の携帯電話と同様の機能（写メール、ワンセグ、アプリケーションゲームなど）が使える。300年前のものは本体が木製であるなど、現代のものとはデザインが少し異なり、日下部彦馬は木製で筆先が朱色のシヨドウフォンを使う。

作「書き忘れてましたが、前の話に少し書き加えました。（ギンガ初登場シーン）ここだけの話なんですが、実は源太はオリジナルの話で出そうかと考えてましたが、こっちの方が自然かな？という理由でヴィヴィオと同じタイミング（？）で出しました。」

第二十九幕 六課と侍の休日 四（前書き）

作「海賊戦隊ゴーカイジャー」の影響か、様々な戦隊をDVDで見  
る事が多くなった。しかしガオレンジャーを見た時グロイシー  
ンが多くて驚いた・・・。」

## 第二十九幕 六課と侍の休日 四

『ミッドチルダ 地下水路』

レリックの搜索をしていたフォワード達とシンケンジャー達。途中、スバルの姉、“ギンガ・ナカジマ”と合流したと思いきや、ガジェットとナナシ連中が現れシンケンジャーはフォワード達を守りながら戦うことになった。

「はああっ!」

「ふっ!はっ!」

「おりゃあ!」

「やっ!」

シンケンジャー達はそれぞれ散開し、シンケンマルを扱いガジェットとナナシ連中と破壊していく。フォワード達はバインドや非殺傷の射撃魔法を屈指してシンケンジャー達を援護している。だが、ギンガはシンケンジャーと同じく前に出て体術でガジェットを破壊、そしてナナシ連中は引き飛ばして戦っている。ギンガの体術でやられたナナシ連中は消えず、そのまま残っている。おそらく、失神し

ているからだろう。

「ギンガ殿！危ないので下がって！」

「心配しなくても、大丈夫です！」

だが、ギンガの行動を見て危ないと感じたシンケンジャー達は、近くにいたシンケンブルーが先にギンガを下げようと声をかけた。しかしギンガは下がらず構え、向かってくるナナシ連中を吹き飛ばしている。

「いや！危ないから下がってください！」

「本当に私なら大丈夫です！気にせず戦いに集中してください！」

「でーすーかーらあ！本当に危ないですよ！死んじゃうかもしれ  
ないんですよー！」

「いえ、これも任務ですから！」

「おめえら、喧嘩してる暇あったら戦え！」

ギンガの身を案じたシンケンブルーは、ギンガを前線から下げようと説得を試みるがギンガは大丈夫だと言って断り、前線に出て戦おうとしていたためシンケンブルーは更に説得を試みるが頑なに拒むギンガと口論じみた事になってしまい、一時シンケンブルーとギンガが戦闘から離れかけるも激化する狭い下水道の中で苦戦を強いられるグリーンから突っ込みが入った。

「・・・もう、危険と感じたら下がってくださいよ！」

「わかりました！スバル、行くよ！」

「あ、うん！」

説得を諦めたシンケンブルーは、ギンガに忠告した後ガジェットとナナシ連中の元に向かって走っていく。ギンガはスバルを連れて別方向から来るガジェット相手に向かって走っていった。

「ウォーターアロー！」

「ランドスライサー！」

シンケンブルーはシンケンマルを専用の弓、イエローは専用の大型手裏剣に変化させ、ブルーはウォーターアローに龍ディスク、イエローはランドスライサーに猿ディスクをセットし、ブルーは弦を引いてモチカラで作られた水の矢を連射し、イエローはランドスライサーを投げつける。水の矢とランドスライサーに直撃したナナシ連中とガジェットは瞬く間にやられていき爆発していく。

シンケンジャー達が戦っている中、フォワード達の前にガジェット？型が転がって近づいてきた。

「スバル、一撃で仕留められる？」

「うん！行ける！」

「行くわよ、トライシールド！」

ガジェット？型相手にスバルとギンガは走って向かっていき、ガ

ジェットはギンガに向けて熱線を発射する。だが、ギンガは魔法陣を盾のように出すと、魔法陣が盾の役割をして熱線をはじいていき、ガジェット？型に接近する。するとガジェット？型はアームを使ってギンガに集中攻撃を仕掛ける。ギンガはアームによる打撃を先ほど出したトライシールドで防いでいく。そしてスバルが右手に装着したデバイス、“リボルバーナックル”に魔力を集めて大きく飛び上がってガジェット？型に殴りかかり、右手はガジェット？型の装甲をぶち抜いた。

「デバイス……バスター……！！！」

スバルは右手に集めた魔力をガジェット？型の内部で解放し、砲撃魔法を発動してガジェット？型を撃ち抜いた。撃ち抜かれたガジェット？型は煙を吹きだして機能を停止した。そしてギンガとスバルの元に、シンケンジャー達と残りのフォワード達が集まってきた。

「ナナシ連中とガジェットは、もうないようね。」

「でも、空の上はなんだか大変みたいね……。」

「殿……無事だとよいのですが……。」



「大丈夫だよ。空の方はなのはさんとフェイトさんがいるから。それと、八神部隊長も出撃してるみたい。」

「でも、殿様と源さんがいるからヘリの方は、大丈夫やと思う。」

「皆さん、ケースの推定位置まで、あともう少しです!」

フォワード達とギンガとシンケンジャー達は、キャロの探索魔法を頼りにレリックのケースの搜索を再開した。

地下水路を走っていると、凄く広い空間に出た。

「うわ、すっげえ広いなここ……。」

「キャロちゃん、ここにケースある?」

「はい、この辺に反応があります。」

「じゃ、手分けして探しましょ。」

ティアナの指示により、それぞれ分かれてケースの搜索が行われた。キャロは反応を頼りに探していると、流れ着いたと思われるリックのケースを見つけた。

「ありがとうございました！」

「お、マジか！」

シンケンジャー達とスバル達がキャロの元に集まり、キャロがケースを拾い上げると同時に不審な音がした。

「・・・何・・・？」

「何か近づいてくる・・・。」

不審な音が壁を蹴る音とわかる全員が警戒する。すると宙から魔力弾が発射され、キャロの足元に着弾すると爆発を起こし、衝撃がキャロを襲う。

「キヤアッ!」

「キヤロちゃん!」

衝撃で吹き飛ばされたキヤロは、近くにいたシンケンイエローがなんとか受け止める。しかし、その衝撃でケースを落としてしまう。そして、全員が宙に4つの羽のような光を出している透明の何かに気づくが、その透明の何かはキヤロに追い打ちをかけるように向かってくる。

「あっ!」

「はああ!」

シンケンイエローはキヤロをかばうように身をかがめるが、先にエリオが飛んでデバイス“ストラーダ”で宙にいる何かに攻撃を仕掛ける。しかし、ストラーダの攻撃は弾き返され、エリオの頬は何

かの攻撃によりかすり傷を負った。

「ぐっ・・・！」

「エリオ、無事か！」

シンケングリーンはエリオの横に出て、シンケンマルを突きつけるように片手で構える。すると透明の何かはゆっくりと降りていき、姿を表す。その姿は、人間サイズで二足歩行する、虫のような姿をしたルーテシアの召喚虫“ガリユ”だった。

667

「えっ！アヤカシ！」

「テメエ・・・外道衆か！」

初めて見るガリユにシンケンジャーは外道衆のアヤカシと思い込み、シンケンジャー達はガリユを囲むように立ってシンケンマルを構える。フォワード達とギンガは、シンケンジャー達の後ろに

立って警戒する。

「……外道衆じゃない……。」

『っ！』

突然シンケングリーンの後ろから声がして全員がそっちの方に顔を向けると、そこにはレリックのケースを持ったルーテシアで、すでに手は魔力が集められており、ルーテシアはグリーンに向けて魔力を衝撃波に変えて放つ。

「うあああああああ！！！！！！！！！！」

「千明ッ！」

「千明！」

ルーテシアの衝撃波を受けたシンケングリーンは、衝撃波に耐え

きれず吹き飛ばされ、柱にぶつかる。グリーンにティアナとブルーが駆け寄る。

「ぐっ……いつてえ……。」

「千明、動けるか？」

「ああ、この程度、どうってこともねえ……！」

シンケングリーンはブルーに差し出された手を掴んで立ち上がる。ティアナはルーテシアに非殺傷の魔力弾を撃つが、素早い動きでガリユーがルーテシアの盾となり、魔力弾はガリユーの肩当て部分に当たり、その部分は壊れて落ちていく。

「まったくもー、アタシ達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ？ルールーもガリユーも。」

「今度は誰だ！」

突然上から声がするとシンケンジャー達とフォワード達は警戒する。すると上からリインと同じぐらいの大きさの悪魔っぽい容姿の女の子が現れた。

「アギト……。」

「もう、ホントに心配したからな。ま、もう大丈夫だぞ、何しろこのアタシィ！烈火のー、劍精！アギト様が、来たからな！」

アギトと呼ばれた悪魔っぽい女の子は少しルーテシアから離れ、花火を上げてポーズを取りながらも名乗った。

「……なんだ、あいつ？」

「リインと……同じ大きさね。」

「でも、可愛いー！」

「か、可愛い言うなー！」

シンケンジャーの会話がアギトにも聞こえたのか、アギトは赤く  
なって反論する。

「……ゴホンッ、お前ら全員！かかって来いやあ！」

アギトは赤くなりながらも咳払いし、挑発的な態度を取って叫んだ。

671

「どつちら、戦っしかないようだな。」

「そうみたいね。でも千明、私達の目的はあくまでケースの確保。  
無理に戦わないで。」

「わあってるよ。じゃ行くぜ！」

シンケンジャー達は一斉に構え、ガリユーに向けて走っていく。



ガリユーは腕を変化させて爪のようなものを作り、シンケンジャーに向けて素早い動きで突撃してくる。

「ぐっ……！」

「………」

「隙ありい！」

ガリユーの攻撃をシンケンブルーがなんとか防ぎ、ガリユーの後ろからグリーンがシンケンマルで斬りかかるが横に移動して避けられる。だがガリユーが避けた先にはピンクがすでに待機していて、ガリユーはすかさずピンクに斬りかかるがピンクはシンケンマルで受け流して斬りかかるも他の腕の爪で防ぐ。

「はあっ！」

「………」

「おじめっ！」

他のシンケンジャー達もガリユーに斬りかかるも、ガリユーはピ  
ンクから離れていくがシンケンジャー達はガリユーを追い、周りか  
らシンケンマルで斬りかかっていく。ガリユーはシンケンジャー達  
の攻撃を避けようとするが、シンケンジャーの猛攻に避けられな  
ったのか、シンケンジャーの一撃で吹き飛ばされる。シンケンジャ  
ー達は吹き飛ばしたガリユーに追い打ちをかけようと走るがアギト  
の魔法で防がれる。

「ごんのおー！」

「ッ、キャアー！」

「うああっー！」

アギトが魔法で出した火炎弾はシンケンジャー達の足元に着弾し、  
激しく燃え上がる。炎はシンケンジャー達を包み込んだ。

「……シンケンマル、水流の舞いー！」

しかし、シンケンブルーの技“水流の舞い”により瞬く間にアギトの炎は一瞬で消し去ってしまった。シンケンジャー達も炎に包まれた時間が短かったか、さほどダメージは受けてなく再びシンケンマルを構える。

「何イ！あんな魔法、見た事ねえよ！」

「魔法じゃなく、モチカラだけだな。」

アギトは自分の炎が一瞬で消し去られたことを信じられなく、驚いていたが先ほど吹き飛ばされていたガリユーが起き上がり、ガリユーは力を込めると腕の爪をさらに強化し、足と背中にも爪を生やした。

「なんだよあいつ……。あんなアヤカシ居たっけ？」

「いや、いないはず。たぶん、この世界の生物かも……。」

「じゃああの子の言うとおり、外道衆じゃなさそうだな。」

ガリユーはシンケンジャーに向けて再び突撃仕掛けた。ガリユーの攻撃を再びブルーが防いだが、今度は力に負けてブルーが軽く吹き飛ばされてしまう。

「グアッ！」

「はああ！」

「やっ！」

他のシンケンジャーがガリユーに向けて斬りかかるが、ガリユーは全身の爪を屈指してシンケンジャーの攻撃を防いでは反撃してくる。

「何だよ、なんか急に強くなってねえか!？」

「どつやら本気を出してきたようだな……。」

「でもどうする？無闇に傷つけてもあれだし……。」

「だったら、時間稼ぎになればいいだろっ！」

シンケンジャーはいったん下がり、体勢を立て直してシンケンマ  
ルを構えて再びガリユーに向けて斬りかかる。

ルーテシアはシンケンジャーがガリユーと戦っている間、離れて  
地下水路から出ていこうとしたが、突然ルーテシアに桃色のバイン  
ドがかかり、レリックが入ったケースを落としてしまう。

「……ッ！」

「ルルー！」

「ごめんね、乱暴で。でもね、本当に危ない物なんだよ？」

「テメエ、ルルーから離れる！」

ルーテシアはバインドに縛りつけられながらもケースを拾おうとするが、先にティアナがケースを拾う。アギトはティアナに向けて火炎弾を撃ち、無理にでもルーテシアから遠ざけた。ティアナはぎりぎり回避、ルーテシアから離れてしまった。アギトはルーテシアの元に行きバインドを解く。

「ルールー、こりやまずいって！逃げるしかないよ！」

「……でもケースが」

「ケースなんて後でいくらでも取りに行けるだろ？それに、あの四人組シンケンジャー、結構強いし、今は逃げなきゃ捕まっちゃうよ！」

「……わかった。ガリユー。」

シンケンジャーと交戦してたガリユーはルーテシアの声に反応し、すぐにルーテシアの元に行きルーテシアとアギトを連れてどこかに行ってしまった。その時天井がいきなり一部が壊れ、そこからヴェータとリインが出てきた。

「お前ら、無事か？」

「グイータ副隊長！はい、大丈夫です。ケースも。」

「おし、よくやったなお前ら。おめー達も無事みてーだな。」

「逃げられちまったけど、何とかな。」

グイータに軽く言うシンケングリーン。しかし、いきなり周りが揺れ始める。

「うわっ！」

「な、なんだ・・・地震か！」

「違います・・・大型召喚の気配がします。たぶん、それが原因で・・・。」

「おいおい、どうすんだよ！このままじゃ生き埋めだぞ！」

「落ち着け、脱出するぞ！スバル！」

「はい！ウィング、ロード！」

スバルはヴィータに言われると地面にリボルバーナックルを叩きつけると、地面からウイングロードが螺旋状に伸びていき、ヴィータとリインが出てきた天井の穴に入ってそのまま伸びていく。

「スバル、ギンガ！先に行け！最後はアタシが行く！」

「はいつ！」「」

ヴィータに言われた通りにスバルとギンガが先に登り、シンケンジャー達も続いて登っていく。キャラもウイングロードに乗って登ろうとした時、ティアナに止められる。

「待って、キャラ。レリックの封印処理、お願いできる？」

「え、はい。やれます。」

「ちょっと考えがあるんだ、手伝ってくれる？」



「はい！」

キャロは元気よく言い、ティアナ達はウイングロードに乗って登って行った。

『ミッドチルダ 廃棄都市区画』

うまく脱出できたシンケンジャー達とスバル達は周りの状況を確認した。道路にはルーテシアが召喚したと思われる巨大な虫がいて、その様子をルーテシアとアギトとガリユールが見ていた。ガリユールの下から魔法陣が現れ、魔法陣の中に入っていつて消えていった。

周りの状況を確認したスバル達は、すぐに行動に映してルーテシア達の逮捕に乗り出した。まずキャロが桃色のバインドで巨大な虫を縛り付け、キャロの後ろから藍紫色と水色のウイングロードが現れ、ルーテシア達の元に伸びていく。ウイングロードには、それぞれギンガとスバルが走っていて、その間をヴィータが飛んで向かってくる。ティアナは建物の上からルーテシア達を狙って撃つが避けられるも、ルーテシアは道路沿いに着地すると素早い動きで近づいてきたエリオがストラダをルーテシアの首元に突きつける。そしてリインがルーテシアの横から現れてバインドでルーテシアとアギトを拘束する。そしてバインドで拘束されたアギトはゆっくりと道路に着地し、前からヴィータが現れる。

「子供をいじめてるみてーでいい気分しねーが、市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他モロモロで逮捕する。」

「・・・なんか複雑な気分ね。」

「ああ。あんな小さな子も、犯罪に利用されてるからな。」

「とにかく、我々は指示に従うしかないな。」

局長が言っただけで問題ありそうな言葉だったが、あえて突っ込まずシンケンジャー達はヴィータ達の元に向かっていった。

シンケンジャー達がヴィータ達の元に来ると、すでにルーテシアとアギトを拘束してたバインドはベルトに代わっており、ルーテシアに対してはスバルとティアナ、アギトに対してはラインが職務質問を行っていた。シンケングリーンはティアナがルーテシアにクロスミラーージュを突きつけているところを見つけるとすぐにクロスミラーージュを無理やり降ろさせた。

「ッ！・・・千明、何するの?」

「ティア、いくら仕事でも、子供に銃向けんのはやめとけ。いい思いなんかしねえしな。」

「……でも……。」

「こればかりは頼む。……なっ?」

「……わかったわ。言っとおりにする。」

ティアナが千明の言っとおりにクロスミラーージュを下げると、会話に気づいたヴィータがこっちを見て口を開く。

「そんなんじゃあめーぞ、千明。いくら子供でも、警戒怠ってじゃ話になんねーぞ。」

「でもよ、さすがに子供相手に脅すのはなあ……。」

「気持ちはわかるが、これも仕事だからな。」

「……。」

千明はヴィータに言われるも協力者なため言い返せなかった。

そんな二人とは対照的に、シンケンブルーとイエローが空を探していたらへりを見つけた。

「あっ！へり見つけた！」

「無事でよかった……。」

シンケンブルーとイエローはへりを見つけるなりほっとし、へりに向けて手を大きく振った。

『ミッドチルダ 廃棄都市区画 ビル 屋上』

ビルの屋上では、眼鏡をかけた女性と茶色でロングヘアを後ろで縛っている少女がいて、長い物に布を巻いて持っていた。少女の目の一部が機械的な何かに変化し、へりを見ていた。

「デイエチちゃん。ちゃんと見えてるー？」

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでるし、よく見える。」

デイエチと呼ばれた少女は目をスコープ状にして、女性に周りの状況を報告しながらも機動六課のへりを見ていた。

「でもいいのか、クアットロ、撃っちゃって？ケースは残せるだろうけど、マテリアルもシンケンジャーの方は、破壊しちゃうことになる。」

「うふふ……。ドクターとウーノ姉様曰く、「あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃ぐらいじゃ死なないし、シンケンジャーなら他のがいるから大丈夫だ」……。だそうよ。」

「ふっん。」

クアットロと呼ばれた女性はデイエチに説明すると、デイエチは納得したのか、布に巻かれた物の布を取ると、巨大な狙撃砲が姿を現せ、砲狙撃を構えてへりに照準を合わせる。それと同時にクアットロとデイエチの横にモニターが現れる。モニターに映っているの

はウーノだ。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様が掴まったわ。』

「ああ、そういえば例のチビ騎士に掴まってましたねえ。」

『今はセインが様子を窺っているけど……。』

「フォローしますう？」

『お願い。』

モニターが消えるとクアットロはセインに通信を入れた。

「『セインちゃん？』」

「『あいよー、クア姉。』」

「『ルーテシアお嬢様が捕まったわ、フォローに入ってくれる？』」

「『りょうかい。』」

クアットロはセインに通信を終えると次に、ルーテシアに通信を入れる。ちなみにデイエチは狙撃砲にエネルギーのチャージを始めている。

「ルーテシアお嬢様あ？今から私の言うとおりにしてもらえますう？」

「……うん。」

ちょうどその頃、スバルとティアナはルーテシアに職務質問を続けていた。ちなみに、ティアナはクロスミラージユを降ろしている。

「……逮捕は、いいけど……。」

「……えっ？」

突然のルーテシアの発言に全員が反応し、ルーテシアを見る。そしてルーテシアは、遠くから支持を出すクアットロと同時に口を動かす。

「「大事なへりは、放っておいていいの？」」

『ッ！』

ルーテシアの言葉の言葉に、全員が目を開き驚愕する。そして今から起きることが全員想定できた。

「まさか・・・！」

「と、殿オ！」

「源さん！」



シンケンジャー達は一斉にへリの方を見た。そしてクアットロがルーテシアに通信を入れる。

「『ルーテシアお嬢様あ？もう一言加えてもよろしいでしょうか？』」

「『…うん。』」

ルーテシアはクアットロの願いを受け入れ、再び口を動かす。

「あなたは…。また、守れないかもね。」

「ツ…！」

「発射ッ！」

それを聞いたヴィータは目の色を変える。そして、チャージと照



ヴィータはヘリが狙撃されたことが信じられなかったのか、ルーテシアを揺らして叫び続ける。しかし、その状況の中でギンガとシンケンピンクが、道路から手が出ていてさらにケースを持ったエリオに近づいてくるのに気づくが、すぐに手は道路の中に消えてしまった。

「エリオ君！足元に何か！」

「えっ？」

エリオはギンガに言われるなり後ろを向くが、何もなかったが、突然エリオの足元から誰かが飛んできて、ケースを奪われてしまう。

「うわっ！」

「いただきっ！」

ケースを奪ったのは先ほどクアットロと通信をしていたセインで、セインは道路に着地せずそのまま道路の中に入っていく。ティアナがセインに向けて魔力弾を撃ったが、当たる前に逃げられてしまった。セインが現れたことにより、この場にいる全員が警戒を始めて散開する。しかし、散開したのが仇となったのか、ルーテシアの元にセインが現れ、ルーテシアを連れて道路の中に逃げられてしまった。それどころかアギトもこの場に忍んで逃げられてしまった。

『ミッドチルダ 上空』

ヘリがいたと思われる場所から煙が上がっていた。なのはがヘリを助けようとしたが、間に合わずに着弾してしまった。ロンググアーチでも騒然となっており、ヘリの確認に急いでいた。先ほどの砲撃はSランク相当と聞かされており、ヘリの生存は絶望的だった。

「間に・・・合わなかった・・・。」

「そんな・・・。」

「・・・待って、何か聞こえる。」

フェイトは煙の中から何かか聞こえたらしく、なのはとはやても耳を傾ける。その音はヘリのローターの音。そして煙から狙撃されたはずのヘリが姿を現した。

「えっ……嘘……。」

『こちらシャマル……。丈瑠さんのおかげで、ヘリの防御に、成功しました！ヘリの乗員、全員無事です！』

シャマルの通信が聞こえ、ヘリの安否が確認された事により、ロングーチとなのは達、そしてシンケンジャー達は歓声を上げた。

時間を少しさかのぼり、ヘリの中ではSランク相当の魔力がチャージされている通信が入り、それを聞いた丈瑠はヘリの窓を見てどこから来るか目視でなんとか確認し、すぐにシヨドウフォンを筆モードにして宙に“防”と書いて反転させ、書いた文字にモチカラを込めてヘリの外に発動した。そしてデイエチから放たれた砲撃は強かったが、丈瑠はモチカラを込めることに集中し、何とか守りきれることに成功した。しかし、長距離とはいえSランク相当の砲撃を耐えたため、耐えきった後はその場で倒れてしまった。

「丈ちゃん！おい、大丈夫かよ！」

「ああ……。さすがに、モチカラを使い過ぎた……。少し休ませてください。。。」

「ああ……。ゆっくり休んでくれ。。。」

丈瑠はシャマルと源太に座席に横にされると、ゆっくりと目を閉じて眠った。

## 第二十九幕 六課と侍の休日 四（後書き）

作「今回も今更ですがシンケンマルについて紹介です。」

### シンケンマル

シンケンジャー全員が腰に帯びている鞘のない刀。秘伝ディスクの力によりモチカラで強化して使用できる他、折神の操縦桿にもなる。5人全員が技ディスクを使うことにより、連続攻撃をする「螺旋の太刀」や同時に攻撃する「五重の太刀」といった技を使用できる。また、また、4人以下、あるいはゴールドとの合体技も発動できる。「刀」の文字や召喚の意思により、変身前でも出現・使用が可能。

鐔の部分はプラキシノスコープになっており、秘伝ディスクを回転させることにより、ディスクに描かれた模様がアニメーションとなる。

鐔にスーパーディスクをセットし、刀部分にインロウマルをセットすることで「スーパーシンケンマル」へとパワーアップする。この状態ではインロウマルにディスクをセットすることで技が発動する。

作「書いている時、クアットロガルーテシアに念話？を入れてるシーンなんですが、通信か念話にするか真剣に悩みましたが、結局通信にしました。」

それとまだ先のことや、大ナナシ連中による巨大戦、そして源太とはやての会話も視野に入れてるため、長くなるため勝手ながら分けさせていただきます。構図はある程度出ていますので、なるべく

「 近いうちに更新したいと思います。本当に申し訳ありませんでした。」



第三十幕 六課と侍の休日 伍（前書き）

作「前回もがんばってつなげればよかったかな……。」

### 第三十幕 六課と侍の休日 伍

「???? スカリエツティのアジト」

「まさかデイエチの砲撃を防ぐとは……ますます興味が沸いてくる……！」

ここはスカリエツティのアジト。先ほど、スカリエツティはモニター越しからデイエチの砲撃を、モチカラで防いでいたことを見ていた。本来の目的は、ケースとマテリアルの回収なのだが、そのマテリアルが聖王の器かどうか確認するためデイエチの砲撃で確かめようとしたのだが、あいにくモチカラの性でデイエチによる砲撃の確認は失敗した。

「シタリ。聞こえるか？」

「なんだいスカリエツティ。今こっちは忙しいんでね、後にしてくれんかね？」

モニターではなのはとフェイトとはやてから必死に逃げるクアッ

トロとディエチが映っているが、スカリエッティはモニターを見ずにシタリを呼ぶと、彼の近くにある“スキマ”から赤い光が出て、そこからシタリの声がする。

「なあに、大ナナシ連中を指示するポイントに放つだけでいい。数は……20体ほどでいい。」

『別にいいけど、なんか策でもあるんかい？』

「ちょっと確かめたいことがあるだけだ。」

『……まあ別にいいさ、放つとくからしばらく声をかけんてくれないか、あたしゃ忙しいんでね。』

シタリはそういうとスキマから赤い光が消える。それと同時にスカリエッティの後ろからウーノが現れ、話しかけてくる。

「ドクター……、大ナナシ連中を使って何をするつもりですか？」

「何、ちょっとしたデータ採集だよ。もしナナシ連中がヘリを落としてくれたら、聖王の器かどうか確認できる。もしシンケンジャー

の巨大兵器に妨害されたとしても、データは取れる。損はないと思うが？」

「はぁ……。もしマテリアルが、聖王の器とわかったならば、回収は？」

「それならナナシ連中に任せる。ガジェットよりも使い勝手もいい。それに、学習能力もある上にある程度戦闘能力も高い。」

「……そうですか。」

ウーノは不安を抱えたまま指示に従うことにした。

『ミッドチルダ 廃棄都市区画』

ここは廃棄都市区画。先ほどへりを狙撃した犯人を見つけ、なのはとフェイトとはやてが追跡したが、突然反応がロストして逃げられてしまった。そして今ヴィータがはやてにこちらの状況報告をしている。

「こちらは最悪だ。召喚士一味には逃げられるし、ケースも持って

行かれちゃった。逃走経路もつかめねえ。」

「あ、あのー……ヴィータ副隊長……」

ヴィータがはやてに報告をしている時、スバルが申し訳なさそうにヴィータに話しかけるが、ヴィータが“話しかけてくるな”と言ってるようにグラーフアイゼンを突きつけ、再び報告に戻る。スバルの行動にシンケンジャー達は首を傾げた。黙らされたスバルはがっかりしたように落ち込んだが、今度はティアナがヴィータに話しかける。

「……副隊長。あのー……」

「なんだよつつせえなあ、報告中だぞッ！」

「すみません。さっきまで話す機会がなかったんですが……。レリックは取られてないんですよ。」

「……はっ？」

ティアナの発言にヴィータ、ライン、そしてシンケンジャー達が

ティアナの方に顔を向ける。

「まずはケースの方なんですけど、あたしの幻術魔法では衝撃に弱いのでごまかせないので本物ですけど、本物のレリックは……ここです。」

ティアナが言い終わるとキャロの方に行き、帽子を取ると、キャロの頭には花のヘアバンドがあった。だが、そのヘアバンドは少しすると形を変え、奪われたはずのレリックが現れた。

「これって……!」

「はい。レリックに封印処理をして、あまり戦いに関わらないキャロに持つてもらおうと思い、あたしの幻術魔法で形を変えて保管してたんです。」

「って言うことは……取られたのはケースだけかッ! やったなティア! お手柄だぞ!」

シンケングリーンがレリックが取られてないこととわかると喜びを表に出し、ティアナに近づいて背中を軽く叩く。真実を知ったヴィータは言葉が出てこなかった。

しかし、喜びもつかの間。廃棄都市区画に立ち並ぶビルの“スキマ”から大ナナシ連中が現れ、周辺の建物を手当たり次第破壊を始めた。

「大ナナシ連中！」

「何でここに！それになんか張り切ってなーかあいつら！」

ヴィータが大ナナシ連中を見て声を出す。さっき現れたナナシ連中はいつもより暴れており、前に見た大ナナシ連中と比べてみれば、より活発的に動いていた。

それには理由があった。外道衆とは力を増す時期というのがあ、その時期というのが“夏”。ちょうどなのは達の世界も奇しくも夏の季節であった。もっとも、外道衆の御大将“血祭ドウコク”がシンケンジャーによって倒されているため、その力の増幅は以前一（シンケンジャーの世界）とは違い、増大に上がっているわけではなかったが、それでもミッドチルダの都市を破壊するには十分すぎた。

この事態にシンケンジャーは迷うことなくエンブレムモードの折神を取り出し、シヨドウフォンを筆モードにして構える。

「龍折神！」

「亀折神！」

「熊折神！」

「猿折神！」

「……折神大変化！」

シンケンジャー達は折神に“大”と書いて折神を巨大化させ、シンケンジャーはそれぞれの折神に入ると折神はエンブレムモードからアニマルモードへと変化し、大ナナシ連中の元に向かっていく。折神を見たギンガは驚きを隠せないで見ていた。

「あれが……シンケンジャーの兵器……。映像しか見てなかったけど、初めて見た……。」

「正確には……折神なんだけどね……。」

「……でも、“赤いの”がないんだけど……。」



ギンガがシンケンジャーが巨大化させた折神を見てギンガが呟くと、他のみんなも折神の方を見る。“赤いの”というのは、シンケンレッドこと丈瑠が所持している折神“獅子折神”がない。それに気づいたスバル達は疑問に思った。

「そういえば確かに……、足りないわね。」

「おい丈瑠！どうしたんだよ！獅子折神はどうしたんだ、おい！」

シンケングリーンはシヨドウフォンで丈瑠に連絡を入れる。しかし、出たのは丈瑠ではなく、源太だった。

『すまねえ、今丈ちゃんがモチカラを使い過ぎて動けねんだよ！』

「はああ！じゃあ折神だけで戦えってことかよ！」

「ふっふっふ……。まあまあ落ち着けて千明、なーんか忘れて

ねえか？」

焦るシンケングリーンに源太は不気味に笑い、千明に問いかける。

「あん？源ちゃんこんな時に何言って……っておい、もしかして……！」

源太に言われて少し冷静を取り戻したシンケングリーンは、何かに気づいたのか、喜びに似た声を上げる。

『おうよー！こっちは、俺とエビゾウに、任せてくれよおー！』

そういつと源太は通話を切り、シヨドウフォンを文瑠のポケットに戻す。シャマルは源太をこれから何をするのか気になったのか、じっと見ていた。

「あの・・・何するんですか？」

「ん、まあ見てなって。おいパイロットさんよあ、ハッチ開けてくんねえか？」

「はあ？折神でも出すんですか？まあ開けますよ！」

ヘリのパイロットでもあるヴァイスは丈瑠が折神を出すんだと思い、ヘリのハッチを開ける。ハッチを開けた瞬間、風がヘリの中に入ってくる。そして源太は懐から源太の携帯でもあり変身ツール“スシチエンジャー”と、源太が所持する技ディスク“寿司ディスク”を取り出す。

「え・・・何を・・・」

「なあに、見てろって医者のお姉さん！今からすっげえもん見せてやつからよ！」

そういつと源太はスシチェンジャーの“光”と書かれたスイッチを押すと電子音が鳴る。

【・・・イラツシャイー！】

「寿司ディスク、一貫献上！」

電子音が鳴れば源太はすぐにスシチェンジャーを閉じ、寿司ディスクを折りたたみ、寿司を握る要領でディスクをスシチェンジャーにセットする。そして方向を逆にし、左右に振って前に突き出すと、“光”と金色の電子文字が現れ、源太を包み込む。包まれている中、源太の体は他のシンケンジャーのように着物ではなく、ゴールドと紺色のたすき掛けのようなスーツを着用し、腰に秋刀魚のような小刀が現れ、最後に源太の顔に“光”という電子文字が包まれると源太は“光”と大きく書かれたようなマスクを装着し、源太はシンケンゴールドへと変身を遂げた。

シャマルはシンケンゴールドとなった源太を、目を見開き、啞然としていた。



スシチエンジャーから電子音が鳴ると同時に源太のゴールド寿司にある水槽から海老折神が出て、ヘリのハッチから降りると海老折神は巨大化し、シンケンゴールドは海老折神の中に入っていく。そしてシンケンゴールドは海老折神の中に入ればサカナマルを鞘から抜き、海老ディスクをセットして台座にセットして操り出す。ちなみに海老折神の大きさは龍、亀、熊、猿折神を上回っている。

「ええッ！ヘリから海老が出てきた！」

「まさか、あれも折神なの……。」

「まだ折神があつたなんて、知らなかった……！」

ヘリから出てきた海老折神に、スバルとエリオとキャロとリインは期待している目で見ていて、ヴィータとティアナは呆気を取られていて、ギンガは驚いていた。

「さて、久々に気合入れていくかぁ！海老ばさみ！」

源太は手を海老のはさみのように動かして言う。と海老折神を操る。海老折神は海老ばさみを使い大ナナシを持ち上げると他の大ナナシ連中に向けて投げる。投げ飛ばされた大ナナシは悲鳴を上げ、ぶつかつた大ナナシ連中は飛ばされた大ナナシを受け止めきれず倒れてしまう。

「太巻き光輪！」

シンケンゴールドは海老折神を操ると、海老折神のはさみからデイスク型の円盤が現れ、円盤を飛ばすと大ナナシ連中は円盤の斬撃を受けると耐えきれず、爆発して消えていき、現れた大ナナシ連中は半分ぐらいまでなくなつた。

「凄い……。あの折神、強いね……。下手したら文瑠さん達の折神より強いかも……。」

「でも、さすがに折神さん達が合体したシンケンオーにはかなわな

「いですよッ！」

「いや、戦い方によっては新しく出た折神の方が強いと思います！」

海老折神が大ナナシ連中を倒している光景を見ているスバルとエリオとキャロとリインは、いつの間にか折神についての話で盛り上がっていた。ヴィータとティアナとギンガは話についていけず、呆れていた。

「さーで、そろそろ本気を出すとすつかあ！侍変形ッ！」

ゴールドはスシチェンジャーを取り出し、“変”と入力して電子モヂカラを発動させ、海老折神に受けさせると海老折神は飛び上がり、海老の尻尾の尾ひれが外れて尻尾は足となり、尾ひれは腰に移動する。そして海老ばさみは腕となってはさみは腕の肩部分に移動し、海老の頭は外され、二つに分かれると背中に移動する。そして海老折神の内部では海老折神の胴体のような回転盤が現れ、ゴールドはサカナマルにセットした海老ディスクを外し、裏返して再びセットする。そして海老折神は変形し、基本形態“ダイカイオーヒガシ”という侍巨人へと姿を変えた。



「ダイカイオー！天下一品ッ！」

【トオー！トオー！ヒガシィー！】

「えっ、嘘オ！」

「姿が・・・変わった・・・！」

「何だよ・・・、単独でも戦えんのかよ・・・！」

海老折神がダイカイオーへと変形したことに、スバル達は口を開けて目を丸くした。

ゴールドはダイカイオーを動かし、大ナナシ連中の元に向かった。大ナナシ連中は槍を持ち、ダイカイオーに向かって走りダイカイオーに攻撃を仕掛ける。だが、ダイカイオーは大ナナシ連中の槍を打撃で受け流し、カウンターの如く大ナナシ連中に殴って打撃を加えていく。打撃を受けた大ナナシは吹き飛び、倒れて消えていく。そして少し離れていた大ナナシ連中が弓を取り出して弓を構える。

「そう来るかぁ、ならばダイカイオー、西！」

ゴールドは回転盤を回転するとダイカイオーの顔も回転し、止めると“西”と止まり、ダイカイオーの顔も止まると、ダイカイオーは腰に装備した海老折神の尾ひれの扇を装備した回避形態“ダイカイオーニシ”に形態を変化した。

【オッシャー！ニシイ！！】

「あっ、変わった！」

「それに武器を装備してますよ！」

スバル達が驚く中、大ナナシ連中はダイカイオーに向けて矢を放つ。ダイカイオーニシは大ナナシ連中が放ってくる矢を扇で軽々と受け流していく。扇で矢を跳ね返している中、ゴールドは調子に乗っているのか、鼻歌を歌っていた。

「ふんふんふんふんふーん、よつとおあ！」

しかし、ゴールドは矢を跳ね返していることに夢中になっていたからか、接近してきた大ナナシ連中に気づかないでいて、とうとう大ナナシ連中が接近し、槍を使って動きを止められてしまう。

「おい！離せよ！離しやがれ畜生！」

ゴールドは大ナナシに向けていうが、そもそも敵であるダイカイオーを離すわけがない。4体の大ナナシ連中に動きを止められてしまい、身動きが出来なくなり、他の大ナナシが弓を構えてダイカイオーに向けている。

「あ、やばいよ……！」

「何接近を許してんだよあいつ……。」

大ナナシ連中に動きを止められてしまったダイカイオーニシにヴィータは呆れていた。このままダイカイオーニシは大ナナシ連中の矢に倒されるかと思ったが、弓を構えていた大ナナシ連中に猿折神と熊折神が現れ、熊折神は大ナナシ連中に突進攻撃し、猿折神は身軽な動きで大ナナシ連中の弓を無理やりはがさせる。そしてダイカイオーニシを止めていた大ナナシ連中は、龍折神の水流、そして亀折神のひれで攻撃してダイカイオーニシから引き剥がさせる。

「おっ！お前ら、ありがとよっ！」

「源太ア！遊んでないでさっさと戦え！」

「まったくうるせえな流ノ介はあ、やらあいいんだろ、やらあ！ダイカイオー、南！」

ゴールドはブルーに悪態を言いつつも回転盤を回転し、ダイカイオーの顔も回転する。そしてゴールドが回転盤を止めるとダイカイオーの顔も止まり、ダイカイオーは海老折神の触覚部分が刀となった武器を両手に装備し、“ダイカイオーミナミ”へと形態変化を成し遂げた。

【ナントー！ミナミィ！！】

「また変わったの！」

「もう、いくつ変われば気が済むの……。」

ダイカイオーの形態変化を見ていたティアナは頭を押さえながらも呟く。そしてダイカイオーミナミは周りにはいる大ナナシ連中を刀を使って斬る。体制を立て直した大ナナシ連中は槍を再び構え、ダイカイオーミナミに向け突き刺してくるが、ダイカイオーミナミは刀を操り受け流しては斬っていき、周りの大ナナシ連中を一掃する。

「そろそろ終わりとすつかあ！海老刀！大名おろし！」

ダイカイオーミナミは刀にモチカラを込め、残った大ナナシ連中を一気にさばくと大ナナシ連中は爆発して消えていき、大ナナシ連中は全滅した。

「・・・どーやら終わったみたいだな。」

「うん！そうだ」

「よし！最後に、勝利の一本締めだあ！この場にいる皆さんも一緒にどうぞ！」

スバルが喜びに満ちた声を上げようとした矢先にゴールドが先に声を上げた。ちなみのこのゴールドの声はスバル達、そしてなのは達にも聞こえている。

「えっ、一本締め？」

「ま、まさか・・・私達も・・・？」

「一本締めかあ、久々だなあ。」

「久しぶりにやるのも、いいわね。」

「御手を拝借！よーいっ！」

ゴールドの合図により手を合わせるように叩いて一本締めをしたのだが、一本締めをやったのは文瑠以外のシンケンジャーのみだった。

「これにて、あいつけん、らくちやあくツ！っておい！なんでおめえら一本締めやんねえんだよ！さびしいんじゃないやねえかよおい！」

「源太、いきなり言われたらどうしてやればいいか、わからないでしよ？」

「まあまあ、次の機会にしようぜ、源ちゃん。」

ゴールドはなのは達が一本締めにやらなかったことが不満だったのか、文句を言ったがピンクとグリーンになだめられた。

『ミッドチルダ 機動六課 部隊長室』

この後、機動六課に戻ったなのは達と文瑠達は機動六課に戻り、なのは達は報告書などの提出、文瑠達は源太との再会を喜ぶはずだったが、その前に文瑠と源太は部隊長室に向かう予定となっている。

ちなみになのはは“聖王医療院”に行っており、部隊長室にははやて、シグナム、ラインがいた。

「シグナム、源太さんはいつ来るんや？」

「志葉の報告ではもう少しのことです。」

源太と丈瑠はすでに部隊長室にいる予定ではあったが、とある事情により遅れていた。頼んでおきながら遅れる行為は、本来ならば許されざる事だったが、それをはやては「初めてミッドチルダに来たから戸惑っているんだろうから多少遅れてもいい」とシグナムに伝え、丈瑠達に連絡を入れていた。丈瑠もそれに承諾し、現在に至る。

「・・・入るぞ。」

「ええで。」



予定の時間から5分位立つと、扉からノックが聞こえ、丈瑠の声だと気づいたはやては部屋へと招き入れる。扉が開かれるとそこには私服姿の丈瑠といかにも寿司職人らしい服を着た源太がそこにいた。

「……すまない、少し遅れた。」

「こんぐらいなら大丈夫や、貴方が梅盛 源太さんですね。」

「おうよ！あなたは……ここの部隊長の秘書か？」

源太ははやてに名前を呼ばれると相槌を打ち、源太の発した一言が微妙な空気を生み出してしまった。その言葉を聞いたシグナムは顔をしかめ、ラインはきよんとし、はやては苦笑いを浮かべ、丈瑠はやってしまったといわんばかりに顔を背けた。

「……あり？どうしちゃったの皆？」

「……源太、言い忘れたが。」

「ん、言い忘れたってことって？」

「……お前の目の前にいる女性が、この部隊長だ。」

「ふうん……うえ!?!」

丈瑠の言葉に、間を置きながらも驚きを見せる源太は、凄い勢いで丈瑠の方を向く。

「たっ丈ちゃん、それ……ホントかい?」

「残念やけど、秘書じゃなくて私がここの部隊長の八神 はやてです、よろしくお願いします。」

「……マジ?」

「マジです。」

はやての言葉を聞くに否や、ゆっくりと振り向きつつも氷付く源太は、しばらくたった後丈瑠の肩を掴み、あるうことははやて達に背を向け小さな声で話した。

「おいおいおい丈ちゃん！部隊長がこんな可愛い子ってどーいづことだよ！」

「俺に聞くな！信じたくない気持ちもわかるが事実だ。」

「つーか若すぎだろ！？俺あもつと歳のいったじいちゃんかと思つてたぞ！」

「・・・ああ見えてもまだ十代後半と聞く、何せ、子供の時から働いていたらしいからな・・・。」

ひそひそと話しこむ丈瑠達を不審に思うはやて達の視線を受けつつも丈瑠は源太に簡単で、的確な情報を伝えた。

「あのお・・・どうかしました？」

「ん？ああちよつと待っていてくれ！・・・丈ちゃん、それ本当かよ？」

「・・・ああ、もつとも、俺もこの間知つたばかりだがな。」

文瑠の言葉に顔をしかめる源太に、文瑠は言い続けた。

「源太、一応言っておくが……。」

「わかってるよ、あのはやてって女の子も管理局の被害者って事だろ……？安心しろって、あの子達に詰め寄る気なんざこれっぽっちもねえからよ。」

「……ああ、頼んだぞ。」

「すみません、そろそろ話を進めたいんですけど……。」

「おおっとすまねえ！今終わったからよ！」

文瑠と源太が話し込んでしまったせいか、話が進まないことに苛立ちを覚えたはやては文瑠達に声をかけると源太が振り返り、悟られぬよう明るく喋りだす。

「改めて、俺の名前は梅盛 源太！知っていると思うけど六人目のシンケンジャーだ、よろしくな。」

「はい、それでは少しばかりお話したいのですが・・・ちょうど源太さんも話がしたいってシャマルから聞いておりますし」

「あ・・・いや、それなんだけどよぉ・・・一ついいか？」

「はい、いいですよ？」

「おま・・・じゃなくて部隊長さんよぉ、小さい頃から管理局にいたって聞いたんだが、本当か？」

源太の言葉に、部隊長室の空気は変わった。源太の質問は素朴な疑問でもあったが、はやて達にとってみればきつい物でもあった。時空管理局は魔力素質さえあれば子供でも入隊できる。しかしそれはシンケンジャー、いや他の世界では考えられない常識でもあるがため、源太ははやてに聞いた。

「・・・はい、本当です。」

「・・・そうかい。」

「やっぱり気になります？こんな若造がここの部隊長を務め」

「いや、そんなこと聞くつもりはなかったんだ、ただ疑問に思っただけでよ……。無理して言う必要はねえ。」

「そうですね……ほんなら話進めましょ。源太さんの民間協力者としての手続きもしたいし、それにいろいろと聞かないといけないこともあるので。」

「おう、わかったよ。」

源太ははやてが小さい頃から管理局にいた事実を知ると、自虐的に話すはやてを止めて無理やりこの話を止めた。はやてもこれ以上不和を生みたくなかったのか話を変えて近くにある来客用のソファへと案内した。

そのころなのはは聖王医療院で、今回保護された女の子の様子を見に行っていた。女の子は静かに眠っており、なのはは売店で買ったと思われるウサギのぬいぐるみをそつと女の子の横に置く。

「ママ……。」

「……大丈夫、ここにいますよ。」

女の子は寝言なのか、さびしそうに呟くとなのは優しく女の子の頬を撫でてやり、しばらく女の子の元にいることにした。

『??? 三途の川 六門船』

場所を変えて三途の川の六門船。その船の奥ではシタリはスカリエッテイから新たに譲ってもらった試験管と装置をいじくっていた。ちなみに隣には最初にもらった試験管と装置があり、それにはアヤカシを復活させている最中だ。

「ふう……これでよしと。やはりこの魂を扱うのは難しいねえ。」

シタリはさっきまでいじくっていた試験管を眺めながら呟く。すると後ろから何者かの声がかかる。

「シタリ殿、ここに居られましたか。」

「おお、「イサギツネ」じゃないかい、お前さんは地上に出ないのかい？」

シタリに話しかけてきたのはイサギツネ。過去にシンケンゴールドに倒されたアヤカシで、いくつもの術を操ってシンケンジャーを苦しめたアヤカシだ。

イサギツネは自分の髭のような物を撫でながらゆっくりと試験管に近づいていく。

「それもそうですが、私は三途の川の中で我が友、「ヒャクヤツパ」と出会い、いつか復活して二人の手でシンケンジャーの息の根を止めると約束をしております。ですからヒャクヤツパが復活する時までシタリ殿の手伝いをさせていただきます。」

「そうかい、そりゃあ助かるよ。」



ヒャクヤツパというアヤカシは、無数の刃を操ってシンケンジャーを苦しめたのだが、シンケンレッドとゴルドの連携により敗れている。イサギツネとヒャクヤツパとの関係は言わば親友同士。二人はシンケンジャーに倒された屈辱を晴らすため、今まで魂になってまでも三途の川で作戦を練っていた。

イサギツネはシタリが先ほどいじくっていた試験管を眺めた。

「シタリ殿、本当にこの者を復活させる気でしょうか？あの“はぐれ者”を？」

「なあに、ちよつとした暇つぶしさ。失敗しても後悔はしないよ。」

「ふむ・・・、しかし成功したら？」

「その時は、その時さ。それに、シンケンレッドと対等に戦えるのは、こいつぐらいだからねえ。」

シタリは試験管に背いてゆっくりとこの場を後にし、イサギツネも同行した。シタリがさきほど調整していた試験管の中身は、人の形をした何かだった。

### 第三十幕 六課と侍の休日 伍（後書き）

作「今回は海老折神について紹介です。」

えびおりがみ  
海老折神

- ・全長：80.7 m
- ・全幅：43.4 m
- ・全高：39.4 m
- ・重量：2000 t
- ・最高速度：650 km
- ・出力：1500万馬力（データは巨大時）

ロブスター  
海老型の折神。メインカラーは金色と藍色。基本構造は完成していたが、当初は活動用のモチカラが不足して動くことさえできず、丈瑠・流ノ介・茉莉・千明・源太の「活」のモチカラを受けたことで他の折神のように戦闘に参加することが可能となった。当日のこととはの誕生日であったため、平成21年の同じ日が誕生日となっている。

得意技は両手から強力なパンチを繰り出したり、挟み込んだ敵を投げ飛ばす「海老ばさみ」や円盤型の斬撃を飛ばす「太巻き光輪」。ちなみに海老折神の鳴き声は、やはりウルトラマンの「科学特捜隊」の通信音に酷似している。

また「変」のモチカラで後述のダイカイオーに侍変形が可能。

源太は「エビゾウ」と命名したが流ノ介に「由緒正しい歌舞伎役者の名前を使うな!」と激怒された。なお、千明からは「エビちゃん」と呼ばれている。

ダイカイシンケンオーに合体の際は上半身の大半を占める。

作「予想以上に長くなった……。それともうわかっていると思

ますが、イサギツネ+ヒヤクヤツパをシンケンジャーとなのは達と戦わせることを決めました。

次回のゴーカイジャーがホント楽しみです。次回予告見ただけで嬉しさあまりに叫んでしまいましたから・・・(汗)「

### 第三十一幕 命の形（前書き）

作「正直サブタイトル要らなくなってきた気がする。」

20:30頃修正しました。

## 第三十一幕 命の形

『ミッドチルダ 機動六課 文瑠の部屋』

しばらくして、源太の民間協力者の登録が済み、文瑠と源太は部屋に戻るとすでに流ノ介達が座って待っていた。

「殿、おかえりなさいませ。」

「よっ改めて、ひっさしぶり源ちゃん！」

「久しぶりだなあお前ら。いなくなったと聞いた時にはほんっと心配したんだぜ。ま、そんなことは置いといて、丈ちゃん。この世界のことなんだがよ……。」

「……ああ。あの時はあまり話せなかったからな。今から俺達が知っていることを話す。」

本来ならばへりの中で詳しく言うはずだったが、その時は管理局員であるシャルマルがいたため詳しく言えず、さらに襲撃者の狙撃が邪魔し、とても話せる状況がなかった。そのため、余程のことがない限り管理局員が入ってこない自室で話すことにしたのだ。

丈瑠は源太にこの世界に来てからのことを全て話した。自分がこの世界に来た方法、彼女達（機動六課）との出会いと源太が出会うまでの流れ、少ない情報ではあるがこの世界の法律と管理局という存在、そしてその管理局が子供たちが平然と現場（戦場）にいるを管理局が認めている事、ついでになのは、フェイト、はやての三人が子供の時から管理局に所属して現場にいた事となのはが大怪我を負った事・・・、だがなのはは厳しいリハビリに耐え、再び現場に復帰した事。自分が知っている限りのことを全て源太に教えた。

「・・・これで全部だ。」

「・・・なんつーか、納得出来ねえな。」

「だが、これがこの世界の法律だ。納得は出来なくても、従うしかない。」

今丈瑠達はこの世界で活動しやすくするため、民間協力者という形を取っている。しかしそれは管理局に加担するのではなく、外道衆と戦うためだ。自分達の“モチカラ”はこの世界にとってみれば“魔力”に似た関係で、“レアスキル”と言っても過言じゃない。当初丈瑠は管理局に協力的ではあるが、月日が立てば立つほどこの世界の法律や管理局という存在に気づき始め、不信感を募らせており、いつかは一人で外道衆と戦おうと考えてはいたが、シンケンジャーがそろった時に管理局から抜け出す事を止め、結局のところ管

理局に協力的な姿勢を見せ続けた。しかしそれは管理局から家臣達を守るための苦肉の策でもある。もし管理局と対立したまま外道衆と戦うにしても守るべき人間である管理局からの攻撃もあり得るし、最悪の場合、様々な理由をつけられ終始利用され続けるかもしれない。そんなことを認めず、また家臣達にさせないためにも文瑠は管理局に形だけは付いていくことにした。

「それはそうだけだよお、この話を聞いちまった以上、この機動六課も信用できねえかもな。」

「・・・そうか。まあ、無理に信じるとは言わない。ただ、俺が言えることは少なくとも、管理局よりこの機動六課だけは信じられる。それだけだ。」

「そうそう。最初、俺も疑ったけど話してみるといい奴ばっかだしな。」

「この部隊長も悪い人じゃないし、いくら管理局が信じられなくても、この人達は信じて大丈夫だと思う。」

「なんだったら、一度話してみれば、源ちゃん？」

「まあ・・・考えとくわ。」

「それはそうと、ダイゴヨウはどうしたの？」

「・・・あ。」

そのころダイゴヨウは、未だに屋台にぶら下がって源太が来るのを待っていた。

「・・・親分、おせえなあ・・・。」

ダイゴヨウは、綺麗に光る月をじっと眺めつつ、残業の帰りで通る管理局員が来れば提灯のふりをしつつ、源太が来るまで静かに待っていた。そして源太が来たのは今から30分後だった。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭』

翌日、丈瑠達はこの世界に来てから早く起きるようになり、シグナムと共に“早朝稽古”をやるのが日課になってきた。丈瑠達は六課支給の体育着を着て、竹刀を片手に持って稽古場所の裏庭に集まっている。早く起きることに丈瑠達は慣れていたが、千明とことはだけはまだ慣れてないのか、眠そうにしている。シグナムと丈瑠達が裏庭で集まるとシグナムは丈瑠達を見たが、顔をしかめた。



「・・・一人、足りないな。」

シグナムが言う一人は源太のことだ。源太が六人目のシンケンジャーだということはシャマルから聞いていて、源太の腕前を密かに楽しみにしていたのだが、その源太がいないことに気づく。

「ああ、源太か。あいつは家臣じゃないからな。」

「何？」

「丈瑠と源ちゃんって昔から幼馴染でさ、俺達みたいに家臣じゃないんだ。」

「あいつが別行動を取るの俺達からすれば、別に珍しい事じゃない。それに、いつも俺達だけで稽古をしている。」

「そうか、今回は大目に見るが、戦士足る者、稽古をさぼることはいただけないな。次からは来てくれるよう頼んでくれ。」

「わかった。伝えておく。」

丈瑠はシグナムの伝言を受け持つと稽古を始めた。

しばらくして稽古が終わり、丈瑠達はフォワード達と一緒に隊員舎に向かって歩いていた。その途中、屋台を見ていた源太と合流して一緒に戻ることになった。源太も加わったことで少し会話が弾み始めた時、源太はフォワード達に話しかけてきた。

「それよりさ、なんでおめえ達管理局にいて戦ってたんだ？無理して戦わなくてもいいんだぜ？」

「えっ、私……ですか？」

「いや、お前……じゃねえんだ。その……小っちゃい子に聞いてんだ。」

「えっ、僕達ですか？」

「おう。ここに来てからずっと気になってたからよ。あ、嫌なら嫌でいいんだぜ？」

源太はエリオとキヤロに管理局にいる理由を聞きだした。源太は自分達がいた世界でも軍で少年兵がいるということは知っている。そのためあえてスバルとティアナは聞かず、10歳位のエリオとキヤロに話を聞くことにした。

「はい。僕……、孤児でフェイトさんに助けられたんです。」

「フェイト？」

「僕達の部隊の隊長で……母親のような存在です。助けられる前は誰も信じられることが出来ず、人間不信になっていた時、フェイトさんが体を張って説得してくれたんです。」

「私もそうです。私の場合は強い力持ってて、部族から追放されちゃったんです。その後管理局に保護されて、フェイトさんに保護されたんです。私は、居場所をくれたフェイトさんの力になりたいって入ったんです。」

「ふーん……。で、そのフェイトってやつはそのことを許したのか？」

「もちろん反対しましたね。でも僕達はどうしても助けってくれたフェイトさんの力になりたかったんです。だから今、こうして管理局にいるんです。」

エリオとキャラ口は時に寂しく、時に苦笑いしながらも源太達に管理局に行った理由を話した。このことについてはスバルとティアナも知らなかったようだ。

「・・・そういっただったんだ。」

「お前達、ちっせえのにつしっかりしてんなあ。」

「そ、そんなことないですよ。」

千明に褒められたエリオとキャラ口は戸惑いながらも顔を横に振って言う。

「いや、そんなことはねえぞ、なあ流・・・」

「う・・・うう・・・。な・・・なんていい子達なんだあああ・・・。」

「ほらほら、そんなに泣かないの、流ノ介。」

源太は流ノ介に顔を向けながら言うも黙ってしまふ。理由としては。エリオ達の話聞いて流ノ介の感情に触れたのか、本気泣きして茉莉に慰められている流ノ介がいたからだ。

「・・・姐さん、スイッチ入っちゃったよ。」

「は、ははは・・・。」

茉莉が流ノ介を慰めている姿を見て千明が呟き、フォワード達は苦笑いを浮かべていた。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂』

その後フォワード達は制服、丈瑠達は私服に着替えを済ませて食堂で食事を取っていた。ちなみに源太も普段は寿司職人の衣装で過ごしているが、珍しく私服を着て食事を取っていた。

丈瑠達が座っている席は珍しくフォワード達の席と近く、千明と

ことはフォワード達の席に移って食事を取っていた。

「へえー、丈瑠さんと源太さんって幼馴染だったんですか。」

「おう、まあな。ちっせえ時はよく丈ちゃんと遊んだっけなあ。」

「ま、源太が来るたびにジイが追い払ってたな。」

「えっ、どうしてですか？」

フォワード達ジイこと彦馬が小さい頃源太が来るたびに追い払っていたと聞くと、手を止めて丈瑠達を見る。すると丈瑠達の席で食事をしてた彦馬が手を止めて口を開く。

「昔、目を離れた際に源太が志葉家に侵入してきては殿に遊びに来ていたからな。」

「し、侵入！」

「ほっ本当なんですか、源太さん！」

「おう、じいちゃんに見つかっては逃げて見つかっては逃げての繰り返しだったなあ。あん時のじいちゃんなんか、すっげえ怖かったぜ。」

「それはお主のせいであろう・・・。」

源太は昔を振り返りながら言うが彦馬はため息をついて食事を続ける。すると食堂の外が騒がしくなる。

「あれ、どうしたんだろう?」

「何かあったんじゃないの?」

騒ぎに丈瑠達とフォワード達は騒いでるところに行こうとするが、先に騒ぎの原因が食堂に入ってきた。その原因は、迷うことなく源太に飛びついてきた。

「おーやぶーん!助けてくださいえー!」

「だ、ダイゴヨウ!どうした!」

源太に飛びついてきたのはダイゴヨウであった。しかしその体は急いで逃げてきたのかぶつかった後が微かに見えていた。

「な、何これ!新型のインテリジェントデバイス!？」

「何でえそのインなんとかデバイスってえ!？オイラは秘伝提灯ダイゴヨウってんでえ!!!ってこんなことしてる場合じゃねえ!親分、かくまってくだせえ!!!」

「おっおいおいどうしたんだよダイゴヨウ!？そんなに慌ててさあ、とにかくおちっ」

「待ってくださいー!」

「うわぁ・・・来たあ!？」

ダイゴヨウを新型のデバイスと勘違いしたティアナだが、ダイゴヨウがすぐに否定するも、さらに騒ぎの原因が食堂に入ってくると



ダイゴヨウは声を震わせながら源太の後ろに隠れる。丈瑠は騒ぎの原因を見ると呆れたようにため息を吐く。

「シャーリー、お前……。」

「ちょっとスキャンするだけなのに……。なんで逃げるんですかあ？」

「嘘だー！その眼はぜってえオイラを解剖するに決まってるー！」

「だからそんなことはしませんよおー！」

シャーリーは涙目になりながらも潔白を視聴するがダイゴヨウは一切信用してない様子だ。丈瑠は呆れながらもシャーリーを見る。

「そういえば、俺達の部屋って鍵かけたよな？なのになんで……？」

「あ、もしかしてダイゴヨウ、屋台にいたんじゃないの？」

「……そういえば、ダイゴヨウお前「屋台はオイラが守る」と言

って残ってたよな。」

「そ、そうなんですけど・・・暇になっちまってちょっと飛んで探検してたらあ・・・。」

ダイゴヨウは源太に隠れながらも今までの経緯を離し始めた。

源太と別れたダイゴヨウはいつものように屋台にぶら下がって源太の帰りを待っていたのだが、誰も来ないため暇となったので少しだけならと思い、ダイゴヨウは屋台から離れて飛んだところシャーリーに見つかってしまい、シャーリーは“最新型の自立出来るデバイス”と勘違いしてしまい、いろいろあつて追いかけてこになつてしまったのだ。

そして今に至る。

「・・・事情はわかった。だがダイゴヨウを解剖するのは許さねえからな、あんた。」

「解剖しませんってばー！少しスキャンして中身を見るだけです！」

「はあ・・・。シャーリー、諦める。」

「そ、そんなあー・・・。」

シャーリーはダイゴヨウを物欲しそうな子供の目をしながら見ながらも、がっかりしながら食事を取るため受取所に向かった。

食事を済ました丈瑠達は隊員寮に戻ろうとした時、後ろからなのはに話しかけられる。

「丈瑠さん。ちょっとお願いがあるんだけど……。」

「なんだ？」

「昨日保護した女の子が心配で……。付き合ってくれませんか？ シグナムさんも付き添いで来るんですけど……。」

「護衛ならシグナムだけでも十分だろう。わざわざ俺が行く必要もない。」

丈瑠はなのからは説明を受けるもシグナムがいるなら自分が必要ないと思った。実際丈瑠とシグナムは両方とも腕を認めており、互いに戦士として信用しているからだ。

「それはそうなんだけど……。ほら、外道衆が来てもいいように  
と思っ……。」

「……。それもそうだな。」

「お、丈ちゃん。保護した女の子に会いに行くのか？なら俺も行か  
せてくれよ。俺も気になってよお……。」

丈瑠となのはが話していると源太が聞きつけて割り込んでくる。  
保護した女の子を最初に見つけたのは源太で、大丈夫かどうか不安  
だったようだ。

「うーん……。大丈夫かなあ……。」

「私は別に構わないぞ。」

なのはが源太も連れてても大丈夫か悩んでいた時、シグナムが来て  
話を聞いてたのか、源太が来るのを了承した。

「あ、シグナムさん。」

「テストロッサから車を借りるが、乗員的にも大丈夫だ。」

「お、そうかあ？そんなら話がはえーな、早速行こうぜえ。」

「そう慌てるな。今から車の準備をする。少し待っていてくれ。」

シグナムはそう言うのと離れていき、文瑠達はガレージの方に向かった。

『ミッドチルダ 車の中』

ミッドチルダの車道を文瑠と源太、そしてなのはがシグナムが運転する車に乗って聖王医療院に向かっていた。車の中でなのははシグナムに念話で話しかける。

「『シグナムさん、源太さんを車に乗せて本当に大丈夫なんですか？』」

「『それについては問題ない。志葉もいる、よほどのことがない限り行動を起こさないだろう。』」

「『うん・・・そうですね。』」

なのはは念話を切ると後部座席に座っている丈瑠と源太をちらっと見る。丈瑠と源太軽く話をしながらも、窓から外の景色を見ている。源太は物珍しそうに窓の景色を眺めていて、丈瑠は表情に顔を出してないが、おそらく場所を覚えようとしていると思う。なのははそれを見ると少し安心したのか、顔を前に戻すとシグナムの前にモニターが現れる。傍から見れば危ないが、シグナムは慣れているのか平然としていた。そして現れたモニターに映っていたのは、シスターのような服を着た女性だ。

「騎士シグナム！聖王教会のシャツハ・ヌエラです！」

「どうなされました？」

「・・・なんだ？」

通信してきた相手の名前はシャツハ・ヌエラで、声を荒げていることからどうやら焦っている様子だとわかった。

「すみません。こちらの不手際がありまして……。少し目を離した際にあの子が姿を消してしまいました！」

「あの子っておい……。！」

「ねえ！その子つてもしかして昨日保護した……。！」

「はいっ！事情は合流した時にお伝えします、急いでください！」

シャツハは通信を切り、シグナムは急ぎ目に聖王医療院に車を走らせた。

『ミッドチルダ 聖王医療院』

なのは達が聖王医療院に付くと、まず最初に目にしたのは、静まり返った医療院と先ほど通信してきたシャツハだった。

「シスター、状況は？」

「先ほど医療院の職員と入院してた患者の避難が完了しました。」

「おいおい、たかがちっちゃい女の子だけじゃねえかよ、そこまでする必要がねえだろ？」

「すみません、説明する暇がありません。探すの手伝ってください。」

丈瑠と源太はたかが小さな女の子をまるで危険物を扱うような態度を示すシャツハに不信感を覚えたが、ひとまずシャツハの指示に従い女の子を探すことになり、この医療院の中がよくわからない丈瑠と源太は外を担当し、なのはとシグナムとシャツハは中を担当することとなり、女の子の搜索が始まった。

なのは達と別れた丈瑠と源太は外を探し始めた時、歩きながら話し始めた。

「なあ丈ちゃん、なんかおかしくねえか？」



「ああ、いくら子供に対して、「ここまでするのはおかしい。いくら事情があつたとしてもやり過ぎだ。」

「だよなあ……。早く見つけねえと、あの子がどうなるかわかんねえぞ……。！」

「ああ。とりあえずシャツハという女性より早く見つけるぞ。」

丈瑠と源太は「地理のわからない二人は一緒に行動した方がいい。」というなのはの助言に従い、走りだして女の子を探し始めた。その際丈瑠が「何事もなければいいのだが……。」「と小さく呟いた。探し出してから約5分が立ちそうになっていた。丈瑠と源太は走りながらも声をかけながら女の子を探し続けた。

「おい！だいじょーぶかー！居たら返事してくれー！」

「……。ツ！源太……。」「

「んだよ丈ちゃ……。んんっ？」「

丈瑠は何かに気づくと源太に声をかけて走るの止めさせる。源太は丈瑠に不満を漏らしながら丈瑠が見ている方向を見ると、そこには中庭を歩いていた小さな女の子がいた。

その女の子は金髪で、ウサギのぬいぐるみを大事そうに抱えていてゆっくりと歩いていた。その姿を見て丈瑠と源太はほっとした。

「……どうやら無事のようにだな。」

「ああ、ほっとしたぜ。さ、早く行こうぜ。」

丈瑠と源太は歩きだし、女の子に不信に思われないようにして歩いてゆっくり近づいた。しかし、女の子に近くにいきなり女性が着地してトンファーのような武器を構えていた。その女性はシャツハで、先ほどとは違う格好からするとバリアジャケットか騎士甲冑なのだろう。しかし丈瑠と源太はそのことに関しては全く気にしてなかった。シャツハは手に持っていたトンファーのような武器で女の子に襲い掛からんとしていた。丈瑠はとっさに獅子折神を取り出し、シャツハに向けて投げつけた。すると獅子折神はアニマルモードとなり、シャツハの前に出て襲い掛かる。

「ッ！ なっ何！」

シャツハは突然現れた獅子折神に驚きながらも振り払おうと武器を振り回す。しかし武器は獅子折神に全く当たらず、動き回ってシャツハをかく乱した。その間源太は女の子の前に立ち、獅子折神はシャツハから女の子を引き離している時に丈瑠はシャツハの前に立つ。すると獅子折神は頃合いだと見計らうとシャツハから離れて丈瑠の手の元に戻っていき、エンブレムモードに戻って丈瑠は折神をポケットの中に戻す。

「貴様、どういっつもりだ？」

「そっちこそどういっつもりですか！ その子は危険なんです！」

「はあっ？ 勝手に決めつけんじゃねえよ、危険なのはそっちの方だろ！」

丈瑠はいつでも戦えるようにシンケンマルを出す準備をしており、源太は女の子の前を守るようにシンケンゴールド専用武器“サカナマル”を出す用意をしている。シャツハは丈瑠と源太を睨みながら

武器を構える。

「黙りなさい、その人造魔導師素体、どんなに危険があるかわかってるんですか！」

「人を勝手に作りもんみてーに言うんじゃねー！！例えそうだとしても子供に手を出すこと自体大きな間違いだろうがあー！！」

「っ・・・何も知らない一般人が、口を慎みなさい！！」

シャツハが言った一言に、文瑠はシンケンマルを出して構える。

「確かに俺達は一般人、この子について何も知らない。」

「・・・でしたら」

「だが、これだけは言える。“管理局は信用できない”な。」

丈瑠はシャツハの言葉を聞いて管理局に絶望を感じたのか、以下のようなことを言い、シンケンマルを肩に乗せて構える。

シャツハと丈瑠の間に一触即発の空気が流れ始めた時、間に誰かが来て止めが入る。

「志葉、シスター……やめる。」

「シグナム……。」

「ですが……！」

止めに入ったのはシグナムで、危険を感じたのかレヴァンティンを起動させて騎士甲冑を身に着けている。しかし丈瑠とシャツハは構えを解こうとしない。

「シスター、先ほどの言動は明らかに貴女に非がありますどうか御慎みを。」

「ですが……。」

「確かに彼らは一般市民には変わりありません。ですが、彼らは信用できません。」

シグナムとシャツハの間に沈黙が生まれ、少し経つとシャツハは武器を下げた。

「……………わかりました。ですが、その人造魔導師素体は」

「それもどうかと思います。」

シャツハが続きを言おうとした時、なのはが源太の後ろから来て割り込んでくる。源太は管理局員であるなのはを警戒してるが、丈瑠はシンケンマルを降ろす。

「源太、もういい。」

「たっ丈ちゃん……………でもよお……………」

「大丈夫、ここは私に任せてください。」

源太は丈瑠に言われるなり動揺したが、源太は渋々女の子から少し離れ、なのは女の子と同じ視線になるようにしゃがむと女の子に話しかける。

「怖かったねー、大丈夫？」

「あ……………」

「…………初めまして、私の名前は高町　なのはって言います。お名前、言えるかな？」

女の子は先ほどのせいかわかり怯えていてなのはの言葉に動揺するが、なのはが優しく話しかけてくれたおかげか、警戒を解いたみたいらしく、小さな口をゆっくりと動かし始める。

「…………ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオっていうんだ。可愛い名前だね。」

ヴィヴィオと名乗った女の子は、なのはに名前を言つと、丈瑠と源太を見るように顔を上げる。

「この人は近くににいる人は梅盛 源太さん、そして奥にいる男の人は志葉 丈瑠さんね。」

「お、おう。よろしくな、ヴィヴィオちゃん。」

「怖がらせてすまなかつたな。」

丈瑠はシンケンマルをしまつとヴィヴィオに近づき、源太はヴィヴィオの目線に合わせるようにしゃがむ。そしてヴィヴィオは再びなのはを見る。

「ねえ、こんなところで何してたのかな？教えてくれる？」



「・・・ママを探してたの。」

ヴィヴィオは顔を俯かせながら小さく呟いた。

「・・・そう、じゃあ一緒に探そっか。お兄さん達もお願いしてもいいかな？」

「おい、俺もか・・・。」

「まあまあ、いいじゃねえかよ丈ちゃん。不安がらせちゃまずいだろ、なっ？」

なのはは丈瑠と源太を見ながら言つと丈瑠と源太は戸惑つたが、ヴィヴィオを放っておくにもいかず、成り行き上仕方がない事とはいえ丈瑠は気が進まなかったが、探すこととなった。

しかしその結果はすでに見えており、ヴィヴィオと呼ばれた女の子にとって酷な結果になるうとは、丈瑠達は知らなかった。

### 第三十一幕 命の形（後書き）

作「今回はダイカイオーについて紹介します。」

ダイカイオー

海老折神が「変」の電子モチカラを受けて侍変形した侍巨人。ゴルドが単独操縦する。操縦席の海老ディスクを回転させることで東・西・南・北の電子モチカラを持つ4形態に変形（正確にはフェイスチエンジ）が可能。変形後、それぞれの形態にちなんだセリフを発する。

ダイカイオーヒガシ

- ・全高：56.7 m
- ・全幅：48.9 m
- ・全厚：25.4 m
- ・重量：2000 t
- ・最高速度：650 km
- ・出力：1500万馬力

海老ディスクが「東」を示し、「光」を電子モチカラに変換した形態。セリフは「とぉー（東、トウ）とぉー！ヒガシ！！」。武器を用いず、格闘戦を得意とするダイカイオーの基本形態。必殺技は海老ばさみを武装して繰り出す連続パンチ。「海老ばさみ本手返し」。

ダイカイオーニシ

海老ディスクが「西」を示し、「風」を電子モチカラに変換した形態。セリフは「おっしゅー（西、シャー）！ニシ！！」。海老折神の尾ひれおよびダイカイオーの腰パーツが分離した扇で相手の攻撃を受け流す回避形態。必殺技を持たない為か作中で使用したのは

2回のみ。

ダイカイオーミナミ

海老ディスクが「南」を示し、「熱気」を電子モチカラに変換した形態。セリフは「なん（南、ナン）と！ミナミ！！」。海老折神の触覚部分が分離した刀の二刀流による隙のない攻撃を得意とする。必殺技は「海老刀大名おろし」。

作「今回の話の題材は源太がどう彼女達を信用するかがポイントになると思います。それとヴィヴィオの絡みも重要になると考えてます。ちなみに予言については考えてます。」

### 第三十二幕 予言（前書き）

作「小説書いていると自分の駄目な点がだんだんとわかってきますね。しかし、それを改善しようとして日々努力しています。もし悪い点がありましたら報告お願いします。」

18:45に修正しました。

## 第三十二幕 予言

『ミッドチルダ 機動六課 ロビー』

聖王医療院で起こった騒動もなんとか収まり、医療院で出会った人造生命体の女の子、“ヴィヴィオ”は機動六課で保護することとなり、文瑠達は機動六課に戻るようになった。

文瑠達はヴィヴィオを連れて車から降りて機動六課の中に入った。ちなみにシグナムは車を駐車場に止めるためいない。

「・・・ジイ、今帰ったぞ。」

「殿、おかえりなさ・・・いませ？」

文瑠達が帰ってくると彦馬が出迎え、彦馬が最初に目にしたのはなのはの横にいる、ウサギのぬいぐるみを大事そうに抱えたヴィヴィオだ。

「と、殿・・・これは一体・・・。」

「・・・ああ、説明する。少し場所を変えるぞ。」

本来いるはずもない子供を連れてきた丈瑠達を見て驚く彦馬に、丈瑠は彦馬を連れ、家臣達にも話すことがあるため隊員寮に向かう途中で話すことにした。

『時間をさかのぼり、聖王医療院』

シャツハの“いざこざ”が収まり、ヴィヴィオとの出会いを果たした丈瑠は、ヴィヴィオに親を探して欲しいと頼まれた丈瑠は、先ほどのいざこざにより気は進まないものの、管理局員であるなのとは、聖王教会のシスターであるシャツハ（ちなみにこの時点ではまだ管理局員と勘違いしている）に頼むことにした。源太はというとミッドチルダに来てまだ二日しか立っていないためどうすればいいかわからず、丈瑠に言われてヴィヴィオと共に中庭で待つことになった。

源太とヴィヴィオからある程度離れると、先にシャツハを見つけた丈瑠は話しかけようとしていたが、先にシャツハから話があると言われ、源太とヴィヴィオから聞こえない位置まで離れるとシャツハは立ち止まって丈瑠の方を向くと、頭を下げた。

「……先ほどは、申し訳ありませんでした。」

「……どうして謝る。」

シャツハは丈瑠に顔を向けるなり謝罪するが、丈瑠は自分に謝れるようなことをされた覚えなどない、どんな理由があつたにせよ、むしろヴィヴィオに謝ってほしいと思つていた。

「民間協力者である貴方達“シンケンジャー”に何も言わず、心にもない事を口走ってしまった他、あの子にまで怖い思いをさせてしまつて……本当に申し訳ありません。」

「そういうことならまずあの子に謝れ、俺はただお前に襲われたあの子を守るうとしたまでだ。」

丈瑠の言葉に心を抉られたのかシャツハは押し黙り、顔を下げたまま上げることが出来なかつた。そんな中、仲裁に入る形で誰かが話しかけてきた。

「……もうそれぐらいにしたらどうだ？志葉。」

「……シグナムか。」

その人物は、騎士甲冑を解いたシグナムであった。シグナムが来たことにより、丈瑠はシグナムに顔を向け、シャツハもぎこちなかったが顔はいまだに暗かったがシグナムに向けた。

「見ての通り、シスターシャツハは真面目な性格でな、人工生命体の説明をしてなかった私にも非はあるが、シャツハ自体に罪はない。」

「……だが、いくらなんでも子供相手にここまで異常な警戒は」

「話を最後まで聞け、今からそれについて説明する、それで理解してくれないか？」

シグナムがそういうと、丈瑠は渋々了承する。丈瑠達にとってみ



れば、ヴィヴィオは普通の女の子だが、シグナムにとってみれば“普通”の女の子ではないことを理解している。しかし、急な事態が起こってしまい、それを説明する時間が無くなってしまった。その為何も知らない丈瑠と源太は異常なまでの行動を起こしたシャツハを理解できず、管理局に悪い印象を覚えてしまったのだ。それを弁解するためだったのか、はたまた別の理由があったのかはわからなかったが、シグナムは丈瑠にヴィヴィオの正体、人工生命体の危険性と歴史、そして聖王医療院が管理局と関わりあるものの別の存在であり、シャツハがそのシスターであることも話した。

「・・・なるほど・・・な。」

「理解・・・できましたか？」

シグナムとの話を終えた丈瑠に対し、シャツハは恐る恐る丈瑠に理解できたか聞く。

「・・・信じられないことではあるが、あの子に対する警戒を見れば、信じるしかない・・・。」

ミッドチルダに来てから数か月立ち、この世界の魔法の“技術能力”に驚かされていた文瑠であったが、人の命を操る技術があるとまでは知らなかった。とはいっても、そういった技術はすでに禁止されており、作るとすれば気の狂った人物でしかないと考えられていた。そしてその技術で作られた子供はいろいろな点で危険性があり、管理局側の検査結果では、魔力は平均以上ではあっても普通の子供の域は出ず、今の時点では特別な能力は確認されていないが、人造生命体であるゆえに未知の潜在能力を危険視していた。そこから考えると、シャツハが取った行動は当然かもしれないが、文瑠達に取ってみれば、今もおかしいとしか考えられない。だが、シグナムからの説明を受けてようやく理解ができた。

「・・・少し早計過ぎたか。」

「志葉、どうした？」

「いや、なんでもない。」

文瑠はシャツハを止める際、“管理局は信用できない”という発言をしていたが、突然のこととはいえ、事情を知らない文瑠達が見えなかった義理ではなかった。

「……あの子はどうなるんだ？」

「……受け入れ先が見つかるまで、聖王教会で保護するか、六課で保護することになりますね……。」

丈瑠は源太とヴィヴィオがいる方向を見ると、ちょうど源太とヴィヴィオが追いかけて遊んでいた。どうやら鬼は源太のようでヴィヴィオは楽しそうに逃げている。源太が顔面からずっこけたところは見たが、あえてスルーした。

そこに、なのはが話を聞いてたのか、なのはが丈瑠達の元に来てヴィヴィオの方を見る。

「あ、それなんだけど……。六課で保護してもいいかな？」

「えっ、いいんですけど……。」

「……いいのか、一応はやてにも話を通した方がいいと思うが？」

はやては六課の部隊長でもあるため、保護するにははやての許可が必要だと考えたため口に出した。

「あ、それならさっきはやてちゃんからちゃんと許可もらったよ。それに、受け入れ先が見つかるまで、ちゃんと面倒を見るから大丈夫だよ。」

「・・・そうか。」

丈瑠は、任せても大丈夫なのかどうか不安になりながらも、六課で保護することとなり、ヴィヴィオを連れて丈瑠達は六課に戻ることとなった。

『回想終了 ミッドチルダ 機動六課 隊員寮』

ちょうど隊員寮の玄関に入ったところで話が終わり、丈瑠と彦馬は中に入り家臣達が待つ部屋に向かっていく途中だ。

「そんなことがありましたか……。」

「……ああ。得た物は大きかったが、その内容がな……。」

丈瑠が得た情報は、生命操作技術であり、あまり心地の良い物ではなかった。それにその技術で作られ、保護されたヴィヴィオが、六課で保護しても安全かどうかの確認はわからない。モチカラで境界を張ってあるものの、それは外道衆にしか効果なく、それ以外は効力を全くと言っていいほど発揮しない。そのため安全かどうか不安だった。

「……そうですね。しかし、そのことを家臣達が受け入れられるかどうか……。」

「だが、俺達が受け入れようが受け入れなくても、話は変わらない。俺達が出来るとは、この世を外道衆から守ることに、機動六課あいつらを外道衆から守ることだ。」

「……そうですね。」

丈瑠と彦馬が話をしていると丈瑠達が使っている部屋に到着し、ドアを開けようとするがなぜか鍵がかかってたため、開かない。しかも丈瑠は鍵を持ってないため開けない。

「・・・鍵がかかっているな。」

「おかしいですなあ、先ほどまでは家臣達が居りましたのに・・・。」

ドアが開かないことに首を傾げる彦馬を余所に、突然丈瑠のシヨドウフォンに電話がかかる。丈瑠はシヨドウフォンを開き、通話ボタンを押して電話に応じる。

『やだやだやだー！ー！いつちややーだー！ー！』

丈瑠は電話に応じると、子供の泣き声が嫌というほど耳に入ってくる。そして泣き声が響く中、千明の声が聞こえてくる。

『……文瑠。わりい、手伝ってくんねえか？』

「……場所は？」

『なのはとフェイトの部屋だ。早く来いよな。』

「……行くぞ、ジイ。」

「……わかりました。」

通話を切ると、文瑠はため息を一回吐いて千明に言われた部屋に向かった。

文瑠が部屋に入ると、そこにはなのはにしがみつくヴィヴィオとどうすればいいかわからないのはとフォワード達と流ノ介達がいるた。

「ヴィヴィオちゃん。なのはさんはどうしても外せない用事があるんやから、行かなきゃならなあかんの。だから……」

「やだやだやだー！！！！いつちゃやだよー！！！！」

「ほらほらー！いないいないー・・・ばあー！」

「・・・うああああああん！！！」

「何やってんだよ流ノ介、逆効果じゃねえかよ！」

「ああ・・・そんなはずでは・・・！」

「俺はどこもいかなからさ！ほら、戻ってくるまで遊ぼうぜ？ヴィヴィオちゃん！」

「うああああん！！！！やだやだー！！！」

流ノ介達はヴィヴィオを泣き止ませようと必死にやっていたが、流ノ介のせいなのか、更に悪化したと考えられた。茉莉は少し離れて何か考えてるようだ。文瑠と彦馬は状況を見て考えられることは、“なのは外せない用事があるため離れないといけないようだ”が、ヴィヴィオはそれが納得いかずに、行かせまいとなのはに泣きついていた”と考えられる。

文瑠はため息を吐いてなのは達の元に行こうとすると、後ろから誰かが入ってくる。



「ありゃー、えらいことになったな。」

「あ、はやて部隊長。」

「フェイトさんに、文瑠さん……。」

誰かというのは、はやてとフェイトだ。どうやらこの事態に気づいたようで、救援に来たようだ。そこでフェイトは何か思いついたようにすると、ヴィヴィオが落としたと思われるウサギのぬいぐるみを持ってヴィヴィオに近づき、さらに茉子も何か思いつき、文瑠に近づく。

「文瑠、獅子折神貸してくれる？」

「……茉子、何する気だ？」

「いいから、お願い。」

文瑠は何を考えているか不思議に思いながらも、エンブレムモード 茉子に獅子折神を渡し、茉子は流ノ介達の元に行くと、流ノ介達からも折神を貸して貰うとヴィヴィオの元に向かった。

「こんにちは、ヴィヴィオ。」

「うう。。。」

フェイトがウサギのぬいぐるみを持ってしゃがみ、ヴィヴィオに話しかけると、ヴィヴィオは涙を流しながらもフェイトの方を見る。茉莉もフェイトの横にしゃがむ。

「ヴィヴィオちゃんは、なのはさんがどこ行っちゃうのが怖いんだね？」

「。。。。うん。」

「でもね、なのはさんはこれからどうしても外せない用事があるの。だけどヴィヴィオが我が儘言っちゃってるから困ってるの。この子も。」

フェイトはウサギのぬいぐるみを軽く動かしながらヴィヴィオに優しく話しかけている。すると理解できたのか、ヴィヴィオは自然と泣き止み、ヴィヴィオの視線はフェイトから丈瑠の方を向く。ヴィヴィオの視線に気づいた丈瑠は「(お、俺もか・・・!)」「と一瞬思ってしまったが、今度は茉子がヴィヴィオに話しかける。

「うーん、ヴィヴィオちゃんは丈瑠さんもどこか行っちゃうのが怖いんだ?」

「うん・・・。」

「でもね、丈瑠さんも忙しいの。でも待ってる間、私と遊ばない? この子達も遊びたいって。」

茉子はヴィヴィオに顔を向けながら手の平にエンブレムモードの折神を出すと折神達はアニマルモードになり、ヴィヴィオの肩に乗ったり頭に乗ったりと動きを始める。するとヴィヴィオは折神達を見て、目を輝せ始めた。

「うわぁ・・・。」

「なのはさんが戻ってくるまで、私と折神達と遊ばない？それなら出来るよね？」

「うんっ！」

ヴィヴィオはさっきまで泣いてた面影もなく、元気よく頷く。そして茉子は丈瑠達に顔を向けて“ここま任せて”と頷いて合図し、フェイトからウサギのぬいぐるみを受け取り、ヴィヴィオを連れて折神と遊び始めた。

フェイトと茉子の二人がヴィヴィオを泣き止ませ、更に茉子がヴィヴィオの遊び相手になったことについて驚きを隠せないでいた。

「なんか・・・フェイトさんと茉子さん、達人みたいな感じだったね。」

「姐さんって、俺達が集まる前は幼稚園で働いてたからな。」

「あ、それにフェイトさんって小さい頃のおんた等を世話してたから、慣れてるんじゃない？」

「「は、はい・・・。」」

フェイト達に聞こえないように、さらに千明と話すため小声でフワード達は話しながらも、はやては丈瑠の元に向かった。

「丈瑠さん。ちょっとええか？」

「なんだ、何か用か？」

「実は・・・聖王教会本部に用があるんやけど、丈瑠さんも来てくれへん？」

丈瑠は聖王教会と聞くと、聖王医療院に出会ったシャツハの事を思い出した。丈瑠はおそらく、いざこざの謝罪だと思ったが、この件についてはすでに終わっているから自分が行かなくても問題ないと思った。

「・・・俺もか？」

「そうなんや。なんでも、“シンケンジャー”に何か関係あると力リムが言っているんやけど・・・。」

「カリム？」

「それは後で説明する。ついてきてくれへんか？」

文瑠ははやてを見るなり、何やら重大な話だと思いついていくことにし、ヴィヴィオについては茉莉子に任せることにした。

そして文瑠はヘリポートに行き、はやて、なのは、フェイトと共にヘリに乗り込み、聖王教会に向かっていた。

ヘリの中、文瑠は静かに座っていたが、はやてに話しかけられると顔をはやてに向ける。

「文瑠さん。噂なんやけど……。近々、地上本部から臨時査察が来るんや。」

「……臨時査察？」

文瑠ははやてから査察と聞くと初耳なため、耳を傾ける。

「まだ噂程度やけど・・・、一応注意した方がええで。文瑠さん達は、突っ込みどころ満載やからなあ・・・。」

「・・・用心しておく。」

文瑠達シンケンジャーは、管理局側から見れば“魔力を持たないレアスキルの使い手”であり、非常に珍しい。それに外道衆の2の目と戦うため“侍巨人”を使用している。他にも源太の持つ“電子モチカラ”は文瑠達の“モチカラ”と比べると性質は似ているが、源太の電子モチカラで作られた折神を比べるとその差は大きく違うことがわかる。それに、源太の電子モチカラは先天性に縛られないため、ある意味源太が一番危ないと思われる。

文瑠はこの査察は機動六課と考えたが保護してもらっている自分達にもかかわってくると考え、どう対処するか思い始める。

それから少し時間が経つと、聖王教会本部が見え、着陸態勢に入った。

『ミッドチルダ 聖王教会』

聖王教会に着くと丈瑠達はへりから降り、はやての案内で教会に入ると出迎えてくれたのは、金髪の女性が出迎えてくれた。なのはとフェイトは姿勢を直す。

「高町なのはは一等空尉であります。」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官です。」

「……志葉 丈瑠。民間協力者だ。」

「ようこそ、始めまして。聖王教会、教会騎士団騎士、カリム・グロシアと申します。どうぞ、こちらへ。」

丈瑠達はカリムに案内され、案内された部屋に入るとそこには軍服を着た男性とはやてが机に座っており、案内してくれたカリムは、はやて達がいる机に座る。そしてなのはとフェイトと丈瑠は、遠慮がちに机に座った。

「失礼します。」

「クロノ提督、お久しぶりです。」



「ああ、フェイト執務官。」

なのはとフェイトとクロノと言われた男性の会話を見て、カリムがクスツと笑う。

「お二人とも、そう硬くならないで。私達は個人的にも友人ですから、いつも通りで平気ですよ。文瑠さんも、いつも通りでお願いします。」

「……と、騎士カリムが仰っているのだから……普段と同じです。」

「平気や。」

そう言われるも文瑠は無愛想にしているが、なのはとフェイトは緊張がほぐれたようだ。

「じゃあ、クロノ君、お久しぶり。」

「お兄ちゃん、元気だった？」

「むっ……、それはよせ、お互いもういい年だぞ？」

「兄妹関係に、年齢は関係ないよ、クロノ。」

クロノはフェイトに言われると赤くなる。文瑠はフェイトとクロノを見て“……兄妹なのか？”と内心呟いた。

そして文瑠を除く全員が軽く笑いあい、終わるとクロノが文瑠を見て話しかける。

「君が、“シンケンジャー”の志葉 文瑠だね。フェイトから話は聞いている。」

「……ああ、そうだ。」

「文瑠さん。そう、無愛想にならずに……」

カリムはクロノに対しての反応が薄い丈瑠に硬くなっているかと思い、緊張をほぐらせようと話しかけるがはやてが割り込んで口に出す。

「ああ、えーと・・・丈瑠さんはいつもこんな感じじゃから・・・気にせんでええよ。」

「あ、はい・・・わかりました。」

はやては丈瑠をフォローしたと思ってやったが、丈瑠に対してみれば余計だったのか、丈瑠ははやてを軽く睨むように見る。はやては丈瑠の視線にスルーし、目的について話を持ちかける。

「さて、昨日の動きのまとめと・・・改めて、機動六課設立の裏表について、それから・・・今後の話や。」

はやてがこの話を口に出すと、部屋のカーテンが閉まり、暗くなる。そしてクロノがモニターを出す。

「六課設立の表向きの理由はロストロギア、“レリック”の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例が理由だ。六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官、リンディ・ハラオウんだ……。それに加えて、かの三提督も設立を認め、協力の約束もしてくれている。」

丈瑠はクロノが出してくれたモニターを見て、三提督の顔を見るなり、TVで見たな……。と思い出す。そしてカリムが立ち上がり、少しなのは達から離れる。するとカリムは古そうな紙を取り出すと紙は光出し、カリムを中心に回転し始める。

「その理由は、私の能力と関係がありません。私の能力“プロフェーテン・シュリフテン”。これは、最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した、預言書の作成を行う事が出来ますが……。二つの月の魔力が上手く釣り合わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません。」

カリムを中心に回る紙のうち二つがなのはとフェイトの前に来て、文が紙に表示されていく。表示された文章はなのはとフェイトには読めなかったのか、なのはは首を横に振ると紙はカリムの元に戻っていく。

「預言の中身も古代ベルカ語で、解釈によって内容が変わる事もあ  
る難解な文章、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解  
釈ミスも含めれば、的中率や実用性は、割りとよく当たる占い程度  
……。つまりは、あんまり便利な能力ではありません。」

「聖王教会はもちろん、次元航空部隊のトップもこの預言は目に通  
す。信用するかはどうかは別として、一つの予想情報としてな。」

「ちなみに、地上部隊はこの預言はお嫌いや。実質のトップがこの  
手の稀少技能レアスキルがお嫌いやからな。」

「レジアス・ゲイズ・・・中将だね。」

文瑠はなのは達を会話を聞いていく中につれ、様々な有名と思わ  
れる管理局員の名前などが入ってくる。しかし、それらの情報がど  
う自分が呼び出された理由がよくわからなかった。

「そんな騎士カリムの預言能力に、数年前から少しずつある事件が書き出された。」

クロノがそういうと、カリムは一息をついて語り始める。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。使者達は踊り、中つ大地の法は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる。」

カリムが言う予言を聞いたなのは達は、何を意味するかが分かったのか、驚いたように口に出す。

「……っ！それって！」

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊ですね……。」

なのは達は預言の意味に動揺していたが、丈瑠からすれば関係のない話だ。それに、自分が呼び出された理由が今もよくわからない。あるとすれば、ただはやてに重要な話があるとしたか聞かされておらず、今までの話の流れから自分に関係することなど全くないと感じていた。

「・・・で、俺が呼び出された理由は何だ？」

「はい。ここからが本題です。実は、約半年前から新たに追加された預言があるんです。」

カリムが言い終わると、一息ついて予言を読み始める。

「冥府魔道の使者が現れし時、赤き海と共にいにしえの船、冥府魔道の支配者が現る。文字操りし六人の戦士、冥府魔道の支配者に挑まんとする。しかし、外道に堕ちし者現れ、六人の戦士は冥府魔道の支配者との戦いに敗れ去り、地獄の門が開かれる。」

カリムが予言を言い終わると、丈瑠の顔付きが変わる。

「これがどういう意味がわかるか？」

「……そういつことが。」

預言のことにクロノは丈瑠に聞くが、丈瑠はこれが何の意味が分かった。その言葉を聞いた全員は丈瑠に顔を向ける。

「何や、教えてくれへんか？」

「……お前達には関係ない。」

「いいえ、この預言はミッドチルダに関係があるもの、出来れば、話してください。」



文瑠は言おうとしなかったが、カリムはこの預言が危険なものと思っており、どうしても知りたいらしい。文瑠は仕方がなく、言うことにした。

「・・・外道衆。」

「・・・えっ？」

「外道衆というのは、君達が戦っている生命体のことか？」

「ああ。だからお前達には関係ない。」

文瑠の言葉に何か触れたのか、クロノは立ち上がると文瑠に怒鳴りつける。

「関係ないとはなんだ！君達は、外道衆と戦う時、フェイト達と協力してるではないか！」

「それははやて達が勝手にやってることだ。俺達が協力してほしいとは、一度も言っていない。」

「くっ……しかし、現に外道衆はミッドチルダで、これでもかというほど暴れている！僕達も関係ないと言い切れない！」

クロノが言ってることは正しい。実際シンケンジャーが来るまで、未確認生命体と言われていた時のナナシ連中とは管理局員が戦っていた。しかし、ナナシ連中は人とは思えぬ力を持ち、生命体であるためかガジェットよりも頑丈でもあるため、通常の魔力ダメージの数倍叩き込まなければ倒せず、現にその対策の一部として殺傷設定の解禁を認めるほどであった。ガジェット同様捕獲して対策を練る作戦を幾度も実行してきたものの、倒された外道衆は消え、バインドで捕獲できたとしても、隙間から逃げられたり干からびて消えることが多発したため、シンケンジャーが来るまで苦戦を強いられ、被害が増える一方であった。

それを聞いた丈瑠は、一息つき、顔を上げてクロノ達を見る。

「……その預言は俺達が来ることと、外道衆襲来のことを示している。それだけだ。」

「つまり……当たってたってこと？」

なのはの言葉に、丈瑠は静かに頷く。なのは達はそのことを聞くなり、カリムの預言が当たっていたことを知ると、預言への対策の話に切り替わった。しかし、丈瑠自身はその話は耳に入っておらず、一人考え込んでいた。

「（冥府魔道の支配者・・・冥府魔道は外道衆と当てはめると、支配者は・・・ドウコクか？そんなはずはない、以前俺達が倒したはず・・・少なくとも数百年の月日が必要なはずなのに、どうして？）

先代から続く外道衆との戦いにおいて、多くのアヤカシについての文献は存在し、どれも先祖代々に伝わっている。しかしその文献すべてがかなり古いもので、丈瑠は復活するにも数百年はかかると自分なりに解釈していた。

「（それに前に倒したはずのアヤカシが復活、預言の中にあつた“外道に堕ちし者”も気になる。）」

なのは達が話し込む中、丈瑠はカーテンに仕舞われた窓に視線を移す。

「（嫌な予感が当たらなければいいのだがな……。）」

嫌な予感、すなわち“血祭ドウコクの復活”、外道に墮ちし者、すなわちはぐれ外道の存在、さまざまな憶測を丈瑠がこなしていく中、なのは達の会話が終了したのはしばらく経つてのことだった。

### 第三十二幕 予言（後書き）

作「今回は外道衆の幹部、薄皮太夫について紹介です。」

薄皮太夫 / 薄雪

ドウコクの側近。姉御口調（一人称は「わちき」）で、常に三味線を携え不気味な音色を奏でる。三味線には仕込刀があり、戦闘でもシンケンジャーに引けを取らない。ドウコクを抑えることができる唯一の存在であり、彼女の前でのみドウコクは甘い一面を見せるが、「はぐれもの」であるため、他のアヤカシたちには蔑意をもたれており、目が合っただけでも険悪な空気になるのでドウコクが制止に入ることも多い。

元々は人間で薄雪という名の花魁であったが、かつて愛し合い、身請けすると約束してくれたはずの武士・新佐（おんし）が他の女と祝言を挙げると知って、新佐に裏切られた怒りと絶望から、宴席に乗り込み火を放って大勢の人を焼き殺した後「外道に堕ち」、その際に新佐を三味線に変えて道連れにした。シタリ曰く過去への未練が未だ満たされぬため、それを三味線を弾くことで紛らわせたり、花嫁たちを攫って打掛を作ろうとしたりといった行動を取り、同じ「はぐれ外道」の十臓に距離を置きつつも密かに援助・支援している。

十臓の独断行動に怒ったドウコクから抹殺指令を受けるも、十臓の本当の目的を聞き、思いとどまる。このことを知って怒りを露わにするドウコクに対して開き直り、ドウコクと袂を分かった時期もある。

ドウコクに燃やされかけた三味線の補修に必要な人間の男を捕らえるために人間界に赴くが、シンケンジャーとドウコクが差し向けたコメバクラの妨害に遭い失敗。それ以来、人間界を彷徨っていたが「三味線の修復」と引き換えにアクマロに雇われる。その際に仮

の武器として「散華斑痕刀」さんげはんこんとうという小刀を与えられている。アクマ口に裏切られて攻撃を受けるも水切れのリスクを省みずに人間界に現れたドウコクに助けられ、ドウコクが自らの体の一部で三味線を修復してくれたことで六門船に戻る事となる。その後再び人間界に赴き、ユメバクラの一件で太夫の過去を知っているシンケンピンクにわざと斬られることで「人間だった過去」を手放し、その際に一緒に斬られた三味線（＝新佐）の嘆きの力を解放、三途の川に沈んでいたドウコクを復活させた。最後の三味の音色に嘗ての響きはないと人間界に再び現れたドウコクに言われるも「今までで一番良い音色だった」と語り、自らの意思でドウコクに取り込まれた。デザインモチーフは弁才天およびウミウシなどの軟体生物。

作「薄皮太夫なんですが、今のところ復活させる予定は全くありません。理由としては、恐らく十臓より条件が難しいからです。理由はいろいろとありますが、最大の理由は、ドウコクに自ら取り込まれたためです。それと次回からなのは本編を合わせたオリジナルストーリーの予定となっております。

関係ないと思いますが、ゴーカイジャーの感想なんですけど、感無量です。この一言に尽きます。今回のゴーカイジャーの話は、脚本の変更があったと思いますが、丈瑠より薫の方が適任だったなと思いました。」

### 第三十三幕 信用（前書き）

作「前回のあとがきで、“なのは本編含めたオリジナルストーリーを予定”って書いたのに結局出来なかったよ……ごめんなさい……」

## 第三十三幕 信用

『ミッドチルダ 機動六課 隊員寮』

聖王教会から戻ってきた丈瑠達。機動六課に戻った時は夜になっていた。なのは達は六課に戻った直後それぞれ別れ、丈瑠は遅い夕食を済ませて木刀で軽い素振りをやり、就寝時間になるとベッドに入り、いつもは寝るのだが今日だけは眠れなかった。

理由は、聖王教会に来た時に聞いた預言のことだ。カリムから聞いた預言は管理局に関する事。これは別世界から来た丈瑠達には関係ない事だ。だが、もう一つの預言は無視出来ない。それは、外道衆がミッドチルダを支配する事だ。この預言は丈瑠自身は信じていない。だが、預言の中に“支配者”と言う単語がある。外道衆の支配者は血祭ドウコク、脂目マンブクとしか考えられない。（ちなみに丈瑠達は筋殻アクマロは知っているが、支配者かどうか詳しくわかってない。）

脂目マンブクは夏の陣で恐竜ディスクを使って倒し、そして血祭ドウコクは決死の攻撃で倒したので少なくとも数百年は復活しないと思っていた。しかし、このミッドチルダ<sup>世界</sup>に来てから、自分達の世界で倒したはずのアヤカシが復活していることから考えると、誰かが何らかの方法で復活させていると丈瑠は考えている。もしこれが本当だったら、“支配者”の復活は時間の問題だと思ってる。しかし、考えれば考えるほど答えは見つからず、頭を悩ませ、頭を冷やそうとベッドから降りて、寝ている家臣達を起こさずに部屋から出ていき、風に当たろうと外に向かっていった。（ちなみに、丈瑠達がいる部屋は二段ベッドが二つあり、一つは上が丈瑠、下が源太で、もう一つは上が流ノ介、下が千明になっている。）



丈瑠は隊員寮の外に出て、軽く歩いていると源太が自分の屋台“ゴールド寿司”で何かをやっていた。

「うん……やっぱりなあ……。」

「源太、何をしている？」

丈瑠が声をかけると、源太は丈瑠に気づき、作業を止めて丈瑠の方を見る。

「ん？ああ、丈ちゃんか。丈ちゃんもここで何してんだ？」

「……ただ夜風を当たりに来ただけだ。お前こそ何をやってんだ？」

「ん、俺か？俺はあ……ネタの手入れだ。」

源太は丈瑠に言われると、少し考え言い訳のような素振りを口にした。丈瑠はそれを見て、何か隠しているようだと感じた。

「源太、何か隠しているのか？」

「ん、いやー・・・何も？」

「・・・管理局の事か？」

丈瑠がそういうと、源太は頭を掻き、“しまった”という素振りを見せた。

「ッ・・・丈ちゃんには、御見通しっつか。丈ちゃんの言う通りだよ、この・・・“機動六課”だったな。ここ、管理局の一つだよな？」

「ああ、なんか不満あるのか？」

「んーまあ、不満はあるっちゃあるな。確かにいい奴は多しさ、だけれどよあ・・・ここ、子供いるんだぜ？俺達のいた世界にも、軍隊に子供の兵士がいるってこたあわかってるんだけどさあ、実際に見

ると、複雑な気持ちなんだよな！。ホントにこころ、信じてもいいのかどうか……。」

源太はまるで落ち込んだように言いながらネタの手入れをし、丈瑠に言った。丈瑠は少し間を開け、口を動かす。

「……源太、それを決めるのはお前次第だ、少なくとも、俺達は機動六課あいつひは信用することが出来る、それに、子供がいるにせよ、俺達に出来ることは外道衆から守る事、この世界の法律を抗うことは出来ないが、要はこの世界でどれだけのことが出来るか考えた方がいい、俺はそう思う。」

「……ま、そうするしかねえか。ありがとよ、丈ちゃん。」

「礼はいらない、お前も早く寝ろよ。」

「おう、わかってるよ。じゃあな、丈ちゃん。」

源太は気が晴れたのか、少し顔がほぐれて丈瑠に手を振り、再び屋台のネタのチェックを始めた。

その後、源太と会話したおかげか、眠れることができ、六課で生活するようになってから、いつものように早朝起きることが出来た。丈瑠が起きた頃にはすでに流ノ介が起きて早朝訓練に参加するため体育着に着替えており、千明は眠そうにベッドから降りていた。丈瑠は今回は眠る時間が少なかつたせいか、少し眠気が残っているが家臣に醜態を晒すことは避けたかったので、顔には出さずベッドから降りる。

丈瑠がベッドから梯子で降りると同時に誰かのいびきが聞こえる。丈瑠はベッドから降りて下のベッドを調べるとそこにはぐっすり眠っている源太の姿があった。

「ンガア……クウ……。」

「源太……お前……、まだ眠っているのか。」

「源ちゃん起ーきーろっ！今日早朝訓練参加するっつったのは誰だよ！起きねーと怒られるぞッ！」

千明は源太の体を揺さぶりながら声をかける。千明は一度訓練をサボったことがあり、シグナムから丸一日の“稽古”に付き合わされたことがある。（ちなみにこれは千明のモチカラとシグナムの魔力変換の愛称が最悪だったためか、千明の負傷により、シヤマルによるドクターストップのため早朝で終わった。）その時の様子のシグナムは千明曰く“とても怖かった”ため、そして源太に自分と同じ目に合わせたくないが為に必死に起こそうとしていた。

「うるせえなあゝ・・・後五分・・・。」

「知るかよ、いい加減に起きろよ！」

「千明、ほおっておけ。源太がどうなるうと、我々には関係ない。」

「・・・まあ、そうだな。千明、着替えて行くぞ。」

「・・・わかったよ、どうなっても知らねえぞ。」

源太を必死に起こそうとしていた千明だったが、流ノ介に言われ、さらに時間が迫っていたため諦め、急いで着替え、竹刀を持って集合場所の裏庭に向かって走っていった。

裏庭に着くと、すでに体育着に着替えていた茉莉とことはが待っていた。

「あれ、シグナムが居ねえぞ？」

「そついえばそうだな……。茉莉、ことは、シグナムは知らないか？」

丈瑠達はシグナムがいない事に気づくと辺りを見回す。丈瑠達シンケンジャーは、訓練ではいつも

シグナムと共に竹刀で打ち合ったり、素振りをしており、時々丈瑠達はシンケンジャーになり、シグナムは騎士甲冑を着て模擬戦をやることもある。しかし、集合場所にはそのシグナムの姿が居ないため、丈瑠は茉莉とことにはシグナムがいる場所を聞いた。

「あ、それなんだけど……。早朝の訓練、今日は中止になったの。」

「何……？」

「はあ？聞いてねえぞそんなこと。」

「私達もさつき知ったとこ。実は機動六課（六課）の近くで、なんかガジェットの反応あつたらしいの。」

「うちらも行くとしたんやけど・・・シグナムさんが数も少ないし、フォワード達の訓練も兼ねてやるから、今回は中止って・・・」。

それを聞いた丈瑠は、少しため息を吐き、納得したように顔をそらす。

「・・・そうか。」

「・・・あのさ、フォワード達がいる現場まで行っていいか？ちょっと・・・心配だからさ？」

「止めた方がいいんじゃない？現場がどこなのか、聞いてないし。無闇に行ったら迷っちゃうよ？それに、シグナムさんとヴィータちゃんがついているし。」

「うーん・・・それでもなんかさあ・・・心配なんだよなあ・・・」

千明はフォワードの事がよっぽど心配なのか、急にソワソワし始

め、辺りを歩き始める。

「千明、落ち着け。あの子達にはシグナムがついている。よっぼど  
のことがない限り、大丈夫だろう。」

「その“よっぼど”が正直不安なんだよ、ああー・・・大丈夫かな、  
あいつら・・・。」

「・・・とにかく、俺達はあの子達が帰ってくるまでモチカラの稽  
古でもやるぞ。」

フォワード達が心配なのは、千明だけじゃなく丈瑠達も同じ。し  
かしフォワード達はなのは達の下で訓練しており、今回の任務は、  
ガジェットが少なけれどもシグナムとヴィータがついているので、  
危険なことはさせないと思っている。それにいくら心配しても埒らちが  
あかないため、丈瑠は戻ってくるまで今まで本格的に出来なかつた  
モチカラの稽古（モチカラと紙と安全の確認のため）をすることに  
した。

その頃源太は、丈瑠達の部屋でようやく目覚めたが、時間的にも  
訓練が始まっている時間なため、訓練をあきらめて自分の屋台に行  
き、ネタの手入れをしていた。



「ん〜・・・やっぱネタが駄目になっちまったか・・・。」

「そう落ち込まんでくだせえよ親分。ネタなんてこの世界で手に入ればいい事ですぜ。・・・あつあー！きれいなお姉さんがこっちに来てやすぜー！しかも三人も！」

「うるせえなあダイゴヨウ、そんなこんで騒ぐんじゃねえよ。」

「こっちに向かってくる“きれいなお姉さん三人”にダイゴヨウは興奮するが、源太は必ずこっちに来ると思ってもないため呆れたように口にした。

「エリオ達、大丈夫かなあ・・・。」

「心配し過ぎだよ、フェイトちゃん。さっきヴィータちゃんからガジェット全滅出来たって、報告あったでしょ？」

「そうなんだけど、怪我とか、してないかあ・・・。」

「うちのヴォルケンリッターが二人も居るし、平気やる。たいしょー、やってますかー？」

“きれいなお姉さん三人”というのはなのは、フェイト、はやてのことで、なのはとフェイトはヴィータとシグナムに“最近忙しく働いているから無理するな”と言われて出撃するのを止められ（フェイトの場合はエリオとキャロにも言われた）、待機することになった。その後任務の終了の報告も受けており、はやては後のことをリインに任せ、なのはとフェイトはフォワード達が戻ってくるまで書類仕事をしようとした時、はやてに誘われて新しく入ってきた源太と話してみようと考え、ついでに源太の屋台で食事を済ませようと思って入った。（ちなみにはやては寿司が目的で源太の屋台に行ったというのは、内緒である。）

「……いらっしやい、何握りやしようか？ってなんだよ、お前らかよ。」

「へえー、うちらこんなに可愛いのに、そんな事言うんやな。」

「は、はやてちゃん……。」

源太は“きれいなお姉さん”の正体がはやて達とわかるとかつこつけるのを止め、いつものように振る舞うと、はやては冗談交じりに発言するとなのはとフェイトは恥ずかしくなり、はやてを止めよ

うとする。

「ま、それよりもお前ら、寿司食いに来たのか？」

「そや、こつちじゃなかなか食べれへんしな。」

「ん、寿司知つてのか？」

源太は寿司の準備をしながらはやてと会話をする。源太はミッドチルダに寿司が出回っていないことは、飛ばされた時屋台を引いて歩き回った（といっても距離は短い）ため寿司は出回っていないだと思っていた。そしてはやての発言で寿司が出回っていないことが確認した。

「うん、そうだけど・・・こつちじゃあまり知られてなくて、まだお刺身ぐらいしか出てないんだよね。」

「へえー、そうなのか。それなら、腹いっぱい食ってけよ。まあ、簡単なもんしか作れねえけどな。」

源太は苦笑いしながらも巻き寿司を作り始める。寿司を作っている中、源太は今日はフォワード達の姿を見ないことに気づく。いつもならこの時間帯では早朝訓練を終わらし、ヘトヘトになったフォワード達の姿を昨日見た時間だ。そのフォワード達がなかなか来ないことに気づいたのだ。

「そついやあの子達は？今日は・・・休みか？」

「あ、それなんだけど・・・今朝ちよつとした事があって今出勤中、外道衆の反応がないからシンケンジャーの皆さんは待機中だけど何事もなかったから今帰還中だよ。」

出来上がった巻き寿司をなのは達に手渡しながら、フォワード達がいけないことをなのはに聞いた源太は、なのはから理由を聞くと顔を暗くした。

「・・・そつかい。」

「・・・？源太さん、どうしたんですか。」

「いや・・・ねえ、子供達が危険な仕事させてんのに、俺達大人がこうのんびりとしてていいかなーって思っちまってよ、まあ俺達の世界の常識だからこの世界の人間の間であんたらにゃあ意味ない事さあ。」

源太の言葉になのは達の顔は少し暗くし、寿司を食べる手を止めた。そんなのは達の反応を見て源太は少し慌てると口を開く。

「わっわりい、別にお前らを攻めてる訳じゃねえんだ、俺の住む日本、つー世界の常識であってだなあ。」

「・・・やっぱり、おかしいですか？子供が戦うなんて。」

源太の言葉を遮るように、なのはは口を開くと顔を上げる。

「私達も、地球で生まれて、源太さんと同じ日本で育って、たまたまの出来事でこの世界に入ったんです。それも子供の時に、当初は

あまり気にしてなかったんですけど、今になってよかったかなあって・・・源太さん？」

しみりと話すのはに、源太は静かに聞いていたが、なのはが口にした“地球”と“日本”の言葉を聞き、古いおもちゃのようにゆっくりとなのはに視線を写し、口を開けていて何かに驚いているような目で見っていた。

「お・・・お前、地球生まれだったのか？」

「うっうん、ついでに言うとはやてちゃんも地球生まれだし、フェイトちゃんも地球に住んでたけど・・・どうしたの？」

なのはの言葉に、源太は目をパツと明け、口を振るわせつつ肩を揺らすもさらに口を動かした。

「じゃ、じゃあ、お前ら平気なのか？子供達が戦ってるのに「じゃあ」ってのんびりしていいのか？」

「別にのんびりって・・・あの子達も今じゃ十分実力ついてきたし、シグナムさんとヴィータちゃんがついてるから大丈夫だよ。」

「うん、エリオとキャロも心配だけど、今無事に終わったって報告があつたし。」

「うちらも子供の頃は現場とかよく行ってたし、心配するほどのことじゃあらへんって。」

源太の質問に答えたなのは達は、まるで子供が現場にいることが“普通”かのように話していた。源太はその事を聞くと、顔を下げ、肩を微かに揺らしつつ荒々しくも呼吸を続ける。

その間なのは達は源太の様子に気づかず、そのまま仕事の話に楽しそうに話していた。内容は仕事の多さ、フォワード達の成長ぶり、上官への愚痴と言ったところ、フェイトはかろうじてエリオとキャロの様子が気になっていたが、なのはとはやてが心配するなど促しており、どれも自分の過去談で正当化していた。その言葉を耳にした源太は更に体を震わせ、ダイゴヨウは源太の様子に怯えると流石になのは達も気づいたのか源太に恐る恐る話しかける。

「・・・源太、さん？」

「・・・・・・・・。」

なのは源太に話しかけるも、源太は無言を貫き通し、その様子から少なからずなのは達も冷や汗をかき始め、ダイゴヨウは頭を体の一部に戻し小刻みに震えていた。

「・・・・・・・・ウガアアアア、いい加減にしねえかお前らぁ！！！！」

源太は唸り声を徐々に上げつつ、屋台のテーブル部に握りしめた拳を振り上げ、落とすと同時におもいきり叫んだ。源太の様子が激変したことになるのは達は一瞬たじろぐが、体制をすぐに立て直すと源太の顔を見る。

「子供が現場にいることが普通だあ？舐めた事言ってるじゃねえコノヤロー！！それがこの世界の法律でお前らがこの世界の住民ならまだしも、てめえらが地球人だっていうなら話は別だあ！！」

「げっ源太さん！？いきなりどうしたんですか？」



「源太さん落ち着」

「これが落ち着いていられっかぁ!!」

感情余ってか、源太の口調が一部変わり、怒涛のごとく怒り狂う源太の変化になのは達も驚きなためようとするが、源太はそれを拒むようにテーブルを叩き遮る。

「子供の頃から入っていた？それがどう子供達を戦わせる理由になるんだ！お前らはそれでいいのかよおいッ！！聞いてんのか？」

「そ、それは・・・」

「仮にも地球生まれだろ？子供が戦うことあなたにわかってんだろ？お前らの過去があの子達にどう結び付くんだ！もし子供達が死んじまつたらどう責任取るつもりだぁ!!」

源太の言葉に、フェイトはショックを受けたのか黙り込んでしま  
い、顔を俯かせる。

「でっでも、それがこの世界の常識で」

「常識もへったくれもあるかあ！子供に戦わせるくれえなら、自分が先頭に立つこともできねえのかよー！」

源太の言葉に、なのはは何も言えなくなったのか、顔をしかめつつも押し黙ってしまっ、そんなのはを見た源太だったが、怒りに任せて口を動かした。

「だいたいお前ら何様のつもりだ？そんな変な肩書とか役職とかついてそんなに偉いか、だから子供達が戦っていても知らん顔か？」

「っ……そんなことはない！」

「じゃあなんでお前はさっきまで平然と話してたんだよ！子供が遠くで戦っていることが当たり前によおー！自分がいくら子供の時に入ってたって理由にも何にもならねえ！心配だったら自分の役職捨てるくらいの覚悟がねえのかよー！」

『……ッ！？』

源太の言葉に、その場にいたなのは、フェイト、はやては何も言えずにいた。源太が役職のことを軽く言っているようではあるが、なのは達にとつてみれば、管理局員である以上なくてはならない物であった。なのは達はその役職というものを詳しく考えていなかったが、改めて考えてみれば、それによつて締め付けられていたことが次第にわかつてくる、何かをするのに何かがなければならぬ、だからなのはは教導官の資格を取つた。フェイトも、はやても、色んな思いがあつたからこそ、資格を取り、階級も上げていった。

しかし、それによつてできなくなったことも多い、源太に言われたことがその一つであつた。教導官の資格を取つたのはであつたが、“教える”ことが仕事であつて、“助ける”ことが仕事ではない、もし仮に助けに行くにしても、部隊長であるはやての許可が下りない限り、助けに行くことが出来ないのだ。それを言うと、はやても同じだつた。仮になのはの気持ちに答えたとして、無闇に許可を出したりすれば、部隊運営は勿論、自分の築き上げた今までの苦労がすべて失つてしまう可能性があつた。それが教導隊の隊長であるのはであつても、ほんの少し綻びを出してしまえば地上本部から難癖つけられ、只でさえ問題のある自分の部隊が危機に晒されてしまつ。

「……知らないくせに。」

「ん……？」

「何も知らないくせに、好き勝手言わんで下さい!!」

顔を上げ、源太を睨みつけながらはやては叫んだ。源太の言うて  
ることは正しかった、しかし、それを実行したとこで、フォワード  
達を守れたとしても機動六課の局員達を危険に晒してはいけない。  
そんな気持ちからはやては思わず声を上げてしまった。

「・・・帰らせてもらいます。」

「はっはやて・・・!?!」

「はやてちゃん!」

源太としばらく睨み合うも、はやては一言だけ告げると荒々しく  
屋台から出ると機動六課の中へと入っていき、はやての突然の行動  
になのはとフェイトは慌てたが、源太から「出てっくれ」っと小  
さく言われ、混乱していたが源太に怒鳴りつけられると、なのはと  
フェイトは、はやての向かった方向へと走っていく。

「……親分。」

「……ダイゴヨウ、何も言わんでくれ。」

事の終わりを感じたダイゴヨウは、顔を出すと源太の様子を窺うため話しかけたが、源太にそれを止めさせると静かに椅子に座る。その顔は、さっきまでの怒り狂った顔ではなく、やけに沈んだ、暗い顔だった。

『三途の川 六門船』

ここはあの世とこの世の狭間、三途の川。外道衆が拠点とする“六門船”には骨のシタリとイサギツネが、アヤカシを復活させるのに必要とする、スカリエツティからもらった試験管を眺めていた。

「……そろそろだねえ。」

シタリが言って少し経つと、試験管の中に入っていた三途の川の水がなくなり、復活を成し遂げたアヤカシが試験管からゆっくりと出てきた。そのアヤカシを見て、イサギツネは喜びを見せながらアヤカシに近づく。

「おおつ、「ヒャクヤツパ」！待っておったぞ！」

復活させたアヤカシは“ヒャクヤツパ”というアヤカシで、このアヤカシは体中にある刀を使って相手を斬り刻む力を持っている。そして“イサギツネ”は百の術を操ることが出来、この術を操り、シンケンジャーを苦しめたことがある。この二人は仲が良く、古くからの馴染みと言われている。

「イサギツネじゃねえか！互いに復活出来てよかったなあ！」

「そうとも！これで私達の力で、煮え汁を飲まされたシンケンジャーどもを懲らしめることが出来ますなあ！」

「ちょっとお前さん達、今シンケンジャーは“魔導師”とか言う奴らと手え組んでるらしいからねえ、油断しない方がいいよ。」

シタリは今までアヤカシを復活させてはミッドチルダで暴れさせていたが、最近になってシンケンジャーと魔導師が手を組み、外道衆の邪魔をしてくるようになっていた。そして復活させたアヤカシもすでにいくつか犠牲になっている。そのため、復活したことに喜ぶイサギツネとヒャクヤツパに向けて、注意を出した。

「シタリ殿、心配ご無用です。魔導師など私の術とヒャクヤツパの力があれば赤子当然。今からそれを証明しに行つてまいります。」

「ヒヤハハ！御老体はのんびり酒でも飲んで、待つてな。それじゃ行つてくるぜえ。」

イサギツネとヒャクヤツパは上機嫌にしながら三途の川に飛び込み、ミッドチルダに向かっていった。

「……本当に大丈夫かねえ、あたしゃあ心配だよ……。」

シタリは自信満々の二人を心配しながらも“スキマ”から二人の戦いを見ることにした。



### 第三十三幕 信用（後書き）

作「今回はスキマセンサーと遅れましたがイサギツネについて紹介します。」

スキマセンサー

志葉当家に設置してある「受」のモチカラが宿った鈴とおみくじでできているセンサー。

外道衆が隙間から現れると外に仕掛けられた「謀」の端末から電波を受けて本家の物が激しく鳴り、出てきたおみくじ棒の番号から居場所を地図で特定してシンケンジャーがそこへ向かう。外道衆がシンケンジャーをおびき寄せる目的で意図的に「謀」の端末を反応させたことや、隙間から逃げる外道衆に手近の「謀」の端末を投げつけ附着させることで発信機代わりに使ったこともある。

イサギツネ

葉を被った狐のような、からす鳥と翼のような、アヤカシである。

百の術を操ることが出来ると豪語し、人智を超えた様々な術を操る。相手の大技をやり返す“狐技返しの術”、姿を眩ませる“狐隠れの術”など、こちらが対処しづらい術を好んで多用する。また、“鏡映しの術”で目当ての相手を覗き見て、その秘密を探るとも言われている。

伝承は“天狗”。

作「源太の発言は言い過ぎた感じがします。そして相変わらず無理やり感が……。前書きにも書きましたが、なのは本編を組み合わせたオ리지ナルストーリーを予定してましたが、いろいろあって完

全なオリジナルストーリーとなってしまう、楽しみにしてた方、本  
当に申し訳ありませんでした。」

第三十四幕 信用 弐（前書き）

作「最近スーパー戦隊シリーズのOPを聞いているけど、どれも気に入ります。数十年立ってる作品でも劣ってる気配は感じられませぬね。（むしろ今のより結構いいのが……。）」

## 第三十四幕 信用 式

『ミッドチルダ 機動六課 廊下』

新しく知った六人目のシンケンジャー、梅盛 源太を少しでも知る為に屋台へ向かったなのは達、しかしそこで源太が、なのは達が地球生まれの人間だと知りなのは達の態度に怒りを覚え、更に源太の怒号にはやてが声を荒げて反論、たった一言でなのは達と源太との関係が悪化させてしまった知らぬ間起こった。

そして今、はやては怒りに任せ、ただひたすら源太から離れるように早歩きで誰もいない廊下を歩いていると、後ろからなのは達が駆け足で追ってきていた。

「はやてちゃん！ちょっと待ってよ！」

なのはの言葉に足を止めたはやては、ゆっくりと振り返る、その顔は先程の怒りを見せていたものとは違い、暗く、何かに後悔していた表情であった。

「・・・何や、なのはちゃん。」

「それはこっちのセリフ、いきなりどうしちゃったの。」

「まさか・・・源太さんに言われた事を気にしているの?」

フェイトの言葉に、はやては一瞬言葉を失うが、自傷気味に顔を綻ばせ、口を開く。

「・・・そうやない、ちょっと・・・考え事や。」

「考え・・・事?」

「うん、源太さんの言うことはもっともなんやし、何も教えてないうちも悪かったんや。この事は後で謝っとくからなのはちゃん達は気にしないでええよ。」

「でも・・・。」

「大丈夫やって、ほらもうすぐフォワードの子達が帰ってくるんやろ?お迎えに行った方がええで。」

はやては落ち着いた風になのは達を促せ、心配する親友達を大丈夫だと言い聞かせ、なのは達をフォワードの迎えに行かせた。

なのは達がその場から離れると、はやては思いつめた表情をし、拳を握る。今回の事は、何も説明しなかった自分にも非があり、この世界に来てわずか2日で理解しろなんて無茶なことはいえず、ましてやその人物に何も知らないくせにと豪打する立場ではなく、落ち着いたところで説明すればよい話であったが、今ではそれは敵わない。しかし、それでもなのは達を前にしていた時は、冷静さを保っていたようにいたのだが、その心の中では源太に言われた事が何度も響いており、自問自答を繰り返していた。

『常識もへったくれもあるかあ！子供に戦わせるくれえなら、自分が先頭に立つこともできねえのかよ！！』

「……違う。」

『心配だったら自分の役職捨てるくらいの覚悟がねえのかよ！！』

「……違うんや……うちは……！」

源太の言い分は的を得ていた。しかし、それがはやて達に出来ないのだ。自分が先頭に立って戦う、これら自体は何の問題がないと

思える、しかし、それらが許されるのは新人か、研修生までの局員を育てるときだけである、隊長であるのは達が先頭に立ち続けていれば、フォワード達がそれに甘えてしまい、緊急時に何もできない恐れがある。それが例えば子供であっても、管理局員である以上、特別扱いは出来ない上、戦闘の厳しさを教えるはずの教導官が教える子を守ってばかりでいたら話にならないのだ。

そして、はやて自身は管理局という、組織の上に立つ者として、部隊を、局員達を守らなければならない、もし役職を捨て、助けに行っただとしても部隊の上に立つ以上、勝手な行動をしていたら下の者に示しがつかない。それどころか誰も付いてこうとする部下がなくなってしまう可能性がある。そうなれば苦勞を重ねて作った部隊が崩れてしまうこともある。

とはいったものの、源太の言い分は正しいかもしれない、しかし、それだけでは何も助けられない。勝手な行動を取って飛ばされ、這い上がっていく途中で誰かが苦しんでいるかもしれない。救えたはずなのに、救えなかったのでは話にならないのだ。そして何より・  
・目の前で、何もできずに消えていった“リインフォース”の姿を見ているから、このような不幸な事件を二度と起こしたくない。だからこそ、叫ばずには居られなかったのかもしれない。

『ミッドチルダ 機動六課 ゴールド寿司』

はやて達がいなくなった後、源太は椅子に座り、暗い顔させて俯かせていた。勿論原因はさっきの出来事だ。源太はなのは達に感情に任せて言ったのだが、よくよく考えてみればここは管理局の一部

であり、なのは達はその局員、例えそれが地球生まれだとしても、従わなければならない。しかし、源太が怒った原因は別にあつた。それは“戦場に子供がいることを平然と思つている”事なのだ。

例え異世界であるミッドチルダでも、戦場に子供がいる事を不審に思う人はいるかもしれない、ましてや、地球生まれのなのは達がそのことについて少しは引け目を取つていればよかつた。しかしなのはとはやては、子供が戦場にいるにも関わらず、別の隊長がいるから大丈夫だと言い、更に自分達の過去の経験談でそのことを正当化していた。源太はそれを我慢して聞いていたのだが、とうとう我慢の限界になつてしまい、感情に任せてなのは達に言つてしまった。

しかし、源太はミッドチルダに来てからまだ三日程度しか立つてない。なのは達のこととはよく知らないし、事情も知らない。源太自身は言い過ぎたと思つているが、なのは達が会話していた事を思い出すと、どうしてもなのは達の事を信じられずにいた。

そして今、源太がなのは達について考えていた時、モチカラの稽古が終わつたのか、丈瑠達が源太の屋台に入つてきた。

「あつ、源ちゃんここにいたのかよ。」

「ッ……お前らか。寿司食いに来たのか？」



源太は丈瑠達が入ってくると顔を上げ、笑顔を作って丈瑠達を迎えるが、どことなく元気がないように見えた。

「・・・源さん、何かあったん？」

「・・・いや、なんでもねえよ。それより何食うか？おっと、ネタ仕入れてねえから巻き寿司しか作れねえんだ、すまねえな。」

ことはは元気がない源太を心配するも、促されて巻き寿司を作り始める。丈瑠達は源太の様子を見て“何かあったに違いない”と感じ、屋台の前に置かれた椅子に座ると、丈瑠が口を開く。

「何か・・・あったのか？」

「・・・まあ・・・ちよつとな、でも丈ちゃんが気にすることじゃないし、構わなくてもいいって。」

丈瑠に声をかけられた源太は、無駄な心配をかけさせたくない

感じ、悟られぬように元気に振る舞う、寿司を作るその手つきがおぼつかない様子でバレバレだったのだが誰も追及しようとはしなかった。そんな時、機動六課中に警報が鳴り響き、その音にびっくりした源太は寿司を作るのは止め、周りをきよるきよると見渡し始める。

「うおっ、なっなんなんだよいきなり！火事かあ！？」

「これは・・・外道衆かッ！」

「外道衆！？スキマセンサーかなんかあんのかここには？」

丈瑠は警報を聞くと、この警報は外道衆が現れた時になる警報と判断し、屋台から出る。警報についても知らない源太は戸惑っていたが、“外道衆”と聞くとど惑いながらも丈瑠と共に屋台から出る。

「説明は後だ。お前達、源太、行くぞ。」

「おっおっ、なんかわからねえけどわかった！」

「あっ親分！寿司、寿司！！！」

「わりい、ダイゴヨウ！何とかしておいてくれー！」

「そっそんなあ・・・！」

ダイゴヨウにそう告げると、源太はシンケンジャーメンバーの先導を受けながら走り出す。シンケンジャーメンバーが機動六課内に走り出すと、源太は顔をしかめるも走りつづけ、いつしかヘリポートに到着していた。ヘリポートには出発準備が整ったヘリと、隊長陣四名がすでに到着していた。

「・・・源太さん。」

「・・・。。。」

源太の姿を見たのははぼつりと呟いたが、ヘリのローター音でかき消された。源太はというとなのはとフェイトの姿を見るや否や、顔を背け、なるべく直視しないようにしていた。

「・・・志葉か。全員揃ったな。」

「ああ、こっちは大丈夫だ。」

「よし、そろそろ行く」

「わりい、丈ちゃん・・・俺あ降りるぜ。」

シグナムの言葉を遮るように、源太が顔を背けながらも口を開いて言った。その言葉に、その場にいた人達は源太に一斉に顔を向ける。

「おいおい源ちゃんどうしたんだよ、なんかおかしいぜ?」

「どうか・・・したの?風邪でも引いた?」

源太の急な言葉に千明と茉莉が源太の体調がおかしいのかと思いをかける。しかし源太は首を振って否定するとそのまま顔を向けずに言った。

「いや、風邪じゃないんだ。ただ・・・あいつらがいるとよう。」

源太は口を動かすと、申し訳なさそうにシグナムの方に顔を向ける。それに気づいたシグナムは顔をしかめ、源太の顔を見ると口を動かす。

「何だ、私達がいることに不満があるのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ・・・外道衆との戦いに、無関係のお前らがいるとなーんか集中出来なくてなあ・・・。」

「・・・どういうことだ？」

「いや、別にお前らを信用できないっていうわけじゃあねえんだ。ただ・・・なんつーかなあ・・・。」

「げっ源ちゃん、気持ちは分からなくもないけどさあ。」

「そうや源さん、うちらも最初は不安やってけど、大丈夫。ヴィー  
たちちゃん強いし何とかなるって。」

「いやいやことはちゃん、そんな問題じゃあ……。」

源太の言葉に千明は築いた関係を壊したくないのか、源太の説得を試み、ことはもそれに参加し源太は少し慌てる。しかしシグナムは一人納得したのか口に手を当て、しばらくするとヘリの中からパイロットのヴァイスの声が聞こえてきた。

「おい！まだですか、早く乗ってくださいよー！燃料も只じゃないんですからー！」

「ああもう源ちゃん！そう硬くならないで」

「谷、もうよせ。」

ヴァイスに急かされ慌てる千明に、シグナムはそれを止めると前に出て続ける。

「今回私達は出撃しない、それでいいだろう。」

「おっおう、それなら・・・な。」

「しっシグナム！？お前何考え」

シグナムの突然の言葉に、ヴィータは慌てるがシグナムはなのは達にも聞こえるように念話で話し始める。

「『仕方ないだろう、出会ってから数分話した程度の相手に、ともに戦おうっていえるほどの信用なんて、できないからな。このことは後で主に報告しておく。』」

「『で、でもよお。』」

「『何、苦戦するようであれば私達が出ればいいだけの話だ、それに相手を信じるには時間がかかる。今はこういった手段が妥当だろう、それに。』」

「『・・・それに？』」

「『なのはとテストロッサ、お前達もそんな状態じゃうまく戦えないはずだ、何があったか知らないが、今は志葉達に外道衆を任せて、お前達は今の状態から脱する事だけを考えろ。』」





ヒャクヤツパが現れたことで市民は混乱し、ヒャクヤツパは、お世辞にも言えないような奇声をあげると、素早い動きで逃げ回る人々を次々と斬り捨てていき、あたりはすぐに血の海と化した時、そこに要請を聞きつけた武装隊が駆けつけた。

「その未確認生命体、止まれ！」

「あぁん、誰だてめえら？俺に刃向うとあぁいい度胸だなあ？」

「くっ……黙れ！行くぞ！」

隊長らしき武装隊の人が声を上げると武装隊は一斉にヒャクヤツパに向けて走り出す。武装隊を前にしたヒャクヤツパは、怯えるどころか笑っていた。

「まあ、少しは楽しませな？」

ヒャクヤツパは走らず動かず待っていて、武装隊がヒャクヤツパに魔力弾を放ったがヒャクヤツパはそれを斬って受け流し、武装隊がヒャクヤツパに接近するとベルカ式デバイスで仕掛ける。そこにヒャクヤツパは自分の武器で受け流したりしては相手を斬り、武装隊と戦い始める。そして、一人の武装隊がヒャクヤツパの攻撃を槍型のデバイスで受け止めた。

「ぐっ……！」

「少しはやるようだなあ……だが無意味だ。」

ヒャクヤツパは攻撃を受け止めた武装隊を見ながら言うと、いきなり全身から刃のようなものが現れる。

「っ！な、なんだこれ」

「喰らえ、全身刃ア！」

ヒャクヤツパは全身から無数の刃を出すと、受け止めていた武装隊の人に斬りかかる。受け止めていた武装隊は刃を受け、血を流して吹き飛ばされる。

「ぐああああああああああつ！！！！！！！！」

「な・・・なんだよこいつ・・・！！」

「ふん、弱いなあ。ま、所詮シンケンジャーの奴らが来るまでの暇潰しだ。」

ヒャクヤツパは先程全身刃で斬り刻んだ武装隊を見て眩き、自分の刃を突きつけながらゆっくりと武装隊に近づいていく。武装隊はヒャクヤツパの攻撃を見て慎重になつてるのか、もしくはは怯えているのか、近づく度に遠ざかるように下がっていく。その時、どこからか獅子折神がヒャクヤツパに飛んでいき、折神はヒャクヤツパに噛みついてきた。

「ぐっ、ぐあつ！！」

「お前達は下がってる！」

どこからシンケンレッドに変身した丈瑠から、武装隊に声がかかり、武装隊は傷ついた仲間を連れてどこかへ行っていく。シンケンジャー達が来ると獅子折神はシンケンレッドの元に戻っていった。ヒャクヤツパは体勢を整えるとシンケンジャー達に顔を向ける。

「ふん、ようやく来たか、シンケンジャー。」

「おいおい、こいつ前に俺と丈ちゃんが倒したはずじゃねえのかよ！なんでここにいんだよ！」

ヒャクヤツパを見るなり、源太ことシンケンゴールドは指を指して驚いたように言う。

「確かに俺は貴様らに倒された。だが俺は蘇り、再び貴様らを斬り刻むために地上に上がった！覚悟しろよ？」

「く……いい気になるなよ外道衆！再び我らが退治してくれる！それが嫌なら隙間に帰れ！」

「よせ、流ノ介。さっさと行くぞ。」

シンケンレッドの合図にシンケンジャー達はヒャクヤツパに向けてシンケンマル、ゴールドはサカナマルを構えると走り出す。ヒャクヤツパはそれに応えるかのように刀を構え、シンケンジャーと戦い始める。

「俺と源太が動きを止める、その際にお前達は攻撃しろ！」

「はっ！」

「まかしときなあ！」

先にシンケンレッドとゴールドがヒャクヤツパに向けて斬りかかり、ヒャクヤツパは避けると反撃する。シンケンレッドとゴールドはヒャクヤツパの斬撃を受け流し、どんどん追い詰めていく。そしてついにヒャクヤツパは二人の手により吹き飛ばされる。

「ぐっ・・・全身刃を受けるオ！」

「来るぞ！」

「おう！」

ヒャクヤツパは全身から無数の刃を出し、シンケンレッドとゴールドに向けて斬りかかると二人はシンケンマルとサカナマルを使い、弾いていく。弾かれた刃は碎け散るも、ヒャクヤツパはおじけず無数の刃で斬りかかる。

シンケンレッドとゴールドはその無数の刃を捌ききれず、逆に斬られてしまい吹き飛ばされてしまった。

「ぐああっ！」

「殿！」

「殿様！源さん！」

「くっ……以前戦った時より強くなってる……！注意しろ……」

シンケンジャー達は一度集まり、再びそれぞれの得物を構えてヒヤクヤツパと距離を取り、そして頃合いを図り、走り出す。しかし、そのシンケンジャーの背後から突然何者かの姿が現れる。

「狐火の術！」

「なっ、なんだよこれっとうあっ！」

「きゃあっ！」

何者かは術を唱えると、シンケンジャーの周りから突然青い火の玉が現れ、襲い掛かる。突然のことでシンケングリーンとイエローは火にぶつかって倒れてしまう。他のシンケンジャー達はなんとか切り払い、シンケングリーンとイエローは立ち上がると何者かに向けてシンケンマルを構える。

「久しぶりですなあ、シンケンジャー。」

「うわっ……もう一体いたのかよ……。気配なんて感じなかったぞ！」

「そうですね、私の名前はイサギツネ。そして私の古くからの馴染み、ヒヤクヤツパ。我らは貴様らに倒された屈辱に耐えに耐えきれず、こうして再び蘇よみがえたのだ。」

何者かというのはイサギツネのことで、さっきまでイサギツネは“狐隠れの術”を使って様子を見て、意識がヒヤクヤツパに集中したことを確認して姿を露わし、背後から襲い掛かったのだ。そのせいか、シンケンジャー達は二人のアヤカシに挟まれる形になってしまった。

「おや、貴様らが協力しているという魔導師が居りませんか？魔導師はどうなされましたか？」

「へっ、てめえらなんざ、俺達だけで十分よ！」

「油断するな、こいつらの力は厄介だぞ……！」



囲まれたシンケンジャーは構え、二手に分かれてアヤカシと戦うことになった。イサギツネはブルー、ピンク、イエロー。ヒャクヤツパはレッド、グリーン、ゴールドに分かれて戦うことになった。

「はあっ!」

「ふん、二手に分かれたとしても我らには勝てぬ。」

「そんなの、やってみなきゃわかんないよ!」

ブルーはイサギツネに斬りかかるも、イサギツネは自分の武器“天為葉扇剣”を使って受け流し、ピンクとイエローが斬りかかるも避けたり受け流したりと避けていた。

そして、ブルーとピンクとイエローがイサギツネを囲むように立って構えると、イサギツネはにやりと笑みを浮かべる。

「狐ツムジの術!」

イサギツネが術を唱えると、イサギツネを中心に竜巻のようにつよいツムジ風が起きる。

「ッ！うあああー！」

「くっ……きゃあー！」

「とっ飛ばされ……きゃあー！」

シンケンブルーとピンクとイエローはつむじ風に耐えきれず、イサギツネの手によってヒャクヤツパの元に吹き飛ばされてしまう。

そのころヒャクヤツパの相手をしていたレッドとグリーンとゴールドは、ヒャクヤツパの全身刃を受け流しながら戦っていた。その時、誰かの声がだんだん大きく聞こえてくることに気づき、それぞれが顔を向けるとそこには、先ほど吹き飛ばされたブルーとピンクとイエローがこっちに向かってくることに気づいた。



「ぐあああつー!」

「ほっほっほ、お前達の力では我らに勝つことは不可能。今度は魔導師を連れてくることだな。」

吹き飛ばされたシンケンジャー達を見て、笑っているかのようにしながらもイサギツネはシンケンジャー達に言う。

「な・・・何だと!」

「そっぴやそっぴやなあ、お前らだけじゃなく、魔導師もいねえとつまらねえなあ!今度戦う時は必ず連れてこいよ?」

「ま、魔導師が居ても我らの力にも、敵いませんがね。ほっほっほっほっほ・・・。」

イサギツネは高らかに笑いながらも、ヒヤクヤツパと共に“スキマ”の中に入って消えていった。残されたシンケンジャーはゆっくりと立ち上がった。

「畜生……あいつら、舐めやがって……。」

「どつする、文瑠……?」

「ッ……。」

イサギツネとヒヤクヤツパが言ったことは明らかに挑発であり、挑戦状のようなものだ。しかし、これを受け入れるとなのは達は危険が伴ってしまう。それにゴールドと源太はなのは達を信用しておらず、もしこの状態で戦った場合うまくいかないかもしれない。そう言った面で見ると、明らかにこっちが不利、とレッドは思っていた。

## 第三十四幕 信用 式（後書き）

作「今回も今更ですが、秘伝ディスク（一部）とヒヤクヤツパについて紹介です。」

### 秘伝ディスク

秘伝の技により特殊な力が折り込まれたディスク型のアイテム。おもにシンケンマルにセットし回転させることにより能力を発揮する。使用時以外はシンケンジャーのベルトのバックルに収納される。志葉家には多くの秘伝ディスクが受け継がれていたが、そのほとんどが散逸し行方不明になっていた。

### 共通ディスク

全員が持つ黒いディスク。普段はシンケンマルにセットして鑊として機能し、シンケンマルを専用武器に変化させることもできる。

### 技ディスク

折神の力やモチカラのエネルギーが折り込まれたディスク。それぞれ色やデザインと発動させる能力が異なる。各々のモチカラで武器を強化することができ、折神の力が折り込まれたものは下記の技の使用時以外、後述の専用武器にセットして使用する。

・獅子ディスク：レッド専用。獅子折神の「火」の力が折り込まれている。「火炎の舞」という技を発動させることができる。

・龍ディスク：ブルー専用。龍折神の「水」の力が折り込まれている。「水流の舞」という攻撃技や、「水の幕」という視界遮断および緊急脱出用の技を発動させることができる。

・亀ディスク：ピンク専用。亀折神の「天」の力が折り込まれている。「天空の舞」という技を発動させることができる。

・熊ディスク：グリーン専用。熊折神の「木」の力が折り込まれて

いる。「木枯らしの舞」や「木の字斬り」といった技を発動させることができる。

・猿ディスク：イエロー専用。猿折神の「土」の力が折り込まれている。「土煙りの舞」や「土の字斬り」「猿回し」といった技を発動させることができる。

・雷撃ディスク：「雷」の力が折り込まれている。「雷電の舞」という技を発動させることができる。レッドが所持しているが、誰でも使用できる。

・寿司ディスク：ゴールド専用。「光」の力が折り込まれている。「百枚下ろし」や「千枚下ろし」という技を発動させるために使用

ヒヤクヤツパ

無数の刃のような、刀の柄のようなアヤカシである。

とにかく剣や刀が大好きで、武器を振り回しては斬って暴れることを好むをいう。体中の刀を自在に自在に突き出す“全身刃”という、非常に危険な技を使う。また、イサギツネとは仲が良く、古くから馴染みの関係である。

モチーフは“あみきり”

作「今回の話は難しいな……。叩かれることを覚悟に書いてます。

ー

第三十五幕 信用 参(前書き)

作「今回のゴーカイジャーは大いに笑わせてもらいました。そしてシンケンゴークイオーは気に入ってます、特にシンケンオーを連想させる姿がとて素晴らしいです。」

22:30頃、一部書き直しました。



### 第三十五幕 信用 参

『ミッドチルダ 街 ビル手前』

源太がなのは達を信用できず、シグナムはそれに気づいて自分も含むなのは達を待機することにし、ミッドチルダに現れた外道衆を退治するため出撃したシンケンジャー。しかし外道衆のアカシ、イサギツネとヒヤクヤツパの連携に翻弄され、さらに「今度戦う時、魔導師なのは達を連れてこい」と挑戦を叩きつけられたシンケンジャー。そして今、アカシのイサギツネとヒヤクヤツパは隙間を通っていなくなり、取り残されたシンケンジャー達は屈辱と悔しさを混じらせながらも立ち上がり、呆然と立ち尽くしていた。その時、上空からヘリがこちらに向かってくることに気づいた。そしてシンケンレッドに誰かから通信が入ってくる。

「志葉、無事かっ！」

「・・・シグナムか！ああ、なんとかな。」

通信相手はシグナムで、シンケンレッドはシグナム達に無事を報告する。そしてヘリは着陸し、ヘリの中からは達がそれぞれバリアジャケットと騎士甲冑を身に着け、そしてデバイスを持ってシンケンジャー達に近づいた。その中、シンケンゴールドはなのは達

が近づくとつれて少し距離を置き、ゴールドはなのは達が来た事が気になったのか、顔を背けながら聞くことにした。

「……お前ら、どうして来たんだ？ 出撃しないといっただろ。」

「……救援だ。余計なお世話かもしれないが、これも仕事の内だ、気にするな。」

「……。。。」

シグナムはシンケンジャー達が無事だったからか、少し顔を緩めてシンケンゴールドに返答した。ゴールドはそれを聞いてからか、黙りながらも顔を背け続けた。なのははゴールドを気に掛けながらも、現状をレッドに聞くことにした。

「あの……現状は？」

「……見ればわかる。」

シンケンレッドが顔をとおる方向に向き、なのは達もそっちに向くと、そこにはヒヤクヤツパの刃に斬られて倒れた市民と、その市民の救助に当たる魔導師が目に映った。倒れた市民の場所にはこれでもかというほど血が流れていて、幾度も戦場に立っているのは達でも、これほどの虐殺現場を見たのは初めてだからか、少し吐き気がした。

「酷い……。」

「これ……全部アヤカシがやったの？」

フェイトが呟いた言葉に、シンケンレッドは何も言わず頷いた。フェイトは執務管である以上、殺人現場は何度か目にしたことがある。だが、ここまで酷い現場を見たのは初めてだったらしく、寒気を感じた。さらに、この現場を作り出したアヤカシの力にも恐怖を少し感じた。特に全身に刃を持つ“ヒヤクヤツパ”に。

「……後は我々がやる。お前達は先に戻ってきてくれ。」

「ああ……わかった。だが気をつける。」

「何、心配は無用だ。」

シグナムは現場を少し見て、民間協力者であるシンケンジャー達に気をかけたのか、帰還するように言うと、シンケンジャー達はシグナムの指示に従い、ヘリに乗り込んで機動六課に戻っていった。残されたなのは達は局員に交じって、人命救助や救助活動の手助けを始めた。

救助活動を始めた時、ヴィータだけが暗い顔をしながらも活動していた。

『三途の川 六門船』

挑戦を叩きつけて戻ってきたイサギツネとヒャクヤツパ。自分達でシンケンジャーを翻弄し、ダメージを与えたことが嬉しかったのか、ヒャクヤツパは高笑いをしていた。

「ヒャーッハッハッハッ！これほどいい気分はひっさびさだな！」

「喜ぶのはまだ早いですぞ、ヒャクヤツパ。まだ魔導師が残ってま

すぞ。」

「魔導師がなんだろうと、所詮人間だ。俺がすぐに斬り刻んでやらあ！」

まだ戦ってない魔導師に警戒するイサギツネと対照的に、上機嫌に自信を持つヒャクヤツパをシタリは見ていて、ため息を一つ吐いた。

「ヒャクヤツパ、イサギツネの言うとおりだよ。あたしはこれまで、何度もアヤカシを復活させては、あいつらに何度もやられちゃってるからねえ、心してかかった方がいいよ。」

「御老体、まだ心配してんのか。俺とイサギツネのコンビを破られる奴らなんざ、どこにもいねえぜ？」

「ふん、その強気がいつまで続くかねえ……。」

シタリは今後の事も不安になりながらも、ため息を吐いて六門船の奥に入ってしまった。

「なあイサギツネ？御老体は何しに行ったんだあ？」

「何でも、“はぐれ者”を復活させようとしているようだな。」

イサギツネは自分の髭を撫でながら臆を見る。ヒヤクヤツパは腕を組んで壁に寄りかかる。

「ふん、“はぐれ者”なんざあ要らねえよ。俺達だけで十分つてのによあ。」

「ま、そうですね。今は、シンケンジャーと魔導師を倒すだけを考えましょう。」

イサギツネはまるで興味がなさそうに呟き、ヒヤクヤツパと共に倒す方法を話し始めた。

『ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋』

先に機動六課に戻ったシンケンジャーこと丈瑠達。丈瑠達は部屋に集まり、今回の戦いについて話し合っていた（ちなみに食事はとっていない）。

「ねえ、今度は魔導師を連れてこいって言ってたよね……。それって……。なのはさんの事かな？」

「……。ああ、それしか思いつかない。」

丈瑠は茉莉に聞かれるも、少し間を置いて返答する。今までこの一ミッドチルダ（世界）に来て、いつしかなのは達と協力して外道衆を倒すことになっていて、なのはとフェイトはサポート、シグナムとヴィータは丈瑠達と共に戦っている。丈瑠自身は、シグナムとヴィータの腕は勿論知っているが、サポートに回ってくれた方がずいぶん気が楽になるが、性格上、ヴィータはともかく、シグナムはサポートに回るのは難しい。そのため、丈瑠はシグナムとヴィータがサポートに回ることを半分諦めている。

しかし、今回の外道衆の戦いははつきり言ってリスクが高すぎる。何せアヤカシが二体同時で戦ったのは初めてだ。（ちなみにはぐれ外道の二人と同時に戦ったことはある。）それに二体とも厄介な技

や術を使用する上、コンビネーションもいい。戦うとなれば、なのは達の誰かが必ず傷を負う可能性が十分に見えてしまう。出来れば外道衆の戦いにおいての協力者、なのは達を傷を負わせたくない。だが彼女達は次の戦闘の時は参戦することは高いと考えられた。

源太は今話し合ってることが気になったのか、丈瑠に聞く。

「……丈ちゃん。次の戦い、なのは達も出るのか？」

「……可能性は高いな。」

丈瑠がそういうと、源太は顔を俯かせ、少し考えると顔を少し上げ、丈瑠達に向かって口を開く。

「……なあ丈ちゃん、どうしてもあいつらと一緒に戦わないといけないのか？」

「ああ、止めさせようとしたが、あいつらの覚悟は以前見せてもらった。心配は無いとは言い切れないがな。」

「なあ丈ちゃん、本当にあいつらと戦って大丈夫か？俺は一向に信



用なんて出来る気がしねえよ……。」

丈瑠の言葉を神妙な顔をしながら聞いていた源太は、口を開いてなのは達に対する不信感を口にする。そんな源太に何か気づいた千明は、ゆっくりと口を動かした。

「……源ちゃん、なのは達と何かあったのか？」

「……いや、何も」

「それにしては何かそっけない感じよ、源太。何かあったか話してごらん、少しは楽になると思うから。」

「まっ茉莉ちゃん……。」

「そうだぜ、源ちゃん。本来ならあいつら（なのは達）といざこざはありそうだけど、協力するって思ってたんだけどな。この世界に來てからずっと暗い顔ばっかだぜ。」

千明と茉莉に言われた後、源太は自分を心配する丈瑠達を見た後、少し考えると顔を上げ、重い口を開き始める。

「……わあつたよ。いやあいいんだろいやあ、話しても驚くなよ。」

「ああ、大丈夫だって。」

「うちの事は気にしないで、どーんと話してや。」

源太は確認を取った後。口を動かし、今朝、なのは達と何があったか話し始める。源太が話し終わると、文瑠達は何も言わず、ただただ聞いていた。

「……以上だ。」

「まさか、なのは達と喧嘩していたなんてねえ……。」

「怒りたくなる気持ちもわかるが、少しは冷静になって」

「これが冷静でいられるかよー！」

源太の話聞いた後、茉莉はため息交じりの息を吐いた後呆れたように言い。流ノ介は真剣な表情で説教交じりに答えるが源太は声を上げ、流ノ介の言葉を遮る。

「あいつら、俺達と同じように地球生まれなのに、子供達が戦場で戦っているのを平気でいたんだぞ！遠くの地域で全くの無関係ならまだしも、近くにおいて自分の教え子に対して……！」

「そ……それは。」

「それなのにあいつらときたら、何様のつもりなんだよ！平然と飯食いにきやがって……軍人なら軍人らしく」

「源太。」

声を荒げ叫ぶ源太を静めるように、文瑠は口を開いて叫ぶ源太を止める。

「お前の言い分はわかった。要はなのは達の態度が気に食わなかつ

たんだろ。」

「っ……そう言われりゃあ、そうなるけどよ……。」

「確かに、お前の言う通りなら、なのは達の取った行動は許されるものじゃない。」

「だろ？それなのにあいつらは」

「あいつらは、お前が思っている以上に酷くはない。」

「……え？……どういうことだ？」

「丈瑠の言うとおりだぜ、源ちゃん。」

丈瑠の言葉を聞き、言ってる意味が理解できなかった源太は、しどろもどもになりつつも丈瑠に聞こうとするが、千明が割り込んできた。

「俺、フォワード達と一緒にいることが多いけどさ、なのはやフェイトの悪口なんて聞いたことなんてねえぞ、むしろ喜んでるみたいだぜ。いつも最後まで訓練に付き合ってくれたり、自分達の欠点とか、そういうのもしっかりと教えてくれる。そして何より、自分達を信じてくれてるって、耳にタコができるぐらい聞いてんだよ。」

」

「・・・え？」

「フエイトさんは、エリオやキャラが管理局に入るとき、最初は反対していたみたいだよ。だから仕事が入ってない時はつきつきりいろいろなと世話を焼いてるんだって。」

「それに、フォワードのみんなも、ええ子ばつかや、スバルちゃんも、ティアナちゃんも、エリオくんも、キャラちゃんも！」

「はやてという部隊長も、若いけどそれなりに信用出来るぞ、まあ殿には敵わないがな！」

仲間達から来るなのは達の評価に、源太は自分の思っていた感じとは違っていたことに慌て始める。丈瑠達は、源太がミッドチルダに来るよりずっと前からいており、なのは達の事をよく知っていたため、源太の思っていることを間違いだと教えるために交互に口を開いては喋った。

しかし、源太はなのは達を知ってからたった数日で、なのは達の会話で自分の怒りを抑えきれずに爆発させてしまい、自ら亀裂を作ってしまった。その為、初対面はお互い悪い印象でしかないという最悪の結果になってしまった。(はやて、自身民間協力者として源太と顔を合わせているが、必要最低限の事しか教えて貰わなかったため、どちらかというところ初めて会話したことになる。)

源太自身もそのことに引け目を感じていたが、今朝の会話から信じていることが出来ず、外道衆が現れた時、なのは達と協力することを避けようとしていた理由は、それにあっただ。

「・・・わりい、考えさせてくれ。」

しかし、源太は仲間からの言葉を、信じることは出来なかった。いくら丈瑠達がなのは達機動六課のことを信用していても、源太は機動六課に馴染めず、更に偶然にもなのは達の会話によって不信感を爆発させていた。結果的に言えば、源太は丈瑠達のように、なのは達を信じることは出来なかった。

否、頭では自分の勘違いだとわかっていたのかもしれない。しかし、源太は本能的にそれを拒否していたのだろうか。その答えが出ないまま、源太は一言だけ告げるとそのまま部屋を出て行った。

「っ源太。」

「源さん！」

「止まれ、追わなくていい。」

出て行った源太を追おうとする流ノ介達を、丈瑠は声を上げてそれを止めた。丈瑠が止めたことに気に食わなかったのか、千明は丈瑠に詰め寄る。

「丈瑠、何で止めるんだよ！源ちゃんの事が心配じゃないのかよ！？」

「これは、源太一人の問題だ、俺達が言っても無駄だ。」

「でもよ、このままじゃ」

「それに、この問題はなのは達にもある。部外者である俺達に加わっても、余計にかき乱すだけだ。」

「・・・何だよ、俺達は見てることしか出来ねえのかよ。このままじゃせつかくの仲が台無しじゃねえか！」

丈瑠に止められ、叫ぶ千明に、他のメンバーも何も言えずにいた。

『ミッドチルダ 上空 ヘリ』

その頃丈瑠達と別れたなのは達は、しばらくして救助活動が終わり、迎えに来てくれたヘリに乗り込んで機動六課に戻っている途中だった。

「とりあえず、重傷した者は多いが死者はわずかで良かった。」

「運が良いのか、悪いのか、わかんねえな……。」

「うん、そうだね……。」

ヒヤクヤツパが傷つけた人達は、救助が早かったおかげもあるのか、死者は数名程度、重症を負った人は約十人に抑えることが出来た。だがそれでも安心することは出来ず、またいつ外道衆が来るかわからない。その為、なのは達は機動六課に帰還中だとしても、バリアジャケットを装着していた。静かに待機している時、ヴィータはふとなのはの顔を見ると、暗い顔をしていたことに気づいた。



「おい、なのは。お前、さっきから暗い顔してるけど、どうしたんだ？」

「えっ、な……なんでもないよ。」

「テストロッサ、お前もだ。出撃前から顔が曇ってばかりだぞ？」

「えっ？そ、そうかな……。」

ヴィータとシグナムが聞くとなのはとフェイトは話を逸らそうとする。ヴィータとシグナムは少し心当たりがあったので、念話で話すことにした。

「『……梅盛の事だな？』」

「『っ……。べ、別にそうじゃ』」

「『どうやら当たりみてーだな。隠そうとしたって、おめーの様子でわかる。もうこの際だから話せ。誰にも言わねーから。』」

「『……言わないと駄目？』」

「『駄目だ。』」

「……はい。」

シグナムが源太の事を言うとなのはとフェイトは動揺し、否定するがヴィータとシグナムには通じず、結局、今朝起きたことを話すことになった。

「……というわけなんだ。」

「……そうか、それで悩んでいたんだな。」

「いくらなんでも気が緩み過ぎだぞおめーら。」

悩んでいた原因を話すと、ヴィータに呆れたように言われ、小さくなるのはとフェイト。シグナムはため息を吐くと念話で話しかける。

「『今回の件は完全にお前達に非がある。梅盛も梅盛だが私達を知って僅か数日、そんなことを目の前で言われたらいくら私でも、疑

いたくもなる。』」

「『ごめんなさい。』」

「『謝るんなら源太にしとけ、こついったいざこざなんて、だらだらと続けたくねーからな。』」

ヴィータがそういうと、なのはとフェイトは小さくうずくまる。その様子をため息を吐きながら見るシグナムは、一息つくくとヴィータの方に視線を移すと念話で話しかける。

「『テストロッサ達はいいとして、問題は梅盛だな……。』」

「『梅盛って、あの金ぴかのシンケンジャーの事……。だよな、それがどうしたんだ？』」

シグナムがそう念話で話すと、ヴィータは疑問に思ったのかシグナムに聞き直す。

「『今の梅盛は、テストロツサ達の評価は最悪と言っても、過言ではない。恐らく、今回の件で梅森は、私達に対する信用がなくなっただといつてもいい。』」

「『それは・・・言い過ぎなんじゃないのか？いくらなのは達の対面が最悪だったとしても、そこまでは・・・。』」

「『そうとは限らない、高町の話によれば我が主も、同行していたようだ。機動六課のトップにいる主がテストロツサ達と共に来れば、必然的に重要な人物と考えてしまうのも無理はない。』」

「『・・・もしそうだとしたら、今朝取つてた行動が分かった気がする。』」

シグナムの言葉に納得したのか、首を縦に振るヴィータ。今朝源太の取つた行動は、なのは達と共に行くのを拒否していたの一点しかない。しかし、その視線はなのは達ではなく、自分にも向けられていたことを思い出し、その行動がシグナムに言われるまで理解できなかつた。・・・自分が子供に見られていたという可能性は否定できずにいたが。

「『だとしたらすっげーヤバいんじゃないか？』」

「『ああ、下手したら内部分裂も免れないかも知れない。』」

「『・・・流石にそれはないと思うぞ。』」

「『とにかく、梅盛についてはいつも通りに相手にした方がいい、余計な気を使うと、あえて混乱させてしまう。』」

「『りょーかい、でもはやてはどうする？すっげえ落ち込んでいると思うんだけどなあ。』」

「『・・・少々辛いと思うが、今回は主だけで解決して貰わなければなるまい、相談された時だけ、協力しろ。』」

「『相談された時って、つらくねーのかよシグナム。』」

「『こつちだって辛い、しかし、こういう問題は一人で解決するのが先決、私達が介入しても、何も変わらない・・・。』」

「『・・・そういうもんかなあ・・・。』」

二人が念話で話し終わると、へりは機動六課のへりポートに到着しており、なのは達はへりから降りて六課の中に入っていた。

### 第三十五幕 信用 参（後書き）

作「今回も秘伝ディスクの一部の紹介です。」

シールドディスク（盾ディスク）

折神や侍巨人の操縦に使用される。ダイシンケンに「斬」のモチカラを込めることもできる。

折神が収納されたディスク

使いこなすには他のディスクを使用する際の2倍以上のモチカラを必要とする。収納された折神を呼び出して操縦することや、その折神をシンケンオーに侍武装させて操縦すること、烈火大斬刀を大筒モードに変形させることなどに使用される。

兜ディスク：兜折神が収納されている。折神が収納されたディスクのうち、唯一現在の志葉家に残され受け継がれてきた。当初は丈瑠が所持しており、一時は茉莉に渡されるが、紆余曲折を経て千明が所持することになる。

舵木ディスク：舵木折神が収納されている。舵木折神を釣り上げた流ノ介が所持する。ウォーターアローにセットしてヤミオロクの毒を浄化する雨を降らせることもできる。

虎ディスク：虎折神が収納されている。虎折神の呪縛を解き放った丈瑠が所持する。

烏賊ディスク：烏賊折神が収納されていたが、現在は収納されておらず後述のように烏賊折神は小さくなってゴールド寿司の屋台の水槽の中にいる。幼少の頃、丈瑠が約束と友情の証として源太に授けたもので、烏賊折神を召喚する際に使用される。

恐竜ディスク：恐竜折神の力が折り込まれたディスク。「夏の陣」（劇場版）で入手したものであり、その後もシンケンジャーが所持している。

牛ディスク：牛折神の力を制御するためのディスク。「王」のモチカラが折り込まれており、牛折神をモウギユウダイオーに変形させることもできる。

作「今回の話は難しく、戦闘も含めて長くなると思います（本編シンケンジャーに例えるならば、「話構成？」）。慎重に、ゆっくりと書きたいと思います。」

第三十六幕 信用 四（前書き）

作「活動報告で『スランプ』と書きましたが、詳しく言えばスランプは会話の方で、戦闘の方はなんとか大丈夫です。ウソみたいになっ  
てしまい、申し訳ありませんでした。」



## 第三十六幕 信用 四

『ミッドチルダ 機動六課 会議室』

機動六課に戻ってきたなのは達は、共に遅い食事を済ませた後隊長陣と丈瑠は、会議室に集まっていた。集まった理由は、今回現れたアヤカシの事だった。そのアヤカシは、会議室にある大きなモニターに映っていた。

『ほっほっほ、お前達の力では我らに勝つことは不可能。今度は魔導師をつれてくることだな。』

『そういやそうだなあ、お前らだけじゃなく、魔導師もいねえとつまらねえなあ！今度戦う時は必ず連れてこいよ？』

『ま、魔導師が居ても我らの力にも、敵いませんがね、ほっほっほっほっほ……。』

そのアヤカシはイサギツネとヒャクヤツパ。モニターに出ているアヤカシは、午前中にシンケンジャーと戦った時の映像で、ロングアーチが今後の対策のため、録画したものだ。なのは達と丈瑠はイサギツネとヒャクヤツパの去り際の所を見ていた。

「……これは明らかに挑戦状やな……。」

「でもよ、これ挑発と見てもおかしくねえな。」

モニターを見てはやてとヴィータが言う。丈瑠は腕を組み、静かに椅子に座っていた。

今回のアヤカシは二体、イサギツネとヒヤクヤツパの連携も良く、こちらは二人の手により翻弄されてしまった。正直言つて今回の外道衆は、なのは達には荷が重すぎると感じていた。しかし、丈瑠は何か月か機動六課（こく）にいるので、少なくとも何考えてるか大体わかるが、一応聞くため口を開く。

「……お前達はどうする？」

「……志葉、お前ならば“行くな”と言いつつだが、私は行くぞ。挑戦を叩きつけられてこなかったら、騎士として恥だからな。」

「お前達の戦い見て、どんなアヤカシか大体分かったからな。じっくり作戦を考えて戦えば、負けやしねーよ。」

「・・・そう簡単にいけばいいんだがな・・・。」

丈瑠は不安そうにしながら顔を逸らす。今回のアヤカシで、一番危険なのはイサギツネだ。イサギツネの術はとても卑しく、こちらが不利になるような術しか使ってこなかったため、変身が解かれて一時やられそうになったほどだ。

そしてヒヤクヤツパ。ヒヤクヤツパは全身に刃があり、刃を自分の体の一部のように扱うほどの実力者であり、イサギツネほどではないが危険なのは変わりない。今回の戦いは誰かが傷ついてもおかしくないため、念のためアヤカシについて言うことにした。

「一応言っておくが、イサギツネの術と、ヒヤクヤツパの刃には気をつける。特にイサギツネは俺達に不利な術を好んで使う。そして奴は、俺達の技を返したり真似て使ってきた。注意しろ。」

「ああ、わかった。」

「(こちらは対策を練ればどうにかなるが、問題は源太だな・・・。」

丈瑠は心の中で不安そうに呟いた。現在、源太はなのは達を信用していない。外道衆が現れた時、今回はシグナムが気を使わせたおかげでシンケンジャーだけだったが、今回は源太が反対してもなのは達が出撃するはずだ。そのため、丈瑠は悪い方向に行かないことを、心の中で祈ることにした。

『ミッドチルダ 機動六課 ゴールド寿司』

時間が進み、夕方になった。源太は丈瑠達と部屋で別れた後、ずっとここにいた。食事は一応軽く取ったが、その食事は黒子が用意してくれた物だ。源太はゴールド寿司で、機動六課<sup>この人達</sup>を信じていいのか悩んでいた。

「あの・・・親分？」

「・・・・・・・・・・。」

黙る源太にダイゴヨウは心配し、声をかけるが源太は無言を貫いた。丈瑠達の言う通り、なのは達の人柄はいいかもしれない。だが子供を戦場に送ることがどうしても納得がいかなかった。戦場という場所に、安全なんてない。外道衆との戦いで、源太は少なからず

戦場については知っているはずだ。当然、その事はなのは達も熟知していると思っていた。

しかし、なのは達は隊長陣の二名がいるから、安心だと言っていた。子供が戦場で戦っているにもかかわらず、安心だと言った。それが源太がいまだになのは達を、管理局を信用できない理由でもあった。魔法が使えるれば子供でも管理局員になれる、それについても管理局自体がどうかしていると感じていた。

源太は本当に機動六課を信用してもいいのか、悩んでいる時に後ろから誰かの声がかかって

「あれ、源太さん……ですよね？」

「……んあ？」

源太が声に反応して後ろを向くと、そこにはスバルが居た。そしてスバルの後ろからはティアナ、エリオ、キャロの姿もあった。四人とも訓練をしてきたからか、体育着のままだ。

「なんだ、お前らか……。今店閉めてっから寿司握れねえからよ、

わりいな。」

「いや、そういうつもりじゃないんですけど……。ただ、何してるのかなーって……。」

「ああ、そういうことか。……明日の屋台の準備ってやつだな？」

源太はスバルに聞かれるなり、考えても無かったからか思い付きを口にした。

「屋台って……、確か……ダイゴヨウがぶら下がってるのですか？」

「おう、元いた世界で屋台を引いて、店を開いて寿司を振る舞ってたなあ……。」

「へえー、そうなんですか。屋台って源太の世界にもっとあったんですか？」

「まあな。寿司以外に、いろいろ種類があんだよ。」

「はあー、一度見てみたいなあ〜。」

スバルは源太の屋台“ゴールド寿司”をじろじろと見ながら源太と話す。源太はスバルと話していると少し気が和らぎ、少しすると源太は口を開き、スバル達に声をかける。

「……なあ、お前ら。少し……聞いてもいいか？」

「えっあ、はい、なんですか？」

源太の問いに、フォワード達は源太の方を見る。屋台を見ていたスバルは、急に話を振られて少し慌て、源太の言葉に答えると源太はゆっくりと口を開いた。

「……どうして、管理局なんかに入ったんだ？」

そう源太は聞くと、フォワード達の動きが一瞬止まった。この質問は、以前エリオ達に振られた質問であった。しかし、今回の質問

の内容は同じであれ、中身が違っていた。軽く聞かれたようなものではなく、余りにも重い質問だった。

「どつして……管理局に……。」

「……嫌なら、別に言わなくてもいい。」

「……私、憧れていたんです。」

重い空気の中、スバルはゆっくりと口を開いた。

「四年前、とある災害で、巻き込まれたんです、あたし。迫りくる炎がとても怖くて、一緒だったギン……お姉ちゃんともはぐれちゃって……とても、怖かった。そんな時、なのはさんに救われたんです。その時のなのはさんは、強くて、やさしくて、かつこよくて……。」

「……憧れてたから、入ったのか？」

「それもあるんですが、あたしは……そんな中で自分の弱さに気づいたんです。だから、もっと強くなりたい、あたしのように、災



害で困っている人を救いたいから……。だから、戦う力と魔法を一生懸命勉強して、管理局に入って……。大切な仲間と出会って、いろいろあって今の自分があるんだと思うんです。」

源太は、スバルの言葉を静かに聞き、時折質問しながらも聞いていた。スバルが話し終わると、源太はゆっくりと口を開く。

「……そんな思いがあつたなんてねえ、スバルちゃんは、後悔とかなかつたのか？」

「後悔とかそういうのはないです、色んな人達と出会えたり、いっぱい訓練してくれたり……。特に一番うれしいのがなのはさんがあだし達を信頼してくれていることなんです。」

「……信頼？あのはってやつが？」

スバルから予想外の言葉がでたのを聞いた源太は、顔を上げると視線をスバルに向ける。

源太自身、今朝の件でなのはの人柄を疑っていた。だからこそ、スバルから信頼しているという言葉が出るとは思っていたなかつた

のだ。

「源太さん、その言い方は……。」

「あっああわりい、続けてくれ。」

「……もう一度言いますね。なのはさんは、あたし達を信頼してくれているんです。訓練中、失敗とかしても怒らずに指摘してくれたり、任務でもあたし達のサポートをしてくれるんです。それに……。」

「……それに？」

「一度、あたし達無茶やって、なのはさんにものすごく怒られた事があるんです。」

スバルはそういつと恥ずかしそうに頭を掻きながら続ける。

「まあ、その時はアヤカシの策だったとかいろいろあって、うやむやになったんですけど。その時のなのはさん、とても怖くて……頼もしかったんです。なのはさんの教導って、どんな現場でも無理

をしないように、生き残れるように、私達の事を第一に考えてくれてたんです。だから任務でも、安心して任せてくれるんだとあたりは思っんです。」

「・・・まさか、ねえ。」

「一度、源太さんもなのはさんと話してみてください。きっと、いい人だってわかるはずですよ！」

そういうスバルの顔は、眩しいくらいに光っていた。源太はそんなスバルの顔から背けると、フォワード達の顔が視線に入ってきた。その顔は、笑顔に満ち溢れていた。

しかし、源太はその話を聞いても、顔はうつすらと暗くしていた。恐らく、スバル達は源太となのは達との間でいざこざがあったのを知らない、だからこそ、こういうことが言えた。源太自身、スバル達の話聞いて、この子達はなのは達のことを信頼しているのだと感じた。しかし、それでも尚、源太は複雑な感情を抱いていた。

いざこざはあったにせよ、時が進むにつれ、自分が思っているほど悪い奴ではない、ということが分かってきた。しかし、源太なのは達から“子供が戦場にいる”事を平然と認め、更には自分の過去と照らし合わせ、大丈夫だとまでいった。いくら訓練でしっかり基礎をしているといっても、その場その場で変わるのが戦場、絶対しも、安全とは言い切れない、何より、なのはからあの子達なら大丈夫だ、信頼しているからといった言葉すら聞いていないのだ。教え子であるこの子達に言われても、到底信じることなどできなかつ

た。

そんな時、突然警報が鳴り響き、源太は顔を上げる。

「ッ！」

「この警報・・・外道衆！源太さん！」

「ああ・・・ダイゴヨウ、行くぜ！」

「がつてん！」

源太は立ち上がるとダイゴヨウを連れて走り出し、フォワード達と共にヘリポートに向かった。

『機動六課 ヘリポート』

源太達がヘリポートに向かっている時、丁度なのは達と丈瑠達と合流し、ヘリポートに入っていた。その時、源太はなのは達と顔を合わそうとしなかった。

「皆、集まったね？」

「はい。あの・・・体育着で申し訳ありません。」

警報が鳴った時、フォワード達は訓練帰りに源太と出会い、話をしている時だったため、着替えてる暇はなかったのでその時のままになっていた。

「緊急だからな、今回は不問だ。」

「警報聞いてわかると思うけど、廃棄都市区画に外道衆が現れたの。文瑠さん達と私達は外道衆の殲滅、フォワードは・・・」

なのは今回の任務について、フォワードはどうするか言いかけるも、フォワードの方を向いて言い続ける。

「フォワードは黒子さん達と一緒に、廃棄都市区画の近くに住む人達の、避難誘導をお願い。」

「「「「はいつ！」「」「」

なのはの指示が出るとフォワードは頷くが、源太は顔を逸らして苦虫を噛んだような顔をした。

その後状況について説明した後、丈瑠達となのは達はへりに乗り込み、外道衆がいる場所に向かっていった。

『ミッドチルダ 廃棄都市区画』

廃棄都市区画にはすでに、イサギツネとヒヤクヤツパがすでに立って待っていた。そして二人を囲むようにナナシ連中が待ち構えていた。

「ふむ・・・そろそろ来てもよろしいのですが・・・。」

「やっぱり大暴れしときゃあよかったかあ？」

イサギツネとヒヤクヤツパが軽い会話をしていると、突然太鼓の音が鳴り響いた。イサギツネとヒヤクヤツパはその方向に振り向くと、そこには陣幕を立てた黒子と、袴姿の丈瑠達が立っていて。その陣幕の横には、すでにバリアジャケットと騎士甲冑をそれぞれ身につけたなのは達がいた。ちなみにダイゴヨウは、源太に言われてフワード達と一緒にいるため、ここにいない。

「そこまでだ、外道衆！」

「ようやくお出ましますか。どうやら今回は言いつけた通りに魔導師もいるようですね？」

「ああ、確かに言いつけ通り来た。我々の力を見くびるな。」

「行くぞ、お前達！」

丈瑠が声を上げると、丈瑠達はシヨドウフォンを取り出し、源太はスシチェンジャーと寿司ディスクを取り出し、スシチェンジャーを開いて“光”と書かれたスイッチを押し、スシチェンジャーとディスクを折りたたむ。

「「「「「一筆、奏上！」」」」」

「一貫献上！」

文瑠達はそれぞれ赤い“火”、青い“水”、“ピンク色の“天”、緑色の“木”、黄色い“土”を宙に書き、源太はスシチェンジャーに折りたたんだ寿司ディスクをセットして左右に動かすと光が集まってくる。そして文瑠達は宙に書いた文字を反転してスイッチを押し、源太はスシチェンジャーを前に出すと文字が現れ、それぞれ文字に包まれるとシンケンジャーに変身を遂げた。

「では、お手並み拝見と行きますか、ナナシ連中、かかれ！」

「まずはナナシ連中を一掃するぞ！」

「ああっ！」

「おうっ！」



ナナシ連中がシンケンジャー達に向かってくると、シンケンジャー達は答えるようにナナシ連中の元に行き、戦い始める。シグナムとヴィータもナナシ連中の元に行き、シンケンジャー達と共に戦い始めた。

シンケンジャー達はそれぞれバラバラになってナナシ連中と戦っていて、中でもシンケンゴールドは得意の居合でナナシ連中をなぎ倒していくが、シグナムとヴィータとは、距離を置いて戦っていた。

「なのは。」

「うん。」

なのはとフェイトは源太に気をかけつつも、サポートするため浮かび上がるうとした時、突然刃がなのはとフェイトに襲い掛かってきた。

「…」

襲い掛かってきた刃は、なのはの“プロテクションEX”で何とか防ぎ、刃は引き下がっていく。フェイトはバルディッシュを構えてなのはの前に出て、刃の行方を確認すると、そこにはイサギツネとヒャクヤツパの姿があった。

「ほう？俺の刃を防ぐとはなかなかやるなあ。」

「その魔導師共、奴らがナナシ連中と相手をしている間、我らが相手をしてやりましょう。感謝するがよい。」

「っ……っ！」

刃の行方と目で辿っていくと、そこにはアヤカシのイサギツネとヒャクヤツパの姿があった。サポートに行こうとしたのはとフェイトを無理矢理にでも止め、勝負を挑んできたのだ。

「しまった……、逃げろ！お前達では敵わない！」

なのはとフェイトを見てシンケンレッドが叫ぶ。なのはとフェイトは殺傷設定には慣れてないため使えず、非殺傷で戦うにしてもあまり効果的ではない。それにイサギツネとヒヤクヤツパの能力はモニターで見ているため、無闇に戦えば返り討ちに合う可能性がある。だからと言って逃げる訳にはいかない。逃げれば追いつかれてしまうかもしれないし、シンケンジャー達とシグナム達に危険が及ぶかもしれない。それ以前に、敵前逃亡してしまつたらそれだけで機動六課の評価が下がってしまう危険性がある。そして今、シンケンジャー達とシグナム達はナナシ連中が邪魔になつてアヤカシの元に行けない。

なので、なのはとフェイトが選んだのは、時間を稼ぐため戦うことにし、デバイスを構える。

「ほっほっほ……楽しませてもらいますよ？狐つぶて！」

先に動いたのはイサギツネだ。イサギツネは光線を目から、なのはとフェイトに向けて放つ。なのはとフェイトはそれぞれ散開し、イサギツネとヒヤクヤツパと距離を取る。

「アクセセルシューター！」

なのはは空中で立ち止まり、魔力弾を作り上げるとイサギツネとヒヤクヤツパに向けて放つ。これは攻撃目的ではなく、時間稼ぎのため、足元に向けて撃った。しかし、イサギツネとヒヤクヤツパは一步下がるが、平然と立っており、なのはの魔法を見たヒヤクヤツパは笑い出した。

「ヒャーハツハツハア！貴様の魔法はその程度かあ！弱すぎて笑っちゃまうぜえ、ヒャーハツハツハツハア！！」

「『くっ……。フェイトちゃん、ちよつといい？』」

「『何、なのは。』」

「『時間稼ぎに、ちよつと無理するかも知れないけど、いいかな？』」

「『。。。うん、わかった！』」

なのはとフェイトは念話で話すと、なのははデバイスを構え、フェイトは身構える。

「お、今度は何の魔法を使うんだ？」

「ま、どんな魔法だろうと受けて立ちますがな。」

「・・・行くよ、バルディッシュ。」

【イエッサー、ソニックムーブ】

バルディッシュからAIが喋ると、フェイトは目にも止まらぬ速さで空中を飛び、イサギツネとヒャクヤツパの間を潜りぬけ、更に時折バルディッシュを振りかざし意識をこちらに向けさせるように動く。その間なのははカートリッジを4発ロードし、レイジングハートをヒャクヤツパに向ける。この時、なのはは外道衆に対して、非殺傷では大したダメージは入らないとすでにわかっていた。だが、魔力を上げて魔力ダメージを蓄積させればダメージを与えられるはずだと考えた。尚、イサギツネにデバイスを向けなかったのは、丈瑠の助言による“技を返す技”の存在の危険性を考慮したまでの事である。

「『行くよ、フェイトちゃん!』」

「『うん、わかった!』」

「デイベイイイイン、バスターアアアアアアアアアア!」

なのはは念話でフェイトに伝えると、フェイトは離れていきなのはの砲撃魔法が発射され、ヒャクヤツパに襲い掛かる。しかし、ヒャクヤツパは迫りくる砲撃を恐れず、更には外道衆側で先に動いたのは、ヒャクヤツパではなくイサギツネだった。

「・・・狐技返し。」

「えっ?」

イサギツネは何も身構えず、自分の剣を口元から動かさず、ただ術を唱えた。するとヒャクヤツパの前から謎の空間が現れ、なのはのデイベインバスターはその空間に吸い込まれていく。そして数秒後、なのはの背後から桜色の砲撃が迫り、直撃した。



フェイトは落ちるなのを受け止めるため飛んでいき、イサギツネとヒヤクヤツパはその様子を笑ってみていた。それを見たヴィータは無意識になのはが過去に墜落した時の様子が脳裏を横切り、逆上し、仲間の制止する声を振り切り、イサギツネに向かって速く飛んで行った。イサギツネはその場を動かさず、左手を上げてヴィータに向ける。

「・・・真似狐。」

イサギツネは左手を上げたまま、静かに術を唱えると、左手から桜色の光が集まり、そのまま左手から桜色の砲撃が放たれる。ヴィータはその砲撃を避けきれず、直撃してしまった。

「ヴィータ！」



砲撃が当たった直後に爆発が起きて煙が上がり、煙から何かか転がってくる。それはボロボロとなった騎士甲冑を身に着けたヴィータで、グラーファイゼンは弾き飛ばされたのか、ヴィータと少し離れた場所に転がっていて、ヒビが入っていた。

「ヴィータちゃん！」

「ヴィータ、無事か！」

「ぐ……あ、ああ。なんだよあいつ……、今のつて……。」

「……前に言ったはずだ、あいつは俺達の技を真似て使ってくる。さっきのは恐らく、なのは魔法を真似たんだろうな。」

シンケンレッドの言葉にシグナム達は冷や汗を掻いた。さっきのイサギツネが真似たのは先程なのが撃った魔法“デイバインバスター”だ。イサギツネは、ヒヤクヤツパに向けて撃った砲撃を“そのまま”真似てヴィータに撃った。その際、非殺傷も真似てたため幸い大事には至らなかった。だが、イサギツネはこの真似た魔法が気に入った様子を見せている。このまま時間が進めばこっちがやらせてしまうと思っただレッドは、どこからか、インロウマルを取り出そうとした時、はやてから通信が入る。

『皆、撤退や！これ以上戦ったら、全滅してまうー！』

「・・・わかった。お前達、ここはいったん」

「させつかよお！」

撤退しようとしたシンケンジャー達とシグナム達に、ヒヤクヤツパが襲い掛かってきて、全身から刃を使って斬りかかってきた。刃は分散したため、それぞれは何とか防げることが出来たが、シンケンジャー達とシグナムが分散すると、ヒヤクヤツパはシグナムに向けて襲い掛かってきた。

「うおおおおおー！！！！」

「ぐっ・・・！！」

「シグナム！！」

ヒヤクヤツパを戦い始めたシグナムに、シンケンジャー達が救援に行こうとしたが、シンケンジャー達の足元に光線が飛んできて、立ち止まってしまふ。

「お前達の相手はこの私です!」

「くそ、こんな時に・・・!」

光線を出したのは紛れもなくイサギツネ。イサギツネはゆっくりとシンケンジャー達に向けて歩いて近づいてくる。シンケンレッドはこのままではまずいと思い、どこからか“インロウマル”を取り出した。

「お前達、時間を稼げ。」

「殿・・・、わかりました!」

「ああ、時間稼いでやらあ!」

シンケンレッド以外のシンケンジャー達はイサギツネに向けて走り出し、シンケンマルやサカナマルで斬りかかるも、イサギツネは避けたり受け止めたりとシンケンジャー達の攻撃を耐えていく。

その間、シンケンレッドはインロウマルにスーパーディスクをセツトしようとした時、横からヒャクヤツパの刀が飛んできた。

「おっと、手が滑っちまったぜ！」

「ッ！」

飛んできた刀はヒャクヤツパが技と投げてきたものだ。シンケンレッドは飛んできたことがすぐにわかり、避けるためしゃがみ、刀を避けた。

「よそ見をするとは、いい度胸だな！」

「威勢はいいな、だがそろそろ終わりにしてやらあ……全身刃ッ！」

ヒャクヤツパはシグナムの斬撃をもう一つの刀で受け止めると、背中から無数の刃を出し、シグナムに向けて斬りかかってくる。シグナムはとっさに距離を取り、レヴァンティンで次々に襲い掛かってくる刃を受け流したり避けたりして回避していく。

「おらおらおらぁ」

「くっ……このままでは……！」

シグナムは次々に襲い掛かってくる刃にだんだんと捌ききれず、後退していくと壁に追い詰められてしまい、とどめを刺すかの如く刃をシグナムに向けて突き出してくる。しかし、シグナムはカートリッジをロードし、レヴァンティンは炎に包まれた。

「紫電一閃！」

「っおおおぁー！」

シグナムの紫電一閃により、ヒャクヤツパの刃はほとんど折れ、ヒャクヤツパが吹き飛ぶと同時に消え去る。しかし、ヒャクヤツパの猛攻による刀キズ、更に吹き飛ばせなかった一部の刃は、シグナムの騎士甲冑を掠め、ところどころ血を流しており、満身創痍で立っていた。

その頃イサギツネと戦っていたシンケンジャー達は、イサギツネの術のせいで苦戦を強いられていた。イサギツネは左手を掲げ、術を唱えた。

「真似狐の術！」

イサギツネの左手から再び桜色の光が集まり、そのまま左手から桜色の砲撃が放たれ、シンケンジャー達に襲い掛かる。

「「「うああああ！！！」」」

「「「きゃああああ！！！」」」

イサギツネがなのはの砲撃魔法を真似た術を受けたシンケンジヤ  
「達は耐えきれず、変身が解かれると同時に吹き飛ばされ、地面に  
叩きつけられる。」

「ほっほっほ、そろそろとどめと行きましようか？」

「くそ……っ。」

イサギツネはゆっくりと流ノ介達に近づき、源太の前に立ち止ま  
った。

「まずはシンケンゴールド、貴様からだ。最初に殺されることを嬉  
しく思うんだな。」

「ん……だとお……！」





庇ったのはシンケンレッドで、斬られたシンケンレッドは炎に包まれ、ゆっくりと倒れていき変身が解かれる。イサギツネが真似た“紫電一閃”は、シグナムが外道衆と戦う前提で殺傷設定にしていたため、丈瑠に大きな傷を作った。丈瑠は斬撃を受けたとともに気を失ってしまい、ピクリとも動かなかった。

イサギツネは突如現れたシンケンレッドに困惑するも、再び剣を構えるがイサギツネの体が干からびてくる。運が良かったのか、悪かったのか、水切れた。

「くっ……こんな時に……。まあ、シンケンジャー共に大打撃を与えただけでもよいでしょう。今度会ったときは、確実にとどめを刺しましょう。ヒヤクヤツパ、戻りませぬ。」

「チツ……。まあいい、次会ったら貴様らの首、貰い受けるぜ。首を洗って待つてろお！」

イサギツネとヒヤクヤツパはそれぞれ言葉を置いて“スキマ”を通って三途の川に戻っていく。残された機動六課の隊長陣の中で、唯一動けるフェイトは応急処置を始めるため、フォワードを呼ぶ為に念話を送り続けながらも、倒れる仲間の救援に向かった。

その頃、戦闘の現状を見ていたロングアーチでは、不穏な空気に包まれていた。

「……嘘、やる……。」

全滅に近い、丈瑠達の姿に、はやてはつい呟いてしまう。恐らく、この感情を抱いていたのははやてだけではなく、ロングアーチ全員思っていた事であろう。そして、時間が経つにつれ、新たな感情が沸いてくる。“絶望”、この一言に尽きる物であった。今まで無敗を誇っていた外道衆及び任務での戦いで、これほどまでの圧倒的な力を持ち、戦闘不能に出来る者など、ありもしなかった。信じていた力が大きければ大きいほど、崩された時の絶望感は大きかった。

「……救護班。」

「……えっ。」

「救護班、直ちに現場へ急行や！私も出る。手の空いてる人も行くんや……！」

「はっはい！」

ロングアーチは現状を理解できないまま、はやての指示に従い行動を移していく。一方、はやてはすぐにロングアーチから出て、不安を募らせながらも救護班と共に出撃し、丈瑠達の元に向かっていた。

### 第三十六幕 信用 四（後書き）

作「今回もディスクの一部について説明します。」

スーパーディスク

シンケンジャーをスーパーシンケンジャーにパワーアップさせるためのディスク。スーパーシンケンマルの鍰として機能する。

侍合体ディスク

「合」のモチカラが込められたディスク。「折神大変化」による折神の巨大化などの手順を踏まずに、シンケンオーへの合体を可能にする。

超侍合体ディスク

「超」のモチカラが込められたディスク。折神の収納された秘伝ディスクがない場合でも、その折神を呼び出すことが可能で、テンクウシンケンオーへの合体に用いられる。

真侍合体ディスク

真侍合体をさせるためのディスク。ダイカイシンケンオーの操縦にも用いられる。折神の収納された秘伝ディスクがない場合でも、その折神を呼び出すことが可能。

全侍合体ディスク

「全」のモチカラが込められており全侍合体を行うことができる。牛ディスクとともに牛折神の車輪を構成しており、双方のディスクに込められたモチカラおよび見た目が良く似ている（王という字と全という字）。

作「こんな形になってしまいました、なんとか投稿できました。  
ですが、このような結果を望んでいない方が居りましたら心よりお  
詫び申し上げます。作者は会話が苦手なため、長くなると思います  
が、なるべく早く投降できるように頑張りたいと思います。」

### 第三十七幕 仲間（前書き）

作「大変お待たせしました。最近スランプ気味で、更新が不定期になると思いますが、これからもよろしくお願いします。」

どうでもいい話だと思いますが、最近話の出だしがシンケンジャー本編のナレーションっぽくなってるのは気のせいだろうか？」

19:30ごろ、一部文章消去しました。疲れてんのかなあ・・・。

## 第三十七幕 仲間

『ミッドチルダ 廃棄都市区画』

イサギツネとヒヤクヤツパに手も足も出せず、シンケンジャー達と魔導師達は“完全敗北”を叩きつけられてしまった。なのは、ヴィータ、流ノ介達は魔力ダメージ（正確にはヴィータと流ノ介の場合は、イサギツネが真似した技のダメージ）、シグナムは全身に軽い切傷、そして文瑠は胸に大きな傷を作ってしまった。外道衆は水切れのため引いたが、この最悪な状況でどう相手と戦うか、それがなのは達に大きな課題となっていた。

そして、機動六課からはやてが率いる救助班が、ヘリで到着したところから、物語は始まります。

「現場に到着、着陸体勢に入ります！」

「シャマル先生は先に降りて、重傷患者の応急処置を！」

「わかりました！他の救助隊員は着陸と同時に、患者の収容と手当の準備をお願いします。」

『了解！』

へりが着陸するなりシャマルは降りるとまっすぐ丈瑠の方に行き、後続くように救助隊員はなのは達は流ノ介達の元に向かっていた。

シャマルが丈瑠の元に到着すると、すでに丈瑠は意識を取り戻していて、フェイトと黒子が傷の手当てをしており、流ノ介達は自分の傷を気にせず、丈瑠を囲むように座っており、時折声をかけていたが、その声色は若干焦りのようなものが混じっていた。

「皆、ちょっと退いて。」

「あ、シャマルさん……。」

「シャマル、出来る限り出血はなんとか止めたけど……。」

「ありがとう、後は任せて。誰か、担架持ってきて！」

「あんたが……医者か。なあ、丈ちゃん死なねえよな？血い結構出てたけど、死なねえよな!？」

「安心してください、そんなことは絶対にさせませんから落ち着いて、黒子さん、へりに運ぶの手伝ってください！」



焦る源太をシャルマルが治めると、黒子二名が担架を持ってきて、丈瑠を担架に乗せるとシャルマルは黒子達と共に着陸したへりに運び、へりに備えつけたベッドにゆっくりと寝かせた。

「すみません、あとはなのは隊長達を連れてきて。私は丈瑠さんの治療をしておくから。」

シャルマルと一緒に運んでくれた黒子に指示を出すと黒子は頷き、へりから降りて行くとシャルマルは丈瑠の治療に移った。

その頃なのは達は、救助隊員の元で治療を受けており、中でもなのはが重傷であり、フェイトのおかげで落下ダメージは免れたものの、不意打ちに近い状態に受けたため魔力ダメージは酷く、更に咄嗟の事でデバイスも反応が出来ず（射撃中の事もあり）、直撃を受けてしまい軽い失神を起こしてしまう。そのことを心配したフォワード達が駆け寄ってきた。

「なのはさん！ヴィータ副隊長！」

「ん、おめーらか……。そっちに外道衆は来なかったか？」

「いえ、こちらには外道衆の姿は見えませんでした。民間人の避難もすでに完了してます。」

「そうか……。」

ヴィータはフォワード達を見るなり心配し、外道衆が来てなかったと聞くと少しホッとした。丁度その時、フォワードとヴィータの声のおかげか、なのはが意識を取り戻し、ゆっくりと体を起き上がらせた。

「ッ……ヴィータちゃん、みんな……。」

「「なのはさん!」「」

「なのは、お前はゆっくり休んでろ。アタシより魔力ダメージ酷いはずだ。」

「うん……、でも無事でよかったぁ……。」

なのははフォワード達の安否を確認するなりホッとした。そこに、ヴィータは担架を持ってこっちにくる黒子達と救助隊員を見ると、

真剣な顔になってフォワード達に顔を向ける。

「よし、お前達よく聞け。アタシらはここを離れる、フェイト隊長の指示に従って行動しろ、いいな？」

「「「「はいッ！」「」「」

「みんな、無理しないでね。」

「私達は大丈夫ですよ、なのはさんはゆっくり休んでてください。」

「そう・・・ありがとう、スバル。」

ヴィータがフォワード達に指示を出し、救助隊員と黒子が到着するとすぐになのはを担架に乗せ、ヴィータは立てて歩けたため、黒子の気遣いを振り切り自力でへりに向かった。その時流ノ介達とシグナムがへりに乗り込む姿も見えた。そしてフォワード達はヴィータの指示に従い、フェイトの元に向かっていった。

ヴィータは歩いてへりに乗り込むと同時に、丈瑠の声が聞こえた。

「・・・シヤマル。」

「もう大丈夫よ、今から医療院に搬送します。丁度患者は全員乗っ  
たみたいだから」

シヤマルが言い終わる前に、丈瑠はシヤマルの腕を掴んで黙らせ  
た。シヤマルは掴まれた腕を見て、すぐに丈瑠の方に顔を向けた。

「た、丈瑠さん・・・？」

「病院に搬送するのは・・・止めてくれ。」

「え、ええっ！」

シヤマルは丈瑠の言葉を聞くと目を開いて声を上げた。丈瑠の傷  
は、全員からしても重傷で、入院してもおかしくないほどだ。それ  
なのに丈瑠は、シヤマルの提案を止め、入院することを拒否した。

「ど、どうしてですか！丈瑠さんの傷が一番大きいんですよ、入院しないと早く回復しませんよ！」

「頼む……言う通りに、してくれ……。」

「た、丈瑠さん……、無茶言わないで……！」

「志葉、ここはシャマルの指示に従った方がいい。それに、この中で一番傷を負ってるのはお前であるはずだとわかっているはずだ。……それなのに、まだ戦う気か？」

シグナムの言葉に、丈瑠は黙った。しかし、なのは達の説得を余所に流ノ介達が口を開いた。

「……すみません、殿の指示に従ってください。」

「りゅ、流ノ介さん！」

「ああ、俺からも頼む。今は丈瑠の指示に従ってくれ。」

「ち、千明さんまで！」

「うちからも頼みます。殿様の言うことを聞いてください。」

「今は・・・言えないけど、お願い。」

流ノ介達は頭を下げ、文瑠の指示に従うように言い、戸惑うのは達に文瑠達はこれ以上、何も言わなかった。シャマルは顎に手を当てて考え始め、ため息を吐くと口を開いた。

「・・・わかりました。今回は文瑠さん達の言う通りにします。ですが、次からは私達の指示に従ってください。」

「シャマル！お前、何言ってる」

「ごめん、今は一でも早く本格的に治療しないと危ないの。ヴァイスさん、ヘリを出してください。」

考えた結果、これ以上時間をかける訳にもいかないし、何より事情があると考えたシャマルは文瑠達の言う通りにすることにし、ヘリはなのは達を聖王医療院に搬送するため飛び上がった。

『三途の川 六門船』

場所を変えて三途の川。赤い川に浮かぶ外道衆の拠点“六門船”では、ヒヤクヤツパがかつて血祭ドウコクが飲んでいた酒を、ラツパ飲みをするかのように飲んでいた。

「ヒヤーハハハハハハア！！！！こんなにつめえ酒を飲んだのは初めてだぜ、なあイサギツネ！」

「ほっほっほっ。シンケンジャー共が協力していた魔導師が、どんな輩だと期待してみました。どうやら期待外れでしたな。」

ヒヤクヤツパとイサギツネはシンケンジャー達と魔導師達を自分の力で圧倒したことがうれしかったからか、上機嫌に話していた。その様子を、船の奥から見ていたシタリは喜んでおらず、逆にため息を漏らし、独り言のように小さく呟いた。

「はぁ……。シンケンジャーを倒す寸前まで追い詰めたのは嬉しいけど、やっぱドウコクがいないとねえ……。アヤカシが好き勝手に動いちゃう、イサギツネは短いけど手伝ってくれたのは嬉しいけど、今じゃ手伝ってくれそうもないし、あたしゃあこの先不安だ

よ。  
「

外道衆の御大将である血祭ドウコク、彼にはアヤカシを“縛る”力があり、他のアヤカシを絶対的に支配していた。（敵意を持ったアヤカシもいるが）

しかし、そのドウコクがいないため、アヤカシを復活させたとしても好き勝手に動いてしまい、例えシンケンジャーを倒したとしても、アヤカシの行動に頭を悩まさせていた。

「・・・だがドウコクさえ復活してくれれば済む話さ、あたしやあそれまで我慢すればいいだけだよ。そうなれば頭を悩ませることはなくなるはずさね・・・。」

シタリは自分の持つ錫杖を握りしめ、船の奥にあるカプセルの部屋へと入っていった。途中、誰かが三途の川に飛び込む音がしたが、シタリは気にもしなかった。



『??? スカリエッツィのアジト』

ここはスカリエッツィのアジトで、ナンバーズの調整ルームにスカリエッツィとクアットロの姿があった。スカリエッツィとクアットロはまだ眠っているナンバーズの調整をしていたが、その時隙間が赤く光り、そこからイサギツネの姿が現れた。

「ふむ、そなたがシタリ殿と協力しているスカリエッツィ・・・でよろしいですか？」

「ああ、私がスカリエッツィだが、アヤカシが何か用かね？」

スカリエッツィは作業をいったん止め、イサギツネの方に体を向ける。イサギツネは自分の髭を撫でるようにスカリエッツィを見ていた。

「スカリエッツィに、少し用がありましたね。」

「ほう・・・珍しいねえ、話してくれないか？」

「ええ、いいですが・・・その小娘を外させてもらいたいですな。」

イサギツネはクアットロに指さして言うと、クアットロは作業を止めてイサギツネの方を向いた。

「ええ、私ですかあ？」

「ええ、そなたのような“木偶人形”に話しても無駄ですからねえ、さっさと行きなされ。」

「そう言わないでくれ、こう見えても私の成功作品だ。悪く言わないで欲しい。」

「ふむ、わかりました、今後言い方には気を付けましょう。ほら、さっさと行くがよい。」

イサギツネはクアットロを邪魔者のように手で払うように振り、クアットロはため息交じりの息を吐くと渋々と出て行った。クアットロが出ていくと、スカリエッティはイサギツネに顔を向ける。

「・・・それで、君が望むのはなんだ？」

「ええ、少し相談がありましたな・・・。」

スカリエッツィはそれを聞くと、眉をひそめる。

「相談？それならばシタリにでもいいだろう。」

「それもそうですが、この話はスカリエッツィ殿しか出来ませぬ。でなければ、わざわざここまで出向きませんよ。」

「ほう・・・、その内容は？」

「私達外道衆は、この世界に来てからというもの、魔法という不可思議な力と出会い、その力を見てきた。しかし、どの魔法もただのエネルギー弾に過ぎず、拘束魔法というのも力を加えればあつという間に破壊できるほど脆い、しかし今回出会った魔導師は一味違い、魔力の質、能力、全てが強力であり、私自身真似てみたもののその力は絶大なものを誇っておった。」

「・・・つまり。」

「私にも完全に魔法と言うものを扱えるようにして貰いたい。」

スカリエッツィはその言葉を聞くと、興味深そうにイサギツネを見た。

「魔法・・・ねえ。」

「ええ、我ら外道衆には“魔力”というものは、当然この異世界に来るまでは無縁の物でした。というより、必要無かった物なのです。しかしこの世界に来たとき、魔法という力の素晴らしさを理解できたのです、かのシンケンジャー相手を軽くあしらうほどの砲撃、偶然ではありますが、シンケンレッドを圧倒する程の力を持つ炎の魔法・・・どれも素晴らしい物ですが、一つ欠点があります。それは」

「あくまでも“真似た”偽物の力、というわけかね？」

「流石ですねスカリエッツィ、話が早いです。」

熱弁を奮うイサギツネの心中を察したのか、スカリエッツィはにやけつつ眩き、イサギツネも話が分かって貰えたのか嬉しそうに笑う。

「いくら強くても真似た技は真似た技に過ぎず、威力の調節は愚か、本物の力にすら及ばない……。それがシンケンジャーを殺す決定打にできないのが、悔やむ所……。しかし、もし魔力というものが私にあるとすればどうなると思いますか？答えは単純で明白……。相手を真似た魔法を自分の魔法として扱うことが出来る！」

「だからこそ、魔法を使えるようにしたい……。という事か。」

「ええ、シタリ殿も優秀なお方ですが、それは外道衆絡みのみ……。苦肉の策ではありますが、スカリエッティ、貴様の力さえあればそれも可能でしょう。」

「私の力……。か、クツクツク、私も大きく見られたものだ。」

イサギツネの言葉を聞いたスカリエッティは、小さく笑うと手を口元に置き、少し考えると目を細め、にやりと口を動かしイサギツネに向けて口を開く。

「君の言いたいことはよくわかった……。私の力があれば、出来るかも知れない。」

「ッそれは本当かね!？」

「ああ、私の手にかかれば魔力なんて簡単に手に入るさ。それも、  
凄く単純な方法でね。」

「ならば、その方法とやらで早く」

「ただし条件がある。至極簡単な・・・ね。」

歡喜の声を上げるイサギツネを、スカリエツティは声を上げてそれを止め、利き手をスカリエツティに向け、こう告げた。

「君の体をいじらせて貰えないか？」

### 第三十七幕 仲間（後書き）

作「今回もディスクについて紹介です。」

白ディスク

白地の何も記されていないディスクで、逆文字を書き込むことによりシンケンマルでの再生が可能となる。再生すると書き込まれたモチカラが増幅されて発動する。

・捕ディスク：野生化した舵木折神を釣り上げるために「捕」のモチカラを込めたディスクを釣竿のリールに取り付けて流ノ介が使用した。捕獲に成功した後は舵木折神を宿らせて舵木ディスクとなった。

・反ディスク：ヒトミダマに操られた流ノ介を解放するために丈瑠が使った「反」のモチカラを込めたディスク。虎折神にも使用して呪縛を解き、虎ディスクになった。

・活ディスク：「活」のモチカラを込めたディスク。海老折神にモチカラを与えるために使った。ことはと源太以外の4人が使用。

・王ディスク：牛折神の力を制御するために作られたディスク。「王」のモチカラがこめられており、榊原ヒロ自身が作ったものとヒロにモチカラに合わせて彼の父が作ったものの2種類がある。ヒロが作ったものは牛折神の制御に失敗、ヒロの父親が作ったものは牛折神の制御に成功し、牛ディスクとなった。

・砕ディスク：「砕」のモチカラを込めたディスク。榊原藤次が暴走した牛折神を破壊するために用意したものだが使用されることは

なかった。

・双ディスク：最終幕で文瑠に託された丹波の得意とする「双」のモチカラをこめたディスク。同じものをもう一つ作り上げる力を持ち、烈火大斬刀をもう一振り出現させた。

作「今回の話はあまり進展なくて申し訳ありません。今回はつなぎみたいなものです。それと、なんか小説がだんだんヤバい方向に向かっている気がします・・・。その場その場で書いてるからそうなるんだろっなあ・・・。」（一応、ちゃんと計画立てて書いてます。）

┌



### 第三十八幕 仲間 式（前書き）

作「大変お待たせしました。少しでもこの作品のクオリティを上げるため、書き方を少し変えました。（そのせいで遅れた理由にもなります）」

スランプの件ですが、この話が終われば少しは改善されそうです。それと、今度から更新は不定期になると思いますが、最低でも週間以内は更新したいと思いますのでよろしくお願いします。

関係話になりますが、最近リリカルなのは×戦隊（多重なし）が増えてきましたね、自分的には嬉しいんですが、なんでゴーカイジャ―が多いんだろう・・・。」

### 第三十八幕 仲間 式

『ミッドチルダ 聖王医療院』

丈瑠達となのは達を乗せたへりは廃棄都市区画から離れ、向かった先は一番近い距離にある聖王医療院に行き、なのは達をへりから降ろすことになった。へりポートに着陸すると、医療院の中から職員達が担架を持って走ってきた。

「古代遺物管理部、機動六課のシャマルです。」

「機動六課の人ですね、話は聞いています。患者を担架に乗せるので手伝ってくださいませんか？」

職員達は担架を持ってへりの中に入っていく。すると職員達はなのはとヴィータを担架に乗せてへりから降り、シグナムは担架に乗ることを渋ったがシャマルに言われて仕方がないと言わんばかりに指示を受け、担架に乗りへりから降りていく。

だが、職員が降りた直後にへりの中から流ノ介達の声と職員の声が聞こえてきた。それに気づいたシャマルはへりの中に戻ると、目に映ったのは職員が丈瑠を担架に乗せようとするが、それを流ノ介達が阻止しているところだった。

「離してください！この患者は重症なんです、早くしないと命に関わる危険があります！」

「それは・・・わかっていきます、でも病院のお世話になるのは」

「お世話も何ありません、それにあなた方も指示に従ってください！この人を死なせたいのですか！？」

それを聞いた流ノ介達は一瞬黙ってしまふ。職員の間で言っている事は正しく、丈瑠の状態は誰が見ても深刻な状態で、応急処置により血が止まってはいるものの、呼吸が激しく、汗も尋常じゃないほど掻いており、巻かれた包帯からも血が軽く滲んでいた。

「ッ・・・それは・・・。」

「すみません・・・こちらにも事情というのがありました。」

「とにかく、この人を担架に乗せますので離れていて下さい。」

流ノ介達は職員に言い返せず黙ってしまい、ことは最後まで抵抗しようとして職員に言葉を掛けたが、押し切られて職員を抑えていた手を放すと同時に離れていく。職員は文瑠を担架に乗せるとヘリから降り、迅速に医療院の中へと文瑠を連れて行った。諦めきれない流ノ介達は、立ち続けても握り拳を作り、下唇を噛み締める。流ノ介達が悔しがっているのを余所に、作業を一通り済ませたのか、シヤマルがヘリの中に入ってきた。

「……シヤマル、約束破りやがったな！」

シヤマルの姿を見た千明は怒るようにシヤマルの近くまで行き、叫ぶように言うとシヤマルの胸座を掴もうとするが、掴む寸前に莱子がそれを止めた。

「クツ離せよ、姐さん！」

「落ち着いて千明、そんなことをしても何も解決しない。」

「だけだよお……！」

「いいから落ち着きなさい！」

止められた千明は茉子を睨むも、茉子の一喝を食らうと黙り込み、振り上げられた手を降ろすとふて腐れたようにそっぽ向く。千明がシャマルから離れると茉子はシャマルを睨み、口を開いた。

「それじゃシャマル先生？聞きたいことがあります。何で私達の約束を破ったんですか。」

そういう茉子の眼は明らかにシャマルを恨むように睨んでおり、流ノ介達も同じような目でシャマルを見ていた。シャマルは流ノ介達を前にして少し怖気づくが、それを表情に出さず口を開き言い始めた。

「……ごめんなさい、文瑠さんの傷は深くはないけど、出血量を考えると機動六課じゃ手に負えないの。勿論機動六課にも血液の在庫はあるけどそれじゃ間に合わない可能性が高くて……裏切った

ような形になるけどここで治療するしかないのよ。」

「せやけど・・・なんで一言も言ってくれないんや！そんなに酷いんなら、一言ぐらい・・・。」

「もちろん言おうと思ったわ、でも、それを言っても文瑠さんは頑なに断る気がして・・・。本当にごめんなさい！」

シャマルは訳を話すと、流ノ介達に頭を下げて謝った。その姿をみた流ノ介達はシャマルを攻めようにも責められず、千明は悔しそうにへりの壁を叩く。

「・・・ねえ、みんな・・・一つ聞いていいかしら？」

「・・・何だよ。」

ただただ立ち尽くす流ノ介達に、シャマルは恐る恐る聞く。

「なんで・・・病院での治療を拒んだのですか？言い方は悪いけど、あなた達の反応は異常なの、理由・・・教えてくれる？」

シャマルがそついうと、流ノ介達は黙り込んでしまふ。しばらくすると千明が顔を俯かせたまま口を開き、吐き捨てるように言い始めた。

「・・・無関係な奴らを巻き込みたくなかったんだよ。」

「・・・えっ。」

千明の言葉に、シャマルは一瞬驚いたように声をだし、千明のほうを向く。千明はシャマルの顔を横目で見ると、再び喋りはじめた。

「俺達シンケンジャーは、外道衆と戦い続けるのが宿命なんだ。そのせいで、外道衆相手に毎日のように命を狙われてる・・・。そんな中で病院とか行ったらどうなる？必要のない奴らまで巻き込んでまう・・・。」

「……嘘、でもこの間休暇貰ったじゃない。そこまで」

「本当なんだよ！」

千明の言葉にただただ驚くシヤマルは、突きつけられた言葉が本能的に信じられず、自然と口が動いてしまい、そう言つと千明は怒鳴るように言い始めた。

「ずっと前、稽古をサボつて友人と遊んでた時、外道衆と出くわしちまって、その友人に大怪我を負わしちまった事があるんだよ……。その他にも俺の親父や姐さんの家族まで、俺達に会つたばかりに、外道衆との戦い巻き込んで……。」

「……嘘、でしょ。」

「……本当よ、私達シンケンジャーは、知つての通りずっと昔から闘い続けて、その私生活でも命の危機に晒されることなんて沢山あるの。だから……私達の世界にいたときは、モチカラで守られた文瑠の自宅で住み込みで暮らしてた。まあ……休暇とかそういうのはたまに貰ってたけどね。」



千明から告げられた言葉と、裏付けが取れるような茉莉子の言葉に、シヤマルはただただ呆然と立って聞いていた。

彼らとは数か月前に出会い、完全とは言い切れないが互いに信じあい、外道衆と戦ってきた。しかし、彼らから伝えられた真実は、シヤマルが考えていた事よりも凄まじく、想像以上の物であり、ただただ聞くしかなかった。

それもその筈、初めて彼らと出会ったとき、彼らの風貌からそんな風には見て取れず、彼らの戦闘能力を見ても“異世界から来た戦士”としか見れず、修羅場を潜り抜けてきたことは想像できた。しかし、これほどまで酷く、辛い戦いをしていたとは思えなかった。しかし、それは同時に、逆境から幾度も潜り抜けてきた戦士であることが理解できた瞬間でもあった。

「そんな、事があったの……。」

「……この世界に来てから、ずっと文瑠は悔んでいたの。成り行きとはいえ、外道衆とは全くの無縁のあなた達を、巻き込んでしまった……てね。」

千明と茉莉子の言葉を聞き、自分のしたことに後悔を覚えたシヤマルは、顔を少し俯かせると右手で左腕を掴むと、悲痛な表情を浮か

べる。シャルルがそういって、茉莉は少し間をおいて丈瑠の思いを口に出して言った。

「丈ちゃんなら・・・言いそうだな。」

茉莉の言葉を聞いたシャルルは、顔をあげて流ノ介のほうを見る。すると源太は茉莉に釣られるように喋り始めた。

「俺等の殿様は、口や態度じゃああんな風にはぶつきらばうで、偉そうに言うけど、本当は優しい奴なんだ・・・。この世界に来る前、俺がシンケンジャーに入ろうとしたとき、断りやがった。その理由が俺を巻き込ませたくない、たったそれだけなんだぜ？ ホント・・・心配性なんだよ、丈ちゃんは・・・。」

源太は喋っている途中、最後あたり泣き声に似た声色に変わり、目を覆うように手を顔に当てていた。そんな彼らを見て、シャルルは悔むように顔を俯かせ、自然と白衣の裾を握った。

「・・・本来ならば、外道衆との戦いは我々シンケンジャーだけで戦うつもりだった。だけど、あなた達機動六課は、自分の危険を顧みず、人の為に戦ってくれるのは感謝している。だが、私達からすれば、あなた方も守るべき存在です。」

「だから殿様は、エリオ君やキャロちゃん達を、戦いから遠ざけたんや・・・。戦いの中でも、ずっとみんなの事気にかけてくれなはって、戦ってきたんやな・・・。」

彼らから伝えられた事は、予想以上の物だった。数カ月と短い間ではあったが、互いに信用しあって戦ってきた仲間だったが、まさかこれほどまで自分達を心配してくれていたとは思っていなかった。

シヤマル自身、管理局に入ってから仕事で、いくつか他人とともに戦った事があった。しかし、どの仕事もあくまでも他人とは“仕事上”の関係で、どれも危険な任務ではなく、戦場と呼べるものは無かった為、いつしか戦いの厳しさを忘れていた。しかし、外道衆との戦いでそれを思い出し、今回のような“完全敗北”を叩きつけられ、彼ら流ノ介達から非難の声が上がることは覚悟していた。しかし彼らからきた言葉は、自分たちを心配する声だった。それではつきり理解できたことがある。自分達は守られていた、異世界から来た若き戦士達によって・・・。

「・・・私に、何か出来る事はありませんか。」

シャマルは拳を握り直し、そう言つと先程の悲痛な表情とは打つて変わり、何かしら“覚悟”を決めた表情になっていた。シャマルの様子が突然変わったことに、顔を俯かせていた流ノ介達は、シャマルの発言に少し混乱した。

「実は言つと・・・私、外道衆との戦いを甘く見ていた。未確認生命体でも、いつも通りに戦えば大丈夫だって、思っていたかもしれない・・・。でも、それじゃ駄目なんだって、気づいたの。上手く言えないけど、このまま守られてばかりじゃ駄目だって・・・。私が出る事は、もっぱら探索魔法とか、回復魔法とかサポートしか出来ないけど、管理局にいても出来る事が必ずある。そんな気がするの。」

シャマルの変化に、流ノ介達は最初は戸惑っていたものの、シャマルから感じる何かを感じ取ったのか、自然とシャマルの方を向いていた。

そんな彼らを前に、シャマルは言い続ける。

「だからお願い、協力させて。流石に無茶な要求は命令違反とか、そういうのに引っかかっちゃうから出来ないけど、私にも出来る事があるはず。だから……。」

「……シャマル先生。」

喋っている途中、シャマルは自然と握り拳を作り、構える姿勢と なっていたが気にせず流ノ介達に向けて言った。そんな彼女の目は、 医者としてではなく、何かに決意した騎士のように、まっすぐだっ た。シャマルの様子をみていた流ノ介達だったが、シャマルの気持 ちと、その姿を見るや否や安心したように笑みを浮かべ始める。

そんな時、一人の職員がカルテを持ってヘリの中に入ってきた。 医療院から走ってきたみたいだったが、息は荒げておらず少し息を 整えると喋り始めた。

「患者の検査と治療が終わりましたが、重症患者の方はどうしますか？ 傷も塞いでおきましたし輸血ももう少して終わります、こちらで入院手続きを取らせてもらいたいのですが……？」

職員がそういうと、シャルは自然と流ノ介達の方を見る。彼らが頷くと、シャルは頷き返し、職員の方を見ると口を開いた。

「ありがとうございます、後は私達の方で治療をしますので、献血終了から十分後にそのままヘリに搬送を。それと献血後なので慎重にお願いします。」

「ええ！？でもいくら魔法で傷を塞いだとしても、輸送中開く可能性だってありますし、献血終了後は無理に動かすのは・・・。」

「その為に私があります。無茶を言ってるのは承知の上ですが、後の治療は私達機動六課で行います。全責任は私がとりますので、そう伝えてください！」

「はっはい、わかりました！」

シャルがそういうと、職員は予想していた言葉とは違っていたのか、慌てたようにいいへりから降りると駆け足で医療院の中に入っていく。

「……やるじゃねえか。」

職員がへりから降りていくと、シャマルは流ノ介達を見て、流ノ介はシャマルに感謝の意を見せた。そんな中、源太がそう呟いたが、誰の耳にも入っておらず、源太の顔は緩み、軽い笑みを浮かべていた。

『???? スカリエッツィのアジト』

場所を変え、スカリエッツィのアジトでは、とある一室でスカリエッツィが台の前に立っていた。そして、その台に横になっているのは、先ほど訪ねてきたイサギツネだ。スカリエッツィは宙に浮かんだモニターを操作していて、イサギツネは無言のまま横になっている。そして、スカリエッツィは操作が済んだからか、モニターを消してイサギツネに声を掛ける。

「イサギツネだったかな？約束されたことは終わらした。」

「・・・ふむ、なんとか水切れまでには終わらしたようですね、しかし少々体が動かしにくいですね・・・それより、これで私は“魔法”とやらが使えるのか？」

イサギツネは起き上がり、体を少し動かして台から降り、スカリエッティに体を向けて返事をする。スカリエッティは少し笑みを浮かべて口を開く。

「ああ、そうとも。だが、“魔法”が使えるのは時間がかかってねえ、まだ体に馴染んでないのだよ、おそらく明日の昼頃になれば自然に体に馴染み、使えるようになるはずだ。」

「なんと・・・すぐにでも魔法は使えないということなのだな？」

「そもそも魔力を持たない生き物に魔力を与えるのは難しくてねえ、仕方がないのだよ。」

それを聞いたイサギツネは、少しがっかりしたようだが、すぐに笑みを浮かべて小さく呟く。



「……まあ、よいでしょう。その時まで楽しみにしておきましょうか……ではさらばだ。」

イサギツネはスカリエツティに一言言った後、“スキマ”を通じて三途の川に戻っていった。イサギツネがいなくなり、一人となったスカリエツティが指を鳴らすと、突如後ろからクアットロが現れた。

実はあの時クアットロは、邪魔者扱いにされたことが気に食わなかったのだが、あの後部屋から出た直後、スカリエツティから通信が入り、IS“シルバーカーテン”を使って周りから姿、気配等を隠して侵入していたのだ。イサギツネがいなくなった今、姿と気配等を隠す必要もなくなったため、ISを解除した。

「データは取れたのかね？」

「ええ、もうばっちりです。アヤカシに見つからないようにするのは大変でしたけど。」

クアットロは苦笑しながら、イサギツネアイヤカンの電子データが入ったチップをスカリエツティに渡す。受け取ったスカリエツティは電子データを、起動させてデータを見ると口を尖らせるように、笑みを浮かべた。

「ようやくだ……。ようやくアヤカシのデータを十分に取ることが出来た……。！これで本格的に外道衆の研究に入れる……。！」

「でもあ、このことがシタリのおじいちゃんにバレちゃったらあ、どうするんですかあ？」

「構うものか、外道衆オウドウシュだつて我々に隠していることがいくらでもある。ちよつとしたことぐらいならば、こちらが何しようが構わんだろつ。」

スカリエツティはイサギツネのデータを見ながら返答する。そして、気が済んだのか、イサギツネのデータを保存してモニターを消すとクアットロに顔を向ける。

「クアットロ、イサギツネが地上に現れたらデータ採集をかねて監視を頼みたい。出来るかね？」

「ええ、もちろん。そのつもりです。」

「そうか、では頼んだよ。」

スカリエッティはクアットロに頼むと部屋から出ていき、残されたクアットロは怪しげに笑みを浮かべた。

「ふふふ・・・楽しみだわぁ・・・、やられる所を見るの。」

クアットロは楽しそうな声を出しながら呟くと、スカリエッティを追うように部屋から歩いて出て行った。

『ミッドチルダ 機動六課 医務室』

聖王医療院でシャマルと流ノ介達が話した後、へりに丈瑠となのは、ヴィータとシグナムをへりに慎重に乗せるとへりを飛ばして機動六課に戻った。そしてへりから丈瑠達となのは達を降ろした後、

へりは再び廃棄都市区画に行き、はやて達を回収して機動六課に帰還させて、全員が機動六課に戻ってきたときはすでに暗くなっていた。

医務室に搬送されたのは、なのはと丈瑠だ。ヴィータは回復が早かった為か、自室で安静させており、シグナムは全身に軽い傷を受けたが、立っていられるほど回復しており、何よりシグナムは守護騎士ウォルケだからか、回復が普通の人より早いため、シグナムも自室で安静となった。

医務室のベッドでそれぞれなのはと丈瑠が横になっており、少しすると目覚めたのか、なのはが目を開いて横になりながら周りを見回した。見回すと、見慣れた医務室に、見慣れた天井。そしてデスクの前で、何か作業をしている白衣を着た人の後ろ姿。なのははここが機動六課だとすぐにわかり、同時にデスクに座っている人なのか見覚えがあったので、その人になのはは話しかけた。

「・・・シヤマルさん？」

「あら、起きたの？」

なのはは、声が出た方向を見ると、そこにシヤマルがデスクに向かって何か作業をしていたが、中断させると椅子に座りながらなのはの方へ振り向いた。

「まだ横になつてて、まだ魔力ダメージが抜けてないから。それに、後で検査するから安静にしているね。」

「は、はい……。」

なのはは頷くと、体を横にし、ふと顔を横に向けると目に映ったのは、白い仕切りが見えた。なのはが見た仕切りは、よく見ると病院で見かける物で、その奥から微かな薬のにおいを感じた。なのはは何気なくその仕切りをじっと見ていた。なのはの目線に気付いたシヤマルは、これが置かれている理由を話すため口を開いた。

「ああ、これね。その奥に丈瑠さんが眠っているの。」

「えっ、丈瑠さんが……?」

「ええっ……。仲間を助けるために、ちょっと大きな傷を作っちゃったの……。」

「そう……なんですか……。」

なのはは視線を仕切りからシャマルに変え、シャマルからそれを聞くとなのはは顔を俯かせ、気を重くした。

今回の外道衆はいつもと違い、アヤカシが二体で同時に襲い掛かってきた。それに加え、自分の撃った魔法を難なく返され、自分が撃ち落されてしまった。このことに関しては、これまで何の経験もなく、また外道衆との戦いでも、連戦連勝で気が大きくなっていたのか、文瑠の言った警告を軽く見ていた。その結果がこれであり、なのはは自分の不甲斐無さを感じていた。

なのはの様子を見たシャマルは、あごに手を当てて少し考えた後、何かを決意して検査の準備を始めた。

その頃、デバイスルームではシャーリーが試験管のような機械を操作していた。その機械に入っているのは、レイジングハートとグラーファイゼンだ。

この二つのデバイスは、今回の外道衆の戦いで破損してしまい、シャーリーが修復作業をしていた。シャーリーの横にはラインがいて、心配そうに二つのデバイスを見ていた。

「・・・シャーリー、デバイス達・・・直りそうですか？」

「幸い、損傷も見た目よりひどくなかったけど・・・、コアが無事なので順調にいけば明日の朝までには直りそうです。」

リンはシャーリーから聞くと少しほっとしたが、すぐに不安そうな顔になった。

「・・・デバイス達、とても悔しがってるみたいです。自分のマスターを守れなかったって・・・。」

「・・・そうだよね、相手が強敵だったとはいえ、危つく殺されかけたし、危ないところだったからね・・・。」

シャーリーは一旦手を止め、レイジングハートとグラーフアイゼンが入っている機械に手を置いて話した。レイジングハートとグラーフアイゼンは、機械の中で浮かんでいるが、どことなく悔んでいるように見えた。

「とりあえず、今度からそうならないように、頑張らないとね。」

シャーリーは機械の中に浮かぶデバイスを、ガラスの上から撫でるように言うと、デバイスは答えるように光り、シャーリーは微笑むと作業を再開した。

場所を医務室に戻り、シャーリーがデバイスの修理を再開した頃、医務室には検査の為、ヴィータとシグナムが合流し、期を計ったところでシャルは今日、ヘリポートであったことを話し終えた後だった。

「・・・そんな事があつたんだな。」

ヴィータはそう言うと、自分が座っていた椅子に跨りながらも低く言った。それと同様にシグナムは腕を組み、壁に背を託すように立っているが、顔を少し逸らすように俯いており、なのもシャルから聞いた話の内容に驚いているのか、顔を俯かせたままだった。



「志葉の雰囲気から、かなりの修羅場を潜り抜けてきたとは思っていたが、命まで狙われていたとは……。」

そういつとシグナムは、自然と腕に力が入り、肩が強張り下唇を噛み締めた。

ヴォルケンリッターであるシグナム、ヴィータ、シャマルは何百年という長い年月を生きており、命を狙われることは少なからずあった。しかし、彼らシンケンジャーのように常に命を狙われるようなものでは無く、彼女たちからしても文瑠達に置かれた立場というのは深刻なものだった。

「それでも、文瑠さんはずっと私達の事を考えてくれてた……。普通に考えても、凄いことだよ。」

「ああ、一緒に戦ってきたつもりが、いつしか守られていた……。か、余計なお世話だったの。」

間が開けた時なのはが眩くと、ヴィータは冗談交じりに言うが、その表情は強気な笑顔になっていた。

「ヴィータ、冗談でもそれは」

「わかってるって、そんなこと。でも、ほんとあいつ等、スゲーよな……。命狙われてんのに、関係ない奴らを巻き込まないように離れて暮らして、それで尚且つ誰かを守るために戦う……。普通じや耐えられねーのに、あいつ等は平然とやっているんだよな。」

「私達が思っていたより、志葉達は強いかも知れない……。今回の戦いでも、劣勢になっていたとしても、決して諦める素振りを見せていない。むしろ、立ち向かおうとしていた。私のように騎士としての誇りやそんなものの為じゃなく、この世を守るために……」

「冗談交じりに言ったヴィータを叱るようにシャマルは言ったが、ヴィータはそれを流すと未だに寝ている丈瑠の方を見て言った。シグナムも言っている途中、自然と丈瑠の方に視線が向き、安堵を浮かべると再び視線を戻す。」

「……」のままじゃ、いけない。」

「……なのは？」

なのはがそう呟くと、シャマル達はなのはの方を向く。

「私、いつしか丈瑠さんを頼りにしていたかも知れない。外道衆との戦いや、任務の時でも……。だから、敵の技を受けて気絶しちゃったのかも知れない。」

「……」

「でも、それじゃいけない、今回の戦いでやっとわかった。今の私は、殺傷設定で戦えないからサポートに回って……。それでも、ともに戦ってる気がしなかった。それでわかったの、私は、丈瑠さん達の影に隠れて戦っていたんだって。」

そういうと、なのはは自然と拳を作り、何かを決意したのか顔を上げ、シャマル達の方を向く。

「だから、次からは文瑠さんと同じ位置で戦いたい。いきなりは無理だけど、少しずつ・・・一歩ずつでいいか進んでいきたい。今度は、守られる対象としてじゃなく、共に戦える“仲間”として、戦いたい！」

そう言ったなのは顔は、揺らすことがない、まっすぐとしたものであり、管理局としての覚悟のものではなく、高町なのはという一人としての物で、明らかに以前ののはから感じられるものは無かった。

そんななのはの顔を見ると、シグナムとヴィータは笑みを浮かべる。

「・・・ああ、そのつもりだ。」

「いつまで守られっぱなしじゃあ、ヴォルケンリッターの名折れだしな、どうせ戦うんじゃ同じ立場で戦わねーとつまらないしな。」

シグナムとヴィータも、同じことを考えていたのか、なのはの意見に賛成し、自然と立ち上がり、ヴィータはなのはと同じように握り拳を作り、意志を固めるように空いた手の平に拳を合わせて音を鳴らす。そんな彼女達を、なのはは力強く「うん！」と頷き、輝かしい笑顔を浮かべていた。

### 第三十八幕 仲間 式（後書き）

作「今回は烈火大斬刀について紹介します。」

れっか だいざんとう  
烈火大斬刀

シンケンマルが変化したレッド専用の巨大な刀。烈火の刃で敵を斬る「百火繚乱（百花繚乱）」という技を使用できる（劇中で技名を呼んだことはないが、ディレクターズカット版では技名で呼んでいる）。大筒モード時は5枚の技ディスクをセットすることにより、変形時に使用したディスクに収納された折神を模したエネルギー弾を打ち出す必殺技（兜ディスクは「兜・五輪弾」、舵木ディスクは「舵木・五輪弾」、虎ディスクは「虎・五輪弾」、烏賊ディスクは「烏賊・五輪弾」、海老ディスクは「海老・六輪弾」）を使用することができる。基本的にレッド一人（まれにその回の中心となったメンバーと2人）で撃つという、この手の武器では珍しい撃ち方になっている。ちなみにブルーがゲストキャラと2人で使用したことやゴールドが中心でレッド以外の5人で使用したこともあり、一度だけ仮面ライダーディケイドが使ったこともある。ただし、ディケイドは大筒モードではなく、刀として使用している。レッド専用武器が単体で必殺バズーカを兼ねるといふ、シリーズでも珍しいタイプの武器である。常人では振り回すのが困難なほどの大きさであり、その大きさから敵の飛び道具に対する盾として使用することもしばしばである。最終幕では、双ディスクの力により二刀流を披露した。

作「展開が早い気がします、これ以上長くしていてもぐだぐだに

なりそうになるので、このような内容になりました。

小説内で、次の戦闘でなのはが殺傷設定で戦うように言っていますが、まだなのは達（一部除く）にはまだ非殺傷設定で戦ってもらいます。

ちなみに、もっと文を増やして展開を詰めようと考えましたが、いろいろと詰め込むと駄文になるかも知れなかったのでやめました、申し訳ありません。そして、今回の戦いは長く書きたいと考えてますので、また時間はかかりそうですがなるべく早く投稿できるように頑張りたいと思います。」

### 第三十九幕 仲間 参（前書き）

作「今回の話で戦闘前の会話をさせる予定だったけど、まさかの会話パート……。正直自分でも思ってもいませんでした。戦闘と、巨大ロボ戦は次回になります。

あと、今回はちょっと急展開だった感じがしますのでご注意ください。

「



### 第三十九幕 仲間 参

『ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋』

なのは、ヴィータ、シグナムは検診が終わった後、ヴィータとシグナムは引き続き自室で安静することになり、なのはと丈瑠は医務室で残ることになった。そしてその翌日、毎日のように行われる早朝訓練は、なのはとヴィータのデバイスの損傷、さらにシヤマルからドクターストップがかかり、早朝訓練は間もなく中止となった。そして時間は早朝の4時に針が指し掛かった時、丈瑠の部屋で眠っていた流ノ介の目覚まし時計が鳴り響く。民間協力者である丈瑠達は管理局員ではないため、早く起きる必要はないが、流ノ介は自分のスケジュールを作っており、この時間は早朝によるジョギングをするため早く起きる。流ノ介は起きると、すぐに目覚まし時計を切り、機動六課で支給された体育着に着替えようとしたが、何かに気付いてその手を止める。

「……源太、私の目覚ましで起きてしまったか？」

「……いや、そうじゃねえよ。」

流ノ介が気づいた何かとは、源太だ。源太は自分のベッドの上で胡坐で座っており、ずっと顔俯いていた。流ノ介は最初、自分の目

覚まして起きたのかと思い、話しかけた。

「……では、私より先に起きていたのか？」

「ああ、そうなんだが……。まあ……。半分当たりだ。」

「半分？半分とは……。いつたい？」

流ノ介の質問に、源太は頭を掻きながら曖昧に答える。流ノ介は源太の返事を聞くと耳を疑い、頭を傾げながら聞いた。

「まあ……。強いて言やあ……。丈ちゃんの事が気になって、眠れなかつたんだ。」

「……そうか。」

それを聞いた流ノ介は顔を曇らせるも、少し落ち着いた感じであった。丈瑠の負傷したことに関しては、源太のみならず、家臣であ

る流ノ介達も心配していた。侍である丈瑠達は時に負傷することも珍しくない。だが、今回のように大きな傷を作った時には、侍であろうとなんだろうと、誰だつて心配する。それが自分達のリーダーとなれば尚更の事だ。シャマルが緊急的に聖王医療院で治療したことにより、大事には至らなかつたが、医療院から機動六課に戻つてからというもの、鎮痛剤と麻酔を打たれたせいか、戻つてから今日にいたるまで目覚めることはなかつた。シャマル曰く「あとは安静していれば、自然とよくなる。」と聞いたのだが、源太はそれでも丈瑠の事が気になり、ずっと眠つていなかったのだ。（もちろん眠ろうと頑張つたが、寝付くことはできなかつた。）

源太の様子を見た流ノ介は、何か思いつくとすぐに千明を起こさないように、源太の近くに行き、小さく言った。

「そうだ源太、早いが私と一緒に、殿の見舞いに行かないか？」

「見舞い……？」

「ああ、殿の元気な姿を見れば、お前も少しは眠れるだろう。それに、私も殿の安否が気になるからな。」

「流ノ介……ありがとよ。」

流ノ介の言葉を聞いた源太の答えはもちろん“イエス”だ。源太

は立ち上がり、寝間着からいつもの寿司屋の服に着替えた。流ノ介も見舞いに言った後、すぐにジヨギングに移れるように体育着に着替え、二人で静かに部屋から出た。

流ノ介と源太は、機動六課の寮から出るとすぐに機動六課の中に入り、丈瑠がいる医務室に向かっていた。さすが早朝だけに、すれ違う管理局員の数が少なく、また見かける数も少ない。流ノ介と源太が医務室の扉が見えてくるまで歩いていくと、二人の目に一人の女性の後ろ姿が映った。

「・・・おい、流ノ介。あいつは・・・。」

「ああ、間違いない、はやてだ。」

源太と流ノ介の目に映ったのは、後ろ姿ではあつたがまぎれもなくはやてだった。流ノ介と源太ははやての姿を見つけるや否や、曲がり角の壁に隠れるように移動し、はやての動向を探るように頭を壁の外に出す。相方であるリインの姿は居なかったが、はやての動きは周りを警戒し、明らかに誰にも悟られぬように動いていた。部隊長である彼女が早朝起きていること自体は問題なかったのだが、その動きと行動がどうしても普通じゃあり得なかった。ただのお見舞いにしては早すぎる時間帯であり、仮にも彼女は部隊長、幼馴染

という理由で行くにしてはらしからぬ行動にしか無かったのだ。

そんなはやてであったが、医務室の前に立つと、扉に入ろうとするがその手前で止まり、その場で俯くと頭を横に振り、そのまま医務室から離れて行った。

「・・・何なんだ、あいつ・・・？」

はやての行動に不信をもった源太はそう呟くが、近くにいた流ノ介は、その言葉が聞こえてないのか、ただただはやての行動に、頭を動かし悩んでいた。

『ミッドチルダ 機動六課 裏庭』

その後、はやての行動が気になった流ノ介と源太は、はやての行動を探ろうと考えたのだが、始業時間が迫ってきており、管理局員の数も多くなってきたため、また、流ノ介自身が余計な探索を拒んだため、はやての行動を探るのを断念した。

そして時間が流れ、午前の訓練。午前の訓練は教導官であるなのはいないため、前回の外道衆の戦いの傷から復帰したヴィータとシ

グナム、そしてフェイトが行うことになった。ちなみに、ヴィータの場合はデバイスを修理に出してるため、実技の訓練は出来なかった。

流ノ介達は、午前の稽古はモチカラの練習と決まっていたため、裏庭でモチカラの練習をすることになった。流ノ介達は紙をキャンパスに立てかけ、シヨドウフォンで紙に文字を書いていた。源太は電子モチカラを使用するため、わざわざ紙に書く必要はないため、流ノ介達をじつと見ていた。そんな源太の元に、後ろから誰かが歩いてきて、源太はそれに気づくと後ろを振り向いた。振り向いた先には、シグナムと、その後ろにはヴィータとフェイト、そしてフォワード達がいた。その中で、シグナムが源太に近づいてきて、他は流ノ介達の方に向かっていった。

「梅盛……だったか？お前は稽古しないのか？」

「ああ……確かシグナムでよかったよな？俺はあ……電子だからよお、稽古する必要ねえんだ。まあ、実際流ノ介達みてえなモチカラの稽古は参加したことねえからな。」

「……そうか。」

シグナムは源太の隣に立つと流ノ介達の稽古を見た。流ノ介の前にある紙から、突然水しぶきが上がり、茉莉は風が吹き、千明は草

が現れ、ことは土が舞い上がった。見ていたシグナムは不思議そうに見ていた。その際、流ノ介が出した水しぶきと、ことはが出した土がフォワード達にかかってしまい、少し騒然となったが、どこか、楽しそうに笑っており、話を始めた。特に、千明はフォワード達と仲がいいのか、誰よりも楽しそうにしており、茉莉はフェイトと話してた。それを見ていた源太は、少し笑みを浮かべて言葉を漏らした。

「・・・仲、いいじゃねえか。」

「梅盛、お前も混ざったらどうだ？」

「・・・いや、俺はいい。」

源太は会話に入るようにシグナムに進められたが、源太は断り、モチカラを目にして歓声を上げるフォワード達を見ていた。しかし、シグナムは源太の反応を聞くと、源太の方に顔を向けて口を動かした。

「・・・そうか。」

シグナムは静かに言うと、顔を源太からフォワード達の方に向け、ゆっくりと口を開いた。

「まだ、我々の事を疑っているのか？」

「……さあな、何のことやらまったくわからねえ。」

シグナムの問いに、源太は軽く受け流すとすぐさま立ち上がり、その場から去ろうとする。

「……梅盛、お前の友人の気持ち、シャマルから聞いた。」

シグナムの言葉に源太は立ち止まり、顔を向けずシグナムの言葉を待った。



「・・・私は、この境遇に感謝している。成り行きとはいえ、お前達シンケンジャーという侍と出会えてな・・・。」

シグナムが静かに言うが、源太は振り向きもせずただただ言葉を聞いていた。そんな時、こっちの事に気付いたヴィータが源太の方に近づいてきたが、シグナムと並ぶように止まり、源太の方へと近づかなかったが、源太に語りかけるように口を開く。

「ほんとと、そうだよな。外道衆つーめんどくさい組織と戦う羽目になったけど、ちつとも後悔してねーぜ。」

「・・・お前達がどんな気持ちで戦ってきたかどうかは知らない。だが、これだけは言いたい。共に戦ってほしい。」

「・・・言いたいことはそれだけか？」

源太がそういうと、横目だがシグナムとヴィータの方を向く。シグナムとヴィータは源太に視線を向けられるも平然としており、再

びヴィータが口を開いた。

「ああ、終わりだよ。おめーが何て思うがしらねーが、あたしはおめーらシンケンジャーと一緒に戦ってーんだよ。今度は守られるんじゃないくて、同じ位置でな。」

ヴィータがそういうと、源太に背を向けると手を叩き、フォワード達を呼び寄せると再び訓練施設へと向かい始め、シグナムとフェイトも同様に訓練施設へと向かった。

この時、源太はシグナムとヴィータの気持ちを理解していた。彼女達は、シンケンジャーと同じように、外道衆と戦いたいと。

しかし、源太はそれを認める事が出来なかった。否、認めたく無かったのかもしれない。彼女達の気持ちは嬉しかった。それが正式な局員であるなら尚更だ。しかし、源太が認めることが出来なかった余韻は、この世界の軍事組織としての問題であった。常に人手不足である管理局は、それを打開するために子供ですら採用していた。例えそれが異世界の人間であろうとも、魔力さえあれば10歳にも満たない子供でも管理局に引き入れることも可能であった。

源太自身、敵の手によってクリスマスワールドに飛ばされたり、元いた世界でも外国に滞在した経験を持っているので、こうした世界の常識にはある程度慣れていた筈ではあった。しかし、問題だった

のがなのは達の言葉であった。例え世界は違えど、同じ地球で産まれた人間で、多少違いはあると思うが、根本的には同じだと信じてた。それなのに、彼女達は子供が戦場に立っていることを肯定し、大丈夫だと言って心配する素振りすら見せていない。そのことに源太は怒った。この世界の常識なら、従うしかない。だけど、同じ地球生まれなら少しは言うて欲しかった。心配だと。

そんな時、なのはの教え子であり、未成年ながら戦場に立つ4人の子供達と出会った。そんな彼女達の言葉から、なのは達が子供達に対する気持ちを聞いた。なのは達は、子供達を守るために、厳しい訓練をしていたと言っていた。なのはに認めてもらうため、凄く無茶をして、怒られた。それは、厳しい戦場で生き残るための訓練であり、必ず倒すものではなく、あくまで自分を守るための物だと。それが、なのはがこの世界に対する思いだと、源太は解釈した。

今回の戦闘後でも、なのはは自分が負傷したにも係わらず、遠くにいたフォワードを心配し、悲しませないように笑顔でいた。その様子を、遠くでよくは見えなかったが、源太は見ており、子供達は慌てもせずしっかりと隊長の言葉に従っていた様子も見えていた。

丈瑠が病院に入院させられそうになった時でも、あの医者話を理解してくれて機動六課に連れて行ってくれた。そんな時、彼女達を信じてても大丈夫なのだろうかと考え始めた……。しかし、それを決定打にする物がそこにはなかった。初めてなのは達に会った時の口論は、それほどまでに大きかったのだ。

その後、悩みに悩んだ源太は結局答えが見つからず、流ノ介達の間を盗んで裏庭から離れ、丈瑠の見舞いに行くため医務室に向かっていた。源太が医務室に辿り着き、扉を開けようとすると、中から女性達の話し声が聞こえ、一瞬動きが止まってしまふ。そして、その女性の声に聞き覚えがあった。まず一人は、丈瑠を機動六課に戻してくれた医者（シャマル）。そして、あの子達（スバル達の事）の隊長を務めるのは。そして、最後は機動六課の部隊長のはやてだ。源太は中に入ろうにも入れず、いつしか壁に寄りかかり、話を聞いていた。

「わざわざ八神部隊長が直々に届けてくれるなんて・・・、ありがとうございます。」

「別に普通にしても構わへんよ、それに、丁度なのはちゃんの様子見たかったしな。」

なのはが何かをしまつ音を出すと、はやては苦笑して言い、シャマルはお茶を出す用意を始める。

「でもはやてちゃん、こんな所においても大丈夫なの？仕事とか、ま

「だあるんじゃ……。」

「その辺はまだ大丈夫や、リインが氣い遣わせてくれたし、グリフイス君も優秀やからちよつとした休憩みたいなもんや。」

はやては近くにあった椅子に座り、なのはに顔を向けて言った。

はやてが届けたものは、修理が済んだレイジングハート、書類とディスク。一つ目の書類は、丈瑠となのは達のカルテで、まだ受け取ってなかった情報が記入されている。二つ目はフォワード達の教導に関するデータが入っているディスクで、これはなのはが受け取った。レイジングハートは、はやてが通路を歩いている時に、シャリーと出会い、ついぞと言い、受け取ったものだ。

シャマルはお茶を入れ終わると、それをはやてとなのはの元へ持つていくと零れないように渡す。渡し終わるとお盆を下げようとするが、その時ははやての様子がおかしいことに気付いた。お茶を飲む際に、横目で誰にも悟られないようにしていたが、明らかに丈瑠の方を向き、何か思いつめた表情をしていた。

その様子を見ていたシャマルは、昨日の夜の事を思い出す。深夜、医務室から離れ、自室に向かう途中、はやてが部隊長室で誰かと話していた。遠くで上手くわからなかったが、悲しみ交じりの顔で話していたため、恐らく友人であるカリムか、お世話になったゲンヤさんのどちらかであると推測していたが、見つきりそうになったためそれ以上の探索をやめた。

そんなはやての姿をみたシャマルは、推測を立てた。昨日、相談

した内容は隊長か何かの心構えの物で、誰かと相談したが解決できず、シンケンジャーのリーダーである文瑠に相談しようとしているが思うように出来ない。だからここに来たけど行動に移せないでいる。そう解釈したシャマルはお盆を下げず、はやての元へ行くと文瑠に聞こえぬよう静かに話しかけた。

「はやてちゃん、どうかしたの？」

「・・・何もあらへんで。」

「嘘、顔に書いているわ。」

シャマルにそういわれると、はやては顔を背けるが、シャマルは気にせず続けた。

「文瑠さんと、何か話したいことがあるんでしょ？この際だから・・・話した方が良いわ。」

「ッ・・・でも。」

「大丈夫、誰にも話さないし、今の時間帯なら、人通りも少ないし

誰にも聞かれる心配はないわ。」

シャマルに言われて渋るはやてだったが、シャマルにそう言われると顔を俯かせ、何かに決心がついたのか顔を上げると丈瑠の方へ向かった。丈瑠の元に付くと、白い仕切りを取り、備え付けられた椅子を掴むと丈瑠の横に座る。

丈瑠の様子はあたかも寝ている用だったが、はやてが近づくと目を開け、はやての方へと見向きもしなかったが口を開いた。

「・・・何かようか？」

「あつ起きていたんですか。」

「お前等が話している声を聴けば、嫌でも目が覚める。」

丈瑠にそう言われると、苦笑し恥ずかしそうに頭を掻くはやてだったが、少し間を開けると顔を少し俯かせるがすぐに顔を上げ、丈瑠の方へと向く。

「丈瑠さん、ちょっと・・・話、聞いてくれますか？」

「・・・何だ。」

「・・・うち、この部隊作るまで、捜査官やってたんや、それで色んな部隊に行つて・・・、管理局の裏側もよく見てきた。そんなある日、ミッドチルダの空港施設で、大規模な火災が起きたんや。消防隊は到着していたのにも係わらず、管轄である地上部隊の局員の姿がまるつきり見えなくて・・・偶然いたなのはちゃんやフェイトちゃんがいなかったら、もつと酷い事が起きていたことは確実やった。その時、管理局の組織の体質を変えたいって思うようになった・・・その為には、迅速に動ける、部隊が必要だって、思ったんや。それが、機動六課の設立の理由や。」

はやては話していく中、自然と顔を俯かせ、丈瑠に表情を悟られないようにした。一方丈瑠は、はやての話を静かに聞いていたが、言い終わると顔を向けず口を開いた。

「・・・それで、何が言いたい。」

「私・・・身内を亡くしたん。自分が不甲斐無いから・・・私かも少ししつかりしていたら、助けられた筈・・・そう思う事が、何度かあった。だから、部隊長になっても、これ以上悲しい事がないように・・・。こんな事がないように、頑張った。頑張ったんやけど・・・源太さんに、こう言われたんや、子供に戦わせるくらいな



ら、自分が前に立って戦えつて。」

「ッ源太がそういったのか!？」

「……はい。」

はやての言葉から源太という単語が出ると、丈瑠は目を見開き、咄嗟にはやての方を向く。はやては少し顔を上げ、申し訳なさそうに言ったが、丈瑠は頭を押さえ「余計なことを……」と呟いたがはやては聞こえなかったのかそのまま続けた。

「……私、子供の頃から管理局に入つて、大切なものを見失つたかも知れへん……。それでも丈瑠さんからすれば、子供が戦場にいること自体おかしい事かも知れない。いや、おかしい事なんや。それなのに、私は忘れていた……。源太さんの言う通り、子供達が戦っているのは心配やけど、それじゃ駄目なんや。一時の感情で、動いちゃ駄目なんや。あの子供達を守るために部隊を動かしたら、それこそ部隊の皆を危険に晒して、守れた筈のものを、守ることが出来ないんや。」

「……。」

「それに……。私は部隊長や。誰よりも強く、任せられるような人じゃないといけない。本当の意味で強い部隊長にならないといけな

い……。それなのに、今回の出撃でなのはちゃんやヴィータ……シグナムがやられた時、怖くなったんや。また、私のせいでいなくなってしまうって……。」

途中、声が震えていたが、はやては続けた。そんな様子をなのはとシヤマルは何も言えず、ただただ顔を俯かせて聞いていた。

丈瑠は、そんなはやてを自分と重ねていた。当初、“18代目”として志葉家にいた時、外道衆との戦いが激化し家臣を集めることになった時、丈瑠はそれを嫌がった。その理由は、例え家臣でも自分と係わりのない者を巻き込みたくないという理由だった。結局の所、家臣は集まり、シンケンジャーとして外道衆と戦っていきながらも、不安を抱えていた。それは、18代目としての責任と、家臣を危険な目に合わしたくない……。そんな思いから不安が生まれた。

そんな時、恐るべきことが起こってしまった。自分が外道衆に対する“切り札”ということに気付いたアヤカシが、強靱な力を持つてして、自分に襲い掛かり、家臣達が自分を守ろうとした結果。自分以外大怪我を負ってしまった。その時、丈瑠はこう思った。『これからも、流ノ介達は自分を守るために、命をかけるかもしれない』その思いが、家臣の命を預かるという殿として背負わなければいけないものの重さに、丈瑠は背負いきれず、一人で志葉家を出て行った。そんな時、アヤカシが現れ、家臣達も傷を圧してまで向かってきてしまった。しかし、その時家臣から、自分に命を預ける覚悟を決めてくれたのだ。自分の弱さを理解したうえで……。その時、丈瑠は決意した。自分が家臣4人の命を預かる代わりに、自分の命

を家臣達に預ける……。そして、それに答えるように強くならなければいけないと。

おそらくはやても、源太の言われた言葉によって、自分の信念が揺らぎ、更にアヤカシによって命の危険にまで晒されてしまった。全ては自分の采配ミスによって起こった事だったが為に。

「……はやて、お前はどんな気持ちで部隊を作った？」

「……え？」

そんな思いから、丈瑠ははやてにどんな思いでいたのか、聞きたかった。上に立つ者として、大事な物を聞きたかった。

「ど……どんな気持ちって……。」

「お前がどんな思いで部隊を作った理由じゃない。俺が聞きたいのはこれからも部隊長を続ける覚悟を聞きたい。これぐらいの規模となれば、人の数も当然増え、危険も同じように増えてくる。そんなこともわからないのか？」

「そ……それは。」

言いながら、丈瑠はその身を起こして目線をはやてに合わせ、はやても丈瑠の行動に驚き顔を上にあげてしまう。

「全く……そんな事もわからなかったのか？誰かを守りたい一心で部隊を作るのはいいが、お前がすっかりしてなくてどうする。これなら部隊を作らないでしっかりと学んできた方がよかったな。」

「たっ丈瑠さん、それはちょっと言い過ぎじゃ……。」

丈瑠の言葉にはやてはまた顔を俯かせ、ぐっと堪えており、流石に言い過ぎだと感じたシャマルが注意を呼びかけたが、丈瑠は気にせず続けた。

「言い過ぎも何も、上に立つ者としては大事なことだ。命を預かる者として、覚悟がなければ意味がない。はやて、お前にはあるのか？色んな相手から多大な気持ちを背負い、また命を預かり戦う覚悟

があるのか？」

丈瑠がそう言い放つと、はやては自然と心臓に当たる場所を、右手で服を握った。自分は責められている。そう錯覚し、それならばすべて聞こうという姿勢を取ったのか反論せず、丈瑠から目を逸らすように顔を動かした。

「……俺も一度逃げたことがある。激化する外道衆との戦いで、自分が危険に晒されたとき、仲間がそれを庇ったせいで大怪我をして、その重さに耐えきれなかった事があった。」

「え……丈瑠さんが。」

丈瑠の思いも由らない言葉に、丈瑠と視線を合わせた。

「そんな時、外道衆が現れ、家臣が怪我を圧してまで駆けつけてきた。あいつらは、俺の弱さを知り、それでも尚、命を預けて戦うと言ってきた……。だから俺は、その時覚悟を決めた。命を預かり、

また俺の命を家臣達に預けると。」

「・・・・・・・・。」

「はやて、お前がどんな思いで部隊を作ったかどうかは俺にとつてはどうでもいい。大事なのは、彼女達の思いと命を背負って戦えるか聞きたい。背負う気持ちがあるのなら背負い続ける。例えそれがどんなに重くても、どんなに辛くても決して逃げるな。諦めるんじゃない。俺から言えるのは、それだけだ。」

丈瑠はそうはやてに言い、聞いていたはやては、気づいていたら丈瑠の言葉を繰り返していた。

部隊を作ることが、はやての夢だった。そんなある時、管理局の体質に不満を持ち、部隊を作ると覚悟を決めたのち、友人であるカリムから予言の話を聞き、その予言を覆すために部隊を作った。形はどうあれ、部隊を完成したときは嬉しかった。大切な友人に囲まれながら、自分が作りたかった部隊が作れたからだ。だから、どんな苦難があっても、仕事が忙しくても全く苦にならなかった。

しかし、シンケンジャーの彼らが来て、外道衆と戦う事になった時初めて壁にぶつかった。激化する外道衆との戦い、仲間が軽い負傷を負うようになるというの間にか不安に取りつかれ、六課隊長陣全滅という恐れていた事態が起こり、部隊長として初めて挫折をした。自分もつとしっかりしていれば、もつと頑張っていれば、こんな事は無かった・・・そうはやては思っていた。誰かに相談しようにも、非難される事を恐れ部隊が壊される兆しを作りたくなかったか

ら、結局は出来なくて、丈瑠に相談した時も非難を受けると思っていた。

しかしどうだろうか、丈瑠の言葉から非難の声は上がった、それは全て理に適っており、拳句の果てには上に立つ者としての心構えを教えてくれた。そんな時、はやては理解した。志葉 丈瑠は、自分を試している。丈瑠はシンケンジャーのリーダーであり、自分と同じように命を預かる者としてそこにいる。だからこそ、仲間を任せられるか、丈瑠はそう聞いたのだろう。

しかし、丈瑠はこうやってきた。「彼女達の思いと命を背負って戦えるか聞きたい。背負う気持ちがあるのなら背負い続ける」・・・そして彼は、自分の弱さを自分に教えてくれた。それに続き、どんなに重くても、どんなに辛くても決して逃げるな。諦めるんじゃないと教えてくれた。彼は私を奮い立たせてくれる。こんな挫折を乗り越えられると、信じてくれていた。その言葉は、『大丈夫』や『頑張れ』といった励ましの言葉よりも、何十倍も重みがって、今の自分に刺激を与えてくれた。

「・・・少し、考えさせてください。」

しかし、丈瑠の思いを無駄にしたくない・・・そう考えていても、すぐ答えが見つかるほど、人は出来ていない。はやては先日、今まで味わったことの無い挫折を、味わったばかりなのだ。しかもその

内容が、自分の小さなミスで大切な友人と家族に大きな傷を負わせた事……。立ち直るには時間がかかる事は確実だった。

「……そうか、じっくり考える。そうすれば自ずと道がわかるはずだ。」

落ち込むはやてに、丈瑠はそう告げた。

丈瑠自身も、はやてがすぐ立ち直る事は、当然考えていない。自分も“18代目”を名乗っていた時、その責任の重さから、逃げ出した事があった。しかし、家臣の思いを知り、また家臣も丈瑠の気持ちを知った。しかしそれは、あくまでも個人としての物で、組織の上に立つ者の事となると、雲泥の差である。

そもそも、丈瑠自身は志葉家を支える為に、そう教育を受けてきた。その時は、影武者としてではなく、本物の殿としての教育……。そして丈瑠を支えていた一番の存在は、父の言葉であった。だから、すぐにでも復活できた。しかし、はやては丈瑠とは違い、子供の頃からそういった教育は受けていない。仮に管理局に入った時に受けてはいたのかもしれないが、丈瑠との差はあまりにも大きかった。

話が終わると、はやては立ち上がると頭を下げ、なのはが心配の声を掛けようとするが、シャマルはそれを止めた。



「……あ。」

「あつやべ……。」

外に出るとき、はやては壁に耳を押し付けていた源太を見つけると、声を漏らし、源太も見つかったことに思わず固まった。暫く間が開くと、源太は声を掛けようとするがはやては一言謝りの声を上げるとそのまま去って行った。

残された源太は、呆然とはやてが走り去った場所を見ていた。傍から見ればただ立っているだけなのだが、彼の頭の中では、先程の会話が流れていた。

「あいつも、色々あるんだな……。」

そう呟く源太は、静かに拳を握るとその場で静かに目を瞑り、再び回想に更けた。

当初、源太ははやての声が出た時、部隊長であるはやてが負傷した丈瑠に文句を言いに来たのかと考え、いつでも飛び出せる準備をしていた。しかし、そんな時ははやてが口に出したことは、自身の挫折とそれに対する相談であり、普段の彼女とは全く違う一面を耳にした。

それは、軍人では有るまじき行為であった。保護していた筈の民間協力者から、教えを貰う。常識的に考えてみれば普通はあり得ない。しかし、それでもはやては丈瑠に相談してきた。これは、それほど丈瑠を信頼している証拠なのだ。

そう考えると、源太は自分が恥ずかしくなってきた。初対面であるはやて達と、自分との意見の食い違いで喧嘩をしまい、また管理局の実態に納得出来なかつた為、その怒る気持ちは更に高まった。例え世界が違えど、同じ地球生まれにも関わらず、少年兵を認定している管理局の体質を認め、しかも自分の過去と照らし合わせあたかも常識のように言ったことを。

しかし、会話の中でははやてが口にした事は。その体質に疑問を持つていた事だつた。もつとも、はやての言う体質と源太が思う体質は全く違つていたが（はやての場合は管理局としての在り方、源太の場合は少年兵制度）、源太は全くそのことに気付かなかつた。そのおかげか、源太の気持ちは変わつていった。

隊長陣との会話でも、自分達に嫌味の一つも言わず、仲間として迎えていた。共に戦つてほしいと願つていた。忌み嫌つていた部隊長のはやてが、丈瑠に素の自分を見せていた。それなのに自分ときたら、意見の食い違いで喧嘩をしまい、相手は和解しようとする行動に移しているのにも関わらず自分ときたらいつまでたつても子供のよう拒み続ける……。恥ずかしいにも程があつた。

「こりゃあ……、ちよいと一肌脱いで頑張ってみつかあ！」

そう源太は声を上げ、右手で左腕の袖を持ち上げ、意気揚々と走り出した。遠くからシャマルの声が聞こえたが、そんなことは気にせず走って行った。

『外道衆がいる限り、世界が変わろうがこの世を守るために戦うしかねえ、そのために管理局と協力しないといけねえのなら、俺はそれに従う』そう、丈瑠と約束した。その約束を守るために、源太は行動に移そうとしていた。

「……行っちゃった……。何がしたかったのかしら、源太さん……」

源太が走り去った後、やっと源太の存在に気付いたシャマルが医務室から顔をだし、走り去る源太に声を上げたが、聞こえてなかったのかそのまま走り去って行ってしまった。そのため、良くも悪く

も先程の空気を壊してしまい、微妙な空気が医務室から流れていた。走り去った源太の姿を、ただただ見ているしかできないシヤマルに、なのはた苦笑いを浮かべていたが。丈瑠は源太の声を聴くと、半分呆れていたが不思議と安心した。

そんな中、丈瑠は獅子折神を手に持ち、古い記憶を呼び起こす。かつて、父が生きていた頃の事だ。その時丈瑠はまだ幼く、本格的に教育に入る前で父親と静かに暮らしていた。ある日、縁側で父と共に座っていた時、父は紙飛行機を作ってくれた。その時の会話は、今でも覚えている。

“ 「強くなれ、志葉家18代目当主。どんなに重くても、背負い続ける。・・・この紙飛行機のように、落ちずに飛び続ける。 」 ”

そう言っただけで飛ばした紙飛行機は、まるで父の言葉のように落ちずに飛び続け、見えなくなるまで飛んで行った。次に、外道衆が攻めてきたときの記憶が呼び起こされた。深い傷を負いながらも、燃え滾る炎の中、自分にこう父に力強く言われた。

“ 「忘れるな、今日からお前は、シンケンレッドだ！決して逃げるな、諦めるな・・・外道衆から、この世を守れ・・・！」 ”

そう、教えてくれた。そして丈瑠は驚く、自分が、父親の言葉を口走っていたことに。それも、知り合ってから数カ月という、一人の少女相手に。

「まさか・・・父親の言葉を、自分で言うことになるとはな。」

丈瑠は一人、そう呟いた。その言葉は、なのはとシヤマルには聞こえていない。丈瑠は静かに拳を握ると、新たに覚悟を決めた。次こそ、あのアヤカシを倒すと……。

### 第三十九幕 仲間 参（後書き）

作「今回は4人の家臣達の武器を紹介します。」

ウォーターアロー

シンケンマルが変化したブルー専用の弓。水の矢を連射する「めい明鏡止水」という技を使用できる。

ヘブンファン

シンケンマルが変化したピンク専用の扇。無数の風の刃で敵を切り裂く「はくりよくまんでん迫力満天」という技を使用できる。

ウツドスピア

シンケンマルが変化したグリーン専用の長槍。モチカラを込めることで柄の長さを変えることができる。「木の葉隠し」や木の葉を纏って槍を回転させながら敵を薙ぎ払う「たいきはんせい大木晩成」という技を使用できる。

ランドスライサー

シンケンマルが変化したイエロー専用の大型手裏剣。土煙を帯びたスライサーを投げて敵を吹き飛ばす「ふんとつじりよく奮闘士力」という技を使用できる。

作「感想の中で、“源太はミッドチルダ人と割り切った方がいい”とありましたが、私の力ではどうしてもこのような内容になってしまいました、申し訳ありません。それと、次回あたりそろそろ戦闘に突入したいと考えてます。」

今だから言えますが、ここまで会話パートが続くとは思っていませんでした。」

#### 第四十幕 仲間 四（前書き）

作「今回は戦闘と巨大ロボ戦を合わせたので、結構長いです。正直、ここまで長くなるとは思いませんでした。書くとき、結構大変でした・・・。」

追記、20:00に追記しました。



## 第四十幕 仲間 四

『三途の川 六門船』

「ここはあの世とこの世の狭間にある三途の川。そして、その川に浮かぶ骨と古ぼけた船が組み合わさったような船で、“外道衆”がその船を拠点としている。その船の中、二人のアヤカシ、イサギツネとヒヤクヤツパが話し合っていた。

「……そろそろ攻め時ですな。」

「おお、やっとかあ。それにしても、何で魔力を持とうとか考えたんだ、イサギツネ？そんなもん無くてもあいつらなんざ殺せるのによお。」

ヒヤクヤツパは立ち上がるとイサギツネの方を向いて言う。イサギツネはヒヤクヤツパに対して少し間を開けて口を開いた。

「……“供えられれば憂いなし”とでもいいいますか、まあ簡単な理由を述べますと、魔法に興味を持った……とでも言いますか。」

「ふうん、まあいいか。それよりさっさと行くつぜ？もう暴れたくてうずうずしてるぜ！」

「わかってますとも。ではシタリ殿、言って参ります。」

イサギツネは船の奥にいるシタリに呼びかけるように言い、ヒヤクヤツパと共に三途の川の中に入っていった。だが、イサギツネとヒヤクヤツパが行ったあと、シタリは船の奥から出てこなかった。

『ミッドチルダ 機動六課 ヘリポート』

はやてが医務室での会話を終わらして数時間後、機動六課中に警報が鳴り響いた。この警報は外道衆が“スキマ”を通じて地上に現れたことを知らせる警報だ。それを聞いたなのは達と流ノ介達は作業や仕事を止め、出撃するためヘリポートにそれぞれ向かった。た。

最初にヘリポートに到着したのはなのは達で、最後に来たのは流ノ介達で丈瑠の姿はいない。なのはは丈瑠以外全員集まると、源太を気にしつつも状況報告を始めた。

「みんな集まったね。先程、東部1区画に外道衆の反応があったの。チーム分けは、フォワード達は黒子さん達と人民救助及び避難誘導。私達と流ノ介さん達は外道衆の退治。いいね？」

「……はいつ！」「……」

なのはが状況報告し、フォワード達は大きく返事をしたが、流ノ介達は丈瑠がない事が気になっていよう、その中で流ノ介がなのはに丈瑠の事を聞くため、話しかける。

「なのはさん、殿は……？」

「丈瑠さんは、まだ治療中なの。だから、今回は」

「いや、俺も出る。」

なのはの言葉を止めるように後ろから声がし、声を聞いたなのは達と流ノ介達は、声がした方向に顔を向けると、そこには医務室にいたはずの丈瑠の姿があった。

「た、丈瑠さん！今、医務室で治療中じゃ・・・！」

「それなら心配するな、シャマルから許可を取った。」

「何、シャマルが・・・？」

医務室で治療中だったはずの丈瑠がいたことに、なのは達は驚く。丈瑠は流ノ介達の元に行き、シャマルから許可を取ったことを聞いたシグナムは声を漏らした。

「ああ。この戦いが済んだら、必ず医務室に戻る・・・とな。それに、このぐらいの傷なら慣れている。それより、外道衆が現れたようだな。」

「うん。恐らく、昨日現れたアヤカシ二体と思う。八神部隊長は、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長のリミッター解除を検討してるんだけど・・・。」

リミッターというのは、なのは達にかけられている“出力リミッター”というもので、なのは達がこの機動六課に所属するとき、魔力ランクが高く、一つの部隊に所有できるランクの上限を超えているため、つけられたものだ。このリミッターを解除するには部隊長の許可が必要で（なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの場合ははやて、他にもはやてにもリミッターがかかっており、はやての場合はカリムかクロノ。）、解除するにも制限や回数がある。はやては今回の戦いで、一度敗北したためヴィータとシグナムのリミッターの限定解除を考えているらしい。（なのはとフェイトは話し合い、ヴィータとシグナムだけになっている。）

リミッターについては文瑠達はこの世界に来てから教えてもらっていて、その意味も知っている（源太以外）。しかし、それを聞いた文瑠は拒否するように首を小さく横に振った。

「その必要はない、アヤカシを倒す策はちゃんとある。」

「えっ、そうなの!」

「詳しい話はへりの中でする、行くぞ。」

「ちょ、ちょっと文瑠さん!」

文瑠は言い終わるとすぐにへりの中に行き、なのは達は文瑠を追うようにへりの中に入っていった。フォワード達や流ノ介達もへりの中に乗り込むと、へりは浮上し、外道衆が現れた地点に向かっていった。

『ミッドチルダ 東部1区画』

ここはミッドチルダの東部1区画にある、ビルがずらりと立ち並ぶ都市。そこに、外道衆のアカシ“イサギツネ”と“ヒヤクヤツパ”が現れ、ナナシ連中に指示を出し、悲鳴を上げながら逃げ惑う人々を襲っているナナシ連中を見ていた。

「もつと暴れるナナシ共！この程度じゃシンケンジャーは現れねえぞ！」

「焦る気持ちはわかりますが、まあ落ち着きなされヒヤクヤツパ。暴れておれば自ずと現れる。」

人々を襲っているナナシ連中に対し、ヒヤクヤツパは声を荒げて叫び、イサギツネはそのヒヤクヤツパを鎮めるように言う。

すると、遠くから太鼓の音が鳴り響いた。外道衆は太鼓の音を聞くなり、暴れるのやめて音がした方向に顔を向ける。外道衆が目にしたのは、志葉家の家紋が書かれた陣幕、そして陣幕に外れるように立つ、バリアジャケットと騎士甲冑をそれぞれ身に着けたなのは達（もちろんフォワード達は人民救助活動中）、そして、陣幕には袴姿の丈瑠達が立っていた。（ちなみに源太は上半身は寿司屋の服で、後は袴を履いている。）

「外道衆！これ以上、お前達の好きなようにはさせん！」

「ようやく現れたようですねえ、シンケンジャーと魔導師共。わざわざやられに来てくれるとは、なんと命知らずな。」

「ふっ、さっきまでのような俺達だと思ってる、痛い目合っぜ？」

「ふん、その口がどこまで続くか楽しみだなあ。」

丈瑠の一言で外道衆の視線は全て丈瑠達となのは達の方に向き、丈瑠達は懐からシヨドウフォン、源太はスシチェンジャーと寿司デイスクを取り出す。

「行くぞ、お前達！シヨドウフォン！」

「スシチェンジャー！」

【イラツシャイーツ！】

丈瑠達はシヨドウフォンを筆モードに変化させて構え、源太はスシチェンジャーを開くと“光”と書かれたボタンを押すと電子音が鳴り、スシチェンジャーを閉じて寿司ディスクを折りたたむ。

「「「「「一筆奏上！」」」」」

「一貫献上！」

丈瑠達はそれぞれ赤い“火”、青い“水”、ピンク色の“天”、緑色の“木”、黄色い“土”、そして源太はスシチェンジャーに寿司ディスクをセットすると、スシチェンジャーが光だし、左右に振って前に出すと“光”という字が現れ、丈瑠達も宙に文字を反転し



てシヨドウフォンにあるボタンを押すと、丈瑠達はそれぞれ宙に書いた文字のエネルギー“モチカラ”に包まれ、シンケンジャーに姿を変えた。

シンケンレッドになった丈瑠は、ベルトのバックルから共通ディスクを取り出すとシンケンマルに装着し、両手で相手に突きつけるように抜刀する。

「シンケンレッド！志葉・・・丈瑠！」

シンケンレッドはシンケンマルを一度降ろし、片手でシンケンマルを肩に担ぐように乗せながら名乗る。次にシンケンブルーとなった流ノ介は、共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手で横に抜刀する。

「同じくブルー！池波 流ノ介！」

シンケンブルーはシンケンマルを縦に斬るように振り、歌舞伎の

ようにポーズを取りながら名乗る。次にシンケンピンクとなった茉莉子は、共通ディスクをシンケンマルに装着すると斜め上に抜刀する。

「同じくピンク！白石 茉莉！」

シンケンピンクはシンケンマルを降ろすと、片手でシンケンマルを半月を描くように上げると扇を構えるようにポーズを取りながら名乗る。次にシンケングリーンとなった千明は、共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手で抜刀して後ろに回す。

「同じくグリーン！谷 千明！」

シンケングリーンはシンケンマルを前に戻し、シンケンマルの峰を持つと刃先から出るまで撫でながら名乗る。次にシンケンイエローとなったことは、共通ディスクをシンケンマルに装着すると片手でシンケンマルを相手に突きつけるように抜刀する。

「同じくイエロー！花織　ことは！」

シンケンイエローはシンケンマルを両手で降ろし、横笛を吹くようにシンケンマルを構える。

最後にシンケンゴールドとなった源太は腰にあるサカナマルを取り、サカナマルを抜刀して斜め上に構える。

「同じくゴールド！梅盛　源太！」

シンケンゴールドは向かってから逆時計回りに回転し、さらに一回転してサカナマルを鞘に納めて名乗る。

そしてシンケンレッドはシンケンマルを斜めに構え、他のシンケンジャー達はシンケンマル、サカナマルを後ろに回し、忠誠を誓うようにしゃがむ。

「天下御免の侍戦隊。」

シンケンレッドはシンケンマルの峰を、鰐から刃先まで撫でるように手を当てながら言い、言い終わるとしやがんでたシンケンジャー達は一斉に立ち上がり、シンケンジャー達はシンケンマルを上段に構え、ゴールドはサカナマルを抜刀して同じように構える。

「シンケンジャー、参る！」

シンケンジャー達は一斉にシンケンマルとサカナマルを振りおろし、顔を上げてポーズを決めた。

「ナナシ共、かかれえ！」

ヒヤクヤツパの掛け声で、ナナシ連中は持っている蛮刀を一斉に構え、シンケンジャーとなのは達に向けて走り出す。それに応えるかのようにシンケンジャー達とヴィータとシグナムはそれぞれの得

物を構え、ナナシ連中に向けて走り出すが、シンケンゴールドがそれより先に走り出しなのは達の前に出る。

「ちよつ源太さん!？」

「さあて、そんじゃあ行きますかっ! うおりゃああああああああああああ!?!?!?!」

シンケンゴールドは袖を捲る仕草をし、サカナマルを構えてナナシ連中の群れに向けて走り出す。ナナシ連中は走ってくるゴールドを見つけると、蛮刀を振り上げて襲い掛かる。しかし、ゴールドはナナシ連中が斬りかかる前にサカナマルを抜き、目にも止まらぬ速さでナナシ連中を捌いていく。捌かれたナナシ連中はそこで立ち止まり、捌き終えたゴールドはサカナマルを鞘に納めると、その瞬間立ち止まっていたナナシ連中に電流が走り、次々と倒れて爆発を起こした。ゴールドの居合の速さになのは達は目を疑った。

「は、速い・・・!」

「居合抜きか、それでもこの速さは異常だ・・・!」

その速さは、フェイトでさえも目で追いつけない物であり、傍から見れば、ナナシ連中はゴールドを通り抜いただけで、やられているようだった。しかし、実際は違った。ゴールドの動きをスローで見ると、ゴールドはサカナマルを抜いた瞬間ナナシを斬り、再度鞘に納めてからまた斬っていき、時折敵の攻撃を回避しつつ、ただそれを繰り返して、サカナマルを鞘に納めると同時に大勢のナナシ連中を一掃した。しかし、シグナムが言った通り、この速さの斬撃は普通じゃない。しかし、それを源太はやってのけた。それは、天賦の才能でもなんでもなく、自力で努力した結果であったのだ。

「ぼさつとするな、俺達も行くぞ。」

「あつ、うんー！」

「ああ、我々も負けてられん！」

シンケンレッドの一言でなのは達は我を戻し、ヴィータとシグナムはシンケンジャー達と共にナナシ連中の群れに走っていき、なのはとフェイトは援護するため少し離れながらもついていった。

シンケンジャー達とヴィータとシグナムは、それぞれの得物を巧

みに扱い、ナナシ連中を次々と倒していく。

「百花繚乱！」

「行くぞ、レヴァンティン！」

【シュランゲフォルムツ！】

シンケンレッドはシンケンマルを“烈火大斬刀”に変化させ、周りにいたナナシ連中を烈火大斬刀で振り回すように斬り、一掃する。さらにシグナムがレヴァンティンを連結刃状態シュランゲフォルムにさせ、ナナシ連中を一気に倒し、一気に殲滅した。そして、シンケンジャー達となのは達は最後のに残ったイサギツネとヒヤクヤツパの前に立った。

「残りはおめーらだけだ！」

「ふん、何度も来ようと返り討ちにしてやるぜえ！キエエエエエエ  
エエエエエエエ！！！」

「狐、ヤタガラスの術！」

ヒャクヤツパは刀を両手に持ってシンケンジャー達に向けて走り出し、イサギツネは無数の黒い鳥を肩から出し、ヒャクヤツパよりも先に前に出るように飛んでいく。それを見たシンケンジャー達となのは達は身構える。

「いいか、まずは奴らを分離させるのが先だ、作戦通りに行くぞ！」

「はっ、まずは私ですね、リイン殿！」

「はいですう！」

シンケンブルーが前に出ると、ブルーの横にリインが来て、シンケンブルーはシンケンマルに“龍ディスク”をセットして回転すると、シンケンマルは水流を纏い始め、リインは魔方陣を出し、自分の前に水色の魔法の短剣“フリジットダガー”一つ出す。そしてシンケンレッドはシンケンマルに“獅子ディスク”をセットし、ディスクを回転させると炎を纏わせ、シンケンレッドは大きく飛び上がる。



「シンケンマル、火炎の舞い！」

「「氷結の舞い！」」

シンケンレッドが炎を纏わせたシンケンマルを振るうと、炎はイサギツネが召喚した黒い鳥を一掃し、ブルーが出した“水流の舞い”にリインのフリジットダガーが加わると、水流の舞いは氷結効果を持った“氷結の舞い”へと変化し、ヒヤクヤツパの足元に当たると、ヒヤクヤツパの頭以外全体と共に少し周りを凍らせる。凍らされたヒヤクヤツパは強制的に立ち止まり、さらに頭以外凍らされたため“全身刃”は使えず、予想もしてなかった技にイサギツネとヒヤクヤツパは驚くように目を大きく開いた。

「ぎゃああーっ、うっけねえ！」

「ヒヤクヤツパ！おのれ、シンケンジャーに魔道士共め、なんとい  
う技を・・・！」

「次だ、なのは、フェイト！」

「うん！チェーンバインド！」

「リングバインド！」





かい、残ったシンケンジャー達とヴィータとシグナム、そしてフェイトはヒャクヤツパに向かっていった。

イサギツネの方に向かったシンケンレッドとなのはは、まずシンケンレッドがイサギツネに向けて斬りかかる。イサギツネはちょうど立ち上がった時で、自分の持つ剣でシンケンレッドの斬撃を防ぎ、一歩下がった。シンケンレッドは隙を作らせないため、すかさず接近し、再びシンケンマルで斬りかかる。今度は防ぎきれず、イサギツネは軽く吹き飛んでしまう。

「ぐっ……さすがシンケンレッド、やりますねえ……！」

「文瑠さん、行くよ、ディバインシューター！」

イサギツネは吹き飛んだが地面に何とか着地し、なのはが魔力弾を形成して放つとイサギツネは魔力弾の方に顔を向ける。

「私に魔法など効きませんが、狐技返し！」

「来るぞ、なのは！」

イサギツネの目の前に空間が現れ、まるで魔力弾を受けようと広がっていく。だが、魔力弾は空間の中に入っていかず、直角に曲がり、空間の枠に外れると進行を変えてイサギツネにぶつかった。もちろん魔力は非殺傷だが、技を破るには十分で、想定外の事が起きたためか、イサギツネは派手に転んでしまった。

「なあにい！なぜだ・・・、魔導師ごときが私の術を破るなど・・・！」

「簡単な話だ、確かにお前の術は強力で厄介な物ばかりだ。だが、対策なんて何度でもとれる。」

「なんとも生意気なあ・・・！」

二手に分かれた理由は、両方とも対抗できるためでもあるが、イサギツネよりヒヤクヤツパに数を多くした理由は、“全身刃”の対策だ。ヒヤクヤツパの全身刃はシンケンレッドとゴールドでは捌ききれなかったが、数を増やせば捌ききれる可能性も増えるため、ヒヤクヤツパに数を集中させた。そしてイサギツネの数を減らした理由は、“術”だ。イサギツネの術はもちろん厄介な物で能力も限定され、その分リスクも高くなるが、先程の戦いの二の舞になるぐら

いならマシだ。それに、まだ策があつたからだ。

イサギツネは声を震わせながらゆっくり立ち上がり、シンケンレッドとなのはに向けて手をかざすも、何も起きない。

「ぐっ、まだ出せぬか・・・、だが貴様ら等私の術で充分！」

「・・・なのは、頼む、少し時間を稼いでくれないか？」

「えっ？あ・・・うん。」

シンケンレッドの願いをなのはは成り行きだが受け入れ、なのははイサギツネの方に行くと、シンケンレッドは“真”と書かれた印籠型の機械“インロウマル”を取り出すとインロウマルに“真”と書かれたディスクを取り出すと、インロウマルにセットする。

【スーパー、ディスク。】

インロウマルはセットされたディスクを読み取り、シンケンレッドはインロウマルを前に突き出し、インロウマルにあるスイッチを押す。すると、インロウマルから“真”という文字が浮かび上がり、急上昇すると文字はエネルギー状の陣羽織になり、陣羽織はシンケンレッドを包み込む。するとシンケンレッドは襟に金の縁取りが成された陣羽織を羽織っており、陣羽織の背中部には“真”という文字が書かれていた。そしてシンケンレッドは自分のシンケンマルにインロウマルをセットし、スーパーディスクをインロウマルからシンケンマルに移し替えると、シンケンレッドは、全ての折神の力を纏った強化形態“スーパーシンケンレッド”へ変化し、さらにシンケンマルもインロウマルを装着したことにより、“スーパーシンケンマル”に変化した。

シンケンレッドの変化に、なのははもちろん、イサギツネの動きも止まり、スーパーシンケンレッドに顔を向き、なのははシンケンレッドの変化に驚いた。

「っ！た、丈瑠さん・・・！」

「なのは、後は俺に任せる。スーパーシンケンレッド、参る！」

「そんな物を身にまとっても、私に一人で立ち向かうとはなんと愚かな！狐つぶての術！」

イサギツネはなのはから離れ、スーパーシンケンレッドに向けて目からの光線を放った。しかし、レッドはそれを物ともせず走っていき、イサギツネに向けてスーパーシンケンマルを振るう。イサギツネは剣で防ぐも、先程とは違い、押し切られてしまい、シンケンレッドの斬撃を受ける。イサギツネは少し声を漏らすも、再び剣を振るうが簡単に避けられてしまい、横からシンケンレッドに斬られ、イサギツネはスーパーシンケンレッド相手に成す術もなく、ただシンケンレッドに振り回されていた。

「嘘……、圧倒している……。」

『丈瑠さんの数値がどんどん上昇している……。恐らく、丈瑠さんが使った装備に何かあるようです。』

なのはが啞然として見ていると、シャーリーが通信を入れてなのはに、自分なりの解釈を報告した。

実際、インロウマルとスーパーディスクを使い、スーパーシンケンジャーとなったシンケンジャーは、全ての折神の力を纏うことができ、例え一人でもアヤカシを圧倒できるほどの力を得ることができ。しかし、スーパーシンケンジャーとなるには隙がどうしても生まれてしまったため、誰かが隙を作らなければならなかったのだ。

その頃ヒャクヤツパの方では、彼が出す全身刃に苦戦していた。



「くそ、てめえらどけやがれ、全身刃ア！」

ヒャクヤツパは周りにいるシンケンジャー達とヴィータとシグナムを退けるかのように全身刃を操って吹き飛ばす。ヴィータとシグナムはとっさに防御魔法を発動したおかげか、傷が少なくすんだが、シンケンジャーは自分達の得物で防ぐも多少傷付いてしまった。

「ぐっ！」

「梅盛、大丈夫か？」

ちょうどシグナムの隣に吹き飛んできたシンケンゴールドに顔を向けて話しかける。ゴールドはすぐに体勢を立て直してサカナマルをヒャクヤツパに向ける。

「ああなんとかな。だがあいつは前戦ったときよりも、確実に強くなってやがる。丈ちゃんと俺で奴の刃を捌いてみたが駄目だった。」

「そうか・・・、ならどうすればいい？」

「もう一人数を増やしゃあどうにかなるんだがなあ・・・。」

シンケンゴールドは顔の向きを、ヒヤクヤツパから仲間の方に向けてる。ダメージの方は全員どうってこともないが、距離が開いているためすぐその場で会話ができない。しかも今ヒヤクヤツパを挟む形に散らばっているため、集まるのは難しい。もし集まろうとしても、ヒヤクヤツパは許さないだろう。そう考えていた時、後ろから誰かが話しかけてきた。

「それだったら、私も協力する。」

「テストロツサ！」

「おいあんだ、大丈夫なのか？手え震えてるぜ。」

後ろを振り向くと、そこにはフェイトがいた。そして、シンケンゴールドの言う通りフェイトのバルディッシュを持つ手がわずかだが震えている。だが、フェイトは震わせながらも首を縦に振る。

「わかってる。でも大丈夫、手伝いぐらいなら出来る。だから・・・」

「・・・」

シンケンゴールドはフェイトをじっと見た。フェイトの目は、まっすぐとされていて、強い意志を感じた。それを読み取ったゴールドは、フェイスの下で笑みを浮かべ、体をフェイトに向けた。

「・・・へっ、怪我しても知らねーぜ？」

「ッ！・・・はいッ！」

シンケンゴールドは向きをフェイトからヒヤクヤツパに変え、ゴ

ールドはサカナマル、シグナムはレヴァンティン、そしてフェイトはバルディツシュを構えた。

「さあて、遅れるなよ、シグナム“ちゃん”にフェイト“ちゃん”！」

「え、ええっ！」

「ちゃ、 “ちゃん” 付けて呼ぶな、梅盛！」

シンケンゴールドの発言で戸惑ってしまうも、ゴールドが先行すると次にシグナムが行き、最後にフェイトが行った。そんな彼らを見たシンケンジャー達とヴィータは止めようとしたが、彼らは聞き受けずにヒャクヤツパの方に向かって行った。

フェイトは後少しの所で立ち止まり、シンケンゴールドとシグナムがヒャクヤツパの相手となった。ヒャクヤツパの刀の扱いに、ゴールドとシグナムは二人で

交代しながらもどんどん攻めていき、ヒャクヤツパは二人の連携に押されてしまう。そして、ヒャクヤツパはシグナムの斬撃の衝撃で、刀を落として吹き飛んでしまった。

「ぐあああ！畜生、これでも食らいやがれえ、全身刃！」

「来るぞ！」

「うん！」

ヒヤクヤツパが全身から刃を伸ばして襲つてくると、待機してたフェイトが加わり、ヒヤクヤツパの刃を三人で捌き始めた。

ヒヤクヤツパの全身刃はシンケンゴールドの言う通り、ヒヤクヤツパの刃の数が増えており、前々回の戦いでレッドと協力したとき捌ききれなかった。だが、今回はゴールド、シグナム、フェイトの三人だ。この組み合わせで捌ききれるかどうかゴールドは不安だったが、その不安はすぐになくなった。刃を弾くごとに壊れている。それに刃を破壊すればするほどヒヤクヤツパの方に前進していく。そして、とうとうヒヤクヤツパの懐に入ることができ、ゴールドとシグナムが同時にヒヤクヤツパに斬撃を入れるとヒヤクヤツパは耐えきれず、吹き飛んで行った。

「ぎゃあああああ！……！」

「よっしゃあ！お前等、やるじゃねえか。」

「うん、なんとかうまく行った……。」

「休んでる暇はない、行くぞ！」

「わあってるよ！」

ゴールドはシグナムに言われずともヒヤクヤツパの元に行き、見ていたシンケンジャー達とヴィータも吹き飛んで行ったヒヤクヤツパの元に向かっていった。

そしてイサギツネと戦っていたスーパーシンケンレッドは、シンケンレッドの一撃でイサギツネは大きく吹き飛び、丁度ヒヤクヤツパと吹き飛んだ形で合流させてしまったが、二人ともぼろぼろの状態だった。そして、同じ時にスーパーシンケンレッドとなのははシンケンジャーとフェイト達と合流した。その際フェイト達はシンケンレッドの変化が気になったが、今は無視してイサギツネとヒヤクヤツパの方に顔を向けた。

「くそっ……。」

「なぜだ、なぜ……勝てぬのだ！前は……我らが痛手を与えたはずなのに……！」

イサギツネとヒヤクヤツパはまるで、信じられない様子でゆっくりと体を起こして言った。

「さっきまでの俺達と違ってると、痛い目会っせつつたろ？」

「源太、シグナム、同時に行くぞ。」

「ああ、わかった。」

「おうよっ！」

スーパーシンケンレッドの指示で、シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードすると、レヴァンティンの刀身は炎に包まれ、シンケンゴールドはベルトのバツクルから寿司ディスクを取り出すとサカナマルにセットし、ゆっくり抜刀するとサカナマルの刀身は眩しいほど輝き、スーパーシンケンレッドは獅子ディスクを取り出すと、シンケンマルにセットしたインロウマルにセットすると、「【獅子、ディスク】と読み取り、シンケンレッドはスーパーシンケンマルの鐔についたディスクを回転させる。

すると、辺りが野原へと変わり、イサギツネとヒヤクヤツパ相手に、スーパーシンケンレッドとシグナムがそれぞれ炎を纏わせた得

物構え、二人で一斉にかけ走り、イサギツネとヒャクヤツパと二人同時に斬りかかる。

「シンケンマル、真・火炎の舞い！」

「紫電一閃！」

「ぐおおおっ！！！！」

スーパーシンケンレッドとシグナムに斬られたイサギツネとヒャクヤツパは、大きい炎に包まれ、もがき始める。そしてさらに、追い打ちをかけるように、シンケンゴールドが光り輝くサカナマルをイサギツネとヒャクヤツパを中心に回りながら何度も斬りつける。

「サカナマル、百枚おろしいiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」

「ぎゃああああああああっ！！！！！！！！！！」

「ぐああああああああっ！！！！！！！！！！」

シンケンゴールドは高速で回り、イサギツネとヒャクヤツパを文



字通り何度も何度も斬り刻み、そして終わったのか、スーパーシンケンレッドとシグナムの元に着地すると、サカナマルをそっと鞘に戻す。すると、イサギツネとヒャクヤツパに電流が走った。

「ち、ちくしょおおおおおおお………!!!!」

「こんな……こんなはずでは……!」

イサギツネとヒャクヤツパは崩れるように倒れ、ヒャクヤツパだけ何とか生き残ったのか、膝をつき、イサギツネは耐えられなかったのか、ゆっくりと倒れていく。しかし、イサギツネはなおも諦めてなかった。

「我らに……力が、力があればあああああ……!!!!」

イサギツネが叫んだ瞬間、イサギツネの体が青白く、眩しいほどに輝き始めた。光が発した瞬間、シンケンジャー達となのは達は顔を隠し、ゆっくりだが離れて行き、光はヒャクヤツパを取り込むよ

うに広がっていった。

「い、イサギツネ……うあああああああつ……!!」

「な、何が起きてるんだ！」

『大変です！突如アヤカシに、ロストログリア反応を感知！離れてください！』

「了解、みんな、この場から離れて！」

フェイトの指示で全員この場から離れて行き、フォワード達と合流してある程度離れると、再びイサギツネの方を向いた。イサギツネは尚青白い光を出し続け、雄たけびを上げていた。そして、ヒヤクヤツパは悲鳴を上げていた。

「うおおおおおおおつ……!!力が、力があああああああつ……!!」

「か、体が……ぐあああああああつ……!!」

「おいおい、いったいどうしちまったんだよ！なんか様子がおかしいぞ！」

「ロングアーチ、応答して、いったい何が起こっているの！」

『こちらロングアーチ、何かの原因でアヤカシがロストロギアを発動してしまったようです。現在ロストロギアの解析を』

「ジュエル・・・シード。」

アヤカシの異変に慌ただしくなるロングアーチと現場において、そう静かに、怯えたようになのが呟いた。

「じゅえるしーどお？なんだよそれは！」

「・・・歪んだ形で願いを叶えるロストロギア、まさか奪われた物がこんな形で見付かるなんてね・・・。」

そして、なのはが魔法使いになるきっかけとなった、またフェイトとなのはが出会い、それを巡るきっかけとなった事件の元となったロストロギア、それがジュエルシードであった。

光が青白く輝く中、フェイトはどこか怯えたように、また軽い憎しみ交じりに呟いた。

そして、光が収まると同時に、イサギツネの体が徐々に大きくなって巨大化し、イサギツネの体の変化にもわかつてきた。巨大化が終わって光がなくなると、目にしたのはイサギツネの体に、刃が巻きつかれている姿で、イサギツネとヒャクヤツパが合体したような姿だった。

「なんだよあいつら、合体したのかよッ！」

「それに何か様子がおかしい、テックウシンケンオーで行くぞ。」

「よし、イカちゃんにエビゾー、出番だぜ。」

【超・侍合体ディスク。】

【ハイオマチツ、イカオリガミィ！エビオリガミィ！】

スーパーシンケンレッドの言う通り、イサギツネ（？）の様子はおかしく、その場で無我夢中に暴れていた。それを見かねたスーパーシンケンレッドは、スーパーシンケンマルにセットしたインロウマルに“超侍合体ディスク”とセットして回転し、シンケンゴール

ドはスシチエンジャーを操作し、烏賊ディスクをセットすると、どこからか烏賊折神が現れ、さらに海老ディスクをセットすると海老折神が現れた。

スーパーシンケンレッドが超侍合体ディスクを使ったことにより、折神達が巨大化して現れ、折神達は合体して“テンクウシンケンオー”となり、海老折神は変形して“ダイカイオー”となり、さらに烏賊折神の足が分離し、一部のパーツはダイカイオーの鎧となり、烏賊本体と残った足は槍のようになるとダイカイオーが持つと、ダイカイオーは烏賊折神と侍武装した“イカダイカイオー”に侍武装を成し遂げた。

「……超、侍合体！テンクウシンケンオー、天下統一！」

「侍武装！イカダイカイオー、天下無双！」

【キタキタキタキター！】

「まだ折神あつたんだ！」

「そうみてーだけど、勝てるかどうかわかんねえな……。」

スバルが驚く中、ヴィータはテンクウシンケンオーとイカダイカ

イオーを見てぼつりと眩く。

イサギツネ（？）はヒャクヤツパが使用していた刀を持つと、左右から攻撃してくるシンケンオーとダイカイオーの攻撃を防ぎ、また反撃してきた。反撃を受けたシンケンオーとダイカイオーは怯みながらも再び攻撃しかける。

「ウオオオオオオ！ゼンシンヤイバアアア！！！」

「ぐああああっ！」

「うおおおっ！」

イサギツネ（？）はヒャクヤツパを思わせる、体に巻きつかれた刃を操り、テックウシンケンオーとイカダイカイオーを吹き飛ばした。吹き飛ばされ、道路に転がると派手に音が鳴り響き、辺りを揺らした。

「なんつーパワーだよ！」

「合体したことで更に力が増したか……。だが奴は一体、戦って



「ああ、折神が！」

「あれって私の魔法……、巨大化しても真似出来るの！」

『こちらロングアーチ！先程、アヤカシが使った砲撃に魔力を感知、魔法と思われませう！』

「なんだってえ！」

シャーリーの報告を聞いたなのは達は耳を疑った。その理由は簡単、今まで襲ってきたアヤカシは、全て魔法が使えなかった。イサギツネも例外ではなく、使ったとしても真似事だった。しかし、シャーリーの報告からすれば、イサギツネ（？）が使ったデイバインバスターは真似ではなく、真正正銘の魔法だったのだ。その真実を知ったなのは達は、血の気が引いた。

「あかん……、このままじゃやられる！」

「丈ちゃん！久々に“あれ”やらねえか？そうでもしねえと勝てる気がしねえ！」

「ああ、そのつもりだ、真・侍合体！」



【真・侍合体ディスク。】

スーパーシンケンレッドは、台座にセットしたインロウマルに、カラフルに“真”と書かれたディスクをセットすると、シンケンオーとダイカイオーが立ち上がり、互いに向き合った。

「な、何するの・・・？」

「おいおい・・・まさか・・・！」

ヴィータはこれから何するか想定が出来たらしく、シンケンオーとダイカイオーは、勢いよく腕を組むと眩い光を出し、再び離れると、シンケンオーの両腕が折りたたまれ、上半身が大きく後方に曲がり、ダイカイオーはそれぞれのパーツに分離した。ダイカイオーの足のパーツは鎧のようになり、シンケンオーの足の間（わかりやすく言えば、熊折神と獅子折神の太ももの間で、龍折神も同様）に入って合体し、ダイカイオーの上半身はシンケンオーの腹部と合体し、ダイカイオーの扇は上半身に装着され、ダイカイオーの二つの刀はシンケンオーの両腕のパーツにセットされ、最後に海老折神の足のパーツは兜となって頭が現れ、頭部に合体すれば、シンケンオーとダイカイオーが合体した、“ダイカイシンケンオー”へと合体

を成し遂げた。

「真・侍合体！ダイカイシンケンオー、天下統一！」

「う、うそお！シンケンオーとダイカイオーが合体したあ！」

「お前等・・・限度という言葉知らねえのかよ、畜生！」

「だが、これで状況が変わるのか・・・？」

なのは達がダイカイシンケンオーに驚く中、内部ではシンケンジャー達が一か所に集まり、ゴールドは台座にサカナマルをセットする。

「さあて、ここから逆転と行きますかあ！」

「来るぞ！」

スーパーシンケンレッドの言う通り、イサギツネ(?)はダイカイシンケンオーに向けて歩いてこっちに向かってくる。ダイカイシンケンオーは、ダイカイオーの日本の刀を持つと相手に向けて構える。イサギツネはヒヤクヤツパが使っていた刀で斬りかかるも、ダイカイシンケンオーは刀で受け流し、反撃するように刀で相手を斬る。斬られたイサギツネは体勢を崩すも、再び斬るうにも簡単に受け流され、逆に斬られ、大きくバランスを崩し、後退した。

「グヌヌヌ・・・ゼンシンヤイバアアッ！」

イサギツネ(?)は反撃と言わんばかりに、全身に巻きつかれたような刃を操り、ダイカイシンケンオーに向けて飛ばす。しかし、ダイカイシンケンオーの刀は突然光始めた。

「へっ、そう来ると思ったぜ！」

「もう何度同じ手は聞かん！二天一流、乱れ斬り！」

ダイカインケンオーはさらにパワーを上げて刀を操り、イサギツネ（？）が繰り出してきた全身刃を次々と纏めて破壊していく。そして、最後の一撃でイサギツネの刃は全て破壊され、破壊された衝撃でイサギツネは吹き飛んで行った。

「グオオオオッ！」

「すごい……このまま行けるかも！」

「……だけど、嫌な予感がする……。」

さつきまでピンチになっていたイサギツネ（？）相手に、シンケンジャー達はダイカインケンオーで迎え撃ち、戦況はシンケンジャー側が優勢になっていた。喜びの声を上げるスバルに、なのはは不安そうに呟き、戦いを見ていた。

「そろそろ決めるぞ、真・侍武装！」

スーパーシンケンレッドが指示を出すと、グリーンは兜、ブルーは舵木、スーパーシンケンレッドは虎、そしてゴールドは烏賊折神を召喚すると、4体の折神は合体し、巨大なバズーカ砲“イカテンクウバスター”へと真・侍武装を成し遂げ、シンケンジャー達はモチカラを込め始めた。

モチカラを込め始めると、イカテンクウバスターは動き始め、モチカラがチャージされていることがわかる。イサギツネ(?)はゆつくりと立ち上がり、ダイカイシンケンオーに体を向けると同時に、イカテンクウバスターのチャージが終わったと知らせる、“滅”という文字が浮かび上がった。

「とどめだ、イカテンクウバスター！」

「~~~~~折神大開砲！~~~~~」

イカテンクウバスターから、折神大開砲が放たれると、全ての折神のオーラを纏った砲撃がイサギツネ(?)を襲う。その時、イサギツネは両手を前に突き出し、砲撃はイサギツネに直撃し、爆発を起こした。

その様子を見ていたなのは達は、アヤカシを倒せたと思い込み、スバルとエリオは歓喜の声を、キャラは安堵の息を吐くが、ティア

ナと隊長陣は爆発した地点をじつと見つめていた。イカテックウバスターの破壊力は、離れていた筈のなのは達の方にまで爆風が届くほどで、かなりの物があったと推測される。しかし、相手はジュエルシードの力によって産み出された存在しないアヤカシ、これで終わるはずがないと心のどこかで思っていた。

爆発によって起きた煙が晴れると、青白い光が見えるとシンケンジャー共々、なのは達は驚愕し、目を開いたまま光を直視していた。煙が晴れると、そこにはイカテックウバスターの影響か、全身・・・特に腕部の損傷が激しいイサギツネと、胸元で光るジュエルシードの姿があった。

「うっ嘘・・・。」

「倒し切れて、無い・・・!？」

なのは達が感じていた嫌な予感的中し、喜びの声を上げていたフォワード達の顔が、一気に絶望へと落とされた。

「マジかよ・・・イカテックウバスターの威力を耐えたってのか!？」

「ねえ、あれ見て！」

一方、シンケンジャー側でもこの事は予想外の物であるようで、シンケングリーンは予期せぬ事態により慌てはじめ、イサギツネ（？）の変化に気付いたピンクがイサギツネを見て叫んだ。

「ゲ……アアアア……。」

「……嘘やろ、傷が……。」

「傷が、治ってるだとお！？」

イサギツネ（？）は呻き声を上げると同時に、ジュエルシードは輝かしいばかりの光を出す。それと同時に、光を当てられたイサギツネの部位は再生を始めた。再生する速度は遅い物の、その様子はシンケンジャー達に多大なショックを与えるには十分過ぎた。

「おいおい、どうすんだよ丈ちゃん！？これじゃ勝ち目なんて無くなっちまったんじゃないか！？」

「落ち着けよ源ちゃん・・・！そうだ、もう一回撃つのは」

「忘れたのか！？イカテンクウバスターは大量のモチカラを消費する。もう一度撃つには時間がかかるぞ！！」

ダイカイシンケンオーの切り札と言える真・侍武装の“イカテンクウバスター”の破壊力は現在使える技の中では最高クラスの物だが、それを代償にモチカラを大量に消費するという欠点があり、事実上一発が限度だ。もしもう一発撃つとなれば、チャージには時間がかかる上、今以上のモチカラを引き出す必要があるため、ある意味“賭け”に近い物だった。もし撃てたとしても、先程と同じ結果となってしまうっては元も公もない為、シンケンジャーに立たされた位置は八方塞がりとなっていた。

「じゃあどうすんだよ！攻撃しても再生されるし、チャージ中に攻撃食らったら駄目だし、ああもう何か打つ手とかないのかよ！？」

「・・・再生？・・・まさか。」



自暴自棄になるシンケングリーン言葉に、スーパーシンケンレッドは今までの事を思い出した。

イサギツネが倒される際、青白い光が出た。さらに魔法撃つ時も、再生するときも、青白い光が出ている。そして、その光の根源が“ジュエルシード”というものと気付いた。

「そうか・・・、弱点はあのロストロギアだ！」

「えっ、あの光っているあれ！」

「おい文瑠、本当か！」

「ああ、今までの行動を思い出してみる。相手が魔法使ったとき、再生したとき、全てあれが原因だ。わかりやすいように、今も光ってる。」

「言われてみれば・・・。」

スーパーシンケンレッドの言う通り、イサギツネ(?)の胸元にあるジュエルシードは今も光り続けている。しかし、狙うには容易だがイカテックウバスターのチャージには時間かかるし、だからと言って接近で破壊するも何かに守られてるかもしれない。さらに根源

はロストロギアだ。破壊すれば何が起こるかわからない。そう悩んでいた時、シンケンブルーが何か思いついたのか、スーパーシンケンレッドに顔を向けて喋り始めた。

「殿お！私に考えがあります！」

「こんな時になんだよ流ノ介！下らねえ発想だったら容赦しねえぞ！」

「下らなくもないわあ！」

「何か考えがあるようだな・・・、言ってみろ、流ノ介。」

今はどんな意見がほしいところだったのか、スーパーシンケンレッドはシンケンブルーに顔を向けて話す。

「はいっ！あっちが魔法を使うなら、我々も魔法を使いましょう！」

「えっ！」

「はあっ！」

「流さん！」

「流ノ介、下らねえ発想だったら容赦しねえつつたよなあ？」

「下らなくもない！私、思ったのです。アヤカシが使ってきた技は魔法。ならこちらら魔法を使えば五分五分！どうですか！」

流ノ介の発案はとんでもない事だった。相手が魔法使ってきたのなら、こっちも魔法を使えという、まさにぶっ飛んだ案だった。

「流さん無茶言わんとして！うちら魔法使えへんよ！」

「フーか、どうやって魔法使っただよ、なのは達を乗せろつつうのか！」

「その手があつたかあ！」

「何にも考えてなかったのかよてめえ！」

シンケンブルーの言葉に苛立ちを見せたグリーンは、今にも掴み

かかりそうな雰囲気を見せいた。その中、スーパーシンケンレッドは考えた。以前ゴーオンジャーと力を合わせる為に、シンケンオーの中に乗せたことがある。この案はシンケンブルーとゴーオンイエローとゴーオングリーンの発案で成し得たもの。しかし、これが上手くいくかどうかわからないし、失敗すればなのは達にも危険が及ぶ。だが、悩めば悩むほど時間が進み、イサギツネ(?)の再生時間を与えてしまうことになる。そのため、答えは一つしかなかった。

「・・・やってみる価値はあるな。」

「丈瑠！」

「考えている暇はない。それに、試してみなければわからない。」

「そりゃあ・・・そうだけどさあ・・・。」

スーパーシンケンレッドの意見に反論できないシンケングリーン。シンケンレッドの言う通り、イサギツネ(?)の再生はどんどん進むばかりで、今にも終わりそうだ。ダイカイシンケンオーは向きをなのは達に向ける。

「誰か、あのロストロギアを封印できる者はいるか！」

「え、ええっ！どどういう事なの、文瑠さん！」

「話は後だ！あいつを倒すには、それしか方法がない！」

スーパーシンケンレッドの言葉に、なのは達はイサギツネ（？）の方に顔を向ける。イサギツネの胸元は今もジュエルシードが輝き続いており、今にも動き出しそうだ。

考えてる暇はないと感じたなのは達の中で、最初に名乗り出たのはフェイトだった。

「・・・私が行く！」

「フェイトちゃん！」

「大丈夫だよ、ジュエルシードの封印なら出来るし、それに・・・」

「・・・それに？」

「よくわからないけど、やらなきゃいけない・・・そんな気がするの、だからお願い、我が儘なのはわかっているけど行かして。」

フェイトは再生を続けるイサギツネ(?)を見ると、バルディッシュを握る手が自然と強くなり、強い意志を込めた目でなのは視線を移す。恐らく、フェイトの感じているものは、かつての“P・T事件”と呼ばれた物を何らかの形で、けじめを付けたかったのかも知れない。それは、ジュエルシードを巡る戦いで、自分の母を失った事件でもある。だからこそ、ジュエルシードに関する思い入れは、他の誰よりも強かった。だからこそ、体が動いた。

「・・・わかった、でも私も一緒に行くよ。」

「なのは・・・!?!」

「一人より、二人の方が心強いでしょ?それに砲撃なら私の得意分野だから役に立てると思うからね。」

なのははレイジングハートを握りしめ、胸元に持っていくと意気込み、フェイトはその様子を見ると安心したかのように微笑んだ。

「なのはにテストロッサ、我々もついていこうか？」

「大丈夫、私達に任せて。」

「あとで泣いてもしらねーぞ？」

ヴィータは冗談交じりで、苦笑いしながら言い、なのはとフェイトとシグナムとヴィータは顔を互いに見て頷き、なのはとフェイトは浮かび上がるとダイカイシンケンオーの元に飛んで行った。

ダイカイシンケンオーの元に飛んで行ったなのはとフェイトは、近づく光に包まれ、シンケンオーの中に吸い込まれるように中に入っていく、シンケンジャー達の所に着地した。

「ここが・・・ダイカイシンケンオーの中・・・。」

「丈瑠さん、私達はどうすればいい？」

「・・・お前達は魔力をイカテクウバスターにチャージすることに集中しろ。発射と同時に封印を行う。いいな？」

「うん!」

「わかった!」

スーパーシンケンレッドの指示になのはとフェイトは頷き、ダイカイシンケンオーは再びイカテックウバスターを持ち、シンケンジャー達はモチカラ、なのはとフェイトはそれぞれ魔方阵を出し、魔力をイカテックウバスターに送ることに集中した。すると、イカテックウバスターが動きだし、チャージしていくことがわかる。

「くっ・・・そろそろやべーかもな。」

「あと少しだ、限界を超えるんだ！」

「簡単に言ってくれるじゃねーか・・・！」

シンケンジャー達は持てるモチカラを最大まで出し、なのはとフェイトも魔力を注ぐことに集中する。そして、とうとうチャージが済み、再び“滅”という文字が浮かび上がり、さらに“封”という文字が浮かび上がった。チャージが済んだ同時にイサギツネ（？）も再生が済んだのか、イサギツネは片手をこっちに向け、青白い光が集まってきた。





イサギツネ（？）は悲鳴を上げ、ゆっくり倒れると爆発を起こして消えて行った。そして最後の残ったのは封印処理がされたジュエルシードだけが残った。

「・・・終わった？」

「ああ・・・そのようだ・・・。」

スーパーシンケンレッドが言うと同時に、シンケンジャー達はモヂカラを使い過ぎたせいか、その場に座り込んでしまい、なのはとフェイトも魔力を、シンケンジャーほどではないが使い過ぎたのか、デバイスに支えられるようにゆっくりと座り込んでしまった。

「ちょっと・・・使い過ぎちゃった・・・。」

「俺なんかもうすっからかんだよ・・・。」

「ハハハ・・・でも、倒せたからいいじゃない。」

シンケングリーンの疲れたような言葉に、ピンクが微笑むように  
呟いた。

すると、シンケンゴールドは疲れながらも立ち上がった。

「さあて、皆さんお疲れでしょうが一つ、お忘れでしょうか？」

「えっ？」

「おっいいねえ、やろうぜ。」

シンケンゴールドの発言で、なのはとフェイトは何をするかと思  
い、グリーンはこれから何やるかすぐにわかったようだ。

「そうだよ、終わった時の一本締め！さあさあ皆さん、疲れた者は  
座りながらで結構！前回やんなかった人も一緒に、勝利の一本締め  
！」

「え……ええっ！私も……やらないと駄目？」

「当たったり前だろお！さあさあそこで見ている皆さんも一緒に！」

シンケンゴールドはダイカイシンケンオーの内部の中のだが、ヴィータ達とフォワード達に指を指して言う。急に振られたヴィータ達とフォワード達は当然戸惑った。

「えっ！ど、どうすればいいんだろっ……。」

「とりあえず、合図したら手え叩けばいいんだよ。」

「意外と……簡単ですね。」

「面白そうだね、ティア、やるっよー！」

「なんであたしに振るの、恥ずかしくて出来ないわよ！」

一本締めの方をヴィータから教えて貰うと、スバルとエリオとキヤロは頷き、ティアナはスバルに言われるなり、すぐに断った。

「さあ勝利の一本締めだ！よい！」

シンケンゴールドの合図で、シンケンジャー達と、なのは達（ティアナとシグナムを除く）は手を同時に叩くと、“パン”とわずかだが響いた。

「これにて、一件落着。」

と、スーパーシンケンレッドが座りながらも呟いた。

『三途の川 六門船』

ここは三途の川に浮かぶ六門船。その船に誰かが上陸してきた。その誰かは、イサギツネ達が地上に出るときまではいた筈の、骨のシタリだった。

「ひっひっひ……、今頃シンケンジャーと魔導師共は慌てている  
だろうねえ……。」

シタリは不気味は笑いを出して言った後、意気揚々と船の中に入  
っていく。

「どうやらスカリエッティとあの木偶人形は、あたしを出し抜いた  
気であるようだけど、まだまだ爪が甘いねえ……。イサギツネを  
利用して実験とは馬鹿な真似をしてくれるじゃないさ。でもまあお  
かげで良いもんが手に入ったよ。」

にやけたまま懐から何かを取り出す。それは、イサギツネが取りつ  
かれていたジュエルシードだった。

「イサギツネにヒャクヤツパ、お前さん達のおかげで魔力の性質を

調べる事が出来るようだねえ……。まあ、変なもんかけられちまったから何かに利用することは出来ないがね。」

変な物とは、ジュエルシードにかけられた封印の事を指している。シタリは残念そうに呟くと、ジュエルシードを再び懐に戻した。

「スカリエッティ、どうやらあたしゃあお前さんの力がまだ必要みたいだね。まだ手を取り合っていこうじゃないさ。」

シタリは誰もいない六門船の中で呟き、奥の方へ歩いて行った。

『ミッドチルダ 機動六課 ゴールド寿司』

あの後、ジュエルシード回収しようとしたのだが、その時はすでにシタリの手に渡ってしまったため見つからず、時間をかけたが結局意味がなかった。このことについて、後から外道衆が“スキマ”を通った形跡があったことが判明され、外道衆が持ち帰った可能性が一気に浮上した。最悪な状況を考えながらも、今はなのは達と

文瑠達は多くのモチカラを魔力を消費しているため、今しばらく保留となった。

そして時間が進み、夕食の時間になるとフォワード達と流ノ介達（文瑠は医務室にいるためいない）はゴールド寿司に集まっていた。

「ほおら、ゴールド寿司特性ちらし寿司だ！腹いっぱい食ってけよお！」

「うわあ、いったただっきまーす！」

スバルは初めて見るちらし寿司に目を輝かせ、スプーンを持つと手を合わせて言い、ちらし寿司を食べ始めた。フォワード達と流ノ介達も釣られるようにちらし寿司を食べ始めた。

「ああ・・・おいしいー！」

「だろお？じゃんじゃん食べよ、今日は俺のおごりだああああー！」

「やったー！」



「ちょっとバカスバル、そんなにはしゃがないでよ！恥ずかしいじゃない……。」

「まあ……いいんじゃない？こつ、羽目外すのも悪くねえと思っし。」

「そつだね、今まで気の休める時間なんてなかったし、こつはしゃぐのもいいんじゃない？」

スバルの行動に恥ずかしさを感じるティアナに、千明と茉莉が話しかける。途中、ヴィータとシグナムも来て、この二人もちらし寿司を食べ始めた。

ゴールド寿司が賑わっている時、なのはとフェイトがヴィヴィオを連れてゴールド寿司に向かって歩いていて、念話で話していた。

「『ねえフェイトちゃん。どうして、アヤカシがジュエルシードを持っていたと思う？私、偶然とは思えないの。』」

「『私もそう思う。恐らく、誰かが手引きをしていると思う。もしかしたら……。』」

「『ジエイル・スカリエツィの可能性が高い……？』」

なのはは念話で話しながらも、不安そうにフェイトを見る。フェイトは小さく頷く。

「『多分、可能性がある。まだ証拠が足りないから断定できないけど・・・、もしそうだとしたら・・・。』」

「『・・・この事、丈瑠さん達に話す?』」

「『うん、そうだね。だけど丈瑠さんの回復を待ってから話そうと思う。今はゆっくり休まないかね。』」

「『うん、そうだね。』」

なのはとフェイトは念話を止めると、ゴールド寿司に辿り着く。なのは達に気付いたウィータが顔を出した。

「お、おせーぞお前等、先食ってたぞ。早く来いよ、味、普通だけどな。」

「・・・おい、今何だったんだヴィータちゃん？」

ヴィータの発言に、源太は聞き逃さず、怒りを込めたように言った。しかし、ヴィータはそれを無視してなのは達と話していた。

「ヴィ、ヴィータちゃん・・・、それ失礼じゃ・・・。」

「いや、マジで普通だぞ。そう言ってねーで食ってみるよ。」

ヴィータはなのはとフェイトとヴィヴィオが座れるように席を作り、なのは達はその席に座り、源太からちらし寿司が出されるとそれぞれ一口ずつ食べ始める。

「どうだ、味は？」

「・・・なんて、言えばいいのかなあ・・・。」

「美味しい。・・・のかなあ？」

「おいおいおい、なんだよなんだよその反応はあ！あの子達（フワード達の事を指す）は好評だったぞ！」

「そりゃあこれよりうめー寿司、食ったことねえからじゃねーか？」

「なななななな・・・ンだとテメエ・・・！」

「・・・私は、この味は好みなのだが？」

「ありがとうシグナムちゃん！サービスするぜい！」

「ちゃん付けはよせ！」

なのは達の反応に源太は苛立ちを見せ始める。それを見た流ノ介達はやれやれと言わんばかりな態度をとった。しかし、シグナムの発言のおかげで元氣を取り戻したのか、喜びに満ちた声を出した。

そして、源太は何かを思い出すように声を出した。

「あつ、そういやこの部隊長さんは？」

「はやてちゃんなら、まだ仕事が残ってるからまだ来てないよ。」

「ふーん・・・あ、そつだ。なら後で誰か寿司届けてくんねーか？」

「えっ？でも・・・。」

「なあに、これから一緒に戦っていくんだ。少しは仲直りしねえとなあ！」

源太の願いになのはは少し戸惑ったが、源太の言葉を聞くとすぐに了承し、寿司を食べ続けた。その後、ヴィヴィオが笑顔で「おいしかった」といった時には嬉し涙をこっそり流したのは別の話。

『ミッドチルダ 機動六課 部隊長室』

「『・・・なるほど、急に連絡入れてくると思ったらそんな事があったとわなあ・・・。』」

「はい、それで師匠にご相談をっと思ひまして・・・。」

なのは達がゴールド寿司に向かっていた頃、はやては空いた時間を見つ、「師匠」と呼ばれた人物と話していた。その人物とは、時空管理局陸士108部隊長の『ゲンヤ・ナカジマ』と呼ばれた初老の男性。機動六課の部隊長こと八神 はやては一時期ゲンヤの率いる部隊で研修を受けており、その事から師匠と呼びいろいろと相談に乗って貰っていた。

「『しっかし、命を預かるかぁ……。今時、そんな事言う奴がいるなんてねえ、正直、意外な奴も居たもんだ。つで、その丈溜っつーシンケンジャーっていう集団の、隊長に言われて色々と考えてたけど、結局どうすればいいかわからず俺に相談してきたって訳か。』」

「は……。はい、やっぱりこういう事は自分で考えた方が良くないですかね？」

「『はぁ……。当たり前だ。』」

少し慌てたように言うはやてに、呆れたようにいうゲンヤの言葉に少しうずくまるはやて。少し間を開けた後、再びゲンヤは口を開いた。

「『まあこんなところは目立った事件とか少ねえし、命のやり取りなんざ、俺等のような管理局員じゃ滅多にやらねえ事だしな。悩んでも仕方ねえか。』」

「そうなんですか・・・。」

「『まあ結局は慣れていくしかねえだろうな。正直な所、命を預かるなんて相当な覚悟がねえと出来ないもんだからなあ、まあ誰も最初からそんなことできる奴なんていねえし、失敗とか成功とかいろいろ経験して、学んでいくしかねーんだよ。必死こいてな。とりあえず俺の言えることはこれだけだ、後は自分で頑張りな。』」

「はい、ありがとうございます、師匠。」

「『別に良いつてことよ、そんじゃま、なんかあったらこっちにこいや、現状とかいろいろ聞きてえしよお。それじゃあな。』」

ゲンヤはそう言い切ると、通信を切った。

場所を変えて時空管理局陸士108部隊。はやてとの通信を終えたゲンヤは、一息吐くとモニターを操作して一つの情報を開示する。モニターにはミッドチルダ語で“シンケンジャー”と書かれており、

そこに写された五人の男女の顔写真から一人の男性の情報を引き出す。そこには“タケル・シバ”と書かれていた。

「えーっと対外道衆殲滅集団“侍戦隊シンケンジャー”の隊長、志葉 丈瑠・・・か、最初はただの次元漂流者だと思ってたが、なかなか良い面構えしてるじゃねえか。」

そうゲンヤは小さく笑うと他のメンバーの情報も一気に映し出した。そして新しく追加された情報、まだ“ゲンタ・ウメモリ”と名前と簡単な説明でしか書かれていなかったが、彼らの顔を見るとゲンヤは椅子に背を預けた。

「命を背負う覚悟”・・・ねえ。まさか二十年ぐれーしか生きてない若造が、言うとはなあ・・・。はやての言い分じゃかなりの修羅場を潜ってるに見えるが・・・。」

そう呟き、ため息を吐くと同時に別の情報を映し出す。ゲンヤはその情報は今まで現れた外道衆の情報で、被害報告などが詳しく書



かれていた。ゲンヤはそれを見ると顔をしかめ、モニターをすぐに消すと、町の見える窓の方へと顔を向ける。

「急に現れた未確認生命体の奇襲とそれを殲滅する集団……。こりゃあ、まだまだゆっくりしてられねえな……。」

ゲンヤしかいない一室で、独り言のようにゲンヤは小さく呟いた。

#### 第四十幕 仲間 四（後書き）

作「今回はインロウマルとスーパーシンケンジャーについてと、この話に出た合体技とアヤカシについて紹介します。」

#### インロウマル

印籠型のパワーアップツール。歴代のシンケンジャーが全ての折神の力をひとつに集めるために制作していたもので、天幻寺に保管されていた。源太の技術と「真」のモチカラ、そして全ての折神の力を結集することにより完成する。秘伝ディスクを解析することもでき、セットしたディスクの種類を音声で知らせてくれる。ゴールド以外の5人が使用可能であり、使用者は後述のスーパーシンケンジャーになる。劇中ではゴールドを除く全てのシンケンジャーが使用した。テレビマガジン特製DVDではナナシもスーパーナナシとなった。

#### スーパーシンケンジャー

インロウマルを用いて全ての折神の力を纏った強化形態。源太曰く「真の侍」。この時使用者は襟に金の縁取りが成された白い陣羽織をまとう。劇中での呼び方は「スーパーシンケン（各自の色が入る）」。飛躍的に戦闘能力が増し、単独でアヤカシを圧倒することもできる。「真・火炎の舞」「真・猿回し」のように各自の技の頭に「真」が付いた強化技を使用できる。インロウマルは1個しかないために、スーパーモードになれるのは使用者のみである。基本的にレッドが、レッドが戦闘に参加できない場合はブルーがスーパー化するため他の3人がスーパー化した回数は非常に少なく、ゴセイジャーVSシンケンジャーを含めるとピンクとイエローはそれぞれ3回、グリーンは2回しかスーパー化していない。

烈火の舞い

使用者：シンケンレッド、シグナム

シンケンレッドの“ 火炎の舞い” とシグナムの“ 紫電一閃” を組み合した合体技。二つの炎が重なったことにより、更に激しさを増して相手を斬りつける技。なお、この技はスーパーシンケンレッドの“ 真・火炎の舞い” でも可能で、その時でも技名は変わらないが、威力の方は“ 真・火炎の舞い” の方が上である。ちなみに、この技の名前を付けたのは流ノ介である。

イカテンクウ・ディバインバスター

使用者：シンケンジャー、魔導師

今回初の侍巨人での必殺技。モチカラと魔力を合わせることにより発射することが出来る。今回の場合は、足りないモチカラを魔力で補う形となったが、魔導師にもよるが、ロストロギアの封印効果も重ね合わせることが可能だが、発射するには魔導師も魔力を多く消費する。

イサギツネ暴走形態（小説内ではイサギツネ（？））

イサギツネがスカリエツティの手により、体内に入れられたジュエルシードが発動して現れた姿で、オリジナル形態。

イサギツネの術を所持しながらも、ヒヤクヤツパの“ 全身刃” が使用でき、さらにジュエルシードの力を利用して魔法が使えるようになり、さらに再生能力を持ったが、ジュエルシードの力に耐えき

れず、暴走してしまった。一度イカテンクウバスターの一撃に耐えたが、なのはとフェイトが加わった“イカテンクウ・ディバインバスター”によりジュエルシードが封印され、倒された。

使用した武器はヒヤクヤツパの刀で、イメージとしては、イサギツネの体にヒヤクヤツパの刃が巻きつかれたような姿をしている。

作「今まで戦闘と巨大口ボ戦は合わせた方がいいと言われ続け、今回はそうしました。結果、結構長い文となってしまうましたが、いかがでしょうか？」

この後、1話2話ぐらい挟んだ後、オリジナルストーリーを多く書く予定です。理由はいろいろありますが、強いて言えば、さまざまなアヤカシを出したいからという理由ですね。書いていくうちに、“こんなアヤカシ出して、いろいろ書いてみたいな”と考えたりしています。（と言っても、全てオリジナルアヤカシは無理なので、原作のアヤカシを復活させますが）そう言った予定なので、よろしくお願いします。

最後にちよつとした謝罪です。今回の話大きく手間取り、人によつては駄作です。この話を書いていて、源太の動かし方や、原作キャラクターの扱いなどを改めて強く実感しました。この事が、これからの小説を書くときに活かせるように、頑張りたいと思います。」

第四十一幕 予感（前書き）

作「最近暑くなってきましたね……。6月なのに35度越えるとは思わなかった……。皆さんも熱中症に気を付けましょう。今回は短めです。」

## 第四十一幕 予感

外道衆のイサギツネとヒヤクヤツパを倒したシンケンジャー達となのは達。しかし、イサギツネはロストロギア“ジュエルシード”の力で暴走し、シンケンジャー達は一時窮地に立たされるも、流ノ介の提案によりモチカラと魔力を合わせた必殺技で見事撃破。そして二日が立ったある日、臨時査定の日がやってきた。

『ミッドチルダ 機動六課 丈瑠の部屋』

丈瑠はイサギツネとヒヤクヤツパを倒した翌日、なんとか退院できたのだが、シャマルから「少なくとも二日は無茶な行動は許可できない。」と言い渡され、仕方がなく部屋でじっとすることになり、たまにだが丈瑠以外部屋にいない時だけ、竹刀を軽く素振りして過ごしてきて、その翌日、臨時査定の日。

今現在、機動六課ではオーリス・ゲイズ三佐率いる地上本部が臨時査定を行っている。丈瑠達は当然関係なく、また、以前流ノ介達以外の部署から勧誘を受けたと聞いたため、警戒と共に部屋で待機している。尚、茉子とこととははキャロの部屋で待機しており、源太は屋台に行くため外出している。（ちなみに、普段は茉子とこととはが丈瑠の部屋に入るとは許可されているが、今回だけは控えるようにした。）

「ふああ……暇だなあ……、まだ終わんねえのか？」

欠伸をし、眠たそうな声で呟く千明。これは千明だけではなく、丈瑠達も同じことだった。流ノ介は部屋の片隅で歌舞伎の舞を静かに練習、丈瑠は台座の上でじつと胡坐で座っている。源太というと、臨時査定が来たと知り、何を勘違いしたのか、屋台の方に走って行ってしまった。屋台の方はよっぽどの事がない限り、変に扱われないうし、地上本部も屋台にケチつけることは考えられない。だが、ダイゴヨウだけは違う。前に、シャーリーに“新型インテリジェントデバイス”と勘違いされ、追い掛け回された事がある。今回も勘違いされないように、丈瑠の部屋でダイゴヨウを待機させればいいだけの話だが、源太はそれも聞かず、屋台に出て行ったまま帰ってこない。

「……源ちゃんおせえなあ……。」

「ああ、只でさえ源太は騒ぎを作るのが得意だから……。」

「……問題を起こさなければいいんだがな。」

流ノ介は練習を止め、丈瑠は不安に思いながらも、黒子に入れてもらったお茶を啜った。その時、扉がいきなり開き、全員が顔を向けるとそこには源太とダイゴヨウがいた。

「よお、遅くなつたな。」

「源ちゃん、遅えぞ。」

源太はダイゴヨウを自分の机（用意された物）に置き、椅子に座ると丈瑠達の方を向いた。

「わりいなあ。戻る途中さあ、フェイトからちよつと伝言頼まれたんだよ。」

「フェイトが・・・？」

「おう、なんでも・・・話したいことがあるつつつからよお、査定が終わり次第通信入れるつつつてたな。」



源太からその事を聞くと、丈瑠達はフェイトから何かを話すと知れば、いったい何なのかわからず、首を傾げた。

『三途の川 六門船』

ここはあの世とこの世の三途の川。その川に浮かぶ船、外道衆の拠点の六門船。その中では、シタリが一人でひっそりとひし形の青い宝石のような形のロストロギア、“ジュエルシード”をじっと見ていた。

「・・・駄目さね、まったくわからないねえ・・・。」

シタリはそういうと、ジュエルシードを机の上に置いた。このジュエルシードは、シンケンジャーと魔導師がイサギツネを倒した時に出たもので、シタリはこっそりと拝借したものだ。シタリはジュエルシードを使って魔力を調べようとしたが、生憎封印（シンケンジャーとなのは達の合体技、“イカテックウ・ディバインバスター”の追加効果によるもの）がされていたため調べられず、その封印を解こうとさまざまな方法を試したが、結局封印は解ける事は出来ず、途方に暮れていた。

「変な物（封印の事を指す）さえかけられていなければ、今頃魔導師が使う“魔法”とやらの秘密がわかると思ったのに・・・これじやただの石ころさね。」

シタリは封印処理がされたジュエルシードに悪態を付けながらも船の奥に行き、とある

部屋に入った。その部屋は、スカリエッティから譲ってもらった装置があり、この装置でアヤカシを復活させている。今、この装置は二つあり、一つは今アヤカシを復活させている最中で、もう一つはスカリエッティからもらった“失敗作”が入っている。シタリは“失敗作”の方に顔を向けた。

「そろそろこの“はぐれ者”をどうにかしないといけないね・・・。魂をつなぎ合わせたのはいいけど、ちっとも動かんね。これじゃあ本当に“木偶人形”だよ。」

シタリは“はぐれ者”を見て独り事を呟くと、部屋からゆっくり

と出て行った。

『ミッドチルダ 機動六課 通路』

文瑠達は源太からフェイトの伝言を聞いた後、部屋でじっと待っていた。そして、フェイトから通信が来たときには、昼過ぎになっていた。

今、文瑠達は菜子とことはと合流し、そろって会議室に向かっていた。

「フェイトさんがこちらに話したいことって、なんやるな・・・？」

「ああ、そうだよな。源ちゃんならともかく、俺達もだからな・・・」

「おい、それどういう意味だよ千明？」

ことはがフェイトに呼ばれた理由を考えていた時、千明の軽い冗談を耳にした源太は納得いかなかったのか、千明を軽くにらんだ。しかしことはが言った通り、文瑠達は呼び出された理由何て思い当

たることが無く、強いて言えば査定の話と結びつくのだが、それだけで呼び出す理由としては弱いのだ。何か重要な話かもしれない。そう思った丈瑠は家臣達と源太と共に会議室に向かっていた。

丈瑠達が会議室前に着き、中に入ると、なのはとフェイト、更にはヴォルケンリッターのメンバーがすでに着席していた。

「すまない、遅くなった。」

「ううん、大丈夫。じゃあ、さっそくだけど本題に入るね、これを見て。」

丈瑠達が空いた席に座ると、なのはが空間モニターを操作する。すると、会議室に設置されていたデカイモニターが光りだし、最初に映ったものは、機械的なものにはめ込まれたひし形のロストロギア、ジュエルシールドだ。

「宝石……かなあ？」

「一見宝石に見えるけど、これはジュエルシールドっていうロストロギア。今モニターに出ている映像は、前に回収したガジェットに搭

載されていたものの。」「

「そして、今回のアヤカシが使ったと考えられるロストロギア……  
と思われる。」「

「何っ……?」

文瑠はシグナムからアヤカシが使用したと耳に入ると、シグナム  
に視線を向ける。

「このロストロギアなんだけど、過去に一つの事件を起こしたの。  
時間がないから事件については話せないけど、このロストロギアは  
大きさは小さいけど危険性が高く、下手すれば一つの町が吹き飛ば  
可能性が秘めているの。」「

「はあ、冗談だろ?そんなちっせえ物がそんな力を持つてると思  
えねえなあ。」「

シヤマルの説明に、耳を疑った千明はすぐに突っかかる。だが、  
次にヴィータが喋り始めた。

「残念だが、本当だ。多分あのアヤカシが暴走したのも、そいつのせいだった話だぜ。」

「・・・マジかよ、なんか信じられねえなあ。」

「残念だけど、本当のこと。それに、このロストロギアにはある能力があるの。」

「ある・・・能力？」

ある能力と聞くと、茉莉は小さい声だが、フェイトに聞くように言う。なのははそれに応じるように口を動かした。

「このジュエルシードなんだけど、このロストロギアには願いを叶える力を持つてるの。」

「だけど、それは間違った方向に・・・。」

「間違った方向う？んだよ、普通に叶えてくれないのかよ。」

千明はフェイトからの言葉を聞くと、不満そうに思いつつも言った。

「そこらへんはまだ解明出来てないの、過去に一度願いが叶った事があるけど、それは動物の子供が大きくなりたいていう願いで、結果としては、そのままの姿で大きくなっちゃったから叶ったかどうかはわからないけどね。」

「うわぁ……。」

「……なあ、ちょっと思ったんだけどよぉ、そのジュエルシードって、すっげー力、秘めてんのか？今の説明聞いてもアヤカシが暴走した理由には結びづらいなぁ……。」

千明の質問に答えるように、なのはは空間モニターを操作し、過去に起きたジュエルシード事件の資料をだすと、その映像をでかいモニターに流した。

その映像をみた千明はたまらず声をだし、その力に思わず体が引いてしまうも、源太は新たに浮かんだ疑問をなのはの方にぶつけた。その疑問とは、今回のアヤカシ、イサギツネの暴走と、“願いを叶える”ロストログア、ジュエルシードの力がどう関わっているのか

理解できなかったのだ、仮に力が欲しいと願うだけなら、あそこまで暴走するはずがないと源太は踏んでいた。その質問に答えるように、フェイトは空中モニターを操作すると別の映像に移し替える。

「源太さんの言う通り、ただ願いを叶えるだけなら、よほどのことが無い限り事件は起きないと思います。だけど、このジュエルシードというのは、使い方を誤ればたった一つで次元震を引き起こす程の力があります。」

「・・・なあなあ丈ちゃん、次元震って何だ？」

「詳しくはわからないが、なのは達が言うには災害のようなものらしい。」

「・・・嘘だろ。」

フェイトがモニターを操作し、胸元に青白く光る巨大化した木の化け物、また“次元震”と思われる空間の損傷の映像を流した時、シグナム達は顔をしかめ、特になのはは一瞬顔を俯かせたが、すぐに顔を上げる。丈瑠達は未だ魔法技術及びこの世界については理解しきれない部分があったのか、その重要さが理解できずにいたが、丈瑠の言葉で次元震の恐ろしさを理解できた。



「モニターにあるように、ジュエルシードにはこのような力があります。アヤカシの暴走については現在調査中ですが、過去の事件を参考に、今回のアヤカシの暴走と現場にジュエルシード特有の魔力が感知されたことから、このジュエルシードがアヤカシを暴走させた原因としています。」

「なるほどなあ・・・そのジュエルシードってというのがどんなに危険な物なのかはわかった、だけど」

「それがどうしてアヤカシの手に渡ったか・・・それが大きな疑問だ。」

フェイトの質問を聞き終わった源太は大きく頷くと、また新たにでた疑問を言い出そうとしたが文瑠に言葉を取られた。その言葉を聞いたフェイトは、頷くとジュエルシードに関しての情報をモニターから消し始める。

「ここからが今回の本題となります。まずはこの映像を見てください。」

フェイトがモニターを操作しながら言うと、一人の男性の映像が映し出され、フェイトは手を止めて丈瑠達の方を向く。

「今、映像に映し出されている人物の名前は、『ジェイル・スカリエッテイ』、現在機動六課が追っている次元犯罪者で、広域指名手配とされている犯罪者で、外道衆に手を貸している可能性がある人物です。」

「ッそんな、嘘でしょ！？あの外道衆が人間の手を借りるなんて・・・！」

「・・・茉莉さんの言う通り、私達も最初は外道衆と関わりがないと思っていたから、丈瑠さん達に話すことは出来ませんでした。だけど、今回のアヤカシの持つジュエルシードによって、関連性が出たの。」

フェイトの言葉に思わず茉莉は声を上げながら立ち上がるが、フェイトが口にした言葉が茉莉を混乱させた。

「そんな・・・でも何でジュエルシードが？あり得ない、外道衆が

「たまたま拾ってきた可能性も」

「茉莉……落ち着け。」

「丈瑠……でも」

「いいから落ち着くん茉莉！理解できてないのは俺も同じだ。今は大人しく聞いている。」

混乱する茉莉に丈瑠が制止の声を上げ、茉莉を落ち着かせるが納得できない様子で渋々と椅子に座った。尚、丈瑠自身、いや丈瑠達はこの事が信じられなかった。しかし、ここで余計な事を起こしても意味がなく、また得られる情報も得られなくなる可能性も出てきたため、丈瑠は茉莉を止めた。

「……話を戻しますね、このジュエルシードというのは、施設によつて保管されていたのですが、ある日を境に全て奪われています。勿論捜査を進めていましたが犯人は特定できずにいました。しかし、数力月前、調査の結果でジェイル・スカリエッティに奪われていた可能性が浮上した。」

「だからと言って、外道衆とそのスカリエッティが手を組んでいる証拠にはならないわ……外道衆がその人から奪ったって可能性は？」

「もちろん私達もそう思っていたけど、それだったらガジェットの動きがどうしても不自然になるの。こここの所各地で僅かながら反応はあるし、前のフォワード達の休日起きた事件も起こるはずがないの。ここ最近の調査で、ガジェットを生産しているのはスカリエッティの可能性が高いという報告を受けています、それにもし外道衆がスカリエッティの本部に強襲を受けていたら管理局に何らかの反応がある筈だから……。」

未だに信じられないのか、茉莉はフェイトに別の可能性を提示するが、フェイトにそれを否定されるとそのまま黙ってしまう。前に言った通り、外道衆が人間と手を組むなど、丈瑠達は信じていなかった。それもその筈、なにより外道衆側が人間を見下しており、また支配下に置こうと企んでいることを誰よりも知っていた。だからこそ、外道衆が人間と手を組むのが信じられなかったのだ。そんな時、丈瑠達が今ある情報を整理していた時に、千明が何か納得したのか、深いため息を吐くと慎重に口を動かし始めた。

「……それなら、納得がいくな。」

「……千明？」

「ほら前にエリオ達と下水道で戦ってた時、ガジェットつー機械と同時に外道衆が現れただろ？あれからずっと考えてたけど、手を

組んでいるとなれば、一緒に出てきても何ともおかしくねえしな。俺だって信じたくないけど、理由があるとすれば、これが一番しっくりくるからなあ……。」

千明は茉莉の方へ向き、過去の体験を話すと流ノ介達も納得したのか、感心する声が上がった。

「……その理由やったら、納得出来るかも。」

「千明イ！お前、成長したなあ！！！」

「うるせえんだよ流ノ介！ともかくこれは俺の推測にすぎねえし、確実なもんじゃねえぞ。」

「でも、今の段階ならそれが一番の証拠。ほんの少しの疑問でも結びつくことがあるから、千明さんの話した事は決して無駄じゃないし、外道衆とジェイル・スカリエッティが手を組んでいる証拠にもなる。ありがとうございます。」

フェイトはそう言うと千明に対して軽く頭を下げ、千明はそれに対して恥ずかしかったのか、体を背いた。その後、少し立ってこの

会議は終わり、丈瑠達となのは達はそれぞれ分かれて行ったが、全員浮かない顔をしていた。

『???? スカリエッツィのアジト』

場所を変えてスカリエッツィのアジトの一室。ここではスカリエッツィが一人でキーボードのようなものを操作していて、彼の周りには空間モニターがいくつか出ている。そして、そのモニターに映っているのはロストログアでもなく、魔導師でもない。映っているのは、外道衆のアヤカシのデータだった。

そこに、一人の女性が入ってくる。その女性は、ナンバーズの人、No.4クアットロだった。

「ドクター、調子はどうですか？」

「クアットロか、君も見たと思うが見たまえ、ジュエルシードとアヤカシが融合した姿を！」

スカリエッツィは操作を止め、クアットロの方を向くと、クアットロの前に空間モニターが現れる。それには、ジュエルシードで暴

走ってしまったイサギツネの姿が映し出されていた。

「ああ、これですねえ、いい結果は取れました？」

「もちろんだとも、アヤカシの数値も格段と上がっているし、シンケンジャーの巨大兵器（侍巨人の事）を一時的だが圧倒したほどだ。まあ倒されたが、結果的にはいいデータが取れた。しかし、それよりもシンケンジャーの方にも収穫はあったよ。」

スカリエッティはモニターを操作すると、今度はスーパーシンケンジャーになったシンケンレッドと、ダイカイシンケンオーの映像が映し出された。

「まったく・・・これには本当に驚かされたよ。まさかシンケンジャーがここまで強くなれる装備があるとはね・・・。それに二つの巨大兵器が合体し、さらに上回る兵器を作り出す・・・！ああ、是非私の手で直に触って調べたい！」

「はいはいドクター、そう熱くなつては大事な研究に支障が出てしまいますわよお？」

「安心した前クアットロ、外道衆もシンケンジャーの方も魅力的ですばらしいが、計画の方は抜かりはない。」

「それなら安心です。そういえば、前にあちらの方からシンケンジャーの巨大兵器の製作依頼が来てましたが、どうしますかあ？」

「適当に報告でもしておけ、今そんなものには興味がない。」

「わかりました、じゃ適当に報告しておきますね。」

クアットロはそう聞くと、部屋から出ていき、スカリエッティは再び操作に移った。

「シンケンジャーに外道衆・・・調べれば調べるほど興味が溢れるほど沸いてくる・・・。これほど私の好奇心を刺激してくれたのは初めてだよ・・・！もっと私を愉しませてもらいたい・・・。」

スカリエッティは一室で一人で眩き、操作を続けた。その顔は、狂気に満ちていた。



## 第四十一幕 予感（後書き）

作「今回はダイカイシンケンオーについて紹介します。」

ダイカイシンケンオー

- ・全高：56.7 m
- ・全幅：48.9 m
- ・全厚：25.4 m
- ・重量：2000 t
- ・最高速度：650 km
- ・出力：2900万馬力

ダイカイオーとシンケンオーが真侍合体した侍巨人。武器はダイカイオーの二本の刀で、二刀流で敵を斬りつける「二天一流乱れ斬り」という技をもち、これだけでもアヤカシを倒すのに十分な威力を持つ（第27幕で千明とことはだけで戦った際にはアベコンベを、ゴセイジャーVSシンケンジャーではマダコダマを倒している）。必殺技は兜・舵木・虎・烏賊折神の合体した巨大バズーカ砲「イカテックウバスター」から、「滅」のモチカラを込めて全ての折神のオーラを纏った一撃を与える「折神大開砲」。発動には必ず6人揃っている必要もないが、大量のモチカラを消費するため連続では使えない。操縦者が少ない場合は体への負担がその分だけ大きくなるのが欠点（第25幕で丈瑠と源太の二人だけで使用したこともあるが、二人は大幅に体力を消耗してしまった）。頭部・上半身はダイカイオーがベースになっており、二号ロボの頭部がベースになるのは稀である。全員揃っていない場合でも合体可能な点も珍しい。ただし合体には必ずスパーシンケンジャーがいなくてはならない（スパーモードになるのは誰でも可）。

作「実は、最後になのはがヴィヴィオを見て、過去の自分を思い出し、ヴィヴィオと重なるシーンを考えてましたが、技量不足なため没になってしまいました、申し訳ありません。」

次回は（今度こそ）なのはの原作を加えたオリジナルストーリーを考えてます（話の流れ的にはなのはがヴィヴィオの母親代わりになる話ですかね？）。アヤカシの方は決まりそうなんですけど、まだ決定的とは言えません。オリジナルアヤカシも考えてますが、難しいです。ですが、焦らずゆっくり書きたいと思しますので、よろしくお願いします。」

## 第四十二幕 親子（前書き）

作「どうも、予定では早く投稿する予定ですが、ヴィヴィオの扱いが難しかったせいか、遅くなりました。言い訳かもしれませんが、シンケンジャー本編では子供と滅多なことがない限り関わらないので、苦戦しました。」

16:50頃タイトル変えました。

## 第四十二幕 親子

『ミッドチルダ 機動六課 ゴールド寿司』

あれから数日後、外道衆の動きは全くないし事件も起きず、丈瑠達となのは達は平和な日々を過ごしていた。そしてある日の昼休み、丈瑠達とスバルが源太の屋台“ゴールド寿司”に集まっていて寿司を食べていた。ちなみにティアナ、エリオ、キャラはここにいない。

「さあいっぱい食べよ。今日はひっさしぶりの握り寿司だあ！」

「うわぁ、おいしそう！」

「あつたり前だろお？味はこの俺が、保障するぜ。」

「ま、相変わらず味は普通だけだな。」

初めて握り寿司を見て驚きを見せるスバルに対し、流ノ介は相変わらず・・・っという感じで反応し、おしぼりで手を拭き、素手で握り寿司を食べた所を見て驚いたが、すぐに源太は笑顔でスバルにおしぼりを渡した。受け取ったスバルはおしぼりで見よう見まねで手を拭き、丈瑠達をマネするように寿司を素手で掴んだ。

「このお寿司ってこうやって食べるんだ、面白い食べ方だね。」

「いや、箸でもいいんだけどお前箸使えないだろ……。それより源ちゃん、よく握り寿司作れたな、確かネタがほとんど駄目になっただんじゃねえの?」

「いやーこの間あはやてにちよつくら相談したらよお、こりゃまた良い市場を紹介してくれてさ、さらにこの世界の通貨と交換してくれたんよ。いやー、ミッドチルダこの世界でまた寿司握れるとは思っててもなかったぜ。」

「へ〜、はやてがねえ……。」

千明はそれを聞くと、ミッドチルダ語のわからない源太が、どうやって寿司のネタを入荷した理由を色々と考えたが、深く考えないことにした。

「そついやあよ、エリオ達はどうしたんだ?」

「ああ、エリオとキャラロはフェイトと仕事、ティアははやてと一緒に出張なんだつてさ。」

「シグナムさんとヴィータちゃんも、それぞれ出張に出かけてるんだって。」

「そして、私となのはさんは、これといった予定がないので書類仕事ですね。」

「ふーん、あいつ等も大変だなあ……。」

「ところでさあ……ヴィヴィオちゃん。」

それを聞いた源太は、仕方ないなあと思いつつも頷く。茉莉はヴィヴィオが何かを見ていることに気づき、顔を向けると目に映ったのは、水槽の中に入っている烏賊折神と海老折神をじっと見ている様子だった。

「……折神、気になるの?」

「……うんっ。」

「……触りてえのか?」

源太がヴィヴィオにそう聞くと、ヴィヴィオは顔を縦に振った。反応を見た源太は、頭を少し掻いて考え、桶を取り出すと中に水を入れ、烏賊折神と海老折神を水槽から取り出して桶に移すと、桶ごとヴィヴィオの前に出した。すると、ヴィヴィオは目を輝かせ、烏賊折神をそつと小さな指で突つついた。少し突つつき、烏賊折神が時折動くヴィヴィオはビクツと驚き、指を引いてしまいが、再び恐る恐る指でつくと、今度はゆっくりと顔を向けてくれた。その烏賊折神を安心を感じたのか、烏賊折神をそつと撫で始めた。撫でられた烏賊折神は嬉しいのか、鳴き声を上げた。

「うわぁ……。」

「どうやら気に入ってくれたみたいだね。」

「……そのようだな。」

丈瑠はヴィヴィオが烏賊折神を撫でている姿を見て眩く。実際、折神を所持するのは家臣と志葉家、そして源太だ。家系のためか折神が他人と触れ合うのはまずない事で、他人が折神と戯れることが無い。しかし、今現在ヴィヴィオが折神を撫でて楽しんでいるため、驚くのも無理はない。（源太の場合は丈瑠が小さいころ渡したため論外）

烏賊折神を撫でて楽しんでるヴィヴィオに、仕事を終えたなのはがこつちに向かいながら声を掛けた。

「ヴィヴィオー。」

「あつ、なのはママ！」

「ほう、ママかぁ……………ママ？」

ヴィヴィオがそういうと、源太が口を開いて言い、ヴィヴィオが向いている方に顔を向けると、そこにはこつちに向かってくるのはがいた。そして、ヴィヴィオはなのはに向かって、まるで自分の親のように走っていき、抱き着いた。その様子を見た丈瑠達は、事情が分からないためポカンと口を開いて見ていた。

「どうなってんだぁ…………？」

「ヴィヴィオちゃんが…………なのはさんの子になったん？」

「いや、昨日まで保護関係だったんじゃないあ…………？」



「……と言うことは、養子にしたの……？」

丈瑠達はなのはとヴィヴィオの関係に疑問に感じ、思わず声を漏らした。それを聞いたスバルは、申し訳なさそうに声を掛けた。

「あの……その……。」

「んっ、どうかしたかスバル？」

「その事なんだけど……私が……、原因なんだ。」

スバルがそういうと、丈瑠達は全員スバルの方を向く。スバルは小さく蹲り、申し訳なさそうに口を開いた。

「えっと……話すと、長くなるんだけど……。」

スバルは、どこか話にくそうに言うが、このまま言わないでいと、納得してもらえそうもない為、話すことにした。

『回想 昨日』

オフィスルームでスバルは書類仕事をし、仕事を終わらした所なのは誘われて裏庭に散歩することになった。(この時ティアナはすでに自分の分は終わらしていたためいない。)散歩するとき、スバルはヴィヴィオの事が気になったのか、なのはに話すことにした。

「あ……、なのはさん。ヴィヴィオは、これからどうなるんですか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭があれば、それが一番なんだけどね……。」

なのははヴィヴィオの事を聞くと、顔を俯かせて寂しそうに答えた。ヴィヴィオはどこにでもいそうな子供に見えるが、実際はそうではない。ヴィヴィオは普通に“産まれた”子供ではなく、人の手を経て技術の力で“生まれた”子供、所謂“いわゆる人造魔導師素体”。保

護された時は、人造生命体であるが故に未知なる潜在能力危険視されたが、今ではその心配はないらしい。だが、人造生命体な故、保護してくれる家庭がなかなか見つからないのが現状だ。

「難しい……ですよ。やっぱり……普通と違うから……。」

「……そうだね……。見つかると思っただ、だから……。当分の間は私が面倒見て行けばいいのかなって。」

なのは顔を上げ、自分が思っていたことを口に出した。なのは、ヴィヴィオは身寄りもなく、いつまでも一人で居させるのはかわいそうだと思い、そう思ったのだろう。それを聞いたスバルは、暗かった顔がパアッと明るくなった。

「いいですね！ヴィヴィオ喜ぶますよ！」

「うーん、喜ぶかなあ？」

なのはの考えに賛同するスバルに、なのはは苦笑しながら返した。そして二人は、この事をヴィヴィオに伝えるため、なのはとフェイトの部屋に歩いて行った。

部屋に辿り着くと、ヴィヴィオが一人で積み木で遊んでおり、ヴィヴィオはなのはを見るとすぐに走って抱き着いた。なのははそれを受け止め、頭を優しく撫でた。

「ヴィヴィオ、大事な話があるんだけど聞いてくれる？」

「？」

ヴィヴィオはなのはに聞かれると、首を傾げてなのはをじっと見る。

「実はね・・・暫くの間、私がヴィヴィオの保護責任者になることになったの。」

「・・・？」

「つまりは、しばらくはなのはさんが、ヴィヴィオのママだよ・・・」

って事！」

「ママ……？」

ヴィヴィオはなのはが言った“保護責任者”の意味が分からず、スバルはどんな意味がヴィヴィオにわかりやすいように説明したが、言った言葉が間違ったのか、そのまま受け止めてしまった。ヴィヴィオはなのはを見て呟き、それに気づいたなのはは答えるように笑みを見せた。

「いいよ、ママでも。ヴィヴィオの本当のママが見付かるまで、なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオはそれでもいい？」

「……ママ……。」

「はい、ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオはなのはに聞かれると、なのはの顔をじっと見て、ぼそりと呟いた。呟きが聞こえたなのはは、答えるように言うと、ヴィヴィオは目に涙をため、なのはに再び抱き着いた。

『回想終了』

「ってことなんだ。あの後・・・正式に保護責任者になるため手続きを取っているところなんですけど・・・。」

スバルは事情を話し終え、苦笑いを浮かべていた。それを聞いていた丈瑠達の顔は、どこか呆れていた。丈瑠達がこの事が知らないのは、すれ違いによるものだ。普段の日常生活では、訓練以外では共に行動せず、バラバラに行動しているためか、昨日はヴィヴィオに出会わなかった。ちなみに、なのはとヴィヴィオは源太が用意したテーブルと椅子に座って食事を取っていた。(烏賊折神と海老折神もヴィヴィオの元に移動させた。)

「なるほど・・・ね。」

「おいスバル、もうちょイ言葉選べよ、つーか俺達知らねーし。」

「あの時、何て説明すればいいか、頭こんがらがっちゃって・・・、それに知ってたと思っただんで、言わなかったんですけど・・・ごめんなさい。」

スバルは千明に言われると、頭を軽く下げて反省しているように言った。

丈瑠達はなのはとヴィヴィオが座っているテーブルの方に一斉に顔を向けた。なのはとヴィヴィオは楽しげに会話しながら寿司を食べさせており、時折なのはが箸でヴィヴィオに寿司を食べさせていた。

「親代わり……か。」

「何事もなければいいんだがな……。」

なのはとヴィヴィオの様子を見て、茉子が呟くと、丈瑠が続けるかのように呟いた。

『三途の川 六門船』

ここはあの世とこの世の狭間にある、全体的に赤い世界、三途の川。その川に浮かぶ、外道衆の拠点の船“六門船”の中には骨のシ

タリが、“はぐれ者”が入った試験管をじつと見ていた。

「はぁ・・・、早くこいつの処分をどうするか決めないとねえ・・・  
。結局失敗だったが、大体予想してたさ。」

シタリは憎めそうに呟くと、試験管があつた部屋から出て行つた。隣にある試験管には、前まではアヤカシを復活させていたが、今三途の川の水しか入っていない。シタリが歩いていると、船の外から赤ん坊の泣き声は、試験管を揺らす程の声だった。

1111

「ふん、復活させたと思つたらすぐに出て行つたが、やる時はやるようだねえ・・・。こりゃ増水が望めそうだねえ。」

シタリは笑みを浮かべながらも歩き続け、赤ん坊の泣き声はしばらく止むことはなかった。



『ミッドチルダ デパート』

ここはミッドチルダの西部3区画にあるデパートで、食品はもちろん、服やおもちゃ、ゲームまでも幅広く販売されている、大手企業のデパートだ。そして屋上には、子供が楽しめるように小さな遊び場が設置されており、買い物をする親が子供を預ける簡易的な託児所になっていた。今、屋上では小さな子供達があれやこれやで楽しそうに遊んでいた。そこに、屋上に設置されたエレベーターから一組の夫婦が降りてきて、顔を振って我が子を探していた。

「ケントオー（一組の夫婦の子の名前）、どこにいるのー？」

「あっ、お父さんとお母さんだ！じゃあねー、バイバイ。」

呼ばれた夫婦の子は、遊んでいた子に手を振って言い、夫婦の元に走っていった。我が子を見つけた夫婦は、こっちに向かってくる我が子を迎えるように、妻がしゃがみ、手を広げて抱き着く姿勢を取った。その時、走っていた夫婦の子に、白い玉が当たった。

「うわぁー！」

白い玉に当たった夫婦の子は、白い煙を出すとともに転び、痛そうにしながらもゆっくりと顔を夫婦の元に向けると、その子供は見た光景に、目を疑った。

夫婦の子が見たものは、大人サイズの全身白い人型の化け物が、夫婦の妻を抱きしめていたのだ。本来ならば、化け物に抱き着かれたのならば悲鳴を上げて抵抗するはず。だが、夫婦は抵抗する素振りを見せず、逆に我が子のように扱った。

「ケント、寂しかった？」

「さっ、帰るぞ。」

夫婦は化け物を自分の子だと思い込み、白い化け物とそれぞれ手を繋いでエレベーターに向かっていった。これらの光景を見た客や職員、そして子供は白い化け物に怯え、恐る恐るじっと見ているしかなかった。しかし、夫婦の子だけは立ち上がり、化け物を連れてエレベーターの方に行く夫婦を追いかけた。

「お父さん・・・お母さん・・・？僕はこっちだよ？置いてかない  
でよお！」

夫婦の子は、親である夫婦を必死に呼びかけながらも走っていき、追いかけたが、夫婦は白い化け物を可愛がるだけで、夫婦の子はまるで、“いない”かのように扱い、エレベーターに入ると子供を放っておいてエレベーターの扉を閉め、下に行ってしまった。子供はエレベーターに乗ることが出来ず、取り残される形になってしまい、親を呼びながらとうとう泣いてしまった。周りにいる人達は、その泣いている子を見守る事しか出来なかったが、遠くから見ている外道衆は、クスクスと笑っていた。

「ふっふっふ・・・、そうじゃ、思いつきり泣け・・・、もっと泣いて苦しむのじゃ！」

外道衆は、腹部の丸い窪みから白い玉を出すと、今度は他の子供に向けて投げつけた。

『ミッドチルダ 機動六課 なのはとフェイトの部屋』

ちょうどその頃機動六課では、すでに外道衆が現れた警報が鳴り、なのはは一早く行くため立ち上がると、なのはのスカートの裾をギョッと握られる感触があった。なのはは下に顔を向けると、そこにはヴィヴィオが不安そうな顔をしてなのはの顔をじっと見ていた。

「・・・ごめんね、ヴィヴィオ。ちょっと行ってくる、戻ってくるまで待っててね？」

なのはは一度しゃがみ、ヴィヴィオと視線を合わせて言うと、立ち上がってヴィヴィオの事を隊員寮の寮母を務めているアイナに任せ、部屋から出て行った。

なのははヘリポートに向かう途中、通信でロングアーチから状況を聞き、ヘリポートに辿り着くとすでに丈瑠達とスバルが待機していた。

「ごめんね、遅れちゃって。」

「いえ、こちらにも到着したばかりです。」

「それより、外道衆が街で暴れている、早く行くぞ。」

「うん、状況はへりに乗って説明するね。」

文瑠の指示でなのはとスバル、流ノ介達はへりに乗り、全員乗り込むとへりは浮かび上がり、外道衆が現れたという西部3区画へ向かっていった。

『ミッドチルダ 西部3区画』

へりが外道衆が現れたポイントに到着し、文瑠達はすでにシンケンジャーに変身し、バリアジャケットを装着したなのは達と共にへりから飛び降りると、辺りを見回して外道衆を探した。

「あれ、外道衆がいねえぞ・・・？」

「なのは、場所はここで合ってるのか？」

「うん、ちゃんとポイントは間違っていないし、多分この近くにいるはずだけど……。」

「あつ、あれを見てください!」

スバルが指差した方向を見ると、そこにはその場で泣きじゃくる子供の姿があった。そのほかに、数多くの子供がその場で泣いており、ただ事ではないと判断したスバル達はその子供達の元へと向かう。

「坊や、大丈夫?お父さんとお母さんはどこ?」

「ウウ……ヒック……あそこ。」

スバルは近寄った子供の元へ着くと優しく肩を抱え、子供を落ち着かせるとその子はしゃっくりをしながら涙で濡れた指である方向へと向け、スバル達も向けられた方向を見る。そこには大人サイズの全身白い人型の化け物と一緒に歩いている夫婦がいた。その夫婦はその化け物に嫌気を見せず、まるで家族のように楽しげに会話しながら歩いていた。

「……嘘、どうなってるの？」

「と、とにかく早く教えてあげないと。」

その異様な光景に、なのはは思わず言葉をもらす。一方スバルもこの事態を理解できず、咄嗟に子供を抱え、その子供の親の元へと向かおうとするが、シンケンピンクが呼び止めた。

「……待って、その子の親は、何を言っても無駄よ。」

「えっ、どういふことですか茉莉さん！？言っても無駄って……。」

「この状況、以前見たことあるの。その元凶を討たないと……。」

「わーっはっはっはっはっ!」

「な、何っ!」

シンケンピンクは辺りを見回しながら言う。すると、上の方から誰かの声が聞こえる。その声に気付いたシンケンジャー達となのはとスバルは上を向くと、そこにはデパートの屋上で、その上に外道衆のアヤカシ“ナキナキテ”がいた。

「ワシの可愛い白鬼子達よ、親から子を奪うのじゃ！」

「やっぱり・・・あいつね！」

ナキナキテは腹部の丸い窪みから白い玉を取り出すと、母親と手を繋いで歩く子供に向けて投げつける。投げつけられ、ぶつけられてしまった子供は白い煙と共に倒れ、母親から離れてしまったが、母親はその事は気にしなかった。そして、白い煙が晴れるとそこには、母親が手に繋いでいるのはそこには、大人サイズの全身白い人型の化け物“白鬼子”で、母親は白鬼子を、自分の子を思い込んでしまい、本当の自分の子に気付かず歩いて行ってしまった。

「外道衆！じゃあ、この事態を作ったのは・・・！」

「間違いなく、あいつの仕業ね。」



「ここは私にお任せを、ウォーターアロー！」

シンケンブルーはシンケンマルに装着した共通ディスクを回転させ、シンケンマルからウォーターアローに変化させ、狙いをナキナキテに定め、矢を発射すると、見事ナキナキテの足に直撃し、屋上から落下した。

「う、うわあああああっ！！！」

「よしっ！」

「なのは、スバル、ここは俺達に任せる。」

「わかった、スバルは私と共に逃げ遅れた人達を避難！」

「はいっ！」

なのはは文瑠の指示に従い、スバルと共に避難活動に向かっていた。落ちたナキナキテは地面に落ち、よろけながらも立ち上がった。

「いたた・・・っ、ぬっ貴様らシンケンジャーか！」

「またあんたね、これ以上子供達は泣かせないわよ！」

「何じゃまたお前達か！ワシの邪魔をするな！ナナシ連中、こいつらを倒すのじゃ！」

シンケンジャー達に気付いたナキナキテは、武器の棍棒“にえかねじ沸鉄地獄棍”を取りだし、ナナシ連中を呼んで、シンケンジャーに向けて襲い掛からせた。シンケンジャー達はそれぞれ散開し、ナナシ連中の殲滅に入った。

シンケンジャー達はそれぞれの得物でナナシ連中を倒していき、倒されたナナシは次々と倒れ、消えていく。ナナシ連中の全滅が時間の問題になるかと思われたが、ナキナキテは白い玉ではなく、赤い玉を片手に持ち、シンケンピンクに狙いを定めていた。

「まずはお主からじゃー！」

「ッー！」

「あ、危ねえ！」

ナキナキテは赤い玉をシンケンピンクに狙って投げる。ピンクはその時ナナシ連中に、シンケンマルを突き刺していたため、避けるのは難しかったが、ゴールドが飛び上がって盾となり、赤い玉はゴールドの腹に当たると、そのままくっついた。ゴールドが着地し、サカナマルをナキナキテに構えたが、その直後に赤い玉が変化し、大人サイズの全身赤い人型の化け物“赤鬼子”がゴールドを赤ん坊のように抱き着いた。

「うわあ、なんだよこの気色わりいのわあ！」

「親分！」

「しまった！」

シンケンゴールドが赤鬼子に抱き着かれたことに気付いたシンケンジャー達は、ナナシ連中を一掃してゴールドの元に向かった。赤鬼子は、周りの事を気にせず赤ん坊のように笑っていたが、どついうわけかいきなり泣き始めた。すると、ゴールドは赤鬼子に押

しつぶされるように倒れていった。

「な、なんかいきなり重く・・・ぎゃああああっ!」

「源さん!」

「その赤鬼子は、泣けば泣くほど重みが増すのじゃ。ほれほれ、もつと苦しむがいい。」

突然泣いた赤鬼子に、ゴールドはまるで押しつぶされるように苦しみだした。それもその筈、赤鬼子は子供と入れ替わる白鬼子と違い、入れ替わることはなく、しがみつくように抱き着く。抱き着いた赤鬼子は、どうやっても剥がせず、ダメージも通らず対象にダメージが入り、さらに泣けば泣くほど重さが増えていくのだ。そのため、ゴールドは押しつぶされている。

「親分、今助けやす!おいこの真つ赤野郎、親分から離れろっただ!」

「ッ!やめろ、ダイゴヨウ!」

シンケンレッドがダイゴヨウを止めようとするが、間に合わずダイゴヨウは秘伝ディスクを赤鬼子に向けて発射する。だが、秘伝ディスクは赤鬼子に当たると弾かれてしまい、この事が原因か、赤鬼子はさらに大きく泣き出してしまった。

「うぎゃああああ!!!!ダイゴヨウなにやってんだよおおおお・  
・!!」

「あつ!すまねえ親分!」

「ほれ、隙ありじゃ!」

赤鬼子に気を取られるシンケンジャー達に、ナキナキテは隙を突き、赤い玉を二つシンケンジャー達に投げつけた。赤い玉はシンケンブルーとシンケナイエローのそれぞれの背中に当たり、赤鬼子が出現して抱き着き、他のと同様泣き始めた。すると、赤鬼子に耐えきれないブルーとイエローは、膝をついてしまった。

「ぐあああつ・・・くうつ！」

「あああああつ・・・！」

「はっはっはっ！いい気味じゃ、お前達も同じように合わせてやる！」

ナキナキテは重さに苦しむシンケンブルー、イエロー、ゴールドを見て笑い、棍棒を持ってシンケンジャー達に近づくと、突然赤い魔力弾がナキナキテを襲った。

「ぐあああつ！だ、誰じゃ！」

「あたし等だよ！」

ナキナキテは魔力弾に当たるとバランスを崩し、後ろに下がって辺りを見回すと、ヴィータとシグナムがシンケンジャーの前に着地し、それぞれのデバイスを構えた。

「シグナム、ヴィータ！」

「さっき仕事を終わらして急いできたやつたぜ。」

「この状況について聞きたいことはあるが、まずは外道衆が先だ。」

突然の二人の参戦に、ナキナキテはたじろぐが、ナキナキテの体  
の中心から干からび始めた。アヤカシ特有の“水切れ”だ。

「ぐっ、こんな時に水切れか……。まあ目的は果たしたし、後は  
ゆっくり休むかのお。」

「あ、待ちやがれ！」

ナキナキテは干からびる前に近くにあった“スキマ”に入り、三  
途の川に戻っていった。その直後、ヴィータが追いかけたが、遅か  
った。

「逃げられちゃった……。」

「次出てきたところ、叩けばいい。それより志葉、この状況はなんだ？」

シグナムは赤鬼子の方を向いて言った。赤鬼子は今もなお泣き続け、抱き着かれたシンケンブルー、イエロー、ゴールドはその重さに苦しんでいた。

「ああ……、アヤカシの術にやられた。説明は後でやる、茉莉。」

「わかってる。ねえ、シグナムさんにヴィータちゃん。ちょっと手伝ってくれるかな？」

シンケンピンクはレッドの前に出ると、シグナムとヴィータに申し訳なさそうに頼み込んだ。



## 第四十二幕 親子（後書き）

今回はシンケンダイゴヨウと、今回登場したアヤカシについて紹介します。

シンケンダイゴヨウ

- ・全高：39.4 m
- ・全幅：43.4 m
- ・重量：2000 t
- ・最高速度：650 km/h
- ・出力：1500万馬力

獅子以外の主軸折神と侍合体した巨人。ことはがシンケンオーへの侍合体の最中にダイゴヨウ大変化を掛けてしまい、おまけに間違えて「侍合体」と言ってしまったことでダイゴヨウが獅子折神を弾き飛ばしてしまい、本来獅子折神が入るべき部分にダイゴヨウが入ってしまったことで偶然誕生した。シンケンオーに比べるとダイゴヨウがベースのためか軽快に動いている。

のちに一度だけ、千明の「なんか、よう分かんねえ合体！」という掛け声で家臣4人とダイゴヨウの合意での合体が行われた。

ダイシンケンには装備していないが本来両腕になるはずの十手が武装となり、シンケンオー同様に各折神の技も使用可能。必殺技は十手を敵に向かって投げる「十手一直線」。

ナキナキテ

武器「沸鉄地獄棍」  
にえかねじごくこん

泣き顔のような、鬼の子供が抱きついているような、アヤカシである。

白鬼子と赤鬼子を生み出す玉を投げつけて、人々を苦しめる。白鬼子が子供と入れ替われれば、なぜかその親は白鬼子を自分の子と思ひ込み、近くで泣く本当の子を無視して白鬼子の方を可愛がってしまう。赤鬼子は人に抱きついて離れず、聞き分けのない赤ん坊のように泣く度に無限に重くなり、無理に剥がそうとすれば本人を傷つける。伝承は“こなきじじい”。恐らく、ナキナキテが出した赤鬼子の特徴が、“こなきじじい”の伝承ルーツであろう。

作「今回の話はオリジナルアヤカシにしようかと考えましたが、なかなか思いつかず、結局本編に登場したナキナキテを復活させて登場という形になってしまいました。アヤカシを考えた人は、本当に凄いと思います。ちなみに、スーパーシンケンジャーについてなんですが、とりあえずゴールド以外は全員スーパーシンケンジャーにさせようかと考えてます。(ゴールドの場合は、ゴセイジャーVSシンケンジャー見てないため、まだ保留中。)回数的になんですが、一番少ないのはグリーンなんで、グリーンは少しでもスーパーシンケンジャーにさせようかと考えてます。」

第四十三幕 親子 弐（前書き）

作「長らくお待たせしました。

・・・が、あまり自信がありません・・・。」

## 第四十三幕 親子 貳

『ミッドチルダ 機動六課 会議室』

丈瑠達はゴールド寿司でヴィヴィオと共に一時な平和を過ごしていた。それを壊すかのように、外道衆のナキナキテが地上に現れたため、退治すべく出撃した丈瑠達となのは達。しかし、不意を取られてしまい、シンケンブルーとイエロー、そしてゴールドはナキナキテが生み出した赤鬼子に取りつかれてしまい、更にはナキナキテを逃がしてしまった。

そして現在、丈瑠達はどうにか機動六課に戻ることができ、会議室に集まっていた。(フォワード達は書類仕事に向かっているためいない)だが、会議室は中の様子がおかしかった。まず赤子の笑い声、そしておもちゃの音、中に入ればまず目に行くのは、機動六課の部隊長、八神はやてが風車を持ってこれたことには取りついた赤鬼子に見せつけるかのように回していた。

「ほらほら、ようみいやー。」

「あ、少し軽くなってきた……。」「

赤鬼子は風車を見るなり、赤子のようににはしゃぎながら風車を面

白そうに見ていた。そして、赤鬼子に取りつかれたことは、椅子に座ってそつと力を抜いて座っていた。実は、赤鬼子は泣けば泣くほど重くなる特徴があり、軽くするにはあやして泣くことを阻止することだ。だが、この赤鬼子は赤子のように泣くため、一度泣いたらあやすのが難しいため、泣かさないうようにあやさないと駄目なのだ。

赤鬼子がこの特徴を持つてるだけに、現場から機動六課に戻るまでは墜落までとはいかなかったが、苦労したころは変わりない。

この事を当然ロングアーチで知ったはやては、最初はヴィヴィオの相手をしている寮母のアイナを、赤鬼子をあやす為にここへ連れてこようと考えたが、只でさえヴィヴィオの世話と寮母としての仕事で手一杯だという事で諦め、ましてや機動六課の隊員でも赤鬼子をあやそうと進んで出る者がいなかったため、自ら志願して今にいたる（少しの間という条件で仕事はリインとグリフィスに任せている）。そして赤鬼子をあやすのに、フェイトも加わっている。フェイトは現場での仕事が終わった時に外道衆の出現を聞かされ、仕事の現場でエリオとキャロと共に待機し、この事態を後で聞き、この後の仕事は、これと言ったものはないのではやてと共に手伝っている。

尚、赤鬼子をあやしているのは、はやてはことは、流ノ介の方はフェイト、源太の方は茉莉がそれぞれ赤鬼子赤子が気を引くおもちゃを使っただけであり、会議室には赤子が目に行きそうな飾りもあつた。ちなみに、これらを用意したのは全て黒子である。

「はあく、なんでこうしなきゃなんねえんだよ……。」

「文句を言うな、源太……。不意を突かれたとはいえ、このような無様な姿を晒してしまうとは……。この池波流ノ介、一生の」

「流ノ介さん、静かに。また、泣いちゃうよ。」

「……はい。」

流ノ介は握り拳を作って悔しそうに呟き、力を入れて拳をテーブルに叩きつけようとしたが、フェイトに止められ、落ち着きを取り戻したかのように謝った。もし拳をテーブルに叩きつけたら、それぞれ取りついた赤鬼子が一斉に泣き、自分だけでなく周りにも被害が及ぶ危険性があり、見た感じシニールだが、こう見えても命とりだ。

「……池波の気持ちはわからなくもないな。」

「ああ……。にしても、はやとフェイトはともかく、茉莉はあやすの上手いな。」

「うん、集結する前は幼稚園でアルバイトしていたから、こういう事は慣れてるの。」

ヴィータは茱子を見るなり、驚いたように口をこぼすと、声が届いていたのか、茱子はおもちゃを鳴らしながら答えた。そして、丈瑠は時計を確認するなりはやてに顔を向けて口を動かした。

「手伝ってくれるのはありがたいが、そろそろ仕事に移ったらどうだ？あとは俺達が何とかする。」

「あー、そやなあ・・・、悪いんやけど、後は自分でやってくれる？」

「はい、もう大丈夫です、はやてちゃん、おおきに。」

丈瑠に言われるなり、はやては謝りながらも風車をことには渡して離れ、フェイトも流ノ介におもちゃを渡して離れて行った。

「あつ、そういえばはやて、あの・・・取り残された子供達は？」

「うん、報告では近くにあった地上管理局の保護施設に保護されと

るんやけど、親の方は何言つても聞く耳持たないらしく、手こずってるんよ。」

「そう・・・なんだ。」

茉莉はナキナキテの手によって親を奪われた子供が気になり、はやてに聞くなり今の現状を聞くと、気が重くなった。これに関しては、以前経験したこともあり、わかっていても気が重くなるもの無理もない。

「・・・アヤカシを倒さない限り、この現状は戻らない。俺達が出る事は、外道衆を倒すだけだ。」

「・・・うん、そのつもり。もうこれ以上、子供達を泣かせたくないしね。」

丈瑠は茉莉を気遣ったのか、少し間を開けて言うと、茉莉は丈瑠に顔を向けて頷いた。

なのは達はこの場を丈瑠達に任せ、会議室から出て行くこととした時、丈瑠はなのはを呼び止めた。



「なのは、お前はヴィヴィオの元に行った方がいいじゃないか？」

「えっ、どうして？」

なのはは文瑠に言われると、思わず口を漏らして立ち止まった。

「結果的とはいえ、お前はヴィヴィオの親代わりになるだろ？仕事でなかなか会えないとわかってはいるが、少しぐらいなら時間を空けられるんじゃないのか？」

「それに、ヴィヴィオちゃんのような小さい子供は意外とデリケートなの、時間が取れないのはわかっているけど、取れるときに一緒にいてもらいたい。」

文瑠は腕を組み、静かに言い、茉子もそれに賛同するのか物腰を柔らかくして言った。それを聞いたなのはは、少し顔を俯かせ、軽く手を合わせ、少しの仕事の遅れの許可をもらうためか、はやてに

顔を向ける。

「八神部隊長、少し、時間とつてもいいですか？」

「ん、少しくらいなら構わへんよ。」

「ありがとうございます。」

なのはははやてに許可を貰えば敬礼して言い、会議室を後にした。なのはに釣られるように、はやて達も会議室から出て行くが、フェイトだけは残った。

「それじゃあ、私達も行くね。」

「えっ、姐さんどこ行くの？」

なのはが出て行けば、茉莉は少し背を伸ばした後軽い一息を吐き、フェイトの元に行く。茉莉はフェイトの隣に行けば立ち止まり、丈

瑠達の方を向いた。

「取り残された子供達の所にね、フェイトさんをお願いして、一緒に行くことになったの、ごめんね。」

「ちょ、茉莉ちゃん……そりゃねえよ……。」

「待て、茉莉。」

茉莉が手を合わせて頭を下げると、源太は茉莉を悲しそうな声を上げてじっと見た。そして茉莉はフェイトと共に出ようとした時、丈瑠に呼び止められた。

「何、丈瑠？」

「これを持って行け。」

茉莉を呼び止めた丈瑠は近づき、インロウマルを取り出せば茉莉

に差し出した。

「丈瑠、これって……」

「前に似たようなことあったからな、用心した方が良い。」

「……うん、ありがとう。」

丈瑠は茉莉にインロウマルを渡し、茉莉はインロウマルをしまつと「行ってくるね。」と言えば会議室から出て行った。そして、会議室に残った者が丈瑠達だけになれば、千明は少し頭を掻いて丈瑠に話しかけた。

「……おい、丈瑠。あいつらも仕事があるんだし、合間を縫って会いに行くのは難しいんじゃないか？ ヴィヴィオの世話なら俺達だけでも」

「いや、遊ぶだけなら出来るが、ヴィヴィオ自身の世話は仮の親であるのはの仕事だ。それなのに、ヴィヴィオが俺達に懐いてしまつたら元も公もないだろ。」

「確かにそうだけどもさあ……。」

「千明、お前にとって親というのはなんだ？」

ヴィヴィオの件で世話をすると言われて千明はその事に疑問を覚え、丈瑠に質問という形で問いたしたが、丈瑠に返された質問に黙り込んでしまう。それもその筈、千明の親である先代シンケングリーンこと、谷蔵人は一見すると自由奔放で、いい加減な性格をしていた。先代シンケンレッドの手によって血祭ドウコクが封印された時、復活することが無いと思い、千明にはあまり厳しく侍の教育を施さず、比較的自由に育ててきたため、ある事件が起こるまで千明は父親を軽く見ていた。

しかし、そんな時ある事件が起こった。外道衆の手によって操られた人が、偶然にも千明の親である蔵人と、仲間の菜子がいるファミレスに立てこもった時があった。その時、自分の考えた作戦によって外道衆を蹴散らし、制圧できたと思ったが、生き残っていたナシ連中の奇襲により、危うく自分の父が斬られると思ったが、蔵人は外道衆の刀を使い、腕を負傷しているにも関わらず、瞬間に外道衆を斬り倒した。その後、千明は初めて父の強さ、そして自分に対する思いの強さを実感し、改めて自分がどんなに弱い存在だと気付かされた瞬間でもあった。

だからこそ、千明は即答できなかつた。

「それは……。」

「……親というのは、それほど大事な存在だ。決して超える事が出来ない、かけがえのない存在……少なくとも、俺はそう思う。」

丈瑠はそういうと、千明は何も言えず、ただ丈瑠をじっと見ている事しか出来なかった。

『三途の川 六門船』

場所を変えて三途の川、その川に浮かぶ外道衆の拠点、六門船の中では骨のシタリが川の深さを確かめていた。

「いいねえいいねえ、川の深さがいい感じに増えてきてるよ。ナキナキテ、思ったよりいい仕事をするんじゃないさ。」

シタリは三途の川が増えてきていることを喜びながらも川の深さ

を確かめるのやめ、船の中にいるナキナキテの方を見ながらも中に入っていく。

「当たり前じゃ、子供の泣き声は大人の泣け叫ぶ声より何十倍も心地がいい物じゃ、特に、親を奪われた子供の泣き声はな……。」

「お前さん、案外えげつないねえ……。」

ナキナキテは嬉しそうにしながら言い、シタリは呆れたように言いながらも、どこか嬉しそうだった。だが、シタリは言い終えれば、真剣な顔つきになり、ナキナキテに顔を向ける。

「でもナキナキテ、用心しといた方がよいよ。前みたいに子供をあやされて三途の川が少なくなっちまった事があったんじゃないか。」

「何、一度泣いた子供をあやすのは難しい事じゃ。失敗したとしても、時がたてばまた泣き出すはずじゃ。そう慌てんでもええ。」

「……まあお前さんがそういうなら、それでもいいけどねえ……。」

シタリはナキナキテからも返答を聞けば、少し不安そうにしながらも三途の川の方を向き、川の様子を伺うことにした。

『ミッドチルダ 機動六課 会議室』

「何、なのは殿がヴィヴィオの親代わりですと？」

なのは達が会議室を後にして数分後、彦馬が会議室に入ってきて丈瑠を見つければ話しかけ、丈瑠は彦馬を気遣ったのか、場所を変えて話すことにし、会議室から出て少し歩いて離れば話し始めた。話の内容はどうやらなのはとヴィヴィオの関係で、彦馬が隊員寮の中を歩いていたら、なのはとヴィヴィオが話しているところを見てヴィヴィオがなのはの事を“なのはママ”と呼んだため、事情を知らない彦馬はこの疑問を話すため、丈瑠を探していたらしい。丈瑠はその事を聞けば、少し考えて事情を話した。彦馬は事情を聞かされると、驚いたように声を出した。

「ああ、今はその手続きを取ってるらしいが……。」



「はぁ・・・、私は反対ですなぁ・・・。彼女達は忙しい故、子育てが務まるかどうかは・・・。」

彦馬は顔を俯かせ、首を横に振りながらも言う。彦馬はこの機動六課で過ごしている中、詳しくはないがなのは達の仕事については大体わかり、それにかかる時間も認識している。特に隊長陣の仕事はフォワード達より多く、ましてや時間もフォワード達より取るため、その合間を縫って会いに行くとなれば、会える時間帯は最低でも、食事が睡眠時間だけにしかならない。それに、丈瑠達は外道衆と戦い、さらにこの場所で住まわしてもらっているため、いつ襲われるかどうかわからない。そのため、親として務まるかどうか、そしてヴィヴィオがここに保護することを疑問に思っていた。

「俺もそう思う。だが、ヴィヴィオはここで保護することは決まっているらしく、俺達は外道衆と戦っているが、あくまで“保護されている”身分だ、そう強く言えないな。」

丈瑠は肩を落とし、ため息を吐くように言った。丈瑠達はこの世界の住民ではなく、別世界の間人だ。そのため、丈瑠達は次元漂流者であり、民間協力者という扱いを受けている。そのため、何と言

おづとしても、言葉を選ばなければならない必要がある。

「はぁ・・・、そうですが、しかし・・・」

彦馬は何かを言いかけた時、窓先から何かに気づいたらしく、丈瑠は彦馬に釣られるように見ると、目に映ったものは、中庭でなのはとヴィヴィオが楽しそうに歩いている所だった。ヴィヴィオはなのはと手を繋いで歩いていて、その顔は幸せに満ちていた。それを見た彦馬は思わず黙ってしまった。

「・・・言いたいことはわかる。だが、今は様子を見ていてくれ。耐えきれなくなったら、言ってやれ。」

「・・・わかりました。」

丈瑠は少しの間、なのはとヴィヴィオの様子を見て、そして彦馬に顔を戻せば言い、彦馬は諦めきれないような顔になったが、あえなく丈瑠の指示に従った。

『ミッドチルダ 西部 道路』

茉莉とフェイトは、車を使って取り残された子供達に会いに行くため、車を走らせて向かっていた。尚、車を運転しているのはフェイトで、車自体はフェイトの所有物である。

「すみません、フェイトさん。無理言っで・・・。」

「その事は気にしなくてもいいよ、私も気になってたし、仕事もこれと言った物はないからね。」

茉莉はフェイトに謝るように言うが、フェイトは気にしていないように言った。

「それに、少しでもいいから、慰めてあげたらいいなって・・・。」

「

「フェイトさん、優しいんですね。」

「ううん、そんなんじゃないよ。ただ・・・あの子供を見ると、エリオとキャラと初めて出会ったことを思い出しちゃって・・・。」

「・・・そう、ですか。」

「うん・・・あ、そろそろ着くよ。」

茉莉はフェイトからそう聞くと、少し顔を俯かせた。エリオとキャラについては大体の事は知っている。エリオは一時人間不信になったことがあり、キャラは持っている力が強かったせいか、部族から追放されてしまった過去がある。今回の子供達はナキナキテのせいでもあるが、親から見捨てられた当然の扱いを受け、保護されている。おそらく、フェイトはその子供達を見て、初めてエリオとキャラと出会った事を思い出したのだと思った。

そして、茉莉とフェイトは子供達が保護された施設に辿り着けば、駐車場に車を止め、子供達の様子を見るため施設の中に入っていった。中に入れば受付の方に行き、フェイトが茉莉の前に立てば受付に話しかけた。

「機動六課のフェイト・テストロツサ・ハラウン執務官です。こちらはシンケンジャーの白石茉莉、保護された子供達の様子を見に

来たのですが……。」

「はい、フェイト執務官に白石茉莉さんですね、お待ちしております。保護した子供達の元まで案内致しますので、少々お待ちください。」

フェイトは受付を済ませば離れて待つことにし、案内係と考える局員が来れば、指示に従ってついていくことにした。しかし、その局員は、どこか疲れている様子でいて、ついていけば行くほど子供達の泣き声がしてくる。そして、とある部屋の中に入れば、最初に目に映ったのは子供達が大泣きし、その子供達を必死に泣き止めさせようとあれこれ試している局員の姿が確認することができたが、一向に泣き止む気配は無かった。

それもその筈、局員の数に比例して、圧倒的に子供の数が多かったのだ。その数はざっと見るだけでも50人は居そうなほどであり、すすり泣く子供もいたが、大半が大粒の涙を流し泣き叫ぶ子供であり、局員の声がかき消されるほどの物だった。

「……酷い。」

もちろん、この言葉は子供達に対するものでは無く、外道衆による被害の事を指していた。

「こちらでも、何とか子供達を落ち着かせようと試みたのですが・  
・、何分こういった事態が初めてでして、何とか人をかき集めて頑張っているんですが・・・。」

「この状況じゃあ仕方ないと思います、とにかく今は子供達を何とかして泣き止ませないとね。」

「でもこの人数をどうやって・・・、子供の世話をしたことがあったけど、みんな聞き分けの良い子だったから・・・。」

困り果てたように肩を落とし、疲れ果てた表情で茉莉とフェイトに助けを求めるような眼差しを向ける、そんな局員に対し、軽く腕を組みながら考える茉莉。それに対しフェイトは、子供の世話をした経験を持つてはいたものの、このように泣き叫ぶ子供達の対処は経験がなく、あったとしてもヴィヴィオのように、一人の子供に対する接し方で、50人にも及ぶ子供をどう対処すればいいかわからなかった。いや、沢山の子供と触れ合う仕事をしたことが無いフェイトと局員達の反応は、当たり前前の物だった。

そんな時、茉莉は泣く子供達の姿が、一瞬何かと合わさった。それは、機動六課に住む、とある子供の姿だった。

「……ちよっと、行ってくるね」

「……え、茉莉さん？」

茉莉は一言だけ告げると、ゆっくりと泣く子供達へと歩き出す。茉莉の突然の行動に、局員達とフェイトは驚き、咄嗟に声を掛けたが、聞こえていないのかそのままゆっくりと歩いていく、まるで落ち着いたように。

「……こんにちは。」

そう、静かに泣く一人の子供に、小さく、ただどはつきりと語りかけた。その子供は、一旦泣くのをやめ、ただどしゃつくりを止められず涙で濡れた顔を茉莉に向ける。

「私は白石 茉子っていうの、君の名前は……?」

「……ケン……ト。」

「ケント君だね、よろしく。」

ケントと言う子供は、突然来た茉子を警戒しているのか、名前は教えたものの、小さく縮こまっていた。そんな姿を見た茉子は、ケントに手を差し伸べ、静かに抱きかかえ、背中を優しく叩いた。

「……大丈夫、君のお父さんとお母さんは、絶対に迎えに来るよ。」

その言葉に、ケントは目を開き、抱きかかえられながらも茉子の方へ向く。茉子の言葉が子供達に届いたのか、少しずつだが泣いていた子供達がゆっくりと茉子の方へ向きだした。



「・・・それ、ほんと?」

子供特有の舌足らずで、震えた声で茉莉に聞いた。それを聞いた茉莉は、ゆっくりとケントの体を離し、視線を合わせるとゆっくり頷いた。

「うん、ほんとだよ・・・君のお父さんとお母さんも、みんなのお父さんとお母さんも、戻ってくるよ。」

「ウソじゃ・・・ないよね?」

どこからか、小さい子供の声が聞こえた。さっきまで泣いていたのが嘘のように、静かとなった保護施設内に響き、遠くにいたフェイト達の方にも届いた。

「ウソじゃないよ、ただ・・・今は“悪いおばけ”に操られているだけ、おばけが消えたら、お父さんとお母さんが、帰ってくる。私はその悪いおばけの倒し方を知ってるの。」

茉莉の言葉を聞いた子供達は、暗かった顔が徐々に消えていき、  
涙の後は消えないものの、まっすぐと茉莉の言葉を聞いていた。

「……どござって、倒せるの？どござったら、お母さんが帰って  
くるの？」

ケントと言う子供が、小さく、直ぐに消えてしまうほど小さかったが、希望に満ちた目で茉莉を見つめていた。そんな様子を見た茉莉は、優しく微笑むと子供達の方を向いて、笑顔で言った。

「それはね、笑顔でいる事なの。」

「えが……お？」

「そう、笑顔でいるの。悪いおばけは、みんなが怖がったり、泣いている姿が大好きだから、お父さんやお母さんを取り上げて、楽しんでるの。でもね、そんな悪いおばけでも、苦手な物がみんなの

笑顔って訳、みんなで笑い合って、一緒に遊んで・・・笑顔で居れば、悪いおばけは居なくなっちゃうの、ちよつと辛いけど・・・笑顔で居れば、ちゃんと戻ってくる。それが悪いおばけを倒せる方法。

「  
茉子の言葉を聞いた子供達は、戸惑うように周りをキョロキョロとみたり、手に持ったぬいぐるみを強く抱きしめたりと様々な反応を示した。そんな様子を見ている茉子は、内心、願っていた。例えば、一時的なものでいいから、笑って欲しいと、それは、敵を討つための物ではなく、人として、子供達が泣かないでいて欲しいと、本能で願っていたものだった。」

「・・・ぼく、頑張ってみる。」

茉子の願いが通じたのか、子供達の中から一人、立ち上がった。

「えがおでいれば、お母さんが戻ってくるんだ。」

「・・・私も。」

「僕も！」

子供達は、今にも泣きそうな顔をしていたが、涙を食いしぼり泣くのを堪えた。いつしか立ち上がった子供達が半分以上になると、子供達で各々話し始め、どうすればいいか、子供達なりに話し合う子供達も現れた。

「・・・みんな。」

茉莉はそれだけ言うと、胸に手を当て、嬉しさで涙が出そうになったが指で静かにふき取り、自然と自分も笑顔になっていた。

「・・・凄い。泣いていた子供達を、一発で泣き止めた。」

その様子を見ていた局員の一人が、そう呟いた。

一方、フエイト自身も、茉莉の取った行動をただ見つめているしかなかったが、その顔は安堵を浮かべていた。自分自身も、泣く子供達が心配だったのだろうか、行く末を張り詰めた表情で見ているが、子供達が泣くのをやめ、必死に笑顔になろうとする姿を見ると、静かに息を吐き、「良かった」と呟いた。その目元は、一筋の涙が浮かんでいた。

## 第四十三幕 親子 弑（後書き）

作「今回は腑破 十臓について紹介します。」

腑破ふわ 十臓じゅうぞう

外道衆のはぐれ者。峰側が赤い鋸となつてゐる両刃の妖刀「裏正うらまこと」を振るう劍の達人。人間の姿に戻ることもでき、それゆえにドウコクの完全な支配下に置かれることもないが、はぐれ外道ゆえか命は一つしか持つておらず、二の目となる能力はない。人間だった頃から、妻には止められ死病にも侵されながらも、「強い者と骨の髄まで斬り合うこと」を求めて人斬りを繰り返しており、筋殻アクマ口から十臓の家族の魂を閉じ込めて造られた裏正を授けられた後、我が身を見限つて「外道に堕ちる」。外道に堕ちてもなお戦いへの飢えは満たされず、自分の在り方に虚無感を持つ丈瑠を自分と裏正に見合う相手と認め、劍士として幾度となく立ち合いを繰り返すこととなる。源太の寿司を気に入るといふ一面もある。劍術による戦闘を得意とし、両刃の大太刀を難なく振るい、血祭ドウコクとまともに鏢迫り合いをしても譲らないなど、劍の扱いは達人級。裏正は上記のとおり両刃刀で、本来は逆刃であるはずの峰側の鋸状の赤い刃が本性であり、普段は鏢側の刃で斬り合うが、シンケンレッドやドウコクなど難敵と立ち合う際には峰側の刃を用いる。裏正が破損していた時期には、「蛮刀毒泡沫ばんとうどくほうまつ」を使用していたが、裏正ほどの長さがなかったため、あまり気に入っていなかった。志葉家当主が受け継ぐ外道衆を完全に葬ることができるモチカラの存在を知っているながら黙っていたことが、シタリを通じてドウコクの知るところとなつて怒りを買ったが、それも全く意に介せずひたすらシンケンレッドとの勝負に執着し続ける。その強い執着から仲間でさえ気付かず、丈瑠自身も目を背けていた丈瑠の変化を誰よりも早く見透かす。その後レッドとの立会いで瀬戸際まで追い詰めたが、レッドの捨て

身の太刀に裏正を折られて敗北し海中に没する。その後は一時的に身を隠していたが薄皮太夫に発見され、「裏正の修理」と交換条件で太夫とともに一時的にアクマ口に雇われた。アクマ口が十臓に裏正を授け外道に堕ちる手助けをしたのは、人と外道の隙間にいる十臓と嘆きの魂を閉じ込めた裏正こそが、自身の最終目的である「裏見がんどり返しの術」を発動できる最後の鍵となる存在であったためである。しかし十臓本人は、裏正の正体に気付いていながら二百年も人を斬り続ける本当の外道になっており、裏正の修理を完了し用済みとしたアクマ口を斬り、術の発動も失敗に終わった。影武者であることが発覚し、全てを失った丈瑠に最後の決戦を挑み、昼夜を分たぬ激烈な斬り合いの果てに敗北。丈瑠は「手ごたえはあった」と言っていたが、それでもまだ仕留められておらず、丈瑠の周りに駆け付けた仲間たちを無視し、さらに斬り合いの快楽を追い求めようとしますが、左足に刺さった裏正に宿る妻の魂に引きとめられ、噴き上がる火柱の内に消え去っていった。十臓が消えた後には裏正一振りのみが残ったが、丈瑠たちが仲間としての絆を再確認する様子を見届けるように消滅した。モチーフは狸々となっている。

作「もう大半の方はわかっていると思っておりますが、十臓の復活をちらつかせてます。・・・が、復活するフラグを立てた時は、ただ自分の出したかったキャラとして書いていましたが、資料として見たDVDを確認したら、復活させることが物凄く難しい事がわかりました。救済（言い訳？）処置として、オリジナル設定を加える可能性もありますし、最悪の場合、消滅せざる得ない事態になるかもしれないませんが、自分で出したフラグなので、出来る限り回収したいと思います。」

第四十四幕 親子 参（前書き）

作「どうも遅くなってすみません。どうも暑さのせいか、調子が出なくて出来に不安を残しています。」

修正：後書きのはぐれ外道衆 クサレ外道衆に変更。申し訳ありませんでした。



## 第四十四幕 親子 参

『ミッドチルダ 西部12区画 保護施設』

アヤカシ“ナキナキテ”の手により、親を失った子供達を集め、一時的に保護していたのは良かったものの泣き止む様子は見られなかったが、茉莉の手によって子供達は泣くのを止め、自分達の意志で立ち直ろうとしていた。それから数十分経ち、今では局員と共に遊ぶ子供達もいれば、自らチームを作って遊ぶ子供達もいた。

そんな中、茉莉は一人保護施設から出ると、近くにあった椅子に座り一息吐いた。少しの間休んでいると、茉莉の目の前に湯気が立つコーヒーが入った紙コップが目の前に現れる。ふと紙コップから続く腕の方を見ると、フェイトの姿がそこにあった。

「コーヒー、よかったら飲む？」

「うん、ありがとう。」

フェイトからコーヒーを受け取ると、フェイトは茉莉の隣に座る。

「茉莉さん、凄いですね。」

「えっ、何が……ですか？」

「あんなに泣いていた子供達を、たった一人であやすなんて……尊敬します。」

「大した事じゃ……ありませんよ、私は自分の出来る事を行っただけで。」

「それでも、充分すごいと思います。私なんて、見ている事しかできなかつたから……。」

そうフェイトは呟くと、茉莉はコーヒを飲む手を一旦止め、下に下げると消極的に言う。そのまま暫く経つと、茉莉が口を開いた。

「……ねえ、フェイトさん。ヴィヴィオについてなんだけど……いいかな。」

「……。」

茉莉の眩きに、フェイトは一瞬反応するが、静かに頷いた。

「……ヴィヴィオちゃん、ここんところ明るいように見えて、悲しい目をしていたの。」

「……うん。」

「……気付いたのは、最近なんだけどね。外道衆が現れなくて、訓練も一通り終えた時、ことはと一緒に、折神を使って遊んでいた時に、時々……泣きそうな顔をしていた。」

話の中、フェイトは何も言わず、茉莉の言葉を聞いていた。茉莉は一息吐くと、再び続けた。

「……でね、最初はなのはさんがいなくて寂しかったのかなって思ってたけど……、全然違ってた。ヴィヴィオちゃん……自分の親を待っていたの、それも……毎日ね。」

茉莉の言葉に、フェイトの肩が少し揺れ、表情も苦痛に苦しむような、辛い表情もしていた。それでも、茉莉は続けた。

「ヴィヴィオちゃんの家族がいなくてのは・・・文瑠から聞いていた。だから、少しでも寂しくないようにって、構っているつもりだった。でも、それでもヴィヴィオちゃんは探していたの。本能じや、もういないってわかっていたのかも知れないけど、それでも親が来るって信じてずっと待っていた・・・だからこそ、なのはさんが親の代わりになるって知って、あんなに喜んでいただと思う。・・・皮肉にも、今回の子供達の様子で、それがわかった。」

子供達の様子を見た時、茉莉が一人の子供の姿と重なったのは、まぎれもなくヴィヴィオの姿であった。その子の様子は周りの子供とは違い、静かに泣いていたが、それでも大きく泣こうとはしないで、誰かを待っている、そう錯覚させるものがあつた。それが、ヴィヴィオの姿と重なったのだ。

それと同時に、茉莉は知っていた。みんなの前では明るく、楽しく笑っていたヴィヴィオも、一人でいるとウサギのぬいぐるみを抱きしめ、誰かが来るのを待っていた。それが、今回の子供達の反応で、親が来るのをずっと待っていることに気が付いた。だからこそ、ヴィヴィオは喜んでいた。なのはが親となったことを、自分にも、親が出来たことを・・・。

「……嘘……ヴィヴィオが……そんな、事を……。」

「……あくまでも、カンのようなものだけだね。でも、だからこそヴィヴィオは喜んだんじゃないかな、仮にも、なのはさんが親になつてくれるって、それだけでも、ヴィヴィオちゃんの心は救われたはず……私はそう思ってる。」

その言葉を聞くとフェイトは何も言えず、ただ俯いては肩を震わせていた。フェイト自身もなのはから、ヴィヴィオの受け入れ先が見つかるまで、保護責任者になると聞いていた。しかし、それがヴィヴィオにとって、初めてできた“本当の母親”という存在となっていたとは思ってもいなかった。

そしてフェイト自身も知っていた、親がない寂しさを。なのはのように親が入院したときのような、一時的な育児放棄とは違う、本当の意味で……それも目の前で親を失った。その時の絶望感と悲しみは、身を持って知っている。だけど、それを支えてくれる人たちが、周りにいたから立ち直れた。

だけどヴィヴィオはどうだろうか？

過去の人間の遺伝子で産み出され、自分の本当の親の存在を知らない。そして、自分を支えてくれる人なんて最初からおらず、まだ

断定は出来ないが、何かの研究目的で作られた存在。それでもヴィオは、必死になって逃げてきた。子供の身体能力から見ればかなり重いレリックケースを、足枷のように二つ付けられても、どんなに体が痛くても、誰かが助けしてくれることを信じて下水道の中を歩いていた。なのにそんな子供を、気の毒だからという簡単な理由で、保護しようと考えてしまった。

ヴィオが明るくなったのは、機動六課のみんなと一緒に接してくれたから、一番懐いていたなのはが世話をしてくれたから・・・だけどそれは甘い考えであった。本当のヴィオは、悲しみに囚われたままだった。

フェイトは、自分の愚かさを呪った。ヴィオの事をよく知りもせず、わかっていている気で接していた事を。そう考えると、罪悪感に押しつぶされそうになった。

「・・・でね、私思っただの。何か出来ないかなって。」

「・・・えっ？」

少し冷めたコーヒーを一口飲み、静かに言う茉莉に、思わずフェイトは顔を上げた。

「例えば時間が開く限り、一緒に遊んだり、一杯お喋りしたり・・・出来る事は沢山あると思うの、ヴィヴィオちゃんの親にはなれないけど・・・それでも、少しでも、あの子の支えになりたいからね。」

茉莉はコーヒーの入った紙コップを隣に置くと、そのまま手振りを交えて恥ずかしそうに言う。静かに茉莉の話聞いていたフェイトに、ある感情が生まれた。ヴィヴィオに対する罪悪感から来たものか、別の理由なのかはわからないが、言わずにいらなかった。

「・・・私にも、支えになれるかな・・・。」

今にも消えそうな呟きだったが、茉莉はフェイトの方に顔を向け、笑顔でこう言った。

「フェイトさんなら、きっとなれますよ。」

その言葉で、フェイトはだいぶ救われた気がした。

フェイトに生まれた感情、それはヴィヴィオの支えになりたい、この一つだった。先程のように、ヴィヴィオに対する罪悪感から来たものかもしれない。こんなことで許してくれるのかどうかはわからない。それでもフェイトは、ヴィヴィオの手助けをしたかった。かつての自分のように、心が壊れて欲しくなかった。死んだ目をしたヴィヴィオを見なくなかったから、フェイトは自ら支えになろうと必死に思った。

そう思った瞬間、保護施設内で警報が鳴った。そして、鳴ると同時にフェイトに緊急通信が入った。フェイトはそれに応えると、通信相手はグリフィスだった。

『こちら機動六課、ロングアーチ、応答してください。』

「こちらライトニング1。聞こえます。」

『先程、西部12区画内にあるスキマセンサーに反応、外道衆が現れたと思われます。先程、区画内に避難警報を要請しました。』

「つ……場所は？」



『たった今シンケンジャー達とスターズ1、2、ライトニング2がそちらに向かつております。詳しいデータを送りますので、先に避難救助の援護と外道衆の殲滅を。』

「了解、直ちに行動に移します。」

フェイトはグリフィスから反応したスキマセンサーの場所を聞き、そのデータを送って貰えば通信を切った。通信を切れればフェイトの前に空間モニターが現れ、フェイトと茉子は、そのモニターをすぐに顔を向けた。

「場所は・・・保護施設付近・・・！」

「私達がいる場所じゃない！」

茉子とフェイトは、反応したスキマセンサーの場所を知ると、自分達の近場だったので少し驚くも、フェイトはモニターを消し、お互い顔を合わせるように向ける。

「フェイトさん、子供達の元に行って！私は・・・外道衆を探しに行ってくる！」

「うん、わか・・・！」

茉莉子の指示にフェイトは頷こうとしたが、近くにあった壁が爆発音と共に崩壊し、茉莉子とフェイトは反射的に壁から離れ、崩壊した壁を凝視した。すると、奥から何者かが壁から出てきた。その何者かは、今回起きた事件の犯人で、流ノ介達に赤鬼子を取りつかせたアヤカシ“ナキナキテ”だった。

「ふん、気になって様子を見に来れば、やはり貴様の仕業か！またしても余計な事をしておって・・・！」

「やっぱりあんたね・・・。フェイトさんは子供達の方を、私はあいつを止めておくから・・・！」

「うん、わかった！」

「させるかあ！」

茉莉はナキナキテが現ればシヨドウフォンを構え、フェイトは待機状態のバルディツシュを手に取り出し、子供達の元に行こうとしたが、ナキナキテはそれを阻むかのように、口からエネルギー弾をフェイトと茉莉に向けて撃った。しかし、フェイトと茉莉は横に転がるように弾を避け、膝立ちの状態になれば茉莉はシヨドウフォン、フェイトはバルディツシュを構えた。

「一筆奏上！」

「バルディツシュ、セットアップ！」

茉莉とフェイトがそう叫べば、茉莉は宙にピンク色の“天”という文字をモチカラで書き、反転させれば茉莉はモチカラに包まれ、フェイトは一瞬光に包まれば、茉莉はシンケンピンク、フェイトはバリアジャケットを身に着け、起動したバルディツシュを片手に持った。

「フェイトさん、早く！」

「うん！」

フェイトはそう頷くと、立ち上がって保護施設内に入っていた。ナキナキテはフェイトを追おうとしたが、それを阻むかのようにシンケンピンクは立ち、シンケンマルを構えた。

「待ちなさい、貴方の相手はこの私よ！」

「ええいつ、あの時貴様に赤鬼子を取りつかせとけばよかったわい！ 覚悟せい！」

ナキナキテは棍棒“にえかねじごくこん沸鉄地獄棍”を取り出せばシンケンピンクに向かつて走り出し、ピンクはそれに応えるかのようにシンケンマルを再度構え、ナキナキテの元に向かった。

『ミッドチルダ 機動六課 会議室』

シンケンピンクがナキナキテと戦い始めた中、機動六課は警報が鳴り響き、局員は警戒態勢に入っている中、会議室は子供の泣き声

が響いていた。しかし、その子供はナキナキテの分身、赤鬼子で、それに取りつかれた流ノ介、ことは、源太は赤鬼子の重さに必死に耐えていた。ちなみに、文瑠達は外道衆の退治にいたためおらず、黒子達が赤鬼子をあやそうと必死になっていた。

「ぐぐぐぐ」

「あああもう！なんで警報が鳴るんだよお、ちったあ小さくしろよー」

「こ、堪えるんだ源太ア！こうしている間にも、茉莉があ！」

「せ、せやけどまず、この子（赤鬼子を指す）達を・・・！」

流ノ介は赤鬼子の重さに耐えながらも出て行こうとするが、流石の重さに耐えきれず、立ち止まってしまい、ことはと源太は赤鬼子に押し潰れそうになっていた。

その時、警報が鳴り終わり、待機していたフォワード達が駆けつけてきたのか、会議室に入ってきた。

「大丈夫ですか皆さん！」

「す、スバルちゃんにみんな……。」

「だ、大丈夫ですか！」

「と、とりあえずこいつらをあやしてくれえ……！」

警報が鳴り終わり、フォワード達が来れば流ノ介達は少し笑みを浮かべ、フォワード達は赤鬼子をあやす手伝いに入った。

『ミッドチルダ 西部12区画 保護施設外』

フェイトを含む保護施設の管理局員は、施設内にいる人達や子供達を避難させている時、シンケンピンクは一人でナキナキテと戦っていた。ピンクはどうかナキナキテを外で戦える状況を作れたのは良かったが、流石に一人だけでは厳しいのか、シンケンピンクは劣勢を強いられていた。その理由は、力の違いだ。シンケンジャーの共通武器“シンケンマル”はスピード、切れ味とも安定しているが、ナキナキテが持つ棍棒は、スピードは遅いが威力は高く、シンケンマルだとどうしても防ぎきれず、力負けしてしまう。それに、過去に一度、シンケンレッドがすれ違いにナキナキテを攻撃した際、レッドの腹辺りに赤鬼子を取りつけた事があったため、うかつに攻撃が出来なかった。そのため、劣勢を強いられていた。

「そこじゃあ！」

「しまっ・・・ぐっ！」

ナキナキテはシンケンピンクのシンケンマルを弾いて隙を作り、シンケンピンクを棍棒で吹き飛ばした。シンケンマルはどうにか飛ばされずに済んだが、ナキナキテに吹き飛ばされ、壁に激突した衝撃で落としてしまい、ピンクは地面に落ちた。それを見たナキナキテは高らかに笑い、腹部の窪みから赤い玉を取り出した。

「はっはっはっ！いい気味じゃ。ほれっ、止めじゃ！」

「くっ・・・！」

ナキナキテは赤鬼子をシンケンピンクに投げつければ、ピンクはギョツと目を瞑った。しかし、突如シンケンピンクの前に誰かが飛んできて、金色のシールドを出せば赤鬼子は弾かれ、地面に転がれ

ばゆっくりと消えて行った。

「なっ！ワシの赤鬼子が！」

「えっ……、フェイトさん！」

目を瞑っていたシンケンピンクは、時間が経っても赤鬼子が取りつかれず、ゆっくりと目を開ければ、目の前には子供達の元に行っただけのフェイトが立っていた。

「子供達と施設にいた人達の避難が終わって、急いできたの。今から援護するね。」

「うん……ありがとう。」

「たかが人間一人増えたぐらいで何が出来る！」

シンケンピンクはシンケンマルを拾いながらも、フェイトに礼を



言い、ナキナキテが棍棒を構えれば、二人に向かつて襲い掛かる。フェイトとシンケンピンクはそれぞれ左右に分かれ、ナキナキテと一度距離を取る。ナキナキテは距離的に一番近いフェイトに顔を向ければ棍棒を高く振り上げて殴りかかるが、フェイトはその攻撃を避け、バルディッシュで斬りかかるも、ナキナキテは棍棒の柄で防ぎ、力任せでフェイトをバルディッシュごと押し返した。押し返されたフェイトは体勢を崩し、ナキナキテは追い打ちをかけるように棍棒を振るうも、フェイトはいち早く宙を飛んでそれを回避した。

「フェイトさん、大丈夫？」

「うん、なんとか・・・来るよ！」

「貴様、空を飛べたのか！小賢しい真似をしおって！」

フェイトはシンケンピンクに言えば、ピンクの方に行って降りていき、ナキナキテはフェイトを見れば嫌味そうに言えば再び口からエネルギー弾を飛ばした、エネルギー弾に気付いたフェイトはとっさに防御魔法“ディフェンサープラス”を使用して自分とシンケンピンクを包み込み、エネルギー弾を防いだ。この時、エネルギー弾を防いだためか、煙が発生して目の前がわからない状況で、フェイトとシンケンピンクは防御魔法に包まれながらも辺りを警戒する。その時、突如フェイトの目の前でナキナキテが煙にまぎれて現れ、両手に持った棍棒で大振りの一撃を放つ。ナキナキテの一撃はフェ

イトが発動した魔法“ディフェンサープラス”に直撃し、一瞬の内に破壊された。

「ッ!」

「くっ!」

ナキナキテの手によって防御魔法は破壊され、包まれていたフェイトとシンケンピンクは破壊された衝撃に耐えられず、思わず怯んでしまった。当然ナキナキテはそれを見逃さず、降ろされた棍棒を振り上げ、シンケンピンクとフェイトを吹き飛ばす。

「キヤアっ!」

「ああっ!」

吹き飛ばされたフェイトと茉子は何もできず、壁に叩きつけられ、地面に落ちて行った。落ちたフェイトとシンケンピンクは、ダメー

ジが大きかったからか、すぐに立つ事は出来ず、痛みに苦しみながらも立ち上がろうと必死だった。それを見たナキナキテは高笑いを始め、腹の窪みから赤い玉を取り出した。

「はっははははははっ！いい気味じゃ、これで安心して子供を泣かせることが出来そうじゃ。」

「・・・くっ！」

ナキナキテは赤い玉を二つ取り出せば高らかに言い、シンケンピンは悔しそうにナキナキテを睨む。

「子供を泣かす・・・て、どういふこと・・・！」

必死に立ち上がろうとするが、体から感じる衝撃と痛みによってなかなか立ち上がれないフェイトとシンケンピンクだったが、フェイトはナキナキテの言った言葉に疑問を持ち震えてはいたが怒気のコもった声で言い放った。

「はっはっは、その言葉通りじゃ！三途の川を増やすには子供の悲鳴が一番じゃからな・・・特に親を失った子供の泣き声はなっ！ガアツハツハハハハア！！！」

フェイトのナキナキテの放った言葉が余程の事なのか、目を見開き絶句した。ナキナキテの言った言葉は、外道衆の目的を再確認するものであり、その内容が宝である子供達を泣かす事であり、更にナキナキテはその事を高らかに笑いながら言い、あたかも同然だと言わんばかりの事であった。そんな中、フェイトはある感情が生まれた。

許せない。 たったそれだけだった。

湧き上がる怒り・・・子供から親を奪い、大勢の子供に絶望感を与えたにも関わらず、喜ぶナキナキテをフェイトは許せず、地面に付いた手を強く握りしめる。そんなフェイトの様子に気付かないナキナキテは、ゆつくりとした足取りでシンケンピンクとフェイトの方へと歩み寄った。そんな時、金属が何かを叩きつける音が鳴り響いた。

「っ……許さない……！」

その音は、フェイトがバルディッシュを立ち上がる際の、杖の代わりにした時の音だった。その音は力強く鳴り響き、シンケンピクもフェイトに釣られる様に起き上がり始める。まだ痛みを感じるのか、体はふらついているものの、その姿は力強い印象を与えた。

「……絶対に、もう、泣かせたりはしない……！」

震える体を抑え込むように力強く踏み込み、バルディッシュを使って立ち上がるフェイトに、肩で息をするシンケンピク、その様子を見たナキナキテはたじろぐ。

「子供達は……絶対に守って見せる……！」

シンケンマルを構えたシンケンピンクは大いに叫び、同時にフェイトもバルディッシュを構え、いつでも魔法が出せるように魔方阵を出し、体制を整える。

「っ……まあよいわ、貴様らがどうあがいても無駄な事をわからせてやるわい！」

「来るよー！」

「うんー！」

ナキナキテはそう叫ぶと赤い玉をフェイトとシンケンピンクに投げつけたが、ピンクはそれをシンケンマルで弾いて防ぎ、フェイトは射撃魔法“プラズマバレット”をナキナキテに向けて撃った。

「はあっー！」

「ふん！そんなような攻撃じゃワシにはきかんわー！」

ナキナキテは迫りくるプラズマバレットを跳ね返そうと、棍棒を振るう。だがプラズマバレットが棍棒着弾した瞬間、プラズマバレットが破裂し、それに乗るような形で放電が唸りナキナキテの体を感電させる。

「な、何じゃこれはあ！か、体が！」

感電したナキナキテはその場に跪き、立ち上がろうとしても足が纏<sup>もっ</sup>れて立ち上がれなかった。

「茉莉さん、行くよ！」

「ええっ！」

フェイトは掛け声を言えば、バルディッシュのカートリッジを三発ロードし、ハーケンモードにすればバルディッシュから現れる魔力の刃は雷を纏い、シンケンピンクはシンケンマルに亀ディスクを

セツトし、回転させればシンケンマルの刃はピンク色の風が纏わせ、シンケンピンクとフェイトは二人でナキナキテの元に走っていき、ナキナキテに斬りかかった。

「シンケンマル！」

「雷光一閃……！」

「「天空雷電の舞い！」」

「うっ……うああああああああああっ……！！！」

二人で叫べばシンケンピンクは“天空の舞い”、フェイトは雷を纏った魔力の刃でピンク、フェイトの順で斬り、斬られたナキナキテは体に火花を上げ、悲鳴を上げながらゆっくりと倒れる。そしてシンケンピンクとフェイトは立ち止まり、シンケンピンクはシンケンマルを納刀し、フェイトはシンケンピンクの隣に立ち止まってバルディッシュを軽く振えばナキナキテは倒れ、爆発した。

「1の目、撃破……！」



「気を付けて、2の目が来るわ！」

フェイトとシンケンピンクはナキナキテが爆発した方に振り向き、その場を離ればナキナキテがいた場所の爆炎が一か所に集まり、その場から2の目が発動したナキナキテが現れれば巨大化していた。

「よくも！よくもこのワシをおおおおおお！！！」

「くっ、こうなったら一人だけでも・・・！」

ナキナキテが巨大化し、シンケンピンクはベルトのバックルから“侍合体ディスク”を取り出し、インロウマルにセットしようとした時、どこからかへりの音が聞こえた。シンケンピンクとフェイトは、へりの音が鳴る方に顔を向けると、一機のへりがこっちに向かっていて。そして、フェイトとシンケンピンクの前に空間モニターが現れ、モニターを見れば、映っていたのはなのはだった。

『遅くなっちゃってごめん！フェイトちゃんに茉莉さん、大丈夫？』

「なのは・・・！うん、こっちは大丈夫だよ。」

『話は後だ、茉莉。』

「ええっ！」

【侍合体ディスク】

なのははへりの中で通信を行っているようで、フェイトとシンケンピンクはモニターを見れば、こっちに向かってくるへりは機動六課の物と判断し、空間モニターから丈瑠こと、シンケンレッドの声が聞こえてくればシンケンピンクは頷き、インロウマルに侍合体ディスクをセットし、読み取ればスイッチを押した。

すると、何処からともなく獅子、龍、亀、熊、猿折神が現れ、シンケンピンクは亀折神、シンケンレッドは獅子折神、レッドと同じようにへりに乗っていたシンケングリーンは熊折神に乗り込めば折神達は合体し、侍巨人、“シンケンオー”が現れた。

「侍シンケンオー、天下統一！」

「あの時倒された恨み、今ここで晴らしてくれるわ！それ！」

ナキナキテはシンケンオーに指差して言えば腹部から赤い玉を取りだし、シンケンオーに向けて投げつけた。シンケンオーは専用盾“秘伝シールド”で赤い玉を防ぐが、赤い玉はシールドにくつつき、そこから赤鬼子が現れれば泣き出し、重さに耐えきれずシールドを落としてしまった。

「くっ、秘伝シールドでは防げないのか・・・！」

「それも一つ・・・んっ、何じゃあれは！」

ナキナキテは再び赤い玉を取り出し、シンケンオーに投げつけようとしたが、その前に何かに気づき、そっちの方向に顔を向ければ、そこには海老折神がこちらに向かっていた。ナキナキテの1の目を倒したことで流ノ介達に取りついていた赤鬼子はなくなり、ゴールドが加勢に来てくれたようだ。

「さっきは良くもやってくれたなあ、この全身顔面野郎！今度はこ

「うちの番だぜ？侍変形！」

海老折神の中にいるゴールドは、スシチェンジャーを取り出して“変”という電子モチカラを出して海老折神に込めると、海老折神は変形し、フェイスが“西”となり、扇を装備すれば“ダイカイオー・ニシ”に侍変形を成し遂げた。

「ダイカイオー・ニシ、天下一品！」

【オツシャー！ニシィ！】

「一つ増えた所で何も変わらんわい、それ！」

ナキナキテはダイカイオーを見れば啖呵を切り、ダイカイオーに向けて赤い玉を投げつける。

「そんなもん二度と食らうかよ、あらよつとめ！」

ゴールドは赤い玉を見ればそう叫び、ダイカイオーの扇で赤い玉を叩き落とす。落とされた赤い玉はナキナキテの足元に転がり。ゆつくりと消えて行った。

「ああつ、よくもワシの赤鬼子を……、許せん！」

ナキナキテは怒りを露わにし、棍棒を取り出せばダイカイオーの方に走っていく。

「今度は接近戦かあ、おもしれえ、受けて立つぜ！ダイカイオー、東！」

【トオー、トオー！ヒガシイ！！】

ナキナキテが来ればゴールドは台座を回転し、“東”と変えれば

ダイカイオーのフェイスも変わり、扇を腰に戻して素手になれば“ダイカイオー・ヒガシ”に変形を成し遂げた。

ナキナキテは棍棒をダイカイオーに向けて振るうが、ダイカイオーは棍棒の持ち手を狙い、受け流すように払いのければナキナキテはよろけ隙が生まれてしまい、ダイカイオーは隙を見逃さず、ナキナキテに強烈の一撃を与える。

「ぐあああっ！」

「今ね、止めよ！」

ダイカイオーの一撃を受けたナキナキテは転びそうになりながらも大きくよろけ、ふらふらと立ち尽くせばシンケンジャー達はそれぞれ台座にセットしたシンケンマル、サカナマルを抜き、シンケンマルにセットしたディスクを回転させ、ゴールドはサカナマルを構える。すると、シンケンオーが持つダイシンケンに“斬”のモチカラが込められていき、ダイカイオーは腕に海老ばさみを武装して構える。

「『ダイシンケン・侍斬り！』」

「海老ばさみ本手返し！」

シンケンオーはモチカラを込めたダイシンケンを円を描くように回し、そしてダイシンケンを構えればシンケンジャー達はシンケンマルを斬るように降ろし、シンケンオーもダイシンケンでナキナキテを斬れば、次にダイカイオーが海老ばさみを武装した腕でナキナキテに強烈な連続パンチをお見舞いした。

「ま、またしても・・・やられるとはあ・・・ぐあああああああああああ！！！！」

ナキナキテはシンケンオートダイカイオーの技に耐えきれず、断末魔を上げればゆっくりと倒れていき、爆発して消えて行った。

「ふう・・・、やっと終わったわね。」

「いやっ、まだ終わってねえぜ茉莉ちゃん！さあさあ皆さん、毎回

恒例の最後の一本締めえ！いよおー！」

ナキナキテを倒し、シンケンピンクが一息を吐けばゴールドは指を指して言い、ゴールドの合図で全員一斉に手を叩いた。

「これで一件、」

「落ち着ね。」

手を叩いた後、シンケンレッドが言い終わる前に、ピンクがセリフを奪うように言えば、この戦いは終わりを告げた。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂』

あその後、ナキナキテを倒したことにより、白鬼子がいなくなり、術が解けた親達はすぐに子供達と合流し、事件はどうにか収まった。あその後、なのは達は周辺の警戒を行ったが、外道衆の反応もない為、警戒を解除して機動六課に帰還した。



そして時間は進み、食堂でそれぞれチームを作って食事を行っていて、とあるテーブルではなのはとヴィヴィオが二人で仲良く食事をしており、それを茉莉とフェイトが少し遠いテーブルから眺めていた。

「・・・仲、いいね。」

「うん、そうだね。」

茉莉とフェイトは、楽しそうに食事をし、時に何かを話すなのはとヴィヴィオを見て呟くように会話する。そして、フェイトは視線をヴィヴィオから茉莉に移すと話しかける。

「茉莉さん、ヴィヴィオの事なんだけど・・・。」

「えっ、ヴィヴィオが・・・どうかしたんですか？」

「実は、昨日なのはに頼まれて、ヴィヴィオとなのはの後見人になったの。」

茉子はその事を聞くと、目を開いて驚き、フェイトの方を向いた。茉子はそののが保護責任者と知っているが、後見人がフェイトとは知らなかった。もしそれが本当ならば、法的にフェイトもヴィヴィオの（義理の）親ということになる

「えっ！それって……！」

「大丈夫、この事はヴィヴィオに言わないことにしようと思うの。ほら、私にはエリオとキャロがいるし、二人を放っておくにはいけないからね。それに……。」

フェイトは苦笑いしながらも、驚く茉子を前にしても落ち着いて話続けた。

「母親が二人いたら、おかしいでしょ？ヴィヴィオのお母さんは、なのはなんだから。」

「……そうだね。」

そう笑顔で言われた茉莉は、ため息を吐くと何かを諦めたように言う。少し時間が経ち、落ち着きを取り戻した茉莉を見ると、フェイトが口を開いた。

「・・・茉莉さん、保護施設での話何だけどね・・・、何とか見つかりそう。」

「見つかりそうって・・・何を？」

そうフェイトは静かに呟くと茉莉は軽い疑問を持ち、頭を傾げるもフェイトの方を向いた。

「私なりの、支え方。法律的には、義理の親ってことになっているけど、私はヴィヴィオとなのは今の関係を壊したくない。だから、なるべく目立たないように陰から支えることにしたの。どうかな？」

「・・・うん、いいんじゃないかな。フェイトさんらしくていいと

「思います。」

まるで我が子をみるような、暖かい目でなのは達の様子を見守るフェイトを見た茉子は、自然と笑みがこぼれ微笑みながら言った。そんな一時の平和を過ごしている中、フェイトは茉子の方に視線を移し、顔も少しだけ茉子の方へ向く。

「これからも、一緒に戦ってくれるかな・・・茉子。」

その言葉に驚いたのか、茉子はフェイトの方へ顔を向けた。フェイトの表情はどこか申し訳なさそうで、それでいてどこか笑っているようだった。そんなフェイトをみた茉子は、笑顔で返した。

「こちらこそよろしくね、フェイト。」

たった一つのきつかけで、二人の女性の信頼関係が深まった瞬間でもあった。遠くから聞こえるフォワード達の笑う声と、ヴィヴィオとなのはの会話の声を聴きながら、一時の平和を過ごす二人だった。

## 第四十四幕 親子 参（後書き）

作「今回はこの話に登場した合体技を紹介します。」

天空雷電の舞い

使用者：シンケンピンク、フェイト

シンケンピンクの“天空の舞い”と、フェイトの雷を纏った魔力の刃で敵を斬る技。この技はフェイトの代わりにエリオ、シンケンジャーだと雷撃ディスクを代用しても使える。

作「今回の話はヴィヴィオを持ち上げすぎたような感じがします。反省しています。」

次回は話は一応、フォワードかクサレ外道、どちらか考えてますが、近いうちに決めて書きたいと思います。

それと、流れるにフェイトが茉莉と一緒にアヤカシを倒しましたが、それでもまだ非殺傷設定で戦わせたいと考えてます。」

## 第四十五幕 影使い（前書き）

作「大変お待たせしました。オリジナルアヤカシの製作及び話の構成等、大変時間がかかってしまいました・・・。申し訳ありませんでした。」

## 第四十五幕 影使い

### 『三途の川』

あの世とこの世の狭間にある、血のように赤い川が流れる三途の川。そして、その川に浮かぶ外道衆の拠点“六門船”、しかしその船の中には誰もおらず、あるのはスカリエッティから頂いたカプセルが二つのみ……。そして船の中にいた外道衆幹部、骨のシタリは、三途の川が流れる川岸で錫杖を鳴らしながら歩いていた。しかしその足取りは重く、手頃な高さまで積み重ねられた石の上に座り、ため息を吐いた。

「……結構遠くまで探してきたけど、やっぱり見つからないねえ、気配は感じているんだけど、錯覚だったかね。」

なぜシタリが六門船から出てまで捜し歩いていたのには理由があった。それはナキナキテが撃破された後、溜息を吐きつつ新たなアヤカシの魂を引き上げようと試みた時、三途の川の増幅と共に、とある気配を感じた。禍々しく、ありとあらゆるものを覆い被さんとする狂気……。それが突如、三途の川を支配したのだ。それはほんの一瞬で終わったが、シタリはそれが気になり、とある感情が生まれた。死んだはずのドウコクが蘇ったのではないのかと。しかし結果は見ての通り収穫無し、結局気配の正体は何なのかわからずじま



いとなった。

寂しそうに呟くシタリは三途の川の方を向く。川の様子は穏やかで増える様子はなく、むしろ前よりか減った気がしていた。

「・・・はあ、あの人間からカプセル貰って、死んだアヤカシを生き返らせることは出来たは良いが、まさかあいつらシンケンジャーがここまで追ってくるとは思っても居なかったよ・・・。」

三途の川に向かってか、独り言を呟き続けるシタリの姿は疲労を感じさせ、落胆したのか肩を落としていた。

遡る事数か月前、この世界の三途の川に浮上した際シタリは別世界に繋がっていたことに驚いたが、それと同時に新たな疑問が生まれた。それは“シンケンジャーの存在”、例え別世界でも三途の川があるとすれば、当然敵対するシンケンジャーがいるのではないかとシタリは睨んでいた。しかし、恥を忍んで協定を結んだ人間、スカリエッティからシンケンジャー愚か、モチカラの存在すらないと知った時は心底喜んだ。

天敵であるシンケンジャーがいない今、三途の川を溢れさすいい機会だと。勿論ナナシのみの部隊ではそれは難しいと踏んでいた、なぜならナナシ連中はある程度連携は取れ、武器も多彩に操れるが、それは上官に当たるアヤカシがいてこそ成り立つものであり、司令

塔の無いナナシでは好き勝手暴れるだけで期待できる戦火を上げられるかと聞かれればそれはNOに等しい。現にナナシ連中を送り出してみた所、最初は増えていたが時間が経つにつれ増える量が減っていたのは事実であった。

だからこそアヤカシを生き返らせ、三途の川を増やし、あわよくば血祭ドウコクを復活させることはできないかと考えていた。しかし、その考えはシンケンジャーが現れた事によって消え去った。ただでさえ前の世界で何度も煮え汁を飲まされ、終いには六門船ごと三途の川の奥深くまで沈没させられ、しかも魔導師と呼ばれる人間と手を組んだと聞く。これではますますドウコクを復活させることは難しくなっていく、シタリを悩ませる一つの物となっていた。

「・・・さて、そろそろアヤカシの魂を引き上げないとねえ・・・  
今度はアタシの言うことを聞く素直なアヤカシが取れるといいんだけど・・・うん?」

冗談交じりに呟いたシタリは錫杖を使って立ち上がり、六門船へと向かおうと歩き出したが、何らかの気配を感じ取ると即座に振り向いた。その視線の先には誰もいない川岸のふもとで、浅い三途の川から見える地面の砂からポコポコと空気・・・否、瘴気が溢れ出ようとしていた。それは三途の川の空気よりも重く、シタリはそれに身の覚えがあった。

「・・・まさか、まだ生き残りがいたのかい・・・!? なんとまあしづとい連中じゃないかい！」

そう叫ぶシタリの声色は明らかに喜んでるものであり、表情もさっきまでの様子とは打って変わり、まるで水を得た魚のように笑顔となっていた。

「ぐっふっふっふっふ・・・ドウコクがない今、素直に言うことを聞いてくれるかわからないけど、試してみる価値はあるかも知れないねえ・・・。これから忙しくなりそうだよ。」

卑しく笑うシタリの視線の先は、川面から泡となった瘴気が絶え間なく溢れ出し、その場のみ異様な雰囲気を醸し出していた。

「はい、みんな集合！」

「くくくはいつ！」「くくく」

ナキナキテを倒し、9月に差し掛かろうとしたある日の事。まだ夏の暑さが残る中、なのは達とフォワード達は個々の力を伸ばす為、それぞれに分かれ早朝にも関わらず厳しい訓練を済ませ、教官であるなのはの掛け声にて終了、その場に集合した。他の隊長陣も集合場所におり、文瑠達の場所にいたはずのシグナムもそこにいた。

「さてと、今日の朝練が終わる前に……一つ連絡事項があります、こっちに來てください。」

フォワード達と隊長陣が集まった事を確認すると、なのはは森林の奥に向けて声をだす。すると女性の声が聞こえ、少し立つと草木を分ける音が鳴り、だんだん音が大きくなっていく。そして人影が見えてくると、その正体が二人の女性の物であった。フォワード達は不信に思いつつあったが、スバルは違い、その人影が誰の物であったか気付いたのか、目を泳がせ呆然と見ていた。

「えっと、突然だったのでみんなには連絡が行き届いてないけど、紹介するね。」

人影が見えた事を確認したのは、フォワード達の方に視線を再び移した。

なのはの説明が始まると、その人影は森を抜けだし、その姿を現した。一人は本局の制服の上に白衣を着た女性で、深緑の色をした髪の毛でショートカット、くせ毛なのか少し撥ねており、眼鏡をかけていた。もう一人の方は陸士舞台で多く見られる茶色の制服、紫色の髪をした女性、腰まで伸びたロングヘアに髪を束ねるリボン。そして顔の特徴はスバルとよく似ていた人物、それは、下水道でのレリック事件で協力したスバルの姉……。

「本日からしばらく六課に出向となった、陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹です。」

ギンガがそこにいた。突然の登場にスバルは混乱しているのか、

体は崩さないものの時折「あっ」とか「えっ嘘」と呟いており、フォワード達も呆然とその姿を見ていた。

「はい、陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願ひします。」

「「「はっはい!!」「」「」

戸惑うフォワード達を余所に、淡々と軽い自己紹介を済ましたギンガはその場で敬礼し、フォワード達もやっと理解できたのか急いで返事と共に敬礼する。

「それから、もう一人。十年前から、六課の隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官……」

「マリエル・アテンザです。」

次にフェイトはマリエルに手を差し伸べるように向けて紹介し、

マリエルは自分の名前を言えば敬礼をした。

「本来ならば出向されるのは先の話だったが、とある事情で早めに  
出向されることになり、暫く六課に滞在していただくことになった。

」

「ギンガ陸曹はフォワード隊に配属され、マリエル技術官はデバイ  
ス整備も見てくれたりもするそうなので・・・」

「気軽に声をかけてね。」

「「「「はいつ！」「」「」

シグナムはマリエルがここに滞在する理由を簡単に解釈して説明  
し、シャーリーは二人のそれぞれの六課にいる時の説明をした。

「それじゃ、これにて連絡事項を終わります。午前は訓練の予定な  
ので、各自食事等済ませ、備えといてね。それでは解散。」

「「「「はいつ、ありがとございました！」「」「」

なのはが終了の号令を出せばフォワード達は頭を下げて言い、隊長陣とシャーリーとマリエルは機動六課に向かって歩いていく。ティアナ達も後を追うように歩き出したが、スバルは真っ先に走り出しギンガの元へ向かった。

「ギン姉〜!」

スバルはギンガの元へ着くと右手を上げる。気付いたギンガも左手を上げるとスバルはギンガの手のひらを合わせ、ハイタッチするとにこやかに笑いながらギンガの横へ並んだ。

「もうスバルったら、今は勤務中でしょ?」

「えへへ、ごめんごめん。」



そう叱るギンガもまんざらではないのか、微笑みながら軽く言い、スバルも照れたように頭を搔く。

「それにしてもギン姉、六課に来るなら言っというてよあ、突然来たからびつくりしちゃったよ。」

「ごめんねスバル、地上の方もごたごたしててね……。それに通達が来たのが一週間前だったからこっちも大変だね。」

「やっぱりギン姉の方も大変なんだね……。やっぱり外道衆とか関係あるの？」

スバルの言葉に、ギンガは僅かだが眉をしかめ、動き一瞬止まる。それに気づいてないのかスバルはきょとんとした顔でギンガを見つめる。

「……。うん、まあそんなところかな。あっそうだスバル、シンケンジャーの方達が見えないけど、どうかしたの？」

「えっ……。ああっうん、文瑠さん達なら今日は別行動だって、本来なら一緒に来る予定だったけど、何か拒否したみたいだね……。」

多分休憩室にいると思うんだけど……。」

「……そう、ありがとうスバル。後で顔合わせしたいから案内してくれる?」

「うん、ちょうど朝御飯だから迎えに行こうと思ってたし、一緒に行こうよギン姉。」

「うん、いいよ。」

話を变えたことに少し戸惑うも、なんとなく返したスバルだったが、ギンガの顔はどことなく暗かった。スバルはその事に気付いてないが、ギンガの様子がおかしいというのはさすがに気付いていた。しかし、それだけだった。しばらくすれば元のギンガに戻るだろう、そう考えたスバルは深く追求しようとせず、ギンガと共に歩く。

『ミッドチルダ 機動六課 食堂』

なのは達が訓練を終わらした同時刻、シンケンジャーである丈瑠達は、先に食堂に集まって食事を取っていた。しかし、そこには源太はおらず、彦馬も加えて6人で食事を取っていた。

「そういえば、このミッドチルダ世界に来てからずいぶん経ったなあ．．．」

「．．．言われてみれば、もう4か月も立っているわね。」

「その短い間にも、さまざまな事が起こりましたなあ．．．。」

「．．．そうだな。」

千明がフォークを持った手を止め、ボソツと呟くように言えば文瑠達は、この世界に来てから起こったことを思い出す。

別世界に行き、初めてなのは達に出会った時の事、外道衆がこのミッドチルダに現れた事、そして、機動六課内で起こった事．．．。初めは“別世界”ということで戸惑ったこともあるが、今では機動六課内の生活に慣れてしまい、なのは達と極力交流を避けてるはずだったが、気づけば普通に過ごしていることに気付いた。これで本当によかったのかどうか悩みどころだが、今更極力避けても仕方がなく、もうこのような状況になってしまっているので、もう後戻りは出来ないと感じた。

文瑠達が今までの事を思い出している中、誰かがこちらを呼ぶ声がある。文瑠達は声がする方に顔を向けると、そこには大量のスパゲティが盛り付けられた皿を持ったスバル達だった。

「千明さんにみんな、もう来てたんですか。」

「おう、先食ってたぜ・・・あれ、後ろにいるのは確か・・・。」

千明はスバルの方を向いて話すが、スバルの後ろにいるギンガに気付くと指を指して呟くように言い、それに気づいたギンガは軽く頭を下げて自己紹介を始める。

「初めまして、私はギンガ・ナカジマ陸曹です。いつも妹のスバルからご活躍を聞いております。今後、よろしく願います。」

「おう、よろしくな。」

ギンガが自己紹介を終われば千明は軽く言っ流し、顔の向きを戻して食事を続ける。ギンガ達は近くにあったテーブルに料理を置き、それぞれ席に座って食事を始めた中、シンケンジャーの事ではなくなったギンガはスバルに念話で話しかける。

「『スバル、少し聞きたい事があるんだけど、いい？』」

「『うん、いいよ、ギン姉』」

「『ありがと、シンケンジャー何だけど・・・、本当にあの人がそんなの？』」

「『うん、そうだけど、どうしたの？』」

「『ううん、なんでもない。少し気になっただけだから。』」

「『そっかあ・・・。』」

ギンガは改めて文瑠達がシンケンジャーだとわかると、念話を切った。

ギンガはシンケンジャーの事を知っており、更に文瑠と源太以外のシンケンジャーと出会っているが、実際は変身したときの姿、配布された資料も元いた部隊の仕事で忙しく見る暇も無かった為、ギンガ自身シンケンジャーの素顔というのはかなり興味があり、予想では特殊部隊のようなイメージがあった。しかしその実態はただの一般人、けどどこか隙が見当たらない。それがギンガから見たシンケンジャーの感想だった。そのためか、自分の予想とは大いに違ったため妹であるスバルに確認を取ったのだ。

再びギンガは丈瑠達の方を向く。和気藹々と食事をする若い男女、そんな中喋らずに食事をする男性がいたが不思議と違和感なくそこにおり、まるでひとつのサークルのような雰囲気を出していた。

「『……まあ、何とかなるかな。』」

一般人のように見えるが、外道衆に対しては優秀な部隊。そうギンガは解釈し、あくまでも一般魔導師とは変わらない……。そうギンガは考えていた。

その後、シンケンジャーに対する考察を止め、フワード達と会話をしようと考えたギンガだったが、口を開くと同時に機動六課中に警報が鳴り響いた。

「ッ！この警報……。何！？」

「ギン姉、外道衆だよッ！」

「嘘でしょ、こんな時間に！？」

「外道衆は時間選ばないの、早く行こっ！」

「え、ええっ！」

ギンガは聞いたことが無い警報に戸惑うも、スバルの言葉を聞き、驚いたがすぐに気を引き締めてフォワード達と共に食堂を出て行った。

フォワード達はギンガと共にヘリポートに辿り着くと、すでなのは達がヘリの前で待機しており、複雑な表情を浮かべていたがスバル達の姿を見つけると表情を切り替え、スバル達の方へ向いた。

「フォワード隊、ただ今到着しました！」

「了解、発信準備はすでにできています、急いで乗り込んでください。」

「……はい！」「……」

「あの、なのは隊長……千明さん達は？」

「その事も後で説明するから急いで乗って、早く！」

「はっはいつ！」

スバルは到着すると同時に丈瑠達がいなことに気付き、質問するがなのは指示に従ってへりに乗り込み、なのは達とフォワード達を乗せたへりは浮かび上がると現場の方向へと動き始めた。暫くしてへりが安定するとなのははフォワード達の方へ向き、モニターを出し、操作し始めた。

「それじゃ、今回の外道衆について説明します。先程現れた外道衆は南部13区画に出現。すでに周辺の避難は完了しているけど、今回の外道衆の動きに、不可解な点があります。」

「まず一つは、“ナナシ連中”の動きだ。本来、ナナシ連中は現れたポイントから集団で破壊活動を行うが、なぜか特に目立った動きがない。」

「えっ、それって・・・どういう意味ですか？」

なのはが出したモニターには、外道衆が出現した地図とポイントが示されており、なのはとシグナムの説明に、エリオは外道衆の動きが理解できず、迷わず質問した。



「理由はわからないけど、今まで数々の外道衆と戦ってきましたが、ほとんどは破壊活動を行っています。だけど今回の外道衆は、現れた後周りの住民を襲いはしたけど、その場から目立った破壊はせず、全く移動してません。そのため、今回の外道衆は“畏”という可能性も考えながら行動したいと思います。」

「だから今回は二手に分かれ、何事もなければ合流、もし何があったとしてもあいつ等なら何とかなると思うから、出来る作戦だけだな。」

「そうなんですか……。」

フォワード達は、フェイトとヴィータから外道衆の動きと、丈瑠達がヘリポートに集まらなかった訳がわかると小さく頷いて納得した。

「それで、私達はどうすればいいですか？」

「うん、フォワード達は黒子さん達と共に近隣の警戒、私達は丈瑠さん達と共に外道衆の殲滅、いいね？」

「「「「はいつ！」「」「」」

「そろそろ着陸ポイントに到達しますよ、シンケンジャーの奴らもすでに下で待機しています！」

「了解！みんな、出撃準備に入って！」

ギンガは自分達の役割を聞き、ヘリのパイロットのヴァイスから報告を受ければ着陸態勢に入り、ハッチが開けば隊長人が飛び降り、空中でバリアジャケットや騎士甲冑を身に纏って地上に着地し、最後にフォワード達が飛び降り、空中でバリアジャケットを身に纏えば同じように地上に着地した。

『ミッドチルダ 南部13区域 住宅地』

なのは達がバリアジャケットと騎士甲冑を身に纏って地上に着地し、フォワード達はすぐにその場から散開し、なのは達は文瑠達の元に向かった。

「文瑠さん！下の状況は？」

「いや、特に何も無い、行くぞ！」

丈瑠達はなのは達と合流すれば外道衆が現れたと思われる現場に向かって走っていく。

そして、丈瑠達となのは達は走っていけばいくほど外道衆の気配を感じたが、その気配は今までとは違う事を感じた。

「……」の気配、どこかで……。」

「そろそろポイントに付くよ！」

丈瑠は今までの外道衆の気配が違ふ事を不安を感じながらも走っていき、彼らは外道衆が現れたと思われるポイントに辿り着いたのだが、そこには外道衆の姿はおらず、その場には破壊されたと思われる瓦礫がいくつもあった。

「あれ、いねえぞ？」

「確かにここのはずなんだけど……、みんな、注意して。」

丈瑠達となのは達は、互いに背中を合わせるように円陣になり、丈瑠達はシヨドウフォンとスシチェンジャー、なのは達はデバイスを構えて辺りを警戒した。すると、何処からか錫杖の音が鳴る。その音を聞いた彼らは警戒を強めた。

「ッ！」

「気を付ける……何が出てきてもおかしくない！」

彼らのすぐ近場から出てくる、錫杖の音。しかし、いくら周りを見渡してもナナシ連中の姿すら見つからない、何処からか錫杖の音が鳴り響くだけだった。

だが、錫杖の音がなくなると同時に近くの“スキマ”からナナシ連中が現れ、いつの間にか丈瑠達となのは達を取り囲んだ。だが、そのナナシ連中はいつもと違い、紫色のナナシに、腐ったような臭いを発していた。

「何だよこいつら、いつもと違う色してるぞ……それに……  
くせえ……！」

「ッ……行くぞお前達、シヨドウフォン！」

「スシチエンジャー！」

【イラッシャイーツ！】

「『筆奏上！』」

「一貫献上！」

なのは達はナナシ連中の変化と発している臭いに困惑するも、丈瑠達はシヨドウフォンとスシチエンジャーを構え、モチカラを操ってシンケンジャーへと変身する。そして、シンケンジャー達はシンケンマルとサカナマルをそれぞれ構えれば、シグナムとヴィータと共にナナシ連中と戦い始めた。

## 第四十五幕 影使い（後書き）

作「今回はクサレ外道衆とそのクサレナナシについて紹介します。」

クサレ外道衆

外道衆の中の外道衆と呼ばれる妖怪たち。本編にもその生き残りが登場している。

クサレナナシ

クサレ外道衆の戦闘員。等身大の他、巨大なクサレ大ナナシも複数存在する。

作「前回、フォワードがクサレ外道衆が悩みましたが、悩んだ末クサレ外道衆に決まりました。フォワードの話は、まだ早いと思うたので先になります。楽しみにしていた方、申し訳ありません。クサレ外道衆のアヤカシは、オリジナルです。オリジナルアヤカシの説明は次回に紹介したいと思います。」

## 第四十六幕 影使い 弐（前書き）

作「長らくお待たせしました。今回は完全に戦闘回で、今回も短めです・・・予想以上に難産でした。」

「ご存知かと思いますが、活動報告に“スポット参戦”に関して書かれています。今の所、外伝的なものにするか、本編と組み合わせるかどうか考え中です。」

## 第四十六幕 影使い 貳

『ミッドチルダ 南部13区域 住宅地』

不意打ちに近い状況であったにも関わらず、丈瑠達と魔導師たちは円を描くように立ち並び、お互い背を向けながら丈瑠達は変身する。光に包まれた彼らと魔導師たちは、光が消えると共に散らばり、色違いのナナシ連中もシンケンジャーと魔導師に目掛けて走り出し、交戦を開始した。

「オウラアッ！」

「ハアッ！」

シグナムは迫りくる色違いのナナシ連中の攻撃を受け止め、押し返した後ナナシを斬り、ヴィータは持ち前の力を生かして攻撃してくるナナシ連中を強引に吹き飛ばす。シグナムとヴィータはすぐさま別のナナシ連中に狙いを定めるが、それを邪魔するかのようには他のナナシ連中がヴィータとシグナム達を襲う。



「ツチイ！」

突如現れたナナシ連中に舌を打ちながらも防御するヴィータだったが、ヴィータが押し返す前にシンケンレッドがナナシを斬り、ヴィータの隣に立つ。

「つすまねえ！」

「話は後だ、今は生き残る事だけを考える！」

「わ、わかった！それにしても、何なんだよこいつ等……いつもよりの奴らより厄介だぞ！」

「……クサレ外道衆だ……、まだ生き残りがいたとは。」

「クサレ……？おい何なんだよそいつらって！……ああもうとにかくくぶつ飛ばすしかねえ！！」

シンケンレッドはヴィータの言葉を流し、そう叫ぶと再び色違い……ではなく“クサレ外道衆”のナナシ連中の真っ只中に向かって走り出すレッド。その言葉を聞いたヴィータはシンケンレッドに疑

問の声を上げるが、迫りくるナナシ連中の攻撃が来るとグラーファイゼンで防ぎ、押し返すと半ばキレながらも戦闘に戻る。

そんな中、なのはとフェイトは苦戦を強いられていた。それは交戦開始直後、外道衆戦ではサポートを行う事となっていたなのはとフェイトは、上空に飛ばうと魔法を展開。空に飛び立とうとしたが一本の矢がその動きを止め、なのはとフェイトはその方向を見ると大勢のナナシ連中が弓を構え、なのは達を狙っていた。

それを見たなのはは、即座に防御魔法“オーバルプロテクション”を展開すると同時に、ナナシ連中から放たれた、雨のような膨大な数の矢がなのはとフェイトに襲い掛かる。しかしその矢がなのは達の元へたどり着かず、バリアによって防がれ、攻撃が届くことはなかった。

「なのは、いける？」

「・・・ちよつと厳しいかもね。」

防ぐなのはに声を掛けたフェイトに、なのはは軽く顔を顰めながらも呟く。その視線の先には未だに続く矢の応酬、それは明らかになのは達を狙い、また他の魔導師が飛ばないようにと言わんばかりにはるか上空を狙う物もあった。

完全に迂闊だった。そうなのは心の中で呟き、小さく舌を打つ。上空に飛び、魔力弾で敵をかく乱するつもりが、先手を打たれて動きを止められてしまうなんて、思ってもみなかった。

「『フェイトちゃん、作戦変更。上空での援護は取り消し、地上に降りて応戦するよ、いいね!』」

だが、いつまでもその場で耐え続ける程、彼女達は馬鹿ではない。予想外の事が起きてしまったが、慌てるほどのものでは無かった。前方から迫りくる矢は確かに脅威ではあるが、来る方向は変わっていない。先程立っていた地面はすでに色違いのナナシ連中によって占領されていたが、こっちに意識を向いているナナシはほんのわずか、今の状態を打破するには十分だった。

「『了解、せーのでいくよ。』」

「『オツケー!それじゃあいくよ!』」

「『『せーえの!』』」

二人の念話による掛け声と同時に、なのはは“バリアバースト”を唱え、張っていたバリアを爆散させると、迫りくる矢と地上にいるナナシ連中を吹き飛ばし、フェイトはプラズマバレットを地上に向けて掃射。バリアによる風圧に耐えたナナシ連中を撃退・・・とまではいかなかったが痺れさせ、地上にまで降りる時間を稼いだ。

なのはのバリアバーストによって、ほんの僅かな間だが弓矢による攻撃を中断させた隙になのはとフェイトは地上に降り、デバイスを構えるとなのはは魔力弾を形成し、フェイトはバルディッシュを構えると迫りくるナナシの攻撃に備える。

ナナシ連中なのは達の姿を見つけると痺れる仲間を飛び越え、なのはとフェイトに目掛けて走り出す。ナナシ連中は前方だけではなく、後方からも走ってくるのがわかり、なのはとフェイトは背中を合わせ、迫りくるナナシ連中に向けて無数の魔力弾を放つ。魔力弾は威力は低く、当然非殺傷なため有効打にはなり得ないものの、敵をかく乱するのに十分だった。しかしそれは、あくまで少数部隊だからこそ出来る物だった。無差別に放ったところで混乱できるのは精々近くにいるナナシ、ただど後続に続くナナシ連中には効果は無かったのだ。

“このままではいけない”と頭の中でその言葉が横切った時、迫りくるナナシの攻撃を防ごうと魔法を張った時、そのナナシを後ろからシンケンレッドとピンクが斬って倒した。

「ッ、文瑠さん！」

「あまり無理をするな！」

「ごめん！でも……どっにするの？このままじゃ……。」

シンケンレッドはナナシを倒すとなのはを庇うように立ち、迫るナナシからなのは達をピンクと共に守るように戦い始める。

「なのは、フェイト、突破口は俺達が開く、その隙にダイゴヨウを呼んできてくれ。」

「えっ、ダイゴヨウ？」

「話は後だ、行くぞ！」

「あっ、うん！」

シンケンレッドは何か思ったのか、なのは達にこの場にはいないダイゴヨウを呼んでくるように言い、レッドの言葉に疑問を思うが、今は指示に従うことにした。シンケンレッドピンクからシンケンマ

ルを借りると地面に刺して立たせ、ベルトのバックルから獅子ディスクと雷撃ディスクを取り出すとそれぞれのシンケンマルにセットし、回転させるとそれぞれのシンケンマルは炎と雷を纏わせ、地面から抜くとシンケンマルを構える。

「行くぞ、シンケンマル、火炎雷電の舞い！」

シンケンレッドは炎と雷をそれぞれ纏ったシンケンマルを二つ同時に振るい、炎と雷は周りにいる多くのナナシ連中に浴びせ、その攻撃に耐えきれなかったナナシ連中は次々と爆散していき、その爆発に紛れてなのは達は空を飛んで戦闘領域から脱出を図る。なのは達に気付いたナナシ連中は弓を構え、矢を放つがすでになのはフェイトは射程外に飛んで行ったため矢は当たらなかった。シンケンレッドはピンクにシンケンマルを返し、再びナナシ連中と戦い始めた。

『ミッドチルダ 南部13区域 警戒区域』

シンケンジャー達とシグナムとヴィータがクサレ外道衆のナナシ連中と戦っている中、フォワード達はそれぞれ散開し、黒子達と共に一般市民が近づかないように、そして外道衆が近くにいないか警戒を行っていた。

今日出向してきたギンガはフォワードに属していたため警戒を行っており、現在戦闘区域から500mほど離れた距離を警戒に当たっている。戦闘区域から爆発音が薄らと聞こえるとギンガはその方向に顔を向け、心配した表情になるとスバルに念話を入れる。

「『スバル、任務中だけど……ちよつといいかな?』」

「『ん?どうしたのギン姉?』」

「『……隊長達とシンケンジャーの方々が、外道衆と戦っているんだけど……私達は援護に行かなくても……いいのかな?』」

ギンガは爆発音が聞こえた方向に顔を向けながらもスバルに聞く。

「『それは……なのはさんの指示なんです。』」

「『なのは……隊長の?』」

「『うん。詳しく教えてくれなかったんだけど……心当たりはあるの。』」

「『……よかつたら、聞かせてくれる?』」

ギンガの問いにスバルは声を小さくしながらも答える。

「『……うん、いいよ。前に外道衆と一度、戦った事あるんだ。だけど、危なかつたところもあつたし、死に欠けたこともあつた。文瑠さん達となのはさん達も、強いアヤカシが現れて手も足も出なかつた事があつたの。』」

「『へえ……そんな事が……。』」

ギンガはスバルからなのは達の敗北を聞くと、信じられないのか、声を小さくし、顔を俯きながら言う。

「『うん、だけどね、それでも文瑠さん達となのはさん達は諦めずに作戦を考えたりして、外道衆と戦ってるんだ。だからね、あたし達もいっぱい頑張つて、なのはさん達と一緒に戦いたいなあ……。』」



って思ってるんだ。』

スバルからその言葉を聞くと、ギンガは顔をゆつくりと上げ、着実に成長している妹<sup>スバル</sup>を歓心し、隊長陣が敗北したことに関しては引っかけもの、スバルの成長を知ったその喜びが大きく、少しホツとした。

ギンガはスバルとの念話を切り、任務を続行しようとした時にロングアーチから通信が入った。

『定期連絡、こちらロングアーチ、聞こえますか？』

「あつはい、聞こえます。フォワードのギンガ・ナカジマ、異常はありません。」

『スターズ03、こっちも異常ありません。』

『スターズ04、同じく。』

『ライトニング03、こちらも異常ありません。』

『ライトニング04、こちらも異常・・・』

上空のなのはとフェイトが気になるギンガだったが、ロングアーチから通信が入れば、意識をそちらに向ける。そして、ギンガは定期連絡を入れ、通信越しからスバル達も連絡を入れていくが、キャラの連絡だけは途中で途切れてしまった。

『・・・ライトニング04、どうかしましたか？応答してください。ライトニング04？』

ロングアーチはキャラの通信が途絶えた後も、何度も通信に応えるように何度も声を掛けたが、何時まで経っても返事は来なかった。

『ミッドチルダ 南部13区域 住宅地』

なのはとフェイトが離脱した後もシンケンジャー達とシグナムとヴィータは戦い続けるも、クサレ外道衆のナナシ連中の数が一向に減る気配は無く、一時は隙があったものの、技や魔法を使う暇が作れないため苦戦を強いられており、シンケンジャー達もシグナムもヴィータも動きや顔色に疲れが見え始めて来た。

「くそっ！いつになったら数が減るんだよ！」

「一向に、減る気配がしない・・・くっ！」

ヴィータはナナシ連中と戦いながらも愚痴を漏らし、近くにいたシグナムは苦言を漏らすも三体のナナシと鏑迫り合いになり、押していくがさすがの烈火の騎士でも疲れが見え、逆に押されつつあった。だが、シグナムにピンチに気付いたシンケンイエローはすぐにそちらに向かい、鏑迫り合いをしているナナシ連中を後ろから斬って倒し、シグナムを助けた。

「シグナムさん、大丈夫ですか？」

「いや・・・大丈夫だ。」

救われたシグナムはシンケンイエローに短く礼を言うと背中合わせになり、レヴァンティンとシンケンマルを構え直し、次のナナシの攻撃に備えたと同時に上空から桜色の光と金色の光が見えたと思

えば、前方にいたナナシ連中を吹き飛ばした。吹き飛ばされたナナシ連中は地面に転がり、苦しむように悶えこむ。非殺傷だったか、撃破まではいかなかったが、一時凌ぎであるが混乱を引き起こすことができた。混乱を起こしたナナシ連中を余所に、シンケンレッドは上空に顔を向けると、ダイゴヨウを抱えてこっちに向かってくるフェイトと、後方にはレイジングハートを構えているのはの姿が見えた。

「フェイト、なのは！それに、ダイゴヨウ・・・！」

「遅くなってごめん、ちゃんと連れてきたよ。」

「殿様ー、行きやすぜええええ！」

フェイトがダイゴヨウを連れてくる姿を確認したシンケンレッドは、シンケンマルにセットした胸中ディスクを外し、ダイゴヨウはフェイトから離れて、シンケンレッドに向けて濃い赤色のディスク“恐竜ディスク”を発射する。

シンケンレッドはインロウマルのセット部を持ち、こっちに向かつて飛んでくるディスクをそのままシンケンマルにセットし、柄を持ってディスクを回転させると赤い光を放ち、その中心には赤いオーラを纏ったシンケンレッドの姿が見えた。突如現れた赤い光に、思わずなのは達は腕で目を覆う。少し立つと爆発音と共に光が収まり、

なのは達は目を覆うのを止め、シンケンレッドの方に顔を向ける。そこにいたのは志葉家の家紋を背負った赤い陣羽織（分かり易く言えばスーパーシンケンジャーの陣羽織の色違い）を羽織ったシンケンレッド、そして片手にはシンケンマルが恐竜の姿に似た生ける刀にして折神、“キョウリユウマル”に変化していた。

「ハイパーシンケンレッド、参る！」

恐竜ディスクの力で変化を遂げたハイパーシンケンレッドは、片手に持つキョウリユウマルを振るうと刀身が鞭のように伸びていき、前方にいたナナシ連中を一掃すると今度は他の方向にいるナナシ連中に向けてキョウリユウマルを突き付ける。すると、キョウリユウマルはシンケンレッドが構えているのにも関わらず刀身は意志を持っていくかのように伸びていき、ナナシ連中を次々と吹き飛ばしていき、いなくなれば新たな得物を見つけたかの如く他の場所にいたのナナシ連中の元に伸びていく。

この光景に、なのは達は思わず目を疑ってしまった。それもその筈、苦戦を強いられていた色違いのナナシ連中を相手に、意図も簡単に次々と倒していき、刀自身はまるで生きていくかのように自ら刀身を伸ばしてナナシ連中を倒していくからだ。

「すっげえ……、あいつら（ナナシ連中）が……あんな簡単に……」

「あのナナシ連中が、一瞬で……」

なのは達がハイパーシンケンレッドのキョウリユウマルの予想もなかった斬撃に驚きを隠しきれず、その勢いはシグナムですら見とれてしまうほどだった。

そして、気が付けばナナシ連中はいつの間にか殲滅し、キョウリユウマルは

元の刀身の長さに戻っていき、シンケンジャー達はハイパーシンケンレッドの元に集まっていった。

「これで全部か……」

「しかし妙ですねえ……、これだけのナナシ連中がいながらもアヤカシの姿が見当たりません。」

「ああ、その気配すら感じない。一度、辺りを警戒した方がよさそうだな……」

シンケンブルーの言った通り、今回はナナシ連中の数が多く、アヤカシがいてもおかしくなかったが、ナナシ連中を殲滅してもその姿は見え、静けさだけが残った。

シンケンジャー達はこの静けさに違和感を感じたのか、シンケンジャー達は辺りを警戒し、なのははロンググーチに通信を取るため空間モニターを出して回線を繋げ、モニターにははやての姿が映ったが、はやての顔は暗くロンググーチ内は慌ただしくなっていた。

「こちらスターズ01、八神部隊長、どうかしましたか？」

『あ、ああ・・・なのはは隊長、異常はない？』

「うん、一応ナナシ連中を殲滅したから連絡を入れたんだけど・・・何かあったの？」

はやての顔色が暗かったことと、ロンググーチ内のざわつきに不安を感じながらもなのはは今の状況を報告し、はやての返事を待った。

『それは……、緊急事態発生や。』

「緊急……事態？」

『……そや、特にフェイト隊長……心して聞いてな？』

「えっ……。」

突然名前を言われたフェイトは軽く驚くも、なのは達ははやての報告が出るのを待ち、シンケンジャー達も身を固め、はやての言葉を待つ。

『……ライティング04……キャロの反応がロストしたんや。』



## 第四十六幕 影使い 式（後書き）

作「今回はハイパーシンケンジャーとキョウリュウマル（恐竜折神）について紹介します。」

ハイパーシンケンジャー

キョウリュウマルを用いて恐竜ディスクの力をまとったもう一つの強化形態。使用者は襟に金の縁取りが成された赤い陣羽織（スーパーシンケンジャーの色違い、背中に「真」などの文字はなし）を纏い、呼び名は「ハイパーシンケン」。

キョウリュウマルは使えるが、インロウマルのような独自の強化必殺技はない。必殺技は刀身が伸びたキョウリュウマルで切断するもしくはキョウリュウマル自身が敵を貫くキョウリュウマル・天地一閃。

ゴールドの場合の名称はキョウリュウマル・黄金一閃。おもにクサレ外道衆との戦いに使用され、本編ではレッドとグリーンが実際に使用。特製DVDや劇場版ではゴールドとグリーンレッドもハイパー化した。スーパーシンケンジャーとは完全に別で、併用が可能。

キョウリュウマルがみ  
恐竜折神

- ・全長：27.5 m
- ・全幅：19 m
- ・全高：88.5 m
- ・重量：1000 t
- ・最高速度：600 km/h
- ・出力：800万馬力

初代秘伝ディスクに収納されていた恐竜（竜脚類）型の折神。デ

イスクを発見した時には初代シンケンレッドに「力」は別の場所に封印されていた。

刀身が伸びる刀「キョウリュウマル」としての使用の他、巨大化しシンケンオーとの侍武装も可能。

キョウリュウマルを使用したシンケンレッドは、赤い陣羽織を纏ったハイパーシンケンレッドになる。

作「本当はこの話でクサレ外道衆を出す予定だったのですが、結局このような内容に・・・真に申し訳ありませんでした。次回辺りでクサレアヤカシ登場、そしてその目的について書きたいと思います。

┌

第四十七幕 影使い 参（前書き）

大変お待たせしました。

オリジナルアヤカシの扱いが難しかった・・・。

## 第四十七幕 影使い 参

『ミッドチルダ 南部13区域 住宅地』

「・・・今、なんて？」

シンケンジャー達となのは達は一度は窮地に立たされるも、ハイパーシンケンジャーとなったシンケンレッドとキョウリュウマルの活躍により戦況は逆転、クサレナナシを瞬く間に殲滅した。そしてクサレ外道衆がいなくなり、静まり返った戦場でなのは達はロングアーチのはやてに報告するも、はやてから出た言葉はキャロの反応が消えたという、予想もしなかった事態。その事実を叩きつけられたなのは達とシンケンジャー達の間には不穏な空気が流れ、フェイトは思わず聞き返す。

『・・・正確には、戦闘開始から6分37秒にライトニング04の反応のロスト。近くにいたフォワード隊のギンガの報告によると、現場にはキャロのバリアジャケットの帽子、傷ついたフリードと負傷した黒子二名しかおらんかった。現在、搜索中や。』

「そんな・・・嘘・・・よね？」

『残念だけど・・・嘘やない。』

はやての言葉にショックを隠せなかったフェイトは気を失い、地面に落下していくもなのはがすぐに受け止めた。

「フェイトちゃん！」

『・・・スターズ01、悪いんやけどライトニング01をへりに搬送してくれへんか？』

「う、うん・・・了解しました。」

なのはは気を失ったフェイトを背中に背負い、はやての指示に従ってフェイトをへりに送っていった。

「フェイトさん、大丈夫やるか・・・？」

「そつね・・・、キャロの事を自分の子供のように大切にしていたから、今はそつとしておきましょ。」

シンケンイエローとピンクは気を失ったフエイトを心配するを余所に、ハイパーシンケンレッドは己が持つキョウリユウマルを握りしめ、「不覚を取られたか……。」「と心の中で呟き、自分を憎んだ。

『三途の川 六門船』

その頃、あの世とこの世の狭間にある三途の川に浮かぶ六門船。その中には骨のシタリ、そして、僧侶が持つような錫杖を持ち、影のように黒く、僧侶の服装に近い外見をしたクサレ外道衆のアヤカシがいた。

「……さっきの戦い、見取ったよ。戦いをナナシ共に任せといて、お前さんはガキ（キャラの事を指す）攫う……。一体何考えてるつもりだい、「カゲカクレ」？」

カゲカクレと呼ばれたクサレアヤカシは錫杖を使ってゆっくりと

立ち上がり、六門船内の窓側に沿って歩き出し、シタリに顔を向ければ鼻で笑いかけてきた。

「・・・おうやおや、外道衆の知恵袋であるシタリ殿がまだ気付かないとは・・・心労が溜まりに溜まって頭が回らないのですか？」

「ッ・・・そこまで偉そうに言っただったら何かあるのかな？」

カゲカクレの態度に癪かんに障ったのか、眉をひそめると一歩近づいて問いかける。

「クツクツ・・・まあ、ご老体のシタリ殿に特別に教えてやろう・・・。以前マンブク様の封印が解けた事は知っているか？」

脂目マンブクと言うのは、クサレ外道衆の頭目であり、シンケンジャーの元の世界で約300年封印され、現代に復活しては一万体のクサレ外道衆の大軍団を率い、ほぼ休む暇を与えない戦いを仕掛けたアヤカシである。だが、彼は最後恐竜折神の力によって倒され

てしまったが、その実力はかなりの物であり、たった三日で日本のほぼ全てを掌握したほどだった。

「ああ、それがどうしたんだい？」

「我は嘆いたよ・・・せつかく封印を解いたのにも関わらず、マンブク様がいない今、やることなすこと全てが無意味となってしまうた・・・。」

「・・・お前さんの事はどうでもいいわい・・・、さっさとあのガキを攫った理由を教えんかい。」

カゲカクレの話聞いていたシタリであったが、何時まで経っても本題に映らないことに苛立ちを覚えたシタリは、早く進めようとカゲカクレをせかすように言う。

「話はこれからだ・・・そんな時、私はある秘策を思いついた。いないのなら、また作れ（・）ば（・）い（・）い（・）と。我は身が震えたよ・・・なぜ、こんな簡単な事に気付かなかったのか・・・！無いのなら作るしかない、至極簡単な事であったのに・・・。」



話していく内に、カゲカクレは高揚しているのか、天を仰ぐかのように体を反らす。しかし、その言葉は理解しがたい物があった。それは、シタリ自身が人間の手を借りなければ出来なかつた事だつた。その言葉を聞いたシタリは動揺したのか、慌ててその言葉の意味を聞こうと身を乗り出した。

「おつお前さん何いつとるんだい！？いくら魂があつたとしても、その体を作るにはアタシでもあの人間の協力がない限り、出来なかつたことを・・・お前さんはするとかい！？」

「ああ・・・その為に、あのガキを攫ってきた！私はやってみせるぞ、奇跡の大秘術を！クツクツク、アーツハツハツハツハツハア！  
！」

シタリの質問に答えるように、カゲカクレは高ぶる気持ちを抑えながら答えるも、最後には狂ったように笑った。その姿は誰も寄せ付けない奇怪な物に見え、シタリは無意識に錫杖を構え、一步その身を引いていた。

『ミッドチルダ 機動六課 待機室』

「丈瑠、この場で悪いんだけどさあ……クサレ外道衆って、何なんだ？」

キャロの搜索が始まり、すでに数時間は立っていた。シンケンジャー達はすでに機動六課に戻っており、フォワード隊とシグナムとヴィータは現場に残ってキャロの搜索を続けているも、進展がある気配は無かった。

そして現在、待機室内には報告を待つ丈瑠達と守護騎士ヴォルケンリッター、フォワード達となのはとフェイト全員がそこにいた。暫くするとフェイト目が覚め、起き上がるとキャロが不在という現状をようやく飲み込めたのか、顔を俯かせ小さく泣きはじめた。そんなフェイトの様子をなのはは放っておけず、すすり泣くフェイトの肩を寄せ、フェイトを励まし続けていた。そんな中、ヴィータは戦闘中に丈瑠が呟いた言葉が気になり、ここで言えるような場所じゃないとわかりつつも丈瑠に聞いた。

「……外道衆の中の外道衆、そう聞いている。見て分かったと思うが、俺達が今まで戦ってきた外道衆とはまったくの別物と考えていい。」

「あ、ああ……でもよお、どうしてそれを先に言わなかったんだ？」

丈瑠のクサレ外道衆の簡単な説明に、先に言わなかったことに不満を感じとったヴィータは、丈瑠に聞き返した。

「クサレ外道衆の頭目はすでに“夏の陣”で倒した、その生き残りも倒していたからな、まだ生き残りがいるとは思わなかった……それだけだ。」

「……で、そいつらが……その……」

「可能性があるな。」

ヴィータはフェイトの事を気遣っているからか、何か言いにくそうにしながらも丈瑠には何が言いたいのかわかっていたからか、ヴィータの問いに答える。

その時、ロングアーチにいたはやてが待機室に入ってきて、丈瑠とヴィータは会話を止め、待機室にいる全員がはやてに顔を向ける。

「みんな、集まったな？今の現状を報告するよ。」

待機室にはやてが入ってくるなり、周りを見回して全員居るかどうかが確認し、ロングアーチからの報告を始める。

「・・・現時刻、キャロの居場所が判明しました。」

「えっ、ほ・・・本当・・・!?!?」

はやての一言にフェイトは目を開いて驚き、はやてをじっと見て聞く。

「うん、キャロの居場所が特定出来た場所は“臨海第8空港”、キャロのデバイスの反応と、キャロの魔力パターンが同時に見つけられたから間違いないはず。」

「そ、そう・・・じゃあ」

「せやけど、分かったのはキャラの居場所だけ、その場所の状況は未だに不明・・・、報告は」

『こちらロングアーチ。はやて隊長、報告中申し訳ありません。たった今、新たに映像による情報が届きましたので、そちらのモニターに映します。』

「っと、きたようやな・・・ロングアーチ、映像をこちらに。」

『了解。』

はやてが言い終わろうとした時、はやての横に空間モニターが現れ、ロングアーチのシャーリーからの通信が入る。はやては送られた映像を待機室のモニターに繋げると、その映像が映し出され、全員モニターに顔を向けた。

その映像に映っていたのは、日本の丸太と鎖によって浮かされたように縛り付けられたキャラの姿、そしてキャラを中心に六角形の術式を引いているナナシ連中、そして、その周りを見張るナナシ連中が映っていた。その映像は衛星から取られたのか、上空からの映像であり、キャラの容態等詳しい事は判別できなかったが、時折動く様子が見られたため、生きていることが分かった。

「キャラロツ!」

「外道衆・・・！」

その映像にフェイト達はもちろんの事、丈瑠達も驚きを隠せなかった。上空から何をやろうとするかは大体予想が付き、エリオとフェイトはモニターに駆け寄って手をモニターに付ける。

「キャラッ！」

「キャラ・・・キャラッ！早く・・・キャラを助けに！」

「・・・エリオとフェイトちゃんの気持ちはよくわかりますが、それは許可出来ません。フェイト分隊長とエリオには酷かも知れん、そやけど外道衆が関わっている以上、うかつに動けへん。我々はそのまま現状維持に持ち越したいと思います。」

「どうして・・・どうしてなの！どうして助けに！」

「エリオ、テストロッサ！」

はやてはエリオとフェイトの要望を許可しなかった。キャラに対

して、エリオとフェイトは家族と言っても過言ではない。だが、フェイト達はそれ以前に管理局に属しているためそのような勝手な行動は出来ないのも現実。

フェイトははやての命令に納得いかず、反論しようと身を乗り出したが、シグナムに止められてしまう。

「シ、シグナム……。」

「落ち着け、エリオはともかく、隊長のお前が冷静さを失ってはど  
うする……。その状態では助けられるものを助けられない。救い  
たい気持ちはわかるが今は状況の整理を優先し、より確実に助けら  
れる作戦を練った方が良い。」

「は……。はい……。」

「ッ……。わかりました。」

フェイトはシグナムに言われると黙ってしまい、悲痛な表情を隠す為顔を俯かせる。

シグナムの言う通り、作戦をろくに立てずに敵陣に突っ込んで助けに行けば、キャロの命所か、自分の命も失ってしまう。それに、なのは達にも迷惑がかかってしまうため、作戦を立てて救いに行け

ばいい。だが、エリオとフェイトはキャロの“家族”として今すぐにも救いたい一心だが、下手に動けば仲間やキャロの命が危うくなり、作戦を立てていくと手遅れ・・・という事もある。自分はどう動けばいいか思い悩んだとき、文瑠はゆっくりと口を開いた。

「・・・はやて、場所は“臨海第8空港”で間違いないか？」

「うん、間違いないけど・・・っ！まつ、まさか・・・！」

「・・・そのまさかだ。行くぞ、お前達。」

文瑠ははやてにキャロが捕まっている場所を聞き、はやては応えるが、その直後に文瑠が何をしようとするかに気付く。文瑠は流ノ介達に指示を出すと流ノ介達は立ち上がり、待機室から出ようとするがはやてが立ち止まってそれを止める。

「はやて・・・。」

「勝手な行動したらあかん・・・。そんな事したらいくら文瑠さん達でもそんな行動は許しません！考え直してください！」



「そうだった下手に突っ込めばいくらお前達でも返り討ちに合っちゃまうかもしれない……！外道衆と長く戦ってんならそれが」

「長く戦っているからこそその判断だ。」

丈瑠達の勝手な行動に誰もが呼び止めようとするが、丈瑠の一言に誰もが黙ってしまふ。

「確かに策も立てずに正面から攻めるのは、危険かもしれない。だが外道衆は時間を与えてくれるほど、甘くはない。ならばちまちまと作戦立てるより、正面から堂々と斬りこんでいけばいい。」

「そ、そんな……幾らなんでも無謀過ぎます！この状況なら作戦を練ったほうが……！」

ギンガの言う通り、丈瑠達がやるうとしてしている事は無謀で、かなり危険な方法だ。ここは策を練って救出に向かった方が適格。だが、丈瑠の考えは変わらず、ギンガ達の方に顔を向けた。

「それでキャラが救えるのか？」

「っ、それは……。」

「……とにかく、俺達を信じる。……いくぞ。」

文瑠の言葉に誰も言い返せなくなり、フェイトは顔をパツとあげる。そして、はやては扉からゆっくり離れていき、文瑠達は待機室から静かに出て行った。

待機室から出た文瑠達は外に向かい、機動六課から出ると目の前には彦馬と黒子達が待っていた。

「殿……、時間がなく、籠が用意できなくて申し訳ありません……。」

「その事は心配するな、移動手段ならいくらでもある。」

頭を下げて謝る彦馬に、文瑠はシヨドウフォンを取り出して構え、流ノ介達もシヨドウフォンとスシチェンジャーをそれぞれ構え、宙

に“馬”を書いて反転（源太は入力）させると、丈瑠達の目の前に、それぞれの色の装飾が成された白馬（白馬は丈瑠のみで、他は普通の馬）が現れ、丈瑠達は馬に跨る。

「殿、馬での移動ではかなり目立ってしまいます、くれぐれも目立たないように・・・」

「わかつている、行くぞ！」

彦馬の心配を余所に、丈瑠は馬を操って走っていき、流ノ介達もそれに続くように走っていき、キャロの元に向かっていった。彦馬は走り去っていく丈瑠達に、心配そうに頭を下げた。

一方なのは達はその頃、さっきの出来事で待機室の空気が重くなり、誰もが話しかけ辛い空気になっていたが、時間を余す暇がない為すぐに状況を整理しながらも作戦会議を開いた。重い空気の中で静かにどう救出するかどうか話し合っている中、フェイトは丈瑠達が出て行った扉を眺め、暫くすると待機状態のバルディッシュを握り締め、そつと静かに部屋から出ていった。

部屋から出て行ったフェイトは誰にも気づかれないように静かに歩いていき、駐車場に入ると自分の車に行き、車の中に入ろうとすると誰かに呼びかけられた。

「待て・・・フェイト、何処に行く！」

フェイトを呼びかけたのは蒼い狼の姿をした、はやての守護獣“ザフィーラ”だ。ザフィーラはフェイトを止めようとしたが、フェイトは車に乗り込んでエンジンをかけ、車を走らせて駐車場から出ると文瑠達の後を追った。

暫く車を走らせていると、機動六課から通信が入ってくる。だが、フェイトは通信を切り、そのまま車を走らせていった。

『ミッドチルダ 北部 臨海第8空港』

その頃クサレ外道衆に捕まったキャラ。キャラの周りにはクサレ外道衆のナナシ連中が儀式の準備で賑やかで、クサレ外道衆特有の異臭によってようやく意識を取り戻したキャラは目を薄らと開ける。そしてキャラは自分の目の前にはクサレナナシ連中が所々に居たのに気づき、目を開いて思わず声が出してしまった。因みにキャラはさらわれてからも、デバイスのおかげでバリアジャケットは解除されていない。

「ひっ……！」

「んっ、どっやらお目覚めのようだな……。」

声に気付いたクサレナナシ達は次々とキャロの方に向き、ナナシ達の中からクサレアヤカシ“カゲカクレ”がゆっくりとキャロの方に向かって歩いてくる。

キャロはアヤカシが近づいてくれば逃げ出そうと体を動かすも、鎖に繋がれ、更に宙吊り状態なため逃げ出せず、幾ら動いても鎖がガチャガチャとなるだけで、キャロはカゲカクレをじっと睨むだけで精一杯だった。

「げ……外道衆……。」

「ほう、まだ睨むだけの力はあるか……まあよい。」

「っどっして、こんなことを……。」

カゲカクレはキャロに睨まれても動じず、それどころかクスクスと笑った。無駄な抵抗とわかりつつも、キャロは今の状況を自分なりに整理し、自分は人質か、それとも何かに利用されると思いながらも外道衆を必死に睨みながら聞く。

「・・・どうして？まあいい、儀式まで時間はあるから特別に教えよう、我々の目的を・・・！」

「（・・・儀式・・・！？）」

カゲカクレの言葉に、キャロはその言葉の意味を一瞬理解できなかったが、目の前の外道衆、及び語られた儀式の言葉からよからぬことが起きる事を察するも、抵抗しようも力が入らず、ただただ睨み続ける事しか出来なかった。

「我らクサレ外道衆は遡ること300年、脂目マンブク様の御膝元さかのぼ我らは人間共を食らい、恐怖を植え付ける事によりその存在を示していた！だがそんな時、シンケンレッドが現れ、長年に渡る戦の末封印されてしまう大失態を犯してしまった・・・。」

キャロの視線を気にせず、語り続けるカゲカクレは、キャロを気にせず口を動かし続けた。

「しかしだ！我らクサレ外道衆は封印されていたわけではない・・・。我らが無き長、マンブク様はその封印を自らの力で解き放ち、見事現代に蘇り再び人間界を恐怖の渦へと叩き落とした・・・。それなのに、あるうことかシンケンジャーの子孫共が忌々しいディスクの力を使い、マンブク様を無き者にしてしまった！貴様ら人間共のせいだ！！！」

「ッ！」

語る中、カゲカクレは悲しみ、悔しさ、憤怒といった負の感情が爆発し、荒々しく錫杖を地面に突き立て、その怒りの矛先をキャロに向けたのか空いた手でキャロの胸座を掴み、無理やり顔を近づけた。かなりの強さで掴まれているせいか、首を絞める形となっているが、デバイスによって首回りに保護魔法が自暴的に発動しているため、死には至らない。しかしいくら魔導師と言えども、キャロ自身は9歳の少女に等しく、またこのような拷問じみた行為など受けたことが無い。更に目の前には化け物（外道衆）が自分を殺さそうと迫っている。その余りの恐怖に、キャロは泣き出してしまふ。

「ウツ・・・クツアアア・・・。。。」

「貴様らにはわかるか！？長き戦の中、何もできずただただ封印され、ようやく解けたと思っていたらマンブク様が死んでいた！！その悔しさ！この虚無感！この怒り！！貴様ら人間共にわかるア！！」

始めて受ける苦しみに涙声で唸るキャロに対し、激しく揺らしつつ、遠くまで聞こえるほどの怒号をキャロに浴びせ続けるカゲカクしだったが、最後の叫びに似た言葉の後、さっきまでの怒号が嘘のように黙り込み、肩で息をし続け、暫くするとキャロの胸座をそのまま離れた。

降ろされたキャロの体力はすでに残り少なかった。カゲカクレに胸座を掴まれて以来、顔を上げる事が出来ず、休もうも吊るされた状態では満足にできず、むしろ引つ張られる痛みにより体力が奪われていく。出来る事は顔を動かす、息を整える、念話をわずかだが使う事のみ。もはや、泣き叫ぶことすら出来なかった。

「ハア・・・ハアッハア・・・私としたことが大事な生贄を殺してしまう事でした・・・。」



「(いけ・・・にえ・・・?)」

息を整えるカゲカクレの言葉に、キャラは薄れゆく意識の中の、その言葉の意味を理解しようとしたが、考える力自体残っているかどうか定かではなかった。

「最後に一つ、冥土の土産として教えておきましょうか・・・。私達の目的、それはマンブク様の復活。それには貴様の中に眠る“力”が必要なのだ・・・。」

「(ちか・・・ら?)」

「いやはやこんな奇抜な街の中にいるとは思わなかったよ・・・。お前のような“巫女”の存在が。本来なら世界中を駆け巡った末に選びつくすつもりだったが、もはや必要ない！私は欲しいのだよ、お前の中に眠る、“強大な力”が！！」

カゲカクレの語った“強大な力”、その言葉がキャラの意識を取り戻してくれた。残る力を振り絞り、顔を上げカゲカクレを睨む。その目は、今までのキャラとは思えないほど、殺意に満ちた目をし

ていた。

「クツクツク・・・どうやら気付いているようだねえ、その大いなる力を！私はその力を手に入れ、マンブク様を蘇らせたのだ！さあもうすぐ儀式の準備が終わる・・・お前を殺した時、その力は私の錫杖で奪いたいのだ・・・！ああ、待ち遠しい・・・その力を手にすることが待ち遠しいのだ！！」

狂気に満ちた声で叫ぶカゲカクレの姿は、今まで見た外道衆とは思えないほど“壊れて”いた。その様子は、周りにいたクサレナナシですら怯える程、狂気に満ちていた。そんな中、キャラは語られた目的にシヨックを受け、また、自分の中に眠る力の事を知られていた事に驚き、その表情は恐怖と驚愕が混じっていた。

## 第四十七幕 影使い 参（後書き）

今回はこの話に搭乘したオリジナルアヤカシ、“カゲカクレ”について紹介します。

### カゲカクレ

- ・身長 198cm（2の目49・3m）
- ・体重 85.3?（2の目22・1t）
- ・得意武器 影縫之錫杖（かげぬいのしゃくじょう）

僧侶のような、影のような、アヤカシである。

クサレ外道衆・脂目マンブクの手下で、クサレアヤカシとも呼ばれる。クサレ外道衆の頭脳として活躍していた。また、子供をさらってはいたが、愉しむという卑劣な行動を見せ、また、影を使った攻撃が得意なため、明るいとこで戦うのは危険である。

現代の伝承で『夜道怪』という妖怪がいるとされている。夜道怪は僧侶の姿をし、人に限りなく近い姿をした化け物らしい。おそらく、カゲカクレが子供をさらう様子を見た者が言い伝えてしまったことが『夜道怪』の伝承のルーツであろう。

このオリジナルアヤカシはミスターサーさんが提供してくれたネタを元に製作しました、ありがとうございました。

今回のキャラの扱いについてなんですが、演出上、こつするしかなく、誠に申し訳ありませんでした。

それと、ザフィーラの登場が初にして、ほんのちょっとしか登場

お世話になっていても、申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8535q/>

---

侍戦隊シンケンジャーStrikerS

2011年10月7日00時23分発行